
俺と私と召喚獣

風の旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と私と召喚獣

【Nコード】

N5486J

【作者名】

風の旅人

【あらすじ】

普通とはちよつと(?)変わった少年こと神谷亮は、世界で類を見ない『試験召喚システム』を導入した高校、文月学園に通っている。『俺』である亮と『私』であるレン。果たして二人(?)に待ち受ける学園生活とは?Fクラスのメンバー達と一緒に過ごす波乱万丈な日常が今、幕を開ける!

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

第一問・いざ、試合戦争！（前書き）

原作とは多少違うところもあると思いますが、そこはどうかご勘弁を…

第一問・いざ、試召戦争！

「」

俺こと神谷亮は、のんびりと通学路を歩いている。

「お、見えてきたな」

目の前には俺が通っている高校である文月学園の校門がある。

そしてそこには1人の人物が立っている。

「あ、てつじ……ん！おはようございます」

「途中で切ったところから訂正して欲しかったんだが……まあいい、ほら」

『鉄人』こと西村教諭から名前付きの封筒を受け取る。

「神谷：先生はいろんな生徒を見てきた。賢い奴、バカな奴、名前を書き忘れてテストで0点を取った奴……。だがな、テストで自分と違う名前を書いたのはお前が初めてだ！」

封筒の中の紙には『神谷亮：Fクラス』と書かれていた。問 以下の問いに答えなさい

「調理のために火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

「問題点：マグネシウムは炎に掛けると激しく酸素と反応する為危険であるという点。」

合金の例：ジエラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点：ガス代を払ってなかったこと」

神谷亮の答え

「問題点：油を使わなかったので、材料が鍋にくっついてしまったこと」

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

「合金の例…未来合金（　すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いといわれても…。

「うーっす…」

俺は自分の教室であるFクラスに入る。

傷んだ畳

机代わりのちゃぶ台

ほとんど綿の入っていない座布団
壁にはいくつもの蜘蛛の巣

これではまるで廃墟である。

「なんだ、お前もFクラスなのか」

「それはこっちのセリフだ、雄二」

俺は教卓にいる、がっちりした男に話しかける。

奴の名前は坂本雄二。俺の悪友の内の1人だ。

「亮、とりあえず好きな席に座れ」

「ほいほい」

俺は後ろの方の席に座った。

「すみません、遅れました」

「さつさと座れこのウジ虫野郎」

「2人ともひどくない!？」

同じく俺の悪友である吉井明久が教室に入ってきた。

見た目は茶髪であり目立ちそうにないが、人類を超越しそうなバカである。

「皆さん、席について下さい。今日からFクラスの担任をさせていただきます。ただ今福原植です。これから一年間よろしくお願いします。必要なものがあれば極力自分で調達して下さい」

あの…ここ学校ですよね？

「それでは、廊下側の人から自己紹介をして下さい」

先生の言葉を皮切りに、生徒たちの自己紹介が始まった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

なるほど…あれが男性と女性に並ぶもう一つの性別『秀吉』を持つ

ただ1人の人物か…。噂通りの外見だな

「……土屋康太」

自己紹介短っ！

「島田美波です。海外育ちで日本語の会話は出来るけど読み書きが苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は…」

へえ、なかなかアクティブそうな少女だな。

「…吉井明久を殴ることです」

失礼、これはもう完全にバイオレンスだ…

明久に手を振っているから知り合いなのか？

そしていよいよ俺の番になった。

「神谷亮です。これから一年間よろしくお願いします。」

先生とどこかかぶってるが気にしない。

さて、単調な自己紹介の最中、いきなり教室の扉が開き、女子生徒が中に入ってきた。

「あの、遅れて、すい、ません……」

腰まで伸びたウェーブのかかった桃色の髪に可愛らしい容姿をした、姫路瑞希さんだ。

あれ？たしかこの人、学年内で1、2を争う成績だったはずだが…

「はいっ！質問です！どうしてFクラスなんですか？」

聞く人次第ではかなり失礼な質問が出てきた。

まあここにいる人のほとんどは、そう思っているだろう。

「その…振り分け試験中に熱を出してしまいました…」

それを聞いた瞬間、クラスメイトが訳の分からない言い訳を始める。

なんかこのクラスの奴ら、かなりバカだ…

そう言えば、途中退席は0点なるんだっとな。

おっと失礼、ここのシステムについて説明を忘れていた。

文月学園ではクラス振り分けのテストを行い、成績の良い順にA～Fの6クラスに分けられる。

しかも成績が良ければ良いほど快適な学園生活を送れるのだ。Aクラスなら高級ホテル並の教室、Fクラスなら廃墟って感じにな。さて、姫路さんは明久の隣に座り、自己紹介は明久の番になった。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアアーリイイーン！！！！』

このクラス、かなりノリがいいなあ。

「あの…吉井君…」

「姫路、明久がブサイクでスマン」

雄二の明久いじりが始まった。

「それでもないですよ！ブサイクどころかその…むしろ」

「まあそういえば見てくれは悪くないよう見えるかもしれない。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「お、奇遇だな。俺もだ」

おそらく、いや確実に俺と雄二が思い浮かべている人物は同じだろう。

「え、誰？」

「「確か久保…」」

「え、どの久保さんだろ？」

「「利光だったかな」」

久保利光とは、もちろん男である。

「……………」

「明久。声を殺してさめざめと泣くな」

どうせもう婿か嫁にいけないとか思っているんだろう…

明久だし。

「僕もうお嫁にいけない」

やっぱりな…

「半分は冗談だ。安心しろ」

「ねえ？残りの半分は？」

事実だ。

「はいはい、その人たち、静かにして下さいね…」

バキイ！

教卓が壊れた。しかしボロいな。

「替えを用意してくるのでしばらく待ってて下さい」

先生はどこかへ行ってしまった。

「雄二、亮。話があるんだ」

そう言って明久は俺と雄二を廊下に連れ出した。

「で、何なんだ話って？」

「まさか試験召喚戦争をやるって言うんじゃないだろっな？」

「…いや、その通りだよ」

やっぱりな……。かまをかけてみたら凶星だったようだ。

「そつだと思った」

「何で分かったの？」

「姫路を見ているお前の顔を見れば分かるさ」

「そんでもって、やるのは姫路のためなんだろう？」

今度は雄二が指摘する。

「雄二まで！？どうして2人とも分かっちゃうのさ!？」

結論から言えば、お前が嘘をつけない性格をしてるからだ、明久。

「問題ない。試召戦争なら俺もやるうとしてたところだ」

相変わらず雄二は行動が早いな。

「そろそろ先生が戻ってくるから、教室に戻ろうぜ」

そうして俺たちは教室に戻り、自己紹介は雄二の番になった。

「俺の名前は坂本雄二だ。坂本でも代表でも好きなように呼べばいい」

そついやこいつ、Fクラスの代表なんだな。全く知らなかった。

「お前ら、この教室を見てみる」

雄二につられて俺たちも教室を見る。

カビた畳

ぼろっちい壁

すきま風が入りこむ窓

そしてちゃぶ台

「みんな、不満は無いのか？」

『大ありじゃああああつ！』

このクラスのノリがいいのか、雄二がすごいのか…

おそらく両方だろう。

「Aクラスはシステムデスクにリクライニングチェアが完備らしいが？」

『不公平だ!』

『あいつらだって払ってる学費は一緒なはずだろ?』

『姫路さんさえいれば、何もいらない!』

おい、誰だ?最後に姫路にラブコールした奴は?

「そこで俺たちは、Aクラスに試召戦争を仕掛けようと思う!」

雄二が今日一番の爆弾発言をした。

第二問・『私』の登場（前書き）

本日の爆弾発言はまだ終わらない…

第二問・『私』の登場

問 以下の英文を訳しなさい。

「 This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 < 〉」

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

神谷亮の答え

「これは、俺のばあさんがレギュラーとしてこき使っていた本棚なんだ…」

教師のコメント

どうして物語みたいな語り方になっているんですか。

『Aクラスに試召戦争だと!?!』

『勝てるわけがない!』

『これ以上設備を落とされるのは嫌だ!』

雄二の発言に対して、教室からは当然非難の声が上がる。ま、当然だわな。

「そんな事は無い。このクラスには勝てる要素が揃ってる。今からそれを説明する」

お、それは興味があるな。

「おい、康太。畳に顔を押し付けて姫路のスカートの中を覗いてないで前に来い」

「……（ブンブン）」

「は、はわっ」

慌てて姫路さんがスカートの裾を押さえて遠ざかる中、康太と呼ばれた生徒が自分の顔についた畳の跡を隠しながら前に出る。

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性職者だ」
ムツツリーニ

『バカな！？奴がああのムツツリーニだと言っのか？』

『だが見てみる。ここまでバレながら、未だに覗きの証拠を隠そうとしているぞ』

『奴こそ、ムツツリーニと呼ぶにふさわしい』

ちなみにムツツリーニとは、歴史上の某人物とムツツリスケベを掛け合わせた言葉である。

「それに、姫路もいる」

「はわっ。わ、私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

『あの姫路さんか!?!』

『姫路さんがいれば勝てる!』

『彼女さえいればそれでいい!』

だから、さっきから姫路にラブコールしてる奴は誰なんだ？

確かに、学年でトップクラスの姫路は切り札となりうる人物だ。

「そして、秀吉もいる」

『秀吉って、あの演劇部のホープだっていう…』

秀吉は声帯模写を特技としており、たいていの人物なら声を真似することが出来る。

「そして、コイツだ!」

雄二は俺を指差している。

「え？俺？」

「ああそつだ。みんな、コイツはあの境界無き人間だ」
ノーボーダー

『ノーボーダーってまさか、秀吉とは違う意味で男女の性別を超越したという…』

『まさか本当に実在しようとは…』

『単なる都市伝説だとばかり思ってたのに…』

俺はいつからそんな有名な存在になったんだ？

「雄二、一体どういうことだ？」

「お前の秘密をここでバラせ」

なる程、そういうことか…

「良いぜ、ちょっと待ってくれよな」

俺は目を閉じる。

「ふう…何ヶ月ぶりかしら？私が表に出るのって…」

『私』が現れた。「とりあえず自己紹介するわね。私は神谷レン。よろしくね…ってあれ？」

雄二と明久を除くFクラスの全員がポカーンとしている。

「ちょっと雄二、これはどういう事なの？」

「まずはお前が何者かを説明した方がいいんじゃないのか？」

「それもそうね。みんな、一言で言うわね。実は私…」

レンは息を深く吸い込み、

「…二重人格者なの」

本日2度目の爆弾発言が飛び出した。

その後のFクラスのみんなにした説明を軽くまとめると、

亮の中には亮自身の人格の他に『レン』というもう1人の女性人格が備わっているのだ。

しかも亮の場合はお互いの人格と意志疎通を行うことが可能であり、表にできることも潜在意識として潜むことも自由自在なのだ。

そして普段は『亮』が表にでているが、亮は男性にしては少し声が高く顔も中性的なので、どっちの人格が出てきても特に問題は無いんだそうだ。

「まあこんな感じかしらね。私からは以上よ」

そう言ってまた『亮』と人格を入れ替わった。

「皆、これで納得してくれたか？」

Fクラスのみんなは、少し呆然とした後頷いてくれた。

『ちよつと待て。ノーボーダーといえはかなり成績が良かったはずなんだが』

『そいつが何でFクラスにいるんだ？』

「実は…名前を間違えたんだ」

本来なら全ての答案用紙に『神谷亮』と書くべき所を『神谷レン』と書いてしまい、見事に0点になってしまったのである。

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って確か、昔神童って呼ばれてなかったっけ？』

『いける！これなら勝てる！』

みるみるうちにクラスの士気が上昇していく。
ホント雄二はこうというのがうまいんだなあ。

「最後はコイツだ！」

雄二は明久を指さす。すると、『こいつ誰？』といった感じで士気が下がっていった。

「ちょっと待って！何で僕なの？」

「こいつは『観察処分者』だ！」

『何！？あの観察処分者だと？』

『それって確かバカの代名詞じゃなかったっけ？』

雄二の発言に対してFクラスの人たちがざわざわと騒ぎ出す。

「違うよ！ちょっとお茶目な16歳に与えられる称号で……」

「そうだ、バカの代名詞だ！」

「肯定すんなバカ雄二！」

雄二は明久の言い逃れを一蹴した。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が小首を傾げている。ま、彼女には縁のない言葉だからな。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

雄二の言うとおり、本来試験召喚獣は他の試験召喚獣以外に触れることは出来ない。

学校の床には特殊な処理が施されているので、立つことは出来るらしい。しかし観察処分者の試験召喚獣にはその制約が適用されない。

しかし観察処分者は召喚獣のダメージの何割かが本人にフィードバックされるので、あまり闘えないのだ。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

雄二が高らかに宣言する。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのはちやぶ台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー…」

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路も小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「…下位勢力の使者って大抵ひどい目に遭うよね？」

ち、明久のくせに鋭いな。

「大丈夫だって。騙されたと思って行ってみろ」

俺が念を押す。

「本当に？」

「もちろんだ。俺達を誰だと思っている」

明久の顔が段々明るくなってきた。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

雄二からのとどめの一言。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

明久の表情が信頼と自信に溢れていた。

かかった！

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイト全員が明久を送り出す。

さて、帰ってきた時にはどれくらいボコボコにされているかが、今

から楽しみで仕方ない。

俺の横にいる雄二も同じ様な考えを持っているらしく、俺達はニヤリとした顔を浮かべていた。

第二問・『私』の登場（後書き）

地の文についてですが、『亮』の人格の時には本人が、『レン』の人格や亮がいない場面では作者が務めます。混乱を招くかもしれないかもしれませんがご容赦下さい。

第三問・作戦会議と書いてミーティングと読む（前書き）

バカテスのアニメ、毎週欠かさずチェックしていますが、秀吉の扱
いがすごいですねw

第三問・作戦会議と書いてミーティングと読む

「騙されたあつ！」

思った通り、明久は随分とボコボコになって帰ってきた。

「おかえりー」

「やはりそうきたか」

俺と雄二は平然と言い放った。

「やはりつてなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表（雄二の友達）が務まるか」「

「少しは悪びれるよ！」

明久いじりがここまで楽しいとは…

なんだか癖になりそうだ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

ボロボロの明久を見て、姫路が駆け寄る。優しいなあ。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

とてもそうは見えないのだが、姫路に心配をかけたくないのだろう。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田まで明久を心配してやって来た。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

明久が慌てて腕を押さえて転げ回る。島田、その手の照れ隠しは明

久には無効だ…

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

「明久、さっさと行くぜ」

雄二が扉を開けて外に出たので、俺も続く。

明久とムツツリー二も島田と一緒に後ろの方にいる。

とうにかさつきから『調教』だの『折檻』だの非常に危険な単語がでている気がするが、気にしない。

そうして俺達は屋上に着いた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関講予定と告げてきたけど」

各々がフェンスの前の段差に腰を下ろした。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「ま、そういうことになるな。明久、今日ぐらいはまともなものを食べるよ」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」
「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように明久を見ている。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」
「いや、言えないな」

俺と雄二が横やりを入れる。

「何が言いたいのさ」

「「いや、お前の主食って、水と塩だろっ？」」

「きちんと砂糖だって食べているぞー！」

あんまり大差ないだろう…

「あの、吉井君、水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

明久を見る皆の目が優しくなる。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「嘘つけ。俺より多いくせに」

実は俺も明久も両親が仕事で家にいないので、一人暮らしをしている。

と言っても明久の仕送りは俺の約1・5倍程あるのだから、趣味につき込む以外に生活できない理由がない。明久の場合はそれなんだが。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

「明久、それは字が違つぞ」

しかしお弁当か。なかなか羨ましい奴だな。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

お前はいつの時代の人なんだ？

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

「羨ましいねえ」

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井“だけに”作ってくるなんて」

おや？島田が何やら面白くなさそうな言い方をする。

「あ、いえ！その、皆さんにも…」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

「ありがたくいただくぜ」

これで姫路を入れて七人分。作るの大変そうだな。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな…」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好きー」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

明久のことに關しては雄二と言動が八モるのは何故だろうか？

「ーにしたいと思ってました」

お前はどこの変態だ？

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「俺も同感」

「だって……お弁当が……」

「明久。そんな悲しそうな顔をするな……」

「さて、話がかかなり逸れたな。 試召戦争に戻ろう。 レン、出てきてくれ。 作戦会議だ」

「…分かったわ。 さ、始めましょう」

レンを交えた作戦会議が始まった。「というか何で作戦会議は亮じやなくてレンなの？」

島田がもつともな質問をする。

「一言で言うなら、こいつのはアイツより私の方が得意なのよ。」

レンが戦略を組み立て、亮がそれを実行する。正に一心同体である。

「それと、レンが出てきてから体格が女の子っぽくなったのはウチの気のせいなの？」

「気のせいね。女の子っぽくなったんじゃないくて、女の子そのものになってるんだから」

「……………（ドクドクドク）」

レンの2発目の爆弾発言が飛び出した直後、ムッツリーニの鼻血が水道水のように流れ出した。

「ほ…本当なの？」

「明久は疑ってるの？だったら…」

レンは自分の胸を指差し、

「…触ってみる？」

質問を投げかけた瞬間、ムツツリーニと明久はそれはもう大量の鼻血を吹き出して倒れた。

『（おいレン！ちょっとやり過ぎだぞ！）』

「（あら、亮じゃない 確かめるにはこの方法が一番なんだけど？）」

『（そんな楽しそうに言うな。お前のおかげで儂い2つの命が今まさに風前の灯火なんだぞ。）』

「（そうみたいね。ま、これから作戦会議だし、ちょっと参加するわね）」

『（…たたく…）』

まあこんな感じで話とかも出来ちゃうわけですよ。

レンと亮が話している間、傍らでは、鼻血を出した2人にムツツリ
ーニが常備している輸血パックによる人命救助が行われていた。

「なる程：生まれつきホルモンバランスがガタガタな上に、レンと
いう女性人格の誕生によって、そんな体になっちゃったわけね……」

「ま、そんな感じね」

あの後当然皆（主に島田）に、この体（島田より微妙に膨らんでい
る胸）についての真相を迫られた。

「それで雄二。一つ気になってたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも僕らよりはクラスが上だよ？」

「それは振り分け試験での話。今は違うわ。明久、アンタの周りにいる面子をよく見てみなさい」

「えーつと……」

レンに言われたとおり、明久はその場のメンバーを見回している。

「美少女三人とバカが二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？雄二が美少女に反応するの!？」

「……………(ポッ)」

「ムツツリーニまで!?!?どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

予想外の二人の反応に、明久が混乱している。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

秀吉により、なんとかその場は治まった。

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツッコミを入れたいんだけど」

「ま、要するにだ」

雄二は明久を無視して説明を再開する。

「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

明久が首を傾げる。

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「ま、初陣だからね。派手にやって今後の景気づけにしたいでしょ？」

「あ、なる程」

レンの説明に明久が相づちを打つ。

「そういうことだ。それに、さっき言いかけた妥当Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「あ、あのー！」

突然姫路が割って入った。

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。さっく言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、さっきコイツが姫路のためにつて…」

「それはそうとー！」

雄二の発言を明久が遮った。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

明久が反論する。

「大丈夫だ。お前らが俺に協力してくれたら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスはー最強だ」

雄二の力強い発言により、その場の士気が高まっていく。

「いいわね、面白そうじゃない」

「Aクラスの連中を引きずりおろしてやるつかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「Aクラスの奴ら、目にももの見せてやるわ」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風が吹き渡る屋上で、Fクラスの作戦会議が始まった。

第四問・決戦！vsDクラス

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

50

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

神谷亮の答え

『(1) 弘法も木から落ちる』

『(2) 弘法の面蹴ったり』

教師のコメント

君は弘法に何か深い恨みでもあるんですか？

「捕獲完了っ」と

ただいま俺は暇つぶしとして、こっそり持ってきたゲームをやっている。

ちなみに今は某不思議な玉で、海の神様を捕獲したところだ。

俺の銀色の魂が叫び出す！とまあそれは置いといて、

「さて、扉から前線の様子を聞こうかな…」

ちなみに俺の役割は、雄二の近衛兵隊の隊長だったりする。

俺は戦場の様子を探るべく、目を閉じ耳を澄ませた。

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金治郎、といった理想的な生徒に仕上げてやるっ』

『お、鬼だ！誰か、助けっーイヤアアアー（ボタン、ガチャ）』

よし、だいたい分かった。さてと、海の神様も捕まえたことだし、新しい街に向けて再び出発するか…。ゲームで。

「代表！吉井が先生達に偽情報を流して欲しいと言っているんだが、どういっつのを流そうか？」

偽情報か…明久にしては名案だな。

「さて、どうするか…」

雄二が腕を組んで考え出す。

『（亮！ちょっと代わりなさい。いいこと思いついたから）』

「（お前のいいことは嫌な予感しかしないんだが…まあいいや、任せませ）」

『（オツケー、任せといて）』

「雄二、こづいづのはどろかしらっ？」

レンが雄二に耳打ちする。

「なる程な、そいつは名案だ。須川、今から俺が言うことを放送で流して欲しい」

それから数分経った。そろそろきてもいいはずなんだが。

ピンポンパンポーン 『連絡致します』

よしっ！

『船越先生、船越先生』

さあ、来い！

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

頑張れ明久！

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

放送している本人がやけに乗り気なのと、明久の未来を悪化させるアレンジが入っているが、まあ気にしない。

「明久、お前の死は決して無駄にしないぜ」

俺は込み上げる笑いをこらえるので精一杯だった。

それからまたしばらくして…

「よし、そろそろ俺たちも行くぞ」

雄二が出撃の用意を始めたので、俺も立ち上がって一緒に向かおうとする。

「いや、亮はここに居る」

いきなり雄二にストップをかけられてしまった。

「どういう事だ？俺は一応近衛兵隊の隊長なんだが？」

雄二に反論するが、このセリフは傲慢から来るものではない。隊長だけこんな所でのんびりしていいのかという、純粹な疑問である。

「隊長だからこそだ。お前はウチの裏の切り札だからな。ギリギリまで隠しておいた方がいいんだ」

「…分かった。今日の所はそっちに任せるぜ」

「ああ、すまないがしばらく待っていてくれ」

雄二は増援と共に、戦場へと歩き出していった。

「さて、どうなっているかな？」

俺は再び聞き耳を立てた。

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

偽情報の次は子供だましかよ。そんなのに引っかかる奴なんてこの学校には…

『なにいつ！？』

…たくさんいるんだっとな、特に我らがFクラスの男子の諸君とかみんなそうだろう。

ガシヤアアン！

突然ガラスが割れる音が響いてきた。

しかも、島田さんがどうとか言ってるし。

明久は一体何をしているんだ？

ブシヤアアツ！

「この音…消火器か？」

「島田さん、キミはなんてことを！」

明久の奴、自分がやってること全部を島田のせいにしてしょうとてやる。

あとでシメられても知らないぜ…。

シュワアアアアア

最後にスプリンクラーが水を発射する音が聞こえた。

明久め、自分の身が危険にさらされると相変わらず恐ろしい行動力だなあ。

しばらくすると、雄二や明久達がFクラスに戻ってきた。

「明久、よくやった」

雄二が珍しく素直に明久をほめている。もしかして…

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ、バッチリな」

やはり明久の不幸を喜んでいる。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

ダメだ、明久の目は完全に正気を失っている。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「やれる、僕なら殺れる…！」

明久の手に包丁と即席のブラックジャックが見えたのは決して気のせいではないようだ。

「ちなみに、だが」

「あの放送を指示したのはレ……雄二よ」「……っておい！言ったのお前だろ？」

「私がいっ『やれ』なんて言ったかしら？」

「シヤアアアアッ！」

今にも明久が雄二に飛びかかるうとしている。

「「あ、船越先生」「」

雄二とレンの言葉を聞いた途端、明久はちゃぶ台を蹴散らし、清掃用のロッカーの中に隠れた。

「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろっ」

「……………（コクコク）」

「おっしや！Dクラスの代表の首級を獲りに行くぞ！」

「よっっー」

「レン、お前は待機だ」

「はあゝい」

教室から明久以外の皆が出て行く。

「明久、船越先生が来たっていうのは雄二の嘘よ」

「逃がすか、雄二いつ！」

明久がもの凄い勢いで教室を出て行った。

「（それじゃ亮、後は頼んだわよ）」

『（分かった）』

「ふう、俺はまたさっきのゲームでもするかな」

というわけで俺は再びポケットに入りそうにないモンスター達を捕まえる旅に出た。もちろんゲームで。

Dクラスにて

Dクラス代表 平賀源氏 討死

『うおおーっ！』

Fクラスの皆の勝ち鬨により、大音響が起きた。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳やちゃぶ台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています！」

雄二を讚える声があちこちから聞こえてくる。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

珍しく雄二が照れているようだ。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

雄二はもはや英雄である。

「雄二！」

明久も雄二の所に行き、握手をしようとする。

その手に包丁があるように見えるのは、おそらく幻覚だろう。

「ぬおおっ」

どつちから見破られたようだ。

「雄二……！どつちして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！フンッ！」

「ぐあっ！」

捻りあげられた明久の手から包丁が落ちた。

あつちには置いていて、Dクラス代表の平賀君に目をやる。

「敗残の将ってヤツか…」

すると雄二が平賀君と何やら話をしている。

「Dクラスを奪う気はないからだ」

どうやら設備は交換しないらしい。

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

これ以上この場に長居して他のクラスに見つかるといけないので、俺はその場を後にした。

「なる程ね…設備の交換をしない代わりに私たちの作戦に利用する。雄二らしいといえましょうね」

「DクラスにはBクラスの室外機を壊してもらおう」

帰り道。レン（亮）と雄二と明久は家の方向が一緒なので、よく話しながら帰ったりしている。

「それにしてもさ」

「ん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

明久が、分からないと言った感じで首を傾げている。

「理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとか」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「私達の目標はAクラスだからね。Dクラスの設備を手に入れたら

一部の人たちが満足して試召戦争に反対し始めるかもしれないでしょ？ そうならない為に、不満によるモチベーションを維持する為よ」
明久が納得した顔をしている。

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺に任せておけ」

「……………ありがとう。僕のわがままの為に」

「別に気にしなくても大丈夫よ」

「俺も別にそんなわけじゃない。試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

ふと雄二が遠くを見る。

『（そっぴや雄二の奴、昔は神童とか呼ばれていたんだよな……）』

「目的の為に、明久やレンにだってきっちり協力してもらおうからな。とりあえず明日の補給テストで」

「任せといて！」

「……………ぐう」

「ゲームばかりしてないで、寝る前に少しくらい勉強もしなさいよ」

「はいはい。教科書くらいは読んだ……ん？」

「どうしたの？」

「あ！教科書、ちゃぶ台の下に置いたままだった！」

「……あほ。さっさと取って来い」

「うう……。んじゃ、先に帰っていいよ」

「もちろんだ。待ってるわけがないだろう」

「雄二と同じ。んじゃねー」

「わかっていたけど、薄情もの」

雄二とレンは明久を置いて先に家に帰った。

第五問その一・料理を作るときは必ず味見をしましょう

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

神谷亮の答え

『俺がもう二度と顔向け出来ないもの』

教師のコメント

一体君に何があったんですか？

「今日は何もしてないからな。疲れたような、疲れてないような

…」

家の方向が違う雄二と分かれたのがついさっきで、今は一人で帰路に就いている。

そこに、

「おゝい、亮」

黒髪でセミロングの女子が一人、こっちに近づいてきた。

「振り分け試験どうだった？亮」

「お前はどつなんだ、優希？」

彼女は桂優希。俺の幼なじみだったりする。

「もちろんAクラスよ！それで亮は？」

「Fクラスだ」

その瞬間、優希の表情が驚きに変わった。

「亮、もしかして名前でも書き忘れたの？」

「いや、名前を書き間違えたんだ」

「はあ……。それで初日から試召戦争をやらかすFクラスに行っちゃったわけね……」

「ま、そんなとこだ」

というか、もうAクラスにまで噂が広がっているとは…

口伝でって恐ろしいね。

「よし、今日の晩御飯は私が作ってあげるわ！」

「明日は補給テストなんでな、遠慮させてもらっわ」

ちなみに優希が料理をすると、必ず食材が黒か緑色になった状態が出てくるのだ。もちろん本人は無自覚である。

そんな料理を食つのを避けるために、俺は昔必死になって親から料理を学んだ。今はそのおかげで、人並み程度に料理が出来る。

「それは残念。じゃ、アタシこっちだから。じゃあね〜」

「また明日な」

彼女が帰るのを見て、そつと胸をなで下ろす。

「料理が原因で実力を発揮できなかったとかになったら、雄二になんて言えばいいか分からないからな」

そつして家に着き、一通りのことをやってから勉強して、そのまま眠ってしまった。

翌朝

「うーっす」

今日は少し早めに教室に来たのだが、補給テストのためかいつもよりも人がいた。

「うっす、雄二」

「亮か。今日は頑張ってくれよ。お前の点数も勝利の鍵なんだからな」

「憎いこと言うねえ。ま、全力は尽くすさ」

「ああ、頼んだぞ」

そんな会話をした後、少しでも勉強すべく俺は教科書を開いた。

「おはよー」

「よ、明久」

「おう明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう亮に雄二」

明久が教室に入ってきた。

「皆には何か言われなかったの？」

「ん？何がだ？」

「Dクラスの設備のこと」

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」

昨日の雄二の働きもあってか、皆素直に納得してくれた。

「それよりお前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ」

明久が口に手を当てて考え始めた。

コイツ、もしかして全く分かってないのか？

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっているながら行動するなんてありえないよ」

俺の疑問は確定に変わった。

「いや、雄二の始末じゃなくて」

「一体何が言いたい…」

「吉井っ！」

「いぶあつー！」

吉井のセリフが突如拳により遮られた。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

何か島田が随分怒っているようだ。

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

そら、やっぱりバレた。

「おかげで彼女にいたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！」

そんなランクは初耳だぞ……

「ーと、本来は掴みかかっているんだけど」

それは明久を殴る前に言いましょう。

「アンタにはもう十分罰が与えられているようだし、許してあげる」

ところでさっきから明久が鼻血を流しているんだが、大丈夫なのか？

「一時間目の数学のテストだけど」

島田が心底愉しそくに告げる。

「監督の先生、船越先生だって」

その瞬間、明久の姿はFクラス内のどこにも無かった。

「あゝ疲れた…」

午前中でとりあえず四教科が終了した。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

昼食のメニューが炭水化物のオンパレードだ。

「じゃあ俺は学食の裏メニュー『さようなら、ワタシの甘い一時』でも食べるかな」

「そんなメニュー聞いたことないんだけど…」

そりゃ裏メニューだからな。吉井が知らないのも無理はない。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にしない？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「昼飯はみんな食べた方がおいしいからな」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………」(コクコク)「

「こうして俺らは皆で学食に行こうとしたが、

「あ、あの。皆さん……………」

声をかけられた。

「姫路か？お前も学食行くか？」

「あ、いえ。え、えっと……………」お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……………」

姫路はもじもじしながらこっちを見ている。

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言って身体の後ろに隠してあったバッグを出す。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあ〜」

「ありがとな、姫路」

「はいっ！」

姫路が嬉しそうに笑う。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

一人機嫌が悪そうな人もいるみたいだが。

飲み物を買って来るといふ雄二と島田を見送り、俺達は屋上に向かった。

「さあ着いた」

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうですねー」

空は晴れており、絶好のお弁当日和である。

姫路が持ってきてくれたビニールシートを敷き、準備は万端だ。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取ると、中にはから揚げにエビフライ、おにぎり、アスパラ巻きといった弁当の定番のメニューがぎっしり詰まっている。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先にー」

「……………（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツッリー」

動きの素早いムツリーニがエビフライをつまみ取り、そのまま口に運び…

「……………（パク）」

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

「……………」

秀吉と明久と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……………(ムクリ)」

ムツリーニが起き上がり、

「……………(グッ)」

姫路に向けて親指を立てた。

おそらく『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろうが、それならどうして足がガクガク震えているんだ？まるで説得力が無い。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

笑顔で勧めてくる姫路を見ると、どうも断りづらい。

(……秀吉、亮。あれ、どう思う?)

明久が姫路に聞こえないくらいの小さな声で話しかけてくる。

(……どう考えても演技には見えん)

(……おそろくマジだ)

(だよな。ヤバイよね)

(明久。お主、身体は頑丈か?)

(正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから)

お前はせめてもう少しまともな食事をしろ。

(ならば、ここはワシに任せてもらおう)

(俺も行くぜ)

(そんな、二人共危ないよ!)

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をされていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだじゃ）

（俺も、トリカブトを食ったが何ともなかったぜ）

ジャガイモの芽もトリカブトも毒があり危険です。皆さん決してマネして食べないように。マジで…

（でも……）

（安心しろ。俺にはこのカビの胃袋がある）

（そうじゃ。ワシの鉄の胃袋を信じてー）

その時、

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

何も知らない雄二が登場した。

「あつ、雄二」

「やっちまったか…」

止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク

ボタンーガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの？」

島田が遅れて登場した。

雄二の尊い犠牲により、俺達は『コイツは本物である』という結論を得た。

すると雄二は、倒れたまま明久とアイコンタクトを取り始めた。

『毒を盛ったな』

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

凄く便利である。

「あ、足が……攣ってな……」

嘘をつく雄二の顔が必死そうである。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

「きつと最近さぼってたんだ。ダメだぜ、サボったりしたら」

「ああ…これからは、気をつけよう……」

後は島田をどうにかするだけなんだが、どうするか…

「と…ころで島田さん。その手についてる辺りにね」

「ん？何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

ナイス明久！

「ええっ！！？早く言ってよ！」

慌てて手をよける。やっぱり女の子だな。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

「そっね。ちょっと行ってくる」

島田の避難完了

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

「ま、虫がいたんじゃしょうがないさ」

男四人で朗らかに笑う。

一方その裏側では

(明久、今度はお前がいけ！)

(む、無理だよ！僕だったらきつと死んじやう！)

(さすがにワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……)

(俺もだ。しゃーない、こうなったらレンに代わって……)

『(ちょっと！何でそこで私が出てくるの？)(』

「（一心同体ってヤツだ）」

『（それ理由になってないから！）』

（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（雄二、逝ってこい！）

（亮よ、それは字が違うんじゃないが…それに、姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（そんなことないよ！乙女心をわかってないね！）

（いや、わかってないのはどちらかというと明久の方じゃー！）

（ええい、往生際が悪い！）

「あつ！姫路さん、アレは何だ！？」

「えっ？なんですか？」

明久が指した明後日の方向を姫路が見た瞬間、

（おらあつ！）

（も…ああつ！？）

その隙をねらい明久が雄二の口の中一杯に弁当を押し込んだ。

目を白黒させているので俺が顎を掴んで咀嚼するのを手伝い、吐き出すと勿体ないので雄二が弁当を完全に嚥下するまで口を塞いだ。

「ふう、これでよし」

「任務完了」

「……お主ら、存外鬼畜じゃな」

雄二が更に激しく震えているが、全身が攣ったことにはしておこつ…

「ごめん、見間違いだつたよ」

「あ、そうだったんですか」

こんな古典的な手に引つかかるとは、姫路のヤツどんだけ純粹なんだ？

その後は吉井がうまいこと話を逸らし、このまま終わるかと思っ
ていたが、

「あ、そうでした」

姫路がポン、と手を打ち、

「ん？どうした？」

「実はですねー」

鞆をぐそぐそと探り、

「デザートもあるんです」

俺達の第二ラウンドが始まった。

「ああっ！姫路さんアレは何だ？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

雄二が命がけで明久を止めにかかる。

（明久！俺を殺す気か！？）

（仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）

（馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできないのはでまん！）

（この意気地なしっ！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる！歯を食いしばれ！）

（いやぁー！殺人鬼ー！）

（……ワシがいこう）

（……俺もいくぜ！）

俺と秀吉が同時に名乗りを上げた。

「どうかしましたか？」

「いや、別に何でもないさ！」

「あ、もしかして……」

姫路が顔を曇らせる。

まさかバレたか？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

そう言えば、ヨーグルトを食べるスプーンがない。

「取ってきますね」

スカートを翻し、階下に消えた。今だ！

「では、この間に頂いておくとするかの」

「後は任せろ」

「……すまん。恩に着る」

「別に死ぬわけではあるまい。そう気にするでない」

「そういうこと。俺を信じる!」

「そ、それもそうだね!」

「ああ! 亮、秀吉、頼んだぞ!」

「うむ。任せておけ。頂きます」

「頂きます」

容器を傾け、秀吉が半分ほど中身をかきこんだところで今度は俺が残りをかきこむ。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃと……」

「別に言うほど変な味でも……」

「」「」「」「」「」「」

ここに、新たに二輪の命という儂い花が散った。

こうして自称『カビゴ』と『鉄の胃袋』は白目で泡を吹いた。

第五問その二・Bクラス戦に向けて

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

あの激しい昼食を終え、俺と秀吉は皆よりたくさんのお茶を飲む。お茶には殺菌作用があるのかなんとか…

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

雄二の言う通り、Aクラスには恐ろしい力を持つ人が何人もいる。

特に代表の霧島翔子さん。あの人にはFクラスが束になってかかっても敵わないだろう。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

島田のセリフを引き継ぐように明久が割って入る。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに??どうやって?」

「Bクラスを使う」

「なる程…。Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスに攻め込むよう交渉するわけね。Fクラスに負けるよりもAクラスに負けた方が、設備的にもマシだからね」

「ああ。その通りだ」

「というかレン、いつの間に出てきたの!？」

突然のレンの登場に、明久は一人驚いている。

「レンの言ったそれをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの

勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

明久が納得の表情を見せる。

「ま、一騎打ちに関しては雄二に考えがあるみたいだし、任せましよう。とにかく今はBクラスよ」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

「断る。雄二がレンが行けばいいじゃないか」

明久は明らかに警戒している。

「全く…じゃあジャンケンで決めましょう。負けた方が行くってことで」

「OK。乗った」

明久が参加を示す中、雄二とレンがアイコンタクトを取っている。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいい」

雄二からそんな提案が出た。

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は…」

「じゃあ私は…」

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

「ちよっ…！何その心理戦!？」

「行くぞ、ジャンケン」

「わあぁっ!」

パー（雄二、レン）

グー（明久）

「決まりだ」

「行ってらっしゃーい」

「絶対に嫌だ！」

明久が必死に拒否している。

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

「Bクラスは美少年好きが多いらしいわよ」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

「でもお前不細工だしな……」

雄二が溜め息混じりに呟く。

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「5度ね」

「実質5度じゃな」

「三人なんて嫌いだっ」

「とにかく、頼んだぞー」

雄二の言葉を背中に受けて、明久は校内に走り出した。

放課後

「……言い訳を聞こうか」

「予想通りだ」

「左に同じ」

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

雄二に食いかかる明久を置いて、レンは姫路の元に行った。

「瑞希、何か探してるの？」

「ふえっ！？な…何でもありません…」

「私だって女なんだから、用件くらい聞いてあげるわ。大丈夫、この教室には今は私達しかいないわ」

「えっと、その……」

姫路は手をもじもじさせて、決心したように口を開いた。

「あの……実は……」

第六問その一・カッターナイフは投擲用の道具ではありません(前書き)

作「ういゝつす」

亮「どうしたんだ作者？」

作「いや、この小説の新タイトルを思いついたんだ」

亮「嫌な予感しかしないが言ってみろ」

作「お前のその体質を最大限に利用したタイトル、その名も『亮2分の1!』」

亮「それパクりだからボツだな」

作「そんな…」

第六問その一・カッターナイフは投擲用の道具ではありません

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

あとで土屋君と職員室に来るよつに。

神谷亮^{レン}の答え

『C6H6』

教師のコメント

おや、珍しく正解ですね。必勝法でも見つけましたか。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

翌日。教壇に立った雄二が机に手を置いて俺たちの方を向いている。

俺は前回の戦闘には参加しなかったのだが、振り分けテストの得点
があまりにも低いので全教科受けていた。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分
か？」

『おおーっー』

雄二、字が違うぞ。それに相変わらず高いモチベーションだ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ!』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい!」

「が、頑張ります」

『うおおーっ!』

姫路と一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は今や最高潮だ。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。

「よし、行ってこい!目指すはシステムデスクだ!」

『サー、イエッサー』

Fクラスの盛大なかけ声とともに、Bクラス戦が幕を開けた。

「……………って俺はまた教室待機かよ!？」

今度こそ戦えると思ったのに…

「当たり前だ。近衛兵が大将の元を離れてどうする?」

それはそうなんだが…

「代表、Bクラスの代表の根本がFクラスと協定を結びたいという申し出があるんだが、どうする?」

「内容は?」

「Bクラスの教室に来てから明らかにするそうさ。それと調印のためにBクラスに来て欲しいって……」

「…分かった。Bクラスの教室に行こう」

雄二が少し考えてからそう言った。

『（亮、ちょっと代わって）』

「（レンか？一体どうしたんだ？）」

『（いいから早く…）』

「（分かった）」

「雄二、私はここに残ってるわ」

「いきなりどうしたんだ？」

「本拠地を抜け殻にするわけにはいかないでしょう？」

レンの目は、いつになく真剣だった。

「……気をつけるよ」

「大丈夫よ。少なくとも、戦死は避けるから」

「そうか……。じゃあ、行ってくる」

雄二達は教室を後にした。

「ちとど…」

レンはそれを確認すると、一本のカッターナイフを取り出した。

「おい、誰もいないか？」

「ああ、大丈夫だ」

数人の男子生徒がFクラスの教室に入ってきた。

「それじゃあ、やるぜ」

「ああ、手はず通り」

その内の一人が、ちやぶ台の上にあるシャープペンシルに手を伸ばした。

「へっへっへ、これで…」

ガッ!!

「!？」

「何だ!？」

どこから飛んできたのか、ちゃぶ台に一本のカッターナイフが刺さっていた。

「なっ…どこから!？」

「これで…アンタ達の陰謀は終わりね!」

レンが壁にもたれかかっていた。

「お前、一体どこに？」

「そこの中よ。ちょっと窮屈だったけど…」

レンは清掃用具入れを指した。

「さて、今度はこっちの番ね。この教室に何の用？Bクラスの皆さん？」

「くっ…」

レンが歩み寄ると、Bクラスの皆が後ずさりを始めた。

「誰も先生がいないし、試験召喚サモンを行う気は無いようね……」

レンが相手を睨みつける。

「Bクラスの代表があんな根本恭二だと聞いた時にはもしかと思ったけど、まさかこんな手を使ってくるとはね……」

「くそっ!」

そして再び歩み寄ろうとしたら、

「それ以上近づくな!コレがどうなってもいいのか?」

男子生徒の手には、一枚の白い封筒があった。

「なっ!?!それってまさか……っっ!」

レンは何かを言おうとしたが、一瞬の隙をつかれて後ろから首にスタンガンを喰らい、そのまま気を失ってしまった。「え？明久宛のラブレターが無くなっ…もがっ！」

「レンさん！声が大きいですよ！」

姫路はレンの口を押さえる。

「いいじゃない。もう夕方だし、誰もいないわよ」

「そ、そういう問題ではないですよ…」

「明日はBクラス戦だったのに、そんな消極的じゃいけないわよ」

「いえ、ですから…」

「ふふっ…冗談よ。それより、そのラブレターの特徴を教えて」

「えっと、白い封筒なんです…」

「白い封筒ね…。分かったわ。私も探すわ」

「あ、ありがとうございます」

「…い、…か…る」

「ここはどこだ？」

「おい、し…かり…る」

「目…ち…すの…ゃ」

それに、誰かの声が聞こえる…。

「ねえ、…丈…？」

「ん……？」

「おお、目を覚ましたぞ」

目を開けると、秀吉と明久がいた。

「亮、大丈夫？」

「お主、何があった？」

「なあ、雄二は…?」

「ここだ」

首を少し右に向けると、雄二がこっちを向いていた。

「…悪い、雄二。失敗しちゃった…」

少し申し訳なく感じてしまう。

「お前が無事ならそれでいいさ」

あれ?このままではおかしい展開になる気が…

「それより雄二、被害はどうなってる?」

「それなら見ての通りだ」

教室を見回すと、穴だらけになったちゃぶ台とへし折られたシャーペンシルと消しゴムが散乱していた。これほど酷いと、点数の補給がままならない。

「それはそうと、どうして雄二は亮や教室がこんなになっているの
に気がつかなかったの？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を亮
一人にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続
きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行
為を禁止する。つてな」

「それ、承諾したのか？」

「そうだ」

「姫路の為にか？」

「ああ。姫路が万全の状態ですべて勝てるようにな。実際、この協定
は俺達にとってかなり都合がいい」

そう、姫路さえ万全なら、そうなる。

しかし、Bクラスの奴らの手には、ラブレターという最大の切り札
がある。それがある以上、姫路は迂闊に動けないだろう。

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされ

ているかもしれん」

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしてお」

「んじゃ、俺も手伝う…」

「いや、お前は回復するまで休んでろ」

俺も手伝おうとしたら、雄二に止められた。

「何だよ？俺今日は何も…」

「いいから気絶し（ね）てろ」

本日二度目の首への攻撃。

俺は薄れゆく意識の中でこう思った。

雄「…それは字が違うぞ、と。」「またこの展開か…」

目を覚ますと、再びFクラスの天井が目に映った。

「よいしょっと…」

体を起こした俺が一番始めに見たもの、それは…

「…わあ…」

半殺しにされて倒れている明久の姿だった。

「……ここはどこ？」

明久が目を覚ました。

「あ、気がつきましたか？」

姫路が明久に駆け寄る。

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かにさんざん殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですから」

それが正解なら、おそらく実行犯は島田だ。もちろん原因は明久自身だろうな。

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

いや秀吉、それは虐殺だ。

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの?」

「あ、それは俺も聞きたい」

実は起きたらすぐに聞こうと思っていたのだが、明久の姿があまりにも強烈だったのですっかり聞きそびれてしまったのだ。

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況はどうなったんだ?」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少なくはないがな」

これも予想通りだ。

「ハプニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」

「まあな」

しかし、まだ油断は出来ないな。

「……………(トントントン)」

「お、ムツリーニか。何か変わったことはあったか？」

ちなみにムツリーニは今回は情報収集係で、戦闘には直接参加していない。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだと？」

「……………（コクリ）」

ムツリーニによると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。漁夫の利でも狙うつもりか？

「雄二、どうするんだ？」

「んー、そうだなー。Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っつて脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

「よし、それじゃ今から行ってくるか」

「そうだね」

「了解」

明久と俺は立ち上がった。

「秀吉は念の為にここに残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

そうして俺たちは教室を出た。

『（亮、一応私と交代しておいて）』

「（？何でだ？）」

『(念の為よ)』

「(念の為ねえ…。分かった、取りあえず代わろう。けど念の為に気をつけるよ)」

『(ふふっ。了解)』

そんなやりとりをしていると、島田と須川も合流し、Cクラスの教室に着いた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本クン？」

「……しまった！謀られたわ！逃げなさい雄二！」

「どづいつ事だ？」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

教室の奥から、取り巻きを連れた根本恭二が現れた。

「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

「全部アイツの罠よ！明久もさっさと脱出しなさい！」

「長谷川先生、Bクラス芳野が召喚をー」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！サモン！」

雄二が攻撃されそうになったのを、須川が見事に防いだ。

「皆、今の内に逃げるわよ！」

須川に背を向け、レン達は廊下を走り出した。

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後から複数の足音が聞こえてくる。音からすると、四〜五人つてところだろう。

「はあ、ふう…」

ヤバい！姫路がバテだした。彼女をこんな所で失うわけにはいかない！

「雄二！」

明久がいきなり叫びだした。

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ！」

なんだ。考えは同じって事か…

「明久！俺も手伝うぜ！」

俺も明久と並んで立ち止まった。

「よ、吉井君に神谷君、私のことは、気に、しないで」

「……わかった。ここはお前らに任せる」

姫路の言葉を遮り、雄二が答えた。

「……………（ピタッ）」

「いや、ムツツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムツツリーニが戦争の鍵を握るから」

「んじゃ、ウチは一緒に残ってもいいのかしら。隊長どの?」

明久の横には、俺たちと一緒に立ち止まった島田がいた。

「……………頼めるかな?」

「はいはい。お任せあれっと」

なんだか随分と楽しそうだ。

「……………(グツ)」

ムツツリーニは俺たちに親指を立てて走り去っていた。

「……………さて、どうするの、隊長どの?」

「うん。僕に考えがあるんだ」

え?あの明久にか?

「ま、その考えとやら、見せてもらっせ」

すると、Bクラスの連中が追いついてきた。

「Bクラス!そこで止まるんだ!」

明久が強い口調で呼び止める。

「長谷川先生に話がある」

まさか明久のヤツ、長谷川先生を説得する気じゃあ…

「なんですか、吉井君」

「Bクラスが協定違反をしていることはご存じですか？」

「話を聞く限り、休戦協定を破つたのはFクラスのようにですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは、戦争云々以前に、人としてどうかと思いますよ」

やはり先に根本が説得していたか…。ここまでは予想通り。さあ、どうする？

「……万策、尽きたか……」

「って、策一つしか無いのかよ!？」

やっぱり明久はバカだった。

第六問その一・カッターナイフは投擲用の道具ではありません(後書き)

この小説のご意見やご感想をお待ちしております。

第六問その二・心理学用語で言う『反動形成』は、意識すればシンデレラという
やっところさ主人公が戦います。

第六問その二・心理学用語で言う『反動形成』は、意識すればシンデレラという二

『サモン!』

追っ手の4人が声をそろえて召喚獣を喚びだした。

「おい、この先は行き止まりだぜ」

「吉井、どうするのよ!」

「どっぴするって言われても、どっぴししよう!」

「いいから何か考えなさい!」

俺達は怒鳴り合っように会話する。

「よし、こうしよう!まず島田さんが四人を引きつける!」

「ふんふん、それで?」

「僕が逃げ易くなる」

「……アンタとは一度決着をつける必要があるらそうね」

そんな事を言っていると、廊下の終わりが見えてきた。

「それじゃ、島田さんが召喚獣を喚んで」

「喚んで？」

「僕の盾になる」

「死になさい！」

島田は走りながら拳を打ち込み、吉井は走りながらそれをいなす。

どんだけコイツら器用なんだ？

ついに行き止まりだ。

「……………吉井、さっきの作戦なんだが…」

「ん？」

吉井が首を傾げる。

「…今回限りなら俺が引き受ける」

「「「？」」」

二人とも、字が違うぞ。

「というか、大丈夫なの？」

「そつだよ！バカな亮には無茶だよ！」

明久。お前にだけはバカと言われたくない！

「大丈夫だ。大バカな明久よりはマシだ！」

「それ、ヒドくない！？」

「確かに吉井よりはマシね」

「島田さんまで!?!」

「ま、ここはいいから早く行け!」

「でも逃げるって言うてもどうやって……そうだ!島田さん、アレを!」

明久の目線の先には消火器がある。

「了解!」

島田はそれを抱え上げ、安全弁を引き抜いて…

「……………」

…そのまま動かない。

「は、早く使って!」

「うーん。どうしよっかな?」

吉井の頼みも聞かず、凄く楽しそうな笑顔を作っている。

「し、島田さん!何が望みなの!?!」

こうなった島田は、（何でも言うことを聞く）吉井にしか止められない。

「望み？うーん、そうね」

「今なら大抵の言うことは聞きます！」

「それじゃ、まずは呼び方を変えてもらいましょうか」

「変える！変えさせて頂きます！」

「じゃ、今後ウチはアンタのことを『アキ』って呼ぶから、アンタはウチのことを『美波様』って呼ぶように」

「み、美波様！これでいい！？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペディス』でクレープ食べたいな」

「おのれ！僕が塩水で生活しているというのになんと贅沢をーああつ！おごります！おごらせて頂きますから置いてかないで美波様」

「よろしい。じゃ、最後に」

「まだあるの！？もういいでしょう！？」

島田がとても楽しそうだ。

「ウチのことを愛してるって、言ってみて？」

「ウチのことを愛してる！」

明久がここまでバカとは…

「……………ばか」

プシャアアツ！

消火剤が吹き出し、辺りは真っ白の粉が充満しており、下手をすれば何も見えないような状況となっている。

「なんだ！？」

「何も見えねえぞ！」

Bクラスの四人に見つからないように、俺はこっそりと壁から移動した。

「くっ！アイツらどこいきやがった？」

「逃げたか？」

「すぐに追っぞ！」

「それは無理だな！」

俺は少し離れた行き止まりの場所——正確にはそこにいるBクラスの四人に向かって言い放った。

「なっ…！後ろだと？」

「一体いつの間に!？」

「消火器の時か!？」

「ピンポン。大正解」

俺は四人の顔を見回す。

「あれ？誰かと思えばさっきFクラスの教室を荒らしたあげく、俺にスタンガン喰らわせた奴らもいるじゃないか」

俺はニヤリと口角を上げて不敵に笑う。

「だったらお礼にプレゼントをあげなくちゃいけないなあ……」

今のBクラスの連中に逃げ場はない。

「鉄人の補習という、最高のプレゼントをな。長谷川先生、Fクラス神谷亮がこの場のBクラス四人に数学勝負を申し込みます！サモン！」

「『サモン！』」

俺達は召喚獣を喚びだした。

「ふっ…これでどうだ？Fクラスさんよあ？」

『Bクラス

工藤信二&真田由香&生徒A&生徒B

数学

159点&166点&152点&161点』

この場のBクラスの奴ら全員が150点オーバーである。

「どうだ、これでお前も終わりだ！」

「そういうセリフは…」

俺は一瞬間をおいて、

「死亡フラグだぜ！」

声高々と言った。

喚び出された俺の召喚獣は、黒い服と長ズボンの上にフード付きの膝下まで届くボタン式の黒いロングコート、黒い手袋、黒い靴といった全身黒づくめの格好だった。

そしてその両手に、青いビーム状の剣を一本ずつ持っていた。俗に言うビームソードである。こっちの場合は持ち手も全てビーム状だが。

そんでもって得点がこんな感じ。

144

『Fクラス

神谷亮

数学

385点』

「なっ!?!」

「この点数、Aクラス並だぞ!」

「さてと、アンタら…」

俺の召喚獣は二本のビームソードをくつつけ一本の大剣にして、

「…一撃で終わらせてやる！」

そのまま横に薙ぎ払い、相手の召喚獣を全滅させた。

「うーっす！」

「あ、亮！大丈夫だったの？」

「明久か。大丈夫だ」

Bクラスの四人を補習室送りにした後教室に帰ったら、おなじみのメンバーがまだ教室に残っていた。

「神谷君。無事で何よりです」

「姫路達こそ、戦死なくて何よりだな」

「さて、お前ら」

「ん？」

雄二がその場に残っている全員を見回して告げる。

「こうなったらCクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

「ま、向こうもそれが狙いだろうからな」

「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ」

「そうじゃな…」

「心配するな」

雄二が活き活きとした顔で告げる。

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

今日はこのまま解散となり、続きは明日となった。

第七問・明日に向かって、打つべし！打つべし！打つべし！

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good better best

bad worse worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good gooder goodest

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad but terribust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

神谷亮の答え

『goodー凄いgoodー最高にgood』

教師のコメント

せめて日本語を混ぜないで下さい。

翌朝

「昨日言っていた作戦を実行する」

今は午前八時半。Bクラスとの試召戦争再開にはまだ少し早い。

「作戦って、Cクラスの方か？」

「ああ、その為に、秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言い雄二は鞆からうちの学校の女子の制服を取り出した。

「とうか雄二、それをどうやって手に入れたんだ？」

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「いや、構った方がいいんじゃない？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

秀吉にはAクラスに所属する双子の姉がいて、ぱっと見ではどちらか分からないほど似ている。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取ると、秀吉はその場で着替え始めた。

「……………」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

明久を始めとするFクラスの男子はとても複雑な表情をしており、ムツツリーニに至っては指が擦り切れるんじゃないかというくらいに凄く速さでカメラのシャッターを切っている。

お前らなあ…

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

「さあ？」

「俺にもよくわからん」

何なんだこのクラスは？

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「あ、僕も行くよ」

「俺も」

雄二、秀吉、明久、俺の四人はCクラスに向かった。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ」

秀吉は気が重そうだ。果たして大丈夫か？

そして、秀吉がCクラスに入ってしまった。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

……………つわぁーお。

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね……………」

「まさに女王様みたいだな。男だけど」

「というか、演劇部ってここまで出来ないとダメなのか？」

『な、何よアンタ！』

怒ってる怒ってる。

『話しかけないで！豚臭いわ！』

自分から来ておいて豚臭いって、ツッコミどころが満載だ。

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気になるんじゃないわよ！何の用よ！』

Cクラスの代表の小山さんはもはや冷静さを失っている。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

ちよつと待って小山さん！貴女の中ではFクラス＝豚小屋という方程式が成り立っているんですか？

『手がけがれてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

Cクラスの皆さん、同情するぜ…。

『ちよつと試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！』

そう言い残し、靴音をたてながら秀吉は教室を出てきた。

「これで良かったかのう？」

秀吉の顔はどこかすっきりしていた。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスから小山さんのヒステリックな声が聞こえてきた。女って怖いね。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「よし、行くぜ！」

俺達は早足でFクラスに向かった。

「それで、今のところは大丈夫か？」

「ええ。まだこっちが優勢ね」

レンは現在の戦力を報告し、雄二はノートにそれを書き込んでいく。

「ここがちよっとヤバいかな」

「じゃあこっつしましよう」

レンが新たに書き込んでいく。

それをしばらく繰り返している内に、

「雄二っ！」

「うん？どうした明久？脱走か？チヨキでシバくぞ」

明久が教室に飛び込んできた。

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞きましょう」

レンは真面目な顔をして明久の方を向いた。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があっただんだ？」

「……………」

ツッコミを入れる雄二とは裏腹に、レンは無口だった。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

雄二はまるで『明久にそういう趣味があったとしても不思議はない』
とでも言わんばかりに受け入れた。

「で、それだけ？」

レンは呆れたように明久を見る。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は何なの？」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

雄二が顎に手を当てて考えこんでいる間に、レンは明久にアイコンタクトをとった。

『もしかしてアンタ、瑞希のラブレターのこと知ってるの？』

『うん。だから、お願い！』

「頼む、雄二！レン！」

明久は雄二とレンに深く頭を下げた。

「……………条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「あら、いい返事じゃない」

ふっと口の端を上げるレン。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……難しいことを言ってくれるね」

そう、今の戦況で根本に攻め込むためには、どうしても姫路のような圧倒的な火力が必要となる。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させる」

雄二のいつになく強い口調が物語るように、失敗はそのまま敗北に繋がると見て間違いないだろう。

「それじゃ、うまくやりなさいよ」

雄二とレンが教室を出ようと立ちあがる。

「え？どこか行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

明久は黙って考え込んでいる。

「明久」

教室を出る直前、雄二とレンは振り向かずにこう言った。

「確かに点数は低いが、秀吉やムツリーニのように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「アンタの『観察処分者』の称号、伊達や酔狂じゃないんでしょう？」

「……………雄二、レン」

「うまくやれ。計画に変更はない」

「それじゃ、頑張りなさい」

そういい残し、雄二とレンは教室を後にした。

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

雄二の本隊と根本の部隊が対峙している。

「はア？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

向こうの壁からはドン、ドンと、何かを叩きつけている音が聞こえる。

「……さっきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

根本の部隊が迫ってくる。

「……態勢を立て直す！いったん下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

根本の音が響く中、レンはこっそりと別の場所に向かっていった。

「（亮。こつからはアンタの番よ！しっかりやりなさい！）」

『（了解！！）』

レンと亮が入れ代わるのと同時に、豪快な音をたてて壁が崩れる大きな音が響いた。

「よし、行くぜ！」

俺はDクラスの教室に駆け込み、壁にあいた穴に向かって一直線に走った。

穴からはBクラスの近衛部隊に囲まれている明久と島田が見える。

なので、俺は深く息を吸って叫んだ。

「明久！左手を突き上げろ！」

「え！？こっつ？」

突然の声に戸惑いながらも明久は左手を突き上げてくれた。

俺はそれを確認すると、床を思いっきり蹴ってジャンプした。

さて、レンの武器が頭脳なら、俺の武器は何か？

何もない？そんなわけではない。

俺の武器は

「はあああああつ！」

常人には無茶な作戦をもこなす身体能力である。

「よくやった、明久」

俺は突き上げた明久の左手を足場にしてもう一度ジャンプして、近衛部隊の頭を飛び越え、教室の出入り口を背にして根本から十五メートル程離れて着地した。

「さて根本、これで終わりだ」

「何を言っているんだ？立会人となれる先生が一人もないじゃないか！」

今この場には、フリーとなっている先生は一人もいない。

俺はそれを確認すると、少しずつ後ずさりをして根本から離れた。

「なんだ。お前も逃げるのか？」

「まさか」

この動作や会話でアイツが来るまでの時間は稼げた。

ダン、ダンッ！

出入り口は人で塞がり、それにより教室には異常な熱気がこもっている。そこに突如現れた生徒と教師、二人分の着地音が響く。

エアコンが停止した為、涼を求めるべく開け放たれた窓。

そこから我らがFクラスの最後の一手となる生徒と、並外れた行動力を持つ保健体育の教科担当が根本の前に降り立った。

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……!!」

「Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリイニイーツ！」

近衛部隊は明久達が引き付け、退路には俺が立ちふさがっているの
で、根本恭二に逃げ場はどこにもない。

「ーサモン」

「Fクラス

土屋康太

VS

Bクラス

根本恭二

保健体育

441点

VS

203点

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃して敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

第八問・ご飯の後でもクレープといった甘いものを食べれる『別腹』は実在する

レンの時の地の文において、人の名前の呼び方は亮に合わせてあります。

第八問・ご飯の後でもクレープといった甘いものを食べれる『別腹』は実在する

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

神谷亮^{レン}の答え

『じよ、女性にそんな事を書かせないで下さい！／＼／＼』

教師のコメント

君は男性のほずでは？

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

「明久、随分と思いつた行動に出たのう」

「全くだ」

「うう…痛いよう、痛いよう……」

痛みのためか、明久が手を押さえている。召喚獣でやったとはいえ、素手で鉄筋コンクリートを壊せば誰だって痛いだろう。

「ま、お前らしい作戦だったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦だな」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

俺が言うまでもなく、既に周知の事実だけどな。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩をバンバンと叩く。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

さっきまでの強気が嘘のようにおとなしくなり、根本が床に座り込んでいる。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に対して、周りの皆がざわ…ざわ…と騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

雄二の性格を理解し始めたのか、クラスの皆はどこか納得した表情になった。

「……条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

酷い言われようだが、彼はそれだけ色々とやってきたのだ。周りの人間が誰もフォーをしないのが良い証拠だ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

チャンスって、おそらく昨日言っていた取引のことだろう。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

明久のあの提案があるまではそうだったただけだな。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て行った通りに行動してくれたら見逃そう」

雄二の手にあるのは、さつき秀吉が着ていた女子の制服。やっている本人もどこか楽しそうだ。

「ば、馬鹿なことを言っな！この俺がそんなふざけたことを……！」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

慌てふためく根本をよそに、Bクラスの生徒たちが俺達の仲間になった。うーん、声援が暖かい。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限るBクラスの生徒達。というか、変わり身早いな。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

明久がぐったりと倒れている根本に近づき、制服を脱がせ始める。

「んじゃ、教室に戻るとするか」

これ以上男子の着替えを見ていると目に毒なので、俺は教室に戻った。

「さて、帰るか」

俺はカバンを持つと、自分の席(?)から立ち上がった。

「あれ？明久じゃねーか。お前も帰るのか？」

「いや、僕はまだ用事があるから」

教室を出ようとしたら、入り口で明久と出くわした。

「そっか。んじゃ、先に帰ってるぜ」

「うん。また明日」

「また明日な」

俺は教室を後にした。

「あ、神谷君。あの、教室に誰もいませんでしたか？」

「姫路か。ああ。誰もいなかったぜ」

「あ、ありがとうございます」

姫路は駆け足で教室に向かっていった。

「誰もいなかったぜ、姫路」

お前が大好きな明久以外は、な。

「うわぁ……」

廊下で俺が見たのは雄二や明久、Bクラスの皆さんにより女装をした根本がAクラスへ伝言に向かわされているところだった。

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本め！よくも俺にこんなことをー』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

「（根本には悪いが、恐ろしいまでに似合っていないな…）」

『（……………亮、気分転換にクレープでも食べに行かない？）』

「（……………賛成だな）」

俺は複雑な心境でクレープ屋に向かった。点数補給のテストが終わった二日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺たちは、もうじきお別れになる予定のFクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「どうしたんだ雄二。らしくないぜ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

しかしメンバーがメンバーとはいえ、よくここまで来れたものだ…。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ!』

『そっだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

皆の気持ちが一つになっていく。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どっいっことだ?』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二が机をバンバン、と叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラスの代表ーつまり学年主席である霧島さんには、正面から

勝負してもおそらく勝ち目はない。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ！？」

明久の頬をカッターナイフが掠めた。

ちっ。惜しいな…。ただの威嚇か？

「次は耳だ」

訂正。どうやら雄二は本気のようにだ。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

ならば明久にカッターを投げなくてもよかったのかもしれないが、そこは気にしない。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともによりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

けれども俺たちは、現にこうやって勝っている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

雄二がそう言うと、本当にそうなる気がしてきた。皆も同じ気持ちだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

皆の意思は今や一つになっている。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史ねえ…

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

その条件でいくならば、ミスした方が負ける注意力の勝負になるだろう。

「で、その条件で霧島さんに勝てる根拠は何だ？」

「俺がこのやり方を取った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題だつて？

「その問題は――『大化の改新』」

「大化の改新で小学生レベルとなると…何年に起きた、とかかろう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

「大化の改新なら、645年だな」

「ああ。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

ふと明久の方を見ると、『僕を見ないで…』といったオーラを放っていた。

明久。まさかお前……

「だが翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

さつきから霧島さんを『アイツ』とか『翔子』とか呼んでるしな。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？それに亮だってAクラスの桂と幼なじみだぞ！」

「うおっ！」

明久が上履きで襲ってきたので、とっさに雄二の鞆でガードした。

「亮！何をしやがる！？」

「それはこっちのセリフだ、雄二！勝手に人の個人情報バラしやがって！」

おかげで俺まで標的になっちまったじゃないか！

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

何でこんな時だけこのクラスは団結するんだ？

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんや桂さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？あと亮、どこから取り出したか知らないけど、便乗して姫路さんにカッターを渡さないで！」

さっきの上履きの仕返しだぜ。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

秀吉がパンパンと手を叩いて場を取り持つ。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子と桂優希じやぞ？男である雄二や、基本ケセラセラな亮に興味があるとは思えんじやろつが」

む。否定できない…。

「むしろ、興味があるとすれば……」

皆の視線が姫路と俺に向けられた。

「ちょっとまで。姫路は分かるが、何で俺なんだ？」

「いや、亮じゃなくて……」

まさか、レンか？

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教え
ていたんだ」

やっとクラスの皆が俺と雄二を取り囲むのを止める。助かった。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座
にいる」

相手の長所を逆に利用するとは、雄二らしいな。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は――」

『システムデスクだ!』

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎打ちを申し込む」

今回は代表である雄二、明久、姫路、秀吉、ムッツリーニ、レンと首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

「うーん、何が狙いな?」

「それはもちろん、Fクラスの勝利よ」

現在雄二、レンと交渉しているのは秀吉の双子の姉の木下優子さんである。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「なる程、賢明な判断ね」

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗って昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同じ設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気ってある？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ええ、アレが代表をやってるクラスよ。幸い宣戦布告はまだされてないようだけど、どうなるかしらね」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

試召戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を取らない限り再び試召戦争を申し込むことは出来ない。これは試召戦争の泥沼化を防ぐための取り決めである。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平

交渉にて終結』ってなっていることを。規約には何の問題もない。
…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……それって脅迫？」

「あら 人聞きの悪い。ただのお願いよ」

レンは無邪気そうな笑顔を見せる。

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？本当？」

あまりの潔さに、明久が思わず声をあげる。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん
……」

思わぬ所で根本の女装が役に立ったようだ。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているのね？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「やっぱり凄いのね、霧島さんって……」

レンは手を口に当てる。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ」

これは競争じゃなくて戦争なんだからねと付け足す。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント？嬉しいな」

「その代わり勝負の内容はこっちで決めさせてもらっわよ、Aクラスさん？」

「え？うーん」

木下さんは再び悩み始めた。

「……………受けてもいい」

「うわっ！」

突然の凜とした声に明久が素っ頓狂な声をあげた。

「……………雄二の提案を受けてもいい」

声の主はAクラス代表の霧島翔子さんである。

「あれ？代表。いいの？」

「……………その代わり、条件がある」

「条件ですって？」

「……………そう」

霧島さんは姫路とレンをじっくりと観察するように見て、顔を雄二に向けて言い放った。

「……………負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

「アンタ達、何やってんの……………？」

明久とムツツリーニの行動に、レンが呆れながらツツコむ。

「じゃ、どうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

「ま、妥当なところね」

「交渉成立だな」

「レ、レンに雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「心配するな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

雄二が明久を宥めた。

こうして、勝負会場はAクラス、時間は十時からに決まった。

第八問・ご飯の後でもクレープといった甘いものを食べれる『別腹』は実在する

もはやレンの時も地の文は亮でいいかもしれない…。

第九問その一・発言において、強気なものとデリカシーが無いのとは全く違う

問 以下の問に答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

神谷亮の答え

『？サバイバルナイフ ？ダンボール箱 ？カロリーメイト ？オートマ式拳銃 ？迷彩服』

教師のコメント

それで生きていけるのは君とどこかの兵士だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

「では、両名共準備は良いですか？」

今日の立会人はここ数日お世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生だ。今日も知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる脚がとても綺麗だ。

「ああ」

「……問題ない」

場所は昨日の交渉通りAクラス。Fクラスでやるよりずっといい。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

Aクラスからは秀吉の姉の木下優子さん。

「ワシがやるっ」

対するこっちはその弟の木下秀吉だ。秀吉ならば姉の苦手科目や集中力の乱し方を知っているはずだ。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラスの小山さんだろ？その人って確か…

「じゃーいいや。その代わりに、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

秀吉が木下さんのフリして罵倒しまくった人だったような……。

『姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！ちがつ……！その関節はそっちには曲がらなっ……』

ガラガラガラ

扉を開けて木下さんが戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれ
るっ。」

「よし、俺が行こう」

俺は手を挙げて名乗りをあげた。

「危険だよ、亮！相手は秀吉を一瞬で撃破したんだよ？」

「心配するな、明久。相手がどんなにバイオレンスでデンジャラスな性格をしていようと、負けるわけにはいかないんだ！」

そう高らかに告げた瞬間、俺の聴力が正常ならば、『ブチッ』という、何かが切れる音がした。

「神谷君だっけ？ちょっとこっちに来てくれるかな？」

笑顔の木下さんにそう言われ、俺は教室の外に連れて行かれた。

（明久サイド）

秀吉なら分かるけど、亮まで廊下に連れ出して、木下さんは何をするつもりなんだろう？

『なあ、勝負は？ってあれ？何故俺の腕を掴むの？』

『私の性格がバイオレンスでデンジャラスってどういう事なの？』

『アレはだな、客観的事実であってー木下さん！？人間の肉体はそんな方向に曲がるほど都合良くは出来てはいなっ……………！！』

また一名、尊い犠牲者が出た。

「さて、これで二名が急用で帰っ「ま……………まだだ……………」

亮が息も絶え絶えになって教室に入ってきた。

「アレで動けるなんて、秀吉よりタフなんじゃない？」

「打たれ強さが俺の取り柄だからな……」

打たれ強いと言つより、やせ我慢な気がする。

「さあ、始めようぜ！」

「ええ…「待つて！」」

突然誰かが割って入った。

「優子ちゃん、ゴメン。その勝負、私にやらせてくれない？」

あの人は確か、亮の幼なじみの桂優希さんだったっけ？

「良いわよ。頑張ってきて」

「ありがとう！アイツとは一度決着をつけておきたかったのよね」

意気揚々と亮の前に対峙する桂さん。

「さあレン、出てきなさい！どっちが強いかわッカリさせるわよ！」

「……なんだかよく分からないけど、いいわ。サシでやりましょう！
！それでは、数学でお願いします！」

亮のもう一つの人格であるレンが出てきた。

「分かりました。両名、召喚を開始して下さい」

「「サモン！」」

二人は同時に叫び、それぞれの召喚中が姿を現した。

レンの召喚獣は全身黒づくめで両手にはビームソードを持っている。
僕の木刀よりもよっぽど強そうじゃないか！

対する相手の召喚獣は、全身を金色の鎧で包み、黒と白の双剣を装備していた。

□ Aクラス

桂優希

V S

Fクラス

神谷レン

数学

4 1 7 点

V S

4 5 1 点

点数ではレンの方が有利だけど、この差では勝負はどう転ぶかわからない。

「それじゃあ、いくよー!」

その瞬間、レンの背中を相手の双剣が突き刺した……

「くっ!」

かのように思えたけれど、紙一重で避けた。

え？というか、今何が起きたの！？

「その能力…腕輪ね！」

「うん。アタシの腕輪の能力は『空間歪曲』だからね。体の一部なら好きな箇所を好きな場所に出現させることができるのよ！」

なんだよ、そのチートじみた能力は！？

「アンタの能力、かなりたちが悪いじゃないの。それじゃ、これは……」

レンが左腕を上上げると腕輪が光りだし、

「どっかしら？」

腕を下ろすと同時に上から一面青色の弾幕が桂さんめがけて降って

きた。

「私の腕輪の能力は『増殖』だからね。こんな事も出来ちゃうのよ！」

レンが再び青色の光弾の雨を降らす。というか、レンも充分たちが悪いじゃないか！

「そっちがその気なら、こっするまでよ！」

桂さんがレンの首を狙って剣を振るう。それをレンが何とか避けて攻撃を再開する。何？このテニリみみたいな壮絶な戦いは…。

そんな事を続けていく内に、遂に決着の時がきた。

『Aクラス』

桂優希

V S

Fクラス

神谷レン

数学

16点

V S

15点

「これで最後ね…」

「ええ。アタシもアンタももう力はほとんどないわね…」

両者はにらみ合って…

「」「行くわよ!」「」

うわっ。びっくりしたあ…。

「はあああっ!」

「やあああっ!」

お互い同時に飛び出し、

ガキイイイン！

そんな音を立てて交差した。そして…

レンの召喚獣が倒れた。

「勝者、Aクラス桂優希」

惜しかったとはいえ、まずは一敗だ。少し厳しくなった。

「ゴメン、雄二。負けちゃった…」

「気にするな。まだチャンスはある」

さあ、次で巻き返そう！

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。Fクラスからは、

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

どうしよう！クラスを代表して勝負なんて！ここで僕が負けたら後がないのに！

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

そうか。雄二のヤツ……

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

「ええ。もう隠さなくてもいいでしょう。この場の全員に、アンタの本気を見せてやりなさい」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

味方であるはずのFクラスの皆の声。

ま、仕方ないか。今までの僕を見ていたら普通そう思っつよね。でも、

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけど、実は僕——」

大きく息を吸い、この場にいる皆に告げる。

「――左利きなんだ」

「Aクラス

佐藤美穂

VS

Fクラス

吉井明久

物理

389点

VS

62点[『]

おかしい。本気を出したのに負けるなんて。

第九問その二・最終決戦！終わりところから（前書き）

私の腕の未熟さ故、レンの時の地の文の書き方が二転三転してしまっています。

書き方の候補としては、

？今まで通りの書き方

？今回の話のようにレンの一人称で書く

こんなかんじです。

どちらの書き方が一番読みやすいか、ご意見をいただければ幸いです。

第九問その二・最終決戦！終わりとこれから

（レンサイド）

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

まあ慣れだけで六倍以上のの点数差をひっくり返せるわけ無いわよね。

「よし、勝負はここからだ」

「全くもってその通りね」

「ちょっと待った雄二にレン！アンタら僕を全然信頼してなかったでしょー！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

「明久、私はちゃんと信頼してたわよ。アンタが負ける方に」

誰も勝つ方とは言っていないからね。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムツツリーニが立ち上がった。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

転入生なんだ。どつりで去年ほとんど見かけなかったはずだわ。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

ムツツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

随分余裕みただけど、ムツツリーニの実力を知らないのか、それとも自分も得意なのか。どっちなんだろ？

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ……………キミとは違って、実技で、ね」

え？得意ってそっちの方なの？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクとそこのレンさんが教えてあげようか？もちろん実技で」

あれ？なんか私勝手に巻き込まれてない？

「そうね〜。だったら今度の休みに明久の家で三人でね。それでい

「い？明久」

「毒を食らわば皿までってね。」

「フツ。望むところー」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！というかレン、アキに変なこと言わないでちょうだい！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

ドンマイ、明久。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。サモンっと」

「……………サモン」

二人の召喚獣が、それぞれ武器を持って出現する。

ムッツリーニの方はBクラス戦で見せた二本の小太刀。一方工藤さんは巨大な斧だ。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣が腕輪を光らせて動く。

斧に雷光をまわせ、ありえないスピードで距離を詰める。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

「ムッツリーニっ!」

「大丈夫よ明久。だってアイツは…」

「……………加速」

「え?」

いつの間にかムッツリーニの召喚獣は相手の射程外にいた。

「……………アイツは、ムッツリーニなんだから」

「……………加速、終了」

ムツリーニがつばやいてから一呼吸置いて、工藤さんの召喚獣が全身から血を吹き出して倒れた。

□ Aクラス

工藤愛子

V S

Fクラス

土屋康太

保健体育

446点

V S

572点
『

500点って、私そんな点数取ったこと無いんだけど…

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

それでこんなに強いわけね。

「そ、そんな……………！このボクが……………！」

相当ショックだったようで、工藤さんは床に膝をついている。

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こっちからは当然瑞希が出る。さあ瑞希、頑張りなさい！

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスからは、久保利光が出てきた。

「やっぱり来たわね、学年次席」

彼は瑞希に次ぐ実力の持ち主で、彼女が振り分け試験でリタイアした今、学年次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ」

そう、二人の総合科目の点数はほとんど同じであり、どちらが勝つか全く分からない。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ちょっと待った！何を勝手にー」

「構いません」

「明久。瑞希を信じてやりなさい」

「姫路さん？それにレンも？」

そうは言いつつも、私は瑞希に信頼と少しの不安を抱く。けれどー

☐ Aクラス

久保利光

VS

Fクラス

姫路瑞希

総合科目

3997点

VS

4409点
『

その不安は杞憂に終わった。

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

至る所から驚きの声があがる。ま、無理もないわね。点数差400点オーバーなんて実際驚くことだし、私だって驚いている。

「ぐっ……！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

久保君が悔しそうに瑞希に尋ねる。気になるのも仕方ないわね。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

Fクラスが人の為に頑張る理由って、その人（男子）の幸せを邪魔することぐらいなんだけど……。

「これで二対二です」

流石の高橋先生も若干焦りの表情を浮かべる。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは勿論霧島翔子さん。

そしてウチのクラスからは当然、

「俺の出番だな」

坂本雄二だ。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ…ざわ…

雄二の宣言で、Aクラスの人達の顔つきが独特になり、ざわめきが生まれる。

ってあれ？おかしい要素が混じってる気がする…。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出て行く。きっとそ
ういった資料とか問題とかもあるんでしょよね。

「雄二、あとは任せたよ」

明久がぐつと雄二の手を握る。

「ああ。任された」

「……………（ビツ）」

ムツツリーニがそこに歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

ムツツリーニは口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

私も雄二の元に歩み寄り、声をかける。

「雄二。絶対勝ちなさいよ」

「分かってる。お前ら二人がいなかったら、ここまで来れたか分からない」

「お礼なら、ここのドリンクの肴にゆっくり聞いてやるぜ」

「もちろん、お菓子付きでね」

「ああ。好きなだけ飲ませ、食わせてやる」

「では、最後の勝負、日本史テストを行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

問題を用意し終えた高橋先生が、クラス代表の二人に声をかける。

「……はい」

短く返事をし、霧島さんが教室を出て行った。

「じゃ、行ってくるか」

続いて雄二も教室を出て、視聴覚室に向かった。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『分かっているぞ』

『では、始めてください』

いよいよ始まった。あの問題が出ていけば雄二の勝ち、出ていなければ、集中力や注意力で劣る雄二の負けだ。

ディスプレイに問題が映し出される。

《次の○に正しい年号を記入しなさい。》

○年 平城京に遷都

○年 平安京に遷都

明久でも分かりそうな問題が続いていく。

○年 鎌倉幕府設立

○年 大化の改新

出た！

これで私達の歴史的な勝利が確定した！

教室の中では歓喜の音が響き渡る。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子

97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二

53点》

私達Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第十問・僕たちの行方（前書き）

ようやく一巻の話が終了です。

これからしばらくは、前話の前書きに書いた？の書き方でいこうと思います。

第十問・僕たちの行方

問 次の() に正しい年号を記入しなさい。

『 () 年 キリスト教伝来 』

霧島翔子の答え

『 1549年 』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『 雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993 』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「三対二でAクラスの勝利です」

高橋先生のセリフが響く。分かってます、私達の負けです。雄二がアホなせいで。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

雄二が床に膝をつく。

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「神に祈る間と遺言を残す間をあげるわ。覚悟なさい！」

私の右腕には、目が赤く肌の色が褐色であるあの人と同じ模様が浮かび上がる。

そしてその右手で雄二の顔を掴む。

怒りや憎しみがあれば他作品の技が出せるって噂は本当だったみたいだね。

「吉井君、落ち着いてください！」

「レンも落ち着いてよ!」

優希が雄二から私を引き剥がそうとする。

「だいたい、53点って何?0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃー」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ!」

「アキ、落ち着きなさい!アンタだったら30点も取れないでしょうが!」

「それについて否定はしない!」

否定出来ないの間違いなんじゃない?

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ!」

「:ならば私がこの『お仕置き七つ道具』を使ってー」

「ちょっと待ってレン!数本のカッターナイフを取り出している時点でお仕置きじゃなくて処刑なんだけど!」

優希が私を必死に引き止める。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

ってことは凶暴ってことね。

「……ところで、約束」

そつえば、負けた方が何でも言うことを聞かって約束してたんだ。

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

あそこで撮影準備をしている二人を先にお仕置きしたほうがいいのかしら？

「……………それじゃー」

霧島さんが瑞希、私の順に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

そして、小さく息を吸い、

「……雄二、私と付き合って」

言い放った。

……へ？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」

つまり、霧島さんに立っていたあらぬ噂や彼女の行動は、一途に雄二を思っている所以だったわけね。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

ぐいっ　つかつかつか

霧島さんは雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

あまりの出来事に皆言葉が出ず、その場に沈黙が訪れる。あれは、一般人類にはまだ早過ぎる光景だったわね。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

この声は…鉄人ね？

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

我がFクラスって、まさか…

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に
担任が変わるそうさ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ！？』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくると
は正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言
っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てで
はないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

もはやぐうの音も出ないわ。

「吉井。お前と坂本と神谷は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯とその参謀だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「明久。ロープぐらいなら貸すけど？」

「……お前らには悔い改めるといふ発想はないのか」

それは明久だけです。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやる
う」

「（亮、そろそろ代わりましょ？色々あって疲れたわ）」

『（はいはい。ゆっくり休んでな）』

そうして私は亮と入れ代わった。

亮サイド

「で、いつの間にああなっただん？」

前を見てみると、姫路と島田に片方ずつ腕を引っ張られている明久がいた。

「さて、これからどうするかなっ」と……」

俺がそんな事を呟いていた時、

「さてと、じゃあこれから駅前の喫茶店に行きましょうっ。」

後ろから優希が俺の腕を握っていた。

「待ってくれ！今月はちょっとピンチなんだ。というか、じゃあって何だ？」

「何行つてんの？召喚獣勝負で勝ったんだから、なんとしても奢ってもらおうよ！」

結局目的は果たせなかったが、俺は今はっきりと分かることがある。それは、

「ほら、早く行こうよ」

「ちよっ、分かったからそんなに引っ張るなって!」

明日一日の食事は駅前の喫茶店のテイクアウト品になりそうだと
いうことだった。

第十一問・集団の中でリーダーシップを発揮するのは意外と難しい

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本(x) 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

神谷亮の答え

『メイト』

教師のコメント

まさか君の回答に続くとは思いませんでした。

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺たちの通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

各クラスとも学園祭の準備を行い、教室には活気が溢れている。そんな中、我らがFクラスは――

「吉井！こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備をせずに、校庭で野球をして遊んでいた。ちなみに俺は、

「……ああ、空が青いぜ」

屋上で空を眺めていた。

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

あ、鉄人に見つかったみたいだ。

このままでは俺も鉄人の拳の餌食になるので、教室に戻ることにした。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだがー」

雄二は床に座っている俺たちを至極怠そうに見下ろし、

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度でそう言った。試召戦争の時とはまるで別人だ。

「まふ〜」

かく言う俺も、どこかのパンダ以上にダレていた。アレはダレているんじゃないかって、たれてるんだっけ？

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

不意に雄二のセリフが耳に飛び込んできた。

「え？ウチがやるの？うーん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

島田は突然の指名に目を白黒させている。というか、あんな見せ物みたいな大会に出るとは。物好きな奴だ。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんやレンの方が適任なんじゃないの？」

レンねえ……

「え？私ですか？」

姫路が首を傾げる。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

雄二の言う通りだ。姫路ではおそらく少数派の意見を切り捨てたりは出来ないだろう。

「じゃあレンは？」

明久が俺に聞いてくる。

「レンに嫌いな行事のリーダーをやらせたら、絶対誰も逆らえなくなる恐怖政治になるぜ……」

そう、中学生の時に推薦されて一度こういう行事のリーダーをやったことがある。しかし、意見が割れたりして活気づいていたのは最初の時だけで、最後の方は皆レンに逆らえなくなっていたのだ。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「アレって学校の宣伝みたいな行事なんだろう？二人とも物好きなんだな」

今回の清涼祭の期間中、『試験召喚システム』を世間に公開するため、『試験召喚大会』という企画が催されるらしい。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！許せません！』って怒ってるの」

「へえ〜。姫路が怒るなんて珍しいな」

「だって、皆のことを何も分かっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

「……………」

姫路には悪いが、皆をよく知っている俺や明久でも、Fクラスはバカの集まりだと思っぜ。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

この二人なら、優勝だって不可能じゃなさそうだな。

「四人とも。こっちの話が続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員次第でやってもいいけど……」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう」

「……秀吉。悪いがちょっとトイレに行くから、帰ってきた時に何か決まりきったことがあったら教えてくれないか？」

「うむ。了解したぞい」

「じゃ、よろしく頼むぜ」

俺は秀吉にそう告げ、教室を出た。

「ん？神谷か？こんな所で何をしている？」

トイレからの帰り道、廊下で鉄人に声をかけられた。

「トイレの帰りです。28号」

「『鉄人』と言われたことは何回もあるが、『28号』は神谷、お前が初めてだぞ」

「それはどうも」

俺は用事がまだある鉄人と分かれて教室へ向かう。

「とりあえずどんな感じかなって…」

俺は教室の扉を開ける。

そしてぼろっちい黒板に目を向ける。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶 『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

「……………」

さすがにこれには絶句した。

「……………秀吉。黒板の候補、アレって一体どういうネーミングセンスなんだ？」

俺は秀吉にこっさり話しかける。

「ワシも分からん。悪いが明久に聞いてくれんか？」

見ると、黒板の所に明久と島田がいた。

「……………アイツなら仕方ないな」

といつか島田、こんなところで個人的願望を叶えないでくれ…。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

鉄人が教室に入ってくる。

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

美波の言葉に従い、鉄人はゆっくりと黒板に目をやった。

「……………補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

よくアレを見て絶句しないものだ。

「せ、先生！それは違うんです！」

「そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

さすがFクラス。クラスメイトを売るのに何の抵抗もない。それとも明久だからか？

「馬鹿者！みっともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、思わず背筋が伸びる一同。

すごく教師らしい発言だ。

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

すごく教師らしくない発言だ。

「まったくお前達は……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

溜め息混じりの鉄人のセリフに、クラスの皆の目が急に輝きだした。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ!』

『まともな設備の教室でレンと甘い学園生活を過ごしたい!』

……最後のヤツ、確認次第血を見るぜ…。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

おや。姫路が珍しく率先して動いている。召喚大会への参加といい、彼女はこういう行事が好きなのだろうか？

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

クラス内で色々な意見が飛び交い始める。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそ、リターンも大きいはずだ』

なんか、まとまりのかけらすら感じられない。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

美波の注意もあまり効果がない。

そろそろレンがキレル頃合だな。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

『（亮……）。代わって頂戴……』

「それじゃ美波、続きをお願い」

「う…うん……」

美波にバトンを渡して、私は再び亮と入れ代わった。

「決まりそうにないから、店はさっき拳がった候補の中から選ぶからね！」

美波が無理やりまとめる。この場合では最良の判断だ。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げること！いいわね！」

確かにこういった進め方は明久や姫路や俺やレンにはできそうになり。雄二の人選もデタラメというわけではなさそうだ。

「それじゃ、写真館に賛成の人！ーはい、次はウエディング喫茶！ー最後、中華喫茶！」

クラス中に島田の声が響く。騒がしい喧噪の中、島田が挙げられた手の本数をカウントする。結果、

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」
僅差で中華喫茶が勝利を収めた。ちなみに俺も中華喫茶に手を挙げた。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

須川のヤツ、料理できるのか。これは初耳だ。

「……………（スクツ）」

ムツツリーニまで立ち上がった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

おい、そんな話聞いたこと無いぞ！

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらっからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところが集まって！」

いつの間にか明久はホール班のトップになっていた。

「それじゃ、私は厨房班にー」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

「そうだ！絶対にその方が良い！」

平然と厨房班に入ろうとした姫路を明久と俺が呼び止める。彼女が厨房班に入ったら、喫茶店内が阿鼻叫喚の様子になるに違いない。

『明久、亮、グッジョブじゃ』

『……………（コクコク！）』

秀吉とムツリニからのアイコンタクト。さすがにあの破壊力を知っている仲間だ。

「え？吉井君に神谷君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

無自覚の必殺料理人が首を傾げる中、俺は明久とアイコンタクトを

とっっていた。

『明久、ここはお前に任せた。うまくごまかしてくれ!』

『分かった。任せといて!』

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あゝっ!み、美波!僕の背中はサンドバッグじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて……。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ」

頼む…。ホールだけで頑張ってくれ。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

明久のヤツ、地雷踏んだな。

「それなら、ワシも厨房にしようかの。行くぞ、亮」

「え？俺も？」

「秀吉、何をバカなことを言っているのさ。秀吉もレンもそんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃああっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね」

「こんなんで大丈夫なのか？Fクラスは……」。

「ああ、だるい……」。

第十二問その一・異性に校舎裏に呼び出されたからといって、告白されるとは聞

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

神谷亮の答え

『バレーボール ルービックキューブ トランプ』

教師のコメント

それらはもはや地名ですらありませんよ。

「さて、帰るか」

今は帰りのHRも終わり放課後。軽い用事を済ませた後、他に予定も無いので帰ろうとしていた。廊下でとある人影を見つけるまでは。

「明久のヤツ、何で体育館に向かっているんだ？」

気になったので、後をつけることにした。

「やあ雄二。奇遇だね」

「よっ。二人とも奇遇だな」

「………どういふ偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ」

雄二の言う通り、ここは体育館にある女子更衣室。というか、なんでこんな所に雄二がいるのか。こっちが聞きたいぐらいだ。

「やだな。ただの偶然だよ」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケが」

ガチャッ

ドアが開く音がしたので、俺は目にもとまらぬ速さで天井に張り付いた。

「えーっと……あれ？Fクラスの問題児コンビ？ここ、女子更衣室だよな？」

「やあ木下優子さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

「あ、うん。奇遇だね」

あっはっは、と明久が爽やかそうに笑っている。

「先生！覗きです！変態です！」

ま、そうなるわな。

「逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

二人は更衣室の小さな窓から飛び出した。相変わらずものすごい行動力だ。

バタンッ

女子更衣室のドアが閉められ、足音が遠くなっていくのを確認して、俺は床に降りた。

しかし、まさか俺の天敵である木下さんが来るとは…。見つかって

いたら死にかけただろうな。

木下さんは前回のAクラスとの試召戦争の時の俺の（木下さん曰く）性格捏造発言がよほど気に入らなかつたらしく、ことある毎に俺の手足を軟体動物レベルにグニャグニャにしようとするのだ。

「さて、危険人物もいなくなったことだし、そろそろ脱出をー」

ガチャッ

「誰が危険人物ですって？」

壊れたブリキのようにギギギ、と後ろを向いたら、顔に満面の笑みを浮かべた木下さんがいた。

「まさか、見つかってないとも思ってたの？」

「……なら何故気づいてないフリをしたんだ？」
もしかしたら、木下さんは俺を無実放免してくれる可能性が――

「アンタだけは私が直々に制裁しようと思ってね。校舎裏まで来てくれる？」

――全く無いことが分かった。

というか、満面の笑みの後ろに阿修羅が見えたのは気のせいでは無いだろう。

（明久サイド）

「後はレンの方だね」

ここはFクラス。雄二はなんとか焚き付けたけど、鉄人から逃げ回ったためにレンの方はまだ説得出来てない。

「取りあえずアイツの携帯に連絡してみたらどうだ？」

雄二に言われ、亮の番号を呼び出す。おそらくまだどこか学校内にいるはずだ。

Prrrrと、呼び出し音が受話器から響く。

『ーもしもし』

「あ、亮。ちょっと話がー」

「悪い、明久。今は緊急事態なんだ!」

「え?亮。今何をしているの?」

『さて、覚悟はいいかしら?神谷君』

『木下さん!違っつ!そんな向きに関節を曲げたら俺の体がイカミたいにグニャグニャにつ……………!仕方ない!脱出っ!』

「亮!?もしもし!もしもーし!」

携帯電話からはプー、プー、プー、という無機質な音しか返ってこない。

「神谷はなんて言ってた?」

「えっと、『緊急事態』とか『そんな向きに関節を曲げたら』とか『脱出』とか言ってた」

「…………おそろくまた姉上の制裁を受けているんじゃないだろう。毎回そん

な感じじゃからの」

二人はいつの間そんな仲になったんだ！？そんなの初耳だよ！

「取りあえず亮の探索、もとい救出をするぞ。話はその後にでも聞かせてくれればいい」

僕と雄二は亮を探しに教室を後にした。

「はあ……はあ……はあ……」

木下さんの制裁から脱出した後、俺は命からがら保健室まで逃げ延びた。

「しかし、アレはもう少しで死ぬところだった……」

全く…木下さんの辞書には手加減という文字はないのか？

「やあ亮。奇遇だね」

「そのセリフ、さつきも聞いたんだが…」

そう、俺の目の前には明久がいた。

「用がないならほつといてくれ。今はそれどころじゃないんだ」

俺はボロボロになった体を引きずるように動かす。

「さて亮。そんなキミに朗報ですっ」

「ふん。悪い報せなら思いっきりボコるぞ」

冗談抜きのセリフを言う。

「い、こちらの携帯電話をどうぞ」

誰かに電話をかけてから、明久が俺に携帯電話を渡してきた。

「ったく…何なんだ？一体」

俺は渡された携帯電話を耳に当てた。

『もしもし？神谷？』

「島田か。一体どうしたんだ？」

『ちよつと待って。今替わるから』

替わる？一体誰のことなのだろう？

『神谷君、いったいどこにいるのかしら？』

「おかけになった電話番号は、現在使われておりません」

木下さんの声が携帯から聞こえてきたので、即座に電話を切った。

「覚悟しろよ明久！」

俺は拳に息を吹きかけ、いつでも明久を殴れる態勢を取る。

「まあ落ち着け。俺達は交渉に来ただけだ」

「交渉？もしかして学園祭の喫茶店のことかしら？」

私の予想を聞いて明久が目を丸くしている。どうやら凶星みたいね。

「あのねえ。こんな面倒くさいやり方なくても、アンタ達が『大好きな姫路さんの為に頑張りたいんだ！協力して下さい！』とか、『大好きな翔子との結婚式を成功させる為なんだ！』とか言えば、面倒だけど引き受けるのに」

「なっ！？べ、別に、そんな事は一言も……！」

「ちょっと待ってレン！俺のはどうということなんだ！？」

「あー、大丈夫よ。話はもう分かったからね。協力してあげるわ」

表情を変え、楽しげに言う。

「まあとにかく、引き受けてくれて感謝する」

「ま、気にすんな。それより、島田と木下さんって親しいのか？」

雄二に質問してみる。

「そのことに関しては、明久から聞いた方が早いだろう」

「うーん、聞いても怒らない？」

「どうせ引き受けたんだ。今更怒らないっての」

内容次第では…な。

「それじゃ、教えてあげよう。実は電話の向こうにいたのは、木下さんの声真似をした秀吉で」

「歯を食いしばれ！」

「嘘つき」

どっちが嘘つきだ！

「そうか。姫路の転校か……」

ここはFクラス。中には明久、雄二、美波、秀吉、私がいる。

「そうになると、喫茶店の成功だけだと不十分ね」

私はオンボロの教室を見渡す。

「不十分？どうして？」

明久が不思議そうな表情をしている。

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく三つ」

雄二は指を二本立てる。

「まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したら利益でなんとかできるだろう」

雄二が指を一本引っ込める。

「二つ目は老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境と言っ

面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そうだ。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい」

教室自体の改善となると、業者の出入りが必要だしね。これは明らかに私たちだけでできることではない。

「そして最後の三つ目が、レベルの低いクラスメイト。つまり瑞希の成長を促すことのできない学習環境という面ね？」

私は最後に一本だけ立っている雄二の指を、そっと引っ込めた。

「ああ。その通りだ」

Fクラスには瑞希と実力が拮抗している人物はいない。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいの」

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練ってい

るんだらう?」

確かにFクラスのメンバーと組んで優勝すれば、三つ目の問題については解決するだろう。

「この前、瑞希に頼まれちゃってね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね?」

美波の表情がいつもより優しくなる。

「翔子が参加するようだと言ったと優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう」

つまり参加したらヤバいってことね。

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

「それは言いつこなしだよ」

とか言いながら、皆こっち向いてるじゃない!

「…はあ、分かったわよ。私も参加するから」

「ホント!？」

明久、その芝居は白々しいわよ。

「ありがとう、レン！」

「ま、これも瑞希の為よ。それに私や美波や瑞希が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなって一石二鳥だからね」

「ワシらの教室は古くて汚い旧校舎にあるからの、この宣伝の効果は決して小さくないはずじゃ」
秀吉がうんうんと頷く。

「で、坂本。それはそうと、二つめの問題はどつするの?」

「どつするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ?」

雄二がさも当然とばかりに言う。

「それだけ? 僕らが学園長に言ったくらいで何とかしてくれるかな?」

「あのねえ。ここは曲がりなりにも教育機関なのよ? いくら方針と

は言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態なら、改善要求は当然の権利よ」

これで全ての問題解決への糸口は見つかった。あとは実行するだけ。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見かけたら俺たちは帰ったと言っておいてくれ」

雄二が立ち上がりながら指示を出す。こんなに自然にできるなんて、さすが雄二ね。

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子や姉上も見かけたらそう伝えておこう」

「あら。ありがとう、秀吉」

言葉に詰まる雄二をよそに、私は返事をした。

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

私たち三人は学園長室を目指して教室を後にした。

第十二問その二・交渉は強気でいくことが大事

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

ここは新校舎の一角にある学園長室の前。声が聞こえてくるから、留守というわけではなさそうね。

「どうしたの、明久」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

雄二の言うことももったもなので、私と明久はヤツについていって中に入ることにした。

「失礼しまーす！」

ドアをノックして、私たちは中に入った。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

中にいたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長。試験召喚システムを中心人物で、噂通り随分と規格外な人みたいね。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

メガネをいじりながら、教頭の竹原先生は学園長を睨み付ける。外見が外見だけに、一部の女子生徒には人気が高い。私はあんまり好きじゃないけど。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

内容についてはよくわからないけど、ただの話し合いではないことは確かね。

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですね。そこまで否定されるならこの場はさういふこと
にしておきましょう」

そう告げて竹原先生は部屋の隅に一瞬目をやり、

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

そのまま出て行ってしまった。

「んで、ガキども、アンタらは何の用だい？」

こっちもこっちでさっきまでの会話を中断されたことを気にする様
子もない。

「今日は学園長にお話があつて来ました。」

ちなみに今回の話は全て雄二に任せてある。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、
教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが礼儀ってモ
ンだ。覚えておきな」

アナタのような横柄な婆さんに言われたくありません、とツッコみたいところだけど、何とか我慢する。というか、こんな人に言われるとは世も末ね。

「失礼しました。俺は二年Fクラス代表の坂本雄二。右にるのが同じくFクラスの神谷亮。それで左にいるのがー」

雄二と私は明久を指差し、

「ー二年生を代表するバカです」

非常に分かりやすい紹介をした。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と神谷と吉井かい？」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言ってますんよね!？」

何気にさっきの言葉から、明久の眺めを連想されるとはー

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじゃないか」

学園長が悪役みたいに口の端を釣り上げる。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

あの雄二がここまで罵倒されながら、顔色ひとつ変えないなんて…。
というか学園長！アンタさっき礼儀がどうか言ってますでした？

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動が綻び始めた。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われれます」

この様子だと、雄二も相当キレてるわね。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

うん。やっぱり私の知ってるいつもの雄二ね。

「あの、学園長……?」

明久が不安そうな口振りを見せる。ま、こつという性格なら大丈夫でしよ。

(……ふむ、丁度いいタイミングさね……)

今なんて言ったのかしら?

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「それじゃ、直してもらえるってことでいいんですね?」

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「だったらこのスタンガンでババアを気絶させてからの方がいいわ
よ」

私はポケットからスタンガンを取り出す。

「……お前ら。もう少し態度には気を遣え」

あら。これは失礼。

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「今すぐお願いします、ババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？」

学園長が呆れ顔で私たちを見る。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちらいガキども」

……よし、こうなったら今懐に忍ばせてある電動バリカンでババアの白髪を全て刈り取るしか…

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

「ーと、いつもなら言っているんだけどね」

そのセリフを聞いて、懐に入れようとした手を止める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるんじゃないか」

なる程。ただで話を聞くほど甘くないわけね。

「その条件って何ですか？」

明久が話を促す。

「ただし、ここで話を聞けるのは三人までだ。それ以上は認めない」

「いきなり何を言い出すんですか？」

明久、そんなアホみたいな目でババアを見ないの。

「（との事よ。アンタはちょっと寝てて頂戴）」

『（了解）』

「さて、これで三人よ。さっさと話してくれませんか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？優勝賞品？」

明久が首を傾げている。興味がないんじゃないや知らなくても無理ないわね。特に明久は。

「確か…学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド プレオーブンプレミアムチケ

ット』が用意してあったはずよ」

ペアチケット、と聞いて雄二がピクツと反応した。もしかして…

「それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「知らない」

「明久。『乞食』よ」

「それでこの副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

ホントに学園の経営は教頭に任せているみたいね。召喚システムの開発で忙しいみたいだし。

「契約する前に気づいて下さいよ。学園長なんですよ？」

「うるさいガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

つまらない内容なただけだね、と学園長は前置きした。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやってきたカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

ふーん。大体把握したわ。確かに、両思いなら決して悪くはないでしょう。両思いなら、だけど。

「な、なんだと!？」

そして、それをよしとしない人物の一人、雄二が突然大声を上げた。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろう！今ババアが言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

「う、うん。言い直さなくても分かるけど」

ここまで動揺した雄二は初めて見たわ。珍しい。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな……」

「え？どういうこと？」

「ほんと 안타ってバカね。そんな話題性たっぷりの学校の学生から結婚までいけばジंकウスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことよ」

雄二は悔しげに唇を噛んでいる。雄二、ガンバ！

「ふむ。流石は神童や『知識の結晶』^{ヒュー・ノーレッジ}と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長の言葉に、私は顔を少し険しくした。

「え？神童はともかく、もう一つの方ってどういっつー」

「学園長、今の私は『境界無き人間』ノーボーダーですよ」

私は明久の言葉を遮って学園長に抗議した。

「そっかい。それはすまなかつたね」

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

霧島さんがそれをさせるとは思えないけどね。

「…………絶対にあいつは参加して、優勝を狙ってくる…………。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚…………。俺の、将来は…………!」

「どうしたの、雄二。まさか、約束を破ったら霧島さんとの婚姻届に判を押す、なんて約束をしちゃったとか？」

私が笑顔を浮かべながら、「冗談混じりで雄二にかまをかけてみる。

「……レン。笑えない冗談はよしてくれ……」

……
かかったみたいね。

「ま、そんなワケで、本人の意志を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

この人、本当に生徒を可愛いと思っているのかしら？

「つまり交換条件ってのはー」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやるんじゃないか。無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

え？それなら何で……

「……僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

明久。それは図々しいわよ。

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやつてもいい」

「そこをなんとかオマケして設備の向上をお願いできませんか？僕らにとつては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「それで？」

「もしも喫茶店がうまくいかずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって大会に集中できずに僕らも学園長も困ったことに……」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！設備の向上を約束してくれるなら大会だけにー」

「明久、無駄だ。ババアに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

「そついうことだから、潔く諦めなさい」

気がついたら、いつの間にか雄二が正気に戻っていた。

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

学園長はどこかの新世界の神みたいに『計画通り』といった顔をしてニヤリと笑った。

「ただし、こちらからも提案がある」

雄二がいきなり学園長に話しかけた。

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

試合の派手さを出すためにも、選手たちは一試合毎に科目を変えて戦う。もちろん科目は全員共通で。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

雄二の目つきが鋭くなる。

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……………ありがとうございます」

雄二の目つきが更に鋭くなる。この顔……。おそらく私と同じ疑問を抱いてるわね。

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろっね？」

学園長が念を押してくる。

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

雄二の表情がやる気全開のそれになっている。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

「そっちのお前はどつするんだい？」

学園長が私を指して質問する。

「それはこっちで何とかしますんで、大丈夫です」

「そうかい。それじゃ、アンタたち。任せたよ」

「」「了解っ！」「」

こうして、文月学園最低コンビが誕生した。

さて、私はアイツにでも電話してみようかしら。

第十二問その三・異性との出会いにおいて第一印象は悪い方がいい、というのは

『亮』の人格が表に出ている時には一人称が俺、『レン』の人格が表に出ている場合は一人称が私という風にさせてもらいます。

話の流れを切らないためにも突然人格が交代する事もあります。分かりにくいかもしれませんが、混乱なさないようお願いします。

m () () m

第十二問その三・異性との出会いにおいて第一印象は悪い方がいい、というのは

「はあ……。どうしようかな……」

その後、優希を召喚大会に誘おうと電話をかけたのだが、『先約がある』と言われ断られてしまった。

「（こうなったら、秀吉かムツツリー二を誘うか）」

『（いいんじゃない？私もちょうど秀吉に用事があるし）』

「（何なんだ？その用事って？）」

『（後で教えるから、今から言う物を用意して）』

「（ふ〜ん。学園長とそんな話してたんだ）」

今は私服で秀吉の家に向かっている。ちなみにアポはとってある。

『(結論から言うと、おそらくあのババアはまだ何かを隠しているわ)』

「(どういうことだ?)」

『(何故私たちにあの交渉を持ちかけたのか、という事よ)』

「(ちょうどタイミングが良かったからじゃないか?)」

『(それだったら、学園長室に優勝しそうな生徒を呼び出せば済む話よ)』

「(霧島さんや他のAクラスの人たちとかか?)」

『(ええ。わざわざFクラスの雄二や明久に話をする必要はないわ。それに科目の選択を許可するなんて、他の誰でもなく、雄二や明久に優勝して欲しいみたいよ)』

「(そうすると、チケットの回収以外にも別の目的があるかもしれないってことか)」

『(そういうこと。時期が来たら、ババアに聞かせてもらおうとするわ)』

「(そうかい。お、着いたぜ)」

俺たちの前には、『木下』と書かれた表札が掛かっている家があった。

ピンポン

インターホンを鳴らすと、家の中から人の足音が聞こえてきた。

「おお、亮か。まあとりあえず家にながらんか？こんな所よりはマシじゃろっ」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

俺は秀吉の家にながらせてもらうことにした。ちなみに姉の方はクラスの出し物の準備で今日は帰りが遅くなるんだそうだ。

「して、ワシに用とは何じゃ？学校では無理なのか？」

「悪いが学校では無理だ。皆がいるし、何よりこれを使うからな」

「これは…録音機かのう？」

俺が取り出したのは、先程レンに言われて家から持ってきた、携帯型の録音機だった。

「…ふう。こんなもんでどうじゃ？」

「ありがとう秀吉。予想以上の出来上がりだ」

「それじゃ、お茶でも飲まぬか？」

「サンキュー。それじゃ、お願いするぜ」

「うむ。承知した」

そう言い秀吉は台所に向かった。

「はあ…ん？」

一仕事終えてリビングでほっこりしていると、開封済みの一冊の本が目に入った。

「なんだこれ？」

気になったので早速中を見てみることにした。

「お茶が入ったぞい……っってお主、何をしておる!？」

「見ての通り読書だけど?」

秀吉の顔色が悪くなっていく。

「秀吉…いくら皆から女扱いされてるからって、趣味まで女になりきることは無いんだぜ?」

そう、俺の手には一冊のBL本があるのだ。まさか秀吉にこんな趣味があるとは…

ガチャッ

「ただいま」

何だと!?

「秀吉!木下さんは今日は帰りが遅いんじゃないのか!？」

「ワシにも分からん!とにかく隠れるのじゃ」

俺は本を持ったまま急いで近くの物置の中に隠れた。

『ただいま〜秀吉』

『あ、姉上。今夜は遅くなると聞いたんじゃない？』

『予定より早く作業が終わったから、その分早めに帰ってこれたの』

ちいっ！何でこんな日に限って…

『あれ？おかしいな〜』

『どっしたのじゃ〜？』

『ここにあった本、どこにあるか秀吉知らない？』

『さあ？知らんぞ』

そんな会話に混じって、シュル…パサ…という衣擦れの音が聞こえてきた。何だ？扉の向こうでは一体何が起きているんだ？

『あれ〜？どこにやったかな〜？』

ボタンというドアが閉まる音がして、声が遠ざかるのを確認して俺

は外に出た。

「おま、どつするんじや？」

「仕方ない、こうなったらさっさと帰らせてー」

ガチャッ

「秀吉。こんな感じの表紙なんだけ……ど……」

帰るべくドアに向かおうとしたら、再び木下さんがその手に俺が見つけた本と同じタイトルのヤツを持って部屋に入ってきた。

しかも下着姿で。

さて、ここでクイズだ。何故に下着姿？

風呂に入るためか？

いや、本の搜索をしていたみたいだから違うだろう。

じゃあ着替えるためか？

それならさっきの間に来ただろう。

となると、俺の中には選択肢がもうあと一つしか残されていない。

こういう人を何て言うんだっけ？

リゾ……………リラ……………

「姉上のことならズボラじゃな」

「そう！それが言いたかったんだ！」

「というか秀吉。何気に俺の心を読まないでくれ。」

そのうち『神谷ボーイ』とか言うんじゃないだろうか？

「そんな事は言わぬ」

「また読んでるし……。」

「秀吉。これはどういついづことかしらっ。お姉ちゃん聞きたいんだけど」

「？」

木下さんが秀吉の腕の関節を抱きしめながら聞いている。

「これはじゃな、事情というものが……あ、姉上！違っ！その関節はそんな向きには曲がらなっ……………！」

ドサリ

そんな音と共に、秀吉は崩れ落ちた。

「（レン、どっしょっか？）」

『……………（……………）』

いかん！さっきの本のせいでレンが処理落ちしかけていやがる。

実はレンはBLEMOを見ると、例外なくこういう状態に陥ってしまうのだ。

「さて、今度こそ逃がさないわよ。神谷君？」

気づくと俺の腕の関節がロックされていた。

「何か言い遺すことはある？」

あれ？俺、ここで死ぬの？それじゃあ……

「え〜っと……スキとか二面性があった方が、フジ子ちゃんみたいな魅力的な大人になれるんだよギヤアアアッ！」

俺の右腕が、文字通り悲鳴を上げていた。

「全く…来るならちゃんと言いなさいよね」

言ったら俺が死にます。ちなみに木下さんは今はジャージ姿である。

「それで、何の用なの？」

「いや、もう済んだから、そろそろ帰らせてもらっせ」

秀吉を召喚大会に誘うのはまた今度にしよう。そう思いドアを開けて帰ろうとしたとき、

「ちょっと待ちなさい。私もアンタに用があるの」

腐女子でズボラな木下さんに声をかけられた。

「……今アンタ失礼なこと考えてなかった？」

「イエ、メツソウモナイ…デ、ヨウツテナニ？」

「アンタ、私と組んで召喚大会に出てみない？」

……はい？

「どうしたんだ？いきなり」

「いや、私も召喚大会に出ようと思ったんだけど、一緒に出る相手がいないのよ」

「霧島さんは？」

「代表はもうペアを組んだから、一緒に参加は出来ないみたい」

ん？待てよ。まさか…

「霧島さんのペアって、もしかして優希か？」

「ええ。桂さんよ」

なんてこつたい……。

あの二人が組んで参加するとは。こりゃ優勝するのは大変だな。

「何だ？如月ハイランドに誰かと行きたいのか？」

「そうじゃなくて、私は白金の腕輪の方に興味があるの」

噂によれば、白金の腕輪には何か特殊能力がついているらしい。おそらくそこに惹かれたのだろう。

「というわけで、一緒に出てくれるよね？」

「人の左腕の関節をロックしながら言うセリフじゃないと思うけどな」

というか、いつの間にロックされたんだ？

「出てくれるよね？」

「分かった！一緒に出るから、関節をあらぬ方向に曲げるのは止めてくれ！」

「じゃ、決まりね」

ここに、文月学園最大の凸凹コンビが誕生した。

大丈夫かなあ……………？

第十三問その一・見える！光のゲート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールをー』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

神谷亮の答え

『護身用の暗器を忍ばせておくことが出来る服』

教師のコメント

せめて学園祭の時くらいは平和に過ごして下さい。

「ふう……。これで完了だな」

清涼祭初日の朝。

俺たちの教室にはいつもの小汚さはなく、中華風の喫茶店になっていた。

「このテーブルなんて、ぱっと見は本物と区別がつかないよ」

明久がテーブルを指す。

実はこれ、みかん箱を重ね、その上に綺麗なクロスをかけたものだ。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

姫路が尊敬の目で秀吉を見ている。

なるほど。これ、演劇部の小道具か。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、見慣れた汚い箱があった。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

島田の言う通り、こんなみすばらしいみかん箱を見られたら、イメージダウンは免れない。

「きっと大丈夫だろ。こんなところまで見ないだろうし、見てもその人の胸の内にはしまっておいてもらえるって」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きっと」

もしいるなら、営業妨害でしかないだろう。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

ま、これならまず大丈夫だろう。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

明久の後ろにいつの間にかムツツリーニがいた。正直全く気づかなかった。

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

ムツツリーニが差し出した木のお盆には、陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路、島田、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「やっぱり女の子。甘いものが好きなんだなあ、三人とも」

明久、秀吉は男だぞ。

「お茶も美味しいです。」

「本当ね……………」

姫路と島田の目がトロンと垂れる。こりゃあまりの美味しさにトリップしているな。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「俺も」

「……………（コクコク）」

皿に残った二つの胡麻団子を明久は一口、俺は一個丸々頬張った。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつてもーんゴパっ」

俺たちの口からありえない音が出た。目がグルンと垂れて白目をむき、姫路らとは違う意味でトリップする。そして俺の目の前には不思議な光のゲートが現れ、天使が俺を迎えに……って、今のは天国への扉だ！

「あ、それはさっき姫路が作ったものじゃな」

「……………！！（グイグイ）」

「……………」

「む、ムツツリーニに亮！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」

俺とムツツリーニで明久の団子の残り半分をヤツの口の中に押し込もうとする。食べ物は残しちゃダメなんだぜ？

「うーっす。戻ってきたぞ」

ちょうど雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ」

そして何の躊躇いもなく、明久の食べかけのバイオ兵器を口に運んだ。

「……………たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「お前は漢の鑑だ……」

「？お前らが何を言っているのかわからんが……。ふむふむ。表面

はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつてもーんゴパっ」

あ、何か既視感^{デジャヴ}。

「あー、雄二。とつても美味しかったよね？」

「そりゃそつだよな？」

俺と明久で、床に倒れ伏した雄二に対して『これは姫路^{さん}の料理だよ。まさか酷いことなんて言わないよな（ね）？』と目で訴える。目が合っていないけど、ちゃんと伝わったのか？

「ふつ。何の問題も無い」

ちゃんと伝わったのか？

「あの川を渡ればいいんだろう？」

それはおそらく三途の川だな。

「ゆ、雄二！その川はダメだ！渡ったら戻れなくなっちゃう！」

「帰ってこい、雄二！」

まさかあの一口で致命傷とは…。相変わらず恐るべし、姫路の料理。

「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

夢見心地だった姫路がようやくこっちの様子に気づく。どうやら見られていないようだ。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

「大丈夫だよ、ちょっと足が攣っただけみたいだから。おい、ゆーじー、おきろー」

「ほら、しっかりしろー」

とりあえず、おどけた口調で明久は雄二を起こす仕草をして、俺は顎をペチペチと叩く。

ただし、明久の手は必死に心臓マッサージ、俺の手は迅速な気道確保をしながら。こうなると生死は五分五分だな。

「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まってーはっ！？」

蘇生成功。こうしてまた一つ、尊い命が人知れず救われた。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

明久がすかさず畳み掛ける。フラインプレーだ！

「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子のー」

「そうかそうか。そんなにもう一つ食いたいか…」

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

俺の小声の脅迫に対し、雄二は直ぐに屈服してくれた。良かった。雄二が頭の回転が早い奴で。

(……明久に亮、いつかキサマを殺す)

(……へえ)。それは楽しみだな)

(……上等だ。殺られる前に殺ってやる)

笑顔を貼り付けて小声のやり取り。こんな俺らは仲良し三人組。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

マズい。以前と同じ状況を島田が怪しんでいる。

『明久、ここは任せた』

アイコンタクトで明久にそう送ると、ヤツは分かっただらしく、

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういう身体
って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐ
べあっ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」

アホなことを言って島田の拳を受けていた。

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

秀吉が自然に話題を逸らす。

「ああ、ちょっと話し合いにな」

実は学園長室に行つて例の試験科目の指定をしてきたところだ。でもそんな事を言うわけにはいかないの、雄二は適当にこまかしていたのだ。

「そうですか。それはお疲れ様でした」

姫路の人を全く疑わない性格では、将来がちょっと心配になつてきた。

「いやいや気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

姫路製の飲茶が混ざつてない事を祈ろう。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリー二とレンに任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな。亮、それでいいか？」

そう言い、秀吉とムッツリーニと俺の肩を叩く。

「俺は別に構わないぜ」

そう言って、レンと人格を入れ替わった。

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

確認するように明久を見る美波。

「え？あ、うん。色々あつてね」

明久は適当に言葉を濁している。あのババアから裏事情は話すなつていわれてるしね。

「もしかして、賞品が目的とか？」

美波の視線が何かを探るそれになる。

「うん。一応そういうことになるかな」

そう言えば、白金の腕輪って召喚獣を二体同時に喚び出せるタイプと、先生の代わりに立会人になれるタイプの二つがあるんだっけ？

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

明久を見る美波の目がスツと細くなる。返答次第で殺る気ね。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くことかと思っていましたんですか？」

あらまあ気付けば瑞希まで。

「だ、誰と行くって言われても……」

明久が答えに詰まっていると、

「明久はレンと行くつもりなんだ」

雄二が訳の分からないフォローを入れた。

「え？神谷とペアチケットで、『幸せになりに行くの……？』」

美波が驚くのも無理はないわ。なぜなら、私も今知った驚きの新事実なんだから。

『雄二！どっいごうとっ！』

私はアイコンタクトを送ると、

『明久をハメろ』

と返ってきた。

（明久、堪えなさい。事情を知られたら、ババアに約束を反故にされるわよ）

明久に小声でメッセージを送り、

「私は何度も断ってるんだけどね」

あっさり裏切った。

「アキ。アンタやっぱり、木下や坂本よりも神谷の方が……」

「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引っかかる！それと秀吉！少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」

また明久の誤解が増えた気がするけど、どうせたくさんあるから気にしなくても大丈夫でしょ。

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

まるで小悪党の捨て台詞のような弁明をしながら、明久と雄二は教室を後にした。

「さてと、それじゃあ私たちは喫茶店をー」

ガシッ！

あれ？肩が動かない。

「神谷、さっきのペアチケットの話なんだけど……」

「まだ少し時間がありますし、ゆっくりと聞かせてもらいますよ」

「あ……あはは……」

「こういうのは明久の役割なんだと思うんだけど……」。

第十三問その二・パートナーと息が合ってもコンビネーションがバツチリと

あの後二人の尋もーじゃなかった、質問をやりわりと退けた後、
Aクラスに向かっていた。

「そろそろ俺らも召喚大会の時間だからな」

そう、もうすぐ俺らの試合なので、パートナー（？）である木下さん
を呼びに来たのだ。

「うーん、これは何なんだ？」

そこはいつもとは違い、【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】
という名前で存在していた。

「メイドなのか主人なのかどっちなんだ？」

そんなことをばやきながらドアを開ける。

「……おかえりなさいませ、ご主人様」

俺を出迎えてくれたのは、メイド服姿の霧島さんだった。

彼女の長い黒髪に白いエプロンドレスや黒のストッキングがとてもよく似合っている。

「……どうしたの？」

「んじゃ!？」

霧島さんに見とれていたもので、間の抜けた返事をしてしまった。

「悪いけど、木下さんいる？」

「……ちょっと待ってて」

霧島さんはそそくさと店の奥に消えていった。

「しかし、すごい豪華だな……」

教室の中はお客さんで一杯になっていた。

「……………こっち」

「どうしたの代表？私にお客さんって…」

声のした方に顔を向けると、メイド服を着た霧島さんと木下さんがいた。

「ねえ神谷君、どうしたの？」

木下さんのメイド服姿は、霧島さんとはまた違った魅力がある。いつもはあんなにバイオレンスなのに…

「……………馬子にも衣装だな」

「アンタ、後で覚えてなさいよ」

はっ！？まさか口に出ていたのか？

「それより、もうすぐ試合だから早く行こっぜ」

「着替えてくるからちよつと外で待ってて」

ここにおいても仕方ないので、店の外に出ることにした。

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

一回戦の科目は数学になっている。

「よし、行くぞー!」

「おう!」

相手はやる気満々のようだ。対するこっちは、

「神谷君、私の邪魔をしたら、どうなるか分かってるわよね？」

「さあ、全く分からないな」

こっちはこっちで殺る気満々のようだ。

「では、召喚して下さい」

「「試獣召喚っ！」」

相手の二人が喚び声をあげると、相手の召喚獣がその姿を現した。

□Cクラス

上野和夫

&

Dクラス

小田康二

数学

152点

&

105点
『

「「試獣召喚」」

俺たちも召喚獣を喚び出す。そう言えば木下さんの召喚獣を見るのはこれが初めてだな。

「Aクラス

木下優子

&

神谷亮

数学

359点

&

326点
『

「おいおい……」

「こんなのアリかよ？」

ちなみに俺の召喚獣は全身黒づくめにビームソード、木下さんの召

喚獣は、姫路みたいな西洋の鎧に大きなランスだった。

俺たちの点数を見て、相手がおののく。

しゃーない。こうなったら…

「それでは始めて下さい」

先生の言葉で試合が始まった。

「とにかく、やるしかねえ！」

「「覚悟しろ！」」

相手が戦闘態勢をとる。

「木下さん！」

「神谷君！」

「この試合はアンター一人でよろしく」

俺たちは揃って後退した。

「いやいや、ここは木下さんに任せるよ。こんな奴ら、アンター一人で充分だろ？」

「それはこっちのセリフよ。私はここは点数を温存して次に備えるわ」

「いや、次は違う科目だぞ。温存する意味がないぜ。というわけでいつもみたいにバイオレンスに殺っちゃえよ」

「嫌よ、あんな人たち相手には！というか、誰がバイオレンスですって!?!」

「……さっきから聞いてりゃバカにしゃがって……。おい小田、やるぞ!」

「ああ。目にももの見せようぜ、上野」

「喰らえっ！……！」

「邪魔すんな（しないで）！！！！！」

俺は一体の召喚獣を切り裂き、木下さんはもう一体を突き刺した。

「え〜っと…勝者、木下・神谷ペア」

先生は、どこか釈然としない様子だった。

そして俺たちと言えば、

「あーもう！うるさいわね！」

「木下さん！違っつ！その関節はそっちには曲がらなっ……………！」

いつも通り木下さんが俺の関節を痛めつけていた。

「死ぬかと思っただ……………」

ようやく木下さんから解放されて教室に向かっていると、

『吉井君に坂本君！今日という今日は、許しませんよ！』

『明久、走れ！捕まったら生活指導室行きだぞ！』

『鉄人の根城！？冗談じゃない！』

そんな声と共に、テーブルを背負った雄二と明久、それを追う布施先生と長谷川先生が俺の横をビュンビュン通り過ぎていった。

「何やってんだよ……」

俺が雄二たちを追いかけて走り出すと、

バキッ

嫌な音が足下から聞こえた。

目を向けると、先ほど飛ばされた布施先生の携帯電話がお亡くなりになっているのが見える。

「神谷君！なんて事をしてくれるんですか！」

「違います！これは事故なんです！」

何故か俺まで先生に追いかけられるはめになった。

「はい？営業妨害？」

「うむ。そつなのじゃ」

教室に帰った俺は、秀吉から驚きの事実を聞いた。

「しかし、学園祭ぐらいで営業妨害が出るなんて、どつなってるんだ？」

「さあ？今のところは分かん」

後ろから雄二が答えた。

「そう言えば、お前らそろそろ二回戦じゃないのか？」

「ああ。行ってくる」

教室を後にした雄二が手に持っていたのは、門外不出の根本恭二個人写真集『生まれ変わったワタシを見て！』だ。

ちなみにこれは、この間の試召戦争で負けた根本を脅迫して撮影した、彼の女装写真集だ。正直、見てと言われても見たくない。

「根本、ガンバ……」

俺はこれから彼の身に降りかかる不幸を思い、彼に同情の祈りを捧げた。

第十四問その一・僕らは昔、宇宙刑事に愛とは躊躇わないことだと教わった（前

明「ねえ、亮。ちょっと聞きたいことがあるんだけど？」

亮「なんだ？明久」

明「前にホルモンバランスがどうか言ってたけど、『亮』と『レン』のそれぞれの人格の時のホルモンバランスってどんな感じなの？」

ム「……………詳しく聞かせろ」

明「ムツツリーニ！？いつの間にここに？」

ム「……………いいから早く」

亮「そうだな…。俺の時の男性ホルモンと女性ホルモンの比が5：5で、レンの時間が1：9つてところだな」

明「それってもう半分以上は女なんじゃないの!？」

ム「……………（ブシャアアアアッ）」

亮「おい、ムツツリーニ！大丈夫か!？」

明「もうこれ絶対致命傷だよ？」

ム「……………先に……………逝く……………」

明・亮「ムツツリーニイイイイッ!」

第十四問その一・僕らは昔、宇宙刑事に愛とは躊躇わないことだと教わった

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace - Keeping Operations (平和維持活動)の略。国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくといいでしょう。

350

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsuki Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

神谷亮の答え

『Perfect・Knock・Out の略』

教師のコメント

それはボクシングです。

あの後俺たちも二回戦があったが、一回戦同様あっさり勝って、教室に戻ってきた。

「ただいまー…って、あんまお客さんいないなあ…」

テーブルは綺麗なのだが、喫茶店の中にお客さんは殆どいない。

「あ、亮。おかえり」

「試合はどうじゃった？」

「もちろん勝ったさ。ってあれ？雄二は」

「トイレに行ってくるってさ。」

雄二のヤツ、随分暢気だな。

そうやって三人で話していると、

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「雄二のヤツが戻ってきたみたいだな」

「うむ。そうみたいじゃな」

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

教室の扉が開き、雄二が入ってきた。話し相手の子は、雄二の陰になっ
ていて見えない。

『お、坂本。妹か?』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない?』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

黙れ、そのナンパ野郎にロリコン野郎。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

どうやらこの子は人探しをしているようだ。

『お兄ちゃん?名前はなんて言うんだ?』

『あつ……。わからないです……』

『?家族の兄じゃないのか?それなら、何か特徴は?』

驚いた。雄二って意外と子供好きなんだな。

『えっと……バカなお兄ちゃんでした!』

なんて凄い特徴なんだ。

『そうか』

雄二が該当人物を探す。

『……………沢山いるんだが？』

否定できなきやする気もない。

『あ、あの、そうじゃなくて、その……………』

『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その……………すつごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

泣くな、明久。

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違いー」

「あ、バカなお兄ちゃんだっ！」

小さな子は、いきなり明久に抱きついた。

「絶対に人違い、がどうした？明久」

「……人違いだと、いいなあ……」

明久の目が遠くを見ている。

「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

あーあ。泣かせちゃったか。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

大事な事なので二度言おう。泣くな、明久。

「明久ーじゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめん？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。」

「なんせバカなお兄ちゃんだからな。バカじゃないワケがない」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにー」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ぶあっ!?!」」

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

「あれは半端無い速さだった…」

俺と雄二は至って落ち着いている。

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「「こ、こうですか？」」

このままじゃ明久のヤツ、死ぬんじゃない？

「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然ー」

「ふえええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う。それと神谷、今カッターナイフどれくらい持つてる？」

「今はこれくらいだな」

俺はポケットから十本ほどのカッターナイフを取り出す。

「亮！すんなりとカッターを取り出さないでよ！」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいつ！」

姫路、口とは限らないぞ。もしかしたら頬かもしれないのだから。

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい」

「島田、せめて一本にしてやってくれないか？明久が可哀想だ」

「あのね、美波に亮。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

大丈夫だ。運が良ければそうはならない。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

葉月ちゃんだっけか？…が島田を見てそんな事を言った。

「ああっ！あの子のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

どうやら明久には思い当たる節があるみたいだ。

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「というか、よくバカなお兄ちゃんの学校がわかったな？」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

そう言って葉月ちゃんは明久の制服を引っ張る。

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、葉月はウチの妹だもの」

「へ？」

そうか、島田の妹か。どつりでどこか似てるわけだ。

「吉井君はズルいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり……」

「姫路、とりあえず落ち着こうな」

姫路もいい具合に壊れてきている気がする。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとうでしたっ
「！」

葉月ちゃんって礼儀正しいんだなあ。学園長にも見習ってもらいたい。

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる?」

「はいですっ! 毎日一緒に寝てます!」

おや? 姫路とも知り合いらしい。何があったんだろう?

「良かった。気に入ってくれたんだ」

姫路が嬉しそうに微笑む。なんだか俺の周りには子供好きの人が多いな。俺も嫌いじゃないんだが、接し方がどうもよく分からない。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ?」

おっと、そう言えばそうだった。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ?」

「ん? どんな話だ?」

雄二が屈み込んで葉月ちゃんの目線に合わせる。

「えつとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

よく分からんが、さっきの営業妨害とやらの続きなのか？

「ふむ……。例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ？まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

えくつと、秀吉から聞いた話によると、営業妨害をしたのは常村とかいうモヒカンと、夏川とかいう坊主の二人組だったはずだ。

しかし、常夏コンビとはうまいネーミングだな。

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「だな。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

小学生の葉月ちゃんが聞いたぐらいだ。どこまで広がっているのか
正直不安でならない。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させ
なきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

明久が葉月ちゃんの頭を撫でている。

「む〜。折角会いに来たのに〜」

「なら、葉月ちゃんも一緒に行ったらどうだ？」

「そうだな。飲食店をやっている他のクラスの偵察する必要もある
からな」

俺の提案に対し、雄二からのフォローが入る。

「ん〜、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

先ほどまでの膨れ顔とは表情が一転して満面の笑みになる。文字通りの天真爛漫である。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調がいつもと違って優しい。優しいお姉ちゃんんでいるんだなあ。

「ふむ。ならば姫路と亮と雄二も一緒に行くといいじゃろ。召喚大会もあるじゃろっし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「お言葉に甘えさせてもらっせ」

「いいんですか？ありがとうございます。木下君」

これでトータル六人。学園祭の会場を歩き回るには結構な人物だ。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えっとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店ー」

「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！我がクラスの成功のために、（低いアングルから綿密に調査しないと！というわけで、」

「亮！」

「「お前も来い！！」」

そう聞いた瞬間、俺の視界は横になっていた。

何故かって？

そりゃ、明久と雄二に抱えられて強制連行されたからだ。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

おかげで背後から明久の罵倒を聞きながらその店に向かうことになった。

と、いつか、その店がどこにあるのか果たしていつから知ってるのか？

第十四問その二・どんな形であれ、人から貰った食べ物はいより美味しい

「明久、ここはやめよう」

「雄二の言う通りだ。ここは危険過ぎる」

「二人共、ここまで来て何を言っているのさ！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！！」

目的地は、さっき俺が来たAクラスのメイド喫茶だった。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんと神谷の大好きな木下さんがいるクラスだもんね」

「坂本君に神谷君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

俺と雄二が逃げ出す前に女子三人が追いついてしまった。

「とうつか島田、今の発言はどういうことなんだ？」

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだからー」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

俺たちの目の前には、指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が一人。

「……………もしかしくなくても、ムツツリーニか？」

「……………人違い」

厨房責任者のクラスメイトはカメラ片手に、バレバレにも関わらず否定のポーズを取っていた。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……………敵情視察」

コイツは敵情視察としてローアングルから女子を撮影する方法をとるらしい。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可哀想だトー」

「……………一枚百円」

「2ダース貰おうー可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

さすが明久。なんて自然そうに見えてバレバレな注文なんだ。

「……………そろそろ当番だから戻る」

ムツリーニは明久に写真を渡して教室の方に去っていった。いつの間にプリントアウトを済ませたのか、謎だ。

「まったく、ムツリーニにも困ったもんだね」

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

明久はさりげなく写真をポケットにしまったが、端から見ればバレバレだ。

「それよりそろそろ店に入るうぜ。こんな所においても迷惑だしな」

その時、明久から『グッジョブ』というアイコンタクトが送られてきた。

ふっ。俺がそんなに良いヤツだと思っなよ。

「それで明久、結局その写真はどうするんだ？」

店のドアを開け、姫路や島田に聞こえる程度の音量で明久に聞く。

「やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないかー写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですかっ！」

「ごめんなひゃい！くひをひっぱらないで！」

明久は姫路に頬をつねられ、葉月ちゃんに腿をつねられていた。モテるってつらいね。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手で中に入る。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えてくれたのは再び霧島さんだった。

「わあ、綺麗……」

姫路が感嘆の声を漏らす。確かに、何度見ても綺麗だ。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれー！」

明久と姫路と葉月ちゃんが中に入ると、

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と出迎えてくれた。

「……チッ」

雄二も渋々入店する。霧島さんは同じように、

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

ちよつとアレンジされていた。

「……ハア」

そして俺が最後に入店すると、

「おかえりなさいませ。サービスとして全身の関節を逆方向に曲げさせていただきます」

これまたちよつとアレンジされていた。

といつかちよつと待って！

いつの間にか一人増えてない？

「霧島さんに木下さん、大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……！」

「あのお姉ちゃんたち、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

姫路。木下さんの方は大胆じゃなくてバイオレンスなだけだ。

島田。お前は見習って明久をどうするつもりなんだ？

葉月ちゃん。君はせめてその純粋な思考をいつまでも持っていてくれ。

「お席にご案内いたします」

俺たちは霧島さんの後に続いた。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島さんから渡された立派なメニューを見る。すると、端っこの方に書いてある文字に目がいった。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

…ここはあえていくしかない!

「俺は『カロリーメイト』で」

あれ?どこからか『今です!』って聞こえた気がする…。

「んじゃ、俺はー」

「……ご注文を繰り返します」

霧島さんが遮るように声をあげる。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『別室にてメイドにあくししてもらえるカロリーメイト』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞつ（ないんだけど）！？」

なんだか身に覚えのないサービスが追加されてる！？

「……では食器をご用意致します」

女子三人のところにはフォークが、明久の前には塩が、雄二の前には実印と朱肉が用意された。

「しよ、翔子！コレ本当によちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

「え、ちょっと霧島さん!?俺は『メイドさんにあぐんしてもらおうなんてサービスは頼んでないよ!?!?』」

「それは、お客様がカロリーメイトを注文された記念すべき三人目だからです」

別のメイドさんが説明してくれた。

何故か木下さんの声で。

というか、本人そのものだった。

「それでは、こちらにどうぞ」

ちよつと待って！そもそも『三人目』って何？普通は一人目とか十人目とか、そういうきりが良い数だよな？

「え？ストップ！俺はまだ生きていたい！」

そんな俺の抵抗もむなしく、俺は木下さんに店の奥に連れて行かれた。

「（……………ヤバい、マジでヤバい）」

『（もう男らしく腹をくくったら？）（』

「（俺に死ねと？）」

きつと木下さんはさっきの俺の『馬子にも衣装』発言での怨みを発散するつもりなんだろう。

そして俺は全身の関節を逆方向に曲げられるんだろう。

「それでは……」

ついに来るか！

そう思い、来たるべき痛みに耐えるために覚悟を決めたていたら、

「……………あ〜ん」

……………へ？

あれ？目の前には三途の川という俺が予想した風景ではなく、俺の好きなチョコレート味のカロリーメイトを俺の口元に寄せている木下さんがいた。しかも顔を真っ赤にして。

「ほ…ほら、早くしなさいよ。いつまでもこうやってるの恥ずかしいんだから…」

そう促され、口を開ける。

すると、その中にカロリーメイトを突っ込まれた。

もぎゅもぎゅ

「ご主人様、おいしいですか？」

「あ…ああ……」

喫茶店とはいえ、いつものバイオレンスな木下さんとは違ってなんか…こっつ…おしとやかな感じがした。

「あれ？明久と雄二は？」

なんだかよく分からない時間をしばらく過ごした後で戻ってみると、何故か女子三人しかいなかった。

「アキはちょっと着替えに外へ出て、坂本も作戦の為に外へ出たわ」
作戦？一体何のことだろう？

そう思い店を見回すと、

『それにしても、二ーFクラスの中華喫茶のテーブルは汚なかったな』

『汚い箱でウジがわいてたもんな』

……………上等じゃねーか。

『（亮、アイツらに手を出しちゃダメよ）』

『（どづいうことだ？）』

『（さっき聞いた作戦よ。アイツらは明久たちがなんとかしてくれるわ。それより今はー）』

「（ああ、アレをやるんだろう？）」

俺は懐から一枚の紙を取り出した。

そしてテーブルの上に放置されている雄二の家の実印を朱肉に押し付け、俺の紙に判子を押し、ポケットの布で判子を拭いて綺麗にした。

この間わずか0.5秒。それに店内の客の視線は、突如現れた謎のメイドに向いていたので、バレることはなかった。

「くっ！行くぞ夏川！」

モヒカンの方が逃げ出した。

「こ、これ、外れねえじゃねえか！畜生！覚えてろ変態めっ！」

坊主の方は頭にブラをつけたまま走り去って行った。それより、あなたも充分変態です。

「逃がすか！追うぞアキちゃん！」

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

この声、まさか明久か？

雄二とアキちゃんはそのまま常夏コンビの後を追って店を出て行った。

『（亮！私たちも追うわよ！）』

「（了解！）」

「皆！後で返すから会計よろしく！」

俺も四人を追いかけて店を飛び出した。

『……お会計は、夏目漱石を二枚か、坂本雄二、神谷亮の一名ずつのどちらかとなります』

『坂本雄二、神谷亮の一名ずつでお願い』

『……ありがとうございます』

おい、俺たち一人千円で売り飛ばされたぞ。

そして四人を追いかけて、三丁Aの『迷路風お化け屋敷』に向かった。

「いらっしやいませ。二名様ですね？」

「いや、三名だ。金は後ろの奴が払う」

雄二の野郎！何の躊躇いも無く俺に会計を押し付けやがった！

「それではお客様。三名様で600円になります」

「……………はい」

「ありがとうございます」

そして会計を払った後、明久と雄二が中から出てきた。

「あ！雄二に明久！待ちやがれ！」

「走るぞアキちゃん！」

「ああもう！今日はこんなもっさりだ！」

俺は走って明久たちを追いかけながら教室に戻った。

第十五問その一・チャイナドレス姿の女性は男の永遠の夢!…なのか?

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか?』
【?可愛らしさ ? 統率力 ? 行動力 ? その他(

)】
【また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【?可愛らしさ】 候補: 姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【?可愛らしさ】 候補: 姫路瑞希(x) 木下秀吉(x) 島田美波』

神谷亮の答え

『【?その他(バイオレンスさw)(x)(?)可愛らしさ】 候補: 木下優子』

教師のコメント

二人の用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄二の答え

『【?その他(結婚相手)】 候補: 霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

「で、どっちも三回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ。亮の方は？」

「こっちは相手の一人が急に風邪をひいたんだって」

食中毒だった？まさか…うちの店じゃないよな？

「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか？」

自分が悪いわけじゃないのに、秀吉が申し訳なさそうな顔をしている。

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやらなくちゃな」

教室の中は空席だらけで、このままではうまくいくとは到底思えない。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

「雄二にレン、何かアイデアはある？」

え？私？

「私は無いわ。雄二は？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

雄二の手には、刺繍も見事な水色と白のチャイナドレスがある。作ったのはおそらくムッツリー二ね。

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじゃろつな。コレを宣伝用にする」

王道だけど、悪くない作戦ね。

「ああ。コレをー明久が着る」

インパクトの新境地に達しそうな気がするわ。

「ちよっ……！お願い、許して！メイド服の次にチャイナまで着たら、きつと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

そうなったら灰色の学園生活は免れないわね。

「冗談だ。これは秀吉とレンと姫路と島田に着てもらおう」

「あ、なんだ。良かった」

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう……？」

明久。アンタは何でそんな『何をバカなことを言っているのやら』って顔をしているの？

「たっただいま〜！って、なんだ。アキつてばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ……残念です。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月、もう一回見たいな」

ちょうど女子三人が帰ってきた。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ?」

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらっぞ」

私と秀吉が着るのは確定事項みたいね……。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……?」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

この二人のチンピラは何なの?

「やれ、明久」

「オーケー!へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あつ!マジすんませんでした。自分チョーシくれてましたっ!」

「弱いな、お前……」

「というか、バカでしかないわね……」

相変わらず美波の攻撃力は高いわね。

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

「店の宣伝の為に、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

後半部分は全く聞いてないん新事実なんだけど！？

「大好——愛してる」

「……アンタって本当に嘘をつけないヤツね」

言い直す意味が全く無いわ。

「し、仕方ないわね。店の売上げの為に、仕方なく来てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

瑞希と美波がそれぞれ服を手取る。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうどいい！」

あら。意外な助っ人の登場ね。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの方は数か——」

「……………！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムツツリーニ！どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？っていつかさっきまでいなかったよね！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

セリフだけなら格好いいはずなんだけど、今は凄く格好悪い気が……。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

もつすぐ瑞希たちの試合なのかしら？

「いや、今着替えてもらいたい」

「」「え？」「」

思わず私まで声が八モる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

という事は…

「雄二…もしかして私も…？」

「ああ。お前も次の試合からチャイナドレスで出てもらう」

やっぱりね…。

「こ、これを着て出場しろって言うの……？」

「流石に恥ずかしいです……」

二人ともチャイナドレスを手に困った顔をしている。ま、無理もないわね。私も少し恥ずかしいし……。

「三人とも、お願いだ」

明久が頭を下げてきた。

「明久……。お前は本当にーチャイナが好きなんだな……」

つて明久。否定しないの!?

「私は構わないわよ」

私はいち早く返事をした。

「もしかして吉井君、私の事情を知ってー」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

美波が瑞希の言葉を遮り、色よい返事をする。

「あ。は、はいっ！これくらいお安い御用です！」

瑞希も快諾。これで決まりね。

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

これなら宣伝効果は絶大ね。

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

二人はチャイナドレスを抱えて教室を出て行った。

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いです！」

どうやったたら数分もせずにチャイナドレスが出来るの？

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「そうね。早いところ済ませちゃいましょ」

「ちよ、ちよつと秀吉にレン！ここで着替えるの！？きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ！」

いきなり明久に止められてしまった。

「いいじゃない、別に」

「ダメだよ！二人とも女の子なんだから！」

「でも、瑞希みたいにグラマーでもなく、美波みたいにスレンダーでもない私の身体を見ても欲情する人なんてここにはー」

「いるよ！現にムツツリーニが鼻血をだしているんだから！」

傍らには、鼻血の海に沈みかけているムツツリーニがいた。

「さ、早くレンも秀吉も女子更衣室に！」

「……最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじゃないが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「うん。雄二の言つとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』なんだから。男とか女とかじゃないさ」

「……俺が言ったのはそういうことじゃない」

明久の中ではどういふ解釈をしているのかしら？

「んしょ、んしょ……」

「……………！！（ポタポタポタ）」

「は、葉月ちゃん！キミもこんなところで着替えちゃダメだよ！ムツツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

大量に出血しているのに、鼻を押さえているムツツリーニは心から幸せそうだった。

と、いつか、出血多量で死にそうなのもするんだけど…。

第十五問その二・交渉では物を用意しろ！素寒貧なら闘牌伝説みたいに他人を差

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

瑞希と美波が戻ってきた。

「丁度良かった。二人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれない？」

二人が大会に向かった後、私と秀吉と葉月ちゃんはチャイナドレスに着替え、明久や雄二と一緒に校舎内を歩き回った。最初はあまり効果が無いように思えたけど、徐々にお客さんが増えていった。

「良かった。段々持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

私はハズレを引いたから知らないけど、飲茶は相当美味しいみたいね。

「私これから四回戦だから、二人ともウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オツケー」

私はそのまま試合会場に向かった。

「それでは、四回戦を始めます。出場者は前へどうぞ」

今回の私たちの相手は、霧島さん&優希ペア。正直真っ向勝負では勝てる気がしない。

（よし、行くわよ神谷さん！）

（ストップ。ここは私に任せて。作戦があるから）

「霧島さん。ちょっと話があるんだけど」

「……何？」

「雄二が霧島さんに伝えたいことがあるみたいなの」

「……雄二は何て？」

『（それじゃ、手はず通りにいっつぜ）』

「（オツケー）」

「それについてはコレに入っているわ」

私はヒュッと霧島さんにある物を投げる。

「……MP3プレイヤー？」

そう、私が霧島さんに渡したのは、再生専用のMP3プレイヤーだ。

「とりあえずそれを聞いて。そこには雄二の本当のキモチが記録されているから」

「……分かった」

霧島さんが再生ボタンを押すと、プレイヤーから雄二の声が聞こえてきた。

『翔子、俺の話を聞いてくれ』

よし！ちゃんと流れているわ。

『お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ。俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ！』

「……雄二」

霧島さん、すごくうつとりした表情ね。

『だからすまないが今回は辞退してくれ。そして俺たちが優勝したら結婚しよう。愛している、翔子』

ちなみにこの声は秀吉だったりする。

「そしてこれが結婚の誓約書よ」

私は霧島さんに一枚の紙を渡す。そしてそこには『私、坂本雄二は霧島翔子を妻として一生愛し、苦楽を共に乗り越えていくことを誓います』という文面の下に、雄二の直筆の署名と印鑑が押してあった。

「……………これは、雄二の字」

霧島さんは信じてくれたみたいね。

「……………優希、いい？」

「代表がそう言うならしょうがないわ。いいよ。私たちの負け」

「……………ありがとう」

「…勝者、神谷・木下ペア！」

先生から勝ち名乗りを受けたので、私たちは教室に帰ることにした。

「ところで、代表はあのままにしているの？」

「ん？いいんじゃない？雄二もたまには素直にー」

「代表が手に変な錠剤持つてるみたいなんだけど」

「き、霧島さん！お願い！雄二にはまだ試合があるからそれは後にしてー」

霧島さんは、その手に謎のクスリとタキシードを持っていた。

「そうか！翔子に勝ったか。よくやってくれた」

教室に戻って勝利を報告したら、雄二が開口一番にそんな事を言うてきた。

「ええ。勝ったわよ」

あなたの将来と引き換えにね。

「そういえばレン、俺がこの前書いたサインは何に使った？」

「ん？アレね？私たちの勝利の為に使わせてもらったわ」

霧島さんに渡した誓約書のサインはこれのこと。

雄二に紙にサインを書いてもらった後、それに合わせてパソコンで文字を印刷すれば、手作り誓約書の出来上がりってワケ。

「勝利の為に…お前まさか…」

「お膳立ては済んだから、後はあなた次第よ。それより、早くホルに回るわよ」

「くっ………！」

「そういえばレン、さっきのことじゃが、コレでいいかの？」

「あら。ありがとう、秀吉。今度何か奢るわ」

私は秀吉からヘアゴムを受け取り、髪を縛ってポニーテールにした。

「……………」

「どうしたのじゃ、明久？お主かなり呆けておるぞ」

何故か明久がこっちを見たまま固まっていた。

「明久。私の顔に何か付いてる？」

「な、何でもないよ。レン、凄く似合ってるよ」

「ありがとう。明久」

「そ、それより何で神谷はウチと同じポニーテールにしたの？」

「一応食べ物を扱うから、髪の毛が飲茶に入らないようにね」

私の髪は秀吉よりもちよつと長いくらいだから、ポニーテールって
いつでもあんまり長くないんだけど。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ）」

「神谷、アンタはウチの敵よ……」

ムツツリーニ、アンタはいつの間に撮影を始めていたの？全く気が

つかなかったんだけど。それに美波はどうして私を親の仇のように
睨みつけているの？

そんなこんなで時間は過ぎて…

「明久。そろそろ四回戦だ」

「え？もうそんな時間なの？」

今は午後二時過ぎ。喫茶店に夢中になっていたら、随分と時間が過
ぎたみたいね。

「あれ？アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？実は私たちもそろそろ出番なんですよ」

「ということは四回戦はこの四人の戦いってことね。」

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃうの？」

「事と次第によっては明久はどこかに逝っちゃうかもしれないわね。」

「葉月ちゃん。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるの。だからお姉ちゃんとおとなしく待ってようね？」

私は葉月ちゃんの頭を撫でる。亮と違って、私は小さい子の扱いは慣れてるからね。

「うー。でも……」

不満げに膨らむ葉月ちゃんの頬。

「その代わり、良い子にしていたらー」

私は彼女を元気づけるように小さく微笑んで、

「バカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからね？」

超弩級の爆弾を投下した。

「葉月お手伝いしてくるですっ！」

「ち、違っただよ葉月ちゃん！僕には君が期待するような財力はないんだ！ねえ、聞いてる！？」

葉月ちゃんは物凄い勢いで厨房に消えてしまった。最近の小学生って足が早いよね。

「アキ、ちょっと校舎裏まで来て？」

今の明久には何か亮と同じく同情を感じるわ。

「美波ちゃん、ちょっと待ってください」

相変わらず瑞希は優しいわね。

「次の対戦相手は吉井君たちのようですから。召喚獣でお仕置きしたら遠慮なくできますよ?」

瑞希からの死刑宣告。さようなら、明久…。

「ちょっと待って！僕の召喚獣はダメージのフィードバックつきなんだよ！？姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身もー」

「フン、望むところだ」

「雄二！お願いだから勝手に僕の生命を左右しないで！」

これはもう、明久はタダでは戻って来れそうに無いわね。

「上等よ。早く会場に向かいますよ。アキがどんな声で啼くのが楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら、明久にどこまで大きな悲鳴をあげさせられるのか、じっくりと見せてもらおうか」

いつの間にか明久は孤立しており、味方は周りのどこにもいなかった。

「あら。皆おかえり」

「ただいま帰りました」

瑞希たち四人が帰ってきた。

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

葉月ちゃんがこっちにトトトツと駆け寄ってくる。

「そつだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「んにゃ〜……」

明久が頭をなでると気持ち良さそうに目を細めている。なんだか猫みたくて可愛いわね。

『お、あの子たちだ！』

『近くで見ると一層可愛いな!』

『手伝いの小さな子も教室内にいる子たちも可愛いし、レベルが高いな!』

私はよく分かんないけど、チャイナドレスってそんなに良いのかしら?

「明久。戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ?」

秀吉がトレイを片手に寄ってくる。男だけどなかなか似合ってるんじゃない?

「雄二、かな?」

「そうね。坂本の一人勝ちね」

「ですね」

「?明久は同じチームなのに負けたの?」

なんだかよく分からないけど、まあいいわ。

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が

落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

気がつけばお客さんの視線がこっちに集中している。

「オツケー。それじゃ、行きましょう！」

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないとイケませんよね」

袖が無いけど、瑞希が腕まくりの仕草を見せる。こっついづのって気持の問題なのかしら？

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」

「はいっ。葉月も頑張りますっ」

「……ワシは一応男なのじゃが……」

「秀吉。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

悪いけど、お客さんの夢を守り、店の売り上げの為に、秀吉にはきちんと女の子でいてもらうわ。私も今日はおそらくこっちの人格のままだろうし。

「やれやれ、仕方ないのう……。あ、いらっしやいませー！中華喫茶ヨーロッパへようこそー！」

新規入店のお客さんが来た瞬間、秀吉の口調が変わった。どうやら演劇魂が勝手に反応したみたいね。

「明久に雄二。突っ立ってないでアンタたちも手伝って」

「だそうだ。俺たちもやるぞ、明久」

「ん、そうだね」

雄二と明久がエプロンを身につけるのを確認すると、私は注文票とペンを取りに行った。

第十五問その三・実際のところ、不動明王と阿修羅ってどっちの方が恐ろしいか

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「皆、精一杯頑張りなさいよ！」

「わかってるって」

いよいよ準決勝。俺たちの相手は明久・雄二ペア。実力はまだしも、どんな策を練ってくるか分からない。

「んじゃ、俺も行くか」

「神谷君、気をつけてくださいね」

姫路たちの声援を受け、明久たちは会場に、俺は木下さん呼びびにAクラスに向かった。

『お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います』
『！』

「よし！今度こそいくわよ神谷君！」

いけたらな。

「雄二、作戦はどう？」

「任せておけ。抜かりはない。――頼むぞ秀吉っ！」

何故か雄二は木下さんに向かって秀吉と呼びかける。もしかして、
入れ替わったのか？

「…………ふふっ」

木下さんが口元に手を当てて笑う。秀吉じゃないのか？

「秀吉。もう木下さんの演技はいいから、早く僕らとー」

「秀吉？秀吉って、あの「三」のこと？」

木下さんがステージ脇の一角を指す。そこにあったのは、

「あちゃば〜」

「ひ、秀吉!?! どうしてそんな姿に!」

ポロポロにされた拳銃手足を縛られた秀吉の姿だった。

「バ、バカな!」

雄二が目を大きく見開いて叫ぶ。

「しかし木下さん、何で分かったんだ?」

「匿名の情報提供があったからね」

え? そんなの初耳だぞ?

「く………すまぬ、雄二。ドジを踏んだ………」

倒れていた秀吉が起き上がり、申し訳なさそうに唇を噛んでいる。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「何でムツツリーニがいるんだ？」

カメラを構えたムツツリーニが一瞬で明久たちの傍に出現していた。

「撮影なんかしてないで、早く秀吉の縄をほどいてあげてよ！（その写真、後で売って欲しい！）」

明久。本音が混ざっているぞ。

「……………了解」

小さく頷くと、ムツツリーニは素早く秀吉に駆け寄ってその縄を解いていた。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

こつなつたら…

「何か言い遺すことはある？」

阿修羅がそこにいた。

「ち、違っただ木下さん！俺はさっきペタタンコなんて言ってないぜ！『このツルペタ』」

「……………」

木下さんの体から怒りのオーラが出ている。

「え？ちょっと待て！俺を連れてどこに……ちょっと、待っ……………」

「先生。タイムをお願いします」

「許可します」

「許可しないで下さいー!」

俺はそのままステージから強制退場となった。

（明久サイド）

やはり僕の作戦に間違いはなかった。ちなみに中身は秀吉に亮の声真似をしてもらって木下さんを挑発するというものだ。

というか、どうして罵倒の内容が胸のことばかりなんだろう。

『神谷君。覚悟しなさい』

『木下さん！違っ…！それらの関節はそんな曲がり方はしなっ……』

僕らの死角では、どうやら処刑が行われているようだ。

「……ふっ」

木下さんが手についた返り血をハンカチで拭いながら戻ってきた。

「これで一対二になっちゃったわね」

あなたがやったんです、とは言えなかった。

「でも、アタシ一人でも君たちには負けないはずっ！行くよー！試
獣召喚っ！」

「ふふっ。それはどうかな？この勝負の科目が保健体育だったこと
を恨むんだね！」

ムツツリー二に目配せをする。これが元々雄二が考えていた秘策だ！

「いくよっ！新巻鮭^{サーモン}！」

「……………試獣召喚」

喚び声に応え、出現する召喚獣。

それはたとえAクラスの木下さんでも太刀打ちできない強さを持つたー

「え！？それ、土屋君の……………！」

ムツツリーニの召喚獣だ。これが秘策、『代理召喚（バレない反則は高等技術）』だ！

「……………加速」

「ほ、本当に卑怯ーきゃあっ！」

初撃から腕輪の力を発動させて勝負を決める。保健体育であればムツツリーニに敵はいない！

『Aクラス 木下優子

&

Fクラス 神谷亮

保健体育

321点

&

UNKNOWN

VS

『Fクラス 土屋康太

&

Fクラス 坂本雄二

保健体育

511点

&

UNKNOWN

「よしっ！僕と雄二の勝利だ！」

物言いがつく前に勝鬨を上げておく。

『……ただいまの勝負ですがー』

あ。それでも物言いがつきそうだ。仕方ない。

「亮、僕らの勝ちで良いよね？」

「ああ。それでいい（秀吉）」

亮が認めてくれた。これで自他共に（？）認める勝利だ。

「……わかりました。坂本・吉井ペアの勝利です！」

勝ち名乗りを受け、僕は手を挙げて観客に向き直った。けど、観客は冷めた目で僕を見ていた。そうだよ。召喚獣勝負を見に来たのに、殆ど召喚が出てきてないもんね。

「それじゃ、僕らはこれで！」

ペコっと一礼し、罵声が聞こえて来る前に教室へと引き返すことにした。

「明久。なかなかの機転であったな」

隣を歩く秀吉が着崩れたチャイナドレスを直しながら話しかけてくる。むう。そのままの方がお客さんが増えそうな気もするけど。

「……………作戦勝ち」

「ありがとう。秀吉とムッツリーニの協力があったこそだよ」

これで残るは決勝戦のみ。あと一つ勝てば目的は達成される。姫路さんの転校を阻止することができるんだ。

「ところで、亮をあのままにしておいて良いのか？」

「え？別にいいんじゃない？」

「そうか。明久がそう言うんなら良いんだが」

「たまにはこういうのもありだトー」

「まだ木下が亮に制裁を加えているみたいなんだが…」

「き、木下さん！亮にはまだ喫茶店があるからそれくらいにして！」

引き返した僕が見たのは、いろんな意味で操り人形みたいな姿になっている亮の姿だった。

もちろん、関節の意味も含めて。

第十六問その一・『ハゲ』と『チビ』は漢字で書くと実は同じ文字（前書き）

このような時期にこのような場で申し訳ありませんが、藤田まことさん、ご冥福をお祈りします。

第十六問その一・『ハゲ』と『チビ』は漢字で書くと実は同じ文字

以下の問いに答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムとあと一つは何か』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

神谷亮の答え

『ハーバー法の場合は水酸化カルシウムを必要とする。この他にもアンモニアを生成する方法としては、ハーバーにより基礎的研究が行われ、ボツシュにより工業化されたハーバー・ボツシュ法が挙げられる。これは数百気圧の高圧のもとで鉄を主体とする触媒で窒素と水素とを直接化合させる方法である。1913年に工場生産が開始され、空気窒素固定法とも呼ばれることがある』

教師のコメント

解答欄の外にはみ出してまで詳しく書く必要はありません。

「明久。今日という今日はお前をクロス」

「あはは。やだなあ亮。目が怖いよ?」

ムツリニにはめてもらった関節をさすりながら明久を睨みつける。まったく、コイツのせいで危うく逝くところだった。

「ところで、姫路や島田は教室にいるのか?」

「ん？まだ確認してないけど、いるんじゃないか？」

この時間は女子の皆や、さっき戻った秀吉やムツツリーニは喫茶店で仕事をしているはずだ。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思っただが……」

雄二が気になる言葉を口にする。

「……………雄二」

教室の前まで戻ってくると、ドアの前に立っていたムツツリーニが駆け寄ってきた。

「ムツツリーニか。何があっただ？」

「……………ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええっ！？姫路さんたちが!？」

まさかそんな手段をとってくるとは。

「やはり俺や明久、それにおそらく亮と直接やり合っても勝ち目がないと考えたか。当然といえば当然の判断だな」

ちよつとまって！俺は今日誰とも喧嘩してないぞ！

つてそんなことより、姫路たちは大丈夫なのか！？どこに連れて行かれたんだ！？相手はどんな連中だ！？

『（落ち着いて亮。これは予想の範疇よ）』

「（え？そうなのか？）」

『（ええ。もう一度明久たちに直接何かを仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよつかいを出してくるか。そのどっちかで妨害工事を仕掛けてくることは予想できたからね）』

「（それで今回はウエイトレスを連れ出すっていう喫茶店の妨害の方ってわけか）」

『（そういうことよ）』

「（なんか随分物騒な予想をしてたんだな）」

『（色々引っかかることがあったからね）』

コイツはいつの間になんかそんなことを考えていたんだ？

「……………行き先はわかる」

ムツツリーニが小さな機械を取り出した。

「なにこれ？ラジオみたいに見えるけど」

「明久。これは盗聴の受信機だ」

「オーケー。敢えて何で持っているのかと何で分かるのかは聞かないよ」

ソイツは随分と助かる。

「さて、場所が分かるんなら簡単だ。かるくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

「ここが見せ所だぜ？」

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は雄二と亮に感謝しておくよ。姫路さんたちに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

「……………それが向こうの目的だろうか」

「え？」

「どういう事だ雄二？」

「とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムッツリーニ、タイ
ミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ」

「……………わかった」

「となると俺たち、特に明久のやることは一つだな」

「ああ。そういうことだ」

「それってどういうこと？」

明久が不思議そうな顔をしている。

「王子様の役目は昔から決まっているだろう？」

「王子様の役目って？」

「お姫様をさらった悪者を退治することだね」

『さてどうする？坂本とー神谷に吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井ってやつは知らないが、坂本と神谷は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、二人とも中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』

『坂本って、あの坂本か？』

『それに神谷って、まさかあの【必殺お仕置き人】か？』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその二人を動けなくすることなんだから』

ムツツリーニの持っていた受信機から、音楽に混じってそんな会話が聞こえてきた。

奴らの口振りからするに、おそらく黒幕である誰かがいるんだろう。

(雄二に亮、この連中って)

(ああ)

(黒幕に依頼されたその辺のチンピラじゃないのか?)

ムツリ二に案内され、俺たちは文月学園から歩いて五分ほどのカラオケボックスにいた。どうやら姫路たちはそのパーティールームに連れて行かれたようだ。

『お、お姉ちゃん……!』

『アンタたち! いい加減葉月を放しなさいよ!』

島田は葉月ちゃんが捕まっているせいでろくに抵抗できなかったのか。

『お姉ちゃん、だつてさ! かわいー!』

『ギャはははは!』

気持ちが悪い声を聞く限り、チンピラは七人つてつてところか。

そう思っていると、明久が今にも部屋に入りそうな勢いだっただ。

(待て、明久。勝手に行動するな)

(気持ちは分かるが、まずは人質の救出が優先だ。ムツツリーニがうまくやってくれるからそれまで待っている)

(……わかったよ)

そう、今はまだチャンスが来るまでじっと我慢するしかない。

『……灰皿をお取り替え致します』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ やっちゃっていいの？』

『だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ！ズリー！それなら俺ニ番ね！』

パーティールームの中からは虫酸が走る笑い声が響き渡る。

『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さいー！』

『だってさ……。どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やっ！さ、触らないでー』

『ちよつと、やめなさいよ!』

『あーもう。うっせえ女だな!』

『きゃあっ!』

ドン、という何かを突き飛ばした音と島田の悲鳴。その後数瞬遅れて聞こえてきたのは、ガシャアアンという、まるで何かテーブルを巻き込んで倒れたような音だった。

(おい、明久!)

(少し落ち着け!)

俺たちの制止もまるで聞かず、明久は自分の中の何かがつんだような顔をしていた。

「おじやましまーす!」

明久はそのままドアを開け放って部屋に入ってしまった。

「よ、吉井君?」

「アキ……」

姫路と島田は突然の出来事に驚いているようだ。

「ハア？お前誰よ？」

チンピラたちには完全にマークされ、奇襲は不可能。どうするんだ？

「それでは、失礼して……死にくされやあつ！」

「ほごあああつ！」

どうやらチンピラの一人を倒したようだ。

「てっ、てめえ！ヤスオに何しやがる！」

「イイツシャアアー！」

「しぶああつ！」

ゴキツという何かを殴った後に、ガツとまるでキックをかましたような音が響いた。

「テメエら、よくも美波に手をあげてくれたな！全員ブチ殺してやる！」

あのバカ。完全に頭に血が上ってやがる。

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが!?!」

「とにかく来ているのなら丁度いい！ぶち殺せ！」

ったく。やっぱり囲まれたじゃねーかよ。

「たった一人で調子くれてんじゃねえよ！」

「舐めてんのか!」

「お前ら全員、絶対ブツ飛ばす……!!」

(亮。そろそろ行くぞ)

(了解)

雄二と俺は部屋の中に入った。

（明久サイド）

「やれやれ……この阿呆が。少しは頭を使って行動しろってーの
っ！」

「げぶっ！」

向かってきた相手は壁に叩きつけられてた。

「雄二っ！」

「貸しイチ、だからな？」

言いながら更に他のヤツに拳を叩き込んでいる。あ、今度は膝が鳩尾に入った。

「で、出たぞ！坂本だ！」

「坂本まで来ていたのか！」

雄二を見て連中が浮き足立つ。これならいけるか……？

「坂本よお。このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかア？」

向こうの一人が葉月ちゃんを羽交い締めにしていた。女の子に、しかも小学生になんてことをしやがるんだ！

「いいか？おとなしくしているよ？さもないと、ヒデエ傷をー」

「……………」
「負つのはお前」

ゴインシッ、ゴゴシッ

「あがめっ！」

白目を剥いて倒れる外道。その後ろにはクリスタルの灰皿を振りきったポーズで立っている一人の小柄な男と、外道の前には僕より頭一つ背が低く、相手の両こめかみに拳を万力のように叩き込んだ男がいた。バイトのフリをして先に侵入していたムツツリー二と、おそらく天井を伝ってきた亮だ。

確かに宣言通り酷い傷を負ったように見える。有言実行とは見上げた根性だ。

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

「葉月っ！良かった……。怖かったよね……？」

解放された葉月ちゃんを美波が抱きしめる。感動の再開だ。

「吉井君っ！」

姫路さんが腕を広げて駆け寄ってくる。もしや——これはチャンスかっ！？

「姫路さんっ！」

僕も腕を広げて構える。さあ、ドンと来いっ！

「吉井い！ヤスオをよくも！」

「ぐぐあっ！」

ドンと来たのはチンピラのパンチだった。

「……………！！」

「な、なんだコイツ？血の涙流してるぞ……………？」

よくも！よくも千載一遇のチャンスをおおっ！！

「姫路さん、ちょっと待ってて！コイツをシバき倒した後でもう一度——」

「姫路に島田！先に教室に戻っている！」

「雄二！キサマまで僕の邪魔をするのか！」

けれども、その判断は正しいから反対できない。

「あっはっは！それにしても丁度いいストレス発散の相手ができ
な！なあ雄二？」

「全くだ。生まれてきたことを後悔させてやるぜえっ!」

「こ、これが坂本に神谷か……!」

「悪鬼羅刹と必殺お仕置き人の噂は本当だったか……」

霧島さんや木下さんに追い詰められているこのタイミングで雄二や亮と喧嘩するなんて。この連中、ご愁傷様としか言いようがない。

「ところで、どうして秀吉だけ縛られているの?」

「……………とてもよく似合っている」

「姉上に縛られた時の縄が残っておっての……」

そんな物を持っていたせいで縛られたのか。今日は一日散々な目に遭ってるなあ。

「それと、何故かワシだけ随分と尻を撫でられたのじゃが……」

秀吉がとても悲しそうに呟く。けど、撫でた連中の気持ちもよくわかるので、僕には返事が出来なかった。

「私はコイツらにまだ用があるから、皆先に戻ってて」

いつの間にか出てきたレンがそう言ってきた。

「いや。僕と雄二は部屋の外で待ってるよ。ムツツリー二は秀吉を連れて先に帰ってて」

「……………分かった」

「雄二。それでいいよね？」

「ああ。俺はそれで構わない」

「ならちよっとそこで待ってて。しばらくしたら終わるから」

レンはガスマスクをつけて部屋の中に入り、ドアを閉めた。

中の様子が気になるので、僕と雄二はドアに耳を当てた。

『な！？手足が動かない！』

『うわっ！テメエ、何のガスを噴射しやがった！？』

『手足の運動神経だけを麻痺させる特殊な神経ガスよ。効き目はだいたい数時間ぐらだから、安心してちょうだい』

『お、俺たちにそんな事をしてどうするつもりだ？』

『……………ねえ。ドラゴンールって漫画に出てくるドラゴンボールっていう球知ってる？』

『ああ。それがどうかしたのか？』

『それをアンタたちの頭で再現してもらおうと思ってね』

『ちょっと待て！手に持っているその怪しい薬は何だ？』

『ああコレ？コレは半永久脱毛剤よ。これでアンタたちの髪の毛に1〜7つの円の模様を描いてあげるから』

『も…もしかして髪の毛をその脱毛剤で抜いてハゲた円の模様を作るのか？』

『そんな酷いことしないから、安心していいわよ』

『え？それじゃー』

「……………雄二」

「……………何だ？」

「……………僕たち、レンや亮の友達で良かったね…」

「……………ああ。そうだな…」

僕たちは部屋の中から聞こえてくる絶望タップリの悲鳴を聞きながら、そんな話を話していた。

第十六問その二・真実は、いつもひとつ！（前書き）

ちよこつと訂正しました。

第十六問その二・真実は、いつもひとつ！

誘拐騒ぎも解決して、喫茶店の一日目も終了したFクラスの教室。そこは僕とレンと雄二の貸しきり状態となっていた。

「明久。そろそろ来る時間だぞ」

テーブルでお茶を飲んでいると、突然雄二がそんな事を言い出した。

「？来るって、誰が？」

「ババアよ」

ババアというと、学園長のことか。

「学園長がわざわざここに来るの？」

「私と雄二が呼びだしたの。さっき廊下で会った時に、『詳しく話を聞かせなさい』ってね」

「話ねえ……。ダメだよ雄二にレン。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

「用事もクソも……。この一連の妨害はあのババアにあるはずだから

な。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因がーえええっ!？」

雄二が当然のように告げた台詞は、僕には驚きの内容だった。

「あ、あのババア！僕らに何か隠してたのか！」

そのせいで姫路さんたちが危険な目に遭うし、喫茶店の経営は苦勞するし、ここは文句を言っただけやらないと！

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

「来たかババア」

「もう待ちくたびれたわよ」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

まるで私は被害者ですといった様子で肩をすくめる。

「確かに黒幕ではないだろう」

「けど、私たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りじゃないかしら？」

「ふむ……。やれやれ。賢しいヤツらだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を叩き出すことのできる優勝候補をつかえばいいからな」

「あ、そういえばそうだよな。優勝者に後から事情を話して譲ってもらったのかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

擁立……。えつと、確か『支持すること』だったけ？

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「だったら教室の補修に関して渋ったりしないはずよ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからね。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえないわ」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にならざるを得なかったこと？」

「そついつことになるわね」

こ、このババア……！

「あの時、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか？」

「提案？えーっと」

「科目を決めさせるってヤツかい？なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい？」

「ああ。めばしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそつだとしたら、俺たちだけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババアは提案を呑んだ」

提案を呑んだつてことは、他の人ではなく僕らが優勝しないと学園長は困るつてことか。改修を渋つたことといい、得点の高い人たちじゃなくて、敢えて僕らに依頼したつてことには何か理由がありそつだ。

「他にも学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、俺たちの対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あつたしな。それに何より、俺たちの邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したのが決定的だつた。ただの嫌がらせならここまでではない」

アレは本当に危なかった。ムツツリー二が盗聴器を仕掛けてくれていなかったらどうなっていたのかわからない。下手をすると警察沙汰だ。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか……すまなかつたね」

と、突然学園長が僕らに頭を下げてきた。あの厚顔な学園長が！

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろうと最初は考えていたのだろうけど……決勝まで進まれて焦ったんだろうね」

もしかすると、意外と責任感の強い人なのかもしれない。年下の僕らにきちんと頭を下げるなんて、簡単なようではなかなかできることじゃないのだから。

「さて、こっちのタネ明かしはこれで終わり。今度はそっちの番よ」

「はあ……。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして、学園長は

僕らに真相を明かし始めた。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないの
わ」

「ペアチケットじゃない!? どういうことですか!？」

「アタシにとっちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品の方なのさ」

「もう一つというと、『白金の腕輪』ね」

「ああ。あの特殊能力がつくとかなんとかってやつ？」

少し調べてみたけど、白金の腕輪は二つあるらしい。一つはテストの点数を二分して二体の召喚獣を同時に喚び出すことのできる腕輪。もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィールドを作ることのできる腕輪。こっちは使用者の点数に応じて召喚可能範囲が変わるらしい。召喚の科目はランダムで選択されるとかなんとか

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る? 回収して欲しいわけじゃなくて？」

「あのな……。回収が目的だったら俺たちに依頼する必要はないだろう? そもそも、回収なんていう真似は極力避けたいだろうし、な」

「ねえ雄二。どういじつと?」

雄二の言っていることはさっぱり分からない。

「新技術は使って見せてナンボのものなのよ。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われることになるのよ」

最初からそう言ってくればいいのに……。

「本当にアンタらはよく頭が回るねえ……。そうさ。できれば回収なんて真似はしたくないんだ」

できればということは、最悪の場合はそれも考えていたのだろう。

「それで、何でその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか?」

「……欠陥があつたからさ」

苦々しく顔をしかめる学園長。技術屋にとって新技術の欠陥は耐え難い恥のはずだ。それを生徒である僕らに明かすのだから無理はない。

「その欠陥は俺たちであれば問題ないのか？」

「そうさ。アンタたちが使うなら暴走が起こらずに済む。不具合は入出力が一定水準を超えた時だけだからね。だから他の生徒には頼めなかったのさ」

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」

今度は雄二が苦笑いをしている。

「えーっと、つまり……？」

「アンタたちみたいなの『優勝の可能性を持つ低得点者』っていうのがババアにとって一番都合が良かったってわけよ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められているってことでいいのかな？」

「いや、お前はバカだと言われているんだ」

「なんだとババア！」

「説明されないとわからない時点で否定できないと思うんだが……」

くっ！雄二はわかっているみたいだし、こうなると僕だけがバカみたいじゃないか！

「ちょっと待って。だったらレンたちが優勝したらどうするつもりだったの？レンや木下さんだったら、召喚フィールド作製用でも暴走すると思うんだけど」

「そうならない為に、トーナメントで使う科目以外は全部点数を一桁にしたの。だから今の私の総合科目の点数は明久とどっこいどっこいな感じよ。それでその状態で私が二つともデモンストラーションをやる予定だったの」

……ん？ってことは、

「レンはこの事や科目内容を知ってたの！？」

「腕輪の事情についてはテストを受ける前日にババアに問い詰めたし、科目の大まかな予定は雄二にどうするかを、あの話し合いの次の日に教えてもらったの。あの時点である程度は予想出来てたから」

「あの時はびっくりだったよ。まさかこんなに早くアタシの考えが分かるなんて思ってもなかったからね。さすがは蛇の道は蛇といったところさね？」

「ふふつ。それはどうも」

学園長とレンがお互いを見て不敵な笑みを浮かべている。まるでお互いの腹の内を更に探っているみたいだ。

「とりあえず、二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作製用はある程度まで耐えられるんだけどね……。もう片方の同時召喚用は現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「レン、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「いや、バカにされているわよ。物凄い勢いでね」

「なんだとババア！」

「いい加減自分で気づきなさいよ！」

くそっ！直接お前はバカだ、とか言ってくれないとわかりにくい！これが年の功による会話術ってヤツか！

「そうになると、黒幕の正体は大体絞れてくるわね」

「ああ。俺たちの邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間——他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄二にレン、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

「まったくこのバカは……。私たちの邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止されたら困るってことでしょ？そんな学園の醜聞をよしとするヤツなんて、うちに生徒を取られた他校の経営者くらいし

かないでしようが」

ああ、そういうことか。雄二もレンも意地が悪いなあ。きちんと順を追って話をしてくれたら良いのに。

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはないさね」

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。協力している理由はわからんが」

ふむふむ、と頷いてみてふと思う。

「あのさ、コレってーかなりマズい話じゃない？」

「そうね。文月学園の存続が懸かっている話になるわ」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているものだ。そんな状態で暴走なんていう問題が起きたら、学校そのものの存在意義も問われることになる。

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を話して回収したらー」

「残念ながらそうもいかない。決勝戦の相手を知っているか？」

雄二がズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表を追っていくと、対戦相手は、

「常夏コンビ……」

「そうよ。やつらは教頭側の人間よ。嬉々として観客の前で暴走を起すでしょう」

これじゃあ回収の交渉は成立しない。

「悪いけど、アンタたちにはなんとしてでも優勝してもらおうしかないのよ」

レンの表情も硬い。事態はかなり深刻なところまで来ているみたいだ。

「まさかこんなことになっているとはな」

雄二までそんなことを言い出す。

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかなければ起こらないんですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

僕らが暴走を引き起こしたんじゃない。幸い(?)雄二も総合ではまだそこまでの域に達していないし、問題なさそうだ。

「雄二にレン。聞きたいことは聞けたし、今日はもう帰ろう」

「そうね。家に帰ってやることもあるし」

「それに明日も早いしな」

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がった。

「二人とも、明日は頼んだよ」

「はい」

そう言うと、学園長は教室を出て行った。

「んじゃ、俺たちも帰ろうぜ」

雄二が教室から出て行き、僕もそれに続くことしたら、

「明久」

突然レンに呼び止められた。

「どっしたのレン？」

「美波たちを助け出した時のアンタ、すごく格好よかったわよ」

レンが満面の笑みを浮かべていた。

それはさっき学園長に向けたようなものではなく、もっと子供っぽくて、可愛らしい笑顔だった。

こうして学園祭初日は幕を閉じた。

第十七問その一・花火は危ないのでよい子は触らないように！

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許して下さい。

「アキに神谷、おはよう」

「おはようございます、吉井君に神谷君」

「あ、二人とも。おはよう」

「二人ともおはよう」

学園祭二日目の朝。姫路と島田が揃って登校してきた。

「あゝ、その……昨夜はぐっすり眠れた？」

「え？はい。ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃ……朝ごはんはきちんと食べてきた？」

「はい。きちんと食べてきました」

明久のヤツ、気を遣っているのはいいんだけど、端から見ればバレバシだ。

「えっと、それじゃ変な夢とかはー」

「ーふふつ。吉井君、気を遣い過ぎですよ？」

ほらな？姫路にもバレているし。

「大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いてますから」

「そうなのか？」

「はい。結局皆無事でしたし……それに、きっとまた吉井君が助けられますから」

そう言い、無理のない自然な笑みを浮かべる姫路。

「アキというよりは坂本と土屋と神谷かもしれないけどね」

島田も全然気にしていない様子だ。二人とも、凄く芯が強いなあ。

「ま、元気そうで何よりだ。それで、今朝は特に問題はー」

「……………異常なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「そうか。ありがとな」

秀吉とムツツリー二も一緒に登校してきた。昨日のこともあったので、今日は秀吉とムツツリー二に二人を迎えに行ってもらったのだ。念のために俺のスタンガンを持たせて。

「これくらいは当然じゃ。特にワシは昨日役に立てなかったしのうち……」

「いや、それは縛られていたんだし、仕方ないんじゃないの？」

というか同情してしまうぞ。随分お尻を触られたみたいだしな。

「お、今日は無事だったか二人とも」

奥から雄二が頭を掻きながら出てきた。コイツは二人のことをあまり心配してないようだ。

「あれ？坂本ももう来てたの？」

「三人とも早いですね〜」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわぁ……」

明久が大きなあくびをする。こいつら全然寝てないからな。当然といえは当然だ。

「もう、そんなので決勝戦は大丈夫なの？相手は三年生らしいじゃない」

「そうみたいだね。それも結構上位の人たちみたいだし」

へえ。それは意外だったな。

「大丈夫だろ。三年はその分テストも難しいからな。ハンデはない」

「そういうことじゃなくて、ウチはアンタたちの実力自体を心配してるんだけど……」

島田は呆れているみたいだ。

「そんな心配をしている暇があったら喫茶店の準備でもしてくれふわぁ……」

「なんだか他人事ねえ。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ここのところあまり寝てない上

に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

確かに、いくらなんでもこの状態じゃ集中力はもちそうにないだろう。

「そうだったんですか。それならゆっくり休んでください」

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「その代わり、決勝戦はしっかりやれよ」

「……………（コクコク）」

「仕方ないわね。起きられそうになかったら起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃ、十一時までに起きてこなかったら起こしてもらえる？」

「十一時？試合は一時からじゃなかったっけ？」

「一番混み合うお昼どきくらいは手伝っよ」

それだと今からなら三時間は寝れる計算になる。この二人なら大丈夫かな？

「ところで、亮は寝なくても大丈夫なの？」

突然明久がそんな事を聞いてきた。

「俺なら大丈夫だ。体力にはお前ら以上に自信があるからな。喫茶店の方を手伝うさ」

「すまん、亮。んじゃ、明久と一緒に俺も起こしてくれ。屋上で寝ているから。ほわあ……」

なるほど。屋上か。あそこなら後夜祭の放送機器が設置されているだけだし、誰にも邪魔されずに眠れるだろう。今日は天気もいいし、昼寝にはもってこいである。

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

明久が立ち上がり、雄二と一緒に教室から出て行った。

「やっぱり一緒に寝るんでしょうか……?」

「間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……」

「いや、お前ら少し落ち着け」

とりあえず最初の仕事は、この二人の思考を正常に戻すことだった。
「さてと。行こうか雄二」

「そうだな。島田、俺たちは抜けるが大丈夫か？」

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦なんだからね？」

二人ともしつかり寝たから体調は万全のはず。後は勝つだけだ。

「後で私たちも応援に行きますね」

「ここまで来たんじゃないぞ？」

「……………優勝」

「試召戦争の時みたいなへまはするなよ？」

「わかってるよ。それじゃ、行ってくる」

「やれやれ。耳が痛いな」

明久と雄二は秀吉とムツリー二と俺が突き出した手に軽く拳をあてて、会場に向かって歩き出した。

「それじゃあ私たちも喫茶店を頑張りましょう！」

姫路の声を皮切りに、俺（正確にはレン）たちは喫茶店の営業を再開した。

「お兄ちゃん！すつつつごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！は、葉月ちゃん……。今日も来てくれたんだ。どうもありがとう」

あの後皆と試合を見に行き、明久たちの優勝の様子をしっかりと見させてもらった。

というか葉月ちゃん、君の頭はおそらく明久の鳩尾に直撃しているぞ。

「二人とも、お疲れ様。凄かったわね」

「あはは。そうでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いですっ！」

「葉月ってば。アキが困ってるわよ？」

確かに、あれ以上鳩尾を圧迫されるとキツいだろうな。

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた？」

「はいっ！とっても素敵でした！今度土屋君にビデオをコピーしてもらおうと思っくらい！」

姫路の目がキラキラと輝いている。

「ビデオねえ……。ムツッリーニ、撮影なんかしてたの？」

「はい。ずっと熱心に撮っていましたよ。ね？」

「……………（プイッ）」

目を逸らすムツッリーニ。俺は見えないからよく分からないが、試合そっちのけでミニスカートの観客とかを撮影してたか？

「坂本。アンタ試召戦争の時は散々だったくせに、今回は随分と日本史の点数が良かったわね」

「試召戦争の時に散々だったからこそ、だ。あれ以来、日本史は重点的にやってきたからな」

「それであんなに高得点だったの？」

「簡単に言うが大変だったぞ。特に先週例の（姫路の転校）話を明久が聞いてからは、俺と亮は殆ど毎晩ヤツの日本史の勉強に付き合わされたからな」

「ふうん……。坂本はともかく、よくアキがそれだけであんな点数を取れたわね」

「明久も自分でちょっとはやっていたみたいだぜ。あとは、虚仮の一念ってヤツだろ？正直、凄い集中力だったぞ」

俺たちは姫路に聞こえないように背を向けて話している。

「そ、それで、ですね……」

「ん？ああ、なになかな？」

明久と話している姫路が身体の前で指をもじもじとしている。告白の前フリでもするのか？

「後夜祭の時、お話があるので駐輪場まで来てください！」

トマトのように顔を真っ赤にしてそう告げると、彼女はダツシユでウエイトレス業務に戻っていった。まさか本当に告白の前フリだったとは。

「雄二に明久。話し込んでいるところ悪いのじゃが、喫茶店を手伝ってくれんかの？お主らの優勝のおかげで客が増えて大変なんじゃ」

教室の方から秀吉がチャイナドレスの裾をきわどく翻しながら駆けてきた。

「じゃ、先に行ってるわね」

私は制服からチャイナドレスに着替えるために、女子更衣室に向かった。

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「ふう……………」

「お、終わった……………」

「さすがに疲れたのう……………」

「……………（コクコク）」

放送を聞き、体から力が抜けていく。ウェイトレスってこんなに疲れるのね。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだらう？」

「ん？お義父さんが気になるのか？」

「ちゃんと気に入られるようにね」

「なっ！？べ、べつにそういうわけじゃなくて！」

「後夜祭の後に話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じやな」

秀吉が返事をする。まあ大丈夫だとは思うけど。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

美波たちが更衣室に向かおうとした。

「ええっ!?!?どうして!?!?」

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ?」

「すみません。すぐ戻りますので」

「待つて!二人とも考え直すんだ!カムバアーク!」

明久の説得も虚しく、美波と瑞希は着替えの為に去っていった。

ちなみに葉月ちゃんはそのままの格好で帰っていった。末恐ろしい子だわ。

「じゃ、私も着替えに行くわ」

「ふむ。ならばワシもー」

「させるかつ！せめて二人だけは着替えさせない！」

「なっ！？何をするのじゃ明久！？」

「……………（フルフル）」

「ムツツリーニまでどうしたの！？」

明久が秀吉の足に、ムツツリーニが私の足にタツクルしていた。

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

雄二が明久たちを呆れたような目で見ています。朝に休憩してたとはいえ、さすがに凄まじい体力をしているわね。

「学園長室じゃと？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちょっとした取引の精算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今から行くことと思う」

ま、一応は約束だし。最低限の報告はしないといけないわけね。

「ならその間に私たちは着替えを」

「そうはいかない！二人も一緒に連れて行く！」

「……………（クイクイ）」

「あ、ムツツリーニも来る？」

「……………（コクコク）」

なんなのこの二人は？

「困ったのう。雄二、なんとか言ってやってくれんか？」

「ん〜……。ま、いいだろ。秀吉とレンとムツツリーニも行こうぜ。明久を説得するのも面倒だし」

雄二まで肯定しちゃうの！？

「やれやれ。雄二まで……。仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

「よし。ほら明久にムツツリーニ。足を放してやれ」

「はっ」

「……………（コクリ）」

「やれやれ。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじゃろ
うに……」

「全くよ……」

そんなことを話しながら、私たちは学園長室に向かった。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

「入るわよ」

ノックと挨拶をして学園長室の扉を開ける。

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「そう？ちゃんとノックして挨拶したわよ？」

明久も私も雄二よりはマシなはずよ。

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねえ」

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかっているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

お互い様とはいえ、相変わらず遠慮のないババアね。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

ムツツリーニと秀吉を見て咎めるように言い捨てる。

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい拜んでもばちはあたらなはずだ」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

つまらなさそうに鼻を鳴らす。

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「む？明久、不具合とはなんじゃ？」

何やら明久と秀吉が話しているけれど、今はそれどころじゃない。

そう言えば、どうしてあつちは私たちがババアとつながっていることを知っていたのかしら？

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするっていう取引を学園長とー」

「ダメー!!」

私は気づいたら叫んでいた。

「明久！その話はマズい！」

「え？」

一瞬遅れて雄二も真剣な顔で怒鳴り出す。どうやら同じ結論みたい

ね。

「……………盗聴の気配」

「やられたか！」

「マズいわね……………」

ムツツリーニの言葉を受け、私と雄二は駆け出して学園長室の扉を開け放った。すると、例の常夏コンビが逃げていくのが見えた。

「雄二、ここは三手に別れて追いましょう！私は先に一人で行くわ」

「分かった。けど、無理だけはするな！」

その言葉を聞いて、私は廊下を駆け出した。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

校舎を隅々まで探したけど、どこにも見当たらない。亮をチャイナドレスで走らせるわけにはいかないし、私だけじゃ限界がある。

それにしても全く…一体どこにいるの？

校舎の外を探しているだろう人物からの連絡もない。
校舎の外と中以外に行くとところなんてどこにもー

ーあつた。

後一ヶ所、私がまだ行っていないところが。

「（亮。いざという時は頼んだわよー!）」

『（了解。任せとけ）』

それを聞き、私は再び廊下を走り出した。

ドオン！パラパラパラ

私がまだ探して無い場所、すなわち屋上に着いたとき、耳をつんざくような音が聞こえてきた。この音、花火じゃないの？

「アンタたち、もう逃げ場はないわよ」

常夏コンビにゆっくりと詰め寄る。

「それ以上近づいたら、これを今すぐ再生するぞ！」

坊主先輩の手には、一つの盗聴器がある。おそらくさっきの会話を録音したやつだろう。

「あら。そんな事が出来ると思ってるの?」

私はフツと笑みを浮かべる。

「ああ? どういう事だ?」

モヒカン先輩が言い返してくる。

私はこっちに飛んでくる物体を確認して、

「だって、壊れた放送機器そんなものでどうするつもりなのかしら?」

「ユウ……」

ドオン！

明久の召喚獣が投げた花火が放送機器を破壊した。

「へっ！まだもう一つあるー」

ドオン！

「ー無くなっちゃった」

「そっみたいね。さ、どっするっ」

常夏コンビに近づこうとしたら、

ピュ〜…………ドオン！

もう一発の花火が校舎の一角に激突し、瓦礫の山を築き上げた。

「あそこは確か、教頭室ね…………ってアンタたち!？」

気づいたら常夏コンビは逃げ出していた。

「まあいいわ。もうこれで何も出来ないでしょうしね」

放送機器も壊れ、盗聴器もそれに巻き込まれてもう使い物にはならない。

「（それじゃ、後はよろしくね）」

『（ほいほーい）』

私は疲れたので寝ることにした。

「ふう〜。これで全部終わっー」

P r r r r r !

突然俺の携帯電話のメール着信音が鳴りだした。

「ーってないみたいだな」

俺は迫り来る恐怖のせいで苦笑いを浮かべていた。

【M e s s a g e F r o m 木下優子】

召喚大会の準決勝について話があるから、駐輪場まで来てくれる？

第十七問その二・Boy Meets Girl

「ここか…」

俺は今木下さんに呼ばれて駐輪場に来ている。

「あ…やっぱりいた」

これが夢だったらどんなに楽だろうか…。

そんな事を思いながら俺は木下さんのもとに向かった。

492

「あら。思ってたより早かったのね」

「あのメールが来た後すぐにこっちに向かったからな」

「一見普通の会話をしているような顔をしているが、内心はいつ殺されかねないかとドキドキしている。」

「そう。で、本題なんだけど」

ついに審判の時がやってきた。

「何で降参しようとしたの？」

「それはだな、日本海溝よりも深くいワケがあっただな……」

「前口上はいいから、さっさと話しなさい」

もう逃げようが無いので、俺は学園長との取引に関わることを全てを伏せて、木下さんに事情を話した。

「ふん。姫路さんの転校を阻止する為ね……」

「ああ。そついうことだ」

「全く……。揃いも揃ってアンタたち三人はバカなのね？」

木下さんの言葉にぐうの音も出ない。

「せ…かくアンタ…二人…如…ハイラン…に行き…かった…に」

木下さんが小さな声で何かを囁いている。

「ん？今何て言ったんだ？」

「べ、別に何でもないわよ！」

木下さんは何故か顔を真っ赤にしていた。

「ま、まあ今回は許してあげるわ」

「本当か？」

「ただし！条件があるわ」

やっぱりただでは許してくれないか。

「アタシはアンタたち二人を名前で呼ぶから、アンタたちもアタシのことを『優子』って呼びなさい。分かった？」

「ああ、分かったよ。ゆ、優子……」

急に名前で呼ぶと何だか気恥ずかしいな。

「それともう一つ。ちょっと目を瞑りなさい」

「？これでいいのか？」

言われた通りに目を瞑る。

不意に唇に何かの感触があった。

驚いて目を開けると、視界一杯に真っ赤な優子の顔があった。

「よ、用件はこれだけだから！それじゃあね」

そのまま校舎の方に走り去っていった。

「……………」

俺はといつと、しばらくその場に立ち呆れていた。

「さて、俺も行くか」

駐輪場を後にしようとした時、

ガサッ！

「誰だ！」

「ひゃっ！」

近くの物陰から小さな悲鳴が聞こえる。というかこの声、まさか…

「……………姫路か？」

「は、はい」

オーケー。れれれ冷静になれ俺。ここに姫路がいるという事は…

「さっきの見てたか？」

「はい……」

「最初から全部？」

「は、はい……」

なんてこった…

「たのむ姫路！さっきのことは内緒にしてくれないか？」

Fクラスの連中に知られたら、きっと俺に未来は無いだろっ。

「分かりました。内緒にしておきますよ」

「ありがとう」

俺は、ふう…と安堵した。

「それで明久だが、多分ここには来れないと思うぞ」

「え！？…どういうことですか！？」

「耳をすませてみる…」

「……どうですか？」

『待たんか吉井!?!』

『嫌です!待てと言われて待つバカはいませんよ!』

『今日という今日はみっちり指導してやるからな!覚悟しろ!?!』

『鉄人!それは勘弁して下さい!?!』

「な?無理そうだろう?」

「あ...あはは...。でもどうして西村先生に追いかけられているんですか?」

「それについては私が説明するわ」

「そうだったんですか。やっぱり私の事情を知ってたんですか……」

「ええ。だからアイツが約束を破っても許してやってくれる？」

「は……はい。それは全然構いませんよ。それにしても、やっぱり吉井君は凄いです……」

「アイツはバカだけど、行動力だけは並外れているからね。去年からいつもそうだったわ」

「やっぱり……レンさんは分かっちゃうんですね……」

「一体どうしたの？」

「もしかして、吉井君のこと、好きなんですか？」

意外な質問をされ、私たちの間に沈黙が走った。

「……………だったらどうする？」

「えー？あの…それは困ります…じゃなくて、あの、えっと、その…」

随分あたふたしてるわね。これも彼女の人気の一つなのかしら？

「安心して頂戴。性格は嫌いじゃないけど私、アイツをそっという対象として見てないから」

「そ、そうなんですか？」

瑞希が胸をなで下ろした。

「それじゃ、先に打ち上げの場所に行ってるわよ」

「あのっ…」

瑞希に呼び止められた。

「何？」

「ありがとうございます。話してくれて……」

「ふふっ。礼なら明久に言ってやりなさい。きっと鉄人にボコボコにされてるだろうからね」

私は打ち上げの場所である公園に向かった。

第十八問・君は僕に似ている

それでは、頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。
【?】と【?】に当てはまる語を答えて下さい。

『マザー（母）から【?】を取ったら【?】（他人です）』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【other】（他人です）』

教師のコメント

その通りです。Motherから『M』がなくなるとother（他人）という単語になります。こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人です）』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人です）』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

神谷亮の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【アザー】（他人です）』

教師のコメント

カタカナ表記なのに合っていることに驚きです。

「む。やっと来たようじゃな。遅かったのう」

「……………先に始めておいた」

先に公園で打ち上げを始めていると、明久と雄二がやって来た。しかし顔がいつもの倍ぐらい膨らんでいる。おそらく鉄人から逃げ切れなかったのだろう。

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ」

その顔の様子ではちょっとどころではないな。

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「……………（コクコク）」

「お前らのこれからが楽しみだな」

「……………コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ……………」

お互い五十歩百歩ってやつだな。

「あれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならな
いんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだって気になるし」

そう。この二人はあんな騒ぎを起こしたのに停学にも退学にもならず、
嚴重注意という軽い罰だった。しかも二人が花火を当てたのは偶然にも教頭室。
その修繕という名目で学園長のガサ入れが始まったのだ。こうなったらあの人は徹底的に教頭を調べ上げ、尻尾を掴むだろう。それでこの二人がこんなに軽い処分済んだのだ。

「ん、ありがとう」

明久が島田からジュースの入った紙コップを渡す。

「はい。神谷も」

「お、サンキュー」

俺も貰って飲んでみると、中身はオレンジジュースだった。それにしてはちよつと苦いな。もしや酒か？

「そういえば、お店の売り上げてどうだったんだ？」

気になったので島田に聞いてみる。

「そうね。凄いつて程じゃなかったけど、たった二日間の稼ぎとしては結構な額になったんじゃないかしら」

島田が収支の書かれたノートを見せてくれる。確かに二日間得られた額としては少なくはないはずだ。

「ふむ、どれどれ……？」

後ろから雄二が覗き込んでくる。

「この額だと、机と椅子は苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」

「うーん……。やっぱり出だしの妨害が痛かったよね」

まあ最初のアレが無かったらもう少し変わっていたかもしれない。

「すみません。遅くなりました」

姫路がこっちに向かって走ってくる。どうやら決着はついたようだ。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！お父さんも分かってくれました！美波ちゃんの協力のおかげです！」

ふう……。とりあえずは一安心だ。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

明久の顔を見て一瞬姫路が微妙な表情になったが、すぐに元に戻った。

「すみません。私も飲み物を貰っていいですか？ 沢山お話ししたのでのどが渴いちゃって」

「あ、うん。どうぞ」

明久が自分のコップを姫路に渡す。アイツ、気づいてないな。

「あつ……!!」

それに気づいた約一名。

「ん？ 美波、どうかした？」

「あれ？ もしかして、美波ちゃんのだったんですか？」

それに気づかない約二名。

「そ、そういうわけじゃないけど、その……」

「美波も飲みたかったの？」

「飲みたかった……？そ、そうね！瑞希、悪いけどウチも一口貰っていい？」

「あ、ごめんなさい。全部飲んじゃったんです。新しいの貰ってきますから、ちょっと待っていてくださいね」

姫路がジュースのまとめられているあたりに駆け寄っていく。若干千鳥足に見えるが敢えて気にしない。

「……新しいのじゃ意味がないじゃない……」

ドンマイ島田……。

「そういえばアキ。一つ言っておきたいことがあるんだけど……」

「ん？何？」

島田が顔を真っ赤にして俯いている。

それを見た俺はそつとその場を去った。人の恋路を邪魔するわけにはいかないからな。

それよりも今やるべき事は、

「どうやってFクラスの連中から生き延びるかだ」

『（どっしりしてとっ）』

「このままじゃ俺はFクラスの連中に殺られるってことだ」

『（キスのこと？だったら瑞希は言わないと思っけど？）』

「（その姫路の制服の襟にムツツリーニが仕掛けたであろう盗聴器を見つけたんだ。ヤツは明久を抹殺するつもりだったんだろっが…

…）」

『（……………ご愁傷様）』

「（いや、お前もだからな？）」

とりあえず俺とレンはどうやって逃亡しようかと必死に考えを巡らせていた。

第十九問・他人が羨む幸せほど自分が不幸になりやすい(前書き)

しばらくは短編集の話を書いていきます。

第十九問・他人が羨む幸せほど自分が不幸になりやすい

文月新聞

二年F組 神谷亮さんのコメント

俺が小さい頃、某漫画に影響された母がよくこう言っていました。

『亮。男たる者孤高に生き、群れているヤツは噛み殺しなさい』

今、俺は海外にいる母にこのことを教えてあげたいと思います。

なあおふくろ……

本当にこれでいいのか……？

以上、

【女装が似合いそうな男子ランキング アンフェアの為除外】

【男装が似合いそうな女子ランキング アンフェアの為除外】

【ケンカが強い生徒ランキング 武器多数所持によりアンフェアの
為除外】

の三つを達成した神谷亮さんからのコメントでした。

チャイムが鳴ると同時に明久と雄二が駆け込んできて、間髪容れずに鉄人がやってきてきて出席を取り始めた。

にしても明久がなんか変だ。

「神谷」「……………明久が何か隠しているようだ」「工藤」「ヤツは何をたくらんでいる?」「久保」「まさかラブレターを貰ったとか?」

さっきまで眠そうだったクラスメイトは必死に考えを巡らせている。

「近藤」「まさかそんなはずはないだろう」「斎藤」「そうだな。忘れるか」

再び教室に訪れたのどかなひとときがー

「坂本」「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええつ!!』

雄二の一言で完全にブチ壊された。

「ゆ、雄二!いきなりなんてことを言い出すのさ!」

今の一言を一人残さず聞き逃さないとは、さすがFクラスだ。

『どういうことだ!?吉井がそんな物を貰うなんて!』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ!自分の席の近くを探してみる!』

『ダメだ!腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

『もっとよく探せ!』

『……出てきたっ!未開封のパンだ!』

『お前は何を探しているんだ!?!』

何なんだよこのクラスは?

「お前らっ！静かにしろ！」

ーシン

と、鉄人の一喝でクラスに静寂が舞い戻ってくる。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

出席簿を捲る音が教室内に響く。

「手塚」「吉井クロス」「藤堂」「吉井クロス」「戸沢」「吉井クロス」

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井クロス』に変わってるよ」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「吉井クロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」

誰も聞いてないな……。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

出席簿を閉じ、教室を後にしようとする鉄人。この殺気のなかでの振る舞いはたいしたものだ。

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

明久が鉄人を呼び止める。

「吉井、間違えるな」

鉄人が扉に手をかけたまま告げる。

「お前は不細工だ」

よく分かっていらっしやる。

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！せんせい！」

明久の叫びも空しく、鉄人は教室を出て行ってしまった。

「アキ、ちよ〜と話を聞かせてもらえろ？」

明久の肩は今にも外れそつだ。

「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰つたの？誰からなの？どんな手紙なの？」

島田のポニーテールが角のように見える。

「あー、えつと、そのー」

もしかしてアイツ、手紙の内容を知らないな？

「いいからおとなしく指の骨をーじゃなくて、手紙を見せなさい」

断ったら明久の指の骨はタダでは済みそうにないな。

「あの、吉井君」

別の声が聞こえてくる。

「ん？なに？姫路さん」

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです
……」

「明久。俺にも見せてくれないか？」

俺は微笑みながら明久に問いかける。ただし背中にスタンガンを持ち
らつかせながら。

「その……ごめん」

「でも、でも……」

「そうか。ならば力づくで……」

「いくら二人の頼みでも、コレばかりは」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

「お。それなら一つ貸すぜ」

「ちよつと待って！姫路さんまで僕に暴行を加えることが前提なの！？というか亮は姫路さんにスタンガンを貸さないで！」

だって、姫路が明久を殴るところなんて見たくないし。

「皆、ちよつと落ち着け」

パンパンと雄二が手を叩く音が教卓の方から聞こえてきた。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

雄二がクラスの皆に言い聞かせるように言う。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

明久がダッシュで逃走する。

「皆！追撃隊を組織して明久を追って！指示は私が携帯で出すわ！」

『サー、イエッサー！』

『手紙を奪え！吉井を殺せ！』

『サーチ&デス！』

「そこはせめてデストロイで！」

こうしてFクラスvs明久の戦いが始まった。

『いたぞ！吉井だ！空き教室に向かったぞ！』

「オーケー！B部隊は正面から、C部隊は逆側から回って挟み撃ちにして！見逃さないように追ってね！」

『応っ！』

携帯電話で教室から指示を出し、明久を追い詰めていく。これで捕まるかしらね？

そう思っていたら、

『『ギヤあああつー！』『』』

バチバチという音と共に、明久の追撃に向かった部隊の悲鳴が聞こえてきた。この音はスタンガンね？

その後も次々と聞こえてくるクラスメイトの悲鳴。あのバカ、どんだけ行動力があるのよ。

あと残っているのは美波、須川、瑞希、雄二、ムッツリーニ、私の六人だけ。この状況はかなり不利。

「……………」

私は立ち上がり、教室を後にした。

『……………交渉成立』

『「じ、こらっ！卑怯よ！出なさい！」』

『ぐうう……………！爪が、爪がああ……………！』

残った仲間のうち早くも半分がやられてしまった。

「（明久はどこだ！？）」

『（須川を倒したということは、上の階に向かっていることになるわ）』

「（ということとは、）」

『（アイツが向かいそうな場所は、）』

『（屋上）』

そう結論づけて屋上に続く階段に向かうと、雄二と姫路に行く手を阻まれた明久の姿があった。

「ごめん雄二。僕、ちょっとお腹が痛いから先にトイレに行ってくるね」

「吉井君、ずっと気付かなかったんですか？」

「それに、そんな見え透いた嘘は吐いても無駄だぜ」

「雄二に亮、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！そんなことをしても、二人にとってのメリットは何もないはずなのに！」

「そうだな。確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺たちにとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない」

「だったら、どうして……？」

明久が不思議そうな顔で聞いてくる。

「分からないのか？」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺たちはただ、純粹に……」

「お前の幸せがム力つくんだよ」「

「アンタらは最低の友達だ！」

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねえ。本気でかかってこい」

「ひねりつぶしてやる」

俺と雄二は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイを外す。改めて見たソイツの身体は、しなやかで無駄のない理想的な筋肉のつきかたをしていた。

「姫路。上着を持っていてくれるか？」

「すまんが俺も頼む」

「あ、はい」

俺と雄二が姫路に上着を渡した時、

「……………明久、援護する」

「ムツツリーニ！？来てくれたんだね？」

明久に買収されたであろうムッツリーニがいた。

「そうか。やっぱりムッツリーニはそっちについたのか。いいぜ、相手してやる…」

「……………いつでもかかってこい」

俺とムッツリーニはお互いに戦闘態勢をとる。

その時、

「だ、ダメだよッ！戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！やれ、姫路！その手紙を始末するんだ！」

どうやら明久が手紙入りの上着を姫路に渡したようだ。ホントバカだなあ。

「……………あれ？こ、これってまさか…………？」

姫路は手紙を手にして戸惑っている。どうしたんだ？

「姫路さん」

「えっ！？あ、はい。なんですか？」

「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持ちや踏みにじることなんてできないってこと。だから、おとなしくー」

「手紙を細切れにするんだ」

「違うっ！そうじゃない！キサマら、卑怯だぞ！そうやって僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ！」

「はいっ！わかりました」

「いや、『はいっ！』じゃないよ姫路さんってああああっ！そんなに丁寧に手紙を裂かなくても！それじゃあもう絶対読めないよね！返してっ！僕の幸せな未来と大切なラブレターと二十一行前の台詞を返してえっ！」

明久の叫びも空しく手紙はビリビリと破られていき、紙クズとなっていた。

「まさか本当に姫路が破るとは思わなかった」

「……悪いな、明久」

あまりにも驚くべき出来事だったので、俺も雄二も明久に謝った。

「せめてものわびだ」

雄二が廊下に散らばった紙クズを集め、明久に渡した。

「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせ」

「――未練を断つてやる」

「ホイ、雄二」

シュボツ メラメラメラ……

「ってうそおっ！？ここまでやった拳句、容赦なく燃やすの！？もうこれ100パー読めないよね！？僕の幸せな未来はどこへいったの！？」

「明久。お前は知らなかっただろうが」

「なに！？なんでもいいから早く水を持って来て！」

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」

「知ってるよバカ！ちくしょー！」

明久の必死の消火活動も空しく、手紙は灰になってしまった。

「二人とも手紙の手紙の主が誰だか気にならないんですか？」

灰になった手紙を見て、安心したかのような声で姫路が俺たちに話しかけてくる。

「ん？俺は別に興味ないぜ」

「俺もだ。俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もっともー」

「は、はい。なんですか？」

「誰からの手紙だか、目星はついたかな」

「え……っ！？」

どうやら雄二は手紙の主が分かったようだ。

「（お前は分かったのか？）」

『（ええ、もちろん）』

「（何で分かるんだ！？）」

『（あの瑞希が他人の書いた手紙を破り捨てるわけないでしょ？）』

「（他人の書いた？……ってまさか！あの手紙は……）」

『（そういって）」』

なるほどな。

「雄二！その話、もっと詳しく」

「あああ吉井君は聞いちゃダメですっ！」

「いっへっ！？」

「いや姫路。明久の首が真後ろを向いているんだけど」

「いっ、ごめんなさいっ！私、大変なことを！」

「まあ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな」

『ア〜キ〜〜〜〜〜！アンタよくもやってくれたわね〜〜〜〜〜！』

「吉井いつ！絶対殺すうっ！」

「ガンホー！ガンホー！」

「明久……冥福を祈る………」

俺は友のために目を閉じ祈りを捧げた。

第二十問その一・中に誰もいませんよ?b y某ヤンデレ(前書き)

今日は少し時間があつたので連続更新させていただきました。

第二十問その一・中に誰もいませんよ？bY某ヤンデレ

「なあ明久」

「ん？なに、亮」

「そういえば例のチケットはどうしたんだ？」

「例のチケットってー如月ハイランドのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。誰かを誘ったりはしないのか？」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ」

「なるほどな。それはいい。それにその二人、あともう少しでうまくいきそうだしな」

「そうだね。あとは時間ときっかけの問題だからね」

「ふっふっふ……。ついに完成したぜ……。なんとか間に合った……」

…」

とある休日の朝。俺は赤い蝶ネクタイを手に一人でそんな事を呟いていた。

これではただの変人に見えるが仕方ない。何故ならこの蝶ネクタイは――

P r r r r r ! !

突然俺の携帯の着信音が鳴った。

画面を見ると非通知になっている。

「はいもしもし？どちら様ですか？」

『……………キサマヲコロス』

『……………ヤレルモンナラヤッ』

デミロー！』

ドスをきかせた声で反撃し、電話を切った。全く、朝から迷惑電話をするなんて、ソイツの顔を見てみたいぜ。

「さて、そろそろ出かけるか」

俺は寝間着を着替えて家を出た。今日は大事な仕事があるからな。

「いらっしゃいませ！如月ハイランドへようこそ！」

俺は入場ゲートとあるカップルを出迎えた。

男性の方はたてがみのような赤い髪にがっちりした体格、女性の方は腰まで届く黒髪にすらっとした体つきをされており、男性の左肘に関節技をかけている。ま、ぶっちゃけちまえば雄二と霧島さんなワケだ。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

え？何で俺の声がこんなカタコトかだって？

それは今朝完成し、ただいま使用中の『蝶ネクタイ型変成器』のおかげである。

は？名探偵？違うよ。

「……………はい」

霧島さんがポケットからチケットを取り出す。

「亮……………。何のつもりだ？」

まさか一瞬で気付くとは！

「亮？一体誰デスカ？そんなメカマニアでスケッチが得意な人なんて私は知りませーん」

「自分でバラしているようなもんだろ……。まあいい。違うと言っのなら、確認させてもらっぞ」

雄二は無言でどこかに電話をかけようとしている。

「拝見しマース」

俺は霧島さんからチケットを受け取ると同時に、自分の携帯電話の電源を切った。

随分と驚いた顔をした雄二をニコニコと見ていると、霧島さんが不安そうに表情を曇らせた。

「……そのチケット、使えないの……？」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサイ」

俺はポケットから無線機を取り出し、連絡を始めた。

「ー俺だ。ターゲットが来た。ウエディングシフトの用意を始め

る。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

「……ウエディングシフト？」

霧島さんが首を傾げている。そういえば、霧島さんは如月グループの企みを知らないんだな。

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

取り繕うように元の雰囲気に戻る。

「アンタ、さっき電話で流暢に日本語を話していなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーン」

雄二を挑発するような口調をする。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

この野郎……。

「そんなコト言わずに、お世話させてください。トツテモ豪華なおもてなしさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことをされたら我が家は食中毒で大変なことになるってしまうっ！」

なんか伊勢海老と勘違いして食卓に上げる親がいるような口振りだな。まるで俺の幼なじみの優希みたいだ。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……………記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……………雄二とお似合い……………（ポッ）」

霧島さんが仄かに頬を赤らめている。

「お待たせしました。カメラです」

明久ーもといカメラマンがカメラを持ってきた。

「アナタが持ってきてくれたのデスか。わざわざありがとうございます」

カメラマンからカメラを受け取る。それを見て雄二が何かを考えている。

「悪いがちょっと電話をさせてくれ」

「わかりませタ」

雄二が再び電話をかける。

P r r r r r P r r r r r

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

あのバカ！何をしているんだ！

「……いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃねえか……！」

「人違いですっ」

ダッ！

「あっコラ！逃げるなテメエ！ええい、放せこの野郎！」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ（三十五歳）、通称ステイーヴでース。吉井ナントカさんではありません」

「黙れ！人種性別年齢氏名全てに堂々とウソをつくな！しかもどう考えてもその名前で通称ステイーヴはないだろ！ついでに俺は吉井なんて苗字は一言も言っていない！」

あ。しまった。

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」

「……???'」

雄二はきよとんとしている霧島さんのスカートを掴み、軽く捲り上げる。
下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった。

「……………っ！！（ギラッ）」

今度はムツツリーニの存在がバレたみたいだ。

「……………雄二、えっち」

霧島さんが少し怒ったような顔で雄二を見ている。

「なっ！？ち、違っぞ翔子！俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」

「……………それはそれで、困る」

「ぐあああああっ！理不尽だああっ！」

霧島さんの握力で雄二の頭蓋が軋む音が聞こえてくる。

「で八、写真を撮りマース。はい、チーズ」

ピピッという電子音とともに撮影が完了した。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていて下さい」

「……わかった。このまま待つてる」

「ぐあああつー！このままだと俺の頭蓋がつー！」

霧島さんは握力を緩めることなくそのままの状態を保っている。

「ーはい、どうぞ」

写真が出来上がったので、霧島さんに渡した。

「……ありがとう」

霧島さんは嬉しそうに写真を受け取った。

「……雄二、見て。私たちの思い出」

咳き込む雄二に霧島さんが写真突きつける。

「……なんだ、この写真は」

「サービスで加工も入れておきました」

写っているのは霧島さんの後頭部と折檻に悶える雄二。そしてその二人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。アイアンクローをかます女性とそれに苦しむ男の周りを、未来を祝福するように天使が飛び回っている。俺が言うのもなんだが、こういう状況のカップルに幸せは訪れるのか？

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か！？コレを飾ることではなんのメリットがあるというんだ！」

さあ？

「……雄二、照れてる？」

「すまない。どこからどう見てもこの写真には照れる要素が見当たらない」

それは俺も同感だな。

『ああっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおうよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？おい係員。オレたちも写ってやんよ』

偉そうな態度でチャライカップルがやってきた。

「すみません。こちらは特別企画ですの……」

こつこつのはやんわりと断わるのが一番だからな。

『ああっ！？いいじゃねーか！オレたちやオキヤクサマだぞコルア』
『！』

『きゃーっ。リユータ、かっこいいっ！』

全く、『お客様は神様だ』という精神の持ち主がこんなにつざった
いとはな。

『だいたいよお、あんなダッセェジャリどもよりオレたちを写した方がココの評判的にも良くねえ?』

『そつよっ! あんなアタマの悪そうなおトコよりもリユータの方が百倍カッコイイんだからあ!』

係員をやってなければ即刻黙らせているところだ。

「行くぞ、翔子」

「……雄二がそう言うのなら」

ああクソ! このままじゃあの二人を見失っちまう。

『ああっ!?!? グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について投書すつぞコルアっ!』

『そーよっ! アタシたち、オキヤクサマなんだからねっ!』

取りあえずこの二人にはさっきの雄二や霧島さんと全く同じ構図で写真撮影をして、急いでその場から逃亡した。

『あ、明久君っ。頭が逆です！ああっ！今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

『うわっ、しまった！どうりで前が見えないと思った！』

『早く直さないと坂本君にバレちゃいます！』

雄二たちの所に向かっていたら、頭部が前後逆になっている雄ギツネの着ぐるみを着たバカと、雄二に気が付かれたことにすら気付かない大きなリボンを付けたキツネの着ぐるみを着たクラスメイトの優等生がいた。

……………本当に、この二人はお似合いのカップルだなあ……………。

「ハイ、すいませーン。お待たせしまシタ」

やっと雄二たちのところに追いついた。

「坂本雄二サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「だからイヤだと言っているだろうが」

ほほーう。そんなことを言うのか。だったら、

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

「やめろっ！そんなことをされたら我が家の家事が全て滞つてしま
う！」

家事をせずにプチプチを潰す所を一度見てみたいものだ。

「ところで明久君。さっき女子大生に声をかけられていたつて聞き
ましたけど？まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と……」

「え？なんのこと？僕は別に何もーあれっ？どうして携帯電話を
取り出すの？誰かを呼ぶ気？」

「美波ちゃんが今すぐ来てくれるそうです。お話、ゆっくり聞かせ
て下さいね？」

「だ、ダメだよっ！オープン初日で刃傷沙汰なんてこの評判にー
ーひいいっ！なんだか凄い勢いで誰かが走つてきてるみたいなんだ
けど！？土下座でもなんでもするから殺さないで下さいっ！」

離れた場所でファンシーなキツネの痴話喧嘩という珍しい光景が展開されていた。おっと、こっちも仕事をしなければ……。

「坂本翔子サン。お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

「……雄二。お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞキサマ、翔子を使って畏にハメようなんて！それと、勝手に翔子を入籍させるな！ソイツの名字は霧島だ！」

「……大丈夫。すぐ変わるから」

霧島さんは再び雄二の肘関節を極めた。うっん、実に痛そうだ。

「では、こちらにサインして下さい」

俺は書類とボールペンを取り出した。

「ただの誓約書デース」

「誓約書か。面白そうではあるな」

雄二は少し楽しそうにボールペンを受け取って書類に手をかけた。

【誓約書】

1. 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
2. 婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。
3. どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄二。実印」

「朱肉はこちらデース」

「俺だけか！？俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

コイツは何をバカなことを言っているのだろうか？

「冗談です。誓約書はいいので中に入れて下サイ」

「……うん。冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか」

もちろん！

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりし
マース」

「……お願い」

そういえば霧島さん、やけに大荷物だな。

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「このカバンをですか？わかりませタ。気をつけマース」

果たして何が入っているんだ？

「デハ、行ってらっシャイマセ」

「……雄二、行くっ」

「痛だだだっ！肘がねじ切れるっ！」

雄二の抵抗も空しく、二人はお化け屋敷の前に立つ。

「俺だ。お化け屋敷にターゲットが入った。明久考案の作戦を実行しろ」

俺は二人がお化け屋敷に入ったのを確認すると、再び無線機で連絡を取った。

え？誰と連絡を取ってるかだっけ？

秘密だ。

第二十問その二・少年少女よ、大志を抱け！

「お疲れサマでシタ。どうでシタカ？結婚したくなりまシタか？」

「アレと結婚を結びつけて考えることができるのはお前と明久ぐら
いだろうな……」

む。失礼な。折角明久が考案した秀吉が雄二の声真似をした【姫路
の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】という台詞と釘バツト
を用意したのに。

「オカしいデスね？危機的状况に陥つタ二人の男女八、強い絆で結
ばれルという話なのデスが……」

「まあ、襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなる
かもしれないが……」

「……そろそろ、お昼」

霧島さんが噴水の上の方を見ながら呟いた。そこにある大時計は午
後一時過ぎを示していた。

「デハ、豪華なランチを用意してありますので、こちらへいらして
下サイ」

所定の場所へ歩こうとした時、

「翔子、どうした？」

「……なんでも、ない」

ん？霧島さんが一瞬寂しげな顔をしていたような……？

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた。

「コチラでランチをお楽しみ下さい」

雄二たちを案内した先にはパーティー会場のような広間だった。そしてそこはレストランというよりは――

「……クイズ会場？」

そう。ここはクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらっしやいませ。坂本雄二様、翔子様」

そこにボーイが現れた。

「秀吉。ボーイの真似事か？」

「秀吉？なんのことでしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返す秀吉。さすがだ。

「違うというのなら、確認させてもらっぞ」

雄二が携帯電話を取り出し、通話ボタンを押そうとしたその時、

「おおっと、手が滑ってしまいました！」

秀吉はポケットから携帯電話を取り出し、噴水のある方向に思いっきり投げつけた。

遠くから小さくポチャン、と何かが水没する音が聞こえた。

「とうか何でどいつもこいつも『携帯電話の電源を切る』ということをしないんだ？」

「そ、そこまでやるか!? アレもう確実に壊れたぞ!?!」

変わらないポーカーフェイス。やるな、秀吉。

「それでは、こちらへどうぞ」

「あ、ああ……」

秀吉が雄二たちを連れて会場を移動する。

「さて、次の仕事に取りかかるか」

俺はレンと入れ替わり、次の仕事場へと向かった。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂

き、誠にありがとうございます！」

そう、私の仕事はこのアナウンスなのである。

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやるのです！》

遠くで水を吹き出す一名発見。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！題して、【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ〜！》

出入り口を封鎖する音が聞こえる。さすが明久ね。

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、ご本人の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》

もちろん本人というのは霧島さんのこと。

《それでは、坂本雄二さん&霧島翔子さん！前方のステージへとお進み下さい！》

私が二人の席を示し、観客の視線が一斉にそっちに向いた。

「……ウエディング体験……頑張る……！」

「落ち着け翔子。そうだったものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだっ！耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

スタッフに誘導され、二人が壇上に上がり、クイズの解答席へと案内された。

《それでは【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズを始めます！》

そう言いながら問題を受け取る。……って何なのこの問題は？

《では、第一問！》

深く息を吸い、問題を読み上げる。

《坂本雄二さんと霧島翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか？》

雄二がおかしいといった具合に呆けている。

ーピンポーン！

その間に霧島さんがボタンを押した。

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！正解です！》

雄二がこつちを睨みつけてくるので、観客に見えない角度で片目を瞑った返した。

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？》

ーピンポーン！

今度は雄二がボタンを押した。出来レースだと分かった今、アイツは意地でも間違えるつもりね？

《はいつ！答えをどうぞっ！》

「鯖の味噌煮！」

《正解ですっ！》

「なにいつ！？」

雄二の顔が驚きが変わる。

《お二人の拳式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

「待ていつ！絶対その別名はこの場で命名したたる！強引にも程があるぞ！」

《第三問！お二人の出会いはどこでしょうか？》

雄二の言葉を聞かずに強引に進める。

すると雄二がボタンを押そうとする。間違った解答をする気ね？

「……させない」

ブスッ

「ふおおおっ!?!目が、目があっ!」

ーピンポーン!

《はい、解答をどうぞ!》

「……小学校」

《正解です!お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るといふ、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです!》

目潰しは気にしない。

《第四問参ります!》

ーピンポーン!

雄二のヤツ、問題を読む前に間違える気ね！？こつなったら……

「ーわかり」

《正解です！それでは最終問題です！》

そつちが問題を無視するのなら、こつちは解答を無視するまでよ！

いよいよ最終問題に突入しようとしたその時、

『ちょっとおかしくなくい？アタシらも結婚する予定なのにどうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ？』

不愉快な声が会場に響いた。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうかー』

『ああっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

どこかで見たとと思ったら、さっき絡んできたチンピラたちね。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？』

『で、ですがー』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア！オレたちもクイズに参加してやるって言うてんだボケがっ！』

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

『そ、そんなー』

慌てるスタッフをよそに、そのカップルはズカズカと壇上に入り、設置してあるマイクを一つひったくる。

おそらく雄二はどんな問題が出てても間違えるつもりね？

『じゃあ、問題だ』

さて、どんな問題がー

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

「……………」

言葉を、失った。

『オラ、答えるよ。わかんねえのか?』

確かに分からないといえば分からない。私の記憶が正しければ、ヨーロッパが国であったことはただの一度もない。だからその首都を答えるのは不可能だ。

《……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月八イランドウエディング体験】をプレゼントいたします》

『おい待てよ!こいつら答えられなかっただろ!?オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』

『マジありえなくない!?この司会バカなんじゃないの!?!』

バカップルがぎゃあぎゃああと騒ぎ立てる中、ステージに幕が下りてくる。

明久以上のバカがいるなんて、世界って広いのね……。

「おメデとうございマス。ウエディング体験が当たるなんて、ラッキーでスね」

「……凄く嬉しい」

霧島さんにカバンを返す。

「そういえば翔子。お前の持ってきたカバンは何が入っているんだ？随分と大きいが」

「……別に、何も……」

「翔子サン、ウエディング体験の準備があるノデ、このスタッフについていってもらえマスか？」

俺の後ろから三十前後の女性スタッフが歩み出て頭を下げる。いかにも業界人といった風貌の人だ。

「初めまして。貴女のドレスのコーディネートを担当させて頂きます。一生の思い出になるようなイベントにする為、お手伝いをさせて頂きたい」

そう言つてスタッフは霧島さんに笑顔を向けた。

「つてことは、俺は長い時間待たされるのか？」

まあドレスを着てメイクをするととなると、かなりの時間がかかるだろう。

「ご安心下さい。坂本雄二さんについての対応はワタシが考えてあげます」

「お前が考えているのか？」

「ハイ。坂本雄二さんにはコレを使おう、ト」

俺が取り出したのはスタンガン（二十万ボルト×七個）

「坂本雄二さんは逃亡を考えるだろうカラ、コレで気絶させてカラ着替えさせようと思ひマス」

「こ、この野郎ーっ！」

「少しガマンして下サーイ」

バチバチと大きな音が響いて雄二が気絶したのを確認した後、俺はヤツの着替えを開始した。

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

園内全てに響くんじやないかと思える程の拍手が聞こえてきた。

「坂本雄二さん、お願いします」

雄二は今にも俺をブチのめそうとしているようだ。

「抵抗すれば、海胆とタワシの生け造りをアナタの実家に送りマース」

「やれやれ……。まあ、あくまでもただの体験だしな。適当に付き合ってさっさと終わらせるか……」

雄二の返事がやけに大きい。コイツ、まだ何か企んでやがるな？

「ヤマ、どづづ」

「あいよ」

雄二がトントンと小さな階段を昇る。しばらくすると、アナウンスが流れてきた。

《それでは新郎のプロフィールの紹介をー》

新郎のプロフィール紹介なんて、まるで本物の結婚式みたいー

《ー省略します》

おい、手え抜きすぎだろ。

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に使えるかどうか問題だからな』

『だよ〜』

この声……さっきのチンピラどもか。こんな場面で大声で会話とは、外観通りのマナーの持ち主だな。

《……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってるの〜？』

『違えだろ。俺らはなんたってオキヤクサマだぜ？』

『だよ〜っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分が良いか悪いかってのが問題だろ？な、これ重要じゃない？』

『うんうん！リユータ、イイコト言っね！』

調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響き渡る。ここまで騒がれ

たら迂闊に手を出せない。

《ーーそれでは、いよいよ新婦のご登場です》

会場の演出のおかげで、否応なしに雰囲気盛り上がる。

《本イベントの主演、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。

そしてそこには、純白のドレスに身を包んだ霧島さんがいた。

『……………綺麗』

誰とも分からない台詞が漏れ、静かな会場に響いた。

実際俺もレンも何も言葉が出ず、静かに会場を見守っていた。

「……雄二……」

「翔子、か？」

「……うん」

雄二の口からは言わずもがなの質問が出てきた。

「……どう……？私、お嫁さんに、見えるかな……？」

「……ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

普段なら呆れる返事だが、霧島さんのあの姿を見たらそれも無理はないだろう。それが出ただけでも上出来だと思う。

「……雄二……」

「お、おい。翔子……？」

霧島さんの様子がおかしい。どうしたんだ？

「……嬉しい……」

霧島さんがそれ以上言葉を発することなく静かに震え出した。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが……？》

仕事を思い出したかのようにアナウンスが入る。

よく見ると、俯いて肩を震わせて――霧島さんは静かに泣いていた。

「お、おい。どうした……？」

観客からは静寂の代わりにざわめきが生まれる。そんな中、彼女は小さな、けどはつきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと……夢だったから……」

《夢、ですか？》

「……小さな頃からずっと……夢だった……。私と雄二、二人で結婚式を挙げること……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……」

ポツポツとだが、霧島さんが懸命に紡ぐ言葉には、何かしらの強い

感情が込められている。誰にも否定することが許されないような、そんな感情が。

「……だから……本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄二と一緒に……」

そこからは言葉にすることが出来ずに霧島さんはまた静かに泣いた。

会場からはもらい泣きをしたような音が聞こえてくる。こんなに神聖な雰囲気は初めてだ。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようにです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》

雄二の返答を待つ為に、会場の皆が固唾を飲んで見守っている。

「翔子。俺はー」

『あーあ。つまんなーい!』

雄二が何かを言いかけたところで、観客席から大きな声があがる。

『マジつまないこのイベントお〜。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い?』

『だよな〜。お前らのことなんかどうでもいいっての』

さっきの馬鹿二人組の音がする。

『ってか、お嫁さんが夢ですっ、って。オマエいくつだよ?なに? キャラ作り? ここのスタッフの脚本? バカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの? そんなもん観る為に貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお〜。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない? ギャグにしか思えないんだケドお〜』

『そっか! コレってコントじゃねえ? あんなキモい夢、ずっと持ってるヤツなんていねえもんな!』

『え〜っ!? コレってコントなのお? だとしたら、超ウケるんだケドお〜!』

口々に文句を言い、霧島さんを指差して笑い始める二人組。すると、

《んだとテメエらっ! もういっぺん言ってみやがれ!》

「あ、明久君！落ち着いてっ！ステージが台無しになっちゃいます！」

そんな放送が入り、誰かが暴れるような音が聞こえてきた。おそらくうちの学園が誇る大バカだろう。けれど、

「あのふざけたバカップル……ぶっ潰してやる……」

今ばかりはそいつに全面賛成だ！

『（落ち着きなさいこのバカ！瑞希が言ったことが聞こえなかったの？今出て行っても何にもならないわよ！）』

「（じゃあどうすりゃいいんだよ！？）」

『（考えがあるから替わってくれろ？）』

「（……………分かった。お前に任せる）」

《霧島さん？霧島翔子さん！皆さん、花嫁を捜して下さい！》

会場ではスタッフがバタバタと駆けだしている。

「さ、坂本雄二さん！霧島さんを一緒に捜して下さい！」

声ができる方を向くと、雄二を説得している一人のスタッフがいた。

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え？ちょ、ちょっと、坂本さん……！」

「坂本雄二さん」

「ん？どうした？」

私の呼びかけに雄二が振り返る。

「お手洗いに行く際には『偶然』会った相手に対してのアフターケアをお忘れなく」

そう言って雄二に、さっき厨房でもらった練りわさびがたっぷり入

ったチューブと塩水入りのペットボトルを一本ずつ渡す。

「ほう……。こいつは助かるな」

雄二が私の考えを悟ったような笑みを浮かべる。

「それと、小腹が空きましたらこちらをご利用下さいませ。長々と引き留めてしまい、申し訳ございません」

「いや、こっちこそわざわざすまないな」

「それではごきげんよう」

今度はお茶が入ったペットボトルを渡してお辞儀をし、その場を去った。

「（）ところでさ、渡すのが何で練りわさびと塩水なんだ？」

『（）あら、知らないの？（）』

「（何を？）」

『（）練りわさびも塩水も傷口に当てるとすっすっすっすっくくしみるのよ（）』

「（俺は今何よりお前が怖い……）」

「ちょっと、君」

「どうしました？」

さっきのスタッフに呼び止められた。

「さっき随分と細かくて優しい気遣いが出来ていたけど、何か接客業のアルバイトでもやってるのかい？」

「いいえ。いいえ」

私は二回返事をした。

「??どういうことだい？」

「私は接客業のアルバイトをしていません。そして、細かくても優しい気遣いをした覚えもありません」

そう、私のさっきの行為はあの二人組にたいする怒りからくるもので、決して優しいわけではない。

「（仕事も終わったし、アイスでも食べに行こっか）」

『（そうだな。疲れた体には糖分が最適だからな）』

こうして、俺たちの長い一日は終わった。

週明けの学校にて。

「おい、明久に亮」

「ん？おはよう、雄二。どうしたの？」

「やけに嬉しそうじゃないか」

「如月ハイランドでは随分と色々とやってくれたな」

「あははっ。何を言ってるのさ。僕は一日家でゲームをやっていたんだよ？如月ハイランドになんて行けるわけないじゃないか」

「如月ハイランド？一体何のことだ？」

「……そうか。お前らがシラを切るならそれでもいいだろう」

「な、何を言ってるのさ。変なヤツだなあ」

「全くだ」

「ところで、お前にプレゼントがある」

「え？なにになに？」

「へえ。そいつはありがたいな」

「今話題の恋愛映画のチケットだ。気になる相手がいれば一緒に行くといい」

「ペアチケット？明久はともかく、俺がそんなのもらっても、使い道に困ってー」

「それじゃあな」

雄二は強引に俺たちの手の中に一枚ずつチケットを握らせ、離れていった。

「ねえ亮。さっきの話ってどういうー」

「さあな」

こちらに迫り来る二つの気配を感じ、俺は明久の席から離れて教室を出る。

『あ、アキっ！そういえば、ウチ週末に映画を観たいと思っていたんだけどー』

『あ、明久君！私も丁度観たい映画があつたんですけど！』

『ほえ？なにになに？どうして二人ともそんなに殺気だつてるの！？このチケットは換金して生活費に痛あゝあゝっ！もげちゃう！人体の大事なパーツが色々取れちゃうよ！』

遠くからはお馴染みの悲鳴が聞こえてきたが俺はそれに構っている暇はない。何故なら、

「ねえ？映画のペアチケットってどういうことなの！？」

何故かFクラス前の廊下にいた優子とその後ろに佇む死神らしき何かをどうにかしなければいけないからだった。

第二十一問その一・突然他人のカミングアウトを聞くとびっくりする（前書き）

この小説ってジャンルでいうと性転換に入るんでしょうか？

第二十一問その一・突然他人のカミングアウトを聞くとびっくりする

先週末に行われた『雄二&霧島さん結婚大作戦』も無事(?)に終わり、いつもどおり平穏な週末の夜。俺と雄二は明久の家に泊まりで遊びに来た。

「あれ？雄二、何か買ってきたの？」

「食い物だ。お前の家にはろくな物が無いからな」

「それについては俺も同感だな」

雄二はテーブルの上にビニール袋を置き、俺は自分のカップラーメンを食べている。

「へえ〜。差し入れなんて、随分気が利くね」

ビニール袋の中には食べ物と飲み物が入っていた。

- ・ コーラ
- ・ アイスコーヒー
- ・ カップラーメン
- ・ カップ焼きそば

「それで、雄二はどっちにするの?」

どっちにする、とは飲み物と食べ物それぞれのことだろう。

「俺か?俺はコーラとコーヒーとラーメンと焼きそばだ」

「雄二キサマ!僕には割り箸しか食べさせない気だな!」

「待て!割り箸だけでも食おうとするお前の思考に一瞬引いたぞ!」

「有機物だから食べないことはないけどさ……」

さすがに割り箸はないだろう。

「というか、割り箸がないと俺は素手でラーメンを食う羽目になるだろうが」

それはそれで一度見てみたいものだ。

「まあ割り箸はやらんが、代わりに他の物をお前にもきちんとしてきてある」

「え？そうなの？」

「ああ。もう一つ袋があるだろ？そっちがお前の分だ」

「良かったじゃないか明久」

よく見ると一つ目の下敷きになって二つ目のビニール袋があった。

「なんだ。やっぱり僕の分も買ってきてくれていたんじゃないか」

「まあな。先週末は世話になったからな。感謝の気持ちだ」

「うんうん。そう言ってもらえると僕も苦労した甲斐があるよ」

下敷きになっていた袋の中には、きちんと食べ物と飲み物が入っていた。

- ・こんにゃくゼリー
- ・ダイエットコーラ
- ・とろろてん

「僕の貴重な栄養源があーっ！」

ただし、全てカロリーオフだけど。

「気にするな。俺の感謝の気持ちだ」

「くそっ！全然感謝してないな！？あの計画を実行するのに僕がどれだけ苦労したと思っっているんだ！」

明久が袋からダイエットコーラを取り出して構える。

「うるせえ！お前こそ、あれ以来俺がどれだけ苦労しているのかわっているのか！」

対する雄二は普通のコーラを構える。

「……やる気かい、雄二？」

「ああ。お前とは決着をつける必要があると思っっていたところだ」

「上等。早撃ちで僕に挑んだことを後悔するがいいさ！」

「ハッ！口だけは達者だな！」

互いに相手を睨みつけ、牽制しあっている。ここで下手な動きを見せれば命取りになる。

一触即発の状況の中、キッチンから水が一滴落ちる音が響いてきた。

ーピーチヨン

「ーっ!!」

その音がきっかけでお互いがほぼ同時に動き出した。

シャカシャカシャカ（明久と雄二がペットボトルを振る音）

ブシャアアアア（お互いに向けてコーラを射出する音）

バタバタバタバタ（明久と雄二が目を押さえてのたうち回る音）

「目が、目がああああっ!!」

二人ともコーラが目染みたらしい。

「やっってくるじゃねえか、明久！」

「雄二こそ。さすが僕がライバルと認めた男……!!」

「だが、ここからは本気だ！」

「僕だって負けるもんか！」

そして、雄二はコーヒー、明久はところてんを武器にして戦いに身をゆだねていく様子を、俺は特に止めもせずにかップラーメンを食べながらのんびり眺めていた。

「ーしばらくお待ち下さいー」

「……雄二。一時休戦にしない？」

「……そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」

二人ともお互いの食べ物でベタベタになっていた。

「明久。シャワー借りるぞ」

「うん。タオルは適当なのを使っていいよ」

「言われなくてもそうする」

そう言うと、気持ち悪そうに着ているシャツを摘みながら雄二が脱衣所の方へと消えていった。

続いてバサバサ、と景気よく衣服を脱ぎ捨てる音が聞こえてくる。

「あ、そういえばさ、雄二。言い忘れていたんだけど」

『なんだ？』

バスルームからドア越しの声。その少し後に蛇口を捻る音が鳴った。

「ガス止められてるから水しか出ないからね」

「いや、言うの遅いから……」

『ほわああっーっ！？』

ガチャツ　ズカズカズカ

「……先に言えやコラ」

「な？遅かっただろ？」

腰にタオルを巻いた雄二は寒さで全身に鳥肌を立てていた。

「ごめんごめん。言い忘れていたよ。えっとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると体に悪いから、まずは手や足の先にかけてから徐々にー」

「誰が冷水シャワーの浴び方を説明しろって言った!？」

「なに熱くなってるのさ雄二。そうだ。冷たいシャワーでも浴びて冷静に」

「たった今浴びたから熱くなっているんだボケ!……くそつ。このままじゃ風邪引いちまう」

「そんな事言っても、明久の家のお湯が出ないという事実は変わらないぜ……」

「やれやれ……。仕方ない。二人とも、外に出るぞ」

服を着た雄二がそう告げた。

「外?俺か雄二の家にも行くのか?」

「それでもいいんだけどな。どうせならシャワーだけじゃなくてプールもあるところに行こうぜ」

「プールのあるところ?」

近くにスパリゾートなんてあったっけな？

「ああ。シャワーもプールもあって、ここから近くて、尚且つ金もかからないところがあるだろうが」

そんな好条件を満たすところなんてこの辺にはーああ、あった。それと同時に俺はこの前職員室に行った時に何気なく見たあることを思い出した。

「オツケー。すぐに用意するよ。雄二は水着どうするの？」

「俺はボクサーパンツで泳ぐさ。水着と大して変わらないだろ」

「りょーかい。亮はどうするの？」

「俺はパス。用が出来たから帰らせてもらっぜ」

「そうか。気をつけろよ」

「二人こそな……………んじゃあな」

「「？」」

二人揃って首を傾げている。

俺が思い出したこと、それは二人の目的地である文月学園の今日の宿直担当が鉄人だということだった。

願わくば、二人に幸多き未来があらんことを。

「……………で、宿直担当の鉄人に見つかって二人とも朝まで鉄拳付きの補習を受ける羽目になったと……………」

「おかげで散々な週末だったよ」

週明けの教室。朝のHRが始まるまでの時間、俺たちはいつものメソバで卓袱台を囲んでいた。

「そうじゃったのか。それは災難じゃったのう……………」

秀吉が気遣うように柔らかな表情を浮かべている。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」

「……………重労働」

ムツツリーニがボソリと呟いた。

「だよね。あんなに広いところを掃除するなんて、考えただけでも気が滅入るよ」

「何か褒美とかは無いのか？」

すると雄二が俺の質問に答えるように、こんなことを言い出した。

「褒美というほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「そっなのか？」

「ああ。だから秀吉とムツツリーニと亮も今週末にプールに来ないか？」

まず最初にムツツリーニが頷こうとして、

「ただし、ムツツリーニには掃除を手伝ってもらっけどな」

「……………」

雄二の言葉を聞いて動きを止めた。

さっきムツツリー二自身が言ったように、プール掃除は重労働だ。迷っても無理はない。

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ」

……………現金なヤツ。

「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじゃろっし、相伴させてもらっかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「俺も同意見だ。こっこののは皆でやった方が楽しいしな」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

「家にもどうせ暇だしな」

五人で掃除すれば少しは楽になるだろう。

「んじゃ、あとは向こうの二人だな。おい、姫路、島田」

「どうしたの坂本？何か用？」

まず島田がやって来た。

「呼びましたか、坂本君？」

続いて姫路がやって来る。

「二人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「え……？」

プール、という単語で二人が一瞬ビクンと反応する。用事でもあるのか？

「あ、さては二人とも予定があつたりする？」

明久も俺と同じことを考えていたらしく、島田にそんなことを聞いた。

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？ プールっていうと、やっぱり水着だし……」

「そ、そうですね。水着ですよ……。その、えっと……」

島田は自らの胸部へ、姫路は自らの腹部へ、それぞれ視線を送っている。悩み多き年頃のようだ。

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っておくと、秀吉と亮は来るぞ。水着姿を明久に見せに、な」

別にそんなわけではないけど、どうして雄二はそんなことを言い出すんだ？

「ひ、卑怯よ木下に神谷！自分たちは自信があるからって！」

「そ、そうですねっ！二人ともズルいです！」

「????お主らは何を言っておるのじゃ？」

「全く意味が分からないんだが……」

何故か二人に非難されてしまった。卑怯って、一体どういう事だ？

「で、どうするんだ二人とも？」

「い、行くわ。その、イロイロと準備をして」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

台詞が引っかかるが、どうやら二人ともOKのようだ。

「……………（クイクイ）」

突然ムツツリーニが俺の袖を引っ張った。

「どうした？ムツツリーニ」

「……………お前のスケッチ道具一式を持ってきてくれ」

いきなりそう呟いた。

「神谷君って絵を描いてるんですか？」

向こうで水着の話をしていた姫路が聞いてくる。

「ただの手慰みだけだな」

「あれ？そうだったっけ？」

「明久。人の趣味くらい覚えとけ」

「全くだ」

俺も雄二も呆れ顔になっている。

「俺は一年の時の自己紹介で言ったはずだぜ。趣味はスケッチとメカ作りって」

「そうだったっけ？」

明久が首を傾げている。コイツ本当に覚えてないな？

「ま、無理もないか。あんな格好して自己紹介するようなバカがそ

んなことを覚えてるわけないもんな」

「なっ!? あ、あれは違うんだ!」

「え? 神谷君、それってどういうー」

「それよりも雄二。霧島さんにもきちんと声をかけておいてね」

「……言われなくてもそのつもりだ」

おや? 雄二にしては随分素直な返事だ。何かあったのか?

「うんうん。雄二も大人になったね」

「いや、そういう問題じゃない」

「それじゃ、どういう問題なんだ?」

「いいか、想像してみろお前ら。俺の立場で、後々になってからこのことが翔子に知られるという状況を」

雄二が妙に真剣な顔をしているので、俺も真剣に想像してみる。

えっと、雄二の立場で、水着の女子とプールで遊んだという事実が霧島さんに知られたら……、

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「俺の手錠……いや、鎖……」

「俺の死体の処理方法まで想像する必要はないが、まあそんなところだ。というかそんなもんを翔子に貸さないでくれ。マジでヤバいから」

どつりで雄二にしては珍しく声をかけるわけだ。俺だって命は惜しい。

「とにかく全員オツケーのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

そんな雄二の締めめの台詞とほぼ同時に、鉄人が教室のドアを開ける音が響いた。

「皆おはよー。良い天気だな」

その週末。青空の下、俺は校門前に立つ明久と姫路と秀吉に声をかけた。

「おはよー亮。絶好のプール日和だね」

「おはようじゃ亮。良い天気じゃな」

「おはようございます神谷君」

三人が笑顔で挨拶を返してくれる。

すると視界の端にムツツリーニが待機していた。

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

鬼気迫る表情でカメラの手入れをしながら。

「よ、ムツツリーニ。ちゃんと持ってきたぜ」

俺はカバンからスケッチブックを取り出してムツツリーニに見せる。

「……………（グッ）」

ムツツリーニは俺に向かって親指を立てると、再びカメラの手入れを始めた。

「ムツツリーニ。準備はいいけど、無駄になるんじゃないのか」

「……………なぜ？」

「いや。だってムツツリーニはどうせ鼻血で倒れるんじゃないか」

「そうだよ。だからカメラは意味がない気がするんだ」

するとムツツリーニは肩をすくめてみせた。

「……………甘く見てもらっちゃ困る」

言いながら大きなスポーツバッグを開けて俺たちに見せてくるムツツリーニ。

「……………輸血の準備は万全」

「違う意味で準備がいいな」

「うん。最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」

鞆一杯に入っていたのは携行用の血液パックだった。どうやって手にいれたんだ？

「準備といえは、秀吉は新品の水着を買ったか言ってたよね？忘れずに買ってきた？」

「うむ。無論じゃ」

「へえ〜。奇遇だな。実は俺もだ」

俺と秀吉は持ってきた鞆を掲げる。

「ちなみに、買ってきた水着じゃが（だが）ー」

「……………！！（くわっ！）」

秀吉の言葉にムツリニが目をむき、

「ーートランクスタイプじゃ（だ）」

「バカなああああっ！！」

明久と同時に地面にひれ伏した。

「最近お主らはワシを女として見ておるようじゃからな。こゝろで一度ワシが男じゃということを再認識させよう」と二人とも聞いておるか?」

「酷いよ秀吉に亮! 君たちは僕のことを嫌いなのかい!」?

「……………見損なつた……………!」

「…何で俺たちは責められているんだ?」

「ワシにもさっぱり分からぬ」

「き、気にしないでいいと思いますよ。二人とも」

どうやって明久を説得しようかと考えていると、

「タタタタタッ」

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ!」

「わわっ!」?

「もう葉月ってば。アキがびっくりしてるでしょ?」

明久の背中に葉月ちゃんが飛びついた。

「よっ。久しぶりだな葉月ちゃん」

「えへへー。二週間ぶりですっ」

葉月ちゃんとは召喚大会以来だから、確かに二週間ぶりの対面だ。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いです。どうして葉月は呼んでくれないんですかっ？」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

もともと、呼んだ場合は明久が君のお姉ちゃんに八つ裂きにされていたと思っぜ。

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねてきかないもんだから……」

島田が溜め息混じりに呟く。どうりで来るのが少し遅かったわけだ。

「あれ？坂本はまだ来てないの？ウチが最後だと思ったのに」

「いえ、もう来ていますよ。今職員室に鍵を借りに行っ……あ、

「丁度戻ってきたみたいですよ」

姫路の説明の最中に、校舎の方から雄二と霧島さんが歩いてきた。

「おはよう雄二、霧島さん」

「ういっす」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「……おはよう」

「お兄さん、おはようですよ」

雄二の粗野な外見に物怖じもせず、元気よく挨拶をする葉月ちゃん。

「ん？チビッ子も来たのか」

「チビッ子じゃないですよ。葉月ですよ！」

「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」

「はいっ」

楽しそうに葉月ちゃんの頭にポンポンと手を置く雄二。やっぱり子

供好きなんだな。

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦男女に別れる。姫路と島田は霧島さんに、俺と明久とムツツリー二と葉月ちゃんと秀吉は雄二にーって、あれ？

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉と亮は女子更衣室でしょ。霧島さんについていかないとダメだよ」

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談じゃないのじゃが……?」

「いや、俺も冗談じゃないぞ?」

なぜ俺が女子更衣室なんだ?

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下、神谷」

「し、島田!?!?ついにお前までそんな目で俺を見るようになったのか!?!?」

「嫌じゃ！女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ！」

俺だってそれは勘弁だ。

「あの……。それなら、木下君と神谷君はどこか別の場所で着替えるってというのはどうですか？」

姫路がおずおずと手を挙げて提案した。ま、仕方ないか。

「ぬ、ぬう……。得心行かぬが、この際我慢じゃ……。水着姿を見せればきっと皆もワシのことを見る目が変わるはずじゃ……。」

そんな事をブツブツ言いながら、秀吉は水着の入っているカバンを握り締めた。

俺は水着を持って校舎の中に向かった。

『ち、違つのじゃ！ワシは本当に男物を買つた筈なのじゃ！』

着替え終わってプールに向かっていると、そんな秀吉の声が聞こえてきた。

「どうした秀吉？まさか間違えて女物を買ってきたとか？」

「そうなん…だ…よ…亮…」

俺を見た明久の顔が固まってくのが分かる。何があつたんだ？

「どうしたんだ明久？いつものバカ顔に磨きがかかっているぞ？」

「って神谷！まずはアンタの格好を見てみなさいよ…」

島田にそう言われ、俺は改めて自分の格好を試してみる。

上は見た目は秀吉と同じようなタンクトップなのだが、こっちは後ろについている紐でウエストの調整が可能となっている。

そして下はジーンズを切つたようなパンツとなっている。ーそうか。そういうことか。

「明久は俺が男物の水着を着たから落胆しているんだよな？」

「それは違つと思つんですけど……」

姫路までもがこつちを見て固まっている。

「葉月はその水着、女の子用だと思つてす」

「え？そつなのか？」

全く分からなかった。最近の水着は巧妙に出来てるなあ……。

「それじゃ、これで問題はないでしょ？」

女である私が出てくれば水着の問題は克服できるはず。

そんな私たちのやり取りの隣で、霧島さんは心配そうに雄二に声をかけていた。

「……雄二。目、大丈夫？」

「ん？ああ。大丈夫だ翔子。だいぶ見えるようになってきた。だが、心配するなら目潰しなんかー」

「……それなら、もう一度^{フスッ}」

「さ、三度目！？お前俺に何か恨みでもあるのか!？」

「……ここには雄二に見せられないものが多いすぎる」

雄二は水に入る前に病院に運ばれそうな勢いだった。

雄二の目、本当に大丈夫なの？

第二十一問その二・トップとウエストの差が10センチだとAカップ、20センチ

ちょっと悪い意味でやり過ぎたので、訂正させて頂きました。

m () m

第二十一問その二・トップとウエストの差が10センチだとAカップ、20センチ

（明久サイド）

「あの、明久君にレンさん」

軽く準備体操をしてプールに飛び込むと、梯子を使ってそろそろと水に入ってきた姫路さんが近くにやってきた。

612

「ん？なに、姫路さん」

「どうしたの？瑞希」

「二人は水泳は得意ですか？」

「あ、うん……」

「ま、人並みだけどね……って明久。どうして瑞希から目を逸らすの？」

それは姫路さんがパレオを外しているから。

「実は私、全然泳げないんです」

「あ、そうなの？」

「あんまり気にすることないわよ」

姫路さんには悪いけど、凄い速さで泳いだりする彼女の姿は想像で
きない。

「ん？瑞希って水泳苦手なの？」

こっちは僕と同じように景気よく水に飛び込んで美波のセリフ。姫
路さんとは対照的で、美波は運動全般が得意だったりする。

「はい。恥ずかしいんですけど、水に浮くくらいしかできなくて…
…」

真面目な姫路さんのことだ。きっと苦手でも練習して上手になりた
いと思っているんだろう。

「そういうことなら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、ウチが瑞希に泳ぎを教えてあげよっか？」

ちよつと得意げに美波が胸を張る。常日頃は姫路さんに教わってばかりなので、こついつた意趣返しが嬉しいのだろう。

「それじゃ、私も教えてあげるわ」

「は、はい。宜しく願います」

「任せてっ。こつ見えても水泳は得意なんだから」

「頑張りましょう！瑞希」

「はいっ！」

このやり取りがいつもと逆の立場を見ているようで面白い。勉強では、Aクラスレベルの姫路さんがFクラスレベルの美波にいつも教えてあげているし、レンは勉強もAクラスレベルで水泳もうまいから――

「――こつして見ていると、美波がAで姫路さんがFでレンがAAみたいだね」

「私はもとからBくらいなんだけど……」

「寄せて上げればBくらいあるわよっ!?!」

「ぐぐぐあっ!?!?」

何!?!なんでいきなり美波に殴られたの!?!?

「……来年には、きっと」

美波が顔を逸らして呟く。なんだかよくわからないけど、今の最後に付け加えられた言葉は卑怯な気がした。

「あ、明久君……。そういうことは、面と向かって言われると、その……」

そして僕の正面では姫路さんが顔を真っ赤にしている。確かに本人を目の前に水泳がFクラスレベルだね、なんて言うのは失礼だ。もちろん、本人が目の前にいなくても失礼だけど。反省しよう。

「……雄二。ちなみに私はCクラス」

「?何を行っているんだお前は?」

離れた場所では雄二と霧島さんも不思議な会話をしていた。ムツツリー二が妙に目を輝かせているのが謎だ。

「……わかったわ瑞希。アンタが泳げない理由」

「え？なんですか？」

「そんな大きな浮き輪をずっとつけているからいつまで経っても泳げないのよ！外しなさい！そしてウチに寄越しなさい」

「み、美波ちゃん落ち着いて下さい。目が怖いですよ！？」

「瑞希には分からないのよ！水の抵抗が少ないおかげで速く泳げるっていうウチの悲しみが！」

「そ、そんなこと言われても……」

どうやら二人は速く泳げるかどうかの談義に花を咲かせているみたいだ。邪魔をしない方がいいだろう。

「それじゃあ僕たちは向こうに行ってるから」

「二人とも頑張りなさいよ」

「あ、明久君にレンさんっ。なんだか美波ちゃんがとつても怖いですっ」

「ふふふ……。瑞希、ソレは無駄な脂肪の塊なのよ？だから、いっぱい運動して燃焼させましょうね？」

美波はビシビシと水泳を教える気だ。助けを求める姫路さんには悪いけど、ここは心を鬼にしよう。姫路さんが泳げるようになる為に。

『み、美波ちゃん。あまり良い事ばかりでもないですよ？肩が凝って大変ですし……』

『それでもいいの！肩凝りくらい我慢するわ！』

離れ際に聞こえてきた美波の台詞は魂が籠もっているような気がした。

「お兄ちゃんっ」

「わぶっ!?!」

レンと分かれて別の場所で泳いでいると突然何かに乗ってきて、こ

らえきれずに水中に沈んでしまっ。

「な、何!？」

「えへへー。お兄ちゃん、葉月と遊ぶですっ」

水面に顔を出すと葉月ちゃん的笑顔が見えた。なんだ。さっきのは葉月ちゃんが飛び乗ってきた衝撃か。

「うん。いいよ。何して遊ぼうか？」

「じゃあ、『水中鬼』をしますっ」

「水中鬼?要するに水中でやる鬼ごっこのことかな？」

なるほど。普通に外でやるのとはまた別の面白さがありそうだ。

「違いますっ。鬼ごっこじゃないですっ。『水中鬼』ですっ」

「?鬼ごっことは違うの?」

「水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追いかけるです。それで、鬼が他の人を」

葉月ちゃんがちょっと胸を張って教えてくれる。けど、やっぱり僕の考えと同じようなんだけど。それで鬼が他の人にタッチしてー

「鬼が他の人を水の中に引きずりこんで、溺れさせたら勝ちですっ」

「鬼だ！それは確かに鬼だ！」

道理で『ごっこ』の部分がなくなるわけだ。最近の小学生は恐ろしい遊びをしているなあ……。いや、葉月ちゃんのオリジナルかもしれないけど。

「でも、ダメだよ葉月ちゃん。そんな遊びは危ないよ」

「あう……。ダメですか？」

ちょっと不満そうに葉月ちゃんが頬を膨らませる。ここはお兄さんとして、『水中鬼』がどれだけ危険か教えてあげる必要があるだろう。

「いい、葉月ちゃん。その遊びはとっても危険なんだ。今からそれを教えてあげるねーおーい、霧島さん！」

ちょっと離れたところにいる霧島さんと呼ぶ。

「……………なに？」

すると、霧島さんはすぐにやってきてくれた。泳ぎも上手だなあ。

「雄二と水中鬼って遊びをやって見せて欲しいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずりこんで、溺れさせたあとで人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

「……………行ってくる」

小さく頷くと、霧島さんはまるで魚雷のように静かに、そして速く水中から雄二に接近していく。

『お？なんだ？いきなり足が……………おわあっ！？だ、誰だ！？誰が俺を水中に（ガボガボガボ）』

『……………雄二。早く溺れて』

『ぶはあっ！しょ、翔子！？何をトチ狂って……………！（ガボガボガボ）』

『ちよつと雄二！？そんなトコ掴まないでよ！私まで溺れちゃ……………』

遠くで繰り広げられる水中鬼。

「ね？危ないでしょ？」

「はいです……。葉月、水中鬼は諦めるです……」

わかってくれて良かった。こうして命の尊さを学んでもらえるのなら、雄二の一人や二人くらい安いもんだ。

「明久っ！てめえの差し金だな！？」

「ちょっとアンタ！霧島さんに何を吹き込んだの！？」

「うわっ！ダメだよ霧島さん！きちんと捕まえておいてくれないと
！」

「……」
「……」

「わっ。お兄ちゃんたち、泳ぐのとっても速いですっ」

僕と雄二とレンと霧島さんの水中鬼、スタート。

く亮サイドく

「あれ？プールを使っているのは誰かと思ったたら代表だったの？」

レンと入れ替わり明久と命がけの水中鬼をやっていると、久しぶりに聞いた声がした。

「……………愛子？」

霧島さんが向いた方と同じ方を見ると、Aクラスの工藤さんがいた。

「Aクラスの工藤か。どうしてこんなところにいるんだ？」

「ボク？ボクは水泳部だから」

「あれ？今日は水泳部は休みのはずだぜ？」

「うん。すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど――人の声があったから寄ってみたんだ。良かったらボクも混ぜてもらっていい？」

「ああ。別に構わないぞ。俺たちのプールってわけでもないし――」

言葉を区切って雄二が島田たちのいる方を指差す。

「――既に一人、誰か増えているみたいだしな」

見ると、そこには一人知らない女子が増えていた。

『お姉さまっ！どうしてプールに行くのならミハルに声をかけてくれないのですか！？ミハルはこんなにもお姉さまのことを愛していますのに！』

『ミハル！？アンタどうしてここにいるのよ！プールで遊ぶなんて誰にも言わなかったはずなんだけど！』

『ミハルにはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありますから!』

あれは誰なんだ？

「なにやら賑やかになってきたのう」

秀吉がこっちにやってきて、その後ろから姫路と葉月ちゃんが続いた。

「あれ？優子ーじゃないみたいだね。弟君だっけ？」

「ふむ。そうじゃが。お主は姉上の友人か？」

「うん。クラスメイトなんだ」

しかし秀吉と優子ってよく似てるよね。

「あのさ、ボクも泳いでいいかな？」

「ん？遠慮することはないさ。学校のプールだからな」

「ありがと。それじゃ、水着に着替えてくるね」

スポーツバッグを掲げて女子更衣室に向かう工藤さん。すると、その途中で振り向いて、

「覗くなら、バレないようにね」

と言い残していった。

本人公認の覗きということは、明久達は――

「……雄二。今動いたら捻り潰すから」

「明久君。余計な動きを見せたら大変なことになりますよ?」

動けないだろうな。仕方ない。こうなったらスケッチブックを持っているこの俺が――

「神谷。今女子更衣室に向かったら」

「……優子に言いつける」

「覚悟してくださいね?」

無理だ。こんな鮮烈な殺気では動けない。

ムツツリーニは輸血をしていたが、その姿はやけに衰えだった。

その後女子によりヤケに険悪な雰囲気で行われた水中バレーは、ミハルという人がビーチボールを割るといふ壮絶な結果に終わり、皆がプールから上がってきた。

「ふう。少しお腹が空いてきたよ」

明久がそんなことを呟いた。

「あ、そうでしたっ。それならっ」

姫路が何か良いことを思い出したようにポン、と手を打つ。まさか

……。

「ちょっと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙ってたんですけどー」

姫路がにこやかに言葉を紡ぐ間、俺ら男子五人は目まぐるしくアイコンタクトをやり取りしていた。

「ー実は、今朝作ったワッフルが四つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「ガチンコ水泳対決っ！」（俺の声）

「「at文月学園ーっ！！！！」」（俺と明久と雄二の声）

「「イエーツ！！」」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

姫路の台詞を聞き終える前にタイトルコールが入る。

「明久。ルール説明だ！」

「オッケー。ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して、最

初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう。これは本当にただの水泳勝負である。

しかし、一位になれなければ姫路特製の殺人ワツフルが待っているのだ。

「へえ〜、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定をしてあげるよ」

俺たちはスタート位置に立つ、その後ろに工藤さんが立つ。俺の右隣には雄二、左隣には明久がいる。

「はい、行くよ！位置についてー」

さて、ここで考えてみる。

ムツツリーニは大量の出血で弱っているし、秀吉に体力では負けないだろう。

となると、残る脅威はー

「……スタートっ！」

「……くたばれえっ！！！！」

工藤さんの合図と同時に、明久と雄二は俺に跳び蹴りを放ち、俺は左右に拳を放った。

「てめえら！何て卑怯なことをしやがるんだ！」

「くそっ！やっぱり二人も僕と同じことを考えていたね！？」

「てめえらこそ卑怯な真似してくれるじゃねえか！この恥知らずが！」

「雄二、お前が言えたくちか！？」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるっ！」

暗器が無い今、直接拳でこいつらを黙らせるしか……。

「あのさ、三人とも。取っ組み合いもいいけど、木下君とムツツリ
一二君はそろそろ折り返しだよ？」

何だと！？

「おい明久！ムツツリーニと秀吉がいつの間にか折り返して来ているぞ！？」

「ホントだ！雄ニと亮なんかを相手にしている場合じゃない！」

「ヤバいぞ！あと20メートルぐらいだ！」

「雄ニに亮！このままじゃ、僕らの負けは確定だよ！？」

「そうは行くかつ！二人を止めるぞ！」

「俺と亮はムツツリーニを止める！明久は秀吉をやれ！」

「了解！ここは一時休戦だね！」

「（レン、ちょっと代わってくれ！水の中はお前の方が動けるだろ？）」

『（分かったわ。なんとしてもムツツリーニを止めるわ！）』

私は急いでプールに飛び込んだ。

「ムツツリーニ。止まりなさい！」

そう言ってムッツリーニに正面からしがみついた。

「……………ムネが……………（ブシャアアッ！）」

ムッツリーニが突然鼻血を吹き出した。

「あはは。そういえばコレ、秀吉の水着に似ているね」

「んむ？そういえば胸元が涼しいのう」

秀吉のレーンを見てみると、どうやら明久が秀吉の水着を取ったらしく、秀吉は上に何も着ていなかった。

「……………死して尚、一片の悔い無し……………！！」

ムッツリーニを中心に水面が朱に染まっていく。

「ちょっとムッツリーニ！？大丈夫か！？」

俺はレンと入れ替わり、ムッツリーニの出血を止める為に上を脱いでムッツリーニの鼻に突っ込んだ。これで鼻血も止まるはずー

「……………！！（ブシャアアアアツ！！！！！！）」

逆に出血量が増えた。何で？

「うおっ！大丈夫かムツツリーニ！？この出血量はマジでヤバくないか！？」

「……………構わない。むしろ本望……………！」

「わああっ！ムツツリーニが大変なことになっ！？血がもの凄い勢いで出ているんだけど！」

「き、木下に神谷っ！とにかく胸を隠しなさい！」

「いいイヤじゃっ！ワシは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじゃー！」

「レンならともかく、何で俺までなんだ！？」

「木下君に神谷君、我が儘言っちゃダメです！土屋君が死んじゃいますー！」

「……………愛子。救急車の手配、頼める？」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま、愛しています……」

結局、ムツツリーニは何度も峠を迎えながらも、皆と救急隊員の懸命な延命措置で一命を取り留めた。

その週明けに学校で雄二と明久がまた鉄人にしぼられたんだが、それはまた別の話。

第二十二問・旅行や合宿は行くまでが一番テンションが高い

() 内の『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。
父が沈痛の面持ちで私に告げた。

『彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい』

その話を聞いた時、(私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。彼のことはなんとも思っていないかった。彼がどうなるうとも知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ち揺れるのだろう。)

姫路瑞希の答え

『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたという事です。

吉井明久の答え

『私にとって彼は自分の下半身のように大切な存在だったから』

教師のコメント

どうして下半身に限定するのですか。

土屋康太の答え

『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント

その認識はあんまりだと思います。

神谷亮の答え

『私にとって彼は阪神のような存在だったから』

教師のコメント

先生は巨人ファンです。

「ふわぁぁあ〜…」

昨夜はとある事情で徹夜をしていたせいか、朝から欠伸が止まらない。

「うっすムツツリーニ」

「おはよう………」

ムッツリーニがいる卓袱台に行つて二人で喋っていると、

「二人とも、ちょっといいか？」

突然雄二がやって来た。

「どうしたんだ一体？」

「実は、俺の未来が破滅へと突き進んでいるんだ」

「……………??？」

「すまん雄二、意味が分からない」

俺とムッツリーニは揃つて首を傾げた。

「すまない。実は今朝、翔子がMP3プレイヤーを隠し持っていたんだ」

「あの霧島さんがか？意外だなあ」

機械なんて使つてないものだと思つていたんだが。

「で？その中に変な曲でも入ってたのか？」

「何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

それってまさかこの前の召喚大会のアレか？いや、あのプレーヤーは俺がちゃんと霧島さんから回収したからそれはないだろう。

「しかしそんな台詞をとっておくなんて、一人でこっそり聞いたりしてるのかな？」

一途な乙女心が成せる行動ってやつだな。

「いや。婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのようなのだ」

罪悪感MAX!!

「MP3プレーヤーは没収したが、中身は恐らくコピーだろうし、オリジナルを消さないことには……」

そう言って雄二が取り出したのは、再生専用のプレーヤーだ。

「そんなわけで、亮とムツツリーニにはその台詞を録音した犯人の手掛かりを探り、それをもとにレンには犯人の特定を協力して欲しいんだ」

「(だとさ)」

『(ちょっと代わってくれろ?)』

「(了解)」

「分かった。協力させてもらうわ」

「すまないな」

「助けてムツツリーニ！僕の名誉の危機なんだ！」

すると今度は明久がやって来た。

「……………どうした？」

「実は、僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWEB配信されそうなんだ」

「明久。それじゃ分からないわ。一体何があったの？」

「ごめん。端折り過ぎた。要するにねー」

「――少女理解中――」

「なるほど。アンタの女装写真で誰かに脅迫されてるわけね」

「うん。そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんてないから、きっと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだと思う」

「なんだ。明久も雄二と同じような境遇か」

「……………脅迫の被害者同士」

「こんなことで仲間ができてもね……………」

「全くだぜ」

そうやってそれぞれの説明を終えたところで、ガラガラと教室の扉が開く音が響いた。どうやら鉄人が来たみたいだ。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

そう告げる鉄人の手には大きな箱があった。きっとあの中に強化合宿のしおりが入っているんだろう。

「さて、明日から始まる『強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

前の席から回ってきた冊子を一冊取り、後ろに回した。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

確かにそんなことになったら、悲惨な目に遭うだろう。

えーっとどれどれ……俺たちが今回向かうのは、卯月高原という避暑地か。ここからだとして少し遠いな。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うんだからな」

やっぱりAクラスとかは快適なバスで行くんだろうな。さて、我がFクラスは……

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは——現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ!?!?』』』

あまりの扱いに全級友が涙した。

第二十三問その一・私は風になりたい（前書き）

色々と用事があるので恐らく今月の更新は、これか次で最後になると思います。

第二十三問その一・私は風になりたい

車窓を流れる緑の多い風景を見てみると、いつもと違い遠くまで来ていることを実感できる。と言っても、始めの内は寝ていたんだが。

「皆、何をしているんだ？」

目が覚めると、皆が集まって何かをしていた。

「心理テストだよ。亮もやってみる？」

「おう。んじゃ、俺にも何か問題を出してくれないか？」

「いいわ。それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』」

島田が手元の破れた本を見ながら言う。

「『？緑？オレンジ？青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

「え〜っと…『緑 優希 オレンジ 姫路 青 優子』って感じだな」

「亮！？それは本当かの！？」

突然秀吉が驚きの声を上げた。

「なんだ秀吉？急に声を上げるなんて」

「い、いや。なんでもないぞい。ところで、どうしてそう思ったのじゃ？」

どうしてって言われても……。

「前に服が水色だったから」

それを聞いて秀吉が今度は肩を落としていた。

「姉上、ドンマイじゃ……」

どうして優子が出てくるんだ？

「それじゃ、第二問いくわよ」

今度は寝ているムツツリーニ以外のみんなが参加することになった。

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げて下さい』だって。どう？」

「俺は5・6だな」と雄二。

「ワシは2・7じゃな」と秀吉。

「僕は1・4かな」と明久。

「私は3・9です」と姫路。

「俺は8・10で」と俺。

それぞれの答えを聞いた後、島田はゆっくりとページを捲った。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれー」

島田が順番に指を差しながら、

「クールでシニカル」 雄二

「落ち着いた常識人」 秀吉

「死になさい」 明久

「温厚で慎重」 姫路

「自由奔放」 俺

と、告げた。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった？」

「温厚で慎重ですか」

「自由奔放ね……」

口々に感想を述べる俺たち。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれー」

さっきと同じように島田が順番に指を差して、

「公平で優しい人」 雄二

「色香の強い人」 秀吉

「惨たらしく死になさい」 明久

「意志の強い人」 姫路

「他人とは規格外の人」 俺

と、告げた。

「秀吉は色っぽいのか」

「姫路は意志が強いそうじゃな」

「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「神谷君は規格外だそうです」

「雄二は優しいようだな」

そんな感じでその後も島田の心理テストを何問かやってみる。

そうしているよ、

「……………（トントン）」

不意に明久の肩を叩く人物が一人。

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

「……………空腹で起きた」

「あれ？もうそんな時間か？」

携帯を取り出して時間を見ると、1時15分と表示されていた。

「確かにいい頃合じゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

「あ、お昼ですね。それならー」

これはもしかして……………。

「――実はお弁当を作ってきたんです。良かったら……」

嫌な予感の中した。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「実は俺もだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまったの」

「……………調達済み」

即座に自分の昼飯を見せる雄二・俺・秀吉・ムッツリーニの四人。やっぱり皆も自衛策は万全のようだ。

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを」

「おっと、手が滑った（パシッ）」

「……………「足が滑った（グシャッ）」」

「ああっ！パン！僕のパン！」

雄二が明久のパンを叩き落とし、ムッツリーニと俺が踏み潰した。

皆考えることは一緒だな。

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物に粗末にー」

「ーしてはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらってくれ」

「「……………！！（ガンのくれ合い）」」

「おっと、ごめん亮。僕も手がー」

「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

「「……………！！（メンチの切り合い）」」

「あの、明久君。良かったら……………」

姫路がおずおずと弁当を明久に差し出す。

「あゝ、えっと、その……………」

「アキ。良かったらウチのお弁当も食べてみる？」

島田も負けじと弁当を差し出した。

「ありがとう！美波も分けてくれるんだね！それならいっそのこと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘もうよ！」

なんてことを提案しやがるんだこの野郎！

「ワシとムツツリーニと亮は向こうの席なので遠慮させて頂こうかの」

「……………！(コクコク)」

「すまんな姫路」

なんとか死の恐怖から逃れることが出来た。

「秀吉にムツツリーニ。戦友ともの無事を祈り、食事をしよう……………」

「つむ」

「……………(コク)」

隣では、辛さに悶え苦しむ明久が姫路の弁当を口にかきこんでいた。

「明久、起きたか！良かった……。電気ショックが効いたようだな……」

雄二は心底安心しきった表情をしており、俺はスタンガンをしまった。

「ところで雄二、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

ということとは、召喚獣を召喚できるんだろう。

「む。明久、無事じゃったか！良かったのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

部屋に入ってきた秀吉が胸を撫で下ろしていた。本当にあの時は危なかった。

スタンガンをカバンにしまっていると、何やら明久とムツツリーニと雄二が話し合いをしていた。

「お主ら、さっきから何の話をしておるのじゃ？」

「もしかして、犯人の手掛かりを見つけたのか？」

「秀吉に亮、実はねー」

「そつじゃったのか」

「尻に火傷のある女子か……」

何か良い案はないかと皆で考えていると、明久が急に声をあげた。

「そつだ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉とレンに見てきてもらえばいいのか！」

「明久。なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじや？」

秀吉はともかく、レンならいけるだろう。

「それは無理だ、明久」

雄二がこっちに何かを放ってよこした。これは強化合宿のしおりか？

「どつして無理なのさ？」

「そうじゃよ。ワシはともかく、レンならばー」

「3ページ目を開いてみる」

言われた通り3ページ目を開いてみる。どれどれ、

合宿所での入浴について

・男子ABCクラス	20	00	21	00	大浴場(男)
・男子DEFクラス	21	00	22	00	大浴場(男)
・女子ABCクラス	20	00	21	00	大浴場(女)
・女子DEFクラス	21	00	22	00	大浴場(女)
・Fクラス木下秀吉	20	00	21	00	個室風呂?
・Fクラス神谷亮	20	00	21	00	個室風呂?

「……くそっ！これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「どうしてワシと亮だけが個室風呂なのじゃ!？」

「まったく意味が分からないんだけど!？」

そうやってしばらく五人でうんうんと唸っている時だった。

ーードバン!

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

凄いい勢いで俺らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきた。

「な、なにごとじゃ!?!」

「木下はこつちへ! そつちのバカ三人は抵抗をやめなさい!」

「島田さん。バカは三人じゃなくて四人よ。ね? 亮」

先頭に立つ島田が、咄嗟に窓から脱出しようとした明久たちの機先を制して、島田の隣に立つ優子が、天井に張り付いた俺の脱出を阻止した。何でいつも優子には見つかるんだ?

「なぜお主らは咄嗟の行動でそんな事が出来るのじゃ……?」

そこは今問題ではない。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ?」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるといふのに」

Cクラス代表の小山さんが前に出てくる。

「犯人? 犯人つて何のことだ?」

「コソのじゅめ」

小山さんが俺たちの前に何かを突きつけてきた。これはおそろく……

「……………CCDカメラと小型集音マイク」

ムツツリーニが答える。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

なるほど。つまりこれは――

「盗撮だな」

「一体誰がそんなことを」

「とばけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」

この台詞を聞いて、秀吉が小山さんの前に歩み出た。

「違う！ワシらはそんなことをしておらん！覗きや盗撮なんてそんな真似はー」

「そつだよ！僕らはそんなことはしない！」

「……………！(コクコク)」

明久たちは小山さんに反論をしているようだが、今はそれどころじゃない。

「亮。覚悟しなさいよ！」

優子が俺の腕の関節を極めている。

こうして雄二は霧島さんによるアイアンクロー、俺は優子によるサブミッション、明久は姫路と島田による石畳という、濡れ衣による拷問に遭う羽目になった。

第二十三問その二・道具や能力は優秀な使い手により初めてその機能を発揮する

「あゝ、死ぬかと思った……」

「なんか、今日はいつもより更に更に生命の危機が多いよ……」

それから三十分後、証拠不十分の為俺たちは解放された。

「酷い濡れ衣じゃったのう……。なぜだかワシは被害者扱いじゃったのも解せぬが」

「ホント、酷い誤解だったよ」

「………見つかるようなへマはしないのに」

「ムツツリーニ。ギリギリの返事をありがとう」

ところで、さっきから雄二が黙っているのが気になる。

「どうしたんだ雄二？さっきから黙っているけど」

「……上等じゃねえか」

雄二………？

「どつせこまでされたんだ。本当にやってやるっじゃねえか」

雄二の目には強い光が宿っている。

「まさか、本当につて……」

「ああ。そのまさかだ。あっちがそう来るのなら、本当に覗いてやるっじゃねえか！」

「突然どうしたんだ？もしかして脅迫犯探しか？」

「そつだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思って遠慮していたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやるっじゃないか」

最後の方に自分の欲望が混ざっていた気がするが、気のせいだろうか？というかもしれない。さっきの機器は……

「……………さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「やっぱりそうか！」

「なんじゃと？それは本当かの、ムツツリー二に亮？」

「ああ」

「……………間違いない」

「そうか。それは嬉しい事実だな」

「そうじゃな」

「まったくだ」

「……………（こくり）」

「つまり、どういうこと？」

俺たちが納得している中、明久だけが首を傾げていた。

「流石明久、この程度の会話にもついてこられなかったか……………」

「つまりだ、雄二とお前を脅している犯人は同じで、さっきの覗き犯のカメラとマイクがその犯人と同じ物だった。そして、覗き犯は火傷の痕があるんだろ？だからー」

「ああ、なるほど！その火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ！」

「そういうことだ。これでもう迷う余地はないな」

「そうだね！やってやるぞ！」

「だったら、これを使うか？」

俺は荷物が入ったカバンから小型イヤホンとノートパソコンを取り出した。

「亮よ、何なのじゃそれは？」

「これはイヤホン型の通信機だ。他にもサーモグラフィが内蔵されていて、無線でこのパソコンにデータを飛ばせるんだ。いざという時には使えると思う」

「でも、そんな物を耳につけていて鉄人に見つかったら即没収されるよ？」

明久がもつともな疑問を投げかけてくる。

「その為のコレだ！」

今度は透明で穴が一つ開いた小さなプラスチックのカプセルを取り出す。

「……………これは？」

「名付けて『ステルスアイテムver・カプセル』だ」

「えっと、どういうこと？」

「このカプセルは特殊な製法により、光をねじ曲げ通常とは違う屈折をさせて人間の目の中にある水晶体が感知出来ないような光の波を作り出してムゲツ!？」

「待つのじゃ亮!これ以上説明されたら明久だけじゃなくてワシの頭もパンクしてしまうのじゃ!」

秀吉に口を塞がれたので辺りを見ると、明久の頭から煙が出ていた。

「要するに、このカプセルの中に入れた物は外からは見えないってことだ」

そう言いながら、カプセルの中に通信機を入れて、耳にはめる。ちなみにカプセルの大きさは通信機に合わせてあるので、中で通信機がカラカラと転がることはない。

「な?見えないだろ?」

「確かにな。これなら教師に通信機が見つかることはないだろう」

雄二のお墨付きをもらったところで、皆にカプセルと通信機を配る。

「というか、よくそんな物を持って来れたね。先生に没収されるかもしれないのに」

「このカプセルと同じ仕組みのビニール袋に入れてきたんだ」

「おお！ついに完成したのか！？」

俺がジッパー付きの袋を見せると、雄二が感嘆の声をあげた。

「ねえ亮。どうして雄二がこの袋を知ってるの？」

「これは元々雄二に頼まれて作ったからな」

「雄二が？どうして？」

明久が首を傾げている。

「……………霧島さんと母親から、エロ本を隠したいんだと……………」

「……………ああ、なるほど……………」

俺と明久は揃って遠くを見ている。恐らく霧島さんや雄二の母親のエロ本探索能力は並じゃないんだろう。

「それならさ、その袋の中にカメラを入れて女子風呂の中や脱衣所に置いておけば良かったんじゃないの？」

遠くを見ていた明久が突然口を開いた。

「いや、それは無理だ」

「何で？もしかして中からも見えないの？」

「いや、そういうわけじゃない」

「……………風呂場や脱衣所は、湿気が多い」

「そういふこと」

流石ムツツリーニ。こういふことと理解が早い。

「雄二は亮とムツツリーニの言ってることが分かるかの？」

「ああ。これは光の屈折を利用するからな。湿気、つまり水滴が袋に付くと光が散乱してカメラが見えてしまう。そういふことだろ？」

「その通りだ」

相変わらず雄二は頭がよく回る。

「んじゃ、そろそろ行くか」

「ああ。さっさとしないと女子の入浴時間が終わっちまうからな」

こうして俺たち五人は濡れ衣を晴らす為に女子風呂に向かった。

「あれ？男子五人組じゃない。こんなところで何やってるの？」

「君は……桂さん？」

俺の幼なじみの優希と廊下でばったり会ってしまった。

「ええ。そうよ吉井君。というか亮、もしかして今から女子風呂を覗きに行くんじゃないでしょうね？」

全くもってその通りだとは言えなかった。

「更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒してみたら……まさか本当に覗き犯がやってくるとは思いませんでした」

しかも化学の布施先生までやってきた。

「雄二、どうする！？布施先生だよ！」

「構わん！ブチのめせ！」

「そこは構いなさい坂本君！私は一応教師ですよ！？」

「了解！一撃でケリをつける！」

「吉井君も了解じゃないでしょう！？」

「……………ねえ亮、Fクラスっていつもこんな感じなの？」

「大体こんな感じだ」

それを聞いて優希がため息をついた。

「くっ……………！教師用の召喚獣は物に触れるのか……………！」

明久たちの方を見ると、明久の拳が布施先生の召喚獣に阻まれ、

雄二が苦しげに呟いた。

「ふう、間に合いましたか……。まあ、吉井君が《観察処分者》に認定されるまでは雑用を自分たちでやっていましたからね。物に触れる方が都合が良いのですよ。こういった若者の暴走を止めなければいけない場合もありますし」

……ってことは召喚獣の扱いにも慣れているわけか。厄介だ。

「こうなりゃ徹底抗戦だ！」

「布施センと桂を召喚獣ごと叩き潰すぞ！」

「その意気だよ雄二！ここは任せたからね！」

「というか私自身も叩き潰されるの！？」

「ワシも手伝おう。明久とムツツリーニは先に行くといい」

秀吉がこっちのフォーローに回ってくれた。

「すまないな二人とも。いくぞ、試獣召喚っ！」

「なに、これも友の疑いを晴らす為じゃ。試獣召喚じゃ！」

「さつさとやるぜ！試験召喚っ！」

「布施先生、ここは任せて下さい！試験召喚っ！」

「分かりました。それではお任せします」

『Fクラス

神谷亮&坂本雄二&木下秀吉

VS

Aクラス

桂優希

化学

413点&206点&76点

VS

503点
『

………はい？

「あのさ、これヤバくね……?」

しかも優希の召喚獣の武器が変わっており、双剣から日本刀になっていた。

「しかも、随分と長い武器じゃの」

秀吉の言う通り、優希の召喚獣の日本刀は背丈の倍ぐらい長い。

「ところで優希、何で武器が変わってるんだ?」

「色々あってね」

恐らく学園長が『システムに異常があった』とでも言ったんだろう。

「どっちにしろ、やらなきゃやられちまう。行くぞ!」

雄二と秀吉の召喚獣が優希の召喚獣に突っ込んでいった。

「二人ともちよっと待て!アイツの能力は『空間歪曲』だぞ。うかつに突っ込んだらやられちまう!」

「もしそうなら、動き続ければ当たる確率は格段に減るぞ」

それもそうかと俺も召喚獣を突っ込ませようとした時、

「ふふふ…残念でした 『仏の御石の鉢』ブディストダイヤモンド！！！」

雄二と秀吉の召喚獣の首が宙を舞っていた。

「どづいつことだ？」

「空間を飛び越えたわけではないようじゃが……」

そう、秀吉の言う通り空間歪曲を使って二人の召喚獣を斬ってはいない。

突然刀が幾つにも分かれ、中を通っているワイヤーか何かでつながっていた。

そして間合いを更に伸ばして鞭のようにならせて、秀吉たちを斬ったのだ。

「優希、お前の腕輪能力は空間歪曲じゃないのか？」

「ええ」

ということはもしかして……

「お前の能力は自分の武器の形を変える能力か？」

「そうよ。『変型』が今の私の腕輪の能力よ」

このバグキャラめ！！

「よし、そっちがそう来るんなら……」

俺は能力を使って大量のビームサーベルをドーム状に出現させ、優希の召喚獣を取り囲む。

「これで終わりだ！」

俺はそのビームサーベルを優希の召喚獣に向けて一気に放った。

「そうはいかないわよ！『火鼠の衣』サラマンダーシールド！！」

今度はマントに変型させて、俺の攻撃を防いだ。

「今度はこっちからいくよ！『竜の頸の珠』フリリアントドラゴンパレット！！」

そして召喚獣よりもかなり大きいキャノン砲から、直径が召喚獣の倍ぐらいのエネルギー弾を撃ってきた。

「ちよっ！？マジかよ！？」

ビームサーベルを大量に放つも効かず、俺の召喚獣はエネルギー弾に飲み込まれて跡形もなく消え去った。

この後俺たち五人は仲良く英語の反省文を書かされる羽目になった。

第二十四問その一・ぼくは貝になりたい（前書き）

徹夜で小説を執筆していたら、いつの間にかこんな時間に……。

といっわけで今から少し寝ます。おやすみなさい……。

（・・・）zzz

第二十四問その一・ぼくは貝になりたい

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同学習であり、形式としては自習のようになっていく。

「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

「授業？そんなもんやるわけないだろ」

「お、ようこそ雄二」

さっきまで霧島さんと攻防を繰り返していた雄二がこっちにやって来た。

「やらない？どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはF

クラスもAクラスも大差はないよ」

「お前の場合はどっちも理解出来ないんだろ？というかお前は自習をやりたいんじゃないのか？」

「理解出来ないし、自習の方がいいよ」

俺の質問に対し、明久は何の躊躇いもなく答える。

「そもそもこの合宿はそういう趣旨じゃないからね」

優子が勉強道具を持ってこっちにやって来た。

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

霧島さんもこっちにやって来た。しかもポジションはきっちりと雄二の隣だ。ちなみに優子は俺の隣にいる。

「優子に霧島さん、それだけじゃ明久には分かんないだろう。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題じゃないんだ」

「あ、代表に優子ここにいたんだ。それならボクもここにしようか」

な？」

そこにもう一人加わった。

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

ニツと歯を見せて笑う工藤さん。ボーイッシュな雰囲気と相まって、その仕草はとても爽やかに見えた。

「久しぶり、工藤さん」

「君は神谷君だね？久しぶり。それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物シュークリームだよ」

なんか最後の方に凄いのがあったような……。

「ん？どうしたの吉井君に神谷君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その……」

「最後の方に凄いのがあったようなんだけど、それって……」

「あ、さては疑ってるね？なんなら、ここで披露してみせよっか？」

工藤さんが短いスカートの裾を摘んでいる。そして、いつの間にか俺の腕が変な方向を向いている。優子が「見たら承知しないわよ」と呟いているのは関係ないと思いたい。

「それより俺の腕が、腕があっつ！」

今になって痛みが来るとは……。どういう曲げ方をしたんだ？

「……………ヤツは、スパッツを穿いている……！」

ムツツリーニのそんな声がした。それじゃあ俺は腕を曲げられ損じやないか！

「あはは。バレちゃった。さすがはムツツリーニ君だね。まあ、特技ってわけではないけど、最近凝っているのはコレかな？」

「コレって、小型録音機か？」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えばー」

小さな機械をカチカチと弄る工藤さん。少しすると、内蔵されているスピーカーから声が聞こえてきた。

ーピッ 《工藤さん》 《僕》 《こんなにドキドキしているんだ》
《やらない?》

《工藤さん》 《俺》 《久しぶり》 《に》 《君》 《と》 《凄いの》 《やりたい》

「わああああっ！僕はこんなこと言っていないよ！？変なものを再生しないでよ!」

「明久のは事実だが、俺の方は全くの虚言だぞ!？」

「亮！そこで僕を更に追い込まないでよ!」

「ね？面白いでしょ?」

悪戯っぽい笑みを浮かべている工藤さん。その笑みは何故か俺たちの背後に向いていた。これはヤバい。俺の勘がそう言っている。

「……ええ。最っつ高に面白いわ」

「……本当に、面白い台詞ですね」

「……ここまで面白い台詞は聞いたことがないわ」

振り向くと、そこには氷の微笑をたたえた島田と姫路と優子がいた。

「さて亮、一体どういうことなのかしら？」

「違う！優子、さっきのは全部《事実》だから腕を曲げるなーって工藤さん!？」

「……………ふーん……………」

ヤバい！優子がかかなり凄い殺気を放っている。

向こうでは明久が石畳に座らされているが、今はそれどころではなく、優子の誤解を解くのが先決だった。

「よ。大変だったな亮」

優子にようやく解放されると、雄二がそんなことを言い出した。

さて。高みの見物をしている愚か者にも罰を与えなければ……。

「雄二。さっきの台詞なんだが、あんなこと言って大丈夫なのか？」

手元にある、さっき雄二に仕掛けた小型録音機を操作しながら聞く。

「は？一体何を言ってるー」

《工藤》 《脱いで》 《俺》 《と》 《やる》 《か？》

「亮！お前、何て事をしてくれたんだ！」

「……雄二。許さない」

「待て翔子！これは誤解だ！亮も何か言ってくれ！」

「雄二。よく言うだろ？『旅は道連れ』ってな」

「その旅の行き先は地獄にしか思えないんだがぎゃあああつ！」

霧島さんによるアイアンクローが雄二の顔に炸裂している。

ちなみに明久は更なる誤解を持たれているようだが、まあ気にしないでおこう。

結局、この騒ぎは鉄人が怒鳴り込んでくるまで続いた。

そんなこんなで入浴の時間になり、私たちは自分たちの部屋で話し

合いをしていた。

「僕は工藤さんが犯人だと思っただけど」

「その可能性は高いだろうな」

雄二が明久の意見に頷く。私はあまり多くは見れなかったけど、それでも彼女の録音機を見る限りその可能性はある。

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる？」

「……………それはやめた方がいい」

明久の意見を珍しくムツツリー二が否定した。

「やめた方がいいって、何か問題があるの？」

「チャンスは一度きり。失敗したら犯人は見つからないわ」

私の言っていることが分からない、といった具合に明久が首を傾げている。

「もし取り押さえて間違いだった場合、それを見ていた真犯人がど

「うつするかをよく考えてみて？」

「……ああ、そっか。証拠を隠滅するとか、自分を探さないように更に脅迫するとか、そういうったことを考えるね」

「そういうこと」

このバカにはもう少し理解力をつけて欲しい。

「けど、あんなに怪しいのに手が出せないなんて……」

「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが……」

「痕の場所が場所だしね」

「いっそ、怒られるのを承知でスカート捲りでもしてみる？」

「……ヤツは、スパッツを穿いている……！」

「げ。そつえばそうだった」

スパッツを穿いているんじゃ、まず確認は無理ね。

「……確認するには女子風呂を覗くしかない」

「やっぱりそうなるんだね……」

「けど、どうするの？何か作戦を練らないと先生たちのあの警備を突破するのは難しいわよ」

「作戦とは言うが、あの場所はただの広い一本道じゃったからのう。正面突破しかないと思うぞい」

「ま、それしかないわね」

「そうだな。作戦を立てる時間もないし、基本は正面から攻める以外はないな」

秀吉の言葉に私と雄二も賛同する。

午前中はあの騒ぎだったし、午後は昨日失った点数の補給テストを受けていたから、作戦を立てる時間はほとんどなかった。

「だが、方法がないわけでもない」

「あら。正面突破を成功させるいいやり方でもあるの？」

「ああ。正面突破しか方法がないのなら、それを成功させるだけの戦力を揃えたらいい。質は向こうが上でも、数で上回れば勝機はある」

「えっと、つまり覗き仲間を増やすってことかな？」

「そつだ」

作戦とは呼べないような単純な方法だけど、それぐらいしかない。

「雄二がそんな案を打ち出すってことは、事前策はしてあるんでしょ？」

「ああ。夕飯時にすでに声はかけてある。そろそろ来るはずだ」

雄二がそう言つと、ちょうどノックの音が聞こえてきた。

「坂本、俺たちに話つて何だ？」

須川を先頭に、Fクラスの男子がぞろぞろと部屋に入ってくる。男子が全員いるみたいだけど、この部屋に入り切るのかしら？

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

部屋に入り切らなくて廊下にいるメンバーにも聞こえるように、雄二はよく通る声で告げた。

『提案？』

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

全員ダルそうね。今日一日勉強漬けで疲れてるから無理もないわ。

そうやってざわめく皆を見ても雄二は焦って話を切り出すような真似はせず、静かになるのを待ってから続きを口にした。

「ー皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

流石Fクラス。女子風呂の覗きと聞いて急に目の色を変えた。

「昨夜俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで？』

雄二の台詞にツッコミが入らないことにツッコミを入れたいんだけど。

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷の光景だ。どうだ？」

『『『乗った！』』』

どんな形であれ、これで仲間が大幅に増えた。

「ムツツリーニ、今の時間は？」

「……………2010時」

「今から隊を五つに分けるぞ。A班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニ、E班はレンにそれぞれ従ってくれ」

『『『了解っ！』』』

「いいか、俺たちの目的は一つ。理想郷への到達だ！途中に何があろうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！神魔必滅・見敵必殺！ここが我が行く末の分水嶺と思え！」

『『『おおおっっ！』』』

「全員気合を入れるろ！Fクラス、出陣^でるぞ！」

『『『おっしやあーっ！』』』

今ここに、Fクラスの心は一つになった。

第二十四問その二・赤信号 皆で渡れば 怖くない(前書き)

今回は少し短いです。

第二十四問その二・赤信号 皆で渡れば 怖くない

「西村先生。流石に今日は彼らも現れないのでは？昨日あれほど指導をしたことですし」

「布施先生。彼らを侮ってはいけません。彼らは生粋のバカです。あの程度で懲りるようであれば今頃は模範的な生徒になっているはずですから」

「そうでしょうか？いくらなんでも、そこまでバカではーあ、ア
しは！？」

ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー

『おおおおっ！障害は排除だーっ！』

『邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！』

『サーチ&デエース！』

「に、西村先生！大変です！変態が編隊を組んでやってきました！」

「まさか、懲りるところか数を増やしてくるとは。これだからあの連中は……！布施先生、警備部隊全員に連絡を！一人とて通してはいけません！私は定位置につきます！」

「は、はいっ！」

「神谷！木下のC班が布施と接触し、吉井がそこを通過した！」

「分かった。皆、今の内に私たちも行くわよ！」

明久たちにつき、私たちも一気に階段を駆け下りた。布施先生も途中までは追いかけてきたけど、ある程度まで来たら悔しそうに顔を歪ませながらも足を止めた。おそらく『干渉』を避けたかったんでしようね。

「というか神谷、どうして協力しようと思ったんだ？」

隊員の一人が聞いてきた。

「ま、こっちにも色々あるからーってええ！？」

「そこまです、薄汚い豚ども！この先は男子禁制の場所！おとな

しく引き返さない！」

えっと、今は私一応女子なんだけど……。

『(ゴメン。ここからは交代して。強引に突っ込むわよ)』

「(面白そうだな。んじゃ、司令はよろしく)」

『(分かった)』

「やつほー、吉井君。何を見に来たのかな？ボクを覗きに来てくれたのなら嬉しいんだけど」

「工藤さん！？そんな！どうしてここにいるの！？」

脅迫犯であるはずの工藤さんが「……浮気は許さない」「こんなところにいるなんて」「翔子待て！落ち着ぎゃああああっ！」「計算外だ。これだと彼女が犯人かどうかを確認することが「亮。今日は逃がさないわよ」「ってあれ？」

「ゆ、優子！？マジかよ！何でここにいるんだ！？」

「何でって、アンタたちの覗きを阻止する為に決まってるじゃない！」

「ここからは一步も通さないわよ」

そして後ろから優希がやってきた。

ちいつ！これじゃ、正面突破も無理だろう。

「さて亮、そろそろ始めましょ？」

「くっ……………」

優子の言葉に対して苦々しい声になってしまふ。優子は強敵だし、その後には優希と布施先生がいる。かなり絶望的な状況だ。

「明久っ！この場は退け！」

俺はそう叫んだ。

「り、亮！？」

突然の撤退命令に明久が戸惑っている。

「そつだ！今日がダメでも、明日にはチャンスがあるはずだ！」

「須川君まで！？」

先ほど打ち倒された須川が鉄人の足にしがみついてその行く手を阻んでいた。

「俺は優希と優子をなんとか抑える！皆は明久の退路を開いて撤退を援護してくれ！」

『『『おつっ！』『』』

背後で召喚獣が展開された気配がする。おそらくFクラスのメンバーだろう。

「さて、そろそろいいかしら？試獣召喚っ！」

「後で関節を逆に曲げてあげるから覚悟しなさいよ！試獣召喚っ！」

「ここは絶対に通さない！試獣召喚っ！」

二人が召喚獣を展開してきたのに合わせて、俺も召喚獣を展開する。そして、一対二という不利な戦いの中、俺はずっと信じている。明久が復活し、無事に目的を果たしてくれることを……。

《ーー放送連絡です。Fクラス吉井明久。至急臨時指導室に来るよ
うに》

ま、普通はそうなるよな。面割れてるから。

と、いつかこの覗きの目的って、脅迫犯を見つけることだよな？

成り行き上仕方ないとはいえ、いつの間にか目的が犯人捜しからただの覗きになってきているような気がするんだけど、果たして気のせいなんだろうか？

第二十五問・大胆な女の子は好きですか？

翌朝。

「うん…どうしてこうなったんだっけ？」

俺は今壁に背を付け、トイレ前の廊下に座っている。そして、

「すじ……」

隣には俺の腕に抱きついたまま寝ている優子がいた。

「え〜っと確か……」

トイレに行くのに起床時間より早く起きて、トイレへ向かった。

そしてトイレを済ませて外に出たら、寝ぼけまなこな優子が女子トイレから出てきた。

それでいきなり俺の腕に抱きついてきて立ったままで寝てしまっ
て……

「それで起こすといけないからそのまま座ったんだっ」

なんとか思い出すことができた。

「……は……じゃ……い？」

優子の口から途切れ途切れに言葉が聞こえてくる。もしかして寝言
か？

「亮は……腐女子が……嫌いななの？」

何故か俺の名前が出てきた。一体どんな夢を見てるんだ？

「そんなことより、これはヤバい……」

さっきの寝言を言った後から優子が俺の腕をより強く抱きしめたの
だ。だから腕に優子の胸の感触が余すことなく伝わってきている。

これを誰かに見られたら、俺の死は確定だろう。もちろん社会的な意味で。

「その前にコイツに起きてもらいたいんだが、この様子じゃしばらくは起きそうにないな……」

ふと、優子の体操服の片側が肩からずり落ちそうになっているのが見えた。

俺はそれを直そうと、体操服の袖を摘んで優子の肩まで上げた。

「う…ん……あれ……?」

ちょうどその時だった。優子が目を覚ましたのは。

今俺は右腕を優子に抱きつかれ、左手で優子の肩を掴んでいる。端から見れば俺が優子を襲っていると思われかねない。

「……………亮？」

「こ…これはだな、優子、別にお前が思っているようなやましいことじゃない。というかお前の胸に興味は微塵もないーって優子？違っ！俺の腕はそんな方向には曲がらなーっ！」

「む、神谷か。腕がひしゃげているようだが、何かあったのか？」

「階段から…落ちまして……………」

俺たちの部屋の前に来ると、何故か鉄人がいた。

「鉄人こそ、こんなところで何をしてるんですか？」

「西村先生と呼べ。もうすぐ起床時間だからな。ここのバカ共を起こしに来たんだが、お前が起こしてやってくれんか？」

「分かりました。後は任せて下さい」

そう言うと鉄人はどこかへ行き、俺はドアを開ける。

「おゝい皆々。起床時間だーぞ……?」

「死ね雄二!死んで詫びるんだ!あるいは法廷に出頭するんだ!」

「なんだ!?朝からいきなり明久がキまっているぞ!?持病か!？」

「ええい落ち着くのじゃ明久!亮、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って欲しいのじゃ!」

「……………! (コクコク)」

「……………お前らは朝から何をやっているんだ?」

俺と秀吉とムツツリーニの三人がかりで花瓶を振り回している明久をなんとか止めることができた。

「そういえば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん?なんだ?」

朝食中、明久が突然口を開いた。

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つからないカメラが一台残っている』って」

「なんだと？」

忙しく動いていた雄二の箸が止まり、俺もそつちを見る。

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「明久。それは早計だ」

「もしそうならわざわざ怪しまれるようなことを言つとは思えぬ」「まあ工藤さんがシロであれクロであれどっちにしても……」

「……………確認するしかない」

「やっぱりそれしかないよね……………」

覗いて確認するしか俺たちに方法はない。

「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

「え？カメラが残っているってことが？」

「ああ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

「……………隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

流石はムツツリー二だ。

「ビデオに写っていない女子の声の有無を確認するメカなら既に作製済みだぜ」

「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ？」

「いや。最初にカメラが脱衣所で見つかった方がおかしいんだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうならー」

「……………二段構え」

「そつだ。最初に見つかったカメラはカムフラージュだった可能性が高い」

「用意周到じゃな」

「そつやって油断させておいて本命のカメラで撮影するってわけか。

だろ？雄二」

「ああ」

随分と手の込んだことをしてくれろ。

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りにいけば解決
ってことだね」

「……………それは無理」

「え？なんで？」

「……………時間外だと脱衣所は厳重に施錠されている」

ムツツリー二の言葉を聞いた明久が肩を落としている。

「諦める、明久」

「今までどおりの方法を貫けっ……」

「そのようじゃな」

結局あの警備を突破しなければいけない状況は変わらない。

「そこで昨日の反省だ。明久、昨日の敗因はなんだと思う？」

「敗因？うん、向こうが女子の半分を防衛に回してきたことじゃないかな？」

「……………敵側には工藤愛子もいた」

「ついでに優子と優希もな……………」

ムツツリーニも俺と同様に悔しげに告げる。

「そうだ。昨日の敗因はAクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたことだ」

昨日見た限りでは、あっちの戦力はおそらくこっちの数倍ぐらいだっただろう。

「なるほどな。こっちも他のクラスを味方につけて、更に戦力を増強させるわけか」

「ああ」

雄二の提案に対して明久が首を傾げている。どうしたんだろう？

「む？明久、どうしたのじゃ？」

「うん。なんか、この作戦がいつものやり方と違う感じがしてなんだか……。ほら、向こうの戦力が大きいからってこっちの戦力を増やすっていうのが、イマイチ僕ららしくないというか……」

明久の言葉に、雄二は感心したように頷いた。

「ほう……。明久も頭が少しは回るようになってきたな。その通り。このやり方の目的は正面突破だけじゃない」

やっぱり他の目的があるわけだ。

「んで、他の目的って何？」

「俺たちの保身だ」

なるほど。やっぱりそんな感じか。

「僕らの身を守る？誰から？」

「いいか？よく聞け明久。今のところは未遂で終わってるから大した問題じゃないけど、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風

呂にたどり着いても真犯人を見つけて俺たちの無罪を証明できなかつたら、俺たちは何らかの処分を受けてしまう」

「亮が言ったそれを避ける為の戦力増強——つまり、メンバーの増員だ」

「増員が処分を逃れる手段になるって？」

「ああ。人数を増やせば相手の特定は難しくなる。向こうだって戦いながらその場にいる全員の顔を覚えるのは厳しいだろうからな」

確かに、そんなことをするのは難しい。

「でも、既に僕らは面が割れてるよね？それなら無意味なんじゃないの？」

まあ昨日の晩も呼び出しを受けてたしな。

「文月学園は世界中から注目を集めている試験校だからな。そんな不祥事があった場合はひた隠しにするかキツチリと一人残らず処分するかどちらかしか選べない。中途半端に一部の生徒だけを罰するようにならば、ただでさえ叩かれている『クラス間の扱いの差』についてマイナス要因を増やすだけだからな」

世間から注目されるものや人は世論に弱いことを利用するわけか。

「なるほど。流石は雄二。汚いことを考えさせたら右に出る人はいないね」

「知略に富んでいると言え」

そうになると、できるだけ多くの仲間を集めた方がいい。俺たちの保身になり、かつ突破の戦力になる。

「ふむ。ならば今日は協力者の確保を主軸に行動するわけじゃな？」

「ああ。幸い合同授業の上に殆ど自習みたいなものだからな。動きは取り易いはずだ」

「それじゃあ雄二、まずはやっぱりAクラスから行くのか？」

「当然だ。同じ手間なら能力が高い方が良いからな」

やっぱり雄二も俺と同意見みたいだ。

「Aクラスならば昨日の合同授業で交流もあるしのこと。話もしやすいじゃろつて」

「それじゃ、決まりだな」

「ああ。合同授業の間にAクラスと話をするぞ」

「了解。ムツツリーニもそれでいいよね？」

「……………問題ない」

方針も決定したので、俺たちは朝食を再開した。

「Aクラスなら久保を説得するのが妥当だな」

「というわけだ明久。説得よろしく」

「うむ。明久ならば適任じゃな」

「……………頼んだ」

久保の説得は満場一致で明久に委任した。

「あ、うん。別にいいけど、どうして僕なの？」

「「「「」」」」」

席を立つて久保のところに行こうとした明久の質問に、俺たちは気まずそうに目を逸らした。

「あ、あのさ。なんだか凄く嫌な感じがするんだけど、本当に大丈夫だよな？」

「そ、そうじゃな。一応、久保はお主に悪意を抱いてはおらんと断言できる」

「大丈夫だろ。……………多分」

「……………彼に悪気はない」

「なんで二人ともそんな奥歯にものがはさまったような言い方をするの？」

「いや、だって……………なあ？」

「明久、早く行ってこい」

「え？でも……………」

「大丈夫だ。この中ではお前が一番久保に好かれている。自信を持って」

「あ、うん」

「明久、いざという時はコレを使え」

俺は明久のポケットに二十万ボルトのスタンガンを押し込んだ。

「そ、それじゃ、行ってくるね」

明久が無事久保のところに向かった。とりあえずは一安心だ。さて

――

「亮。一緒に勉強するからこっちに来なさい」

この状況をどう切り抜けようか？

『雄二、スマン』

『まあいい。気にするな』

優子に引っ張られながら、雄二にそんなアイコンタクトを取った。

優子に捕縛されながらしばらく勉強していた時。

「ね……ねえ……神谷。大事な話って何？」

島田がこっちにやってきた。

「大事な話？それってー」

何のことだ？と言おうとして口を閉じる。

なぜなら視界の端に教室を出て行く明久たちの姿が見えたからだ。

「それって？」

「……………俺の気持ちを……………聞いて欲しいんだ」

鉄人や周りの皆に聞こえないような小さな声で呟いた。

「神谷の……………気持ち……………？」

「ああ。実は俺——今右腕がもの凄く痛いんだ……………」

「いや、それは右腕が変な方向に曲がっているからだと思うんだけど……………」

島田の言う通り、俺の右腕が変な曲がり方をしていた。

「……………アキっ！出てきなさいっ！」

島田はどこかに行ってしまった。そして、

「……………（ニクニク）」

後ろにはとても良い笑顔の優子がいた。

「亮。ちょっと教室の外に来てくれる？」

「ちょっとまって優子！今は勉強中だ。だから、ちょっと……待つ……」

ガッ（脚払いの音）

ドスッ（優子が倒れた俺のマウントを奪う音）

ゴッ　ゴッ　ゴッ　ゴッ（優子がひたすら拳を振り下ろす音）

人気のない部屋から長時間に渡り、そんな音が響いた。

今日は随分と災難に遭う日だ……。

打撲の痛みを耐えながら、俺はそう思った。

第二十六問その一・敵の作戦の『裏の裏を読む』ってことはつまり表を読むって

以下の英文を訳しなさい。

『 Although John tried to take the airplane for Japan with his wife's hand make lunch, he noticed that he forgot the passport on the way.』

姫路瑞希の答え

『 ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた』

教師のコメント

はい正解です。

717

土屋康太の答え

『 ジョンは

』

教師のコメント

ジョンです。

吉井明久の答え

『 ジョンは手作りのパスポートで日本行きの飛行機に乗った』

教師のコメント

手作りパスポートという言葉の意味をもう一度よく考えてみて下さい。

神谷亮の答え

『ジヨンは妻のパスポートで日本行きの飛行機に乗った』

教師のコメント

吉井君といい君といい、どうして和訳が犯罪になるんですか？

そんなわけで、恒例の出撃前ブリーフィング。

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな。それよりレン、お主、顔は大丈夫かの？」

「うん……なんとかね……」

優子に殴られた顔の痛みがようやくひいてきた。

「Bクラスは代表が代表なだけにまとまりがないし、Cクラスは代表が小山だからな。男子連中がしりごみするのも無理はない」

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでも昨日よりずっと状況が良くなったよ」

「まあそうじゃな。女子側とて入浴の為に最大でも半数しか出てこられんじやろっし、教師を抑えることができればなんとかなるじゃろ」

「でも、ここまで大きな騒ぎにすると女子の入浴自体が中止になったりしないかな？」

「それはないでしょ。教師側にもプライドがあるからね。『覗きを阻止できないかもしれないので入浴は控えてください』なんて言うと思う？」

「ああ、そっか」

教師たる者、召喚獣を使った勝負で生徒に防衛線を抜かれちゃいけないし。

「それとこれは憶測だが……教師側はこの事態を好ましく思っている可能性もあるな」

「え？ 僕らの覗きを？」

「覗き、と言うよりは覗こうと頑張ることね。あくまでもこの合宿の目的は『生徒の学習意欲の向上』だから」

「ああ。目的がなんであれ、召喚獣を使って戦闘を行う以上勉強をせざるを得ない。女子側も同様だ。防衛の為に召喚獣が不可欠だからな」

そう。その気になればこの時間に私たちを部屋に拘束することだって出来るのに、それをしないのが何よりの証拠。まあ、絶対に抜かせない自信もあるみたいだけど。

「さてムツツリーニ。作戦開始時刻と集合場所は両クラスに通達してきたか？」

「……………問題ない」

作戦開始は2010時、集合場所は一階の大食堂となっている。

「さて。そろそろ出るわよ」

「そうだな。他の皆が待ってるかもしれないし」

「吉井っ！大変だ！」

突然ドアが開かれ、須川が飛び込んできた。

「須川君、どうしたの？」

「やられた！大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ！今は戦力が分断されて各階に散り散りになっている！」

「なんですって!?!」

まさか、こっちの情報が漏れていたとか？

「……………情報が漏れることはない」

ムツツリーニが私の疑問を払拭するように断言した。となると…………

「こっちの考えを読まれていたか…………!」

これは私と雄二で考えた作戦。そしてそれを読むことが出来そうな人物は二人しかいない。

「桂優希と霧島翔子じゃな。流石、お主らの幼なじみの名は伊達ではないな」

こっちは雄二と私が考える常識外れな作戦が頼みだっただけに、それが出来ないとなると状況はかなり厳しい。

「……………迷っている時間はない」

「そ、そうだね！雄二、レンどうする？」

「どうするもこうするも、こうなっては作戦なんて殆どないようなものだ」

「分断された戦力を一旦編成し直すしかないわ！とにかく出撃よ！」

「了解！」「」

『（レン！ここからは俺がやるから替わってくれ）』

「（それじゃ、指示は任せて）」

『（おっ！）』

「全員聞け！とにかく一点集中でこの場を突っ切る！俺の後に続くんだ！」

その場にいる全員が雄二の後に続き、一番敵の層が厚い方向に駆け出した。

俺もそっちに向かおうとした時、

『（亮、雄二たちとは反対の方に行くわよ！）』

レンに止められてしまった。

「（どうしてだ？）」

『（相手はあの霧島さんよ。雄二のつつさの判断も読まれてもおかしくないわ）』

見ると、雄二が向かった前方には霧島さんと姫路に島田に高橋先生が、後方には工藤さんと大島先生がいた。

「やっぱりこっちが正解——」

「ブツブツ。は〜ずね〜」

「優希だと!?!」

俺の行く先に待ち構えていた優希と出くわした。いないと思ったらこんな所で待っていたのか……。しかもその後ろには化学の布施先生まで待機している。

「仕方ない。こうなったら撤退ー」

「させないわよ」

「くっ……」

来た道には優子が立ちふさがっている。そしてその横にはもう一人人影があった。

「神谷。お前にはたっぷりと補習を行ってやる」

「鉄人まで……」

前方には優希と布施先生、後方には優子と鉄人。この状況はかなり絶望的だ。

「どうする亮？あつちはまだ降参したみたいよ？」

優子が向いている方向には、雄二と明久以外の皆が土下座しているという敗色濃厚な光景が広がっていた。

「確かにそうみたいだな。だったら……」

「おや？降参する気にー」

「退却させてもらうぜ！」

優希が言い終わる前に素早くサングラスをかけてビー玉ぐらいの大きさの玉を床に叩きつけると、まばゆい光が発生した。

725

「うわっ！眩しいっ！」

「何なのよコレは？」

「ぬう。閃光玉か……」

「神谷君、どうしてそんなものを……」

皆の目が眩んでいる間に急いでその場を脱出した。

第二十六問その二・カメラは時間を切り取り、紙は空間を切り取る道具（前書き

本文を読み返してみたらものすごいことになっていたので、修正させていただきました。

読者の皆様、誠にすいませんでした。

m () m

第二十六問その二・カメラは時間を切り取り、紙は空間を切り取る道具

「待たんか、神谷！おとなしく補習を受けろ！」

「絶対嫌です！」

ただ今鉄人と絶賛鬼ごっこ中。鬼ごっここと言うと聞こえがいいが、実際はリオレ スから逃げるハンターそのものだ。

「閃光玉食らって何で数秒で視界が回復するんですか！？」

「鍛えているからだ」

ぜひともその鍛え方を聞いてみたいものだ。

そうこうしていると、俺たちの部屋が見えてきた。あそこに入ってしまえば俺の勝ちだ！

するとちょうどドアが開いた。チャンスとばかりにもう一度閃光玉を後ろに投げ、鉄人の足を止めた。

「間に合ええええっ！」

ドゴツ（部屋から出ようとした雄二にタツクルする音）

グシャベキグチャツ（雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

バタンツ、ガチャツ（部屋のドアを閉めて鍵を掛ける音）

何とか助かった……。代わりに部屋の中が滅茶苦茶になったけど。

「ちなみに秀吉とムツツリー二と亮はまだ携帯電話買ってないの？」

「うむ。特に必要ないからの」

「……………いざというとき鳴り出すと困る」

明久がいきなりそんな事を聞いてきた。それより、最近の高校生にしては珍しいな。片方の理由は特に。

「なんだ明久。携帯なら貸そうか？」

「うん。ーってアレ？美波のアドレスが無い……………」

「島田のアドレスがどうかしたか？」

「ううん。何でもないよ」

ちなみに女子のアドレスは優子と優希の二人しか登録していない。

「前に」

「ん？」

「前に、亮が言ってた」

「何か言ってたっけ？」

「『旅は道連れ』って」

「そう言えばそんなこと言ったな」

「僕も最近、心からそう思った」

明久がやけに長く携帯を操作している。

「明久。お前誰に何を送信したんだ？」

【To:木下優子 From神谷亮

後で浴衣を着て俺の部屋まで来てくれ。今夜はお前を寝かしたくないんだ】

「ゴぶっ。ちよっ、おまっ…何てことをしやがるんだ！これじゃ俺

は優子にただの変態だと思われちゃうじゃねーか!」

「亮も僕や雄二と同じように色々なものを失え!どりゃああーっ」

「おわあっ!俺の携帯をお茶に突っ込みやがったな!?!これじゃ壊れて弁明できないだろうが!この野郎!」

「亮だけ助かるうったってそうはいかないからな!」

「何ワケ分かんないこと言ってるんだ!?!」

畜生……。部屋の外には鉄人がいるし、直接弁明に行くのは不可能だ。悔しいが諦めるしかなさそうだ。恐らく俺は明日の朝日を拝めそうにない。

「ところで、この部屋は片付けないとまずいのではないのか?これでは布団もしけぬぞ」

「そうだね。とりあえず片付けて秀吉とレンの撮影を始めようか」

ん?最後のは一体何だ?

「明久。撮影ってどういうことだ?」

「後で説明するよ」

まあ気にしても仕方がないので、部屋の片付けを始める。すると、

「ぐああっ！せ、背中にガラスの破片がっ！」

突然叫び声が響いた。

「あ、雄二。起きたなら手伝ってよ」

「どうした動く生ゴローじゃなかった、雄二？」

「ちょっと待て亮！今俺を生ゴミ呼ばわりしなかったか！？そして明久！お前には俺の背中の中の傷が見えないのか！？」

「大丈夫。致命傷ではなさそうだから」

「そう思うならお前にも、こうだっ！」

「ああっ！僕の着替えがガラスの破片まみれに！？」

「お前もこの痛みを味わえ！」

「それなら浴衣を着るからいいさ！秀吉やレンとペアルックだしね
！」

「……………羨ましい」

「お主ら……、レンはともかくワシの性別を完全に忘れておらんか？」

「………とりあえず雄二に明久、何がどうなっているのか説明してくれないか？」

「ゴメン。そういえばそうだね。実はー」

「ふうん。私たちの浴衣姿を撮影してA〇Cクラスをその気にさせ、覗きに協力させるワケね……。私は別に構わないわ。それじゃ、ちよつと着替えるわね。んしょつと……」

「レン！？だからトイレで着替えて！」

そんなことをしているうちに時間が過ぎて、

ーコンコン

控えめなノックの音が聞こえてきた。

「あら、いらっしやい、瑞希。廊下に鉄人いなかった？」

「西村先生はいましたけど、お菓子をあげたら通してくれました」

そう言い手作りと思しきお菓子をを見せてくれる瑞希。

「さらば鉄人。安らかに眠れ……」

彼の冥福を心から祈りましょう。

「ところで、明久君とレンさんはどうして浴衣姿なんですか？」

「これ？部屋にあったのを着てみたんだ」

「折角あるならと思ってね。どう？似合ってる？」

まあ色々と事情はあるみたいだけど、説明する必要もないでしょ。

「はい。二人ともとっても似合ってます！綺麗な肌や細い鎖骨が凄く色っぽくて！」

え？明久も色っぽいの？

「姫路。よく来てくれた」

「こんばんは坂本君。お邪魔しますね」

「早速だが、プレゼントだ」

雄二が手に持っていたものを瑞希に渡す。

「浴衣、ですか？ありがとうございます。ところで話して……？」

「話というか、姫路さんにお願いがあるんだ」

「お願い？」

「うん。実はね、その浴衣を着た姫路さんの写真を撮らせて欲しいんだ」

「え……っ？」

姫路が何やる驚いているようだけど、その辺は明久に任せるとするわ。それより、

「……………（キュツキュツ）」

「コイツのコンディションでも聞いておこうかしら。」

「ムツツリーニ。準備はどう？」

「……………問題ない」

「そう。良かったわ」

「レン。言い忘れたんだが、ちょっと頼み事をしていいか？」

「頼み事って、他にもあるの？」

突然雄二が声をかけてきた。

「ああ。お前には撮影の被写体と共に姫路や秀吉の浴衣姿の絵を描いて欲しい」

「もしかして、それも流すの？」

「そうすれば確実に士気の上昇に拍車をかけれるだろう」

「分かったわ。描くからには全力で描くわ」

「ああ。楽しみにさせてもらおう」

ちなみに瑞希は浴衣に着替える為にトイレに入っているから、この場にはいない。

「ムツツリーニにレン。一つお願いがあるんだけど」

「……………?」

「どうしたの?」

「あのさー」

明久は周りに聞こえないように音量を落として、先を続けた。

(一枚ずつだけでいいから、その、僕と姫路さんのツーショットを……………)

(ふふっ……………。オッケー)

(……………貸し、一つ)

私とムツツリーニは小さく笑みを浮かべた。

これくらいの思い出ぐらい、あってもバチは当たらないですよ。

ムツツリーニが血の海に沈んだから若干時間はかかったが、秀吉と姫路の浴衣姿はバッチリ写真に収め、本人たちから許可をもらい、スケッチブックにも収めることができた。スケッチはまだ誰にも見せてないが、男子の皆をその気にさせると確信している。

そんな安心感からきた眠気に抵抗しなかったからだろうか。俺の身体がどこかに運ばれていることに気がつかなかったのは。

「……………しょ、んしょ……………」

ズルズルと身体を引きずられる感覚。

「うっん……………」

って、ここはどこだ？

「亮、起きた？」

「……………優子か？」

浴衣姿の優子が俺を引きずっていた。

「何で俺はこんな所にいるんだ？確か部屋で寝てたはずなんだけど……………」

「アンタたちの部屋が騒がしかったから連れてきたの」

「一体俺たちの部屋で何があったんだ？」

さて、とりあえず周りの状況を確認してみよう。今、俺の周囲にあるものは――

- ・廊下を疾走しているセーラー服姿の明久
- ・それに続く雄二
- ・そんな二人を追いかける鉄人

「……………」

まあちょっと待て。今のは何かの間違いだろう。
深呼吸をしてもう一度よく観察してみる。

- ・雄二のズボンを無理矢理脱がせようとしている明久
- ・そうはさせまいと必死に抵抗している雄二
- ・そんな二人を呆れた目で見ている鉄人

「くっ……。幻術か……」

「「お前は忍者か!!」」

実はマフィアだったりして。

「それで…ねえ……」

優子が手をもじもじさせている。

「アタシを寝かせないっていうのは、その……」

おまけに顔も真っ赤になっている。

「優子。それについてなんだが、」

明久が送ったメールを誤解しているんだろうが、それをやんわりと解かなければならない。

「お前のその浴衣姿を俺に描かせて欲しいんだ……」

「え……っ?」

突然のお願いに、やはり優子はびっくりしていた。

「そ、そうだったの……?」

俺が首を縦に振ると、優子は胸をなで下ろした。

「まったく……。紛らわしいメールを送らないでよ……」

紛らわしいって、何がだ?

「それで、絵のモデルなんだがー」

「……いいわよ」

優子は顔を赤らめながら呟いた。

本人の許可も得たところで俺は懐に忍ばせていたスケッチブックと鉛筆を取り出して、優子の浴衣姿のスケッチを三枚描き上げた。一枚目は優子本人に渡す用、二枚目は雄二に渡す用。え？三枚目はどうするって？それは皆には内緒の、俺の秘密の思い出用ってことで。

第二十七問・進む熱いパトスで思い出を裏切れ！

「ふあ……あふ……」

明久の口から大きな欠伸が出る。かなり眠そうだ。

「さすがに眠いぞこら……」

その隣では雄二も明久と同じように目を擦っていた。

昨夜は朝まで鉄人に捕まっていたらしく、これで三日連続だから無理はないだろう。

「お前ら、災難だったな……」

なんだか申し訳なくなってきた。

「災難といえば災難だったかもー！ふわあああ〜」

明久が鮭の切り身やご飯を前にしながら眠気を優先するとは、これはかなりの重症だ。

「弱ったのう。お主らがそんな様子では、今夜はとて……」

「別に全く寝ていないわけじゃないから、気合いさえ入れれば目が覚めると思っけどー」

「俺もダメだ……。全然気合いが入らなー」

二人とも相当ヤバそうなので、ムツツリーニは雄二に一枚の写真を、俺は明久に写真と同じくらいの大きさの紙を渡したら、

「「ふおおおおっ!?!」」

二人とも一気に覚醒していた。

「思った通りだ」

「……………効果は抜群」

俺とムツツリーニは互いに向けて親指を立てた。ちなみに美術はレシよりも俺の方が得意だったりする。

「ムツツリーニと亮。今しがた二人に見せたのは何じゃ?えらく興

奮しておるように見えるのじゃが？」

「「ふおおおおっ！」「」

お互いの持つているものを交換した雄二と明久は、再び覚醒していた。

「……………魔法の写真」

「鉛筆の無限の可能性だ」

ムツリリーニにしては珍しく、誇らしげに胸を張っていた。

「どれ、ワシにもその絵と写真を見せてくれんかの？」

「……………(スッ)」

「ほい」

手にしている絵を秀吉に渡す。

「ほう。これはまた……………」

ムッツリーニの写真の一枚目は、昨夜撮影した姫路と秀吉とレンの浴衣姿だった。

三人とも恥ずかしそうに上目遣いで浴衣姿でとても色っぽい。

俺の方は少し浴衣の裾がはだけており、肩が半分ほど露出している姫路と秀吉だった。

「ムッツリーニ。こんな写真が撮れるなんて、お前は何者だよ……」

「……………亮こそ、鉛筆一本でここまで描けるとは……………」

俺たちは今お互いを心から尊敬している。

「明久。二枚目は何が写っておるのじゃ？」

「えっと……………」

ムッツリーニの写真には浴衣姿で迫る霧島さんと-halfパンツ姿の島田のツーショットが写っており、俺の紙には浴衣姿の優子が描かれていた。

「す、凄いっ！これも凄いよムッツリーニ！亮！今僕はキミたちを

心から尊敬している！」

「確かに凄いもの……。うまく明久と雄二が写らんような角度で撮ってあるし、もはやプロの業じゃな」

「そつだよ！それに木下さんも凄く色つばいし、二人は神の技術を持っていると言っても過言じゃないよ！」

そこまで言われると少し照れるなあ……。

「して、三枚目は？」

俺は二枚しか描いてないので、あとはムツツリー二のだけとなる。

「あ、うん。三枚目はー」

明久が写真を捲ると、そこに写っていたのはーセーラー服姿の明久。

「……………ちよつと外で深呼吸してくる……………」

少々気分を害してしまったので、一刻も早くこの場を離れることにした。

まあ何はともあれ、俺たちの気力はここにきて最高潮に達していた。

カチッ　カチッ

カタカタカタカタ……

時計の針の音と俺がパソコンを操作する音だけが部屋に響き渡る。

「明久。今更ジタバタするな」

雄二の声が出たので明久の方を向くと、確かに妙にソワソワしていた。

「雄二の言う通りだ。補充のテストも全て受けたし、写真も絵も回した。やるべきことは全てやったんだから、あとは何も考えずに戦

うただけだぜ」

明久に声をかけると、俺は再びパソコンに目を向けた。

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

「ぜってー負けねえ……」

「……………今日こそ借りを返す」

密かに闘志を燃やす俺とムツツリーニ。あの写真と絵はお互いに会心の出来だと確信しているので、俺もムツツリーニも昼間の補充テストで凄い勢いで問題を解いていた。今夜の俺たちは一味違う。

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ」

瞑っていた目を開け、雄二がこっちにやってきた。

「亮。今まで集めたデータを出せるか？」

「大丈夫だ。もう出してある」

俺はパソコンの画面を皆の方に向けて。そこには合宿所の地図と、いくつかの丸い点が映し出されていた。

「亮。この点は何なの？」

「サーモグラフィーを使って分かった人物の位置だ」

「やっぱり、いくつかの部隊に別れて、離れた位置にいるね」

「やはり干渉か？」

「多分そうだろうな」

干渉と言うのは、異なる二種の召喚フィールドが同じ場所で展開されると双方の効果が打ち消され、召喚フィールドが消えてしまうことだ。そしてそれを避ける為に、教師同士はあまり近づけないのである。

「俺たちがいるのは三階だから、三階・二階・一階・女子風呂前の四ヶ所を突破しないと目的地には辿り着けない」

雄二がパソコンの画面を指差しながら言う。

「三階の敵はE・Fクラスの仲間が抑えてくれる。二階の敵はDクラスが抑えてくれる手筈になってはいるが……」

「Dクラスだけだと少し厳しいだろうな」

正直、Cクラス抜きでの二階の突破及び制圧はかなり難しい。

「でも、ここまできたらやるしかないよ」

「勿論そのつもりだ。それで、二階を突破するトー」

「……………高橋先生」

「そうだ。学年主任の高橋女史が率いる一階教師陣だ」

「多分ここには霧島さんや姫路、工藤さんもいる」

今回の作戦は、高橋先生をどうするかで作戦の成否が大きく変わると言っても過言ではない。

「明久とムツツリー二を通す一瞬の隙は俺が作る。だが、高橋女史や翔子たちをそのまま足止めするのは不可能だと思ってくれ」

確かに雄二人ではあの三人、もしくはそれ以上を止めるのは無理だろう。

「じゃが、足止めできねば……」

「ああ。明久とムツツリー二は前後を挟まれゲームオーバー」

「そうなると作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになる」

「作戦が失敗しても大して現状と変わらん気がするのじゃが……？」

言われてみれば確かに。

「とにかく、高橋女史は根性でなんとかするしかない。A・Bクラスが協力してくれたら勝機は充分にあるんだが」

「うーん。Aクラスはともかく、Bクラスは大丈夫だろ。きちんと全員が、特に代表格が女に興味を持っているからな。あの写真が効くはずだ」

「あははっ。亮の言い方だとAクラスの代表格は女の子に興味がないみたいだよ？」

「……」

俺たちは気まずそうに明久から目を逸らした。

「そこまでいったらあとはお前らの仕事だ。分かってるな？」

「……………大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね？」

今回はあまりにも不確定要素が多く、今までで一番厳しい。でも、

「……………大丈夫。きつとうまくいく」

「うん」

「当然だな」

「じゃな」

「ああ」

このメンバーなら何でもできる気がする。不可能を可能にできる気がする。

ーピーピピ

どこかで電子音が聞こえた。現時刻は八時きつかし。戦闘開始の合図だ。

「……よし。てめえら、気合いは入っているか！」

「「「「おつっ！」「「「「

「女子も教師も、AクラスもFクラスも関係ねえ！男の底力、とくと見せてやるうじゃねえか！」

「「「「おつっ！」「「「「

「これがラストチャンスだ！俺たち五人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

「「「「当然だっ！」「「「「

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣るぞっ！」

「「「「「よっしやあーっ！」「「「「「

強化合宿四日目20:00。今、覗きを巡る最後の勝負が始まるうとしていた。

『いたわっ！主犯格五人組よ！』

『長谷川先生！向こうの五人をやります！』

部屋を出てすぐのところに長谷川先生率いる女子部隊が展開されていた。

「ふん、雑兵どもが。この俺に敵うと思うなよ。――試獣召喚！」

先行してきた女子二名に対して雄二が召喚獣を展開する。相手はEクラスの女子のようだが、今の雄二の敵じゃない。

『Eクラス 古川あゆみ&源涼香

VS

Fクラス 坂本雄二

数学

83点&77点

VS

224点

「勉強してから出直しやがれっ！」

『『きやああーっ！』』

雄二の召喚獣がそれぞれに拳を叩き込み、一撃で決着がついた。

「坂本君！待ちなさい！」

倒された女子二名に遅れて長谷川先生が追ってくる。しかし、

「長谷川先生、残念ながらここは通しませんよ」

クラスメイトの須川たちがそれを阻止した。

「吉井、神谷、坂本！ここは任せて先に行け！試獣召喚っ！」

『試獣召喚っ！』

壁を作るように須川たちが召喚獣を並べる。

背中を須川たちに託し二階に向かう途中、後ろからは教師を前にして一歩も退かない勇士たちの怒号が響いてきた。

『翔子たん！翔子たん！はあはあはああつー！』

『島田のぺったんこおーっ』

『姫路さん結婚しましょおーっ』

『木下さんすぐ行くからなあーっ！』

『レンたん愛してるうーっ！』

全員やられればいいのに……。特に最後のヤツ。

「凄い士気じゃな。これならば三階の制圧は問題なさそうじゃ」

「皆の気持ちが一つになってるからな」

三階の教師も女子も、EクラスとFクラスの男子に圧されていた。三階の制圧は決まったと言ってもいいだろう。

「でも、ここから先が勝負だね……」

「そうだな。Dクラスだけで戦っているのか、Cクラスが参戦しているのか」

「……躊躇っている時間はない」

「ああ。行くぜー！」

広めの階段を四人で駆け下りる。二段飛ばしで進み、踊り場を曲がって見えた先には、

『俺たちの覗きの邪魔はさせない！試獣召喚！』

『先生、覚悟してもらいます！』

『き、君たちまで参加していようとは……！』

『化学教師 布施文博

V S

Cクラス 黒崎トオル&野口一心

化学

6 6 3 点

V S

1 4 4 点& 1 3 2 点』

「Cクラス！来てくれたか！」

俺たちの待ち望んだ援軍の姿があった。

「Cクラス・Dクラスの野郎ども、協力に感謝する。二階は――俺たちの背中は任せるぞ！」

雄二がC・Dクラスを鼓舞するように声高に叫んだ。

『協力なんざ、つたりめえだ!』

『女子風呂覗かなくて何の為の男でえっ!』

『てめえらこそしくじるんじゃねえぞ!』

凄え。士気が高過ぎてべらんめえ口調になってきてる。コイツら、ノリが良いなあ。

しかし、

「ぎんねん。そう簡単にはいかないんだなあ」

「随分早かったわね。もう少しかかると思ってたのに」

布施先生の後ろで優希と優子が待ち構えていたのだ。

『（亮。今から言うことを皆に伝えてくれる？）』

「（何かは知らんが、分かった）」

（明久サイド）

まさかこんなに早く桂さんと木下さんに遭遇するなんて……。完全に計算外だ。

やはりここは誰か二人が残るしか無いのか？

そう思った時、

「CクラスとDクラスは空き部屋に避難して、もしもの時のために戦力を温存しておいたくれ。俺は優子と優希と布施先生を引き受けるから、その間に明久たちは先に行け！」

「え？」

亮の言葉に思わず耳を疑う。そんな馬鹿な！この三人を相手に一人で戦うなんて！

「コイツらには借りがあるからな」

でも、亮の目は本気だった。本気でこの三人に勝つ気である。学年トップクラスの生徒と、もう一人は化学の点数が教師レベルで、なおかつ腕輪の能力が反則じみている二人と、更に教師を相手に。

「いけるのか、亮？」

「当たり前だ」

訪ねる雄二に不敵な笑みを返す亮。コイツは自分の力を信じている。自分の力が目の前の三人に負けることはないと確信している。それなのに、仲間の僕たちがコイツを信じないでどうする！

「わかったよ！ここは任せた！僕たちは先に行く！」

亮を残し、僕たちは廊下を走った。

そんな僕たちを木下さんが止めようとしたけど、桂さんがそれを制していた。

「優子。亮に免じてここは通そう。ね？」

「……………分かったわよ」

後ろから、桂さんと木下さんのそんな台詞が聞こえてきた。

亮、負けるなよ……………！

〈亮サイド〉

「さて亮、戦る前に一つ聞きたいんだけど、」

突然優希が口を開いた。

「半分女のアンタが本当に女子風呂を覗きたいと思ってるの？」

ちなみにC・Dクラスの連中は既に別室に避難させている。

「俺が覗きに加担している理由は二つ。一つは明久と雄二の脅迫犯の搜索。もう一つは、こっやって皆で何かをやるのが面白いからだ」

「「アンタねえ……」」

二人が揃って溜め息をついている。

「一つ目の理由なら、もう消滅したみたいよ？」

優子が階段の方を向いたので、俺もそっちに注意を向けた。

「ーたどえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。正直に言おう。今、僕はー純粹に欲望の為に女子風呂を覗きたいっ！」

階下から魂の籠もった明久の叫びが聞こえてきた。

「ん〜……。まあいいや」

「え！？いいんだ!？」

優希がえらく驚いているが、そこは気にしない方向で。

「じゃあ亮、そろそろやろうか？」

「先生も含めた三対一でこっちが断然有利から、さっさと終わらせるわ！」

気付くと布施先生がこっちにやって来た。

「私が来たからには、大丈夫です」

「布施先生もいることだし、亮にもう勝ち目はないよ」

「……………が決めた？」

「ん？どうしたの亮？」

「三対一が有利なんて誰が決めた？生徒が教師に勝てないなんて誰が決めた？俺に勝ち目がないなんて誰が決めた？」

「へえ〜。またまた面白いこと言うね〜。試獣召喚」

「寝言も大概にしなさいよー。試獣召喚」

「神谷君。大人しく降参して下さいー。試獣召喚」

「……………試獣召喚」

『化学教師 布施文博 & Aクラス 桂優希&木下優子

VS

Fクラス 神谷亮

化学

637点&583点&372点

VS

1387点
『

「……………え？亮……………、アンタ、その点数、何なの？」

「これが俺たちの全力だ」

「『俺たち』ってまさか……………レンも一緒に解いたの!？」

「流石は優希。幼なじみだけあって、良く分かってるな」

意外なことだが化学は理系において生物と並び、暗記力が試される科目である。

数学のような手のかかる計算もなく、物理のように作図を用いる必要もほとんどない。

だから、レンが計算問題を担当し、計算している間に俺が暗記の部

分を解くという秘策を行ったのだ。

「くっ……。神谷君、貴方いつの間にかここまで力を……」

「おしゃべりの時間は終わりだ。三人まとめてかかってこい」

第二十八問・Real Force (前書き)

召喚獣バトルが別次元に向かっていますが、どうかご勘弁下さい。

第二十八問・Real Force

次に示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を作りなさい。

『あいまいもこ』

姫路瑞希の答え

『漢字【曖昧模糊】

例文【責任の所在が曖昧模糊としていた】』

教師のコメント

【あやふやではつきりとしなさま】をあらわす四字熟語ですね。読める人は多いのですが、書ける人はそう多くありません。良く出来ました。

吉井明久の答え

『漢字【合間妹子】』

教師のコメント

なんとか答えようという気持ちだけは伝わってきました。

土屋康太の答え

『例文【小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三代美女は遣随使として旅立った】』

教師のコメント

一名男性が混ぜているので気をつけて下さい。

神谷亮の答え

『漢字【愛魔異喪虚】』

例文【私の友達は何に対して愛魔異喪虚だ】』

教師のコメント

言葉の意味は分かりませんが、こういう女性はこの学校にいそような予感がします。

「はあああああつ！！」

右側から優子の召喚獣がランスを振りかぶりながら飛びかかってきた。

「はあつ！」

そして左側からは布施先生の召喚獣が飛びかかってきた。

「くっ……!!」

二方向からの攻撃をそれぞれ二本のビームソードで受け止める。そして、

「食らいなさい!」ライフスナプリンゲンゲインフイニティ『燕の子安貝』!!!!」

優希の召喚獣が正面から突っ込んできた。

しかもその武器は刀からガントレットに変わっている。

その右手は俺の召喚獣には当たらず、手前で止まった。

「亮……いつの間にそんなこと出来るようになったの?」

優希が驚いたという顔をしている。そこには空中で交差しているもう二本のビームソードがあったからだ。

「いつつも飛ばしてるんだ。これくらい出来て当然だろ!」

ビームソードを振り払って一気に相手全員を吹っ飛ばす。

そして優子の召喚獣に一直線に突っ込んでいった。

「って速い!？」

相手が武器を構える頃、こっちは既に大剣状のビームソードを突き立ててその懐に入りこんでいた。

「そんなの、当たらな〜っ!？」

突きは真横に避けられたが、その瞬間に先程優希の攻撃を防いだビームソードに首を貫かれていた。

「これで一人脱落だな」

「な、なんでアンタはそんなことが出来るのよ!？」

「ちゃんと言ったろ? 『俺たち』って」

「へえ〜。ということは亮だけじゃなくてレンも戦ってるのね?」

優希の言う通り、レンもこの戦闘に参加している。操る役割としては俺が召喚獣、レンが空中のビームソードといった具合だ。

「だったらー逃げ道を塞ぐ！」蓬萊の弾の枝ホウライノタマノエダ『!!!』」

優希の召喚獣の武器がガントレットから弓へと変化し、大量の矢をショットガンのようなスピードと範囲でこっちに放った。

「俺は逃げる気は全く無い！」

自分の前にビームソードを数本くっつけて並べて盾にして矢を凌ぎ、再び四刀流になって優希の召喚獣に突っ込んだ。

「バカの一つ覚えもいい加減にきなさいよねー」火鼠の衣サラムンダーシールド『!!!』」

しかし相手の武器がマントになって俺たちの四本の攻撃を全て防いだ。

「今度はそっちが吹っ飛びなさい！」

優希の召喚獣が素早くマントを翻したので、こっちは思いつ切り後ろに吹き飛ばされた。

そしてその先には布施先生の召喚獣が待ち構えているのが見える。

「神谷君、これで終わりです！」

「先生、すいませんが少し大人しくしていただきます」

レンが操作しているビームソードで布施先生の召喚獣の腹部を刺して床に倒すと、更にその手足に右手から出した四本のビームソードを突き刺して動けなくした。

「ねえ、そんなことしたら亮も動けないんじゃないの？」

「いや、誰も動くなんて言ってないぜ？」

お互い会話しながらも視線は自分の召喚獣に固定させている。

「ここから動かずお前を討つ！」

そう言い左手を前に突き出す。

「じゃ、こっちもそうするわ！」

俺の前に、見覚えのあるキャノン砲が展開される。

それを見て俺の頭に先日
の光景が蘇る。

あの時は無残にやられたが、
今回はそうはいかない！

「（んじゃ、アレやるか………
オペレーションX………）」
イクス

『（了解！ええつと………
ターゲットロック、ライトセイバー出力、
座標共に調整完了）』

「何する気か知らないけど、
これで終わらせるよ………」

『（レフトキャノン、出力調整完了。
ゲージシンメトリー。発射ス
タンバイ！）』

「いくぜ！』Xイクス
CANNON』！！」キャノン

「『竜の頸の玉』………』」
フルリマンデラユニバレット

相手が以前と同じエネルギー弾を撃つてきたのに対し、こっちは召喚獣程の大きさのビームソードを右手から出し、極太レーザーのように撃った。

「きやあつ………』」

二つはぶつかり合ったが、すぐにビームソードがエネルギー弾を打ち破り、相手を飲み込んで勝負はついた。

そしてもう一本ビームソードを出して、布施先生の召喚獣の首に突き立てた。

「これで、俺たちの勝ち……で……」

なんだ？頭がグラグラして、視界がぼやけてくる……

「……………」

皆が何を言ってるのかが全く分からない。

俺の視界はそのまま暗転してしまい、自分の体が床に倒れたのが分かった。

「あれ？私……」

目を開けると、私は見慣れない部屋に寝かされていた。

「よかった……。気が付いたんだ」

優子の表情が安堵に変わっていた。

「ねえレン、倒れたけど本当に大丈夫なの？」

「ええ。昼間のテストとさっきの戦闘で疲労が溜まっただけだから大丈夫よ。それよりも、ここはどこなの？」

「レンがC・Dクラスの皆を待機させていた部屋だよ」

少し離れた場所に座っていた優希がこっちに来た。

「そつだ！CクラスとDクラスの皆は！？」

「アンタを運ぶのを手伝ってもらった後、皆女子風呂を覗きに行きたよ」

優希が呆れた目をしながら呟く。その時、

『割に合わねえっ!!』

階下から、男子の生々しい悲痛な叫びが響いてきた。

「アイツら……一体何を見たわけ？」

「さあ……」

「有り得ない光景でも見たんじゃない……？」

私たちは三人揃って遠くを見ていた。

「それじゃ、そろそろ話してくれない？アンタが覗きに加担した理由について」

「そうね……。分かったわ。実は――」

「吉井君と坂本君が脅迫されている!？」

「まあそんな感じね」

「いや、そんなのんびりしてて大丈夫なの!？」

「大丈夫よ優希。もう犯人は分かったから」

「確か、『お尻に火傷の痕がある女子』だっけ？」

「優子の言う通り。そして、明久は『傍にいる異性にこれ以上近づくな』という脅迫を受けていたワケだから、犯人は他人に嫉妬するほど瑞希か美波に対して強い行為を抱いている女子ってことになるわ。そして、それに当てはまる人物はこの学園内では一人だけ……」

「Dクラスの清水美春さんね？」

「そういふこと」

今思えば簡単なことだったんだけどね……。

「それにしてもアンタ、X CANNONだっけ?いつの間にあんな技を思いついたの?」

「ああアレ?アレはずっと前から考えてはいたんだけど、多用は禁物みたい」

「やっぱり、点数消費が激しいから？」

優子が不思議そうに聞いてくる。

「ええ。それに隙も大きいから試合戦争には不向きだわーっ
てあれ？」

そこまで話して、私はある違和感を感じた。

「レン、一体どうしたの？」

「何かあった？」

「優子……優希……」

言葉に表すと、『自分の半身を裂かれる思い』と言っただろうか？

「実は……」

私は今、文字通りそれを実体験している。

「実は――亮が……いない……」

第二十九問・魔法のコトバ（前書き）

今回の話は時系列で言うと、2巻と3巻の間です。

第二十九問・魔法のコトバ

「亮、ちょっと頼みがあるんだが」

「ん？どうした雄二？」

「単刀直入に言う。頼む。翔子とおふくろの魔の手からエロ本を逃すことができる道具を作ってくれ」

「単刀直入なのは構わないけど、ついでに事情も説明してくれないか？」

「実は、翔子だけでなく、おふくろにまで俺のエロ本の所在がバレちまってな……」

「ちなみにどこに隠してたんだ？」

「机の上から三番目の引き出しの中の二重底の下に世界史の参考書のカバーをかけておいた」

「あのさあ……。二人とも超直感とか持ってるんじゃない？」

「翔子に到っては見つけたら燃やそうとしたからな」

「流石霧島さん……。分かった。霧島さんに睨まれるかもしれないけど、ほら」

「これは……。何かの設計図か？」

「単刀直入に言えば、中に入れた物を外から見えなくする、ジツパ
ー付きのビニール袋だ」

「おお！それは助かる。完成したら是非売ってくれ！」

「別にいいけど……袋とその効果を打ち消す専用メガネまたはコン
タクトレンズをセットにすると………だいたいこんな感じだ」

「どれどれーっっておま、この値段、桁がおかしくないか？」

「いや、それで合ってるぜ」

「どうして諭吉がこんなに必要なんだ!？」

「しゃーないだろ。モノがモノなんだから。バイトとかしたら？」

「俺もそのつもりだ。それじゃ、頼んだぞ」

「あいよ」

「そういえば亮、あの映画ペアチケットはもう使ったのか？」

「いや、まだだ。今週末に優子と行くことになってる」

「二人とも、うまくいくといいな」

「?何のことだ、雄二?」

「さあな」

「何なんだ一体……？」

「……神谷」

「き、霧島さん！？一体どうしたんだ！？」

「……さっきの道具」

「へ？さっきの道具？」

「……完成したら私にも売って欲しい」

「……へ？」

そんなこんなで、優子との映画鑑賞当日。俺は優子との待ち合わせ場所に向かっていた。

「あ、亮。こっちこっち」

声が出た方を向くと、手を振っている優子がいた。

水色のワンピースがとてもよく似合っている。

「それじゃ、早く行きましょ」

「そうだな。もうすぐ上映時間だし」

「それで、どの映画を見るの？」

「ここは近くの映画館。初めて来たが、意外と広い。」

「ええつと……」

チケットの映画タイトルに目をやる。

「『上弦の月がのぼる空』……って、こっぴつラノベがあったよう

な……」

「実写化したんでしょ？今そついうの多いみたいだし」

確かに他にもそれっぽいタイトルのポスターがいくつもある。

「『マイナーゲーム』、『タイジ』、『アリマ様が見てる』……もう本当なんでもアリだな」

「亮、早く来なさい。もうすぐ始まるわよ」

「分かったから少し落ち着けて……」

「雄……」

「梨花……」

スクリーンでは一組の男女が病院の屋上でいい雰囲気になっている。

んで、俺の隣に座っている優子はとらじゅん、

「……………」

俺にもたれかかって寝ていた。

しかも冷房が効き過ぎているせいか、場内が少し寒い。

「はあ、つたく……………」

俺が羽織っているパーカーが布団になることが決まった。

「へっくしょん!!」

「ねえ亮、大丈夫？」

「ギリギリ……」

映画館を出た俺は、酷い寒気に悩まされている。あの映画館、パーカー無しでアレは最早拷問だぞ……。

「というか優子、もしかして昨日寝れなかったのか？」

「き、昨日はその……服を選んでたり緊張してたりして寝れなくて……じゃなくて、そのー」

「徹夜でゲームしてたりとか？」

ブチッ、という何かが切れる音が聞こえた気がした。

「優子……腕が痛いんだけど……」

「少しは我慢しなさいー」

我慢しなさいと言われてもなあ……。

端から見れば仲良しのカップルに見えるかもしれないが、実際は腕に関節技を決められており、とても痛い。

「それより、どっか店に入ろうぜ」

このまま関節技を決められ続けるのは正直キツイ。

「そうね。だったらその『ラ・ペデイス』にでも行く？」

「そうだな。多分温かいコーヒーとかもあるだろう」

そんな事を話しながら店内に入ると、

『ふぬああっ！？手首の関節が一度ハメられてまた外された！？』

『だからどうしてアンタはそうやって頭の悪いウソしかつけないのよっ！高橋先生と一緒に来るわけないでしょ！？』

『え！？え！？やっぱりウソなんですか！？そうになると美波ちゃんと二人できたんですか！？』

『……A heli sh gate has opened・Co

m p e n s a t e t h e c r i m e w i t h y o u r d
e a t h . A r e y o u r e a d y , Y u j i ? 『

『な、なんだ！？どうして翔子がいきなり戦闘態勢になっているんだ！？』

霧島さんの射程内にいる雄二と、島田の暴風圏内にいる明久の姿があった。

何だ！？何で明久たちがいるんだ！？

「皆何をしてるんだ……？」

「……神谷に優子」

雄二に迫っていた霧島さんがこっちを向いた。

「代表に島田さん、ちょっとは落ち着きなよ。お店で暴れるなんて良くないよ？」

なんだか久しぶりに常識的な台詞を聞いた気がする。

「……でも、雄二が」

「アキのバカが」

「言い訳はいいから。他のお客さんに迷惑だろ？」

「……わかった」

「確かにその通りね……」

俺たちの言葉で動きが止まる二人。とりあえずは落ち着いたな。

「うむうむ。姉上も良いことを言うのう」

「そうだね秀吉。お姉さんのおかげで助かったーって、その格好はどうしたの？」

いつの間にか近くにやって来た秀吉は、何故かウエイトレスの制服を身につけていた。

「うむ。それがじゃな、サイズの合う替えの制服が見つからなかったので、こっちで代用しておるのじゃ」

そう言って短いスカートの裾を摘む秀吉。

「まあ、いいんじゃない？お客さんもウエイトレス姿の方が嬉しい
だろうし」

「そういうものかのう？」

「そういふもんだよ」

「いや明久、ソレは色々とー」

「秀吉、ちよ~~~~~~~~っといいかしら？」

俺の言葉を遮って優子が俺たちの前にやってきた。

「んむ？なんじゃ、姉上？」

優子にがっしりと手首を掴まれた秀吉が小さく首を傾げる。

「いいからいいから。吉井君、このお店ってトイレはどこにあるの
？」

「え？向こうの奥だけど」

「そう。ありがとう。亮はその辺で適当にしてて」

明久がトイレのあるだろう場所を指すと、優子は秀吉の腕を掴んで

笑顔のままそっちに歩き出した。

「あ、そうそう。代表と島田さん」

そして、姿が消える前に一言。

「さっきの台詞、撤回するね。他のお客さんに迷惑でも、気に入らないのは気に入らないもの。存分にやっちゃいませよ」

そして、ボタン、とトイレのドアが閉まる音が聞こえた。

そして、それをきっかけに店内で練り広げられる阿鼻叫喚の地獄絵図。

途中から来た清水さんと、父であるらしい店長も加わってもう止めることは不可能だろう。

ちなみに俺はというと、

「ムツツリー、ニ、コーピーを、一つ、よるこくへ」

「……了解」

時々襲い来る店長をかわしながら、とりあえず暖をとることにした。

「まったく秀吉は……」

「まあとにかく落ち着けて」

あの地獄絵図の後に色々な場所を巡っていると、いつの間にか空が暗くなり始めていた。

ちなみに俺たちの横にはフェンス越しに線路があったりする。

「そういえば、この前の質問に答えなきゃな」

「へ？質問ってどんな？」

そう。強化合宿の時に聞かれた質問。

「腐女子は嫌いか、っていう寝言だけだな」

「寝言って……」

「正直に言つと、別にそんなことは無いぞ」

「え……？」

これは、俺の嘘偽り無い気持ちだ。

「別に趣味で人を選ぶ気はないさ。それに、腐女子にはもう慣れてるからな……」

「なんか、色々あるみたいね……」

「まあな……」

「というか寝言を本人の前で言うなんてアンタ、初めて会った時から相変わらずデリカシーがないのね？」

「？初めて会った時って、試召戦争の時か？」

「……はあ」

優子が呆れたような顔をしながらため息をついた。

「覚えてないんなら、別にそれでもいいわ。それじゃ、亮の気持ちも聞いたことだし、」

優子は俺の少し先を歩き、

「アタシもはつきり言わないとね」

笑顔でこっちに振り返った。

「言っつて、何をだ？」

「アタシ、実はずっとー」

ガタンゴトン！ガタンゴトン！ガタンゴトン！

ちょうど俺たちの横を電車が通り過ぎたらしく、その音に遮られて優子が何を言っているのかが分からなかった。

ガタンゴトン…ガタンゴトン…

電車の音が静かになる頃には、優子の口は既に閉じられていた。

「えっと……。優子、今何て言ったんだ？悪いけどもう一回……」

「さあ？アタシは何て言ったのかしら？魔法でも使えば聞こえるんじゃないの？」

そう言いながらまた歩き出す優子。

「ちよっ……。優子！絶対お前楽しんでるだろ？」

「早く来ないと置いてくわよ」

「うおーい！？ちよっと待てよー！」

その日の夜空は一番星がよく見える、とても澄んだ空だった。

第二十九問・魔法のコトバ（後書き）

最後の優子のセリフの内容は、皆様のご想像にお任せします。

第三十問・『病は気から』という言葉は意外と的を射ている(前書き)

Dクラスとの試召戦争云々の話はストーリー上の都合により、

・展開がかなり早い

・オリジナルな話が結構ある

という感じになると思いますが、何とぞご了承ください。

第三十問・『病は気から』という言葉は意外と的を射ている

以下の問いに答えなさい。

『西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られていないことが多いです。意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかったようです。よくできました。

清水美春の答え

『コロン・ブス』

教師のコメント

フルネームは分かりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームというわけではありません。気をつけましょう。

島田美波の答え

『ブス』

教師のコメント
過去の偉人になんてことを。

神谷亮の答え

『クリストファー・コロセウム』

ファーストネームの解答に度肝を抜かれました。コロセウムじゃなくてコロンプスです。きちんと覚えましょう。

覗きの件では私も結局停学をくらってしまい、一週間の自宅待機となった。そしてその間に亮は一度も出てくることはなく、私は憂鬱な気持ちのまま家で過ごしていた。

そして今日がその停学明けで本来なら登校日なんだけど、

「……………三十八度八分。これはもう完全に風邪引いたわね……………」

私は現在ぶっ倒れている。

「とりあえず今日は家でゆっくりー」

P i P i P i P i P i !

休もうとしたら、ちょうど電話がかかってきた。

「もしもし?」

『おお、レンか』

「雄二、一体どうしたの?」

『その声……もしかして風邪でもひいたか?』

「大正解よ」

『やはり学校に来れそうにないか?』

「……何か悪いことでもあったの?」

『ああ。悪い事態の雲行きが怪しくなってきた』

「うーん………分かったわ。医者に寄ってからだと多分昼過ぎぐらいになると思っわ」

『分かった。感謝する』

「その代わり、今度クレープでも奢ってちょうだい」

『そうさせて貰おう』

私は電話を切ると、風邪でダルい体に鞭打つ。そして制服に着替え
て病院に向かった。

「あ、レンー！」

病院に行つて医者から薬をもらい、そのまま登校。保健室前の廊下
を歩いていると、前方から明久が走ってきた。

しかも、右手がすごいことになっている。

「ありがとう！来てくれたんだね！」

「それはいいけど、その右手はどうしたの？」

「色々あったんだよ。それより先に保健室！」

明久が再びダッシュしたので、私も事情を聞こうと保健室に向かった。

「そう……。まさかそんな事になってるとはね……」

明久の右手の処置が終わった直後。私は保健室で明久から美波との間に起こったいざこざや、Dクラスの清水さんへの工作についてを聞いた。

「それで、清水さんにアンタと美波が恋人だと思わせる芝居のシーンで瑞希が屋上から走り去ってすぐ、アンタは治療を受ける為に保健室に走って来たと……」

「うん。大体そんな感じ」

「……………はぁ……………明久、ちょっと目を閉じて」

私は一度深いため息をついて明久が目を閉じたのを確認すると、

「このバカ」

かなり痛いデコピンを明久に食らわせた。

「痛あああっ！僕のデコに突然激しい痛みが！何でデコピンをするの！？」

「何で、じゃないでしょ？不在じゃなかったらもう一回その手首を外しているところよ！」

今の明久の話を聞く限り、雄二が行った作戦は失敗ということになる。

「ーってレン！大丈夫！？」

いつの間にか私はフラついていたらしく、気が付いたら明久に支えられていた。

「私はもう少し休んだら教室に行くわ。いい？明久。教室に戻るま

でに余計なことをしないようにね？」

「う、うん……」

明久が保健室を出て行くのを確認すると、私は持参した冷え 夕を
おでこに貼り付けた。

第三十一問・風邪を引いた時には長ネギを食べるといらしい

以下の文章の（ ）に入る正しい単語を答えなさい。

『分子で構成された固体や液体の状態にある物質において、分子を結集させている力のことを（ ）力という』

姫路瑞希の答え

『（ファンデルワールス）力』

神谷レンの答え

『（分子間）力』

教師のコメント

両者共正解です。イオン結合の間に発生するクーロン力と間違え易いので注意して下さい。

土屋康太の答え

『（ワンダーフォーゲル）力』

教師のコメント

なんとなく語感で憶えていたのだということとは伝わってきました。惜しむらくは、その答えが分子の間ではなく登山家の間ではたらく力だったということです。

吉井明久の答え

『（努）力』

教師のコメント

先生この解答は嫌いじゃありません。

「お待たせ」……………」

私が教室のドアを開けると、雄二が丸めた台本で明久の頭を叩いていた。

「お、レンか。体は大丈夫か？」

「本当にそう思うんなら眼科か脳外科に行ってきたら？」

大丈夫ならおデコに冷えピ なんて貼らないわよ。

「あの……レンさん、無理しないで下さいね？」

「分かったわ。それより、もう一度トライできないの？」

「それは無理だ。島田はあの調子な上に明久は姫路と一緒に仲良く戻ってくるよ」ときたもんだ」

雄二の席から離れた場所にある美波の席を見る。すると、美波は明久の顔を見てから「ふんっ」と不機嫌そうに鼻を鳴らして明後日の方を向いた。

「う、ごめんなさい。私と明久君と一緒に戻ってくるなんて、美波ちゃんと明久君が付き合っているのならおかしいですよ……」

「まあ、それはクラスメイトなのじゃからそこまで不自然ではないのじゃが……」

「明久が美波を放置していった後で一緒に戻ってくるという状況がマズいのよ。周りにどう思われるか、じゃなくて美波に対してだけ」

明久が自分を置いて瑞希の後を追い、その二人が仲良く帰ってきたんなら、怒るのは当然だ。

「とりあえず、明久は島田に詫びの一つでも入れておいた方がいいな」

雄二が顎で美波の方を示す。

「そつだね。ちょっと行ってくるよ」

明久が立ち上がり、美波の席に向かう。ちょっと心配だけど。

『あの子、美波』

『……………何？』

『その、さっきはごめん』

『もうアンタなんか知らない。瑞希と仲良くやっていればいいじゃない』

『いや、姫路さんとは途中で会っただけで』

『言い訳なんて聞きたくない』

『あう……………』

『でも、このままだと姫路さんがー』

『……………瑞希、瑞希って、アンタはいつもいつも……………！』

『み、美波？』

『どうして瑞希ばかりいつもお姫様扱いなのよー！じゃあウチはな

んなの！？男だとも思ってるの！？どうしてウチにはいつもそんな態度なのよ！」

『べ、別にそんなつもりは！』

『瑞希が転校させられそうになったら、ウチが瑞希の両親に話をして行くわ。だから、もう話しかけないで。アンタの顔なんて見たくない』

『ごめん。悪かったよ』

戻ってくる明久の方を見て、私を含めた皆が『やっちゃったな』といった顔をしていた。

「完全に怒らせちゃったよ……」

「そのようじゃな」

「ごめんなさい。私も後で美波ちゃんに謝っておきますから……」

「……………それは時間を置いてからにした方がいい」

「ええ。ムツツリーニの言う通りね。今の美波には明久や瑞希が下手なことを言えば逆効果になりかねないわ」

申し訳なさそうに目を伏せる瑞希には悪いけど、今はこうするしかない。

「やれやれ……。明久、ほとぼりが冷めたら、後できっちりフオロ
ーしておけよ?」

「うん。そうするよ」

「それならその話は置いて、だ。とにかく、このままだといっ
まで待つてもDクラスからの宣戦布告はないだろう。こっちから状
況を動かす必要がある」

話題を切り替えても雄二の表情はいつになく硬い。やっぱり私たち
Fクラスも相当ヤバいみたい。

「ムツツリーニ。Bクラスの様子はどうだった?」

「……………現在七割程度の補充を完了。一部では開戦の用意を始め
ている」

「そうか。予想よりも早いな。向こうも本気ってことか」

「……………休み時間もずっと補充をしていた」

そうになると、宣戦布告されるのは時間の問題ね。

「まずはDクラスに仕掛ける前に時間を稼ぐ必要があるな。ムツツ

リーニ、悪いが須川たちと協力してBクラスに偽情報を流してくれ」

「……………内容は？」

「Dクラスが試召戦争の準備を始めてるって感じて頼む。その狙いがBクラスだということも」

「……………了解」

「ねえ、それって何か狙いがあるの？」

「ただの時間稼ぎじゃないの？Dクラスに狙われていると知れば、Bクラスは連戦を避けたいと考えるでしょうからね。私たちへの宣言布告を躊躇うはずよ」

Bクラスは連戦を避ける為にもDクラスの様子見をして、場合によってはそのまま戦力をDクラスに向ける必要もあるだろうし。

「本当はCクラスが狙っているという話にしたいところだけどな」

「Cクラスは前の試召戦争でAクラスに負けてるもんね」

残念だけどCクラスも自分たちから試召戦争を申し込む権利がないから仕方ない。

「んでムツツリーニ。ある程度偽情報の流布が終わったらそっちは

須川に一任してくれ。お前には更に他のこともやってもらいたい」

「……………わかった」

ムツツリー二は私たちに静かに告げると、須川のところに向かつていった。須川ならムツツリー二と二人でうまくやってくれるでしょう。

「さて。次は秀吉だな」

「む。なんじゃ？」

「お前にはDクラスの清水を交渉のテーブルに引っ張り出してもらいたいんだが、頼めるか？」

「それは構わんが……………交渉と言ってもどうするつもりじゃ？」

「どうするつもりも何も、こっちの目的は一つだ。清水を挑発して敵意を煽る。向こうが乗ってきたら成功、そうでなければ失敗。それだけだ」

この交渉で私たちの行く末が決まるのだから、失敗は許されない。

「ふむ。清水を引っ張り出しての交渉となると……………その場に島田も連れて行く必要があるのじゃろっ？」

「ああ。その方が確実に挑発できるからな。下手に同席させると逆効果になることも充分考えられるが、その辺は俺がうまくやるう」

遠目に見ると、美波はさつきと同じポーズのまま窓の外を見ていた。背中だけで怒っているのがよく分かる。

「それじゃ、美波の方は私がなんとかするわ。機嫌を戻すのは無理でしょうが、交渉に同席してくれるように頼むくらいは可能でしょ」

「そうしてもらえると助かる。今の島田のところに明久や姫路を行かせるわけにはいかないからな」

確かにそんなことになったら、火に油を注ぐようなものだからね。

「分かったわ。交渉の場は空き教室、時刻は放課後すぐで良い？」

「それでいい。そのくらいの時間までならBクラスの宣戦布告を遅らせることができるはずだからな」

「了解」

私は自分の席を立ち、美波の席に向かった。

「ねえ美波」

「……………何？」

「放課後すぐに空き教室で行われる、Dクラスとの交渉に同席して欲しいの」

「で、でも……………ウチはー」

「お願い」

こっちを見ている美波に対して深々と頭を下げる。

「うっ……………。わ、分かったわよ！でも、同席するだけだからね！」

「うん。ありがとう」

美波がまたそっぽを向いたので、私は美波の席を離れた。

「とりあえずはうまくいったわ」

「レン、ありがとう……」

「ま、私は途中参加だからね。これくらいはお安い」用よ」

そんなことを話していると、雄二が妙な質問をしてきた。

「ところでレン」

「何？」

「今日は何か食べたか？」

何を食べたかって……。まあ雄二のことだから、きっと何か大事な
ことなのかも。

「朝から病院に行ってたし、特に何も食べてないわ」

そんな私の返事を聞くと、雄二はまるで深夜の通販番組に出ている外人みたいなオーバーリアクションをとって見せた。

「何も食べてない？それはいけないなレン！お前は風邪をひいてるんだ！しっかり食べて早く風邪を治してもらわないと！なあ姫路？」

「え？そうですね。風邪の時はきちんと食べなきゃいけませんし」

おかしい。絶対何かあるわ。

「そこで、だ。姫路」

「はい」

私の第六感が告げる。ここで何かしないと死ぬ、と。

「何か食べ物をー」

「そう言えば今日は朝昼共に卵入りのうどんだったー」

ぐう~~~~……。。

ちょうどそのタイミングでそんな音が鳴った。

「そらみるレン。腹を空かせているじゃないか」

私のお腹のバカ！何でこんなタイミングで鳴るの！？

「ごめんなさい。お昼も過ぎちゃったので何も残ってないんです」

瑞希が申し訳なさそうに言う。とりあえずは助かった……のかしら？

「そうか。無いのか。それなら悪いんだが……レンの為に何か簡単な食い物を作ってもらえないか？」

訪れたのは、雄二による地獄への誘い。

「……………」

「おいおいレン。どうして俺にしか聞こえないくらいの小さな声で『ムリ、ムリ』なんて連呼してくるんだ？おかしなヤツだなあ」

雄二、もしもの時は絶対怨むわよ……………。

「それはいいですけど、材料が」

「安心してくれ。調理室の鍵を（勝手に）借りてきた。材料もある」

ポケットから小さな鍵を取り出す雄二。

「わかりました。レンさん、何が食べたいですか？」

瑞希がにこやかに質問を投げかけてくる。

致死率を下げる為に、簡単で材料も少ないお粥（材料：お米のみ）
でいくわ！

「そうね。それじゃあ」

「ゼリーがいいだろう」

ゼリー（材料：不特定多数）

「……………」

「なんだレン。そんな紅い顔の上に、涙目上目遣いで睨まれても全然怖くないぞ」

「雄二！私を殺す気！？」

それに顔が紅いのは風邪のせいよ！

「ゼリーですか。わかりました。頑張ってみます！」

「宜しく頼む。容器はドリンクゼリーなんかに使われるようなパツクのやつだと助かる。多分、運動部用のやつが置いてあるはずだ」

確かにそうだろうけど……

それにしてもここまで計画的なんて、他に目的でもあるのかしら？

「じゃあ、ちょっと行ってきますね」

「ああ。頼む」

「はいっ」

雄二から鍵を受け取り、瑞希は教室を出て行った。

「……雄二、ここまで計画的に事を進めておいて、ただ私に瑞希の

料理を食べさせたかっただけなんて言うんじゃないでしょうね?」

今度は涙を流すのを我慢して雄二を睨みつける。

「そんな訳はない。というか、姫路の料理が必要なだけだ」

「え? 瑞希の料理が?」

「そうだ」

「でも、ああまで言った以上、姫路さんはレンに食べさせようとするんじゃないの?」

「その時は明久にも分けてあげるから安心して」

「こ、こうしちゃいられないっ!」

明久が急に立ち上がった。

「明久、どこに行くんだ?」

「姫路さんの後を追うんだよ! せめてどんな物を作っているのかだけでも確認しないと!」

「明久。それなら私も行くわ」

中身によっては事前に救急車を呼んでおく必要があるかもしれないし。

「そうか。それなら俺も行く。姫路の料理を一度見てみたい」

雄二も何度か被害に遭ってるから、やっぱり姫路の料理の謎が気になるのかしら？

「あら。雄二、遠慮することないわよ。本当は見るだけじゃなくて食べてみたいんでしょ？今からでも遅くないから瑞希に頼んでみたらどう？」

「それは御免被る。俺はまだ死にたくない」

それは私だって同じよ。

「ふふふ。遠慮することないわよ。……………マジで」

「ははは。遠慮しておこう。……………マジで」

雄二と笑い合いながら瑞希の後を追う。

調理室に着くと、中では既に瑞希が料理を始めている気配があった。

「それじゃ、開けるよ」

「ああ」

明久がコッソリと扉を開けると、調理室の中からは瑞希が動き回る音が聞こえてきた。

瑞希が棚からボウルを二つ取り出して、その中に何かを入れている。おそらくゼラチンと砂糖あたりね。

（なんだ。意外と普通ね）

（そうだね。ゼリーくらいなら大丈夫かもしれないね）

（それだと困るんだがな）

雄二はバイオ兵器とも言える瑞希の料理をどうするつもりなのかしら？

……バイオ兵器？まさか……

そんなことを考えていると、調理室から瑞希の独り言が聞こえてき

た。

『えーっと……まずは、ココアの粉末をコーンポタージュで溶いて
ー』

いきなりゼリーを作る上で有り得ない単語が飛び出していた。

（ねえレン！彼女は何を作っているの！？いきなりゼリーから遠く離れた何かになっているような気がするんだけど！）

（そんなこと、私に聞かれても分からないわよ！）

（静かにしろお前ら。姫路に見つかるぞ）

瑞希、恐ろしい子……。

『オレンジと長ネギ、どっちを入れるとレンさんは喜んでくれるでしょうか……？』

（迷わない！その二つの選択肢は迷わないわよ瑞希！）

（恐らく風邪を引いたお前の為に滋養強壮のある特別料理を作ろうとしてるんだろっな。……味を度外視して）

(……………ドンマイ、レン)

明久のヤツ、ゼリーを全部その口に押し込んでやる。

『あとは、隠し味にタバコ』

(これ以上は聞いちゃダメだよレン。食べられなくなっちゃおう)

(待って！せめて最後に入れられたのが『タバコ』なのか『タバスコ』なのかだけでも確認させて！)

お願い……………！せめて辛くて刺激的なアンチクショウの方であって……………！

(あまり時間も無い。我が儘を言うな)

(下手したら私の命に関わるんだけど……………仕方ないわね)

「よし。それじゃあ俺と明久はこのまま新校舎の三階をうろつくから、レンは先に教室に戻って休んでくれ。風邪を引いた身体でこれ以上動き回るのはさすがに辛いだろう」

「え？時間が無いって言うてるのに目的もなくうろつくの？」

明久が首を傾げている。

「BクラスとDクラスに俺たちが何も知らないというアピールをする為だ」

「うまくいけばBクラスに対しては時間稼ぎになるし、Dクラスには開戦に踏み切る為の判断材料と思わせることができるからね」

私たちが点数補充をしていないとアピールすることで、Bクラスは私たちが何も知らないと思ってギリギリまで点数補充をして私たちへの宣戦布告を遅らせるかもしれない。それにDクラスは私たちが点数補充をしていないと知れば戦い易いと判断してくれるかもしれない。

「DクラスがBクラスに対して敵意を抱いているというムツツリー二の偽情報が伝われば、BクラスはDクラス戦も想定する必要が出てくる。そこで俺たちが動きに気付いていないと知ったら、試験召喚システムのメンテナンスが終わる明日までは様子見も兼ねて黙って点数補充に勤しむだろうさ。と言うわけだ、行くぞ明久」

「それじゃ、行ってくるよ」

「二人共、頑張ってね」

二人を見送ると、私はそのままFクラスの教室に向かい歩いていっ

た。

第三十二問・最後の一人が毒殺され、そして誰もいなくなった（前書き）

オリジナルな展開の時は少しシリアスになりそうです。

第三十二問・最後の一人が毒殺され、そして誰もいなくなった

以下の状況を想像して質問に答えて下さい。

『あなたは大好きな彼と二人きりで旅行に行くことになりました。ところが、飛行機に乗っていざ出発、というところで忘れ物に気が付きます。さて、あなたは一体何を忘れてきたのでしょうか？』

姫路瑞希の答え

『頭痛薬や胃薬などの医療品』

教師のコメント

これは『あなたが好きな人に何を求めているか』についてわかる心理テストです。忘れ物はあなたに欠けているものを表し、忘れても気が付かずに出発してしまったということは、一緒にいる彼がそれを補ってくれるとあなたが考えているからなのです。どうやら姫路さんは好きな人に安らぎを求めているようですね。

霧島翔子の答え

『手錠』

神谷レンの答え

『暗器』

教師のコメント

忘れ物の前に、持って行くこうとする時点で間違っています。

工藤愛子の答え

『下着を穿いていくこと』

教師のコメント

あなたは好きな人に何を求めているのですか。

「はあ、はあ、はあ……。危ないところだった……」

「ま、まさか、鉄人が、あんなところにいた、なんて……」

教室で休んでいること数分、雄二と明久が息を切らしながら戻ってきた。

「二人とも、お疲れ様」

「まあ、目的は、達成した、な……」

「そ、そう、だね……。他の、クラスの人も、見ていた、からね……」

さつき鉄人の声が聞こえてきたから、多分明久たちを追いかけていたんでしよう。

「ふう……。余計な時間を食った気もするが、一応予定通りだな。レン、ムツツリーニは戻ってきているか？」

「えーっと……。今戻ってきたわ」

教室の扉を見ると、タイミングよくムツツリーニが入ってきた。

「お、戻ってきたか。偽情報はどうだムツツリーニ」

「……。首尾は上々」

誇るわけでもなく、ムツツリーニは淡々と答える。

「……。それで、次の仕事は？」

「ああ。今姫路が戻ってくる。そうしたら次の行動に移ろう」

教室に瑞希の姿は無い。恐らく例のゼリー作りに精を出しているんだろっけれど、これからは劇物を作るのは勘弁して欲しい。

「そう言えば、わざわざ手料理なんて作ってもらってどうするのよ」

「姫路の料理は暗殺用の武器だ」

「応予想通りだけど、本人が聞いたら傷つくでしょうね。」

「暗殺用？誰を？」

「Bクラスの奴だ」

「それって根本君？でも、根本君が簡単に僕らの出した物を口にす
るかな？きつと凄く警戒していると思うよ？」

「確かに根本ならそうでしょう。でも、」

「いや、ターゲットは根本じゃない」

「今更根本を暗殺したところでBクラスが止まるとは思えないわ。
となると狙いはBクラスからDクラスに出される使者ってところか
しら。多分BクラスはDクラスに同盟を申し込むだろうからね」

「同盟って？」

「ムッツリーニの偽情報でDクラスに狙われていると知ったら、B

クラスの連中はその対応をする必要があるだろう。その場合に考えられるのがDクラスの同盟だ。使者を出すだけで戦いを避けられるなら、それに越したことはないからな」

そう。Bクラスは連戦にならないようにDクラスに根回しをする確率が非常に高い。

「って、かなりマズいんじゃない？Dクラスに話をしに行かれたら『DクラスがBクラスを狙っている』ってというのが偽情報だってバシっちゃうじゃないか」

「確かに明久の言う通り、その話がデマだとバレた時点で時間稼ぎは失敗。私たちFクラスは、そろそろ点数補充を終えるBクラスに攻められてしまっって一巻の終わり」

「だからこそ、その同盟の申し込みに行く使者を狙う。同盟に向かった使者がやられたら、Bクラスは間違いなくDクラスに敵意を感じるだろう。そうなれば同盟は成立しないし、連中の疑心は深まるはずだ」

私が言うのもなんだけど、卑劣なことを考えたら右に出ないヤツね。

「けど、暗殺の為ならスタンガンでいいじゃないかわざわざ姫路さんの料理で毒殺なんてしなくても」

「スタンガンは悲鳴を上げられるからな。周りに気づかれるわけに

はいかない」

「口を手で押さえたらいいじゃないか」

「あのねえ。そんなことをしたら自分も感電しちゃうじゃない」

「でも」

「気にするな。姫路の料理を選んだのは俺の趣味だ」

雄二が人の命を考慮していない外道な台詞を口にするると、

「え？坂本君、私の料理が好きなんですか？」

丁度教室に戻ってきた瑞希が聞いてきた。

「ひ、ひめ、じ………？」

ギギギ、とブリキの玩具のように首を動かす雄二。

「良かった。そう言ってもらえると嬉しいです。けど、霧島さんに聞かれたら怒られちゃいますよ？あと、明久君と坂本君の分もありますので、良かったらどうぞ」

瑞希は嬉しそうな笑顔のまま、私だけでなく明久たちにもパツク入りのゼリーを渡してくれた。

「は、はは、は……」

私は切なそうに笑っている明久たちを慰める為に二人の肩に手を置いた。

「ウエルカム（ニコッ）」

「テメエ、そのヤケに爽やかな笑顔はなんだ……！」

「せめて僕だけでも見逃して……！」

明久が何かを言っているが、敢えて無視する。

「と、とりあえず後で腹が減った時にでも貰おう」

「ぼ、僕もそうするよ」

「わ、私も。瑞希ありがとうね」

「いいえ。これくらいお安い御用です」

瑞希は本当にいい子ね。だから、上手な料理を作って欲しいなんて
贅沢は言わないわ。せめて命に関わらない保証がある料理を作って
下さい……。

「んじゃ、行くぞ明久、レン、ムッツリーニ」

「了解」

「オツケー」

「……………わかった」

私たちは武器を手に、A〜Dクラスのある新校舎の三階へと向かっ
た。

(わ。本当に出てきた)

(そうみたいね)

(とりあえず俺の読みは当たっていたか)

相手に見つからないように階段の近くで隠れながらBクラスの様子を見ていると、教室から男子生徒が一人出てくるのが見えた。

(相手が一人っていうのも予想通りなのよね?)

(まあな。Bクラスは点数補充に忙しくて使者に人数を割けるわけがないからな。立場の無さも考慮すると、男子が向かうのは予想通りだ)

一人だからこそ、暗殺という手段がとれるってことね。

(暗殺はうまくいくかな?)

(ムツツリーニとレンなら間違いなくうまくいく。見ている)

そう。実はこの暗殺、私も実行部隊に入っていたりする。

一方Bクラスの男子はDクラスに向かって歩き始めていた。

周囲には大勢というわけじゃないけど人影が少し見える。

(レン、本当に大丈夫なの?)

(大丈夫よ明久。ムッツリーニを信じなさい)

こうしている間にも使用者の足は進む。

ムッツリーニはまだ動かない。

(けど、もう距離が……!)

そして、あと1メートルでDクラス、というところでムッツリーニの Cutter が視界を横切った。

カッ

それは使者から少し離れた壁に刺さり、その先には写真が貫かれて
いる。

『なんだ、アレ……?』

『先に何か貼ってあるな』

『何かの写真、か……?』

周りにいた人たちが壁のカッターと写真に注目し、その下に集まりだした。そして、その最後尾に例のBクラスの使者がいた。

『……………(ススッ)』

音もなくその背後に迫るムツツリー二と私。今は周囲の視線は全てカッターと写真に集まっている。誰も気づいていない。

「……………(ガッ)」

「……………(グッ)」

「……………!?!?」

暢気に写真を見ようと背伸びをしていた使者をムツツリー二が後ろから羽交い締めにして口を押さえる。私はその前方に回り込み、かかとで使者の足を踏んで身動きを封じ、衆目から暗殺の様子が見えないようにした。

「……………(グッ)」

「……っ！……っ！」

瑞希特製ゼリーの中身を押し出すムツッリー二と、それを必死になつて阻止しようとする使者。私の背後で命を懸けた攻防が繰り広げられる。

そしてその戦いはついに決着を迎えた。

ゴクリッ

格好良い効果音とともに使者の喉を劇物が通過する。

「か……は……っ！……き……さま……ムツッリー……」

「……………（ググッ）」

末期の寸前に憎しみの籠った視線を向けてくる使者に対して、ムツッリー二は情け容赦なく更にパツクの中身を押し込んだ。

使者の足が一瞬ビクッと痙攣する。

そしてそのまま――男は動かなくなった。

(……………任務完了)

(恨んでくれても構わないわ……………ってあれ……………?)

動かない男子生徒を抱えようとするが、なかなか持ち上がらない。

(……………手伝う)

(ありがとう)

ムツツリーニと二人で男子生徒を抱えて雄二のもとに戻った。

(流石だ、ムツツリーニ、レン。惚れ惚れするような手際だった)

(……………この程度、何の自慢にならない)

(それじゃ、運ぶわよ)

ムツツリーニと私は手際よく男の死体をBクラスから見えてDクラスからは見えないような場所に押し込んだ。

(……………これでBクラスが最初にこの死体を見つけるはず)

(作戦終了よ)

(よし。ならもうここに用はない。教室に戻るぞ)

(そうだね。次の手を考えないとね)

四人で何事も無かったかのようにFクラスへと続く渡り廊下を歩き出す。

それにしても、さっきのアレは……

(……………まさかね)

(レン、どうかしたの?)

(何でもないわ)

嫌な考えを振り払い、再び歩き出した。

第三十三問その一・情報の真偽を見極めるのは結構難しい

次の熟語の読みを答え、これを用いた例文を作りなさい。

【相殺】

姫路瑞希の答え

『読み……そうさい』

例文……取引の利益で借金を相殺する』

教師のコメント

そうですね。差し引いて帳消しにする、という意味なので貸し借りなどに使われる言葉です。

吉井明久の答え

『読み……そうさつ』

例文……パンチにパンチをぶつけて威力を相殺した』

教師のコメント

惜しいですが間違いです。『そうさつ』という読みも一応ありますが、その場合の意味は『互いに殺し合うこと』というものです。この場合の吉井君の例文では互いに打ち消し合うという意味なので、読みとしては『そうさい』が正解となります。

島田美波の答え

『読み……あいさつ』

例文……のどかな朝。私は友達と相殺した』

教師のコメント

その朝は決してのどかではないでしょう。

神谷レンの答え

『読み……あいさい』

例文……一生に一度でいいから相殺弁当を食べてみたいものだ。』

教師のコメント

その弁当は決して食べないようにして下さい。

暗殺を終えてから様子を見ることしばらく。六時間目の途中くらいになると、Bクラスはどうかやら私たちの思惑通り疑心暗鬼に陥っているらしいという情報が入ってきた。

「これで時間稼ぎは成功したのかな？」

Fクラスは今は自習時間なので、私たちは雄二の席に集まって作戦会議を進めていた。

「そう長い時間は無理だが、明日ぐらいまでなら大丈夫だろ」

明日になれば例のBクラスの使者が復活して何があつたかを話すだろうから、時間稼ぎの効果は今日一杯が限度でしょう。

「秀吉、例のDクラスとの交渉は大丈夫？」

「うむ。清水を引っ張り出すことはできた。放課後に旧校舎二階の空き教室で待ち合わせという手はずになっておる」

「島田の方は大丈夫か？」

「場所と時間ならもう伝えたから大丈夫よ」

これで一応舞台は整った。

「ところで雄二。Dクラスを開戦に踏み切らせる為の策はちゃんとあるんでしょ？」

「勿論だ。とっておきの作戦がある」

私も一応考えてはあるけど、ここは雄二に任せた方が良さそうね。

「但し、明久は余計な口を挟むなよ。一応お前と島田がいないと挑発にならないから連れて行くが、下手なことを言われると取り返しのつかないことになるからな」

「了解。その辺は全部雄二に任せるよ」

「……………一つ、気になることが」

近くで何かの機械を弄りながらムツツリーニが口を開いた。

「どうしたのムツツリーニ。何かあった？」

「……………根本がAクラスに何かの情報を流していた」

今の状況でAクラスに情報を流すなんて、どこか不自然ね。

「妙だな。Dクラスが気になっているはずのこの状況で更にAクラスを巻き込んでどうしようってんだ？多くのクラスを巻き込んでも膠着状態になるだけでBクラスに有利になるはずがー」

ムツツリーニの情報に雄二が眉を顰めていると、

パンツ

大きな音をたてて教室の扉が開け放たれた。

「……雄二……っ！」

その向こうから現れたのは霧島さんだった。随分焦っているようだが、
けど、どうしたのかしら？

「翔子？そんなに慌ててどうした？」

「……どうした、じゃない。雄二こそ、どうしてまだ学校にいるの
……っ！」

放課後でもないのに、学校にいることのごとくがおかしいのかしら？

「？お前は何を言っているんだ？」

「……お義母さんが倒れたっていつのに、どうして様子を見に行かないの……っ！？」

霧島さんが怒っている。雄二のお母さんが倒れたなんて初耳よ？

「はぁ？あのおふくろが？風邪すら引かない全身健康体だぞ？」

やっぱり雄二も知らないみたい。まあ、知ってたら流石にお母さんのところに向かってるでしょうし。

「……とにかく、早く家に……！」

雄二の手を取って強引に歩き出す霧島さん。余程雄二のお母さんが心配なんでしょう。

「お、おいっ！ちょっと待て！俺は今から大事な作戦がー！」

「今はそんなこと言ってる場合じゃない！」

今まで聞いたことのない霧島さんの怒声に思わず背筋が伸びる。驚いたのは私や明久だけでなく、Fクラスの皆がその様子を啞然として見ていた。

「だから待て翔子！何かおかしい！どうして俺より先にお前が」

「いいからっ！」

「翔子、落ち着ー！」

抵抗も虚しく、雄二は霧島さんにあつと言つ間に連れ去られてしまつた。

「「「……………」」」

一瞬の出来事に呆然とする私たち。でも、

「今の話はおかしいわ」

「え？おかしいって、どついつこと？」

「……………普通、そういう話は最初に雄二にくるはず」

「あ。そついえばそつだね」

そつ。家族が倒れたなんてことになったら、霧島さんより先に雄二に連絡がくるはず。

「雄二に連絡がつかなかったのじゃろうか？」

「いや、それも変だよ。雄二はずっと校内にいたんだから」

「普通は校内放送を使うはずなのに、そんなことはなかった」

とすると、考えられるのはただ一つ。

「やられたわね……」

「やられたーってまさか、さっきの根本君の話って！」

「……………多分、雄二の母親が倒れたっていう偽情報」

「なんじゃと!?!」

秀吉がガタン、と卓袱台に勢いよく手をつく。

「これはかなりマズい……………! 清水さんを挑発する為の作戦は、全部雄二任せだったっていうのに……………!」

その雄二が連れて行かれたんじゃ、交渉が成功する確率がぐっと減ってしまう。

「それじゃ、ここは私にー」

任せて、と言って立ち上がるうしたら、ふらついて尻餅をついてしまった。

おまけに目がチカチカして、少しの間だろっけど何も見えない。

「レン！？本当に大丈夫なの！？」

「私の事なら大丈夫ー」

ガラガラ

再び教室のドアが開け放たれた。

「レン、ちょっと用事がーってアンタちょっとどうしたの！？」

「……………優子……………？」

かろうじて回復した視界で見えたのは、顔を真っ青にした優子の姿だった。

「ちょっとレンを保健室に連れて行くわ。秀吉、それでいいよね？」

「……………うむ。頼んだぞい、姉上」

「ちょっと待って、優子。今はー」

「いいから早くー！ー」

私はそのまま優子の肩を借りて、保健室に行くことになった。

第三十三問その二・マンガだと保健室はよくサボリかフラグ立てに使われる(前

話の切り方を間違えたので、今回はかなり短いです。

第三十三問その二・マンガだと保健室はよくサボリかフラグ立てに使われる

「レン。ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

優子と二人で保健室にいることしばし。突然優子が口を開いた。

「どうしたの？」

「やっぱり、亮はまだ……いないままなの……？」

「……ええ。ここ一週間、一度も出てきてないわ……」

「そう……。ゴメンね、レンも大変だったという時にこんな事聞いちやって……」

私の言葉を聞いた優子の表情が暗くなる。

「気にしないでいいわよ。ま、そのうちひょっこり出てくるだろうから、それまで待つことにしましょう。ね、優子？」

「……そうね。今ウダウダ言っても仕方ないし」

用事があるから、と優子が帰った後しばらく一人で過ごしていると、

ガラッ

保健室の扉が開けられた。

「だから言っただろ。おふくろは大丈夫だって」

「……良かった」

その向こうにいたのは呆れ顔の雄二と、心底安心した表情を浮かべている霧島さんだった。

「雄二に霧島さん、一体どうしたの？」

「……神谷のお見舞い」

お見舞いって、保健室に運ばれただけなんだけど……。

「ほら、見舞い品も買ってきてやったから」

雄二がビニール袋を手渡してくる。

- ・トマトジュース
- ・いちご牛乳

「雄二、これは嫌がらせ？」

全て私の嫌いなものという衝撃の事実だった。

「どうした、レン？」

「人の嫌いなものを持ってきて、どうした、はないでしょ……」

「……雄二には、もう少しデリカシーが必要」

「ぐっ……。翔子まで……」

雄二が悔しそうな表情を見せる。

「なら翔子、今度はお前が買ってきてくれないか？俺だとまた間違えそうだし」

「……分かった。神谷、何がいい？」

「それじゃ、オレンジジュースをお願いするわ」

「……分かった」

霧島さんは保健室の扉の前まで歩き、こっちを振り返った。

「……雄二、もし神谷に手を出したら捻り潰すから」

「肝に銘じておこつ……」

それを聞くと、霧島さんは保健室を出て行った。

「良かったじゃない、雄二。あそこまで一途に思われて」

それを聞いた雄二は顔に手を当ててため息をついていた。

「それより、本題は何なの？」

「本題？何のことだ？」

「とぼけないで。わざわざ買い直さなきゃいけない見舞い品を買って、人払いしてまでしなきゃいけない話のことよ」

明久ならともかく、雄二が意味もなくこんな事をするようなヤツじゃないからね。

「秀吉からのことづつで、Dクラスの清水への挑発についてだ」

予想通りの答えが返ってきた。今は放課後になってから一時間ぐらい経ってるし、明久たちが清水さんへの交渉という名の挑発を終えているはず。

そして自宅に戻っていた雄二に連絡を入れたのだろう。

こっちに直接来なかったのは、おそらく何か緊急事態が発生して、電話をするのが精一杯だったのかもしれない。

「それで、結果はどうだったの？」

「どうやら挑発は失敗したそうだ」

「そう……」

ということは、試召戦争はDクラスとじゃなくてBクラスとやることになる。

そうだったら、火力において圧倒的に不利な私たちFクラスが勝利するのはかなり難しくなってしまう。

「かなり厄介でピンチなことになっちゃったワケね……」

「そういうことになる」

さて、どうしたものかしら……。

私はため息を一つつき、この絶望的な状況をどう乗り切ろうかを雄二と一緒に考えたが、結局まともな案は出てこなかった。

第三十四問その一・晴れのち雨（前書き）

今回は短い上に少しシリアスです

第三十四問その一・晴れのち雨

以下の状況を想像して質問に答えて下さい。

『あなたは今、独りで森の中で道に迷っています。明かりもなく暗い森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。これ幸いと中に入るあなた。すると、そこには椅子とベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は？頭に浮かんだ物を3つ挙げて下さい』

姫路瑞希の答え

- 『1・楽しい表情
- 2・優しい瞳
- 3・明るい雰囲気』

教師のコメント

これは『あなたの好きな人の特徴』についてわかる心理テストです。暗い森はあなたの不安を表し、そんな時に見つけた小屋の中にある肖像画は『あなたの心を支えてくれる伴侶』を表します。どうやら姫路さんが好きな人は温和で明るくて楽しい人のようですね。

清水美春の答え

- 『1・気の強そうな目
- 2・男らしい胸
- 3・ポニーテール』

教師のコメント

最後の一つがおかしい気がします。

島田美波の答え

- 『1・折れた指
- 2・捻じ曲げられた膝
- 3・外された手首』

教師のコメント

全部おかしい気がします。

神谷レンの答え

- 『1・斬られた腕
- 2・殴られた頬
- 3・ただれた皮膚』

教師のコメント

ここから先はR指定です。

保健室に運ばれた後に念の為もう一度病院を訪れると、言い渡されたのは翌日までの検査入院。

そして今は退院して学校に向かっているんだけど、

「Dクラスが宣戦布告してきた!？」

雄二から驚きの情報が届いた。

「どういう事？確か昨日の挑発は失敗したんでしょ？」

『ああ。俺もよく分からんが、どうやらその後明久と清水が何か話をしていたらしい』

「ってことはその話が宣戦布告の原因ってワケね？」

『おそろくな』

「じゃ、急いでそっちにーゴメン、ちょっと時間がかかりそうだわ」

『はっ、びびりー』

ブツッ

雄二の言葉の途中で電話を切り、目の前にいる不良と思われる二人

に目を向けた。

「ようアンタ、もしかして一人で暇なのかい？」

「それなら俺たちと遊ばないか？」

気味の悪い笑みを浮かべながらこっちに近づいてくる。

「ごめんなさい。これから用事があるので」

「そんなこと言わずにさあ〜」

「いえ、本当に急いでいるんで」

一人が肩を掴んできたので、私はその手を払いのけた。

「テメエ、何しやがる!!」

私の肩を掴んできた不良が蹴りを繰り返して来る。

相手の狙いは――脇腹。

私は先に腕でガードを固め、なんとかキックを防ぐ。

そして相手の腹部にキックを入れて動きを止めるー

はずだった。

「何だ？こんなもんか？」

しかし、キックはあっさり防がれ、脇腹に重い一撃を食らってしまった。

「かはっ……！」

そしてそのまま道に転がってしまっ。

昨日からの違和感がようやく繋がった。

どうしてBクラスの使者を持ち上げられなかったのか。

あれは、風邪を引いていたからじゃない。

今のキックだってそう。

私は分かってなかったのだ。

この身体になると筋力が著しく低下することを。

「どうした？もう終わりか？」

「終わりもなにも、アンタたちに構う気はー！がっ！」

起き上がるうとしたら足で左肩を踏みつけられ、再び地面に倒されてしまう。

「なんだ？男のくせに弱いヤツだな」

相手の足の力がだんだん強くなっていくのが分かる。そして、

ゴキン、という、骨と骨が擦れるような嫌な音が響いた。

「……………あああああっ！！！！！」

そんな私の呻き声もどこ吹く風で、不良は尚も足で肩を踏みつけてくる。

「……………ん？この声、お前もしかして神谷レンか？」

不良の一人が不意に口を開いた。

「神谷レンって、あの『知識の結晶』のか？」

「ああ。小学校の頃から有名だったからな」

さっきまで肩を踏みつけていた不良が、今度は私の右腕を掴んで体を持ち上げてくる。

「よお。気分はどうだ？『石ころレン』」

その言葉を聞いた瞬間、私の中の何かがトンだ気がした。

「何だ？『石ころレン』って」

「小学生の時のコイツのあだ名だ。知識の結晶だからな。つまりとこころが石ころってワケだ。」

「なるほどな」

「……………呼ぶな……………」

「ああ？何だって？」

「その名で呼ぶなああああっ！……！……！」

「がはっ！……！」

さっきとは比べものにならないぐらいの強い蹴りを放つ。

「な、何だコイツ！？」

「うわああああっ！……！」

私は自分の頭がだんだん真っ白になっていくのを感じた。

「くそっ！逃げるぞ！」

「畜生！覚えてやがれ！」

ふと気が付くと、不良二人が一目散に逃げ出していた。

「はあ…はあ…はあ…」

またやってしまった……。

息を整えている最中、激しい後悔が襲ってきた。

結局何も変わってなかった。

「私はただ……逃げただけ……みたいね……」

携帯電話を取り出して時間を確認する。

その日は晴れていたのに、取り出した携帯電話の画面には数滴の雫が落ちていた。

第三十四問その二・炎と怒りと凍てつく瞳

「ゆ…雄二……」

よろよろと教室に入ると、そこには雄二と瑞希しかいなかった。

状況からすると、もう試召戦争が始まってるみたい。

「レ、レンさん！？一体どうしたんですか!？」

瑞希がこっちに駆け寄ってくる。

「ちよつと転んで肩の関節が外れちゃって……」

「それなら関節をはめてやるからちよつと来い」

「悪いけどお願いするわ」

再びゴキーン、という音が聞こえる。

「ほら。もう大丈夫だ」

「ありがと、雄二」

軽く肩を回してみても問題なかった。

「それで、配置はどうなってるの？」

「こんな感じだ」

雄二から一枚の紙を受け取る。

「この布陣だと……時間稼ぎ？」

「そうだ」

「それじゃ、ここに一人待機している明久は……清水さんと一騎打ちさせるつもり？」

「ああ」

「……もしかして突入する気？」

「レンさん？どういうことですか？」

瑞希が驚いた顔をしている。

「雄二は一騎打ちを最後までさせずに突入するつもりでしょ。どこか違う?」

「確かにお前の言う通りだ。しかしよく分かったな」

「あなたの性格を考えればなんとなく分かるわよ」

教室で何人が補給テストを受けているのを見ると、恐らく彼らも連れて行くんでしょう。

「ならその役は私がやるわ」

「……………何かあるのか?」

雄二が鋭い目つきで聞いてくる。

「別に。今回の試召戦争で私はほとんど何もしてないからね。憎まれ役ぐらい買わないと私の気が済まないのよ」

それに、Fクラスの皆もせっかく補給テストを受けたのに点数を消費しかねないような行動をさせるのもね。

「なら、自分の点数を紙に書いてくれ」

「一騎打ちの科目は何なの？」

「今布施先生がいらしたので、恐らく化学だと思います」

教室の外をこつそり覗いていた瑞希が呟いた。

「なら問題ないわ。はい、これ点数」

雄二から渡された紙に化学の点数を書いて渡した。

「おま……、何だこの高得点は？」

「見たままよ。それじゃ、行きましようか」

「ああ」

「それじゃ瑞希、援護をお願いできる？」

「あ、はい。分かりました」

私と雄二は瑞希を連れて、明久たちがいる空き教室に向かった。

「明久サイド」

「……………」

「……………」

召喚獣にも動きがなく、無言の状態が続く。

睨み合いというわけじゃない。清水さんは俯いて召喚獣から目を離している。

そうしていたのは、ほんの数秒程度だっただろうか。不意に、清水さんが震える声で呟いた。

「……………泣いて、ました」

怒りを伴う、静かな口調。

「……………お姉さま、昨日走り去る時に……………泣いて、ました」

言われて、僕も昨日のことを思い返す。

「きっかけは、美春の言葉です。……………でも、原因は、原因は……………っ
っ！！」

清水さんが俯いていた顔を上げる。僕を睨みつけるその瞳には、烈火の如き怒りが見て取れた。

「オマエが……………！オマエのような男がいるから……………っ！お姉さまが
泣く羽目になるんです！」

その言葉を合図に清水さんの召喚獣が突っ込んでくる。

正面からの真っ直ぐな攻撃に、僕は力を受け流すように動いた。

「ぐ……………っ！」

それなのに、僕の僕の身体に鈍い痛みが訪れる。正面から受けたわけじゃないのにこの威力。余程点数の差があるんだろう。

『Dクラス 清水美春

VS

Fクラス 吉井明久

化学

112点

VS

22点
『

横目で確認した彼我の差は約五倍。こちらが圧倒的に不利だ。

「どうしてオマエのような下郎がお姉さまの傍にいます！どうして気持ちを弄ぶ下衆がお姉さまと言葉を交わしているのです！」

駄々っ子のように振り回される相手の剣。その一撃一撃全てが、僕の腕を痺れさせるほどに重かった。

美波が泣く羽目になったのは事実。

僕らが美波を利用していたのも事実。

「どうして、お姉さまを利用する為に平然と嘘をつく外道が友人面をして近くにいられるのです！」

ガッ

相手の剣を木刀で受け止める音が響く。

でも、それでも僕は……！

「……嘘は……ついて、いない……っ！」

そのまま力任せに相手の剣を押し返す。

「な、にを、言っ……！」

色々あって、酷いことをした。

傷つけたし、泣かせてしまった。

僕の言うことなんて薄っぺらく思えるかもしれない。

けど、それでもー

「僕が言ったことは、嘘じゃないんだ……っ！」

鈍い音をたてながらも、僕の召喚獣は木刀で相手の剣を弾いた。

「な……！？」

そう。嘘じゃない。

付き合っているという話が演技でも、キスをしたということの原因が誤解でも、僕が清水さんに言ったことに嘘はない。

そもそも……僕は、あんな場面で嘘をつけるほど器用じゃない！

「僕みたいなバカにだって、言っていない嘘と悪い嘘くらいわかる！
昨日のあれは、紛れもない僕の本心だ！」

剣を正面から受け止めたせいで木刀が折れかかっている。
五倍という力の差がある相手と押し合ったせいで消耗している。
こんな状態で勝ち目なんてあるわけがない。

「けど、逃げるもんか……！」

元はと言えば全ての原因は僕が作ってしまったこの騒ぎ。迷惑をかけてしまったひとの為にも、僕が責任を取らないでどうする！

これはある意味ありがたい機会だ。この一騎打ちを姫路さんや雄二、ましてや風邪をひいているレンに任せていたら、僕は騒ぎを起こすだけ起こして逃げ出したロクデナシだ。こうして責任を取る機会をもらったことを、雄二に感謝——

『試獣召喚っ！』

「「えっ！？」「」

不意に教室の中に響く召喚の声。目をやるとそこには雄二と、自身の召喚獣を従えているレンの姿があった。姫路さんの突破力で一時的に混戦状態のFクラス教室前を抜けてここまで来たんだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。それよりも問題は、どうして他

の召喚獣がはいってきているのか、ということだ。

「伏兵、ですか……！卑怯な真似を……！」

清水さんが僕を憎々しげに睨みつけている。伏兵ってことは、まさかー！

「雄二！レン！いくら大事な勝負だからって、そんなやり方は間違っているよ！」

まさか、一騎打ちに来たはずの清水さんを騙し討ちにするつもりなのか！？この勝負がいかに関心なものかはわかるけど、それはあまりに卑怯すぎる……！

「悪いけど、これは勝負じゃなくて戦争なの」

「そして俺にはクラスを守る義務がある」

二人は冷たく言い放った。そして清水さんは、そんなレンを睨みつけた。

「というかレン、大丈夫なの！？」

「ええ。一瞬で終わらせるわ」

そっぢゃなくて、体調の方を心配したんだけど。

「……………言ってくれますね……………」

清水さんがレンを睨みつけている。

「自分のもう一つの人格を失い、補給テストも受けていないあなたがこの場で何が出来るんですか？」

え？どういうこと？そんなの初耳だよ！？

「レン！今のってー」

「確かに、今私の中に亮はいないから運動もそんなに出来ないし、補給テストも受けてないわ。でもね、」

レンは一呼吸置いて、

「私が弱くなったからって、別にアンタが強くなったわけじゃないでしょ？」

そのまま清水さんを睨み返した。

「……………っ!?!?」

さっきの清水さんの瞳を炎だとするなら、レンの瞳はさながら氷のように凍てついている感じがした。

「さて、ここまで散々他人の邪魔をしてくれたんだもの。それ相応の報いを受ける覚悟は出来てるんでしょうね？」

睨みつけられている清水さんの顔は真っ青になっている。

近くにいる僕でさえ、背中から冷や汗が出ているほどだ。直接睨まれている清水さんは相当のものなのだろう。

そして、レンの化学の点数が表示される。

『Fクラス 神谷レン

化学

457点』

あまりの点数差に、僕たちは多くのビームソードが空中に出現するのをただ見ることにしか出来なかった。

「それじゃ、さよなら」

「や、やめー」

僕の制止が入る間もなく、レンの召喚獣が放った何本ものビームソードが突き刺さった。

ー僕の召喚獣に。

（レンサイド）

「痛あああつ！！ねえ何コレ！？今までで一番痛いんですけど！
？全身が！爪先から頭の天辺までのあらゆる部分に激痛が！」

「清水。この通り全ての元凶は肅清した。これで今回の件を水に流
してはもらえないだろうか」

「ぎゃあああつ！！ビームってこんなに痛いのか！？全身を焼くよう
な痛みが襲っているんだけど！？」

明久はあまりにも痛いのか、その場でのた打ち回っている。

「……………そうですね。この豚野郎に対する美春の怒りは収まりません
が……………切り刻んだあと、この豚野郎を放課後まで補習室に軟禁する
と言っのなら休戦を受け入れてもいいです」

「約束しよう。明久はこれで戦死したから補習室行きだ。あとは放課後になるまでそれぞれの教室で点数補充でもやって時間を過ごせばいい。その間ずっとコイツは鉄人の餌食だ」

「それなら、今回は、このくらいで、許して、あげましょう……！」

「痛だだっ！刃物の痛みが！刃物の痛みがふくらはぎから段々頭に向かって上がって」

「それじゃ、交渉も成立したし教室に戻るか」

「そうね。頑張って、明久」

清水さんの剣にメッタ刺しにされて痛み悶え苦しむ明久を置いて、私と雄二は空き教室を出て行った。

第三十五問・Dear My Friend

以下の英文の()に単語を入れて正しい文章を作り、訳しなさい。

『She () a bus.』

姫路瑞希の答え

『She (took) a bus .

訳：彼女はバスに乗りました。』

教師のコメント

正解です。他に“bus”に使われる単語としては、“get”などがありませんね。

吉井明久の答え

『She (is) a bus.』

教師のコメント

なんて訳すのでしょうか。一見文章として正しく見えそうですが、明らかに間違いです。日本語として訳せないような文章を書くようではまだまだー

土屋康太の答え

『訳：彼女はバスです。』

教師のコメント

目から鱗が落ちました。

神谷亮の答え

『She (blew) a bus .

訳：彼女はバスを爆破しました。』

教師のコメント

度肝を抜かれました。

「四人とも、まだ帰っていなかったの？」

教室に戻ってきた明久の言う通り、私と雄二と秀吉とムッツリーニは放課後にも関わらず帰っていなかった。

「ちょっと気になることがあったからな」

「気になること？」

雄二は楽しそうな笑みを浮かべている。

「うむ。何でも、ムツリーニが面白いものを聞かせてくれるらしいのじゃ」

「ふふ。すごく楽しみだわ」

「……………明久も聞いていくといい」

ムツリーニが卓袱台の上にお馴染みの小型レコーダーを置く。

「面白いものねえ……………。なんだろう？皆がそんなに楽しそうなんだから、よっぽどいいもののかな？」

「まだムツリーニも詳しく中身を聞いてはいないようだが、面白いことは間違いないらしい」

「……………保証する」

自信満々に頷くムツリーニ。

「ねえ。中身は何かな？」

「とある男女の会話らしいわよ」

「男女の会話……………？」

明久が不思議そうな顔をしている。

「ワシらが気になっていた一件の顛末がよくわかる会話じゃ」

「え……？」

明久の顔色が段々変わっていく。どうやら少しは気づいたみたい。

「……………スタート」

ムツリニがレコーダーのスイッチを入れると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『この話し合いに何の目的があったのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて、時間の無駄ですから。…………お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

「あれ？この声って…………」

「Dクラスの清水さんの声ね」

さて、どんな会話が記録されているのかしら？

『……なんです？美春に何か言いたいことでもあるんですか？』

「って、ちょ、ちょっと待って！この会話ってまさか！」

「ご名答。これは、お前と清水が昨日の放課後に何を話していたか、その一部始終を録音した物だ」

慌てふためく明久をよそに、雄二が明らかに邪悪な笑みを浮かべている。

『うん。一つだけ。清水さんの誤解を解いておきたいんだ』

『誤解？何がです？お姉さまと付き合っているというのが演技だという話なら既に知っていますけど？』

聞こえてくるのは、清水さんと明久の声。

「ちょちょちょっと！なんて物を再生してくれるのさ！？冗談じゃない！早く止めー」

「秀吉」

「了解じゃ」

雄二の指示で秀吉が動き、明久を後ろから羽交い締めにした。

『いや、そうじゃなくて……その……美波の魅力を知っているのはキミだけじゃないってコト』

「くっ！は、放してよ秀吉っ！これだけは本当にダメなんだ！」

「ふっふっふ。そうはいかんのじゃ」

「秀吉。加勢するわ」

私は明久の両足を持ち上げ、なんとかホールドした。

『何を言っているんですかっ！いつもお姉さまに悪口ばかり言って、女の子として大切に扱おうともしないで！』

『うん。それは清水さんの言う通りかもしれない』

『だったら、お姉さまの魅力の何を知っていると云うんです！』

『確かにお姫様みたいに扱っているわけじゃない。男友達に接するみたいに雑な態度になっているかもしれない。けどねー』

明久の気持ちを知ってか知らずか、レコーダーはどんどん会話を進

めて行く。

「わーっ！わーっ！聞くなーっ！！流すなーっ！！」

「五月蠅いな。少し黙ってる」

「むぐっ！？んむーっ！！」

雄二が明久の口を塞いだので、明久の叫びは呻き声になっていた。

『けど、なんですか？』

『ーけど、僕にとって美波は、ありのままの自分で話ができ、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちよっとした仕草が可愛い、とても魅力的なー女の子だよ』

す………凄………い………。

「」「」「」………「」「」

私たちは、少し驚いた表情をして明久を見ている。

「………いや、意外だったな………」

「う、うむ。もう少し婉曲に言ったものじゃとばかり思っていたが……」

「……………直球勝負だった」

「アンタ……………かっこいいわよ」

何でだろう。すごく胸がドキドキしている。

「明久。お前、意外と言う時は言うんだな」

「な、なぜかワシも鼓動が速くなって凄いのじゃが……………」

「……………男らしい」

「私が言われたわけでもないのに顔が熱くなってきたんだけど……………」

そんなことを言っていると、

「……………っ！…(ダッ)」

ムツリーニが急に険しい顔になって廊下に飛び出していった。

「なんだ！？どうしたムツツリーニ」

「……………油断した」

戻ってきたムツツリーニは苦々しく呟いた。

「油断したとはどついうことじゃ？」

「まさか、廊下に誰かいたの？」

「……………今のを立ち聞きされたかもしれない」

ムツツリーニが衝撃の事実を告げた。

「ムツツリーニ！相手は誰！？」

「……………多分、張本人」

ということは、美波ってこと？

「そ、そうか。聞かれちゃったか。すまん明久。まさかこれほどの物だとは思わなかった」

「すまぬ明久」

「……………ごめん」

「面目ないわ……………」

明久に向けて頭を下げる。

「まあ、別にいいよ。張本人が相手なら。それより、悪いと思うんなら美波との仲直りに協力してよ。アレ以来ずっと険悪なままなんだから」

「いや、それは多分大丈夫じゃろうな」

「そうだな。仲直りどころか……………」

「……………うん」

「そうね……………」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「へ？何で大丈夫なの？」

「だって……………ねえ？」

「そういえばレン」

「何？」

「さっき清水さんが言っていたことって、本当なの？」

「な、何のことかしら？」

「亮がいないとかなんとか……」

どろどろ。何て言おうかしら？

『（俺がどうかしたのか？）』

……………え？

「(りよ、亮！？アンタいつからいたの！？)」

『(レコーダーが流れ始めた時ぐらいから)』

「(ならちよつと替わって！そして口裏を合わせて！)」

『(何だかよく分からんが、了解)』

「うつす明久」

「あれ？亮いるの？」

明久が首を傾げている。

「清水に対して言ったことだが……アレは嘘だ」

よく分からないけど、レンの口裏に合わせる。

「え？そうなんだ。それなら良かった」

ふう。どうやら明久が納得してくれたようだ。

「それじゃ、俺は用事があるから先に帰るぜ」

「おう。じゃあな」

「了解したぞい」

「じゃあね〜」

「……………また明日」

俺はそのまま家に帰った。

「（んで、用事って何だ？）」

『（突撃お宅訪問よ）』

「（……………は？）」

家に帰って私服に着替えた後、訳が分からないまま、とある場所に向かっていた。

その途中、

「お、お前昨日のヤツじゃん」

「また会うとはなあ〜」

不良っぽい二人組に出くわした。

「ん〜。アンタら二人は俺に喧嘩を売ってるってことでもいいのか？」

「その通りだよバ〜カ」

「そうか。なら……」

何せこちとら一週間ぶりに出てきたんだ。

「ちょっと準備運動に付き合ってくれよ」

ピンポン

家の前に立ち、インターホンを鳴らす。すると、

「亮？一体どうしたんじゃない？」

すまん秀吉。俺にもよく分からない。

「とりあえず、優子って今いるか？」

「うむ。」「うちじゃ」

そう言われ、秀吉にリビングまで案内される。

「それじゃ、すまぬがワシは用があるから部屋に戻るぞい」

そう言いつと、トタトタと自分の部屋らしき場所まで行ってしまった。

「ちとど……」

ガチャ

「おっす。優子」

優子は制服のまま床に座って何かをしていたようだが、

「亮……………?」

俺の姿を見るなり固まってしまった。

「おい優子、一体どうしー」

「亮!ー!」

そのまま抱きついてきた。

「このバカ! すごく……………すごく心配したんだから……………」

「あの……………優子……………呼吸が……………」

優子が座った状態から抱きついてきたので、顔で鳩尾を、腕で背骨を圧迫されている。

「本当に……もう……このバカ……」

優子が静かに泣き出したので、俺は腕を回し、優子の頭を撫でた。

「すまなかったな。心配かけちゃったみたいで……」

この後秀吉が部屋に入ってくるまで、俺たちはずっとこのままだった。

第三十六問その一・昔の欧米では決闘の意思表示として、片方の手袋を相手に渡
やりたかったのでやりました。後悔はしていません。

第三十六問その一・昔の欧米では決闘の意思表示として、片方の手袋を相手に渡

「ーきみに、決闘を申し込むわ」

南国の海のような、あざやかなターコイズブルーのリボンを投げつけ、自称“文学少女”は凜と宣言した。

そしてその傍らには、頭を抱えている一人の男子生徒。

うーん。どうしてこうなったんだ？

もしかしたら、昨日のアレが原因なんじゃないかな？

「ねえ、雄二」

強化合宿を数週間後に控えたある日の放課後。調理実習の授業が終

わり教室でのんびりしていると、明久が何かを持ってこっちにやって来た。

「明久。一体どうしたんーもごあつ！」

「それってまさか……」

明久が雄二の口を開けてワッフルを押し込んでいる。

食べ物に対して貪欲なコイツがこんなことをするはずがない。

普通のワッフルなら。

となると恐らくコレは先程の調理実習での姫路特製ワッフルだ。

その時、ふと教室の入り口に誰かの気配を感じた気がするが、気にしないことにした。

そしてその翌日の放課後。

雄二が明久に仕返しをしながら俺たちは学校を出た。

「痛いっ！痛いよっ！雄二」

「ほー、そうか、お前に殺人ワツフルを口に押し込まれた俺の苦しみを、思い知ったか」

「そんな昨日のことを、いつまでも根に持たないでよ。それに雄二は、姫路さんの料理に慣れてるから、耐性がついてるかと思って…
…あたたたたたたた、スミマセン、許して」

明久は雄二に両手で頭を抱え込まれ、肘をぐりぐり押しつけられて悲鳴を上げている。

「亮！助けて！」

「いや、無理だ」

残念ながら同情の余地はない。

そうしながらしばらく歩いてると、

「止まりなさ〜〜〜い、前のバカカップル〜〜〜!」

叫び声が聞こえてきたので、俺たちは後ろを振り返った。

「ほ、ほら……私のカンに間違いは……なかつたでしょ。やっぱり、デキて……」

誰だこの人は？

外見は腰まで伸びる長く黒い二つの三つ編みに、スレンダーな体という古風な美少女って感じだけど、今は汗をだらだらかきながら、目を血走らせ、ハアハア喘いでいる。どう見ても危ない人だ。

「今バカと叫んだようだが、明久に何か用か？」

「確かに、明久に用があるとしか思えない」

「ひどいよ！雄二、亮。どうして、僕がバカで、バカが僕になるのさ！」

「いや、そりやお前がバカだから」

「否定はしないけど、親友に向かってあんまりだ」

「認めるのか、おい」

「やっぱコイツはバカだ。」

「明久に用がないなら、行くぞ」

「ま、待ちなさい、坂本くん！」

あっさり去ろうとする雄二を、セーラー服を着た女性が呼び止める。

「確かあのセーラー服は……ここから少し離れたところにある聖条学園だったっけ？」

「わたしが、用があるのはきみよ」

雄二が怪訝そうに振り返る。

「お前、誰だ？」

「できれば名前もよろしく」

その人は腰に右手を当て、胸をそらした。

「私の名前は天野遠子。ご覧のとりの“文学少女”よ」

前半はともかく、後半の方はいきなり言われても困る。

「はあ？」

雄二は呆れた目をしながら天野さんを見て、隣の男子生徒は凄く恥ずかしそうにしていた。えーっと、誰だ？

「あ、そうだ。俺は神谷亮。君の名前は？」

気になったので、試しに聞いてみる。

「僕は井上心葉。よろしく、神谷君」

「おう。よろしく」

俺たちがそんなことを話している傍ら、

「聞いた？雄二？用があるのは雄二だって！バカは僕じゃなくて、雄二のほうだったんだよ。ヤッター、バンザイ！」

バカが両手を空に向けてはしゃいでいた。

「そっちのおバカさんは、ちょっと黙ってて！」

天野さんの一喝で、ガツクリとしていた。

「単刀直入に言うわ。吉井さんと別れてちょうだい」

本当に単刀直入だ。

「ちよちよちよちよちよつと、それなに？まるで僕と雄二が付き合っているみたいじゃないか」

雄二は急にぴくりと眉を上げ、明久は目を丸くした。

「瑞希ちゃん……って、姫路さんのこと!?!」

「そうよ。きみたちのクラスメイトの、可愛くて気立てのいい、彼女にしたい女の子No.1の姫路瑞希ちゃんよ。あんな健気で優しい瑞希ちゃんを泣かせた落とし前は、きっちりつけてもらうわ」

「姫路さんが泣いた!」

明久の顔が、急にびしっとシリアスになる。

原因は、昨日のワッフルと見て間違いないだろう。

天野さんは、胸元からターコイズブルーのリボンをほどき、それを雄二に投げつけた。

リボンが雄二の胸にあたり、ひらひら舞いながら靴の上に落ちる。

「というわけで、聖条学園文芸部部长の天野遠子は、坂本雄二くん、きみに決闘を申し込むわ」

何てレトロな決闘の申し込み方だ。初めて見た。

「俺が負けたら、明久と別れるって？」

「そつよ」

「じゃあ、そつちが負けたら？」

「ここにいる心葉くんは、ふたりの愛を賛美する、極甘の詩を書いてもらうわ」

「ちよっ、遠子先輩っ！」

「お。それじゃそれが出来たら知らせてくれ。俺が同人誌にするから」

「って神谷君まで!？」

「安心してくれ。君のペンネームは『ジョージ・ケツメル』にするから」

「そついつ問題じゃないよ！」

井上君が凄く嫌そうな顔をしている。

それと同様に、雄二も露骨に嫌そうな顔をする。

「それは、全く俺のメリットにならん」

俺にとっては収入の充てになるからいいんだけど。

「なら、心葉くんの詩にプラスして、この世にたったひとつしかない豪華賞品も進呈するわ」

「いいだろう」

雄二はあっさり受け入れた。

「待ってよ！男子と女子で、ハンデもつけずに決闘って、どうかと思う。水鉄砲で撃ち合いで済ます気？」

すると天野さんは、いいことを考えたというように、ポン！と手を叩いた。

「じゃあ、召喚獣で勝負しましょう」

「」「」「召喚獣？」「」「」

俺たちの声が重なる。

「ええ、そうよ！それなら学力勝負で、男女の体力差もないし公平よね」

「でも、召喚獣は、先生の立ち会いがないと呼び出せないよ」

「公開試合という形にしちゃえば、どうにかなるわ。そういう方面に顔がきく人を知っているから、さっそく頼んでみるわね。わあ、楽しみ〜！瑞希ちゃんから話を聞いて、試してみたかったのよ〜！」

両手を胸の前で組み、うっとりする。

とっつか、自分がやりたいただけな気がする。

「ね、みんなの前で、正々堂々と決着をつけましょう〜！」

こうして週末の土曜日。

俺たちは、文月学園校庭の特設ステージに集結していた。この日は快晴で、初夏の日差しが降り注いでいた。

「んで雄二、何で俺まで出てるんだ？」

この試合が団体戦であることをついさっき聞かされ、しかもいつの間にか出場が決まっているのだから驚きだ。

「しょうがないだろ、亮。テストを受けた結果なんだから」

まあいいけどさ……。

勝負方法は団体戦の勝ち抜き戦で、こっちは先鋒が俺、次鋒がムツツリー二、副将が島田、大将が雄二という順番だ。

対する聖条学園のチームには、この前いなかった二人が参加している。

対戦表には、先鋒姫倉麻貴、次鋒天野遠子、副将琴吹ななせ、大将井上心葉とある。

俺たちはそれぞれに向かい合わせに整列した。

俺の前に立っている長い茶髪の女性が姫倉麻貴さんで、島田の前に立っている肩まで髪が伸びている女の子が琴吹さんか。

「まったく、なんでウチがこんな試合。アキが絡んでなきゃ、出なかったのに。けど、ウチもFクラスの代表として出るからには負けないわよ」

「あ、あたしだって」

島田と琴吹さんが、バチバチと火花を散らす。

この二人、どこか似ている気がする。

そして井上君の前には、雄二が立っている。

「ねえ、どうして吉井くんは出ないの？」

井上君が訪ねると、雄二は飄々と笑みを刻んで答えた。

「明久は秘密兵器だからな」

何か考えがあるみたいだ。

「（お前は何か聞いているのか？）」

『（聞いてないけど大体分かるわよ。ま、アンタももうしばらくしたら分かるはずよ）』

ちなみに明久と姫路は、観客席で隣同士に座っているのに視線をそらしたまま、両手に膝を乗せもじもじしている。

その周りで、我らが文月学園の生徒が声援を飛ばしている。

「Fクラス〜！頑張るのじゃ！」

「……………雄二、愛してる」

……………声援？

そんなこんなで、文月学園チームと聖条学園チームの試合が始まった。

第三十六問その二・召喚獣は誰が為に戦う？

「それでは、一回戦を始めます！」

先生のかげ声で、俺と姫倉さんが特設ステージの中央に進み出る。

「もう一人の方も出てきてくれないかしら？」

いきなりそんなことを言われた。

「はぁ……。何で私のことまで知っているんですか？」

「ちよつと情報を仕入れたから」

是非ともその情報のルーツを教えて欲しいわ。

「え！？神谷君、どういふことなの！？」

井上君がえらく驚いている。

「はじめまして。今の私は亮じゃなくてレンよ。よろしくね」

「この子は自分の中に男性人格と女性人格の二種類が存在しているの。俗に言う二重人格ってやつよ。」

「そういうこと。私の場合は呪 郷の泉に落ちた呪いみたいなもので生まれたみたいだから、人格と一緒に体まで変わるんだけどね」

「え？レン、そうだったの？」

明久たちまで驚いている。そういえばまだ話してなかったわね。

「ま、それはそれとして始めようぜ」

「そうね。それじゃ、やりましょうか」

「一回戦の種目は、英語ライティング！」

ちょうど科目も決まり、俺が召喚獣を召喚しようとした瞬間、

「棄権するわ」

姫倉さんがあっさりと負けを認めた。そして天野さんと少し会話した後、観客席に戻っていった。

「（何だ？あの人、英語に自信がないのか？）」

『（というよりは、勝負自体に興味がないみたい。何か他に大事な目的でもあるんじゃない？）』

それにしても、性格がえらくあっさりした人だなあ。

「それでは、二回戦を始めます！」

相手の次の選手は、天野さんだった。

「うう……。麻貴のバカ……。ヌードモデルなんて、絶対やらないんだから……」

姫倉さんの目的がはっきりした。

「二回戦の種目は、現代国語！」

文学少女を名乗るだけあって、天野さんは国語にかなり自信があるんだろう。

しかし、負けるわけにはいかない！

「神谷君。麻貴の仇はこの文学少女である天野遠子が討つわ！」

いや、俺何もやってないんですけど……。

「「試獣召喚っ！！」」

かけ声と共に、お互いの足元から召喚獣が現れる。

天野さんの召喚獣は、中世の騎士のようなぴかぴかの甲冑に身を包み、天を貫くような巨大な槍を持っていた。

「おおっ！文学少女、強そうだぞ！」

「槍、でかつ！」

「にしても、「コレって……」

「マジかよ……」

掲示板に表示された二人の得点を見て、観客席からざわめきが起こる。

「ど…どついでのこと……？」

流石の天野さんも、驚きを隠せずにいる。

そりゃそうだ。こんな点数、滅多に見れるもんじゃない。

「天野さん、どれだけ科学技術が発達しても、どうしても分からないことがあるんですよ」

「分からないこと？」

文学少女である天野さんには信じられないかもしれないけど。

「それは……人の、心です」

V S

聖条学園 天野遠子

現代国語

3点

V S

623点
『

天野さんが闇雲に振り回す槍にかすり、俺の召喚獣はあっけなくやられた。

「亮！？セリフはカッコいいんだけど、点数のせいで全部台無しだよ！？」

「しょうがないだろ明久。問題が分かんないんだから」

「ちょっと神谷君！？どついう間違え方をしたらこんな点数になるの！？」

「遠子先輩！落ち着いて下さい！！」

暴れる天野さんを井上君が羽交い締めに行っている。

「漢字の読み書き以外全て分かりませんでした」

『くの気持ちを述べなさい』とか『くは何が言いたいのか書きなさい』とか言われても、分かるわけがない。

「神谷君!!!今のセリフは聞き捨てならないわ!!!」

「だから、落ち着いて下さい!遠子先輩!」

天野さんが更に激しく暴れ出したので、被害を被る前に退散した。

「それじゃムッツリーニ、後は頼んだぜ」

「……………(コクリ)」

ムッツリーニが特設ステージに立つ。

「三回戦の種目は、保健体育!」

とたんに、嵐のような歓声と、「ムッツリーニ!」「ムッツリーニ!」「ムッツリーニ!」というコールが巻き起こった。

「ムッツリーニ!」

「ムッツリーニ!」

「ムッツリーニ!」

「残念ね、土屋君」

大気を揺るがすムッツリーニコールの中、天野さんが三つ編みをなびかせ、悠然とムッツリーニを見つめる。

対するムッツリーニは天野さんのスカートと足の境界線を見つめている。

「……………(じー)」

「わたし、保健体育にはとっても自信があるのよ」

「……………(じー)」

ムツツリーニは、ひたすら天野さんの膝小僧のあたりを見ている。

「……………（じー）」

「わたしは、ポーリーヌ・レアージュの『O嬢の物語』も原書で読んだ文学少女よ。夜這い満載の『源氏物語』も、エロスてんこもりの『今昔物語』も、官能の宝箱『千夜一夜物語』も完全攻略し、団鬼六先生も美味しくいただけさせてもらっただわ」

観客がコールをやめ、どよめく。

「団鬼六をオカズにしただと！」

「顔も赤らめず、堂々と言い切ったぞ！」

「なんて男前なんだ！文学少女！」

感嘆の声（？）に気をよくした天野さんが、調子づいてさらに胸をそらす。

「えへん！××縛りも、×××××縛りも漢字で書けるし、××××
も、××の種類も、×××××が×××したときの立たせ方も、×××
××の抜き方も、体位全般も即行レポートにまとめられるわ！×××
×も、×××××も、完璧に各国のスペルで綴れるのよ！」

「文学少女すげー！」

「すげー！」

「すげー！」

天野さんの口から次々放たれる放送禁止用語の嵐に、島田や姫路はいざ知らず、レンまでもが処理落ちしているようだ。

というか、本当に文学少女なんだよな……？

「やめてください！遠子先輩！それは文学少女ではなく、ただの下ネタ好きのおっさんです！保健体育、全然関係ないです！そんな恥ずかしい問題、テストには絶対出ませんっつっ！」

井上君も大変そうだ。

「……………一般教養」

いやいやムツツリーニ、そんな一般教養は聞いたことがないぞ。

そしてその態度に天野さんがカチンとし、言い放つ。

「涼しい顔をしていられるのも、今のうちだけよ」

向かい合つふたりの呼び声が、重なった。

「「試獣召喚っ！！」」

そして二人の得点が掲示板に表示される。

『文月学園 土屋康太

VS

聖条学園 天野遠子

保健体育

560点

VS

540点』

客席が、大きく揺れる。

「ムツツリー二に負けてないぞ！」

「エロ少女すげー！」

天野さんの召喚獣が三つ編みを跳ね上げながら、先程の巨大な槍を意気揚々と振り回し、突進する。

「さあ！覚悟なさい！」

槍が気合いとともた、ムツツリー二の召喚獣に向かって振り下ろされるが、

槍は勢いよく空を切るばかりだった。

「全然当たらないじゃないですかっ！」

「え？あら？あら？おかしいわね。さっきは当たったのに」

「まあ、点数が点数だったからな」

「うるさい、雄二」

しかし、天野さんは最早槍に振り回されている。

「勝てるぞムッツリーニ！」

その時、それまで動かなかったムッツリーニがぼそつと呟いた。

「……………加速」

ムッツリーニの召喚獣が、一瞬のうちに天野さんの召喚獣の背後に現れた。

「いけっ！」

そのまま小太刀を抜き、天野さんの召喚獣に切りかかる。

その時、

「いやああああああっ！」

琴吹さんの悲鳴が会場に響き渡った。

「おおっ！ピンクっ！」

「縁に白のレースつきだあっ！」

どうやら井上君が琴吹さんのスカートを捲ったみたいだ。

男子（主にFクラス）が総立ちになり、ムツツリーニが大量の鼻血を噴いてぶっ倒れる。

そしていつの間にかカメラを取り出して琴吹さんに向け、カシヤカシヤカシヤとシャッターを切り続ける。

「えいつー！」

動きを止めたムツツリー二の召喚獣に、天野さんが繰り出した槍が
ついにヒットした。

ムツツリー二が鼻血まみれで倒れるのと、奴の召喚獣が倒れるのは
同時だった。

そして、琴吹さんは顔を真っ赤にして井上君に詰め寄っていた。

「信じられないっっっっ！」

「ゴメン。でもぼく見てないから」

「自分で捲っておいて、見てない、はないだろ……」

ため息をついていると、井上君がビンタをくらっていた。

「余計悪いっ！てか最悪！もお、もお、いやああああ」

琴吹さんはもう一発井上君の顔を引っぱたき、真っ赤な顔で走り去
ってしまった。

そんなことをしていると、ステージでは第二試合が始まるうとしていた。

「つつ！まさか土屋が、保健体育勝負で敗退するなんて。けど、ここから先はウチが食い止めるわ」

「ふふん。このまま文学少女の私が、あなたたち全員のお相手をしてあげる」

「「試獣召喚っ！！」」

島田の召喚獣はいつも通り金の房飾りのついた軍服にサーベルという装備だが、天野さんの召喚獣の武器は槍から先割れスプーンだった。

「ええええっ、どうしてえ！」

ちなみに第四試合は数学だ。

『文月学園 島田美波

V S

聖条学園 天野遠子

数学

191点

VS

2点
『

勝敗はあっさり決まり、天野さんはがっくりと両手をついた。

「ううう……に、人間の価値は、サインとかコサインとかじゃないもん……」

一体どういう間違え方をしたんだろう。

琴吹さんがいないので、向こうには大将の井上君しか残っていない。

「次は化学ね。ウチはヤマがあたってかなり問題が解けたから、詫びを入れるなら今のうちよ」

「えーと……お手柔らにお願いします」

井上君がぺこりと頭を下げる。

「「試獣召喚!」」

井上君の召喚獣は天野さんと同じ中世の騎士タイプで、幅の広い剣を持っている。

『文月学園 島田美波

VS

聖条学園 井上心葉

化学

170点

VS

325点
『

井上君って、結構頭いいんだな……。

「ちよつと嘘！なにこの得点差〜！」

俺だってビックリだ。

「ゴメン、理数得意なんだ」

勝負はあっさり決まり、今度は島田が膝をついてうなだれる。

「ま……負けた」

「ありがと〜〜〜心葉くん！尊敬する先輩の仇を討ってくれたのね！」

ぴよんぴよん飛び跳ねる天野さんの横で、井上君が顔を赤らめている。

へえ〜。別に満更つてわけでもなさそうだ。

「さあ、次はいよいよ大将同士の対決ねっ！坂本くんなんか、軽くひとひねりよ！」

相変わらずノリがいい人だ。

雄二は試合の時からずっと余裕の笑みを浮かべている。

「心葉くんは、意地悪でひねくれていて、若者のくせに無気力だけど、成績はいいのよ！この勝負、わたしたちがもらったわ。吉井くんと別れるという約束を忘れないでね」

「そっちこそ。商品の準備はできてるんだろっな」

「ええ。心葉くんにも間違いない、ふたりの愛を祝福する詩を書いてもらうわ」

「……いや、それはいい」

「俺は書いて欲しいな。同人誌にすれば売れそうだし」

「てか、書きませんよ！ぼく！」

「え……!?」

そ……そんなあ……。

「まあ、心葉くんたら、いきなり勝利宣言ねっ！頼もしいわ。文芸部の名誉と瑞希ちゃんのために精一杯戦ってね！」

「ほおー！姫路のためにねえ！」

何故か雄二はわざとらしく大声をあげ、観客席の姫路と明久を見る。

「そうよ、わたしたちは、瑞希ちゃんの騎士よ！」

姫路は困ったように肩をすくめ、うつむいている。

そんな姫路を気がかりそうに見ていた明久が、そのとき急に決意に満ちた表情で立ち上がった。

「待つて雄二！試合には僕が出るよ！」

雄二がニヤリとする。

まさか、コレを狙ってたのか？

「あ、明久くん……っ！」

姫路が目丸くする。

そんな彼女を見おろし、明久が真剣な眼差しで言う。

「姫路さん、僕はバカだから、姫路さんがどうしてそんなに哀しそうにしているのか、よく分からないんだ。けどバカはバカなりに、姫路さんのためになにかしたいと思う。だって姫路さんは大事なクラスの一員で、大事な……その……」

「明久くん……」

姫路は感激のあまり、泣きそうな顔で震えていた。

明久はそのままステージに上がり、敗北のショックに打ちひしがれている島田の肩をぽんと叩き、爽やかに言った。

「美波、あとは僕が引き受けた。僕に任せて」

「……瑞希のためって、どういふことよ」

島田が硬い声で呟く。

「え？」

次の瞬間、島田のアップパーカットが明久の顎を突き上げた。

「アキのバカああああああ！」

「み、美波、なんで……僕は美波の胸が小さいとか、美波の足がデカいとか、美波が凶暴だとか、一言もーば、僕は、サンドバッグじゃなー」

「バカバカバカ！ウチの気持ちも知らないで！ウチだって、ウチだって、アキのために、頑張ってるのにいいいい！なのに、バカバカ！バカあああ！」

散々に殴って踏みつけた後、島田は琴吹さんが去った方向に、泣きながら走って行ってしまった。

そして、ボロ雑巾と化した明久が倒れていた。

「……うむむ……白目をむいておる。戦闘不能じゃな」

秀吉が明久を覗き込み、痛ましそうに首を横に振る。

「……あの、そちらは大将がいなくなっちゃったみたいですけど、試合、どうしましょう」

このままなら不戦敗かな？

その時、澄んだ声がした。

「私が、井上君と試合をします」

ステージに、迷いを振り切ったような澄んだ表情の姫路が上がっていく。

「遠子さん、井上君。私の騎士になってくれて、ありがとうございます。ます。けど、守ってもらっただけじゃ、やっぱりダメなんです。大切なことだからこそ、自分の力でどうにかしなければ……。だから、私が戦います」

どうやら姫路の中で決意は固まったようだ。

井上君の口元に、僅かに笑みが浮かべている。

「うん。姫路さんの言うとおりだね。いいよ。最後の試合は、僕と姫路さんの一騎打ちだ」

「ありがとうございます」

姫路がぺこりと頭を下げる。

天野さんが、二人とも頑張れえ！と歓声をあげる。

「「試獣召喚！！」」

今回の試合は古典。

姫路の召喚獣はいつもと変わらないのだが、井上君の召喚獣の装備が剣じゃなくて羽根ペンになっていた。

『文月学園 姫路瑞希

VS

聖条学園 井上心葉

古典

352点

VS

285点
『

点数はそれほど開いているわけじゃない。

となると……

井上君も何となく納得したようで、頬が赤らんでいる。

迫る姫路の召喚獣を井上君の召喚獣が羽根ペンで受けて立つ。

そして――

「やあっ！」

姫路の剣が、井上君の召喚獣の胸を貫き、勝負は決した。

「明久くん……！私、勝ちました！」

姫路がステージの隅に倒れている明久に向かってまっすぐに駆け出し、明久の手を取り報告する。

「はは……なんか、試合終わっちゃったみたいだけど……姫路さんが元気になってよかったよ、うん」

ポロポロの明久が、痛みをこらえて笑う。

姫路も嬉しそうで、ほんのり頬を染め見つめ合ったりして、とってもいい雰囲気だ。

「さあて、賞品をいただこうか」

「じゃあ、心葉くんに即興で詩を……」

「そいつはいいから、この世にひとつしかない豪華賞品のほつを」

雄二、全然よくないぞ！

「わかったわ。瑞希ちゃん、あれを持ってきて」

天野さんが、姫路のほうを見て微笑む。

「あ……はい。今すぐ」

姫路が名残惜しそうに明久から離れ、ぱたぱたと駆け出し、すぐにバスケットを提げて戻ってきた。

蓋を開けると、そこには黄金色に焼き上がったワッフルが、ぎっしり詰まっていた。

……………ワッフル!?

「まさか! 姫路の手作りか!」

天野さんが、晴れやかに答える。

「そうよ。たとえ試合に負けても、この世にたったひとつしかない瑞希ちゃんのことな思っただけは、受け取って欲しかったから」

「あの……よかったら、皆さんで召し上がってください。その……、あ、明久くんも」

「えっ!」

明久が硬直している。

「よし、明久! 頑張ったお前にご褒美だ。姫路のワッフルは全とお前のものだ」

「って、雄二!」

「……………（コクコク）」

「なに頷いているのさ！ムツツリーニ！」

「頑張れ明久」

「亮まで！？」

「明久くん……………」ご迷惑ですか？」

姫路が目をうるませる。

「ぐっ……………」

「あら、そんなことないわよね、吉井くんくん？さあ、いつきにがばつといきましょう」

「そつだ、明久。男を見せろ」

雄二が明久の口を両手でこじ開ける。そこに天野さんが、姫路のワツフルを押し込む。

ばたんつ。

明久が目をむき泡を吹き、頭から倒れる。

「きゃあ、明久くんっ！」

驚く姫路の方へ、紫色になった顔をよろよろと上げ、汗をだくだくかきながら、引きつりまくりの笑顔を作った。

「し……死ぬほど、美味しいよ」

姫路の顔が、ぱあっと輝く。とっても嬉しそうだ。

「よかったわね。瑞希ちゃん。ほら、吉井くん、まだまだたーくさんあるから、ゼーんぶ食べてね」

「果報者だなあ、明久」

天野さんと雄二が、明久の口に交互にワッフルをねじ込む。

「井上君……君も大変そうだな……」

「うん……」

そんな光景を俺は井上君と、遠い目で見ていた。

ちなみに、バスケットいっぱい分のワッフルを完食した明久は、救急車で病院に運ばれた。

「心配しないで。あんまりおいしくて、つい食べ過ぎちゃったんだ」

担架で運ばれながら虫の息で姫路に伝えた明久は、誰から見ても壮絶なほど輝いて見えたという。

第三十七問・実際に姉がいる人は姉萌えしにくいって、昔お偉いさんが言ってた

何気に新キャラ登場です

第三十七問・実際に姉がいる人は姉萌えしにくいつて、昔お偉いさんが言つてた

以下の問いに答えなさい。

『家計の消費支出の中で、食費の占める割合を何と呼ぶでしょう』

姫路瑞希の答え

『エンゲル係数』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。一般に、エンゲル係数が高いほど、生活水準は低いとされています。

神谷亮の答え

『エンジェル係数』

教師のコメント

何となく神聖さを感じるのは、私の気のせいでしょうか。

吉井明久の答え

『今週は塩と水だけです!』

教師のコメント

食事の内訳は聞いていません。

梅雨前線の影響をあまり受けないこの地域にしては珍しく、午前中に少しだけ雨が降った日曜の午後。今はすっかり雨も上がって晴れ渡ったので、俺は食材の買い出しに出かけた。

そして今はその帰り道。

「……………暑い」

気温、湿度の両方が高い中、日傘をさしながら帰宅している。

「あの、もしもし？」

突然後ろから声をかけられた。

「はい。何ですーか？」

あまりの驚きに途中で言葉が詰まってしまっ。

大きな瞳に涼やかな表情、黒いショートカット。

そんな女の人が、大きな旅行鞆を携えていた。

「なぜかバスローブ姿で。」

「この辺りに自販機はありませんか？」

「へ？自販機ですか？それだったらー」

バスローブについてツッコんだら負けなのだろうか、と考えながら自販機までの道を教える。

「ありがとうございました」

ぺこりと頭を下げ、その人は歩き去ってしまった。

「（何でバスローブなんだろう？）」

『（……………吸水性に優れているからじゃない？）』

それならタオルを使えばいいんだけどな…………。

「（とりあえず、今の人は忘れよう。グラマラスな体つき以外は）」

『（アンタ…………そんなこと言ってるよ、優子に殺されるわよ？）』

「（何で優子が出てくるんだ？）」

『（…………そこは自分で考えなさい…………）』

うん。いくら考えても全く分からない。

ーピンポーン

家に帰ってのんびりしていると、玄関のチャイムが鳴った。

「はい。どちらさまですかー？」

返事をしながら鍵を外し、ドアを開ける。

「……あれ？」

玄関の外には、見覚えのある女性が立っていた。

上は少し子供っぽいデザインの半袖Tシャツに下は膝下までのスカート。

先程の女性よりは劣るとは言え、平均よりは大きな胸。腰の辺りまで伸びている茶髪のポニーテール。そしてー

恐ろしいまでに低い身長。

「久しぶりだね〜亮くん」

「あ……姉貴……」

あれ？どうして姉貴がここにいるんだ……？確かもつと遠くで暮らしていたはずなんだが……。

「確か仕事の手続きとかで、おふくる達の所に住んでるんじゃないのか？」

「そうだったんだけど、もうその辺は落ち着いたのでからね。こっちに帰ってきちゃった」

「なるほどな。というか姉貴。相変わらず身長は低いままだな」

「む。ちっちゃくないもん!!」

腕を振り回しながら突っ込んできたが、姉貴の頭を手で押さえて腕を突っ張った。こうすれば、攻撃を食らうこともない。

やれやれ。騒がしい姉が帰ってきてしまった。

声も容姿も性格も子供みたいだからな。

……………これから明久たちを家に呼ぶ時は、姉貴がいない時にしよう……………。

第三十七問・実際に姉がいる人は姉萌えしにくいつて、昔お偉いさんが言つてた

新キャラについてなんです、大まかな構成はずっと前からあったんです。しかしだんだん肉付けをしていった結果、どこぞのウエイトレスみたいになつてしまいました……

第三十八問その一・どづいつ顔をしたらいいか分からないときは、笑えばいいよ

以下の英文を正しい日本語に訳しなさい。

『Die Musik gefallt Leuten und
bereichert auch den Verstand』

島田美波の答え

『音楽は人々を楽しませる上に心を豊かにします。これは英語ではなくてドイツ語だと思います』

坂本雄二の答え

『出題が英語ではなくドイツ語になっている為に解答不可』

教師のコメント

申し訳ありません。先生のミスで違う問題が混入してしまいました。日本語訳は島田さんの解答で正解です。ただ、今回はこちらの手落ちなので無記入の人も含めて全員正解にしたいとー

土屋康太の答え

『あぶりだし』

吉井明久の答え

『バカには見えない答え』

神谷亮の答え

『 ステルス鉛筆で書きました』

教師のコメント

ー 思っていたのですが、君たち三人だけは例外として無得点にしておきます。

「んむ？明久？」

「ういつす、明久。」

「あ。おはよう秀吉、亮」

「おはようじゃ」

「おはよう」

秀吉と一緒に小走りして、前にいる明久に追いつく。

すると秀吉が明久を観察するように見つめている。

「どうしたんだ秀吉？明久の顔をじっと見て」

「いや、なんとというか……。明久よ。今朝のお主はいつもと何かが違うような気がするのじゃが……。？」

「うえ！？き、気のせいじゃないかな？何も変わったことなんてないよ？」

言われてみれば、確かにいつもと違う気がする。

「いつもと違って、今日は朝から血色が良いように見えるぞ。何か臨時収入でもあって朝食が摂れたのか？」

その言葉を聞いて、明久の体が僅かにこわばるのが分かる。本当に何かあったようだ。

「ま、まあちょっと……。たまには僕だって、ね」

明久が言葉を濁している。怪しい。

「シャツもズボンもアイロンがかかっておるよじじやし」

「そ、それはホラ。今日は週の初めなんだから、それくらいは」

「……怪しいのう」

「ほ、ホントに何も無いんだよ」

「ならばなにゆえワシから目を逸らすのじゃ？」

「だから別に何も」

「ならばこちらを向いても良からう」

秀吉から逃れるように体ごと向きを変える明久と、それに合わせて顔を下から覗き込む秀吉。

傍から見れば二人が同じ場所をグルグル回っている感じだ。

『朝から見せつけてんじゃねえぞコラあ！』

『吉井君。そちらの先輩の仰る通りだ。キミはもう少し木下君と距離を取るべきだと思っ』

登校中の常夏コンビのモヒカン先輩と、久保が注意してきた。

「いや、イチヤイチャも何も、お主らを含めてこの場には男しかお

「らんのじゃが……」

「ごめん秀吉！亮！僕は先に行くね！」

一瞬秀吉の注意が逸れた隙に、明久が校舎に向かって走り出した。

「あ、待て明久！」

走る、というよりは早歩きで明久を追いかける。

そして着いた先の教室では、

「雄二……何で体育用のハーフパンツを穿いてるんだ？」

雄二が見慣れない格好で座布団に座っていた。

「明久！テメエのせいで俺は、下半身超クールビズ仕様で登校する羽目に……！死んで償えこのクソ野郎！」

「えええっ！？いきなりどうしたの！？一体何があったのさ！？？」

「黙れ！死ね！制服をよこせ！」

言っていることが全く分からない。一体雄二に何がー

『おい、知ってるか？坂本の話』

『ああ。なんでも裸Yシャツで登校してきたらしいな』

『まったく、流石としか言いようがないな……。最近女装は見慣れてきたが、アレには度肝を抜かれたぜ……。』

聞こえてきたのは、クラスメイトの話し声。

「……………」

「……………」

「……………」

こつこつ時、何を言えればいいんだ？

「雄二……。何か辛いことがあるなら、相談に乗るからさ……………」

「とりあえず、笑顔を忘れるなよ……………」

「ち、違う！俺は自分から進んでそんな格好になったわけじゃない

！あと、トランクスは死守したからギリギリでセーフなはずだ！」

「うんうん。そうだね。辛いことがあって、雄二の精神はギリギリのところまでいっちゃったんだよね……」

「だから違うと言ってるだろうが！お前が送ってきたメールを翔子に見られたせいでスポンを奪われたんだボケ！」

すっかり興奮状態の雄二。どうやったたら治るだろう？

「何を言ってるのさ雄二。いくら霧島さんでも、男からのメールくらいでそんなことをするはずないじゃないか」

女の子からのメールならそうなるだろうけど。

「いや。正直、お前の文章はかなり際どい感じだったと思うぞ……」

「際どいって、どんなメールだったんですか？」

姫路が突然ひよこっと思われた。

「別にただの頼みごとのメールのはずだけど？」

「ほほう。そう思うのなら、俺に送った文面を大きな声で読み上げ

てみる」

「？別にいいけど？」

一体どんなメールを送ったんだ？

「えっと、それじゃ……」コホンっ」

咳払いをした後に、明久は大きな声で読み上げた。

「雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……帰りたくないんだ！」

ガラッ

その瞬間、音をたてて教室の扉が開かれた。

「……………」

その扉の向こうにいたのは、島田だった。

「ウチにはアキの本心が全然わからないっ！」

「え！？何！？なんで美波は登場と同時に退場しているの！？？」

いや…何も知らずに聞いたら、それも無理は無いかもしれない。

「な、なんてことを言うんですか明久君っ！そういうことはもっと、その……オトナになってからですっ！」

「いやいや姫路。お前は少し落ち着こうな……」

きつと危険な想像をしているに違いない。

「相変わらず朝から賑やかじゃな……。先ほど明久が走り去って行ったと思ったら、今度は島田が教室から飛び出して行くとは。何があつたのじゃ？」

今度は秀吉が教室に入ってきた。

「いや、別に何も無いけど」

「なんじゃ。先ほどのことと言い、ワシに秘密かの？それはちと、寂しいのう……」

俺だってそれは寂しい。と言うわけで、

「実はこのバカがこんな時間から公序良俗に反する発言をしたんだ」

多少捏造して秀吉に話した。

「明久……。お主、朝っぱらから助平なことを言っておったのか？」

「ち、違つよ！僕はそんなムツツリーニみたいな真似はしないよ！」

「……………失礼な」

どこかムツとしたような呟き声が聞こえてくる。振り返ると、いつの間にかムツツリーニが立っていた。

「おはようムツツリーニ。随分荷物が多いけど」

その両手には学校の鞆の他に大きな包みやら袋やらを提げていた。

「……………ただの枕カバー」

「枕カバー？そのわりには包みが大き過ぎない？」

「……………そんなことはない」

ブンブンと首を振って否定するムッツリーニ。

「ごめんムッツリーニ。ちょっと中身を見せてね」

「……………あ」

明久がムッツリーニから包みを奪い取る。中身は何だろうか？

「さて。何が入っているのか……………な」

「……………ムッツリーニ……………。何、コレ……………？」

「……………ただの抱き枕カバー」

「ただの、じゃないよっ！というか、まさか亮のその怪しいもっつこの鞆にも何か入ってるの!？」

「俺のはただの画集だから気にするな」

色々あったとは言え、気付くの遅過ぎだろ……………。

明久の言う通り、今朝はいつも通りの鞆だけでなく、もう一つ違う鞆を持ってきたのだ。

「ちよつとごめん亮」

いつの間にか明久に鞆の一つを奪われてしまった。もちろんヤツ曰く怪しい方の。

「ねえ亮……。コレは、何……?」

「……ただの人物画集だ」

「二人とも、枕カバーと抱き枕カバー、及び画集と人物画集には大きな隔たりがあるということをよく覚えておくんだ! っていうかどうしてどっちもモデルが僕なの!？」

「……世の中には、マニアというものがいる」

「そういうことだ……」

「何を言ってるのさ! 僕の抱き枕カバーや画集なんかを欲しがる人なんてどこにもー」

コンコン

「失礼。土屋君に神谷君はいるかな？前に頼んでいた枕カバーと画集を」

ちょうどいいタイミングで久保が登場した。

「あれ？珍しいね久保君。ムッツリーニや亮に何か用？」

「ーなんでもない。少々用事を思い出したので失礼するよ」

けれども明久を見るなりそそくさと立ち去ってしまった。

「ムッツリーニ。久保とも取引をしていたのか？」

「（こくり）……………強化合宿以来、お得意様」

「ヤツめ、完全に吹っ切れたな。というか、亮はいつの間に始めたんだ？」

「強化合宿の後、ムッツリーニにヘッドハンティングされた」

「……………亮の技術は、このまま埋めておくワケにはいかない」

「そういつわけで、売上金の半分を報酬に手を組んでるんだ」

「そつか……………」

雄二は、どこか納得したような表情をしていた。

「はあ……。とにかく二人とも。とりあえずその抱き枕カバーと画集はあとで没収するからね……。作った分を全部回収して、写真や絵を秀吉に換えて持ってきてよ……」

「明久よ。ドサクサに紛れてワシの抱き枕や画集を作るでない」

「そうですねよ明久君。人の物を勝手に取って、しかも改造するなんてダメです。……一つずつは私の分なんですし……」

ちなみに姫路もお得意様の一人だ。

「ところで、先ほどのお主らの話は何じゃったかの？」

「あ。えっと、何の話をしてたっけ？」

何だったっけな……？

「俺が明久にトランクス姿での登校を強要された、という話だ」

「そう！それだ！」

「明久、お主……」

「雄二っ！わざと誤解を招くような言い方をしないように！亮も賛成しないで！」

色々と言明が必要な部分が飛んでいる気がするが、まあ気にしないでおう。

「まあ、それは冗談だが……。要するに、明久が送ってきたメールのせいで翔子が何かを勘ぐって、それが原因で俺が酷い目に遭ったって話だ」

「メール？それは今朝の明久の様子がおかしいのと何か関係があるのかの？」

そつえばそんなこともあったな……………。

「明久君の様子、ですか……………？そう言われてみれば、今朝はいつもより顔色がいいですね。制服も糊まで利いてパリッとしてますし、寝癖もないですし……………」

「確かにおかしいな。顔色がいいのはまだわからなくてもないが、制服がきちんとしているのは妙だ」

「……………明久らしくない」

「やっぱり何かあったのか？」

「た、たまにそういう気分の日もあるんだよ！それより、そろそろチャイムが鳴るよ！鉄人が来る前に席につかないと！んじゃ、そういうことでっ！」

強引に話を打ち切って、そのまま自分の席まで行ってしまった。

「」「」「怪しい……」「」「」

やたら慌てているが、そんなに隠しておきたいものなのだろうか？

そんなことを考えながら、俺も自分の席で授業の準備を始めた。

第三十八問その二・逃走中! ……あ、テレビ番組の方じゃないですよ?

『吉井。保健室に行つてきなさい』

この台詞を、午前中の四つの授業で七回聞いた。まあ無理もないけどな。

「で、そろそろか……」

明久に詰め寄る姫路と島田をよそに、Aクラスの教室へと向かう。そしてその途中で、

「……………神谷?」

男子用の制服のズボンを持った霧島さんと遭遇した。

「……どうしたの？」

「えっと……そのズボンってもしかして雄二の？」

「（こくり）……浮気の罰として没収した。今から返しに行くところ」

雄二も大変そうだ……。だから、

「気をつけた方がいいぜ霧島さん。俺のカンだと、雄二は今頃明久と良い雰囲気になっているはずだ」

火に油を注ぐことにした。

「……分かった」

その言葉を残し、いつの間にか霧島さんがいなくなっていた。

「さすがは霧島さんだ」

そうしてAクラスの教室に入る。相変わらずバカでかい教室だ。

「あ、亮。こっちこっち」

見ると、優子が俺の方を向いて手を振っていた。

「ほら、弁当」

「あ、ありがとう……」

実は先日、優子に弁当を作ってくるように言われていたのだ。

本人曰く、『アンタがいなくなってますごく心配したんだから、お詫びとして弁当を作ってきたさい』だそうだ。

さてと、

「優希に工藤さん、いつまでそうしてるつもりだ？」

少し離れたシステムデスクに隠れている二人に話しかけた。

「あれ？バレちゃった？」

「ボクたちもまだまだだね」

せめて髪の毛は隠した方がいいと思う。

「ふ、二人ともどうしたの!？」

「いや〜面白そうだったからつい……」

「ふっふっふ〜優子ったら照れちゃって〜」

ポリポリと頭を掻く工藤さんの横で、優希が優子を肘で小突いている。

「それで、アタシもアタのお弁当を作ってきたのよ……」

そう言いながら、鞆から包みを取り出す優子。

「やっぱり優子って、料理とかするの?」

「まあ、たまにはね。というか、やっぱりって何?」

「いや、優子も女の子だし、花嫁修行とかしてるのかな〜、と思って」

「……………!」

いきなり優子の顔が真っ赤になった。何だ？風邪か？

「亮……。アンタって天然ジゴロ？」

どうしよう。優希の言葉の意味が全く分からない。

「なあ工藤。俺は何か悪いことをしたのか？」

「うーん……。ボクは別に悪いことじゃないと思うけどな……」

工藤は工藤で苦笑いを浮かべている。

「あ、そうそう神谷君」

「ん？」

「そういえば今朝、すごくグラマラスなお姉さんに会ったんだけど、」

「それはまたビックリだな」

「コレを吉井君に渡すのを頼まれちゃったんだけど時間が無くて……ボクの代わりに渡しておいてくれないかな？」

そう言っただけ渡されたのは、折り畳まれた一枚のメモ用紙。

「というかグラムラス？」

「ああ。あの人が。………しまった。名前が分からない」

誰からと言っただけ渡そうかと考えていると、

「亮………。一体どういふこと………?」

怒りのオーラを纏った優子がいた。

「あんまりオイタが過ぎるようだと………痛い目を見るわよ」

「ダッ（俺、猛ダッシュ）」

「亮！詳しく話さない！答えようによっては、腕の二・三本で許してあげるから！」

「それは全然許されていないぞ！」

俺の背中から、殺気を纏った優子が追いかけてくる。そんな中、無茶な取引にツッコミながら、廊下を疾駆する。ちなみに後一本をどこから持つてくればいいんだ？

「さらばだ優子！！」

「って、そっちは窓よ！？」

優子の言葉を背中越しに聞きながら、三階の開いた窓から飛び出した。

そして背中に仕込んだパラシュートを開いて地面に降り立つ。

そしてそのまま校舎の周りを走っていると、窓が開いている部屋を見つけた。

窓枠に手をかけて一気に乗り越えると、

「黙れこの自意識過剰ババアがぁーっ！！」「」

いきなり魂の叫びが聞こえた。

「雄二に明久、何でそんな当たり前なことを言ってるんだ？」

「サラツと失礼なことをぬかすガキさね！それに自意識過剰とはなんだい！アンタらがアタシに興奮して覗くために暴動を起こしたのは事実だろうに！」

「明久がバカだのブサイクだのホモ野郎だのと言われるのは事実だから気にならねえが、俺がババアなんぞに興奮していると誤解されるだけは我慢ならねえ！訂正しろババア！」

「そうです！訂正して下さい！バカでブサイクでババアに興奮しているのは雄二だけです！」

「ああもう五月蠅いねえ！なんと言われようとアタシは生徒と恋人にはならないからね！」

「「願い下げじゃあーっ！」「」

「取りあえず俺に状況を説明してくれ！」

閑話休題。

「へえ……。期末試験まで試召戦争は禁止ね……」

「んで、なんで試召戦争が禁止に？不具合はすぐ直せるんじゃないのか？」

落ち着きを取り戻した雄二がソファーに腰掛けて尋ねる。というか、勝手に座っちゃっていいの？

「決まってるさね。アンタらが試験召喚システムの本質を見失っているからだよ」

「試験召喚システムの本質？」

「確かに、『学生の勉学に対するモチベーションの向上』と銘打った目的のこのシステムで私たちがやったことといえば、校舎の壁の破壊から始まり、教頭室の爆破、学年全体での覗きだもの。ババアも色々困るわけね」

「そしてまた試召戦争騒ぎー学生の本分を逸脱するばかりか悪い方向へと進んでいるじゃないか。まともに勉強をしているのかい？」

「う……」

明久はやってないでしょう。

「だが、騒ぎを繰り返すうちに俺たちの成績は向上しているはずだ。潰れた授業の為の補習だって受けているしな」

「そ、そうですね。きちんとやることはやっています！」

「事実がどうあるか、じゃないんだよ。世間からどういつ目で見ら

れているのが問題なのさ」

ババアが少し疲れた顔をする。

私たちの通う文月学園は試験召喚システムという変わったものを導入しているおかげで、世間の注目を集めている。だから世論にはかなり弱く、内部だけでなく世の中で認められなければならない。

「だからこそその禁止令さ。別にずっとつてわけじゃない。あと一週間程度で期末試験で、そのあとは夏休みだろう？二学期なんてあっという間さ」

学校があるのはあと三週間ぐらいだから、確かにそれほど長くはない。

大体理解したわ。

「つまり学園長はこう言いたいよね。試験召喚システムの不調もあるにはあるけど、メンテナンスの休みは世論に対する隠れ蓑で、実際は期末試験に集中させる為に禁止にする、と」

「相変わらず察しいいね。その通りさ」

「えっと、それって……？」

明久はまた置いていかれているみたい。

「要するに、だ。『試召戦争を禁止にするから、その間は期末テストに集中して良い結果を出せ』ってところだな」

明久がようやく納得した表情を見せる。

「とは言っても、アンタらみたいなのはどうせそれだけじゃまとも勉強なんてしそうにないしねえ……」

あごに手を当てて何かを思案するババア。

「成績の向上が見られないようであれば、特別夏期講習でもやろうかね」

サラッと酷いことを言う学園長ね。

「そ、それは酷いですよ学園長！試召戦争を禁止にする上に夏休みが減るなんてあんまりです！」

「贅沢なことを抜かすクソジャリだね。なんなら夏期講習に加えて、

試召戦争を二学期まで勉強漬けにしてやってもいいんだよ？」

「うげ……」

それは流石に勘弁願いたいわ。

「まあアンタらの言いたいことも分からないでもないよ。この話は明日あたりに公表する予定だったけど、アンタらだけじゃなく他の生徒たちからの反発も想像に難くないさね」

その反発のほとんどは私たちFクラスからになるでしょうけど。

「だから、今回は特別にシステムのリセットをオマケにしてやるよ」

「システムのリセット？」

「メンテナンスの件もあるし、一旦システムに蓄積されているデータを白紙に戻してやるって言うてるのさ。そうすると、少しはやる気が出てくるんじゃないかい？」

「ほう……。それは悪くない話だな」

それには私も同感よ。

「明久は理解できないって顔をしてるわね。システムのリセットってことは、召喚獣の装備も白紙に戻るってこと」

「つまり、期末試験の点数次第では俺たちの装備がまともなものになる可能性があるってことだ」

「え！？そんなんですか学園長!？」

明久にとってはありがたい話でしょう。

「本当なら学年末試験でしか変更できないところを、今回は特別に
つてことだよな」

私や瑞希は良かったけれど、明久たちにとっては装備が変わらなかつたのは足枷になっていただろうけど、それが改善されるのだから
凄くありがたいでしょう。

「本来勉強っていうものは誰の為でもなく自分のためにやるもんだから、こういうのは間違っていると思うんだけどね……。今回は事情が事情なだけに特別さ」

この人がこんなに教育者らしいことを言うなんて……。

「わかりましたっ！期末試験がんばりますっ！」

「どうしたんだ明久。急にそこまでやる気を出して」

「凄く珍しいんだけど……」

本当に何があったの？

「よしっ！やろう雄二、レン！期末試験で良い点数を取って二学期の試召戦争で確実にAクラスの設備を奪取するんだ！」

「え、ええ……確かに。ねえ、雄二？」

「お、おう。そうだな」

まあ、気合いが入ってるだけマシだけど……。

「バカどもの頭でも理解できたようだなによりさね。それじゃ、用が済んだらさっさと出て行きな、ジャリども」

「はいっ。それじゃ、失礼します！」

「明久！？ちょっと待って！」

「今廊下に出て行ったらアイツらが……！」

取りあえず、私たちの目的を達成する為には、

ガチャッ

「「「「「ウエルカム」」」」」

「「するには、目の前に立つ美波、瑞希、霧島さん、優子、鉄人の五人をなんとかしなければいけないみたいだった。」

第三十九問その一・突撃 お宅訪問！

日本国憲法第76条『裁判官の職権の独立』について、以下の（ ）に正しい語句を記入しなさい。

『すべての裁判官は、その（ ）に従ひ（ ）してその（ ）を行ひ、この（ ）及び（ ）にのみ拘束される』

姫路瑞希の答え

『すべての裁判官は、その（良心）に従ひ（独立）してその（職権）を行ひ、この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される』

教師のコメント

大変よくできました。これは日本国憲法における重要な条文の一つですね。裁判官の権限の行使にあたっては、政治的権力や裁判所の上級者からの指示には拘束されることが憲法上保障され、それによって独立して職務を執行できるということです。この内容には裁判官の身分保障なども含まれていますね。豆知識として覚えておくとよいでしょう。

吉井明久の答え

『すべての裁判官は、その（ピー）に従ひ（ピー）してその（ピー）を行ひ、この（ピー）及び（ピー）にのみ拘束される』

教師のコメント

憲法第76条が大変なことに。

土屋康太の答え

『すべての裁判官は、その（本能）に従ひ（脱衣）してその（全裸体操）を行ひ、この（現行犯により警察の手が）及び（手錠）にのみ拘束される』

教師のコメント

全ての裁判官の皆様に対しての誠意ある謝罪文を要求します。

神谷亮の答え

『すべての裁判官は、その（闘争本能）に従ひ（武装）してその（全面魔法戦争）を行ひ、この（神の怒り）及び（裁きの雷）にのみ拘束される』

教師のコメント

ファンタジーと憲法をこっちゃんにしないで下さい。

終業のチャイムが鳴り響き、雄二としゃべりながら帰り支度をしていると、

「雄二、レン。ちょっといい？」

明久が声をかけてきた。

「ん？どうした明久」

「今日なんだけどさ、雄二の家に泊めてくれない？それで、二人に
期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ」

「ーざわ……ざわ……」

その瞬間、教室にざわめきが広がった。

『おい……聞いたか、今の……？』

『確かに聞いたぜ。俄には信じ難いことだが……』

『まさか、アイツらがな……』

『ああ。吉井と坂本が……』

『『期末テストの存在を知っているなんて……』』

いや、アンタたちも人のこと言えないんじゃない？

「勉強を教えて欲しいだど？」

「うん」

「やれやれ……。お前はまだ七の段が覚えられないのか」

「待つて！僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ！？分数の掛け算だつてきちんとできるからね！？」

「違うわよ雄二。三角形の面積の求め方に躓いているところよ」

「（底辺）×（高さ）＝（三角形の面積）！いい加減僕をバカ扱いするのはやめなさい！」

「はい、よくできました明久。あとは最後に二で割ることを覚えたら三角形の面積が出せるようになるからね？」

「どうやってこの高校に入ったのかしら？」

「ふう、やれやれ……。二人は人の揚げ足を取ることにに関してだけは天才的だね」

「え！？何その返し！？」

「凄え！流石の俺でも予想外だ！」

今度の期末テストに出たら間違はなく明久は間違えるだろう。

「あの、明久君」

すると瑞希がやってきた。

「あのですね、九九の覚え方にはコツがあるんですけど、」

「言えるからね！？いくら僕でも九九くらいはきちんと言えるからね！？」

九九ぐらいしかきちんと言えない、の間違いなんじゃないの？

「しかし、急にどうしたのじゃ？明久が勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

近くに座っていた秀吉もやって来る。

「いや、ホラ。さつき雄二が説明したじゃないか。『試験召喚システムのリセットされる』とか、『期末テストの結果が悪いと夏期講習がある』って。木刀と学ランなんて装備をそろそろ卒業したいし、夏休みも満喫したいし、頑張ってみようかな、なんて」

「……………明久らしくない」

「そうね。アキがその程度で勉強をするなんて思えないわね」

ムツツリー二と美波もやってきた。とことん信じてもらえないみたい。

「あの、明久君。私で良かったら……………一緒にお勉強、しませんか？」

瑞希ったら、大胆にいったわね。

「姫路さんの家に泊めてもらうわけにはいかないしなあ……………」

「え？明久君、私の家に来たいんですか？」

「あ、いやそうじゃなくて」

「そ、それなら、家に電話してお父さんにお酒を飲まないように言っておかないと……………。その……………、もし、ですけど、明久君がお父さんに大事なお話があるのなら、酔っ払っちゃってると困りますし……………」

だから瑞希、テスト勉強だって……………。

「まさか転校の話！？だとしたら説得に行くけど…！」

「こっちはこっちで違うことを考えてるみたい。」

「転向、ですか？明久君のお家って、仏教じゃないんですか？」

「ほえ？何の話？」

「いえ、ですから、お家の宗教が違うことのお話を……」

「????？」

完全に会話が噛み合っていないわね。

「たまに姫路の思考回路って明久と同レベルになる時があるよな」

「そうじゃな。朱に交われれば赤くなるといったところじゃろうか」

「……………似たもの同士」

「これはこれで良いんじゃない？」

ちなみに美波は知らない単語でも入っていたのか、頭にクエスチヨンマークを浮かべていた。

「それはそうと明久。朝から気になっていたが、どうして俺の家に泊まりたがる？自分の家に何かあったのか？」

「あー、えっと、実は」

「嘘をつくな」

「急に勉強に目覚めてーって、早いよ！まだ何も言ってないのに！」

「って、否定はしないんだ。」

「まあ、次の試召戦争のこともあるし、勉強くらい教えてやらんでもないが」

「え？ホント？」

「ただし、お前の家で、だ。その方がやり易いだろ」

言った後、雄二はよそを向いて小さな声で「我が家にはあの母親がいるからな……」と呟いた。雄二も色々大変みたい。

「って、僕の家はダメだよ！今日はちょっと、その、都合が悪いんだ！」

「都合が悪いだと？何かあるのか？」

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。本当なら今日はお前の家でボクシングゲームをやる予定だったろうが。改装業者が来るはずないだろ」

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「マンションなんだから管理人に言えば開けてもらえるだろ」

「でもなくて、家が火事になっちゃって」

「火事に遭ったくせに弁当を用意してYシャツにアイロンをかけてきたのか？お前はどこまで大物なんだよ」

「あー、えーっと他には他には……!!」

「いい加減にしないで。アンタの嘘は底が浅いのよ」

「ぐ……」

流石にネタが尽きたかしら？

「そ、そうだ！レンの家は!？」

……え!？

何でそう来るのよ……。

「亮の発明品が転がっているからね。皆がつかつに足を踏み入れると、生きて帰れるか分からないわよ?」

「ぐう……無理か……」

ふう……。どうやら難を逃れたみたいね。

「わかったよ。今日はおとなしく家に帰るよ……」

鞆を担ぎ帰ろうとして背を向けた明久の肩を秀吉がグッと掴んでいた。

「待つんじゃないか。何をそこまで隠しておるのじゃ?」

「うえっ!?!いや、別に何も!」

「何かあるのかわからんが、このバカがそこまで隠そうとすることか……。面白そうだな」

「確認しに行ってみましょう」

「ちょ、ちょっとレン！？何言ってるのさ！？」

「そうね。何かアキの新しい一面が見られるかもしれないし」

「私も興味があります」

「……………家宅捜査」

「テスト期間で部活もないし、ワシも行ってみよつかの」

段々皆の意見がまとまってきた。

「ダメだよ！今日は僕の家はダメなんだ！その、凄く散らかっているから！」

「あの、それならお手伝いしますけど？」

「でも、散らかっているのは2000冊以上のエロ本や300枚以上の画用紙なんだ！」

「……………任せておけ（グッ）」

『（画用紙は回収させていただく！！）』

「明久。亮も行く気満々みたいよ」

「しまった！更に二人の興味を煽る結果に！？もの凄い逆効果だ！」
「よし、それじゃ意見もまとまったことだし、明久の家に行くか」

「……おーっ」「……」

「やめてーっ！」

全力で抵抗する明久の首根っこを掴み、家まで連行した。

「何があるんだろうっな」

「ムツツリーニと違って明久は滅多に隠し事をしないからな。何が
あるか楽しみだな」

「………隠し事なんて、何もない」

「女物の下着に興味はあるか、ムツツリーニ」

「………あるわけがない」

「流石に隠し事に慣れとるだけあるの。嘘も堂に入ったものじゃ」

「……………！（ブンブン）」

明久は自分の家に向かう間、ずっと落ち込んでいた。

「でも、なんででしょうね？明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。強化合宿であんな覗き騒ぎまで起こしておいて、今更いやらしい本なんて隠すとも思えないし」

「そうじゃな……。急に手作りの弁当を持ってきたこと、Yシャツにはアイロンがかかっておったことなども合わせて考えると……」

「女でもできたか」

「……………っ！」「……………」

この野郎！抜け駆けしやがって……。

「あ、アキツ！どういづこと！？説明しなさい！」

「む、むう……。明久に伴侶か……。友人としては祝うべきなのじやが、なんだか釈然とせんというか、妬ましいというか……」

「……………裏切り者……っ！」

「呪ってやる……………っ！」

「僕、何も言っていないんだけど……………」

言動じゃなくて、行動が怪しいんだ。

「大丈夫ですよ。明久君が私たちに隠れてお付き合いなんて、そんなことをするはずがありません。私は明久君を信じています」

おっ。姫路は一人落ち着いている。やっぱり凄いなあ……………。

「ね、明久君？ 私たちに隠れてそんな人がいたりなんて、しませんよね？」

ホント凄いや……………。目が全く笑ってない。

そうこうしているうちに明久の住むマンションに到着。

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久、鍵を出せ」

「ヤだね」

明久がせめてもの抵抗を見せている。

「明久。裸Yシャツの苦しみ、味わってみるか？」

「え！？待つて！途中のステップがたくさん飛んでない！？」

「……………涙目で上目遣いだとありがたい」

「それじゃその次は女座りで裸エプロンを頼む」

「二人とも！ポーズの指定を出すなんて、秀吉バージョンと一緒に売る気！？」

「なぜそこでワシを巻き込むのじゃ！？」

「土屋君。できれば、Yシャツのボタンの上二つは開けておいてもらえると……………」

「神谷。エプロンは少し胸元を開けてもらえると……………」

「姫路さんも美波も最近おかしいからね！？わかったよ！開けるよ！開ければいいんですよ！」

「……………ボタン（胸元）を？」

「家の鍵を！」

ようやく諦めたらしく、何やら祈りを捧げながら家の鍵を開けてい

る。

「本当に彼女がいるのかしら……」

「少々緊張するのう……」

「大丈夫です。そんなこと、ありません……っ」

さあて、なんだか楽しみになってきたな。ーっであれ？靴はないみたいだ。

「それじゃ、あがつてよ」

明久に招き入れられて入った部屋の先、俺たちの視界に飛び込んできた一つの物。

「「「「」」」」」

それは、室内に干されたーブラジャーという名の女物の下着だった。

……
……明久のヤツ、果たして明日の朝日を拝めるんだろうか……
……？

第三十九問その二・友達に身内を紹介したくない人は結構いるはず

「いきなりフォローできない証拠があーっ!?!」

明久の叫び声が響く中、皆は思い思いの感想を言っていた。

「……もう、これ以上ないくらいの物的証拠ね……」

「そ、そうじゃな……」

「……………殺したいほど、妬ましい……………!!」

もはや弁明は無理だな。

そしてこの状況で、姫路が笑顔で明久に歩み寄ってこう言った。

「ダメじゃないですか、明久君」

「え?何が?」

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていませんよ?」

「……………認めない気だ……………」

ついに現実逃避を始めたか、姫路！

何やら体から禍々しいオーラが出現している。

「姫路さん、これは僕のじゃなくてー！」

「あら、これはー！」

姫路は視線をリビングの卓上に向けている。

「おそらく、化粧用のコットンパフじゃとー！」

「いいえ。アレはハンペンです」

「「「「ハンペン！？」「」「」」」

とつとつ真つ正面から否定しだしたぞー！

「あれ？んじゃ、キッチンに置いてあるコレは？」

「「……………女性向けのヘルシー弁当」

ムツツリー二の言葉を聞いた瞬間、姫路が顔に両手を当てて床にへたり込んだ。

「姫路さん！？どうして急に泣き出すの！？」

「もう、否定しきれません！！」

「どうして女物の下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトになるの！？」

まあ、弁当なら否定のしようがないからな。

そんなことを考えていると、

「あら……？お客様ですか？」

見覚えのある女性が、七分丈のパンツに半袖のカッターシャツを着てその上にベストという格好で扉に立っていた。

「年上美人！？」

姫路が女性の顔を見て一言。

「巨乳でグラマー!?!」

島田が女性の胸を見て一言。

「ひどいです、明久君!」

「ウチの純情を返して!」

今度は島田までもが崩れ落ちた。

「二人とも何を言ってるのさ!?!」

明久はそろそろ気付こうな……。

「はぁ……。紹介するよ。僕の姉さんだよ……」

「吉井玲です。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、
どうもありがとうございます」

深々とお辞儀をする玲さん。いい姉じゃないか……。

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

我に帰った雄二が慌てて頭を下げる。

「神谷亮です」

「……………土屋康太です」

「はじめまして。雄二さんに亮さんに康太くん」

こちらの自己紹介に笑顔で返してくれる玲さん。

（おい明久。姉貴がいるから俺たちを呼びたくなかったんだろ？）

（うん。まあ…………）

（こんだけ大人びているなら別にいいじゃんか）

（あはは…………。そ、そうでしょ？だから、もう気が済んだら帰った方がいいと思うよ）

（まあバスローブで外を歩くことさえ除けば、の話だけだな）

（え！？知ってるの！？）

（昨日外で会ったぜ）

(うう……。何てことだ……)

俺と明久の会話をよそに、挨拶は続く。次は秀吉みたいだ。

「私は木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなくー」

「ええ。男の子ですよね？秀吉くん、ようこそいらっしやいました」

「……………っつー!」

秀吉が驚いたように玲さんの顔を見上げる。

「わ、ワシを一目で男だとわかってくれたのは、主様だけじゃ……………!」

秀吉が凄く感動している。

「もちろんわかりますよ。だって、うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんてできるわけがありませんから」

ですよね〜。

「ですから、こちらの二人も男の子ですよね？」

「ですよ〜ーじゃないっ!！」

玲さん、島田と姫路は二人とも女の子です……。

「ちょ、ちょっと姉さん!？ 出会い頭になんて失礼なことを言うのさ! 三人ともきちんと女の子だからね!？」

「明久! ワシは男で合つとるぞ!？」

すると、玲さんがゆっくりと明久の方を向いた。

「……………女の子、ですか……………？ まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……………？」

何だ？ 家訓でもあるのか？

「あ、あの、姉さん。これには深い深い事情があつてー」

「……………そうですか。女の子でしたか。変な事を言つてごめんなさい」

「実は……って。あれ？」

何かを説明しようとする明久を無視して、姫路と島田に頭を下げる玲さん。

「どうかしましたか、アキくん？」

「あ、いや……。姉さん、怒ってないのかな、って思って」

「？あなたは何を言っているのです？どうして姉さんが怒る必要があるのですか？」

まったくだ。明久は何を言ってるんだらう？

「ところで、アキくん」

「ん？何？」

「お客様も大勢いらっしやるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者さんごっこは明日でもいいですよね？」

え？この人、自分の弟をどうする気なんだ？

「ね、姉さん何言ってるの！？まるで僕が日常的に実の姉とお医者さんごっこを嗜んでいるかのような物言いはやめてよ！僕は姉さんとそんなことをする気はサラサラないからね！？」

大丈夫だ明久。ここにいる皆はちゃんと分かってくれさ。

「あ、明久君……。お姉さんとお医者さんごっこって……」

「アキ……。血のつながった、実のお姉さんが相手って、法律違反なのよ……？」

……………この二人以外は。

「姉さん！お説教は後からいくらでも受けるから、さっきの台詞を訂正してよ！」

「何を慌てているのですかアキくん。それより、昨日アキくんに渡した姉さんのナース服はどこにあるか知りませんか？」

「このタイミングでそんなことを聞くなぁーっ！！」

なんて言うか……。凄い姉貴だな……。

「それとアキくん。姉さんが他人に頼んで渡した紙は見ましたか？」

「そついえば亮に何か渡されたけど……え！？『不純異性交遊の場合は減点150』！？多すぎるよ！まだ何もしてないのに！」

「……『まだ』？……200に変更します」

「ふぎゃあああつ！姉さんのバカあーっ！」

「……悪い、明久。さっきの言葉は訂正だ」

「うん……。ありがとう亮……。僕、生まれて初めて亮に癒された気がするよ……」

なんか俺の姉貴とはベクトルが違うが、同じくらい破天荒な気がする。

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方お二人のお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとは……友達です」

意味ありげな視線を明久に向ける島田。向こうは真意に気づいてないだろうけど。

「瑞希さんに美波さんね。はじめまして」

「ところで、姉さんは何をしに出掛けていたの？」

「お夕食の買い物に行ってきました」

そういえば玲さんは結構袋を提げていたけど、そういうことだったのか。

「あれ？でも、随分と量が多いね」

確かに、どう見ても二人分とは思えない。保存用か？

「いいえ。その量であっています」

本人もこう言ってるから、やっぱり冷蔵庫に入れておく為にまとめ買いをしたのかもしれない。

「折角皆さんがいらっしやっただことですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？大したおもてなしはできませんが」

それはありがたい。皆で食べるご飯はやっぱりおいしいし、楽しいからな。

「それじゃ、ありがたく行為に甘えさせてもらおうとするかな」

「そうだな。俺もそうさせてもらおう」

「……………御馳走になる」

「迷惑でなければワシも是非相伴させて頂きたい」

「ウチも御馳走になろうかな」

「じゃ、じゃあ、私も……………」

全員が首を縦に振る。今日は賑やかな夕食になりそうだ。

「それは良かったです。ではアキくん、お願いしますね」

「うん。了解」

明久が玲さんから材料が入った袋を受け取る。明久って料理作れたんだ……………。

「んじゃ、ちょっと早いが先に夕飯の支度から始めるか。明久、手伝うぞ」

「俺も手伝っぜ」

「……………協力する」

「あ、うん。ありがと三人とも」

「あのっ、それなら私もっ」

「「「「いや、女子は座ってていいから「「「「」

「は、はぁ……………。そうですか……………」

そんなこんなで、結局まずは夕飯を食べて、それから皆でテスト勉強をするという運びになった。

第三十九問その三・料理は慣れないうちからオリジナルの味を出そうとするよ、

「ねえ明久。何か丁度いいサイズの鍋はない？」

「へっへっ。実はそっちの棚の奥に、パエジエーラが入っているんだよね」

「パエジエーラって、パエリア専用の鉄鍋だっけ？」

「随分と珍しいものを持っているな。うちにはないぞ？」

「……………うちにもない」

もちろんうちにもないわ。

「かなり昔に、母さんが貰ってきたんだよ。それで折角だからってパエリアを作ってみたら結構美味しくてさ。それ以来、僕の好物の一つだよ」

「なるほどな」

「けど、スペイン料理とはね。アンタのお姉さんはてっきり日本食を御所望かと思っただけだよ」

「一応、姉さんはなんでもいって言うってたけど」

「……………この材料は、明らかにパエリア」

「だな。エビやアサリだけならペスカトーレとかも考えられたが、サフランがあるからな」

「そうだね。サフランを使う材料なんて、他に知らないし……あれ？ホールトマトなんか何に使うんだろ？」

明久の言う通り、ホールトマトの缶詰が入っていた。

「ピーマンとタマネギとニンニクを使ったトマトソースで作るパエリアもあるのよ」

「え？トマトソース？」

「（こくり）……………イタリアで言うソフリットを使ったトマトソース」

「へえ〜。そうなんだ。今まで僕が作った時は、一度もトマトソースなんて使ったことなかったよ」

「なんだ明久。お前、パエリアなんて面倒なもんを何度も作ったたのか？」

「うん。好物だからね。よく作ったよ」

あれ？それならおかしい点がある。

「何度も作っているのに、買ってきた材料が違った？それっておかしくない？」

「そう？たぶん姉さんがうつかりしたただけじゃないかな。いつもは買い出しも調理も僕の仕事だったし」

「まあ、そうかもしれないな」

「折角材料もあることだし、私がソフリットを作るわ」

「うん。それじゃ、お願いするね」

しかし、どうも納得がいかない。それならどうしてソフリットの材料をきちんと知っていたのかしら？

そんなことを思いながら、ピーマンとタマネギとニンジンとニンニクをみじん切りにする。

「明久。ソースパンってある？」

「あっちの棚にあるよ」

「ホント、色々あるのね……」

とりあえずオリーブオイルをしいたソースパンにニンニク以外の材

料を入れて炒める。

「ところで明久。さっきふと思ったんだが」

「ん？」

「お前、姉貴に本当の生活態度を隠してるだろ？」

「……よく分かったね」

「丸わかりだバカ」

エビを手にとって背わたを取る作業をしながら雄二が言う。

「……………バレると、説教？」

こちらはムール貝をタワシで洗っているムッツリーニの台詞。

「まあ怒られるのはいいんだけど、」

「怒られる以外にも何かあるの？」

ホールトマトを入れて水を足し、弱火で煮込みながら聞いてみる。

「うん。あまりにも生活態度が悪かったり、今度の期末試験である程度の点数を取れなかったりすると、姉さんがこっちに居座ることになっちゃうんだよ……」

「ある程度の点数って？」

「さっき姉さんが言ってたアレだよ。減点150とか200とかって」

「そう言えば言ってたな。さっきはスルーしたが、あれは何のことなんだ？」

「あの点数分、振り分け試験の時よりも今度の期末試験の成績が上がっていないとダメなんだよね……」

「そうか。だからあんなに勉強をやる気になっていたのか」

「よつやく合点がいったわ」

「……………納得」

「ってことは大体200点くらい点数を上乘せする必要があるらしい。」

「だから、余計なことを言わないで欲しいんだ。学校の成績とか、僕の本当の生活とか、……………こ、この前の美波とのアレとか……………」

「アレって、島田とのキスのこーいむぐっ」

明久が慌てて雄二の口を塞ぐ。雄二の声はよく通るから、玲さんに聞こえるかもしれない。

（だから、そういうのもマズいんだよっ！姉さんは不純異性交遊は完全アウトっていうお堅い人なんだから！）

そんな会話を聞きながらソースパンを見ると、だいぶ水気が少なくなってきた。

「なるほどな。まあ、お前の一人暮らしは俺にも都合がいいし、黙ってやるか」

「……………協力する」

「なら私は玲さんの前ではなるべく出ないようにするわ」

「ありがとう、三人とも」

ソフリットの方は水気もなくなり、美味しそうな匂いが漂ってきた。

「それじゃ、そろそろソフリットを入れるわね」

色が充分に出たサフランを取り除き、ニンニクを入れて香りを移し

た後で野菜を炒める。

「あのさ、雄二は家で毎日夕飯を作ってるの？」

「ああ、いや、毎日ってわけじゃない。一応、うちの母親も作るには作るんだが……」

「いいなあ。そついう母親」

「……放っておくと、ヤツは何を作るかわからんから……」

なぜか雄二は遠い目をしていた。なんだが、ザリガニとロブスターを間違えて作った料理を出されたみたいなのがする。

「それじゃ、そろそろお米を炊くよ？」

「明久、後はお願いできる？もう普通のパエリアと作り方は同じだから」

「うん。わかったよ」

「その間に、私たちはサラダとデザートを用意しましょ」

「そつだな。そつちは頼んだぞ明久」

「……………任せた」

明久にパエリアを任せ、私は余ったホールトマトを使ってサラダを作ることにした。

トマトを程よい大きさに切り分け、レタス等の野菜と一緒に皿に盛りつけていく。

そんな作業も終盤にさしかかった時、

「待った姉さん！どうしてお風呂の写真ばかりなの！？そのアルバムは何の写真を集めてるのさ！？」

突然明久が叫び声を上げた。

『ーそして、これが昨晚のアキくんのお風呂の写真です』

『……………（ゴクリ）』

「このバカ姉があーっ！！いつの間にそんな写真を！？さては着替えか！脱衣所に着替えを持ってきた時かっ！」

「明久。鍋から目を離しちゃダメ。吹きこぼれるじゃない」

「もうそんなことはどうでもいい！それよりもあのバカの頭をフライパンでかち割ってやることの方が大切なんだ！」

「料理をなめないで。いいからおとなしく鍋を見ててちょうだい」

「お願いレン！離してーっ！」

途中から雄二にも手伝ってもらい、とりあえず明久を抑えつけた。

「そんなこんなで時間が過ぎてー」

「皆、待たせたな。夕飯ができたぞ」

「ありがとうございます。お客様なのにアキくんのお手伝いまでして頂いて」

「いえ、気にしないで下さい。料理は嫌いじゃないですから」

複数のテーブルをくつつけ、その上に夕飯を置く。これは美味しそうだ。

「あ、ありがとうございます……………（ポッ）」

「お、美味しそうね……………（ポッ）」

「姫路さん、美波。どうして僕の顔を見て顔を赤らめるの？」

それはきつと、君の写真を見ているから。

「それにしても、アキくん。あなたはどうしてもそんなに落ち着きがないのですか。リビングにまであなたの大声が聞こえてきましたよ？」

「それは姉さんの行動が原因なんだからね!？」

ということとは、さっきのも聞こえていたんじゃない……。

「ほら。またそうやって大きな声を出して……。それに『レン』という名前と、女の子の声が聞こえてきましたが、どういことですか、アキくん」

ほらバレた。

「そ、それについては――」

「紹介が遅れて申し訳ありません。私、亮の半身である神谷レンです。よろしく願います、玲さん」

こうなつては仕方ないから、私も自己紹介をすることにした。

「こ、こちらこそよろしくお願ひします」

玲さんも最初は驚いていたみたいだけど、すぐに落ち着きを取り戻していた。

「ということは、亮くんは二重人格者なのですか？」

「ええ。その通りです」

こんなにも早く見抜かれたのは初めてだ。始めから隠す気は全くないんだけど。

「そうですね……。世界は広いんですね……」

そう言いながら玲さんは明久の前のパエリアをよけて、代わりに深皿を一つ置く。

「それでは皆さん、貝の殻はこのお皿に入れて下さい」

なんて麗しき家族愛なんだ。

「何それ！？僕の夕飯は貝の殻だけなの！？これってただの苛めだよね！？」

「んじゃ、お言葉に甘えさせていただきます」

「亮もそこは断つてよ！」

明久が即座にツツコミを入れてきた。

「姉さん……。もしかして、姉さんは僕のことを嫌いなのですか……？」

そんな明久の疑問に、玲さんは「心外です」と前置きしてから答えた。

「何を言っているのですかアキくん。姉さんがアキくんを嫌うわけがないでしょう？」

その割には扱いがちょっとアレみたいだけだな。

「寧ろ、その逆です」

「え？嫌いの逆ってことは」

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ……」

「はい。姉さんはアキくんのことを愛しています」

なかなか大胆な姉貴だな。皆の前で弟のことを『愛しています』なんて――

「――異性として」

……… 凄く大胆な姉貴だ………。

「最後の一言は冗談だよね！？それなら寧ろ嫌いになってくれた方が嬉しいんだけど!？」

「日本の諺にはこういうものがありますよね」

「何！？また余計な事を言っの!？」

「バカな子ほど可愛い、と」

「諦める明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」

「寧ろお前は世界で一番愛されるべき存在だ」

「待って！それは僕が世界で一番バカだって思われていることなの！？」

「う、ウチだってアキのことを世界で一番バカだと思っているわ！」

「わ、私だって！この世界で明久君以上にバカな子はいないと確信しています！」

「やめて！それ以上皆で僕のガラスのハートを傷つけないで！」

アホだ……。

「ま、そんなどうでもいいことは置いておくとして」

「ど、どうでもいいんだ……。結構僕の人生を左右しそうな内容の会話みたいだったんだけど……」

いや明久、姫路も島田もそういう意味で言ったんじゃないんだぜ？

「とにかく、冷めないうちに頂きましょう」

玲さんの言う通り、折角の料理が冷めてしまうのは勿体無い。

「」「」「頂きまーす！」「」「」

手を合わせて目の前の料理に取り掛かる。

「む。これはまた、美味しいもんじゃな」

「そうか。口に合ったようで何よりだ」

「そう言って貰えると作った甲斐があるよ」

「だな」

「……………（じっくり）」

秀吉はニコニコとパエリアを頬張っている。

そして、姫路と島田は秀吉とは逆に砂を嚙んだような顔をしている。

「あれ？二人ともパエリアは苦手だった？」

「う……。いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど……………」

「だからこそ、落ち込むと言いますか……………」

二人とも大変だな。

「……やっぱり、もっとたくさん料理を作って練習しないと……！
これに勝つ為にも、もっとオリジナルの味を出して……！」

姫路の呟きは聞かなかったことにしよう。

「とじろで、皆さん」

ここからが本題、と言わんばかりに玲さんが話を切り出す。どうしたんだろうか？

「うちの愚弟の学校生活はどんな感じでしょうか？例えば、成績や異性関係など」

なんだか後半がやけに強調されていた気がする。

「えっと、明久君はすごく頑張っていると思います。最近はや成績も伸びてきたみたいです」

「そ、そうね。たまにドキッとする時があるわ」

さすがに二人とも本人やその家族を前にして悪いことは言わないか。

「そうですか。それで、異性関係は？」

「え、えっと、それは、その、よくわかりません……。異性関係は」

「そ、そうね。ウチもあまり知らないわね……。異性関係は」

最後の言葉がやたらと強調されていたが、知らぬが仏ってやつだ
明久。

「異性関係、のう……」

秀吉が顎に手を当てて考えている。

さあ、どうする明久？

「秀吉くんは何かご存知でしょうか？」

「そうじゃな……。何か、となると」

「秀吉、あーん」

「んむ？あーん、じゃ」

明久のヤツ、秀吉に何か余計なことを言われる前に秀吉の口をふさぐまねにでたか！

そして玲さんと明久の攻防が続く。

「秀吉くん。それでー」

「はい秀吉。あーん」

「あーん、じゃ」

もぎゅもぎゅ

「秀吉くん、先ほどの話をー」

「秀吉、あーん」

「あーん、じゃ」

もぎゅもぎゅ

「秀吉くー」

「秀吉、あーん」

「あーん」

「ぎゅぎゅぎゅ」

おや？なんだか嫌な音が。

「ふぬあぁっ！か、関節が！？肘が逆を向いて次世代型の人体に！？」

「アキくん。邪魔をしないで下さい。酷いことをしますよ？」

「なってるよ！もう既に酷いことになってるよ！」

「ほら明久。痛い痛い飛んでけ〜」

「亮！お願いだから腕を引っ張らないで！痛みの前に腕が飛んでいっちゃうよ！」

「それで、どうなんですか秀吉くん？」

「むう。そうじゃな……」

のたうつ明久を放置して会話が進む。

「本人が何も言わんのならば、ワシが何かを言うわけにはいくまい
て」

何があつたかは言わないが、何かがあつたことは隠さない。まあ秀吉は事情を知らないから仕方ないか。

「あら、秘密ですか。それでは……今度アキくん自身に、ぼっきりと聞かせてもらつとしましょう」

「それが良いじゃろ」

え？それって良いことなのか？

「姉さん『ぼっきり』って何！？普通そこは『じっくり』とか『ゆっくり』だよー！？」

……………俗に言う『ゆっくりしていつてね！』ってやつだな。

「そう言えば、言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくても結構ですよ」

「え？そつなの？」

「はい。こちらで済ませておかないといけない仕事があつて、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうなのです」

玲さんも色々大変そうだな。

「アキくん、嬉しそうですね」

玲さんの言う通り、明久はなんだかとても嬉しそうな顔をしている。そんなに姉の呪縛は苦しいか……。

「うえ！？い、いや、そんなことはないよっ。折角帰ってきた姉さんがいないのは凄く残念だよ！」

「英語で言ってみてください」

「Happy」

「……………」

「あっ！痛っ！姉さっ……………！食事中にピンタは……………っ！」

今度、機会があつたら是非ともこの手を使ってみよう。

デザートに舌鼓を打ちながら、俺はこっそりそんなことを思った。

第三十九問その三・料理は慣れないうちからオリジナルの味を出そうとするよ、

ソフリットを作るときは、くれぐれもこれを鵜呑みにせず、某大先生の記事を参考にしたりしてください。

材料や調理方法が正しいとは限りませんので。

第三十九問その四・部屋のガサ入れはされるとキツイ

てきばきと後片付けを終えてリビングに集まる。いよいよ今日の集まりの本題だ。

「そろそろお勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕飯を早めに食べたせいか、まだ七時ぐらいだ。

「ならばワシも一緒に教えてもらおうとするかの」

「……………同じく」

是非この真面目に勉強する光景を鉄人に見せてやりたい。

「そうだね。テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強を始めようか！」

「皆さんでお勉強ですか。それなら良い物がありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきましたね」
玲さんはトタトタとリビングを出て行った。

「参考書というのなんですが、役に立つかもしれないので」

玲さんが持ってきた本がテーブルの上に置かれる。何だこれ？

【女子高生 魅惑の大胆写真集】

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがあーっ!!」

ちなみにその他にプリンターでA4サイズに印刷されたと思われる、制服を着た女子高生（どう見ても18歳以上）の写真が一枚あった。

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！こんなもんが参考になるかーっ！」

玲さんはどこまで弟を追い詰める気なんだろう。

「そ、それじゃあ、あくまでお勉強の参考書として……」

「そ、そうね。ウチもちよっと勉強しておこうかな……」

「姫路さんに美波！？無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ！？というかお願いだから見ないで！」

ついに明久の趣味が白日の下に！！

「アキくん。ベッドの下に置いてあった他の参考書も全て確認しましたが、あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで！いくら言い方を変えて取り繕ってくれてもそれが僕の趣味傾向だってことかバレちゃうんだから！」

明久め、とうとう自分で認めやがったか。

「ポニーテール、ですか……」

「大きなバスト、ね……」

姫路は島田の髪を、島田は姫路の胸をじっと見詰め合っている。な

るほどな。

「お主ら、勉強は良いのか？」

「そ、そうだね。秀吉の言う通りだよ！さあ勉強を始めるよ皆！」

ところで、何か引つかかるんだけど……。

「そ、そうですね。お勉強を始めましょうか。んしょ……っと」

「み、瑞希っ！どうして急に髪をまとめ始めるのよっ！？」

「べ、別に深い意味はありませんよ？ただ、お勉強の邪魔になるかと思っ」

「それならウチがやってあげるわ！お団子でいいわよねっ！」

「い、いえ。ポニーテールにしたいと」

「ダメっ！お団子なの！」

「美波ちゃん、意地悪です……」

……っと思いついた！

そして目的の物を探すべく、部屋を見回す。ーダメだ、見つからない。

「ムツツリーニ、亮。どうしたの？」

明久に言われてムツツリーニを見ると、ヤツも辺りを見回している。やはり考えは同じか。

「……………」
「明久」

「ん？」

「……………」
「あと1999冊は？」

「あと299枚は？」

「ええっ！？2000冊以上のエロ本や300枚以上の画用紙って話を本気にしてたの！？」

何！？嘘だったのか……………。

「……………」
「エロ本（画用紙）なんかに興味はない」

俺とムツツリーニは揃ってしょんぼりと肩を落とす。誠に残念だ……………。

「明久のエロ本やエロ写真は置いて、勉強するならさっさと始めようぜ」

画用紙がないのは残念だが、まあ仕方がない。

「お勉強なら、宜しければ私が見て差し上げましょうか？」

「え？お姉さんが、ですか？」

姫路の言う通りだ。本当に大丈夫なのか？

「はい。日本ではなくアメリカのボストンにある学校ではありませんが、大学の教育課程を昨年修了しました。多少はお力になれるかと」

「ぼ、ボストンの大学だと……！？それってまさか、世界に名高いハーバードー」

「よくご存知ですね。その通りです」

「……えええっ！？」「」「」

ハーバードだって！？それってむちゃくちゃ凄いじゃないか！

「なるほど、出廻らしか……」

「雄二。その言葉の真意を聞かせてもらえないかな」

いや、雄二がそう考えるのも無理はない。

現に俺もそう思ったし。

「そういうことなら、玲さんに色々教えてもらおうぜ」

「確かに本場の英語とか、こっちの教師には教えてもらえないことも知ってそうだな」

「……………頼もしい」

「わかりました。それでは、まずは英語あたりから始めましょうか」

「……………宜しくお願いします」

この後は十時くらいまで玲さんの講義を聞いて、その日は解散となった。

第四十問その一・常識とは、他人には中々教えられないもの

以下の() () に正しい語句を記入しなさい。

『1 a t mのa t mという単位は() ()と読み、() ()の() ()を表す』

姫路瑞希の答え

『1 a t mのa t mという単位は(アトム)と読み、(気圧)の(高さ)を表す』

教師のコメント

正解です。ちなみに1 a t mは別名1気圧とも呼ばれ、約1 0 1 3 Paです。

土屋康太の答え

『1 a t mのa t mという単位は(アタシの、テクニックを、見せてあげるよ)と読み、(女の子)の(大胆さ)を表す』

教師のコメント

何気にイニシャルとして成り立っているのが腹立たしいです。

吉井明久の答え

『1 a t mのa t mという単位は(アトム)と読み、(鉄腕)の(ロボット)を表す』

教師のコメント

発想は面白いですが、最初以外は全て不正解です。

神谷亮の答え

『1 a t mの a t mという単位は（アテム）と読み、（もう一人）の（自分）を表す』

教師のコメント

君の解答は何故か予想できました。

「おい、ムッツリーニ、姫路さん、美波、亮ー！」

放課後。教室に残っていると、明久が声をかけてきた。

「はい。なんでしょうか明久君」

「何か用？」

「……………どこかに行くとか？」

「もしかしてまた勉強会か？」

勉強道具をしまい、皆で明久の所に行く。

「うん。今日は雄二の家でテスト勉強をしようと思うんだけど、良かったらー」

勉強会には俺を含め、皆が二つ返事で参加することになった。

「んじゃ、入ってくれ」

学校から歩くこと15分程度。住宅街の一角にある雄二の家に到着した。

「「「「お邪魔します」」」」

雄二の家は二階建ての一軒家なので、中も結構広いんだろう。

「なあ雄二。家には誰もいないのか？」

「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校の同級生たちと温泉旅行らしい。だから何の気兼ねせずゆっくりしてくれ」

「そう言えば、前に来た時も雄二の家族は留守だったよね」

「ああ。その方が都合がいいからな。色々」

なぜか晴れやかな表情の雄二がリビングのドアを開ける。すると、

「……………！！（ぷちぷちぷちぷち）」

居間には一心不乱にプチプチを潰している女の人の姿があった。

「……………」

ーパタン

何も言わずに戸を閉める雄二。

「ゆ、雄二……？今の、山ほどあるプチプチを潰していた人ってー」

「……赤の他人だ」

「さ、坂本の母親なの……？」

「なんか、随分凄い量を潰していたんだけど……」

「う、うむ。あれほどの量。費やした時間はおそらく一時間や二時間ではきくまい」

「………凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をしているのでしょうか？」

今の光景は、いったい何なんだろう……？

「恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。なにせ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

おや、これは珍しい。雄二がここまで苦しい嘘をつくなんて。

すると部屋の中から、雄二いわく赤の他人さんの声が聞こえてきた。

『あら……？もうこんな時間。さっき雄二を送り出したと思ったのに』

まさか八時間近くもあの作業を続けていたのか？

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

しかもまだ続けるつもりなのか！？

「おふくろっ！何やってんだ！？」

耐え切れず、遂に雄二が踏み込んだ。

「あら雄二。おかえりなさい」

「おかえりじゃねえ！なんで家にいるんだ！？今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月って、パッと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似ているんだ！？数字の形どころか文字数すら合っていないだろ！？」

「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「サラッと図々しい台詞をぬかすな！あんたの黄金期は十年以上前に終わっているはずだ！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「だから人の話を聞けえっ！」

なんとという怒濤の応酬だ。なんて言ったらいいか分かんないが、とにかくすごい。

「皆さんいらっしやい。うちの雄二がいつもお世話になってます。私はこの子の母親の雪之と言います」

雪之さんは優しげな雰囲気であれに挨拶する。というか、一つ驚くところがある。

「さ、坂本の母親って……若過ぎない！？」

「むう……。とても子を産んでおるとは思えん……」

「……………美人」

「まるでお姉さんみたいですわね」

「大人だなあ……………」

うちの姉貴もこんな感じだったらしいのに。

「み、皆、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ……………」

「う、うん。それじゃ、お邪魔します」

頭を下げて、とりあえず雄二の部屋に向かうことにする。

『皆さん、後でお茶を持っていきますね』

ああ、なんて良い母親なんだ……………。ちょっと変わってるみたいだけど。

「ここが俺の部屋だ。入ってくれ」

二階が上がって雄二の部屋に入ってみると、中は意外と綺麗に片付

けられていて結構広かった。

「そういや、久しぶりに雄二の部屋に来たよ」

「そうだな」

「ワシもじゃ」

「……………同じく」

最後に来たのは……………去年の秋くらいだった気がする。その時は明久とムツツリー二と秀吉と一緒にだったな。

「え？ アンタたちはよく来てるんじゃないの？」

「大抵は僕が亮の家に集まっていたからね。雄二の家だけじゃなくてムツツリー二や秀吉の家でもあまり遊んだことはないんだよ」

「場所といい、広さといい、二人の家は都合がいいからな」

「家族用のマンションで一人暮らしですもんね。贅沢です」

「明久の場合は食生活を除けば、の話だけど」

そして俺はもう一人暮らしじゃないしな。

「それはそうと……。やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。参ったな……」

俺たちは全員で七人。座って雑談するならいざ知らず、道具を広げて勉強するとなるとちょっと広さが足りない。

「居間じゃダメなのか？」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

雄二が心底嫌そうな顔をする。確かに目の前であんな面白いやり取りをされたら、勉強に集中できないだろう。

「もうっ。ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いして」

「そうは言うがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんなことが言えるんだ。四六時中一緒にいると、ツッコミどころが多過ぎてー」

P r r r ! P r r r !

雄二が反論していると、突然部屋に電子音が鳴り響いた。誰かの携

帯の着信音か？

「あ、ウチの携帯ね。ちょっとゴメン」

島田がスカートのポケットから携帯電話を取り出して耳に当てる。
急用でもできたのだろうか。

「もしもし？ あ、Mutterーお母さん。どうしたの？ ……うん。
……うん。そう。わかった」

一分もしないで通話を終え、島田は携帯電話をポケットにしまった。

「美波、何かあったの？」

「うん……。今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど……。ちょっと急な仕事が入って家にいられなくなったみたい」

「ってことは、葉月ちゃんが家に一人ってことか？」

「そうね。だから、悪いけど今日はウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」

残念だけど仕方がない。まだ小学生の女の子を家に一人にしておく

のは可哀想だ。

島田が鞆を手にして部屋を出ようとすると、

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

雄二が島田を引き留めた。

「え？ウチの家？」

「確かにそれが良いな」

「島田の妹とは全員が顔見知りじゃし、丁度雄二の部屋は手狭だったところじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「……………なんなら、夕飯を作る」

雄二を見てみると、会場を変えたくてしょうがないって顔をしている。

「美波さえ良かったら、どうかな？」

「う……………。そ、そうね……………」

おや？イマイチ乗り気じゃないみたいだ。何かあるのか？

「じゃ、じゃあ、ウチの家にしましょうか……」

少し考えた後、島田から承認が下りる。これで一安心だ。

「ただし！絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

島田は明久の目を見てそう言った。悩める乙女ってやつだな。

「よしっ！そうと決まれば早速移動だ！チビツ子も一人じゃ寂しいだろうからな！」

雄二が背中を押さんばかりの勢いで俺たちを玄関においやる。よほどここで勉強したくないのだろう。

皆が靴を履いている間、雄二は居間に入って行って雪之さんに声をかけていた。

『おぶくろ。ちょっと出掛けてくる。夕飯は昨日の残りが冷蔵庫に

あるから、それを温めて食べてくれ』

『あら、もう行っちゃうの？お茶を用意しているところなのに』

『悪い。ちょっと事情が変わったんだ。……ところで、その麺つゆのボトルは何に使うんだ？』

『麺つゆ？ あらら……。てっきり、アイスコーヒーだとばかり……』

『おふくろ……。色や匂いで気づいてくれとは言わないから、せめてラベルで気づいてくれ……』

なぜだろう。雄二は家にいる方が学校にいる時より疲れて見える気がする。

第四十問その二・何事も一人でやるより皆でやった方が楽しい

「ただいまー。葉月、いる？」

玄関の扉を開けて島田が呼びかける。すると、

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。お、お帰りなさいですっ」

廊下に面した部屋から、葉月ちゃんが勢いよく飛び出してきた。

「？ 葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

どつちら今葉月ちゃんが飛び出してきた部屋は島田の部屋らしい。

「あ、あう……。実はその……。独りで寂しかったから、お姉ちゃんの部屋に行って……」

言い難そうにしながらパーカーの大きなポケットに何かを隠す葉月ちゃん。

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？ そのくらい、お姉ち

「やんは別に怒らないのに」

「そ、そうですね？お姉ちゃん、ありがとうございます」

よしよし、と葉月ちゃんの頭を撫でている島田。

「葉月ちゃん、こんにちは」

「あつ！ バカなお兄ちゃんっ！」

明久が姿を見せるなり、ドンツと勢いよく腰にしがみつく。そしてそのまま葉月ちゃんは額をぐりぐりと明久のお腹に当てていた。おーおー。流石は島田の妹だ。……おでこが的確に明久の鳩尾に食い込んでいる。

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わあつ。綺麗なお姉ちゃんたちまで。今日はお客さんがいっぱいですっ」

俺たちを見ると、葉月ちゃんは全身で喜びを表現していた。本当に天真爛漫な子だ。

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ

「？」

「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃんたち、こっちにどうぞっ」

葉月ちゃんが明久の手を引いて歩いていくのでその後ろをついて行く。

「ちょ、ちよつとアキつつ!?!」

「ほえ？」

声が出た方を見ると、島田が明久の脳天・鼻先・下顎の三ヶ所に素早い一撃を叩き込み、バランスを崩した明久の両手首の関節を一瞬で外していた。

「何見てるのよ!?!?!」

多分地獄だ。

「いい？ この部屋は絶つつつ対に、入ったらダメだからねっ！」

島田は大急ぎで開いていた扉を閉めると、外された両手首をムツツ

リーニにはめてもらっている明久に指を突きつけた。まあ大丈夫だろ。その扉が文字通り地獄の扉だってことは、明久もよくわかっただろうから。

「やれやれ。お前らは何をやっているんだか……。チビツ子、元気だったか？」

「はいですつ。おつきいお兄ちゃん」

「そうかそうか。それは良かった」

「それで葉月ちゃん、リビングはこっちでいいのか？」

「はいですつ。こっちですつ、蜘蛛のお兄ちゃん」

……へ？蜘蛛？

「あの、葉月ちゃん……。何で俺は蜘蛛なの？」

「いつも蜘蛛みたいに天井や壁に張り付いているってお姉ちゃんが言ってたです」

「島田あ~~~~~」

なんて酷い言い方をしてくれたんだ……。

「ゴ、ゴメン神谷。他に言い方がなくて……」

せめて忍者と言って欲しい。

「とりあえず適当に座ってもらえる？今テーブルを持ってくるから」

俺たちをリビングに通すと、島田が勉強道具を広げる為のテーブルを取りに行こうとする。

「？ お姉ちゃん、テーブルなんて何するんです？ トランプですか？」

それを見て、葉月ちゃんが首を傾げていた。そういえば葉月ちゃんには何も話してなかったな。

「葉月。今日はお姉ちゃんたちね、うちでテストのお勉強をするの」

島田がそう言っていると、葉月ちゃんは少し寂しげに目を伏せた。

「あう……。テストのお勉強ですか……。それじゃあ、葉月は自分のお部屋でおとなしくしてるです……」

察しが良いと言っか、気が回ると言っか。葉月ちゃんは俺たちが何かを言う前に、勉強の邪魔になるまいと部屋に行こうとした。

「待つて葉月ちゃん。良かったら、僕らと一緒に勉強しよっか？学校の宿題とか、予習とかはないかな？」

「そうだな。一人だけ寂しい思いをさせるわけにはいかないし」

「えっ？ 葉月も一緒にお勉強していいですかっ？」

パツと表情が輝く。

「勿論だよ。ね？」

「ああ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないからな」

「雄二。それは僕が小学校五年生レベルだと言っているのかな？」

「葉月ちゃん。一緒にお勉強しましょうね」

「ワシはあまり教えてやれることはないかもしれんが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」

「……………保健体育なら教えてあげられる」

ムツツリーニ。お前のセリフはギリギリ（でアウト）だ。

「葉月、一緒にお勉強したいですっ」

「おう。それなら勉強道具を持ってくるといい」

「はいですっ」

トトトツと軽い足音を立ててリビングを出て行く葉月ちゃん。よっぽど明久と一緒にいられるのが嬉しいんだろう。

「さてと。そんじゃ、テーブルを持ってくるんだろ？手伝うぞ島田」

「あ、大丈夫よ。ウチ一人で」

「そうか。まあ、誰かの写真でも飾ってあるのなら、下手に歩き回られたくないだろうから無理に手伝うとは言わないがな」

「ななな何言ってるのよ坂本！？あんたまさか、さっき部屋の中が見えてたの!？」

「いや、ジョークのつもりだったんだが……」

「島田も存外乙女じゃな」

「……………」毎度御贔屓に、どうも」「

島田の部屋の秘密はとりあえず置いといて、

「ところで、夕飯はどうするんだ？」

「……………」何か作る？」

「俺は別にそれでもいいけど」

「僕もそれでいいよ」

現在時刻は午後五時。何かを作るんならそろそろ買い物に行った方がいい。

「今日はピザでも取りましょ。作る時間が勿体無いし」

「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作っていちゃダメです」

おや？この二人にしては意外な反応だ。

「なんじゃ。ワシはてっきり島田が手料理を振る舞うのかと思っておったのじゃが」

「昨夜、プライドを打ち砕かれたからちょっと、ね……」

「なるほどのう」

「ほら、いいから皆適当に座ってて。今テーブル持ってくるから」

島田が一旦リビングを退室すると、入れ替わって葉月ちゃんが両手に勉強道具を抱えて戻ってくる。

「お待たせしましたですっ」

「葉月ちゃん、やる気いっぱいだな」

「はいですっ。あ、バカなお兄ちゃん、ここへどうぞです」

葉月ちゃんは勉強道具をテーブルに置くと、カーペットの上にクッションを置いた。どうやら明久の席はあそこのようだ。

「ありがとうございます、葉月ちゃん」

「いえいえですっ」

明久がクッションの上に座ると、

「葉月の席はここですっ」

明久の膝の上に葉月ちゃんに乗った。なるほど。

「お待たせ。このテーブルをそっちにーって、コラ葉月っ。何してるのっ」

「えへへー。葉月はここで勉強するです」

「ダメ。アキのお勉強の邪魔になっちゅうでしょ？」

明久にもそうやって口頭で接すると、バカな明久でも気づくかもしれないのに。

「美波。僕なら別に大丈夫だよ。葉月ちゃんなら小柄だし」

「バカなお兄ちゃん、優しいですっ」

明久曰く今回のメインは暗記科目の世界史らしいから、葉月ちゃんを乗せても問題はないそうだ。

「それならいいけど……アキ。変な気は持ってないわよね？」

「明久君。万が一変なことをしたら、大変なことになりますからね？」

「イエス、ママ。毛ほども下心はございません」

そうやって準備を整え、俺たちは葉月ちゃんを交えてテスト勉強をすることになった。

二時間ほど勉強してからピザを堪能し、また勉強をしていると、

「ん？もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

いつの間にか、時計は九時半を指していた。

「なんじゃ。あつと言う間じゃったな」

「あゝ疲れた〜……」

「……………集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

それにしても疲れた。

「（レン、後はよろしく）」

『（はいはい）』

「あとはまた今度にするとして、今日はもう帰るっぜ」

「そうね。美波、今日はありがとう」

「あ、ううん。こっちこそ色々ありがとう。ほら葉月、お礼を言いなさー葉月？」

「ZZZZ……………」

「あらあら。葉月ちゃんったら、疲れちゃったみたいね」

葉月ちゃんはいつの間にか明久の膝の上で眠っていた。

「もう、葉月ってば……。アキ、悪いけどこっちに寝かしてもらえ
る?」

「あ、うん。そうしたいんだけど……」

どうやら葉月ちゃんは明久のシャツを握りしめたまま寝ているらしく、
明久が苦笑いを浮かべていた。

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ?」

美波が葉月ちゃんの肩を叩く。

「んう……」

すると葉月ちゃんは少しだけ目を開けて、

「帰っちゃ、嫌です……」

そう言って更に強くシャツを握りしめた。

「葉月。あんまり我が儘言つと、お姉ちゃん怒るからね」

美波の口調が少しだけ強くなる。どうやら怒るときはちゃんと怒るようになっているみたい。

「…………お姉ちゃんには、わからないです……………」

「え？ 何が？」

「…………お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです……………。でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです……………」

「……………」

寝惚けているからこそ聞けた、葉月ちゃんの本音に思わず私たちは顔を見合わせる。かなり明久を慕っているみたいね。

「あのさ、美波。良かったら、僕はもう少しここで勉強していてもいいかな？」

「え？」

「だな。今のチビツ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」

「そうじゃな。明久よ、モテる男は辛いのが」

「……………人気者」

「頑張りなさいよ、明久」

とりあえずからかってみるけど、本人も悪い気はしないみたい。

「そ、それじゃあ、悪いけど、もう少し葉月に付き合ってもらえる？」

「うん」

「あ、あのっ、それなら私も…………っ!」

「え？ 姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間に出歩いや危ないからね。雄二にでも送ってもらって早く帰らないと」

「でも、心配なんです。その、イロイロと…………」

「心配なのはわかるけど」

「いいえっ。明久君は私が何を心配しているのか全然わかってませんっ」

「?????」

確かに瑞希の言う通りだろうけど、明久の言うことももっともだから、私には何も言えない。

「ところで、レンはどうするんだ？」

「雄二と一緒に帰るわ。家も近いし」

「それで、俺が姫路とレンを送るなら、ムッツリーニは秀吉を送るってことでいいか？」

「……………引き受けた」

「ワシはいまいち釈然とせんが、致し方あるまい……………」

「あの、やっぱり私も……………っ！」

それでも尚、食い下がる瑞希。まあ気持ちは分かるんだけど……………。

「いくら言っても、ダメなものはダメだからね姫路さん」

「でもでもっ」

「でもも何もないよ。最近は何もない人も多いんだからね？こついつたことはきちんとしないと」

「諦める姫路。こつなると明久は考えを曲げないぞ」

「……………うう……。そんなぁ……………」

まあ状況が状況だし、仕方ないわね。

「それじゃ、島田。今日はありがとうな」

「大勢で押し掛けてすまなかったのう」

「……………ありがとう」

「美波ちゃん、ありがとうございました……………」

「ありがとう、美波。また明日ね」

どこか納得いかない瑞希も含め、皆でお礼を言って玄関に向かう。

「じゃ、また明日。皆」

葉月ちゃんがまだ寝ているので明久は座ったままで挨拶をして、

「待って、外まで送るわ」

美波は立ち上がって私たちについてきてくれた。

第四十問その三・いつか、雨が上がったら

「あ、あのっ。そう言えば私、美波ちゃんのお家に忘れ物を……っ
「！」

「していないから大丈夫だ。きちんと島田の家を出る時に俺が確認してきた」

「あう……。そうじゃなくて、えっと……。じ、実は私、寄って帰るところが」

「もう遅いし、明日にしたら？」

「はう……。そ、そのっ、美波ちゃんにお話ししなくちゃいけないことが」

「……いい加減にしろ、姫路。このままだと時間ばかりがかかるだろうが」

「だ、だって……」

「だって、じゃないでしょ。さつきから聞こえている振動音、アンタの携帯でしょ？ 両親が二日連続で帰りが遅い娘を心配してるんじゃない？」

「め、メールはしておきましたからっ。だからお願いです坂本君、レンさん。行かせて下さいっ」

「まあ気持ちはわからんでもないんだが……」

「行かせてあげたいのは山々なんだけどね……」

そんな話をしていると、

「三人とも、何の話をしているの？」

「きゃっ！？ あ、明久君！？」

「あら、明久。早かったのね」

「うん。あの後少ししたら葉月ちゃんが起きてくれたからね」

明久がこっちにやって来た。

「それで、何の話をしてたの？」

「さあな。なんだろうな、姫路」

「え、えっと……」

雄二の言葉に対し、瑞希の目が泳ぐ。ま、おいそれと話せる内容じゃないしね。

「それより、明久君は美波ちゃんと二人っきりで、どんなお話をしていたんですか？」

「えっ!？」

「な、何かあったんですか？」

「え、えっと、それは……」

明久がしどろもどろになっている。まさか明久も何か話し辛いことがあるの？

「もしかして……、好きな人の話とか……ですか？」

「うぐっ」

どつちら☆星みたい。

「お話しして、もらえませんか……?」

「ううう……」

明久が何か言いにくいことがある、という顔をしている。

「明久君……」

「ごめん……。言えないんだ、姫路さん……」

「そう、ですか……」

すると瑞希は何かを考え込み、思い切ったように顔を上げた。

「明久君っ！」

「は、はいっ」

「美波ちゃんの気持ち、私にもよくわかりますっ！」

「なんだって!?!」

いやいや、何でそんな驚き方をするのよ……。

「でも、私の気持ちも聞いてもらいたいです！」

「そ、そんな！急にそんなことを言われても困るよっ！」

「困ると思います！でも、真剣に考えて欲しいんですっ！」

「し、真剣に……」

何か、明久がバカなことを考えている気がするわ。

「おい姫路。お前の考え過ぎだ。明らかにコイツはバカなことを考えている顔をしているぞ」

「え？」

「ニホンザルならまだ紹介できるよ……いや、違うな。チンパンジ―はタレント業だから一緒になると大変かも、と言うべきか……」

「……明久君……。私は必死に勇気を出したのに、どうして動物のお話を……？」

「考えるだけ無駄でしょ。ほら、起きなさい明久っ（ビシッ）」

というか、美波とどんな話してたの？

「ごめん、三人とも。何の話をしてたっけ？」

「なんでもないから気にするな。それで姫路、その交差点をどこちに行くんだ？」

「あ、はい。右です」

「そうになると、明久と同じ方向ね」

「そつか。二人は駅前の方だもんね」

「ああ。そういうわけだから、姫路を送るのはお前に任せる。暗い夜道で二人きりだからって襲いかかるなよ？」

「了解。なんとか我慢するよ」

「いや、その返事はどうかと思うが……」

「わ、私も我慢しますっ」

「瑞希も襲いかかる気があったの!?!」

何なのかしら、この二人は……。

「まあいいか……。お前らの天然っぷりにツツコミを入れていたら時間がいくらあっても足りないしな……」

「ええ。確かにね……」

「「?????」」

「それじゃあ、また明日な。お二人さん」

「うん。また明日」

「じゃあね〜」

「二人とも、ありがとうございました」

手を振って交差点で二人と別れ、雄二と二人で帰り道を歩く。

いつの間にか、虫の鳴き声がそこから中から聞こえてきた。

「そっぴゃレン」

「何？」

「最近体を鍛え始めたんだってか？」

「……どっからそんな情報を仕入れてきたのよ……」

「心配するな。風の噂だ」

正確には体の使い方なんだけど。

あの不良たちに絡まれた日は、筋力が下がったんじゃない、ただ単に私が体を上手く扱えなかっただけだった。

もう二度とあの日のようなことがないように、私は最近軽いトレーニングを始め出した。

「もしかして、何かあったのか？」

「ええ。……色々だね」

本当に、あの日は色々あったからね。

「……………レン、まさかお前——」

「言っとくけど、アンタとは全然違う状況よ。アンタは他人を守るために拳を振るい、私は自分の感情に吞まれて拳を振るった。到底同じなんかじゃないでしょ？」

「俺は自分の為にしか拳を振るったことはないぞ」

「はいはい。そういうことにしといてあげるわ」

「ぐっ……………」

雄二が悔しげな表情を浮かべている。

「それじゃ、私はこっちだから。送ってくれてありがとうね」

「おう。また明日な」

「ええ。また明日」

雄二と分かれ、私は近くのマンションに入った。

エレベーターで自分の部屋がある階まで上がり、鍵を開けて部屋の中に入る。

「ただいま」

「あ、お帰りレンちゃん」

中では姉さんが何故か巫女服を着ていた。

「ええつと……何で巫女服？」

「いやあ、着替えを全部洗濯に出しちゃったから」

というか、何で巫女服を持っているのよ……。

第四十一問その一・ダイニングメッセージは失敗すると目も当てられない(前書

皆様のおかげで、この小説がついにPV50万を突破しました!!

亮「読者の皆様、本当にありがとうございます」

レン「これからも『俺と私と召喚獣』をよろしくお願いします」

第四十一問その一・ダイニングメッセージは失敗すると目も当てられない

こちらでは私、吉井玲が学校のテストとは異なる形式の問題を出していきたいと思います。正解が一つに限られる画一的なものではなく、もっと自由に幅広い解答が可能な出題形式です。決して個人的な調査を目的としているわけではありませんが、質問には正直に答えして下さい。

問 あなたの方までの異性との付き合いや経験について、英語で答えて下さい。

姫路瑞希の答え

『I have no associated with a male.』

吉井玲のコメント

瑞希さんは今までに男性とお付き合いをしたことはないのですかね？ それは大変結構なことだと思います。学生の本分は勉強ですからね。

尚、異性と付き合い方という意味で用いる場合の“associated”は主に否定的な内容を伴います。間違いではありませんが、“romantic overture (男女交際)”等の単語を用いると更に良いかと思えます。

坂本雄二の答え

『I was kissed while sleeping.』

神谷亮の答え

『I was kissed while closing my eyes.』

吉井玲のコメント

英文としては正解ですが、内容が少々気になります。寝ている間や目を閉じている間に接吻するとは、最近の日本の高校生は随分と進んでいるんですね。我が家の愚弟がそのような真似をしていないのか、あの子の解答がとても気になります。

吉井明久の答え

『英作文ができませんでした』

吉井玲のコメント

.....。

翌朝。

「おはよ〜.....」

「亮くん、すごく眠そうだけど大丈夫？」

「まあ、なんとか……」

あの後ずっと寝ずに勉強していて、気づいたら朝日が昇っていた。

とりあえず、眠気を覚ますか……。

「姉貴。このコップのジュース貰うぜ」

「亮くん！？なんかそれ紫色でポコポコ泡立ってるし、絶対ジュースじゃないよ!？」

姉貴の言葉を聞き流しながら、手にある飲み物を口にする。

その時、ボンツという音が鳴った気がする。

「えーっと、亮くん大丈夫？」

「何言ってるんだ姉貴？ただだかジュースでどうにかなるわけー」

「横に『調合失敗作』っていうラベルが貼ってあるし、そもそもそれはコップじゃなくてビーカーだよ？」

.....。

「.....ま、まあ、大丈夫だろ」

特に異常は見られなかったので、俺は学校に行くことにした。

「姫路さん、昨日は大丈夫だった？」

昼休み。俺たちは皆で卓袱台をくつつけて弁当を食べていた。

「それが.....凄く怒られてしまいました.....」

姫路がしゅんと俯く。まあ、そりゃそうだろう。

「おかげで週末までの間学校以外は外出禁止にされてしまいました

……」

「あらら。そりゃまた可哀想に」

やっぱり女の子って大変なんだな。

「ま、それは仕方ないんじゃないのか？」

「まったく、電話くらい出てやれば姫路の親だって安心しただろうに」

「そうですね……。反省してます……」

「なんじゃ。明久はともかく、雄二と姫路はあの後すぐに帰ったのではないのか？」

「僕が帰るときになってもまだ二人とも美波の家の近くにいたよね？」

「まあな」

「帰るには帰ったんだが、姫路が色々と駄々をこねてくれてな」

「す、すいません……」

肩身が狭そうに身を縮める姫路。

「でも、雄二は大丈夫だったの？」

「ん？ 俺の親は何も言わないから大丈夫だぞ？」

「いや、そうじゃなくてさ」

「なんだよ」

「二日連続で女の子め夜遅くまで出かけている上に、昨日は姫路さんやレンと夜道を一緒にいたんでしょ？ 霧島さんは怒らないの？」

「……………」

「うわぁ。『ここまで』やってもうた』って表現が似合う表情は見たことがない。」

「ま、まあ、大丈夫だろ。バレなければなんの問題も」

「……………雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」

あ。霧島さん登場。

「まあ待て翔子。お前は勘違いをしている。お前の考えているようなことはなにも起きていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れは無いと」

その言葉に、島田が少し俯く。

「なら、ウチはやめておくわ。瑞希がいないときに抜けがけするわけにはいかないしね……」

島田の表情に哀愁が漂っている。そう、まるで片思い中の相手に、自分が異性として好意を寄せているのが人間でなく、オンラインウータンやチンパンジーと誤解されている、そんな哀愁を。

「じゃが、いくら一人暮らしとは言え、平日だけでなく休日まで亮の家に押しかけるのもどうかと思うのじゃが……」

「確かにそうだよな。どうしよう……」

今はもう一人暮らしじゃないけど。

「ごめんなさい。私が昨日我が儘を言ったばかりに……」
「ああいや、姫路さんは全然悪くないよ。自分の勉強を置いといて僕らに教えてくれてるんだから、感謝してるくらいなのに」

「……吉井」

「うわっ!」

不意に背中から声をかけられ、明久が飛び上がった。誰だ？

「き、霧島さんか。びっくりした……。どうかしたの？」

「……勉強に困ってる？」

「あ、うん。そうなんだよ」

霧島さんのシャツについている赤い液体には目を向けないようにする。アレはきつと食事の時にこぼしたトマトジュースか、もしくはタバスコだろう。

「……それなら、私も協力する」

「え？ 協力って？」

「……週末に、皆で私の家に泊まりに来るといい」

つまり、学年一の頭脳を誇る霧島さんに教わって夜遅くまで勉強できるとか。これは凄くありがたい。

「いいの、霧島さんっ？」

「（こくり）……吉井には、いつかお礼をしたいと思っていた」

「皆で、ということとはワシからも良いのか?。」

「……勿論」

「んじゃ、俺も参加させてもらおうよ」

「週末ってことならウチも行けそうだし、お邪魔しちやおうかな。瑞希はどう?。」

「た、多分大丈夫です。ダメでも、なんとか両親を説得しますっ!」

「………参加する」

俺や秀吉に続いて島田、姫路、ムッツリーニも参加することになった。これは週末が楽しみだ。

「ところで、雄二は参加できるのか?。」

多分大丈夫だろうけど、この場にはいないからよく分からない。

そんな俺の疑問に、霧島さんが答えてくれた。

「………大丈夫」

「そうなのか？」

「……その頃には、きっと退院してる」

「そうか。それは良かった」

皆でにこやかに頷き合う。

とりあえず、全員が参加できるよつで何よりだ。……
……退院？

第四十一問その二・コスプレが制服なのか私服なのか分からない人ってたくさん

（明久サイド）

結局週末までの放課後は、僕と秀吉とムッツリーニがレンに勉強を教えることになった。

そして今は、

「何で急に雨が降ってくるのさ!?!」

「いいから、さっさと行くわよ!?!」

土砂降りの中をレンの家まで走っていた。

もちろん誰も傘を持ってきてない。

「天気予報で今日は一日中晴れるとやっておったのじゃが……」

「……明らかに外れている」

くっ……。こんな事なら折りたたみ傘を持ってくるんだっ！

「皆、じつちよ」

レンが入っていったマンションに、僕たちも続いて入っていく。

「ここが私の部屋よ」

レンが鍵を開けようとして、一瞬手を泊める。

「どっしたの？」

「……とりあえず、中に何があっても驚かないでね」

別に驚くことはないと思うんだけど……。

そして中に案内され、そのままリビングに向かう。すると、

「……………！！（プルプルプルプル）」

棚の前で必死になって背伸びをしている、Ｔシャツを着た小さな女の子がいた。

「えっと……何してるの、姉さん」

「「姉さん!?!」」

若ーいや、幼っ!!

身長からして、葉月ちゃんより少し年上の子だと思ったのに。

「それで、背伸びなんかしてどうしたの?」

「コップが取れないんだよ」

「はいはい……」

棚のコップを取っているレンを見ると、どう見てもレンが姉に見えるてしまう。

「ところで、後ろの方たちはお友達？」

「まあ、そんな感じ」

「皆さんはじめまして。神谷 美希^{みき}です。いつも亮くんやレンちゃんがお世話になってます」

そう言い美希さんは僕らにお辞儀をする。

「それはそうと姉さん、皆の着替えってある？」

「そこにあるよ」

美希さんが指差した方向には、服が上下セットで二着畳んであった。

「皆はそれに着替えておいて。私は部屋の着替えにするから」

「うん。ありがとう」

こうして僕とムツツリーニは秀吉やレンと分かれて着替えることにした。

「レンサイド」

明久たちと分かれて自分の部屋に入った私は、とりあえず着替えが入っているクローゼットを開けた。

「……………何、コレ……………？」

姉さん、いくらなんでもこれはないでしょ……………。

「明久サイド」

「レンっいたら遅いなあ」

あれから二十分。一向にレンが戻ってこない。何かあったのだろうか？

すると、

「ね、姉さん……………なんでごうごうのしかないの？」

廊下の陰からレンの声が聞こえてきた。

「レン、どうかしたの？」

「え……………？」

皆で声がした方に向かってみると、何故かレンが脇の部分がない巫女服に着替えていた。

真っ赤な顔でモジモジしながら。

「ちよっ……！いきなり来ないでよ！まだ心の準備が出来てないんだから……っ！」

「ええっ！？レンってそんなに羞恥心強かったっけ！？」

「私だって分かんないわよ！気づいたらこうなってたんだから……」

それにしても、絶対に何か原因があるはずだ。

「もしかして、変なものでも食べたのかの？」

「………多分、今朝のアレね」

やっぱり何か食べたみたいだ。

「何を食べたの？」

「………調合に失敗した薬」

それはもはや食べ物ではないだろう。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ）」

隣では、いつの間にかムツツリーニがレンの撮影を始めていた。

「さて、それじゃ始めましょうか」

ようやく落ち着いていたレンの声と共に、勉強会を始めることになった。

「あれ？ 勉強会？」

美希さんが首を傾げている。

それにしてもこの人、ポニーテールで胸も大きいなんて僕のストライクゾーンのド真ん中じゃないか！！

「明久よ。思考がダダ漏れじゃぞ」

くっ……。流石は秀吉。一瞬で見抜くなんて。

「それで、明久は世界史だっけ？」

「うん。そうだよ」

「だったら姉さんに教えてもらって。私は秀吉とムッツリー二の方を教えるから」

えーっと……。この人、本当に大丈夫なの？

「レン、美希さんって頭がいいの？」

「ええ。姉さんは今年日本の古き良き京にある、超一流国公立大学の歴史学科を首席で卒業したから。」

「「ええっ!?!」」

それってかなり凄いよ!?!?

「週末に勉強会もあることだし、それまでに姉さんは明久に世界史の基礎を教えてあげてくれない?」

「うん、分かった。それじゃあ明久君、一緒にお勉強しましょ?」

「よろしくお願いします」

こうして、美希さんに世界史の基礎を教わることになった。

第四十二問その一・『ごっちだ』と『ついて来い』は、英訳するとそれぞれ『E

問 あなたは今までの異性とのお付き合いや経験について、日本語でもいいから答えなさい。

吉井明久の答え

『もうコレただの質問じゃないの!?!』

吉井玲のコメント

これはテストです。異性と抱擁を交わしたことがあるなら、抱擁と接吻したことがあるなら接吻と、きちんと正直に解答して下さい。アキくんには後ほど尋もー補習を行います。姉さんと今夜はぼっきりとお勉強をしましょう。

島田美波の答え

『前に一度だけ、節分をしたことがあります』

吉井玲のコメント

豆まきは異性とのお付き合いに含まなくても大丈夫です。

そんなこんなで土曜日がやってきた。

「それじゃあ姉貴。俺は明日の昼まで友達の家泊まりに行くから、その間留守番を頼めるか？」

「うん。分かったよ」

朝食を摂りながら姉貴が返事をする。

「それじゃ、手が届かなくならないように物を下ろしておこうか？」

「だからそんなにちっちゃくないってば」

ピンポーン

突然、玄関の呼び鈴が鳴った。

「お、優希か」

「ヤッホー、亮」

「優希ちゃん、久しぶりだね」

「美希さんも相変わらずお元気そうで」

とりあえず気になったことを聞いてみることにする。

「というか、こんな朝っぱらからどうしたんだ？」

「代表の家で勉強会をやるみたいだから、私も参加しようかなと思
って」

「誰から聞いたかは知らんが、いいんじゃないか？」

「ありがとう、亮」

優希はいきなりポケットから携帯を取り出し、どこかにメールをし
ていた。

「……神谷、優希。いらっしやい」

「どうも〜代表」

呼び鈴を鳴らして待っていると大きなドアを開けて私服姿の霧島さんが出迎えてくれた。

「お邪魔します」

しかしもの凄くデカイ家だ。もしかして住み込みのメイドさんとかがいたりして。

「もしかして、皆もう揃ってるのか？」

「……吉井がまだ」

なるほど。明久が最後か。

「しかしまあ、部屋がいっぱいだな」

「……用途別」

流石はお金持ちだ。

ところで一つ気になることが。

「あの鉄格子がはまっている部屋って何なんだ？」

「……雄二の部屋」

頑張れ雄二。

「……ここが、勉強部屋」

しばらく歩いたところで、霧島さんが立ち止まってドアを開ける。

すると中には明久と雄二以外の全員が揃っていた。そして、

「二人はいつの間にもこの勉強会を知ってたんだ？」

優子と工藤も加わっていた。

「ゆ、優希からメールが回ってきたのよ。ただそれだけだからね！」

「ボクもそんな感じ」

なるほど。さっき携帯を操作していたのはそういつわけか。

それに、どうせなら皆でやった方がいいしな。

「神谷君、こんにちは」

「おっす。姫路」

声のした方を向くと、いつもと違い髪をポニーテールにした姫路がいた。

なるほどな。

「島田ガンバ」

「ちよっ、神谷！なんでウチにそんな哀れみの表情をするの!?!」

言葉の割には島田も自覚しているようだ。

「……………(じーっ)」

気がつくくと優希が姫路の胸をじっと見つめ、

「ど、どうしたんですか桂さん」

「姫路さんの胸、羨ましいな……」

などとのたまわった。

「確かに俺も凄いと優子俺のその関節はそっちには曲がらないぞ」

どうやって気配を消したんだろう。

「……………二次性徴を実感させる」

優子のサブミッションから逃れていると、ムツツリーニがボソッと呟いた。

「ムツツリーニ君。胸の成長だけが二次性徴を実感する出来事じゃないと思うんだけどな」

「……………例えば？」

「実戦の経験とか、ね」

もう少しまともな発言をするヤツはいないのだろうか？

と、いつか第二次性徴とは関係ない気が……。

「……………それは違う、工藤愛子」

「むっ」

どうやらムッツリーニもそう思ったようだ。

「……………もっと綿密な計画を練ってからにするべき」

「むむっ」

「そっちかよ!?!」

ムッツリーニの言葉に対し、工藤が頬を膨らませている。

何なんだこの二人は？

「ムッツリーニ君は頭でものを考え過ぎだよ! 『百聞は一見に如かず』って諺を知らないのっ?」

「……………充分なシミュレーションもなく実戦に挑むのは愚の骨頂」

「そうやって考えてばかりだから、スグに血を嘔いて倒れちゃうんだよ！」

「……………何を言われても信念を曲げる気はない」

「またそんなことばかり言って……………！ このわからずやっ！（チラッ）」

「……………卑怯な……………っ！！（ブシャアア）」

工藤がシャツの襟元を開き、ムツツリーニが鼻血の海に沈んだ。

「二人ともそろそろ落ち着いたら？」

「……………「神谷君（亮）は黙ってて（いろ）！！」「」

どうやらこの二人には譲れないものがあるらしい。

「ところで明久に秀吉、雄二はどこだ？」

「そっいえばいないね」

「ワシもまだ見ておらん。遅刻じゃろうか」

もしかして寝坊か？ まったく、こんな日に寝坊なんて、弛んでい
るとしかー

「……雄二を連れてきた」

ドサッ

絨毯の上にロープで縛られた雄二が転がされる。

「ん？ 明久に亮。どうしてお前たちがここにいるんだ？」

「……ああ、うん。霧島さんの行為でね……」

「雄二。お前は今日の勉強会の話は霧島さんから聞いてないのか？」

ロープを解きながら尋ねてみる。

「ああ。何も聞いていない。いつものように気を失って、目が覚め
たらここにいただけだ」

いつものように、って……。雄二も大変そうだ。

「それじゃ、勉強道具は？」

「……大丈夫。準備は万全」

霧島さんが雄二の鞆を掲げて見せる。着替えも入っているようだし、手扱かりはなさそうだ。

「さて、と。それじゃ皆揃ったし、始めるか」

「そうした方がよさそうだね」

「そうじゃな」

「それは違うよっ！ 世論調査では成人女性の68%以上がー」

「……… 違わない。世界保健機関の調査結果では成人男性の72%が賛同している」

「またそうやって屁理屈を……！」

「屁理屈じゃなくて事実」

「くう……っ！ こうなったら、今度のテストでムッツリー二君を抜いてボクの方が正しいって証明してみせるからね！」

「……… 学年一位の座は揺るがない」

『そうやって憎たらしいこと言って……ムツツリーニ君なんてこつ
だよっ！（ピラッ）』

『……………卑劣な……………っ！！（ブシャアアア）』

あの二人が何か問題を起こす前に、勉強を始めた方が良さそうだ。

第四十二問その二・勉強ができるのと頭が良いのは直結しない

「亮。ここでこの人物はどう思っているか分かる？」

「当たり前だ優子。答えは『シユウマイがまずかった』だろ？」

「いや、違うから……」

「何でだ？ ここに『激しい口論で落ち込んでしまい、気が付くと食卓に置かれたシユウマイが冷めてしまっていた』って書いてあるのに」

「何で前半じゃなくて後半に目をつけるかな……」

「優希まで!？」

今は優子と優希に国語を教えてもらっているのだが、どうも問題の解き方が分からない。

「ここはそれ以外に気持ち描かれているのよ」

「それ以外ってというと、『落ち込んでしまった』ってところか？」

「うん。正解よ」

国語ってややこしいな。

「ところで優子、どうして俺に国語を教えようと思ったんだ？」

「どうしてって……アンタの読解力が壊滅的だから、色々大変なのよ」

どうして俺の読解力で優子に苦労がかかるんだろう。

「俺が鈍感なわけでもないのに」

「……………」

「何で二人とも呆れた目でこっちを見るんだ？」

俺が何かしたのか？

『ムツッリーニ君。さすがにこの問題はわからないでしょ？』

『……………中一で70%。中二で87%。中三で99%』

『どうしてこんなことまで知ってるの!?!?』

『……………一般常識』

『……………。正攻法で勝てる気がしなくなってきたよ……………』

『……………工藤はまだまだ甘い』

『こ、こうなったら……。あのね、ムッツリーニ君。実はボクー』

『……………？』

『ーいつも、ノーブラなんだよね』

『……………っ！？（ポタポタポタ）』

『え？ それなのにどうして形が崩れないのかって？ それはね…
…実は（ボソボソ）って感じのマッサージをいつも（ゴニョゴニョ）
つてなるまで、毎晩毎晩ー』

『……………殺す気が……………っ！（ブシャアアッ）』

『殺すだなんて人聞きわるいなあ。別にボクは、ムッツリーニ君が
出血多量でテストで実力が出せなくなるというのに、なんてことも
考えてないし』

『……………この程度のハンデ、どうということはない』

『ふん。そんなこと言うんだ？』

『……………お前には、負けない』

『そこまで言うなら遠慮なく。ーそれで、さっきの続きだけど、
（モニョモニョ）を体が熱くなるまでやったら、最後には（ホニヤ
ホニヤ）を使って（ヒソヒソ）をー』

『……………死んで……………たまるか……………っ！（ダバダバダバ）』

工藤とムツツリー二はなんて大胆な会話を繰り広げているんだ。

「……………（ドロドロドロドロ）」

おかげでこっちにまで被害が及んだじゃないか。

「亮。鼻から赤い液体が出てるけど、どついうことかしら？」

「気にするな優子。ただの知恵熱だ」

「知恵熱で鼻血は出ないわよ」

「とつか知恵熱って……………亮は一体何歳なの？」

「優希。知恵熱に年齢は関係ないんだぜ？」

「いや、思いつきりあるよ」

「亮。ちょっとそこに正座しなさい」

なぜだろう。関節が痛む予感。

「……そろそろ夕飯だから、別の部屋にきて」

気が付けば霧島さんの声が聞こえてきたので時計を見ると、いつの間にか六時過ぎになっていた。

「痛たたた………」

優子のサブミッションを食らった関節がまだ痛む中、立ち上がった背中筋を伸ばす。腕とは違い、バキバキと心地よい音が鳴った。

「………生き残った………」

「ムツツリーニ君。また後で、じっくりボクとお勉強しようね」

「………断る」

工藤とムツツリーニは案外仲が良いようだ。

「……案内するから、ついてきて」

「「「「はい」」」」

先導する霧島さんに雑談しながらついていく。

「食事って、やっぱりありがたいものだよね」

「まあ、色々あったしね」

優希の言葉で昔を思い出す。あの頃は大変だった。

「一体何があったの？」

優子が首を傾げている。

「うちの、おふくろが……実は重度の腐女子でな。食費の九割以上を趣味につき込むんだ」

「え!?!」

「しかも遊びに行ったとき、ご飯は塩粥が一杯だけだったよね」

「それってどうなのよ……?」

おふくろ曰く『萌えさえあれば生きていける』そうだが、生憎俺はカロリーがなければ生きていけない。

「今は姉と二人暮らしたからそんなことはないけどな」

もしかしたら姉の背が伸びなかった原因はそこにあるのかもしれない。

部屋を出てから少し歩くと、段々^と馳走の良い香りがしてきた。

「……この部屋」

霧島さんが一つの部屋の扉を開けると、良い匂いが一層強くなった。

「うわぁ……」

「す、凄い……っ!」

「凄く贅沢なんだけど……」

一般家庭ではあまり見かけないようなサイズのダイニングテーブルに所狭しと並べられた料理。香ばしい匂いを放つ北京ダックは姿焼で肉汁が滴っているし、トロリと濃厚なスープに浮かべられているフカヒレは贅沢な姿煮だ。チンジャオロースやホイコーロー、八宝菜に麻婆豆腐といった料理も中央の大皿に盛られているし、それぞれの席に置いてある小さな蓋付きの茶碗のようなものは、もしかしてツバメの巣か？

まるでパーティーみたいな光景だ。

「アキがこんななの食べたら、慣れない味でお腹壊しちやいそうね」

「後は食べ過ぎとかな」

「あははっ。本当だよ」

「一体俺の何ヶ月分の食費になるだろう。全く想像がつかない。」

「ところで、ここで食事を摂るのはワシらだけか？霧島の家族はおらんのか？」

「……うん。私たちだけ」

「部屋の中には俺たち十一人しかいない。これらの料理は霧島のお母さんが作ってくれたのか？それともお手伝いさんか？」

「翔子の家はそれぞれが自由に暮らしているからな」

「……うん。だから気兼ねしないで好きに過ごして欲しい」

確かに、雄二の部屋が作られるくらいだからな。

「……それじゃ、適当に座って」

言われた通りに手近な席に座る。

「」「」「いただきまーすっ」「」「」

皆で手を合わせて、楽しい夕食タイムが始まった。

「これはまた、絶品じゃな」

「お、美味しいです……！ うう……また食べ過ぎちゃいます……」

「僕の好物のカロリーがこんなにたくさん……っ！」

「……………鉄分補給」

「ホント凄いよ、この料理！」

「アタシ、こんなに美味しい中華料理は初めてだわ」

「ボク中華料理大好きなんだよねー」

「翔子。なぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ？」

「……神谷特製の薬なんて入ってない」

「おい、亮！　なんて危ないものを作りやがったんだ！」

騒ぐ雄二をスルーしながら料理を口に運ぶ。

「う、これは……」

うーまー……い……ぞ……!!!!

はっ！？ 危ない危ない。ちょっとトンでた。

滅多に食べられない高級食材に舌鼓を打ち、勉強の疲れを癒やす俺たち。

最後に締めとなるデザートのアレンジ豆腐を味わっているところで、霧島さんが雄二に話しかけていた。

「……雄二」

「なんだ翔子？」

「……勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配はいらねえ」

「……本当に？」

「ああ。次のテストではお前に勝つちまうかもしれないぞ」

「……そう」

あれ？霧島さんの目がスツと細くなった。

「……そこまで言うのなら」

「ん？」

「……勝負する？」

霧島さんにしては珍しく、挑発的な目だ。

「勝負だと？」

「……うん。雄二がどの程度できるようになったのか、見てあげる」

「ほほう……。随分と上から目線で言ってくれるじゃねえか」

これは珍しい。あの雄二が乗せられてる。

「……実際に私の方が上だから」

「くつ。上等だ！ 勝負でもなんでもしてやるつじやねえか！ 本当の実力の違いってヤツを見せてやらあ！」

霧島さんって雄二の扱いがうまいんだな。

「……わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テストで勝負」

「おうよ！ 今までの俺と思うなよ！」

「……それで、私が勝ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「は？」

目が点になる雄二。馬鹿だなあ。きちんと聞いてなかったみたいだ。

つまりだ、雄二がテストで負けたら、あの美人でスタイルが良くて、是非とも春画のモデルになって欲しい霧島さんと一緒に寝るっていう話で、そんな羨ましいことが起こるのなら嫉妬バルバルでいっぱいになっちまうワケで……

「霧島さん、ちょっとこのガスを雄二に嗅がせてみる気はないか？」

「霧島さん。ゴメン。杏仁豆腐を食べたいからナイフを貸してもらえないかな？ 包丁や日本刀でもいいけど」

「……分かった」

「待て翔子！今のコイツらの言うことを聞くな！俺の命に関わる！」

ちいっ！良い勘してやがる！

「……代わりに、雄二が勝ったら吉井と一緒に寝るのを許してあげる」

「驚くほど俺のメリットがねえぞ!?!」

何をバカなことを言ってるんだコイツは。俺だったら全力で0点を取ってどっかの大泥棒みたいにベッドにダイブする条件なのに！

「いいな。そういうの、面白そうだよな。ボクも何かやりたいなあ」

突然、工藤が楽しげに言った。

「……愛子も勝負する?」

「それもいいけど、折角だからー」

わざと一呼吸置いて明久に目線を送る工藤。まさか……。

「……そのテスト、皆で受けて、その点数で部屋割りを決めようよ」

そして、工藤は明久を見たまま片目を瞑ってみせた。明久め……やっぱり誘われてやがるっ!!

「よしっ！ 望むとこー」

「だ、ダメですそんなことっ！ 明久君にそういうコトは、えっと、その、まだ早いと思いますっ！」

「でも、保健体育のテストの為に吉井君がボクと実践を経験しておくのはいいコトだと思うよ？」

「ダメですっ！ そんなのいけませんっ！」

「保健体育のお勉強、ボクが吉井君に教えてあげたいな」

「ダメったらダメです！ 絶対にダメですっ！ 工藤さんがそんなことをしようとするのなら……私が明久君と一緒に寝ますっ！」

「えええええっ!?! 姫路さん何言ってるの!?!」

なんかおかしいことになってきたぞ。

「み、瑞希！ 何言ってるのよ！ そんなのダメに決まってるでしょ！？」

「でも、美波ちゃんだって明久君のHな本を見たならわかるはずですよ！ 明久君だって男の子なんです！ Hなことに興味津津なんです！ 工藤さんと一緒に寝たら大変なんです！」

「確かに、アキの持っていた本の四冊目にはショートカットのコモ載っていたけど……」

明久、トップシークレットが漏洩してるぞ。

「ですから、明久君を守る為に、私が一緒に寝ますっ！」

「そ、そうねっ。アキを守る為に、ウチと一緒に寝てあげないとねっ！」

話がどんどんおかしな方向に進んでいる。

（明久、ステルスアイテム買うか？ 割引するぜ）

（うん……。是非お願いするよ……）

なんかもう明久がかわいそうになってきた。

「いやいや、お主らは慌て過ぎじゃ。別にこの提案に乗らなければ済むだけの話じゃと」

「勝負です工藤さん！ 私、明久君の為に負けませんっ！」

「そうね！ アキの為にモウチと一緒に寝るとするわ！」

「あははっ。二人ともやっぱり面白いね。そうこなくっちゃ。それで、優希と優子はどうする？」

「私もやる。優子ちゃんもやるよ」

「ア、アタシは別にー」

ボソッ（うかうかしていると、亮が大変なことになっちゃっよ）

「アタシも参加するわ！」

「済む………だけの話じゃと………思うのじゃが………」

秀吉の提案は華麗にスルーされていた。あと、優子はどうして参加しようと思ったんだ？

「………じゃあ、まだ開けていない新品の模擬試験を持ってくる」

「待て翔子！ 俺はまだ承諾してないぞ！」

「……決定事項。さつき雄二は勝負するって言った。反対意見は認めない」

「ぐ……っ！　そ、それはそうだが……！」

雄二が目を泳がせて何かを考える。

そしてテーブルの上に視線を送ると、霧島さんには見えないような角度で雄二がジュースの入ったコップを傾けるのが見えた。

「っと、すまん翔子！　服にかからなかったか？」

「……大丈夫」

ぱっと見た感じ、霧島さんの服にジュースがかかった様子はない。

「いや、大丈夫じゃない。お前には見え辛いかもしれないが、服の裾のそのへんにかかったみたいだ」

だというのに、雄二は霧島さんの腰の後ろあたりを指差した。

「……それは困るかも」

「悪い。俺の不注意でー」

「……あの薬は繊維を溶かすから」

「おい亮。お前は翔子に何を渡したんだ」

内緒だ。

ちなみにこぼれたジュースは絨毯と反応して煙を出していた。

「……着替えてくる」

「そうした方がいいだろうが……それなら、ちょっと早いが先に風呂にしないか？ 腹ごなしも兼ねてな」

着替えに行こうとする霧島さん呼び止めて雄二が提案する。

確かに、満腹となった今から勉強を始めるよりは風呂に入って一息入れた方がいいかもしれない。

「……わかった。それなら先にお風呂にする」

「んじゃ、模擬試験はその後だな」

「……うん」

霧島さんの同意を得て、俺たちは着替えの用意の為に男女別々の部屋に分かれた。

第四十二問その三・生きよつとする意志は何よりも強いってどこかの流浪人が言

「さて、行くか」

部屋で待つこと数分。雄二が立ち上がった。

「了解。覗きだね？」

「……………任せておけ」

「あのねえ……………」

「お主らはどこまでバカなのじゃ……………」

ちなみに私と秀吉はそれぞれ他の部屋に案内された後で、こっそりと明久の部屋に行った。なんか悔しかったし。

「違うぞバカどもが。俺が行こうと言っているのは翔子の部屋だ」

霧島さんの部屋ってことは……………

「もしかしてさっき言ってた模擬試験の問題を盗み出す気？」

「そういつことだ」

うーん、相変わらず卑劣な手段を使っわね。

「けど、別に僕らは問題を盗む必要なんてないんだけど」

「（こくり）……………それより、覗きが大事」

コイツらはどこまで己の欲望に忠実なのよ。

「本当にそう思うか？」

「何が言いたいのさ」

雄二がもったいぶった口調で確認している。

「いいか明久、よく考えてみる。お前の家に今帰ってきている姉貴は、何を禁止していた？」

「えっと、？『ゲームは一日三十分』、？『不純異性交遊の全面禁止』ーってヤバいつ！！ すっかり忘れてたっ！！」

一緒に寝たら、いろんな意味で死ぬんじゃないかしら？

「あ。でも、バレなければ」

「協力しなければ俺がバラす」

「外道っ！ この外道っ！」

でしょうね。

「それにムツツリーニ。お前も危険だぞ」

「……………どうして？」

「出血多量で死ぬ。確実に」

確かに。

「……………この俺が、死を恐れるとでも？」

いや、生きようとしなさい。

「だが、予想される順位を考える。上位の人間から相手を選んでいくとなると」

化学のテストじゃなかったら、？霧島さん　？瑞希　？工藤さんか
優子が優希　……って感じだろうから、

「霧島が雄二を、姫路が明久となると、工藤や桂は誰を選ぶかのう」

秀吉があごに指を当てて呟く。

流石秀吉、自分の姉が選ぶ相手は分かっているみたい。

「桂は分らんが、工藤はムッツリーニを選ぶだろうな」

「……………まさか」

「さっきの言い争いもある。ムッツリーニを失血死させて、保体の
王者の座を奪うつもりじゃないか？」

「……………っ！　つくづく、卑怯な……………っ！」

どつちやら、ムッツリーニと工藤さんの間にはおかしなライバル関係
があるらしい。

「……………あんなスパッツごときに、殺されるわけには……………っ！」
死ぬことじゃなくてスパッツで死ぬことが嫌なだけらしい。何かト
ラウマでもあるのかしら？

「というわけだ。協力してくれるな？」

「わかったよ。協力するよ」

「……………やむを得ない」

「ちょっと待て」

「なんだ、亮？」

「優希の選ぶ相手は分からないとして、」

「え？ 幼なじみの亮ですら分からないの!？」

「ああ。ヤツの考えはたまにしか分からない」

優希ほど気まぐれを体現した人間はそうはいないだろう。

「それで、優子は誰を選ぶつもりなんだ？」

「おそらく、お前だろうな」

雄二が俺を指している。

「え？ 俺？」

「その通りじゃ。亮、お主に対する姉上の行動を鑑みれば分かるはずじゃ」

秀吉に言われ、優子の今までの行動を振り返ってみる。

なるほど。「暗殺かつー！」

「どつしてそうなるのじゃ……」

秀吉が額に手を当て呆れていた。

繰り出されるサブミッションの数々。

禍々しき怒りのオーラ。

充分暗殺のレベルだ。

「それじゃ、亮も協力してくれるな？」

「もちろんだ」

まさに命懸けの任務だ。

「ワシも協力しよう」

「え？ 秀吉が？ どうして？」

秀吉は協力する理由がないと思うんだけどな。

「どっついても、じゃ」

「???.?」

まあ、秀吉にも色々あるんだろう。

「よし。そうと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するに、テスト問題はアイツの部屋にある。そこに忍び込むぞ」

「了解」

どういうわけか、俺たちは協力して霧島さんの部屋に侵入することになった。

『代表。ところでさ、お風呂ってどうなってるの？』

『……大浴場と露天風呂がある』

『本当にすごいわね』

『まるで温泉旅館みたいだわ』

『楽しみですね』

『ボクも楽しみだよ。温泉も、姫ちゃんのコレを直に見るのも、ね』

『きゃっ。ど、どこを触ってるんですか工藤さんっ』

『確かにおつきいねえ。何が入ってるの？』

『……羨ましい』

『アタシには何か不公平に感じるわ』

『やつ！ 桂さんや木下さん、それに霧島さんまでっ』

『……吸い取れる注射器とかを神谷に作ってもらおうかしら……？』

『み、美波ちゃん！？ 冗談ですよね！？ 顔がとっても怖いですよ！……？』

魅惑の会話を繰り広げながら、優子たちは着替えを持ってお風呂と
思しき方へ歩いて行った。

「あのさ、雄二」

「なんだ」

「僕、もう全てをかなぐり捨てて姫路さんたちについていきたいん
だけど」

「……………同意」

「二人に同じ」

以前はうまくいかなかったが、今度こそ……！

「落ち着けバカども。あの時のことをよく思い出せ」

雄二。俺だって、そこまでバカじゃないさ。

「今回はもう同じ失敗はしない！ 停学なんてくらわらないようにうまくやるさ！」

「（安心しろ、レン。もうぶっ倒れたりはしない……！）」

『（ああ、うん……）』

「それなら、言い方を変えよう」

雄二が俺たちに人差し指を突き付ける。

「あの時の、ババアの裸をよく思い出せ」

「「「……………（ケプツ）」」」

想像しただけで胃袋が痙攣したのが分かった。

「覗きつて、良いコトなんて一つもないよね……。見る方も、見られる方も……」

「……………犯罪行為、良くない」

「やっぱり真っ当に生きよう」

「わかってもらえてなによりだ」

今だけはカツ丼を食べたくはない。

「それでは侵入するかの」

「だな。あんまりグズグズしていても良くないし」

いくら女子の入浴時間が長いからといって、いつあがってくるか分からない。ここは出来るだけ速やかに任務を終わらせるべきだ。

女子の姿が見えなくなったのを確認すると俺たちは忍び足で廊下を進み、さっき女子が出てきた霧島さんの私室を目指した。

「よし、中に入るぞ」

部屋の前に立ち、雄二が扉のノブを掴んで捻る。

「あれ？ 開かないね？」

けど、ガチャガチャという無機質な音を返してくるだけで、その扉は開かれることはなかった。

「鍵をかけておるようじゃな」

「自分の家で？」

「うん……。何か大事なものでもしまってるのか？」

それとも年頃故の防犯対策なのか？

「アイツが大事にしまっておくものなんて見当もつかんが……。まあいい。ムツツリーニ、いけるか？」

「……………三十秒くれ」

どこからかピッキング用の道具を取り出して鍵穴に張り付くこと三

十秒。ムツツリーニは恐ろしい手腕で解錠に成功し、霧島さんの部屋のドアを開けた。

「よし、行くぞー!」

「了解!」

さあ、ミッションスタートだ!!

第四十二問その四・潜入捜査は時間との勝負（前書き）

テストとかが立て込んで、投稿が遅れてしまいました。本当にス
イマセン

第四十二問その四・潜入捜査は時間との勝負

「これはまた、立派な部屋じゃな……」

「ひ、広いね……」

明久と秀吉の二人が、霧島さんの部屋の広さに驚いている。

「そついえばお前ら、この部屋に来るの初めてだったけ？」

「あれ？ 亮は来たことあるの？」

「ああ、この前……」

「明久に亮。お主ら、なるべく早く問題を探した方がいいぞい」

「秀吉の言う通りだ。とりあえず、それぞれバラバラに当たろう。模擬試験の問題のよなものがあつたら全て封を開けるんだ。それだけで言いがかりをつけられるからな」

雄二の意見を要約すると、霧島さんは問題を知っていたから不公平だ、といういちやもんをつければいいわけだ。スマン霧島さん。これも俺たちが生きるためなんだ……。

「わかった。それなら僕は向こうの棚の方から調べるよ」

「……………入り口から」

「ワシは窓の方から行く」

「じゃあ俺は机のあたりか」

「雄二、俺も手伝うぜ」

俺たちは四方に散って家探しを始める。俺と雄二は机のあたりを探すことになった。

「問題用紙らしいものは見当たらないな」

とにかく場所を移してー

「亮。ちょっといいか？」

雄二が壁に埋め込まれたガラスの塊にへばりつきながら、こつちを見ている。

……………コイツはバカか？

「そのガラスの塊がどうかしたのか？」

「どうもこうも、中に何も無いなんて怪しすぎる」

雄二の言う通り、ガラスの中には何もなかった。確かに怪しい。

「亮。ここに何かがあるか調べられるか？」

「ちょっと待ってくれ」

赤外線ライトを懐から取り出してガラスに向けて照射してみる。

すると、ガラスの中に何かの紙が入っていた。

「随分手慣れてるんだな？」

俺の迅速な対応に、雄二が疑問を持っているようだ。

まあ手慣れてるもなにも、

「俺のステルスアイテムだからな。分からないわけがない」

「お前、アレを翔子にも売ってたのか!？」

「ああ。けど安心しろ。お前のは特注品だから、霧島さんには探せない」

雄二に渡したヤツは光の屈折率が他のと違うのだ。

「で、何なんだこの紙は？」

紙に書かれているのは雄二と霧島さんの名前、そして――

「――婚姻……届？」

「畜生……翔子のヤツめ……!」

急に雄二の目つきが変わった。

「おい亮！ 何かコレを壊せる武器はあるか？」

「ない」

暗器と言っても、俺の場合は薬が中心となっている。だからメカはあっても武器はあんまりない。

「何でそんな事がわかる？」

雄二の疑問ももつともだろう。でも、断言できる理由が俺にはある。それは、

「だって、この強化ガラスを作って取り付けたのは俺だから」

「テメエ！ 何てことをしてくれただんだ！！」

実はこの前霧島さんに『……部屋に思いっきり強力なガラスを取り

付けて欲しい』と頼まれ、とりあえず俺の暗器で壊したり溶かしたり出来ない強度を持ったガラスを作った。

霧島さん曰わく『……大事なものをしまっておきたい』だそうだ。

その大事なものが婚姻届だとは、誰が予想できようか。

「く……っ！ 何か、何か壊す為の道具は……！」

だから雄二。もう諦める。

「何やってんのさ雄二。問題は見つかったの？」

するとそこに明久がやってきた。

「明久！ ちょうどいいところに来てくれた！ コレを取り出すのに協力してくれ！」

「雄二。見るからに無理っばいよ」

「それより問題を探そうぜ」

「バカを言うな！ 俺がどれだけこれを探していたと……！ 翔子のヤツ、弁護士に預けただなんて嘘をつきやがって……！ これが

隠してあるから鍵なんてかけていやがったのか……！」

今の雄二に下手なことを言えば間違いなくキレられる。……どんだけ追い詰められてるんだ……。

「さてと、問題を探すか」

雄二を放っておいて別の場所で問題を捜していると、

「うわあっ！」

突如明久の悲鳴が響いた。

「どうした明久!？」

「いけない人だね、吉井君に神谷君。女の子の部屋に忍び込むなんて」

「部屋に入られると、なんかこつドキドキするね」

「く、工藤さんに桂さん!? あれ!? お風呂は!？」

工藤が片目を瞑って楽しげに笑っていて、優希は特に動揺もせず、

平然としていた。

「下着、出したまま持って行くの忘れちゃったから取りに来たんだよ」

「私はその付き添い」

見ると、血の海に沈んでいるムッツリー二の前に、綺麗に置かれた女物の下着があった。

「マズい！ 皆、ここは撤退しよう！ 殺戮部隊が戻ってくる可能性がある！」

「了解だ！」

女子全員が戻ってくる可能性を危惧して、作戦中断と同時に出口へと走り出す。優子に見つかったら俺の命はない。

「く……っ！ こいつを目の前にして退くしかないとは……！」

雄二は倒れているムッツリー二を抱えて部屋を脱出した。それに秀吉が続く。

「また後でね、四人とも」

「見つからないようにね」

工藤も優希も怒った様子はなく、走り去る俺たちに手を振っていた。

「作戦失敗か……」

残念ながらテスト問題は見つけれなかった。このままだと、俺の命が……！

「一度見つかった以上は何もできないな」

「困った……。ムツツリーニはこのまま寝かせておけばなんとかなるかもしれないけど、僕たちは」

「テストで勝つしかなかったな」

「だよ。雄二が勝って、一緒に寝る相手に僕を選べば……」

「……その瞬間、お前らは社会的な死を迎えるな」

そうなった場合、コイツらの今後は大変なことになるだろう。

「安心するのじゃ明久。テスト問題ならば、それらしきものは軒並

みワシが開封しておいたからの」

「え？ いつの間に？」

「お主らが遊んでおる間に、じゃ」

どつりで秀吉が静かだったわけだ。これは感謝しなくては。

「ところで、何で秀吉は協力してくれたんだ？」

「ワシも色々複雑での……」

遠くを見るような目をする秀吉。

「女子と同衾して、何も無くばワシは完全に女子扱いされるじゃろ
うし、何かあれば問題になる。これほど割に合わん状況はあるまい
て……」

「ああ……なるほど……」

秀吉も大変そうだな。

そのまま数秒廊下を駆け、霧島さんの部屋からある程度の距離を取
ったところで俺たちは足を緩めた。

「それじゃ、俺らも風呂にするか」

「そうだね」

「確かにそれがいいじゃろ」

「俺は風呂どころじゃないんだがな……」

雄二の関心は霧島さんのへやの婚姻届に全て向いてしまっている。

「まあ今は打つ手がないんだろ？ だったらとりあえず風呂に行こうぜ雄二」

「そうだな。風呂で何か策でも考えるか」

「そうしなよ。それじゃ、二人はまた後だね」

「待ていつ」

「ちょっと待て」

俺と秀吉で明久の襟を掴んだ。

「どうしたのさ二人とも？ お風呂に行かないの？」

「ああ。風呂に入るつもりだ」

「じゃが、何故お主は別行動を取るうとする？」

「え？ だって、お風呂でしょ？」

「うむ。風呂じゃ」

「ああ。風呂だ」

「だから、僕らは男湯で、秀吉と亮は」

「「ワシ（俺）も男湯じゃ（だ）！」」

「？ 時間をずらして入ろうってこと？ それなら少し待ってるけど」

「違う！ 俺もお前たちと一緒に入るんだ！」

「えええつつ！ そんなのダメだよ！」

「何がダメなのじゃ！ 今日という今日こそは、ワシをきちんと男として見て貰うからの！ 男同士の裸の付き合いじゃ！」

「は、裸……」

「顔を赤らめるな！ とにかく、何としても俺は男湯に入るぜ！」

「ワシもじゃー！」

秀吉はとうとう明久の腕まで掴んでいる。俺よりも頑固かもしれない。

「……わ、わかったよ二人とも。それなら、一緒にお風呂に入るー」

「ねえ瑞希。突然だけど、アキが水のないプールに飛び込む姿とか、見てみたくない？」

「奇遇ですね美波ちゃん。実は私も、急に明久君が酸素ボンベなしでスキューバダイビングする姿を見てみたくなっちゃったんです」

あれ？ 俺が懐に忍ばせているロープが無くなってる。

「じゃあ行きましようかアキ。この家ならプールくらいありそうだし。20メートルクラスの飛び込み台があるといいわね？」

「その後は神谷君特製のアロマガスを嗅いでからお風呂に頭の先まで浸かってきちんと1000数えましようね？ 手足の力が抜けて、身体の芯まで温まりますよ？」

「あははっ。二人とも、冗談がうまいなあ。そんなことをしたら僕は死んじゃうじゃないか。だから縛っているロープを解いてくれないかな？」

その割には凄い力で引きずられている気がするが、気のせいだろう。

「まったく、戻ってきてみたら、よりによって木下や神谷と一緒に
お風呂だなんて……」

「工藤さんが忘れ物をしてくれて良かったです。後でお礼を言わな
いといけませんね」

「あは、あはは……。二人ともさつきから冗談ばかり。本当は僕
をからかっているだけでしょ？ ねえ、冗談だよ！？ どうして
二人ともこっちを向いてくれないの！？ どうして僕の手を更に厳
重に縛るの！？ とにかく話を聞いてよ！ 誰か、誰か助けっいや
あああーっ！」

頑張れ明久。

「亮。アンタは女子部屋に入って何をしていたのかしら？」

俺も頑張るから。

「まあ待て優子。とりあえず話し合おうじゃないか。だから関節か
ら手を離してぎゃあああーっ！」

『……雄』

『しよ、翔子!? お前いつの間に戻ってきていたんだ!?』

『……婚姻届を盗もうとするなんて、許せない』

『ま、待て! 話を聞け! アレは盗難じゃなくて正当な権利でぎやあああーっ!』

『ムツツリー二君、起きて起きて』

『……………う……………う……………』

『えいつ (チラッ)』

『ぐぼあっ! (ブババッ)』

「……………結局、風呂に入るのはワシー人ということじゃろうか……………?」

「大丈夫だよ。私がいるから。一緒に入る?」

「桂よ、それは何の解決にもなってないぞい……………」

霧島さんの家が広くて助かった。隣家がすぐ近くにあつたら、きつと俺たちの悲鳴を聞きつけた人が警察に通報したかもしれないから。

そして何より

殺されるのが俺たちで、本当に良かった。

第四十二問その五・レッツ パジャマパーティー！

秀吉の活躍のおかげでテストはなんとか中止になり、また勉強を続けること数時間。日付が変わったあたりでそろそろ寝ようということになった。

ちなみになんとか俺たちの主張が通り、部屋割りには男子&秀吉&俺と女子部屋の二つに分けられた。若干不安が残るが、それは仕方ない。

そんなワケで就寝時刻。

〜女子部屋での会話〜

『あれ？ 私の髪留め、どこにいったんでしょ？ ーここに置いておいたはずなのに』

『なくしちゃったの？』

『そうかもしれない』

『……探すの、手伝う？』

『あ、いえ。また明日の朝にお布団を片付ける時にでも探すから大丈夫です』

『……わかった』

『そう言えば、瑞希っていつもあの髪留めをしてるわよね』

『あゝ、そういえばそうだね』

『……思い出の品だとか？』

『んっふっふ。ボクの予想だと、好きな人からの贈り物って感じなんだケド？』

『アタシもそう思うわ』

『いえ。あれ自体は自分で買ってきた普通の髪留めです』

『え？ そうなの？』

『あらら……。予想がハズレちゃった』

『確かに、思い入れはありますがね』

『え？ なになに？ 面白そう』

『残念ながら、それはヒミツ、です。それより、私は工藤さんのお話が気になります』

『え？ ボク？』

『そうね。ウチも気になるわ』

『私も』

『ふふつ。三人とも、そんなにボクのHな話が聞きたいのかな?』

『違うわ。そっちじゃなくて』

『私たちが聞きたいのは』

『土屋君との関係、の方です』

『ふえっ!?!?』

『……それは私も気になる』

『聞いてみたいわね』

『な、何を言ってるのさ三人ともっ。ボクとムツツリー二君がどうこうだなんて、そんなことあるわけないじゃないっ』

『そうやって否定するところが怪しいですね』

『……いつもの愛子なら笑って受け流す』

『何か隠してるんじゃない?』

『ち、違っつてば! ボクもムツツリー二君もそんな気は全然ないよっ』

『それはどうかしらね? 意外と男子部屋でも、土屋君が似たよう』

なことを言ってるかもしれないわよ?。」

『お泊まり会の定番の会話だしね』

『そうですね。きつと向こうの部屋でもこんな話をしているんですよ』

『ほらほら、向こうできつと土屋も尋問されているだろうし、』

『素直に言っちゃいなよ』

『……言えば楽になる』

『話しちゃった方がいいわよ。ね?』

『だから、あんな頭でっかち、ボクは全く興味がないうって言うてるのに…』

『またまたそんなこと言っちゃって』

『そう言う優子や優希もじゃない?』

『愛子ちゃん? 一体何のこと?』

『優子は神谷君といい雰囲気だし』

『い、いやそれは……』

『優希に至っては木下君をお風呂に誘ってたし』

『あ、アレは、その……』言葉のアヤだよっ！』

『……怪しい』

『怪しいですね』

『怪しいわね』

『だから何もないうって！』

〳〳同時刻、男子部屋〳〳

「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）

「〳〳〳イエーッ！」「〳〳〳」（俺と明久と秀吉とムッツリーニの合
いの手）

「古今東西っ」

「〳〳〳イエーッ！」「〳〳〳」

「一部生徒の間で噂になっている明久の恋人の名前っ」

恋人かぁ……。

パンパン（手拍子） 雄二の番

「【久保利光】！」

「ダウト！ それダウト！ 久保君は男だから！」

パンパン（手拍子） ムツツリー二の番

「……………【坂本雄二】」

「嫌だあつ！ それはなんとなく知っていたけど改めて言われると
凄く嫌だあつ！」

「俺だつて嫌だボケ！」

パンパン（手拍子） 俺の番

「ん〜じゃあ……………【鉄人】」

「お願い！ それだけは絶対やめて！ 想像したくないよっ！」

パンパン（手拍子） 秀吉の番

「え、えつとえつと……ワ、ワシじゃ！」

「……………」

「あ、明久！？ そこで黙り込んで頬を染められるとワシも困るのじゃが!?!」

パンパン（手拍子） 明久の番

「し、【島田美波】！」

「……罰ゲーム決定っ!」

「どっして!?!」

「ここは、お前の知ってる世界じゃねえ。」

「さあ明久。くじを引くのじゃ」

「うう……。なんだか納得いかない……………」

「安心しろ。お前以外の全員はきちんと納得している」

渋々といった感じで、明久は雄二が突き付けている袋の中に手を突っ込む。さて、どんな罰ゲームを引くんだろうか？

「『女子部屋に行つて姫路さんの髪留めを戻してくる』って、これは僕の書いた罰じゃないか」

コイツはどうして姫路の髪留めを持つてるんだ？

「なんだ明久。お前は随分と又ルい罰ゲームを書いたもんだな」

「もっと凄いのかと思ったのに」

「え？ そう？ でも、女子部屋に侵入だよ？」

まああのメンツなら、命の保証は全くないだろう。

「ところで、皆はどんな罰ゲームを書いたの？」

「俺は『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だな。当然、盗つてこれるまで何度でもトライしてもらつ」

「ワシは『本気女装写真集の撮影』じゃな。ワシの苦しみを皆も味わうべきじゃ」

「……………」『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めている写真はなかなか撮れない」

「『新薬の実験台になる』だ。死ぬようなことはないから安心しろ」

俺を含めた全員が明らかに個人的な目的で罰ゲームを決めていた。考えることは皆一緒か。

「さて。それじゃあアイツらが寝静まるまで適当にダベるか」

「そうじゃな。疲れておるじゃろうし、小一時間もしたら眠っておるじゃろ」

「……………」お題は？」

「うーん…………」。じゃあ、『今までの人生で一番恥ずかしかったこと』でいくか」

「そこに人生ゲームのルーレットがあることだし……………1か6が出たら俺、2か7が出たら秀吉、3か8が出たらムツツリーニ、4か9が出たら亮、1の倍数が出たら明久って感じてどうだ？」

「……………」オツケー……………」

さあ、行くぞっ！

「5か。1の倍数だから明久だな」

「それおかしって！ その条件だと、何を引いても僕になるじゃないか！」

「ここはもう、テメエの知る世界じゃねえんだよ」

「亮！ 僕までそんな危ない世界に巻き込まないで！」

「まあ、どちらにせよ5じゃったから明久に変わりはないのう。ほれ、諦めて話すのじゃ」

「ぐ……。わかったよ。えっと、アレは僕が中学一年のころなんだけどー」

「「「「「ふむふむ」「」「」」」」

.....
.....
.....

「さて。そろそろ良い時間じゃぞ、明久」

「そうはいかないよ！ 僕は『人生で16番目に恥ずかしかった話』までさせられてるのに、皆は何も話していないなんて不公平だ！」

「いやいや、それはお前のヒキが弱すぎるだけだ」

「……………驚異的弱さ」

雄二がルーレットを回しているけどあまりに5か10しか出ないから、イカサマだと言い出した明久が途中からルーレットを回したんだけど……………それでも5か10しか出なかった。どこまでコイツは運が悪いんだ？

「ゴチャゴチャ言っていないで、いいから行くぞ明久」

「うう……………わかったよーって、雄二も行くの？」

「ああ。俺は俺でやることがあるからな」

そう言う雄二は、ムツツリーニから借りたガラス用のカッターを掲げて見せた。例の婚姻届が目的なんだろうが、奪取は無理だろう。

「ならば、ワシとムツツリーニと亮は廊下から見ておるかの」

「……………面白いハプニング、期待してる」

「死なないようにな」

「なんとか生きて帰ってくるよ」

音を立てないように注意しながらドアを開ける。

廊下は薄暗く、シンと静まり返っていた。

明久と雄二の後に続いてそつと廊下を歩き、女子部屋の前までやってきた。

ギイ……

さっきのように鍵がかかっていることはなく、明久がノブを捻るとドアはあっさり開いた。

(二人ともどうなるかな)

(……………楽しみ)

(生きて帰れるかのう……………)

部屋に入ると雄二は机のある方へ、明久は布団の敷いてある方向
かった。その時、

(おい、誰か起きたぞ)

(おそらく姫路じゃな)

(……………一巻の終わり)

姫路が明久を手招きしたので誰もがそう思っていた。

(……………んで、明久は何をやってるんだ?)

(姫路の髪留めを着けているようじゃな)

(……………女装?)

アイツはバカか?

すると向こうが少し大きめの声を出し始めたので、こっちにもかす
かに会話が聞こえてきた。

『ど、どう? 似合うかな?』

『あ、いえ。明久君じゃなくて、私に付けて欲しいって意味だったんですけど……』

(やっぱり明久はバカじゃな)

(むしろ恥ずかしいな)

(………なんという赤っ恥)

そんな俺たちに気づくこともなく、明久が姫路の髪に髪留めを着けだした。

(これで明久はミッションコンプリートってあれ?)

(姫路と何か会話しておるぞい)

(………抱きつかれている)

ムツリ二の言う通り、姫路が明久を強く抱きしめていた。何だ!? 何があっただんだ!?

(明久め……けしからーうらやましいやつだ)

(亮よ、本音と建て前が逆じゃぞ)

(………亮の気持ちはよくわかる)

さすがは我が同志ムツツリーニ。考えることは同じなんだな。

(二人とも。もう姫路は明久を抱きしめてないぞい)

(……………こっちに戻ってきた)

(んじゃ、帰るか)

(そうじゃな)

俺たちは戻ってきた明久と一緒に女子部屋を後にした。

霧島さんに犯行が見つかり、悲鳴をあげている雄二を残して。

第四十三問・テストは疲れる

問 以下の文章の（ ）にあてはまる正しい年と人名を答えなさい。
『紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った（ ）による（ ）が始まる』

姫路瑞希の答え

『紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った（アレクサンドロス大王）による（東方遠征）が始まる』

教師のコメント

正解です。ここに出てくるダレイオス3世とアレクサンドロス大王の間の戦争はイッソスの戦いとアルベラの戦いの二つがあります。両方とも正しく覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った（光の勇者・アーク）による（ファイナルクエスツ）国王最後の聖戦』が始まる』

教師のコメント

“ファイナル”や“最後”という単語があるのに続編がありそうな気配がするから不思議です。

神谷亮の答え

『紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った（巫女とか魔法使いとかメイド）による（異変解^{だんまくご}決^ご）が始まる』

教師のコメント

その頃はまだ“だんまくごっこ”の概念は無いと思います。

坂本雄二の答え

『紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った（アレクサンドロス大王）による（東方遠征）が始まる』

教師のコメント

おや？ 坂本君でFクラスの解答用紙は最後ですか？ まだ吉井君の珍解答を見ていないような気がするのですが……まさか正解していたのでしょうか？

というわけでテスト当口。

「明久。眠気覚ましの薬いるか？」

「いや。いらないよ……」

「そうか……」

明久の顔は、これほどかといくらい疲弊した顔で教科書を広げていた。

「まあとりあえず、復習するか」

優子や優希から聞いた、現代文の解き方をまとめたノートを見直す。

えっと……まずは『気持ちが悪かれています文章を探す』か。なかなか難しそうだ。

今日の科目は全部で六つ。リーディング英語・現代国語・世界史・数学？・化学・保健体育となっている。今回の勝負所は二限目の現代国語。今日こそは良い点数を取ってやる！

「よしお前ら、席に着け。今日は期末テストの一日目だがー」

いつもの時間通りに鉄人がやってきて簡単な連絡事項を告げる。と言っても大した話がなかった為に朝のHRは五分もせず終了した。

さて、復習復習……。

「はい、勉強道具をしまつて下さい。一時間目のテストを始めますよ」

夢中になって勉強していると、いつの間にか監督の先生がやってきた。

勉強道具をしまつてテストの用紙が回ってくるのを待つ。無論、他の科目でも手を抜く気はない。

「毎度のことですが、注意事項です。机の上には筆記用具以外は置かないこと。また、机に何かが書かれている場合はカンニングと見なされることがありますので、自分で書いた覚えがなくても確認するようにして下さい。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、よほどのことが無い限りはー」

テストお決まりの常套句を聞き流しながら前の席から回ってきたテスト用紙を受け取り、裏面にしたまま後ろの席に回す。

よし、やるぞー！

リーディング
英語

() 内の “It” の意味する内容を日本語で書きなさい。

() It won't take you more than
en minutes to your home .

警告 『それ』と書いた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます

“ It ” だから日本語訳は 『それ』 でーってちよつと待った！

危うく問答無用で職員室に行く羽目になるところだった。

というかこの警告、一部の生徒へのピンポイント爆撃な気がする。

そんな感じで一時間目のテストが終わり、次はいよいよ現代国語のテストの時間がやってきた。

さっきと同じように前から回ってきたテストの用紙を受け取り、後ろに回す。

キーンコーンー

「始めなさい」

監督の先生の合図と同時に解答用紙に手をかける。

始めに名前を書き、問題を解いていく。どうやら今回は漢字の書き取りや熟語の問題がいつも多い。これは助かった。けど問題はその後だ。

しばらく問題を解いていると、ついに最大の難関である読解問題を見つけた。

どれどれ……。第12問。A君はこの時どのような気持ちか答えなさい。

えーっと……。A君の気持ちが書かれた文は……。あつた。『Bさんがいなくて寂しく思っている』だ。よし、次！

なんとか問題を解いていき、解けそうな問題もそろそろなくなった時、

キーンコーン---

テスト終了のチャイムを告げるチャイムが鳴り響いた。

「ん~~~~」

先生に解答用紙を渡し、大きく伸びをする。

『(手応えは?)』

「(バッチリさ)」

さて、何点取れてるかが楽しみだ。

第四十四問・True my heart

玲さんがとある人物への尋もーじゃなかった、補習の準備に行っちゃったから、ここでは私こと神谷レンが問題の解説を行うわ。ちなみに問題を作ったのは玲さんだから、その辺は分かってね。

問 酢酸の化学式を答えて下さい。また、その酢酸を使った料理の一つであるマグロのカルパッチョの簡単な作り方を説明して下さい。

島田美波の答え

・酢酸の化学式

『 CH_3COOH 』

神谷レンのコメント

その通りよ。 HCOOH （ギ酸）、 CH_3COOH （酢酸）、 $\text{C}_2\text{H}_5\text{COOH}$ （プロピオン酸）といった具合にカルボキシル基を持つ化合物の式は一定の法則を持っているわ。一つ一つを覚えていくよりも法則を理解して全て並べて覚えると良いわよ。

吉井明久の答え

・カルパッチョの作り方

『確かカルパッチョのソースは、酢とオリーブオイルと塩を混ぜて作ったはず。他にも酢を入れずにレモン果汁のみで酸味を出すっていう作り方もあるしーって、この問題は化学にあまり関係がない気がするんだけど？』

神谷レンのコメント
ツッコんだら負けよ明久。私だってよく分からないんだから。

姫路瑞希の答え

・カルパッチョの作り方

『カルパッチョは？酸味がある？塩味がある？独特の匂いがある？という料理だったので、その条件を満たす化合物を組み合わせてソースを作ると良いと思います。』

なので、ソースの材料の式は CH_3COOH （酸味を持つ酢酸）
+ NaCl （塩味を持つ食塩） + HCN （甘酸っぱい匂いを持つシアン化水素）となります。』

神谷レンのコメント

その材料なら触媒と製法次第で HCl （塩酸）と NaCN （青酸ソーダ）が生成されるのよ。小皿一盛りで成人男性50名を死に至らしめることのできるカルパッチョが出来上がるかと思うと、流石に恐怖を感じずにはられないわ。

桂優希の答え

・カルパッチョの作り方

『カルパッチョのソースは酢とかを混ぜれば良いと思います。』

神谷レンのコメント

え？酢『とか』って他に何を混ぜたの！？

「えっと……コレは………?」

今は学校の帰り道。

俺の目の前では、優子が俺の国語の解答用紙を見ながら引きつった笑顔を浮かべていた。

「俺の……全力だ……」

「それにしても23点って……」

始めのうちは熟語で点数が取れていたのだ。しかし読解問題においては丸や三角がついていたのは1〜2個ぐらいで、後は全部ペケが付けられていた。

「やっぱりいきなりはキツいか」

世の中そう甘くはないってことだな………。

「……ねえ亮」

「ん？」

「その……良かったらなんだけど……」

優子が何かを言いたそうにしている。どうしたんだろう？

「亮がよければ、たまにだけアタシがこれからも国語を教えてあげようか？」

「へ？」

優子が国語を教えてくれるのか？

俺に？

関節が危機にさらされるが、それ以上にありがたい。

「それで、どうなのよっ？」

「是非お願いするぜ！ー！ー！」

「ただし、ふざけた間違え方をしたら、そのたびに関節を逆に曲げるから覚悟しなさいよ」

「え！？ いやいやいや、それは勘弁してくれ！」

そんなことを話しながら、ほのかに暖かい道を二人で歩いていた。

（優希サイド）

「ほら、これが調整の終わった腕輪さね」

私は今、学園長室に来ている。

「前はシステムに不備があったけど、今回は完璧さね。もう大丈夫だよ」

「分かりました」

どうやら私の腕輪にはシステムの障害があったらしく、調整が行われていた。

その代理として『変形』の能力を使っていたってワケ。

……できればテストが全部終了してから呼んで欲しかったな。

「これで用も済んだし、さっさとー」

「召喚してみます。西村先生、許可をお願いします」

「分かった」

召喚許可ももらったし、早速召喚してみようっと。

「ちょっと待つさねー」

「試獣召喚！」

喚び声に応え、姿を表した私のー召喚獣？

「えっと……学園長先生？」

「……学園長。コレはなんですか？」

「そう非難がましい目をするんじゃないよ二人とも。ちょっとシステムの調整に失敗しただけじゃないか」

「……これのどこが、ちょっとですか」

私、今すごい裏の話を聞いている気がする。

「ちょっと見てくれが悪いだけさね」

「ほほう。そうですか」

「そうなんですか」

「ああそうね」

「」「」「」「」

「……夏、だねえ」

「……学園長先生……」

「遠い目をして無駄です」

「はいはい。分かってるよ。それじゃ、桂はさっさと帰りな。西村

先生は、復旧作業を進めるから手の空いている教師を全員連れてきな

「分かりました」

「それは構いませんが、コレが桂以外の生徒に発覚したらどうするつもりです？」

「どうもごつもないさね。さっきも言った通り、問題は見てくれだけだからね。ガキどもが騒ごつが、特に気にする必要はないさ」

「という事は」

「なるようになる、ってだけさ」

「やれやれ……。これだから、この学校は……」

西村先生も大変そうだね。

第四十五問・君の瞳には何が見えていますか？（前書き）

『文学少女と飢え渴く幽霊』（野村美月・著）を読んだことがない、またはネタバレされたくないという人は、この話を飛ばして次の話を読んで下さい。

第四十五問・君の瞳には何が見えていますか？

その日は夏にもかかわらず、天気は小降りの雨だった。

そんな中、傘をさして歩いていると前方に知り合いの二人が相合傘をしているのが見えた。

「天野さんに井上君。お久しぶり」

「お久しぶり」

「久しぶりだね、神谷君」

それなのに何故か二人とも、とても悲しそうな顔をしている。

まるでついさっき大切な人を弔ってきたような。

すると、天野さんが口を開いた。

「……ねえ、神谷君」

「なんですか？」

「君も、二重人格なのよね？」

「？ ええ、まあ……」

いきなりどうしたんだ？ 二重人格の知り合いでもいるんだろうか？

その時、不意にすみれの香りが俺の鼻を刺激した。

見ると天野さんは俺をいきなり、けれどそっと抱きしめていた。

「君は、もう一人の自分を受け入れているのね」

「えっ、ちょっと……本当にどうしたんですか？」

「あの子も……蛍ちゃんも、君みたいな毎日を過ごさせていたら……別の物語の登場人物になって、もっと違った結末を迎えていたかもしれないのに……」

いつの間にか、天野さんの目からポロポロと涙が零れていた。

「ちょっと……井上君。天野さんを落ち着かせて！」

「……ゴメン、神谷君。今は無理だよ」

「……そうか」

井上君の悲しげな表情を見たら、それ以上言葉が出てこなかった。

そのまま待つこと数分。

天野さんの目はまだ多少赤いものの、涙はもう止まっている。

「ごめんなさい。急に抱きしめて泣いたりしちゃって」

「いえ、それは構いませんよ。それより、大丈夫ですか？」

「ええ、私はもう大丈夫。それじゃ行きましょう、心葉君」

「またね、神谷君」

「ああ、またな」

そのまま天野さんと井上君の背中を見送る。

一体何があったのかは聞かなかった。

いや、聞けなかったという方が正しいだろう。

聞いちゃいけないのかもしれない。そんな気持ちだが、俺の中で静かに佇んでいるような気がしたから。

俺は二人の姿が見えなくなった後も、呆然としてしばらくその場に立ち尽くしていた。

その夜、道端で俺は一匹の蛍を見かけた。

その蛍は弱く儂く、けれども力強く光を放っている。

その蛍を見つけた時、天野さんが言った言葉が何故か俺の頭の中に浮かび上がっていた。

『君は、もう一人の自分を受け入れているのね』

『あの子も……蛍ちゃんも、君みたいな毎日を過ごさせていたら……別の物語の登場人物になって、もっと違った結末を迎えていたかもしれないのに……』

俺は、天野さんが呟いていた蛍という人物とは会ったこともなければ話をしたこともない。

けれど、目の前を飛んでいるこの蛍を見ると、不思議と蛍という人の人物像が浮かび上がった気がした。

普段は弱く見えるけれど、実はその内に誰よりも強い思いを抱いている。そんな人物像が。

第四十六問・俺のいない間に、なにやってるんだよ…… b y 亮

（明久サイド）

期末テストも終わり、夏休みまでに（補習を除いて）学校に来るのも後数日となったある日。

「吉井。このプリントを神谷の家に届けてくれ」

「はい」

亮が風邪をひいて学校を休んだ。

「しかし珍しいものだな。亮が風邪をひくなんて」

鉄人からプリントを受け取って自分の席に戻ると、雄二がそんなことをつぶやいた。

「ウチも校門でフラフラの神谷を見かけた時はビックリしたわ」

それでも学校に来てたんだ……。

そんなことを話しながら亮の家に行って行くプリントを整理していると、亮の席に鞆が一つ置いてあることに気づいた。

「何だろ、コレ」

「……おそらく、校内営業用カバン」

「え？ ムツツリーニ、知ってるの？」

「……前に、亮が言ってた」

そういえば亮はムツツリ商会の中でもNo.2だという噂がある。それならムツツリーニが知っていてもおかしくはない。

「ところで、中には何が入ってるの？」

「……わからない」

さすがのムツツリー二でも、そこまではわからないか。

「じ、じゃあ……見ちゃっ？」

『！』

恐る恐る言葉を口にする、教室に残っていた男子全員がこっちを向いた。

「あの、明久君。それって本当にいいんですか？」

「そうよアキ。人には見られたくない物が入っているのかもしれないし……」

女子二名に即座に反対されたけど、そんな僕にクラスの皆が加勢してくれた。

『いやいや違つぞ。姫路に島田』

『神谷なら、見られて困るようなものは入れないさ』

『それに教室に置いてあるんだから、皆のものだろ』

『生ものが入ってたら困るからな』

そんな矢継ぎ早なセリフの間に、そのカバンを僕の卓袱台に置く。

「吉井く〜ん。亮のプリントを受け取りにきたよーってあれ？
何か面白そうなことやってるみたいだね？」

ちょうどその時、Aクラスの桂さんがやってきた。

「……………営業カバン？」

「何が入ってるのかしら？」

「ボクも楽しみだよ」

こうしてFクラスの教室にはクラスメイト（秀吉は部活のため不在）と、あの後桂さんが連れてきた霧島さん、木下さん、工藤さんというメンバーが揃っていた。

「これはあくまでプリント整理のため。決して、亮の秘密を暴いてやるうとか、そういう邪な考えではないよね？ そうだよね？」

「「「その通り」「」」

皆の声が揃った（のかな？）。僕は、満を持してそのファスナーを開く。

「「「……………」」」

皆で中をのぞき込んでみる。しかし、思っていた以上に物がギユウギユウに押し込まれていて、なにがなにやらわからなかった。

仕方ないので、僕が一つ一つ中から取り出していくことにする。

とりあえず一番上に置かれたものから、思いつきり引っ張り出した。

「タワシ」

「「「タワシ!?!」「」」

掌に感じる、ザラザラとした触感。独特のこげ茶色。手にしっくりくるサイズ。

どこからどう見ても、それはタワシだった。

「なんでタワシなんだよ！ ムツツリ商会の営業で、そんなにタワシが活躍する機会って多いか！？」

「あ、待って雄二。なんかタワシの下に紙が……」

僕は営業カバンの中にあつたそれを取り出し、そして、そこに書かれていた文字を読み上げる。

「『粗品』……『東京フレンドーク？』」

「いつ出たのっ！」

ツツコミを入れた美波だけではなく、ここにいるメンバー全員が、既に『営業カバン』の意味不明さに冷や汗を垂らしていた。……亮……君は一体……。

「ま、まあ、そういうこともあるかもしれませんが！ た、たまた

まですよ。ほら、他の物はちゃんと営業に役立つものですよ、きつと」

「そうかなあ……」

姫路さんの言うことも尤もかもしれないけど、僕は既にこのカバンに多大な不安を抱いていた。とはいえこのまま閉じるというのも精神安定上とてもよろしくない気がしたので、タワシを置いて、次を取り出すことにする。

「け……拳銃っ!?!」

「「「きゃああああああつ!?!」「」」

教室内に女子（霧島さん以外）の悲鳴が木霊する。僕は右手に持ったその黒光りするそれを、改めてじつくりと――

「つて、あれ？ これ、オモチャだ」

「ふえ?」

さっきまで肩を震わせていた桂さんが、僕から銃を受け取る。彼女はそれをカチャカチャと弄り、そして……。

（ぼん）

引き金を引いた瞬間、銃口から花束が飛び出した。……典型的な、子供だましのマジックアイテム。

……。

「……（だから、なぜ……）」

虚しく銃口から咲き乱れる花を眺めながら、全員で考え込む。……これが必要になる営業って、一体どんな営業だったんだろう。

空気がとてもいたたまれなかったので、次の物を取り出す。

「書籍『気配の消し方』お仕置きから奇襲まで」

「……」

「四人とも、どうしたの？」

美波と姫路さん、霧島さん、木下さんが本に並々ならぬ興味を示しているようだ。

「あとでウチも読んでおこうかな……」

「私も、そうします」

「……私も」

「アタシも読んでおくわ」

なんで読む必要があるんだろう？

そんな疑問を抱えながら、次の物。

「っ……。……除霊用『清めのお塩』」

「いやああああああっ！！！！」

姫路さんと美波が、ブルブル震えてしまっていた。

「それが必要になる営業ってなに！ なんなの！？」

「それは、多分……」

「待って下さい明久君！ 聞きたくありません！ 知りたくありません！」

「そ、そうだね……」

僕はそつと、そのお塩の袋を脇によける。ちなみに、袋には『安心！ 神無ブランド』と書いてある。……ブランドとかあるんだ、その業界にも……。

いよいよ営業カバンの中身は混沌としてきたけれど、ここでやめるわけにはいかない！

僕は勇気を出して、再びカバンに手を入れた。

どうやら二つでワンセットになっているらしく、二つともまとめて取り出してみる。

「十字架と……ニンニク」

「神谷君は毎日放課後なにと戦っているの!？」

流石の工藤さんも、驚きを隠せないみたい。……亮……君の校内営業って、本当に一人でこなせるものなの？

いよいよ亮の『営業』が怖くなってきたけど、もう僕の手は止まらない。

「……………手錠」

「そんなもん何に使うんだよ!」

「……………雄二。大丈夫」

「翔子。大丈夫って一体どういうー!」

「……………私も持ってるから」

霧島さんは自分のカバンから手錠を取り出して、雄二に見せていた。

なぜか雄二の顔が真っ青になっている気がするけど、多分暑さによられたんだろう。

霧島さんが手錠をカバンにしまうのを待ってから、改めて亮の営業カバンの調査を再開する。

「銀の弾丸」

「……………敵は吸血鬼だけじゃない」

「アタシらの学校の中って……………夜、色々徘徊しているのかしら……………」

木下さんの笑顔がひきつっている。ここまで来たら、僕も怖くなってきたよ。

亮の『営業』に非日常の影を感じつつ、僕はどんどん調査を進める。

「？ なにこれ……霧吹き？」

出てきたのは、ちっちゃな霧吹きだった。試しに机の上でシャツと吹いてみても、とくにどうという事はない。

「……………これはまさか」

皆で首を傾げていると、ボソツとムツツリーニが呟いた。

「ちょっと誰か、電気を消して！」

桂さんの突然の指示に戸惑いつつも、電気のスイッチのそばにいたクラスメイトが電気を消してくれた。教室内が、暗闇に包まれる。

すると、

「ちょっとアキ。光ってるわよ」

「綺麗です……」

美波と姫路さんが、点々と光る机の上の紋様に見惚れている。

でも……見惚れているのは美波と姫路さんだけで、Fクラスの皆は、テレビで見る知識と、先日のある出来事を思い出し、表情を強張らせていた。

（ねえ吉井君。ここで一体何があったの？）

（この前ここでムツツリーニが鼻血を垂らしたんだ）

それを聞いてAクラスの皆の表情が変わった。そう、これは紛れもない――

「ルミノール反応!?」

ルミノール反応。それは、科学捜査において血痕を探す際に用いられる、化学反応。血の付着していた場所が、特殊な薬液を振り掛けることによつて、淡く発光する現象。

「(け、血痕を追う必要のある営業つてなに!?)」

というかこの薬液つて、亮の自作なんだろうか？

……電気をつけて、室内に光を取り戻す。姫路さんと美波が若干残念そうだったけど……あれ以上暗闇にいたら、どうにかなってしまつたかもしれない。

今見たことを早めに忘れようと、僕はカバンに手を入れる。

「携帯ゲーム機」

「それでも遊んでいる暇とかあるんだっ！」

ある意味とても普通の物なのに、今となつては逆に怖かった。営業カバンに入ってるってことは、もしかして、これさえ何かに使うの

かな？

ちなみに、入ってるソフトは、『モンスターンター』だった。……
……やっぱり、遊んでいるだけ？ でも……。

……今の考えは忘れよう。

カバンの中身も残り少なくなってきた。ゴールはもうすぐだ！

「えと、カロリーメイト、手回しラジオ、長期保存用飲料水……」

「亮……アンタ、何かに備えてるの？」

普通に考えれば、単純に地震などのために備えているだけだと思えるけど……。今までの品揃えを見た後では、なにかそれ以外の『災害』に備えている気がしてならない。

教室を、不穏な空気が満たし始めた。

……ああ、今になって気が付いたよ。亮の営業カバンは……パンドラの箱だったんだ。開けちゃいけないものだったんだ。

でも……パンドラの箱だと言うのなら、最後には希望が残されるハズだ。

僕は未来を信じる！

ここからは、もう勢いでいくしかない！

「石の仮面」

「亮！ 人間をやめちゃダメだよ！」

「発煙筒」

「最早活動場所が校内とは思えねえ！」

「ドッグタグ」

「亮はどこかに所属しているの!?!」

「遺書」

「いつ死んでもいい覚悟があるんですか!?!」

「血の付いた、もう一つのドッグタグ……」

「……………戦友が死んだ？」

「リップクリーム」

「こんな状況でも手入れには気をつけているんだね、神谷君！」

「あれ？ カバンの隠しポケットに、ビニールに入れられた白い粉が……」

「……何か運んでる？」

「焦げたサングラス」

「誰かの形見っばいねっ！」

「ん？ あれ？ カバンの裏に何かついて……発信機？」

「まだ危機は去ってねえのかっ！」

「あ、手紙あるよ。読むね。『カミヤ……。お前がこの手紙を読んでいる時、俺はもう生きていないだろう。すまない。しかしもう、お前に託すしかないんだ。あの日、俺たちはエリア51で……』」

「読まなくていいです！ もう聞きたくないです！ 聞いちゃいけない気がします！」

「ボールペン」

「たまに日常が挟まってくるよね！」

「あ、もうないや」

「なんか変な終わり方したわね……」

というわけで、亮のカバンの中身を全部出し終わった。……卓袱台の上を見ると、今や、どうやってこの小さなカバンの中に全部収まっていたのか想像出来ない物量の、カオスな物品が散乱している。

いやいや、いくら僕でも、亮がこんなにたくさんのお仕事をこなせるとは思えない。

僕は携帯電話をスピーカーカーホン状態にして皆に聞こえるのを確認すると、亮に電話をかける。

『もしもし……「がほっ」！』

数コール後に亮は電話に出た。

「あ、亮。僕だよ」

『明久か。一体どうしー「がほっ」！』

「ねえ亮、あの、営業カバンのことなんだけど……」

『「がほっ」、「がほっ」、「がほっ」、「がほっ」』

「ちょよ、ちょつと亮！？ 大丈夫！？」

「だ、大丈夫だ。駄目だな……最近、深夜まで汗だくで校内を全力疾走することが多かったから……遂に風邪ひいちゃったぜ」

「深夜まで校内全力疾走！？ ちょよ、亮、君の営業つてー」

「あ、ちょつと待て明久。昨日捕まえたルシフェルが逃げ……よつと！ お待たせ。なんだつて？」

「なに！？ 今なにが逃げそうになったの！？ その不吉な名前の存在なに！？」

「げほつ、がほつ、ごほつ！……ちっ……こりゃあ、まだ『呪い』が残ってたか……」

「亮、風邪なんだよね！？」

「は？ ああ、風邪だぜ。アハハハハ」

「なにその三文芝居！ なんか隠してる！？ 隠してるの！？」

「明久、さつきからおかしいぜ？」

「う、うん……ごめん。ちょつと、落ち着くよ……」

数回深呼吸を繰り返し、冷静さを取り戻す。……よし、大丈夫。

——と、電話のむこうから妙な音声が聞こえてきた。

『……《緊急任務よ、カメラヤ！ ロンドン上空に『奴』が現れたわ！ 現地のエージェントと合流して、今度こそ『奴』を討——》』

そこで、ぶつっと、不自然に謎の音声が途切れる。

え？ 今の……何？

『明久。俺、ちよつと寝るから、もう電話切るぜー』

「いやいやいや！ ロンドンだよ！ 今からロンドン向かうんだよねー！」

『ハハハ。ナニヲイツテイルノヤラ』

「最早演技にさえなつてないよ！ 亮！ 君、一体本当は何者——」

『明久、さつきから何を言ってるんだ？ 俺は、ただの高校生だ。大丈夫か？』

「……う、うん。ごめん。そ、そうだよ、さつきのは僕の聞き間違——」

『《カメラヤ、何してるの！ 早くして！ 貴方が居ないと……『奴』に地球が滅ぼされるのは時間の問題よ！》』

「!?!」

『あ、悪い、明久。ちよつと、急ぎのバイトが入ったから、そろそろー』

「バイト!? バイトなの!? 君が関わっているその地球規模の何かは、バイトなの!? 君の異常行動は、営業だけじゃなくバイトにも及んでいたの!?!」

『げほつ、がほつ、ごほつ。……くつ……全然力が湧かない……』

「なんか大ピンチだよね!? 何気に今、地球大ピンチだよね!?!」

『何言ってるんだ、明久。俺の体調が悪いだけで、別に地球とかは関係ないぜー』

「そ、そう、だよ。うん……さっきまではそう信じていたんだけど……」

『あ、じゃあ、そろそろ切るぞ』

「え? あ、うん。そうだね……ごめん、風邪なのに変な電話しちやつて。ちよつと僕、色々あつて、動転してて……」

『ま、気にすんな。少し気分が楽になつたし』

「それじゃ、お大事に」

『ああ。じゃあ……このケータイ、海外じゃ通じないから、切るぜ』

「！？」

『じゃっ』

『亮！？』

ツィ、ツィと、無機質な電子音が聞こえてくる。

僕と亮のやりとりを聞いていた皆に、確認の意志を込めて、キツパ
リと告げた。

「皆——亮は——」

「『『本物だ』』」

（亮サイド）

俺は、ベッドの上にダイブすると同時に、携帯を床に落としてしまった。

「……………?」

やべえ、くらくらする。昨日ぐらいから……………頭がぐつつちゃぐちゃで、自分が何してるのか全然わかんね。なんかさっき明久から電話来ていた気がするけど……………なんか、テキストに喋った気がする。

「あ……………そういや、営業カバン……………」

そうそう。昨日……………体調が優れない秀吉の代役で演劇の立ち稽古に参加したんだっけ？

それで、ルミノール反応をする薬品を作ってあげて……………そんなこんなで、演劇部員と仲良くなったんだ。

それでその人たちと一緒にあって、もう使わない演劇の小道具を営業力バンに詰めまくった気がする。

その時はすごい妙なテンションだったから、秀吉が昔脚本したっていうSFドラマを撮ってしまったし。他にもノリの良い部員を巻き込んで。

さつき明久から電話来た時に丁度そのDVDかけてただけど…途中で一回大音量にしてしまったような。

慌ててミュートにしたけど、もう一回ぐらい音量ボタン押しちゃったりしたっけ？

やっちゃまったなあ。聞かれたらろくなあ。

ま、いつか。いまはとにかく、風邪を治さないで。

「えっと明日は……バイトと営業……ルシフェルが……ロンドンで……」

あれ〜？ 駄目だ、昨日から、どうも現実とあのドラマがごっちゃになってる。

……こりゃ、とても人と話せる状態じゃないな。もしかしたら、明久にも変なこと言ったかも。

ま、いくらアイツがバカとはいえ、荒唐無稽な妄言を信じることはないだろ。

それに明久の声と一緒に他の皆の声も聞こえていたから、もし明久が俺の言うことを信じていたとしても、なんとか言ってくれるだろ。

よし、明日皆に会ったら、心配かけたことを謝るか……。

ちなみに、翌日。

「「「お勤め、ご苦労様です!」「」」

「……は?」

学校に行ったら、何故かAクラスの知り合い及びFクラスの全員に
全力で敬礼された。

第四十六問・俺のいない間に、なにやってるんだよ…… b y 亮（後書き）

この話にデジャヴを感じた方、安心して下さい。それは気のせいではありません。

第四十七問その一・男女の双子が入れ替わるってネタはよくあるよね？

「ーというワケで、Aクラスを使って文月学園のプロモーションムービーを制作しようと思うんだよ。いいかい、高橋先生？」

「はい学園長。私からは反対する理由は何もありません」

「やれやれ助かるよ。最近どうも、どこぞのバカどものせいでうちの学園の評判が悪いようですねえ……」

「心中お察しします」

「それで、Aクラスの生徒たちのうちの何人かにも出演してもらおうと思うんだけど、どうだい？ 誰を出演させたら良いかねえ？」

「そうですね……。学年主席の霧島翔子さん、次席の久保利光君を中心に制作するのが妥当だと思いますが、あの二人は残念ながら愛想に欠ける部分がありますので」

「くくくつ。アンタがそれを言うとはね」

「客観的な意見を述べただけです。私自身も愛想に欠けることは重々承知の上ですから」

「おや、気分を悪くしたかい？ それはすまなかつたね。話を続けておくれ」

「いえ。……そうなると成績優秀で勤勉、且つ明るい性格の生徒ということではー木下優子さんを中心に制作するのが宜しいかと思わ

れます」

「ふむふむ。候補は一人だけかい？ 他にはいないのかい？」

「いないこともありませんが、若干のリスクを伴うかと」

「リスク？」

「はい。例えば、工藤愛子さんや桂優希さんといった成績優秀で明るい性格の生徒たちがいるのですが」

「ふむ」

「まず工藤愛子さんを中心にする場合、流れによっては放送禁止用語の検閲やモザイク等の処理が必要になる可能性があります」

「……………」

「更に桂優希さんの場合は、某死神少年漫画のようなバトル展開になる可能性が高いです」

「…………… Aクラスだけは…………… まともだと思ったんだけどねえ……………」

「学園長。今のは私の冗談です」

「アンタの冗談は全く笑えないさね！？」

「ただ、彼女たちは少々性や戦闘に関して奔放なところがありますので、勤勉な学舎をイメージさせるには不適かと」

「そうかい。……よし。それじゃ、木下優子って子を中心に作るのか。本人にこの話を伝えておいてもらえるかい？」

「わかりました」

「ところで、その子は歌も達人かい？」

「と、仰いますと？」

「うちの学校の合唱部は人数が少ないからね。校歌斉唱もその子を中心にAクラスの生徒と合唱部でやってもらいたいのださ」

「それはわかりませんが、恐らく彼女であれば問題ないでしょう。双子の弟の木下秀吉君は演劇部でオペラをこなせるほどですので、姉である彼女も素質はあるかと」

「それはまた、何でもできる素晴らしい生徒さね」

「ええ。彼女ほど品行方正で見目麗しく、成績優秀且つ社交性に富んだ模範的な生徒は他にいません」

「ひはひはほはへほほほへへひふんはほ」

「えっと……とりあえず色々ツッコみたいが、まずは口の中の食べ物飲み込め」

今は昼休み。俺は優希と学食に来ていた。

「だから、時代はオサレを求めているんだよ」

……また何かの作品に影響されたんだろうか？

「というかオサレって何だよ！？ オシャレじゃないのか!?!」

「わかってないな。亮は。その二つは全然違うんだよ？」

よく分らん。

「……………亮」

「どうしたムツッリーニ」

ムツッリーニがいつの間にか俺の近くに来ていた。

「……………この写真を基に絵を描いて欲しい」

ムッツリーニが渡してきたのは、秀吉の寝顔写真だった。

……こんな大胆な写真、どこで手に入れたんだろう。

「ま、とりあえずやってみるさ」

この写真なら、もうちょっとはだけた格好の秀吉が描けそうだ。

「……よく分からないけど、ほどほどにね」

優希が箸を持ちながら、苦笑いを浮かべている。

「しかしよく食うなー」

「これくらい、よゆーよゆー」

「……驚異的胃袋」

俺とムッツリーニが驚いているように、優希の目の前には（こ）飯は超大盛りの（トンカツ定食があった。

これで太らないのだから不思議だ。痩せの大食いってヤツか？

「んむ？ 亮やムツツリーニだけでなく、桂も今日は学食かの？」

「あ、うん。もしかして木下君も？」

「うむ」

秀吉はうどんを乗せたお盆を持っていた。

「あれ〜？」

「どうした優希？」

「なんか急に食欲なくなっちゃった」

（おいムツツリーニ、優希がおかしいぞ）

（……………むしろ恐ろしい）

コイツ、意外と黒いんじゃないのか？

その日の放課後。

鉄人不在のため、補習は自習となっている。

で、私たちFクラスはというと、

「しまった！ 須川が窓を伝って隣の教室に逃げたぞ！」

「あのブタ野郎……！ 異端審問会の血の掟に背いて、Dクラスの玉野さんにケータイの番号交換を迫っていたという噂は本当だったのか……！ いいか！ 今この時よりヤツは会長ではなく反逆者だ！ 見つけ出して始末するんだ！」

「『了解！ 神谷会長代理、指示を！』」

「なんで私なの……それじゃ、AとE部隊は須川を捕らえ次第異端審問会にかけて。携帯電話のメモリー削除も忘れずにね。番号交換に成功していた可能性もあるわ。FとG部隊はあらゆる手段を用いてアイツの悪評を流して。特にDクラスは念入りにね。H部隊は船越先生（四十六歳 独身）のところに向かって。一度人生の墓場というものを教えてあげなさい」

「『了解！』」

勉強なんて全くやってなかった。

「（というか、なんで私まで……）」

『（その割にはノリノリじゃねーか）』

「（まあ、面白そうだしーってあれ？）」

教室にいつの間にか秀吉が戻ってきていた。

「秀吉、どこに行ってたの？」

「ちょ、ちょっと用事があったのじゃ」

「用事ねえ……」

なんだかいつもの秀吉と雰囲気が違う気が……。

ふーん。なるほどね。

「（亮。私ちよつと寝るから替わってくれる？）」

『（？） 分かった』

（優子サイド）

『報告！ 新情報です！ 須川の悪評を流す為にF部隊がDクラスの玉野に接触したところ、彼女は須川に興味はなく、「それよりアキちゃんについて聞かせて欲しい」と繰り返していたとのこと！ 繰り返す！ Dクラスの玉野美紀は吉井明久に興味あり！』

「さらばだっ！」

報告を聞いた瞬間、吉井君は覆面を放り捨てて、脱兎の如く駆けだした。

『逃がすな！ 予備戦力で追撃隊を組織しろ！ これ以上ヤツの横
行を許すな！』

『だが待て！ 玉野はアキちゃんと言っていたらしいじゃないか！
正直、吉井には虫酸が走るがアキちゃんなら俺も興味がある！』

『実は俺もだ！』

本当に……このクラスってバカだらけ……。

でも、これはこれで都合がいいかも。幸いにも自習時間みだし、
これなら堂々と秀吉の様子をチェックできるもんね。えっと、確か
このラジオみたいな機械でーっつと。

アタシのすぐ前でこっちをじっと見ている亮を尻目に、スイッチを
入れてー

「って亮！ アンターーお主何をしておるのじゃ!？」

「それはこっちのセリフだ秀吉。お前は盗聴器そんなもので何をしようとしているんだ？」

「両手にドライバーを持っているお主に言われたくないぞい……」

コイツは一体何をしようとしているのかしら？

「まあ犯罪だけはするなよ」

亮はそのまま立ち去っていった。

危なかった。もう少しでバレるところだったわ。

昼休みに土屋君から借りた機械についているイヤホンをつけてスイッチを入れる。すると少しの間だけ耳障りなノイズが走り、徐々に音がクリアーになっていった。

『ー子ちゃん。それはびっくりだよ』

『え？ アタシ、優希に何か驚かれるようなことを言っただけ？』

あ。聞こえてきた。これって秀吉の声でいいんだよね？ いつもの秀吉の声とはちがうように聞こえるけど、これが他の人が聞いた時

のアタシの声なのかな。音質が悪くて、誰が喋っているのかわかりにくいし。

でも、優希と一体どんな話を――

『まさか優子ちゃんが、ドがつくほどのMだとは思わなかったよ』

あのバカ、一体何を話してるのよ！

私はバカな弟を止めるべく、ダッシュでAクラスの教室に向かった。

第四十七問その二・噂はすぐに広がるから注意した方がいい

「……アンタ、優希と何を話していたのかしら……？」

のほほんとしている秀吉の手首と肘をギュッと抱え込みながら、アタシはにこやかに質問してみた。

「んむ？ 他愛もない雑談をしておったのじゃが、その際によく使う道具についての話になったの」

「うんうん。……それで？」

「姉上の思考を読み、『鞭を使うのが好き』というニュアンスを伝えようと思ったのじゃが、どうも言葉の選択を誤ったようでの。桂は『鞭で打たれるのが好き』という意味に受け取って姉上を被虐愛好者だと勘違いしたようでーあ、姉上っ！ ちが……っ！ その関節はそっちには曲がらな……っ！」

「このバカ！ いつアタシが鞭で打つのが好きって言ったのよ！ 乙女小説でそういうシーンをたまに見かけるだけで、実際に鞭は使わないし使われたくないのよ！？ 誤解を招くようなことは言わないですよー！」

「りよ、了解じゃ！ 次は間違えぬようにしようー！」

「ホント、頼んだからね……っ！」

撮影もあるので秀吉にけがをさせるわけにもいかない。この代償は後できつちりと払ってもらおうとして、今は目先のことに集中させないと。

捻り上げた手首と肘を解放してやると、秀吉は腕をさすりながら教室へと戻っていった。さて。アタシもFクラスに戻らないと。

『……優子』

『あ、代表。なに？』

教室に戻ってイヤホンをつけると、今度はまた別の人の声が聞こえてきた。このしゃべり方だと、多分相手はAクラス代表の霧島翔子さんじゃないかな。

『……そこ』

『そこ？ なになに？』

『…………スカート、めくれている』

あのバカ、またボ口を出して…………！演技はともかくとして、動きが無防備過ぎるのよ！

いつばれてしまうのかとやきもきしているアタシの気持ちも知らず、イヤホン越しの秀吉の声は、まるでスカートが捲れていることなんてなんでもないように平然としていた。

『心配してくれてありがとね、代表。でも、大丈夫なの』

『…………大丈夫って？』

『見られても大丈夫ってこと』

『…………でも、スカートがめくれたら』

『うっん。そのくらい平気なの。だって』

『…………だって？』

『だってー今日は、きちんと下着を穿いているもの』

トトトトトトトト

「アンタ何てことを言ってくれてんのよ!? あれだとまるでいつもアタシがノーパンみたいでしょ!?!」

「いつもと違ってスカートの下にスパッツを穿いているから大丈夫という意味じゃったのじゃが」

「そういう風には聞こえないのよ!」

「じゃが、スパッツは分類的には下着に入ると」

「黙りなさい! とにかく、ああいう迂闊な発言は二度としないように! あと、スカートの裾には気をつけなさい!」

幸いにも代表しか聞いてなかったみたいだからまだマシだけど、そうでなかったらアタシの評判が大変なことになっちゅうじゃない!

「むう……。了解じゃ。気をつけよう」

秀吉を解放してAクラスに戻らせる。

あのバカは目を離すと何をしでかすやらわからないので、アタシはFクラスの教室に向かって歩きながらイヤホンを装着した。

『き、木下さんっ!』

『？ 何？ えっとー』

『Fクラスの横溝浩二です。実は、えっと、その……』

Fクラスの横溝浩二君？ 誰だろ？ 今まであまり話したこともない人だったと思うけど……。なんだか緊張しているみたいな声だし、まさか……

『じ、実は僕、木下さんのことが好きなんですっ！ 付き合っ下さいっ！』

やっぱり告白！？ 彼の気持ちは嬉しいけど、アタシはこの人のことをよく知らないし、申し訳ないけどこの話はお断りさせてもらいたいかな。秀吉が相手を傷つけずにうまく断ってくれたらいいんだけど……。

なんて思っていると、秀吉はきちんとアタシの考えをわかってくれたようで丁寧に断りの文句を告げてくれた。うんうん。さすがは双子ね。きちんとわかってるじゃない。

『あの……気持ちは嬉しいんだけど……』

『そ、そんな……！』

『じめんなさい』

イヤホン越しに秀吉が頭を下げる様子が伝わってきた。

アイツもやればできるじゃない。上手にお断りしているわね。……
なんだか断り慣れている気がするのが釈然としないけれど。

『それなら、木下さんの好みのタイプを教えてくださいっ！ 僕、頑
張って木下さん好みの男になるから、そうしたらー』

尚も食い下がる横溝君。ちょっとしつこい気もするけど、そこまで
好かれているっていうのも悪い気はしない。

とは言っても、さっきの返事は変わらないんだけどね。

『それでも……じめんなさい』

『ど、どどして……？』

『だって、アタシはー亮にしか、興味がないから……』

『亮って、神谷亮？』

『うん……』

トトトトトトトト

「殺すわよ」

「あ、姉上、何をいきり立っておるのじゃ。とりあえず落ち着くのじゃ」

「落ち着けるわけないでしょ!？」

「姉上が亮に気があるのは承知しておったのじゃが」

「ぐっ……」

でもなんでアイツの名前を出すのよ！ そりゃまあ、全く興味がな
いってワケじゃないけど……。

「ところで、さっきのアンタのお断りの台詞、当人以外には誰にも
聞かれてなんていないわよね」

「亮にしか興味が無いという話かの？」

「そうよ。あんなの誰かに聞かれたら大変なもの」

多分大丈夫だと思うけど……。もしも聞いている人がいたら、ソイ

ッには消えてもらうしか……。

「目撃者はわからんが、演技の方はもう心配無用じゃ。今からはきちんと姉上の演技を徹底しよう」

「もうかなり色々手遅れになってる気もするけどね……」

毒を食らわば皿まで。ここまできたら最後までコイツにやらせよう。失う物なんて、もう何もないしね……。

〈亮サイド〉

「ねえ亮。今から一緒にAクラスの教室に行かない？」

「悪い明久。もう少しで暇になるから先に行っててくれ」

さて。いよいよ作業も大詰めになってきた。

「よし、完成だ！」

この薬は……イケるっ！

「あの、神谷君。一体何を作っているんですか？」

「姫路か。コレはなー」

『見つけたぞ神谷！』

いつの間にか異端審問会の皆が集結していた。

「お前ら……一体どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないっ！ 貴様、木下さんになんて羨ましービドいことを……」

あの……俺が優子にビドいことをされているのはわかるんだが、

「俺が一体優子に何をしたって言うんだ？」

すると異端審問会の内の一人が、何をバカなこと言ってるんだ、と

言わんばかりの顔をした。

「毎晩木下さんとS（エスム）プレイを楽しむだけでは飽き足らず、常に木下さんをノーパンで過ごさせているそうじゃないか！」

「えーっと……」

コイツらの言っている意味が全くわからない。

「神谷君。できればその、今後の参考の為に、どんなコトをしたのか教えてくれませんか？」

「いやいや姫路！ ウソだからな！？俺はそんなことをした覚えはないぞ！」

と、いつか姫路は明久をどうするつもりなんだ？

「覚悟しろ、神谷！」

いつの間にか囲まれてしまった。

こじなったら……

「なんだ！？ 神谷の右目に四の字が！」

「こいつまさか……」

「クフフ……。皆さん、覚悟して下さいね……」

なぐんでパイナポーな設定は俺には一切なく、普通に返り討ちにした後俺は明久と秀吉がいるAクラスの教室前に向かった。

く優子サイドく

「あがあっ！ 何秀吉！？ どうしたの！？ どうして突然僕に關節技を！？」

「いいから全て忘れなさい！ この痛みで全部記憶を書き換えてあげるから！」

「ひ、秀吉！ よくわからないけど胸が！ 微かに柔らかい感触が僕の腕にあがあっ！」

「『微か』って何よ！ 一応あるにはあるんだから！」

「どうしたのさ秀吉！？ 急に暴力だなんて、僕が一体何をふぎやあああっ！」

「とにかく全部忘れなさいいっ！！」

「なに！？ どうして僕がこんな目に遭ってるのさーっ！？」

「お前ら何やってるんだ？」

吉井君に關節技を繰り出していると、亮が呆れた顔でこっちをみていた。

「あ、亮！ 実は秀吉の胸が少し膨らんでいるんだ！」

「はあ？ そんなワケないだろ？」

「ならコレを見てよ！」

そう言つて吉井君はアタシの胸を指差す。

そして亮は、

「どうせ詰め物でもしてあるだけーあれ？」

何の躊躇いもなくアタシの胸に手の平を押し付け、

「ほ……本物だ……」

呆然とするアタシをよそに、啞然としながらも感触を確かめるようにグニグニと揉みだした。

「……………」

「おい秀吉！？ 突然どうしーぎゃああああつー！」

気が付くと、アタシは亮に全力で関節技をかけていた。

翌日からアタシと秀吉と亮に噂がそれぞれ流れてしまった。

まあ、こうなったら気にしたって仕方ないし、放っておきましょう。

少し待てばもっと凄い話題が出て、これらの噂は忘れられるだろうから。

第四十八問・超番外編前編！ それいけボクらのジャスティス！（前書き）

今回の番外編は、ウツソ・エヴィンさんのリクエストです。

少し短いですが、存分に楽しんで下さい。

第四十八問・超番外編前編！ それいけボクらのジャスティス！

「つ、ついにこの薬が完成した……っ！」

「亮君、もう起きてるの？ まだ朝の5時だよ？」

「あ、スマン、姉貴。起こしちまったか？」

「ん〜ん。今日は仕事がお休みだから、徹夜でマ オしてたの。今から寝るところ」

「凄まじく墮落した生活だな。だから背が伸びないんじゃないのか？」

「だからちっちゃくないも〜ん……」

「秀吉。ちょっといいか？ たなびたいーじゃなくて頼みたいことがあるんだ」

この日の授業もようやく終わって放課後。俺は帰ろうとする秀吉を

呼び止めた。

「頼みたいこと、かの？　ワシにできることなら構わんぞい」

「そうか。実はー」

俺は息を深く吸い込み、秀吉に告げる。

「お前が本当に女かどうか確かめさせて欲しいんだ」

その瞬間、秀吉が固まった。

「な、何を言ってるんだよ亮！」

「どうした明久」

「秀吉の性別はもはや『秀吉』か女性なんだよ！？　確かめる必要はないんじゃない？」

「明久！ ワシは男じゃ！」

あ。秀吉が復活した。

「コレさえあれば、その疑問も今日で終わる！」

俺は鞆から一本のピンを取り出した。

「ねえ亮。コレって何？」

「ん？ いわゆる性転換薬」

「へえ。性転換薬か」

つて、性転換薬！？」

「遅いぞ明久！ そんなんだったら敵は火星から月まで来てるぞ！」

まったく。弛んでるとしか思えない。

「か、神谷君！ 木下君にそれを使っちゃダメです！」

「大丈夫だ姫路。効き目はだいたい24時間ぐらいだし、きちんと安全かどうか確認したからー」

「それは明久君に使うべきです！」

うわあ。明久がすごく困った顔をしている。

「姫路さん！？ いきなり何を言い出すの！？」

「そつだぞ姫路。もう一本あるんだから二人に使わないと」

「亮もそついう問題じゃないよ！」

「それよりワシがやるのはいつ確定したのじゃ！？」

そりゃもう最初から。

「というわけで二人とも、準備はいいか？」

「「よくなさ(ぞう)……!」」

数分後

「すごい……本物です」

「実験成功だな」

「何でこんなことに……」

「屈辱じゃ……」

とりあえず姫路が検証した結果、秀吉も明久も女性になっていることが分かった。

「まあまあ二人とも。明日は休みだし、そのまま家にずっといれば誰かに見られる心配はないさ」

「そういうことじゃーあれ？ 姫路さん、一体どこまで連れて行くの？」

「元に戻る前に色々な可愛い服を着てみましょうね。明久君ーいえ、アキちゃん」

「え、ちょっと待って姫路さーいやああっ！」

「……………秀吉、帰ろっか」

「……………そうじゃな」

姫路に引きずられていく明久を、俺と秀吉は遠い目を見ていた。

しかし、俺の勘が告げている。

「そのままじゃ終わらないと聞いてよきよき！」

第四十九問・超番外編後編！ I Wish（前書き）

今回もウツソ・エヴィンさんのリクエストです。

ゲストキャラが登場します。

第四十九問・超番外編後編！ I Wish

「秀吉。落ち込んでいるみたいだけど、一体どうしたの？」

「実は色々あっての。今のワシは女になっておるのじゃ」

「え！？ ……ホントだ」

「……わかってもらえたかの」

「ふうん……いいコト考えた。秀吉、メールしたいからちょっと携帯電話貸して」

「姉上。そんな怪しい笑みを浮かべながら頼まれても、嫌な予感しかしないのじゃが」

「貸してくれるよね？」

「あ、姉上っ！ 違……っ！ その関節はそっちには曲がらなっ！」

P i P i P i P i P i ! ! !

突如、俺の携帯電話からメールの着信音が鳴った。

【Message From 木下秀吉】

もしお主が暇なら、明日の昼からワシと一緒に買い物をして欲しいのじゃ

家に引きこもりたいところをあえて外に出てくるとは……さすが秀吉だ。

とりあえず了解の返事をしておいた。

翌日の昼過ぎ。待ち合わせ場所で待っていると、遠くから秀吉が駆け寄ってくるのが見えた。

「待たせてしまったかの？」

「いや、大丈夫だ。今来たばかりだし」

秀吉は膝丈のスカートとTシャツの上にキャミソールを重ねた格好をしている。

「それじゃ、行くか」

「そうじゃな」

俺と秀吉は近くにあるデパートへと向かった。

（優子サイド）

亮はアタシを秀吉だと思い込んでいるみたいだし、とりあえず第一段階は成功ね。

秀吉には家でおとなしくしてもらっているし、今の内にアタシに対する亮の本音を聞き出してやるんだから！

く亮サイドく

今俺たちはデパートの服売場にいる。ここには服の他にもハンドバッグやアクセサリーといった小物類も売っていて、店内は結構広い。

で、現在どんな状況かというと、

「……………居場所がない」

女性用の服売場ゆえに周囲からの視線が痛かった。

まったく。こんな場面を知り合いに見られてもしたらー

「じ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「……優希か？」

うわぁ……。やっぱりこうなったか。

そして、俺と秀吉を交互に見て一言。

「亮がソツチ側だったとは思わなかったよ」

「違うからな！？俺はノーマルだぞ！」

「じゃあどうしたの？」

「実は斯く斯く然々あってだな」

「亮よ。それだけでは伝わらんぞい」

「へ〜。亮が作った性転換薬を飲んで女性になった秀吉君と買い物してるんだ〜」

「どうしてあれだけで伝わるのじゃ……？」

そこは「愛嬌」ってことだ。

「それで、優希も買い物か？」

「うん。それでさっき、よさそうなTシャツを見つけたから、今から会計に行くところ」

優希の持つシャツの胸元には、『ミラクル』の文字があった。

なんだか不思議なデザインだ。

「んで優希、さっきからずっと気になってたんだけど」

「うん」

「その人たちは知り合いか？」

優希の横には三人の女の子がいた。

「知り合いというか、さっき知り合ったばかりだよ」

三人の女の子のうち、長い青髪の女の子が優希の代わりに答えてく

れた。

しかしこの子、家の姉貴ぐらいの小ささだ。

「ごめん、ちょっと会計を済ましてくるね」

優希はTシャツを持ってレジに行ってしまった。

しかしこの小さい子、ひよっとしたら……

「君は……もしかして高校生？」

そう尋ねると、その子はとても驚いた顔をしていた。

「かがみ！ まさか、こんなに嬉しいことを言われるとは思わなかったよ」

「はいはい。良かったわねこなた」

かがみと呼ばれた、少しつり目で長い紫色の髪をツインテールにした女の子がこなたという子の頭を撫でている。

「自己紹介が遅れたね。私は泉こなた。それで隣のいかにもツンデしそうなのが柊かがみ。その隣にるのがシャクティちゃんだよ」

「はじめまして。シャクティ・カリンです」

肌黒くて温和そうな女性がこっちに会釈をする。

そして柊さんは、

「なんなのよアタシの紹介は！」

泉さんにツッコんでいた。

「まあまあ。別にいいじゃん」

「人事だからってアンタは……」

柊さんは額に手を当てていた。

どうでもいいが柊さんの声って秀吉とか優子とかどっかの風紀委員
の力デさんとかに似ている気がする。

「俺は神谷亮。よろしくな」

「ワシは木下秀吉じゃ。よろしく頼むぞい」

俺たち二人も会釈する。

「今日は三人で買い物ですか？」

「いえ。さっきまではもう一人、ウツソ・エヴィンという人がいたんですが……」

「『ここには僕の居場所がない』って言って出ていっちゃったんだよ。まったく」

「いや、それは仕方ないだろ……って、神谷君は平気なの？」

「俺だって今すぐ出ていきたいさ」

秀吉による関節技がなければの話だが。

「ま、アンタもがんばりなさいよ」

「そっちなもね」

主にツッコミ的な意味で。

「お待たせ。会計終わったよ。」

優希が袋を持ってこっちにやって来た。

「私たちはこれからこのデパートにある喫茶店に行くから、二人ともデートがんばってね。」

優希はそのまま泉さんたちとどこかに行ってしまった。

「亮。ワシらも会計を済ますぞい。」

「俺は買わないって。」

会計に向かう途中、姫路に女物の服を着せられている明久とか、島田にハンドバッグを持たされている明久とか、玲さんにアクセサリを着けさせられている明久とかがいた。

……見なかったことにしよう。

『……せっかくお芝居してるんだから、がんばってね、優子ちゃん』

『優希さん、どうかしましたか?』

『うっん。なんでもないよ、シャクティさん』

「で、次はここか」

「うむ。一度来てみたかったのじゃ」

「俺も来たことないな」

デパートを出た後、俺と秀吉は近くのゲームセンターまで来ている。

というかここ、M とかク ズマジ ク カデミーとか色々あるん

だな。

しばらく二人で遊んでいたのだが、クレーンゲームを見つけると秀吉がそこに張り付いてしまった。

「どうしたんだ秀吉」

「亮。これを取って欲しいのじゃ」

「まさか……このバカデカいぬいぐるみをか？」

秀吉の指は、クレーンゲームの中にあるやけにデカいクマのぬいぐるみを差している。

しかも足を伸ばして堂々と鎮座しており、簡単には取れそうにない。

「うむ」

正直取れる気がしないんだけど、

「よし、やってみるか」

お金を投入し、慎重にクレーンを動かしていく。

幸いにも穴の近くにあったので、穴とは反対側の足を持ち上げて頭を穴に突っ込んだ。

「頭が詰まって出てきそうにないのじゃが」

「しゃーねえ。すいませーん、店員さーん」

「しかし、存外簡単に取れたのう」

「俺もまさか一発で取れるとは思わなかった」

日も沈んできたので、今は二人で公園のベンチに座っている。

「……亮」

「ん？」

「ひとつ……聞きたいことがあるのじゃ」

「聞きたいこと？」

「……お主は、姉上のことをどう思っておるのじゃ？」

「姉上って……優子のことか？」

「うむ」

「どうと言われてもな……」。

「どう思ってるもなにも、嫌いなヤツと友達でいれるかつての」

もし嫌いなヤツと交流があったとしても、決していい関係とは言えないだろう。友達でいられるということは、それだけで幸せなのだ。

「じゃあ、お主は姉上のことを好きだということじゃな？」

「まあ、そうなるのかな？」

関節技はちょっと勘弁して欲しいけどーってちょっと待て！

「どうしたんだ秀吉！？ 涙出てるぞ！？」

「何でも……ないのじゃ……」

溢れ出る涙を拭おうともせず、蚊の鳴くように秀吉が返事をする。

「その言葉が聞けただけで、ワシはとても嬉しいのじゃ」

「？ どういうことだ？」

なんで秀吉が嬉しいんだ？ まさか優子の身を案じているんだらうか？

「もう遅いし、そろそろ帰るかの」

「なんか釈然としないけど、そうするーあ、流れ星だ」

空を見上げると、たくさんの流れ星が見えた。

「そついえば今夜は流星群が見れるとテレビでやってあったのう」

「せつかくだし、お願いするか」

「そつじゃな」

秀吉と二人、手を胸の前で組んで願い事をする。

「亮は何をお願いしておるのじゃ？」

「まだまだ暑いからアイス食べたい、アイス食べたい、アイス食べたい……」

「お主、もう少し違った願い事はせんのか？」

「そう言われてもなー」

暑いのは事実だし。

「秀吉は何をお願いしたんだ？」

「ワシか？　ワシはー」一呼吸して秀吉が呟く。

「ー姉上の思いが無事届くように」と

第五十問その一・明久殺人事件？ 前編

次の単語を英訳しなさい。

『スペイン語』

姫路瑞希の答え

『Spanish』

教師のコメント

基礎英単語の一つですね。たまに頭文字のSが大文字になるのを忘れてしまう人がいます。そのようなケアレスミスには十分に注意しましょう。

土屋康太の答え

『Speinnesii』

教師のコメント

“Japanese”と同じような形で“Spainese”とでも書きたかったのでしょうか。残念ながら間違いです。

吉井明久の答え

『Spagetei』

教師のコメント

どう解釈してもスパゲティと書こうとしたようにしか見えません。

神谷亮の答え

『Superin Yougo Des.』

教師のコメント

ローマ字じゃなくて英単語でお願いします。

夏。それは色々な生き物が活発になる季節。

虫だって、魚だって、動物だって。もちろん人だって例外じゃない。

そんな季節にも関わらずー

『(ZZZ……)』

ーそんな季節にも関わらず、私の片割れである亮は爆睡していた。

こんな暑い中で鉄人の補習となると、

(おい吉井、坂本。逃げるのか?)

(逃げるなら俺たちも一枚噛ませろ。こんな地獄には付き合いきれねえ)

(俺もだ。このままだったら確実に干涸びて死んじゃう)

女子と少し微睡んでる秀吉以外は脱走を企てるみたいね。

ま、この人数なら成功するでしょ。

「全員動くなっ!」

「「「「「っ!」」」」」

相手が鉄人でなければ。

「貴様ら……。脱走とは良い度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か?」

まったく。鉄人相手に脱走を試みることで自体が無謀なのよ。

「……そうか。お前らがそこまで退屈しているとは気がつかなかった。これはつまらない授業をってしまった俺の落ち度だな」

鉄人が拳を使わないなんて、明日は雨かしら？

「詫びと言ってはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてやるぞ。

……姫路、島田、木下、神谷は耳を塞げ」

あー。なるほど。

私は祈りながら耳を塞ぐ。

クラスの皆が生きていられますように。

先生がジェスチャーで手を離すように伝えてきたので、私たちは耳

から手を離し、生存者のところに行った。

「あの、明久君。何があったんですか？ 皆さんとても苦しそうですねですけど……」

「えーっと、なんていうか、言葉の体罰というか、精神攻撃を受けたというか……」

「ご愁傷様としか言いようがないわ」

「まったく、どうせまたくだらなことでしょ。脱走なんて考えたんだから、先生だって怒って当然じゃない」

「そうは言うがな、レンに島田。俺と明久の席は脱走を考えても仕方がないくらい酷いもんだぞ。全身から水分が全てなくなっちまいそうなくらいだ」

確かにこの席は日当たりが良すぎな気がする。

「そうなの？ ウチの席はそこまで暑くないからよくわからないけど」

「私も風が入ってきてくれるので結構大丈夫です。それに、この前神谷君に貰ったお薬があるので」

「」「薬？」「」

「（アンタ、また何か作ったの？）」

『（ああ。アレのことか。ちょっと替わってくれ）』

「（はいはい）」

「また何か新しい薬を作ったの？」

「ああ。簡単に言えば、体温を下げる錠剤だ」

「こつも暑いと姫路が体調を崩しかねないし。」

「姫路、調子はどうだ？」

「なんとか大丈夫です」

それを聞いて一安心だ。

「ところで神谷君」

「何だ？」

「このお薬を飲み始めてから、ウエストが細くなったように思うんですが、気のせいですか？」

「多分気のせいじゃないと思う」

もう少し先になってから効果が現れると思ったんだけど、案外早かったな。

「神谷！？ どういうこと!?!」

「島田、ちょっと落ち着け」

握られた肩が悲鳴をあげてるから。

「それは、体温を上げようとするからだよ」

「って優希!?! お前いつからいたんだ?」

「幼なじみには神出鬼没のライセンスがデフォルトでついているものなんだよ」

確かに有り得るかもしれない。

霧島さんとか。

突然現れた優希に驚きつつも、島田は優希に問いかける。

「どづいづこと？」

「簡単に言うと、下がった体温を上げる為に、体が脂肪を燃焼させるの。それで体脂肪が減るんだよ」

「しかもこの薬はノンカロリー、ノンシュガー。痩せることはあれど、太ることはないぜ」

「なるほどね」

優希と俺の説明に納得した島田。

「ねえ神谷。ウチにもその薬を分けてくれない？」

「いいよ。ただし一日二錠まで、コップ一杯の水と一緒に服用してくれよな」

「分かったわ」

なけなしの胸の脂肪が使われないように気をつけろよ。

「それで、どれくらい酷い暑さなんだ？」

「明久の成績ぐらいだ」

「人間が耐えられるレベルじゃないわね」

「お前らよく生きてたな」

「なんてことを」

「そうだよ。人間じゃなくてせめて変温動物にしてあげなよ」

「桂よ。それでは何のフォーローにもなっていないぞい」

まったくもってその通りだ。

下手をすれば人間どころか、暑さに強い動物すら耐えられそうになりというのに。

「それにこの席は雄二の性格ぐらい酷いんだよ。さっきだってペンのアルミ部分に触ったら軽く火傷しちゃったし」

それはただ明久がバカなだけだろ。

「火傷したの？ どれどれ？」

「あ、いや。そこまで酷いものじゃないけど」

「いいから。神谷、火傷に効く薬ってある？」

明久の手を握りながら島田がそう訪ねてくる。

しかし随分態度が変わったな。

「なんじゃ島田。お主、随分と明久に優しいではないか」

「そうです。美波ちゃんは明久君に近すぎますっ」

「べ、別にアキに優しいってワケじゃ……！ただ、怪我をしていたらウチが殴る時に手加減しなくちゃいけないからってだけで……！」

結局殴るのかよ。

「でも、僕も美波は優しいと思うよ」

「え……？あ、アキまで何を言ってるのよ」

「面倒見がいいし、細かいところにまで気がつくし、妹思いだし。それに、動物に愛情を注ぐことができるし。……異性として」

おい。最後の何だ？明久の声が小さかったからかすかにしか聞こえなかったけど、随分すごい内容だった気がする。

「聞きなさいアキ！ アンタは誤解してるけど、ウチはオランウータンになんか興味はなくて、本当にウチが好きなのはー」

「「「好きなのは？」「」」

いつの間にかクラスメイトの皆が復活していた。一部はまだ倒れてるけど。

「……………チンパンジーなのよっ！」

また一つ誤解が増えたな。

その後島田は泣きそうな顔をしながら「ウチ、もうお嫁にいけない……………」と呟いていた。

「ところでさ、土屋君がかなり危険な状態になっているんだけど、大丈夫なの？」

優希に言われてムツツリーニを見てみると、ヤツは卓袱台に突っ伏したままピクリとも動いていなかった。

「アイツの想像力は常人の比じゃないからな。さっきの恐ろしい話

を聞いただけで鉄人とブラジル人の暑苦しいレスリングが脳内で鮮明な画像になって浮かび上がったんだろ」

「坂本君。キミたちは一体何をしたの……？」

優希が不思議そうな表情をしている。

「それにしても暑いな……。亮、さっき言ってた薬ってまだあるのか？」

「もう無い」

さつき島田に渡した分で全部だったからな。

「こんな環境だと勉強する気なんて全然出てこないよね……」

確かにここまで暑いと少しキツいところがある。

「んじゃ、気晴らしに何かするか」

「でも亮。気の紛れそうなことなんてそうはないよ」

確かに明久の言う通りだ。今はゲームもトランプもない。

「いや。気晴らしなら出来るぞ」

「だから雄二。今は何も無いからー」

「試験召喚獣を召喚すればいいじゃないか。装備の確認も兼ねてな」

そういえば試験召喚獣の装備がリセットされたんだった。次の試験召喚獣のためにも、戦力を把握しとかなきゃいけないし。

「それなら、鉄人に召喚許可を貰おうぜ」

「そうだね」

「ちょっと待って吉井君」

「桂さん。どうしたの？」

鉄人を呼ぼうとした明久に桂が待ったをかけた。

「や、やっぱりそういうのは無闇にやっちゃいけないと思うよ」

「でも桂よ、悪戯目的でなければ良いと思うのじゃが？」

「うー。でも……」

優希がしどろもどろになるなんて、これは珍しい。

「桂。ひょっとしてお前何か知ってるのか？」

「坂本君ったら何言ってるのさ。別に何も無いよ」

「優希。何か隠してるな？」

「ひゅ〜。あ、愛子ちゃんのスカートが捲れてるよ」

「「「……………っ!」「」」

「落ち着けお前ら！ これはあからさまなウソだ！」

俺と明久とムツツリーニは騙されそうになったが、雄二の言葉で我に帰る。そういえばコイツは嘘だけはつけない性格だったんだ。

「明久。確認のためにもとりあえず鉄人を呼んでくれ」

「了解。すいませーん、西村せんせーい」

俺が優希を止めている間に明久が鉄人を呼ぶ。すると、鉄人は明らかに『面倒なことになった』といった顔をしながらこっちにやってきた。

「なんだ吉井」

「すみません。ちょっと先生にお願いがあったもので」

「お願いだと？ おかしなことじゃないだろうな」

「はい。ちょっと召喚許可を貰いたいただけなんです」

「あー……。いいか吉井。お前は観察処分者だ。人よりもずっと力があり、しかも物や人に触ることのできる召喚獣を持っている。そんな危険なものをみだりに喚び出すことは感心できんぞ。そんな余計なことを考えずにだなー」

いつもは堂々としている鉄人が、今日に限って歯切れが悪い。これは何かあったと見て間違いないだろう。

「西村教諭。ワシらは別に悪巧みをしておるわけではないぞい。ただ、純粹に召喚獣の装備がどうなっておるのが気になるだけなのじゃ」

「それに、ウチらの召喚獣なら物に触れないから喚び出してもいいですよ？」

「いや、しかしだな、木下に島田。試召戦争でもないのに召喚獣を喚び出すというのはあまり良いことではないぞ」

「鉄人。何をそこまで隠しているんですか？」

「もしかして、私たちの召喚獣に何かあったんですか？」

「……さて、授業を始めるぞ」

俺と姫路の質問には答えずに教壇に戻ろうとする鉄人。

「ちょっと待った」

その腕を雄二が掴んだ。

「なんだ坂本」

「どうやら何かあったのは間違いなさそうだな。こうなりや召喚許可をよこせなんて言わねえ。ただし、何が起きたのか説明はしてもらうぜー起動っ」

雄二が白金の腕輪で召喚フィールドを作り、

「試獣召喚っ！」

明久が召喚獣を喚び出した。さて、どうなっているのか。

「何だこりゃ？」

「僕の召喚獣が……」

「明久のクセに妙に贅沢な装備になったな」

「剣に甲冑なんて、今までと全然違うじゃない」

「それに、随分と背が高くないですか？」

今までは小さなぬいぐるみぐらいの大きさしかなかった召喚獣が、今は等身大サイズになっていた。

「す、凄いっ！　なんだかかなり強そうに見えるよっ！」

「こいつは凄いな」

「試召戦争が本物の戦争になりそうだな」

「これなら本物の人間とさして変わらんからの」

これならかなり迫力のある戦いになりそうだ。

「顔も明久君そっくりですね。今までの可愛い感じと違って、今度のは凛々しいです」

「え？　そ、そう？」

そうかな？

「姫路も酔狂だな」

「まったくだ。こんなブサイクのどこがいいんだか」

「あ痛っ」

雄二が明久の召喚獣の頭を、俺が鎧を小突く。すると、叩いた頭が首から離れて畳の上に落下し、ゆっくりのようになってしまった。

「」「」……………「」「」

俺たちが絶句する中、ゆっくり明久（今考えた）は畳の上を何度も回転した後、こっちを向いて動きを止めた。

……………「これはどういふことだ？」

第五十問その二・明久殺人事件？ 後編

「「きゃああああーっ!?!」」

「「りゃ、お茶の間には見せられないな」

俺たちの目の前には、明久の召喚獣が首だけになっている。

こんなグロいものを見たらお茶の間は間違いなく凍りつくぞ。

「ん？ ああ、すまん。そんなに強く叩いたつもりはなかったんだが、まさか外れちまうとはな……。待ってる。今ホチキスを持ってくる」

「バカかお前は。要るのは釘とトンカチだろ？」

「二人とも、何を的外れなことを言ってるのさ!?! くつつけるなら接着剤でしょ!?! ホチキスや釘だと穴が開いて痛いんだから!」

「そついう問題ではないと思うのじゃが」

ちっ。惜しい。

「それはそつと、いくら明久の点数が無いに等しい位だからと言っ

て、登場と同時に戦闘不能にならなくてもいいだろ」

「え？ コレってそういうことなの？」

「べつやらそうでもないみたいじゃぞ」

『Fクラス 吉井明久

総合科目

1053点
『

秀吉の言う通り、戦闘不能というわけではなさそうだ。

「さて桂に鉄人。これはどういうことだ？ 知っているんだろ？」

雄二がわざとらしく目を背けている優希と鉄人に問いかける。

「……私にはよく分からないけど、今喚び出される召喚獣はお化けの類か何かになってるんだって」

「お化け、ですか？」

ってことは、明久の召喚獣はデュラハンってところか？

「でも鉄人、何でそんなものが召喚獣になったんですか？」

「西村教諭だ全く……。お前らも知つての通り、試験召喚システムは科学技術だけで成り立っているわけではない。幾ばくの偶然やオカルト的な要素も含まれているんだ」

「????？　つまり、どういうことですか？」

「あー……。要するに、だな」

「調整に失敗した、と」

「亮も坂本君も、そんな身も蓋もない言い方をしちゃダメだよ」

優希が咎めるような顔で答えた。でもまさか、こんなことになっているとはな。

「明久の召喚獣の様子を見る限り、どうやら調整はオカルトの部分が色濃く出たようだな。これはこれで面白いが」

「確かに。オカルトと言えばお化けだからな」

「けど、どうしてデュラハンなんだろう？　お化けなら日本の妖怪とかもいっぱいいるはずなのに」

きっと何かの理由があるんだろうが、さっぱり見当がつかない。

「学園長先生の話の聞く限りだと、どうやら召喚者の特徴や本質から喚び出される妖怪が決定されるらしいよ」

優希が少し胸を張って説明する。

「特徴や本質？ そうなるとデュラハンが選ばれたっていうのは、僕の騎士道精神が召喚獣に影響を与えたからってことだね」

「明久。現実から目を背けるな」

「え？ 違うの？ そうなると他に考えられるのは、甲冑の似合う男らしさかな？」

「見苦しいぞ」

「それじゃ、大剣を振るう力強さとか」

「恐らく『頭がない』バカ』だからじゃな」

「言ったあー！ 僕が必死に目を逸らしていた事実を秀吉が包み隠さず言ったあー！」

最初から認めればいいのに。

「じゃが、こうしてみる限りは以前の召喚獣よりも強そうではないか。武器も金属のようじゃし、鎧もつけておる」

「そ、そうだよな。前よりは強そうだね」

「そうかしら？」

「俺にも強くなったようには見えないけどな」

どうやら雄二も同じことを考えているみたい。

「レンに雄二。何が不満なのさ」

「その取り外しができる頭が問題でしょ？」

「戦っている最中に頭が取れたらどうなる？」

雄二が地面に転がっている召喚獣の頭を指差した。

「……狙われるね、確実に」

「そうじゃな」

頭が地面に転がっていたら、それだけで格好の的だし。

「そういうことだ。つまり明久の召喚獣は常にどちらかの手で自分の頭を抱えないとならない」

「片腕しか使えないなんて、ハンデもいいところね」

私たちがそんなことをしていると、ようやく復活したクラスメイトの数人がこっちにやってきた。

「吉井、さつきからなんか面白そうなことやってるな」

「これ召喚獣か？ 特徴や本質がどうとか言ってなかったか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか」

アンタたちが言えたことじゃないわよ。

「そう言うのならそっちも喚び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣が出てくるからさ」

「おいおい吉井。そんなことを言っているのか？」

「俺たちの召喚獣がバカ日本一のお前に負けるわけないだろ？」

「俺の本質はなんといつてもジェントルマンだからな。酷い召喚獣
なんかが出てくるわけがない。いいか、見てるよー」

「「「試獣召喚っ！！」「」」

どれどれ。一体どんな召喚獣がー

……ズズズズズ ゾンビ登場

……ズズズズズ ゾンビ登場

……ズズズズズ ゾンビ登場

えーっと……根性が腐ってるってことかしら？

「これはこれで面白いもんだな。秀吉はどんな召喚獣なんだ？」

「んむ？ ワシか？ そうじゃな……。ワシの特徴といえはやはり
演劇じゃからな。妖怪ではないが、舞台上で有名なオペラ座の怪人あ

たりじゃろつか。……試獣召喚っ」

……ポンッ 猫又登場

「へえ〜。猫のお化けか。可愛いね。秀吉によく似合ってるよ」

「どっちら秀吉の特徴は『可愛い』ということらしいな」

「っ、ついにワシは召喚システムにまでそんな扱いを……」

ドンマイ、秀吉。

「また木下はアキをそうやって誘惑して……!」

「わ、私だっけ負けませんっ」

秀吉の召喚獣が怖くない代わりに、美波と瑞希が怖い顔をしていた。

「明久君、見ていて下さいっ。私も可愛い召喚獣を出して見せますっ」

「あ、うん。楽しみにしてるよ」

「はいつ。頑張りますっ」

さて。どんな召喚獣が出るかしらね？

「それじゃいきます。……試獣召喚ですっ」

……ボンッ サキュバス登場

『（レン！ 今すぐ替わってくれ！）』

「（また？）」

レンと替わるやいなや、俺はスケッチブックと鉛筆を取り出して姫路の召喚獣を描き始めた。

横を見ると、明久の首がおかしな方向に回っていた。

「……明久……っ！ 倒れている場合か……っ！」

「二人とも。レンズや紙が血まみれだから無駄だと思っただけど」

「……この世に無駄なことなんて無い！」

特にエロ方面に関しては。

明久やムツリーニとそんなことをやっている間に姫路が召喚フィールド外に出たので、召喚獣が消えてしまった。

「災難じゃったな、姫路」

「うう……。酷いです……。あんな格好だなんて、恥ずかし過ぎです……」

姫路は首まで真っ赤になり、泣きそうな顔をしていた。

「でも、アレが姫路の本質だからな。仕方ないだろ」

「わ、私の本質って……？」

実に答えにくい質問がやってきた。

「え、えっとね……。その、なんというか……」

「そ、そうじゃな……。言にくいことじゃが……」

「あの……えっと……」

「つまり……姫路は……」

「胸がデカいってことだろ？」

「うわああんっ！」

流石雄二。痺れたり憧れたりすることはないが、俺たちができないことを平然とやってのけやがるな。

「もう、坂本君。そんなデリカシーのないことを言っちゃダメだよ。そんなことを言ってるから翔子ちゃんにお仕置きを受けるんだよ？」

それは俺も同感だ。

向こうでは、島田が明久の頸動脈を押さえている。また明久が余計なことでも言っただろう。

「外見の特徴はおいておくとして、あと他に考えられる特徴としては『大胆』ってところか？ なにせサキュバスだからな」

「大胆、ですか？」

「ああ。思えば姫路にはそういうフシが見られたからな。この前明久と帰った時にも『襲いかからないように我慢します』とか言ってたし」

「そう言えば以前、学園祭の打ち上げでも明久を押し倒しておったな」

「霧島さんの家での勉強会の時も明久と一緒に寝るって言い出したしな」

「ち、違いますっ。あ、あれはその、思いあまってというか、勢いというか、とにかくその……」

必死に嘘を吐こうとする姫路の努力は涙ぐましいが、残念ながら明久以外にはバレバレだろう。

「ふふっ。瑞希ってば、可哀想に。そんな大きな胸をしているからあんな格好の召喚獣が出てきちゃうのよ」

「うう……。あんまりです……」

「でもその点、ウチなら何の心配もないから大丈夫よ。きっとそういうエッチなのじゃなくて、妖精とか女神とか戦乙女とか、そういった可愛いのが出てくるはずだから見てなさいー試獣召喚っ！」

ゴロゴロゴロ…… むりかべ登場

ヒヤダ コをくらったと思うほどに空気が凍った。

アニソンに一位をとられた時のどろどろの音楽番組以上じゃないのか？

「……………ねえ、アキ」

「な、なにかな美波」

「この召喚獣、ウチに何を言いたいのかしらね？」

「な、なんだろうね？」

明久が助けを求めてこっちを見てきたので、俺たちは涙をのみながら目を逸らした。

すまん明久。俺たちには何も出来ないんだ……………。

だから、今振り下ろされている島田の拳で死ぬなよ。

「ムツツリーニよ。お主はどんな召喚獣なのじゃ？ まだ確認しておらんのじゃろう？」

秀吉。ナイスフォローだ！

「……………試獣召喚」

出てきたムツツリーニの召喚獣は、顔色の悪いタキシード姿の少年が現れた。これはもしかしなくても

「なるほど。確かにいつも血を欲しているイメージがあるからな」

「若い女が好きという点も酷似しておるしの」

やっぱりヴァンパイアか。まさにムツツリーニにはぴったりだ。

「亮の召喚獣はどうなってるの？」

「俺か？ よし、試獣召喚っ！」

さて。俺の召喚獣はー

「……………は？」

「どっついうことだこれは？」

「……………二人組？」

ムツツリーニが言うように、俺の召喚獣は二体いた。しかも背が少し小さい。

「でも亮は僕と違って腕輪を持ってないよね？」

確かに俺は腕輪を持ってない。それに明久と同じ腕輪の能力なら、全く同じ召喚獣が二体になるはずだ。

けど俺の召喚獣は、一方が鎌、もう一方が薬などを入れる坪を持っていた。

「腕輪じゃないってことは、二体で一つの妖怪ってことか？」

「でも雄二。そんな妖怪いるか？」

皆でうんうんと唸っていると、突然秀吉が口を開いた。

「もしかしたら、その妖怪は鎌鼬かもしれぬ」

「」「鎌鼬？」「」

鎌鼬って、あの鎌鼬か？

「でも秀吉。鎌鼬って鎌を持ったイタチの妖怪じゃなかったっけ？」

「一般的な姿は明久の言う通りじゃ。じゃがとある地方では、子供みたいな三匹の妖怪という言い伝えもあるのじゃ」

「で、どんな感じなんだ？」

「まず一匹目が後ろから人を突き飛ばし、二匹目が鎌で腕や足を斬りつけ、三匹目がそこに素早く血止め薬を塗るらしいのじゃ」

「確かに木下君が言うような特徴だけど、それならもう一匹はどこに行っただらろう？」

俺もそれが一番気になる。

「(まさか、カマ“イタチ”だけに、もう一匹は犠牲になったのか!?)」

『(よく分からないけど、怒られそうだからそのネタはやめなさい)』

とまあそれは置いていて、

「なんで鎌鼬が出てきたんだろ？」

「武器や薬を使うというのも考えられるが、やはり『二重人格』だろつな」

「それが亮の一番の特徴だしね」

しかし一匹へらすとは、無理やりというかいい加減というか……。

「桂はどんな召喚獣なのじゃ？」

「私のはよく分からないんだよ。……試獣召喚っ」

優希が喚び出した召喚獣は、確かによく分からなかった。

背中には羽の代わりに、先っぽが矢印のような形をした触手のようなものが左右三本ずつ生えており、手足は虎、尻尾はデフォルメされた蛇になっていた。

……コレ、何だ？

「（レン。何か分かるか？）」

『（推測のレベルだけど。ちょっと替わって）』

「皆。これは多分、ぬえ 鶴よ」

「ねえレン。鶴って何なの？」

美波だけでなく、雄二とムツツリーニ以外の皆が首を傾げている。

「鶴っていうのは、頭が猿、胴が狸、手足が虎、尾が蛇だと言
い伝えがあるけど、実際よく分からないの」

「どづいつことですか？」

「……………頭が鶏だというのもあれば、羽が生えているというのも
ある」

「???? 何だかよく分からないや」

「明久。お前、キメラ 合成獣は知ってるか？」

「雄二に言われなくても知ってるよ。ゲームによく出てくるモンス
ターでしょ? ……ってもしかして」

「ああ。鶴は西洋でいう合成獣みたいなものだ」

「そづいつことだったんだ……………」

「でも鶴なんて、随分面白い妖怪が出てきたね」

優希……。他人事みたいに言ってるけど、アンタの召喚獣よ。

「特徴と言つても、正体不明の妖怪だからな……………」

「概ね、『つかみどころがない』ってところかしら？」

嘘を吐いている時以外はほとんど考えや行動が読めないから、鶴が出てきたのかもしれないわね。

「ここまできたら雄二のモ気になるよね。召喚してみてよ」

「ん？ そうだな……。それじゃ、このままだと俺の召喚獣は喚べないからフィールドをOFFにして鉄人に許可をもらうか。鉄人も今更文句は言わないだろ」

雄二がそう言うと、鉄人は「やれやれ」と呟いて、召喚フィールドを出した。

「さて、雄二の召喚獣はどんなのになってるのかしら」

「ワシらと違って雄二の性格は攻撃的じゃからな。戦闘向きの妖怪が出るやもしれんのう」

「確かにそうだね。おっきな金棒を持った鬼とか、ゴツイチエーンソーを持ったジェイソンとか、もしかしたら凄い鎌を持った死神なんかが出てくるかも」

明久の予想もどうかと思うけど。

「そんじゃいくぞ。……試獣召喚っ!」

現れた雄二の召喚獣は、なんと上半身は裸で、下にズボンを着ているだけだった。

『(替わるっか?)』

「(……………お願いするわ)」

どうやらレンがB.L.でオーバーヒートしないようになるのは、まだ先のようだ。

「で、アイツらは何をやってるんだ?」

向こうで雄二が明久の召喚獣の頭をゴミ箱に蹴り込んでいた。

「んむ？ 雄二。お主の召喚獣の様子が変じゃぞ？」

「お？ 本当だな。何が起きるんだ？」

雄二の召喚獣が、凄い勢いで獣に変わったいった。

「「きゃああああーっ！！」」

「……………狼男」

「なるほど。そういうことか」

狼男になったところを見る限り、雄二の特徴は野生ってことか。

「でも満月でもないのに何で変身したんだ？」

「さあな。なんか丸い物でも見たんじゃないのか？ 伝承なんて曖昧なものだからな。そこらへんは適当なんだろ」

俺の鎌鼬といい、雄二の狼男といい、やっぱりいい加減になってるみたいだ。

「それはそうと、この召喚獣はきちんと次の試召戦争までには直るのか？」

「こんなのでクラス間の勝負をやったら百鬼夜行になっちゃいますよ」

「そ、それは困ります……。怖いのも困りますし、私の召喚獣は恥ずかしいですし……」

姫路の言葉の最後は小さくなってあまり聞こえなかったが、姫路も大変だな。

「召喚システムの調整については俺もよくわからん。学園長なら何か知っているかもしれんがな」

「確かにその辺は鉄人よりもババアに聞いた方が良さそうだな」

「なんたって召喚システムの開発者様だしな」

「そうだね。学園長に聞いてみようか」

雄二と明久と三人で立ち上がり、学園長室を目指して歩き出す。トラブルは早めに解決するに限るからな。

『キサマらっ！ ドサクサに紛れて脱走か！』

「ちいっ！ 気付かれたか！」

「どつする雄二?」

「走れ二人とも! 学園長室に逃げ込めばこっちのもんだ!」

「了解っ!」

待っているババア! 必ず真相を聞き出してやる!

第五十一問・ハツタリは バレなかつたら ついていい

問 以下の問いに答えなさい

自分の明らかな間違いを理屈をこねて言い逃れすることを、石と枕という字を使ったことわざで答えなさい。また、そのことわざのもとになった四字熟語も答えなさい。

姫路瑞希の答え

『ことわざ：石に漱くたがぎ流れに枕す

四字熟語：枕石漱流』

教師のコメント

正解です。ことわざについては、中国の晋にいた孫楚という人が王済との問答で、「石に枕し流れに漱ぐ（枕石漱流：ちんせきそうりゆう）」を「石に漱ぎ流れに枕す（漱石枕流：そうせきちんりゆう）」と言い間違えたが、誤りを認めず「石に漱ぐのは歯を磨くため、流れに枕するのは俗事を聞いて汚れた耳を洗うためだ」と強弁したという故事からきています。「流石」と書く当て字や、夏目漱石という筆名も、この故事に由来します。ちなみに「枕石漱流」とは「山林に隠居し、風流に暮らす」ことをいうので、あわせて覚えておくといいでしょう。

吉井明久の答え

『ことわざ：違うんだ！ コレは姫路さんの抱き枕じゃなくて、石

のデザインが描かれた抱き枕なんだ!』

教師のコメント

理屈になっていません。

島田美波の答え

『四字熟語：明久殴打』

教師のコメント

ちゃんと手加減してあげて下さいね。

「んで、どうなんだ学えーババア」

「教えて下さい、学えーババア」

「お願いします、学えーババア」

「……………どうしてアンタたちはアタシを素直に学園長と呼べないのか
ねえ……………」

現在俺たちはババアに真相を聞くべく、学園長室までやってきた。

「すいません。学園長」

「はンツ。今更言い直しても教えてやるもんかい。このクソガキどもが」

「そんな！？ 酷いですよババア長！」

「その呼び方は今までで一番酷いさね！？」

明久はバカだなあ。まるで学園長への態度がなってない。

「おい明久。巷で若いと評判の学園長（笑）にあまり失礼な発言をするな」

「雄二の言う通りだ。こう見えても肌の水分が2%という驚異の微肌の持ち主なんだぞ」

「アンタたちも充分失礼だよクソジャリども」

あれ？ 何か間違えたか？

「んで、ババア。正直なところどうなんだ。きちんと復旧するのか？」

「はあ？ 復旧？ 何を言っているんだいボウズども。それだとまるで召喚システムに欠陥があるみたいじゃないか」

この老婆、ついにボケたか？

「アレが欠陥じゃないなら、一体何なんですか？」

「アレはちょっとした遊び心さ」

「遊び心？」

「一体どういふことですか？」

「今は夏だからねえ。肝試しにはもってこいの季節だろう？」

あゝ。そういふことか。

「つまり、ババアは肝試しの季節に合わせて召喚獣も妖怪仕様にカスタマイズしたってことか？」

「そうさ。あれは夏休みでも登校する可愛い生徒たちへの、アタシからのささやかなプレゼントさ」

「プレゼントって、そんなバカな……」

「まあいいじゃんか明久」

「ババアがそう言うのならそういつことにしておくか」

「え？ 二人とも、本当のことを聞かないの？」

明久はよく分かってないようだ。

「別にここでババアに『じつは調整失敗だった』なんて言わせたと
ころでメリットもないしな」

「それより、学園長のありがたい心遣いに甘えさせてもらおうぜ」

「甘えさせてもらうって……それってつまり、さっき言われたよう
に召喚獣を使って肝試しをやるってこと？」

「ああ。学園長もそれを考えた上でのプレゼントって言ってるんだ
ろ？」

「俺たちに召喚獣の異変が伝わった以上は、世間体を考えると学園
側も何もしないわけにはいかないだろうしな」

「やれやれ……。本当にアンタらはこういつことにはだけは頭が回る
ねえ……」

学園長は小さく嘆息して呟いた。

「つまり、試験的なシステムとして運営している以上、学園側は召喚システムの調整を失敗したとは言いたくないってことだ。隠し切れるならそれで良かったんだが、生徒にバレた以上はそうもいかない」

「だから肝試しをやることで『元から計画していた出来事』にするってわけだ」

「ああ、なるほど。そういうことが」

明久も納得したようだ。

「じゃあ、そういうことで残り二日の補習期間は肝試しってことでもいいんだよね？」

まさかコイツ、最初から肝試しにかこつけて鉄人の補習を潰す気だったのか？ ニクいことしてくれるぜ。

「いいや、ただの肝試しなら却下さね。あくまでも召喚獣は学習意欲向上の為のツールだからね。見た目だけで楽しむのは授業の一環とは認めないよ」

流石にそこだけは譲れないか。

ということとは、どこかに点数勝負の要素があればいいってことだ。

「それならチェックポイントでも作って、そこで勝負でもさせるか。それなら文句はないだろ？」

「そうさねえ……。ルール次第だけど、それなら認めてもいいかもしれないね」

「よし。決まりだな」

雄二が満足げに頷く。

さてこの肝試し、一体どうなるか楽しみだ。

第五十二問・準備は楽しいけど面倒くさい

次の（ ）に正しい単語を入れなさい。

ロシアの作家ドストエフスキーは著者『（？）の兄弟』や『（？）と罰』の中で、信仰心を失った近代人の虚無主義的な姿を描いた。

姫路瑞希の答え

『？（カラマーゾフ）の兄弟

？（罪）と罰』

教師のコメント

正解です。この二作品と『白痴』、『悪霊』、『未成年』はドストエフスキー五大長編と呼ばれる名作ですので、興味があればそちらを呼んでみるのも良いでしょう。

神谷亮の答え

『？（ラマン）の兄弟』

教師のコメント

なんて間違え方をしてるんですか。

島田美波の答え

『？（失恋）と罰』

教師のコメント

なんて悲しいラマンの兄弟。

土屋康太の答え

『？（マーズ）の兄弟』

教師のコメント

なんてところをピンポイントで覚えているんですか。

吉井明久の答え

『？（ムチ）と罰』

教師のコメント

マーズの兄弟大喜び。

「雄二、ここはこうしたら？」

「んじゃこれはこうだな」

翌日。

皆が肝試しの為の改装で賑わう中、私と雄二はその肝試しのルールを作成していた。

「とうか、さっきから明久の召喚獣の頭がゾンビに遊ばれてるんだけどだいじょうぶかしら？」

「別に大丈夫だろ。明久だし」

「そついう問題なの？」

「久保が明久の加勢をしたようだしな」

それもそうだと思ってルール作りの続きをしようと思ったら、

「「「お前らうるせえんだよ!!」「」」

3Fではあまり見ないであろう三年生たちの怒鳴り声が聞こえてきた。

「っていつかお前らうるせえんだよ！俺たちへの当てつけかコラ！」

「夏期講習に集中できねえだろうが!!」

夏期講習、ねえ……。

「すみません。上の階まで響いているとはー」

「謝る必要はないわよ、明久」

「確かに、今のは酷い言いがかりじゃないか？」

「え？ 雄二。言いがかりってどういうこと？」

「口実を設けて難癖をつけることだ。いちやもんとも言う」

「言葉の意味は聞いてないよ！ さてはキサマ、僕のことを凄いバカだと思ってるな？」

「……え……？」

「なんだその『何を今更』って顔は！ 僕をそこまでバカだと思ってるのは雄二だけに決まってるじゃないか！ レンならー」

「……」

「ーって待った！ レンだけじゃなくてどうして皆も気まずそうに目を逸らすの！？ 僕の目を見てよ！」

「明久。この件は今度ゆっくりと話しましょう。今は他の話があるから、ね？」

とりあえず明久の頭を撫でた。

「それで、えーと……何の話だったっけ？」

「三年生の文句が言いがかりじゃないか、って話だ」

そういえばそうだったわね。

「私たちが騒がしいのは認めるけど、これだってれっきとした試験召喚獣を使った勉強の一つよ。学園長だってそれは認めているわ」

これを否定するということは、試召戦争だけでなく、この学校のシステムすら否定することになる。

「それに何より、ここは新校舎よ。古くてボロボロな旧校舎ならともかく、試召戦争という騒ぎを前提として作った新校舎で、下の階の騒ぎ声が上の階の戸を閉めた教室の中にまで聞こえるわけがないでしょ？」

「要するに、だ。センパイ方は勉強に飽きてフラフラしているところであれ俺たちが何か楽しげなことをしているのに気がついて、八つ当たりをしにきたってワケだ」

雄二の言葉で、三年生の皆はバツが悪そうに目を逸らした。

「それじゃあ言わせてもらうが坂本よお！ お前らは迷惑極まりないんだよ！ 学年全体での覗き騒ぎに、拳げ句の果てには二年男子が全員停学だぞ！？ この学校の評判が落ちて俺たち三年までバカだと思われたらどうしてくれるんだ！ 内申に響くじゃねえか！」

「「「う……」「」」

今度は二年生男子全員が目を逸らす。向こうの言い分ももっともだしね。

「だいたいお前ら二年は出来が悪い連中が多すぎるんだよ。バカの代名詞の観察処分者だって二年にしかいねえし、学園祭で校舎を火花で破壊したのだってそのクズたちだろ？」

「呼ばれたよ雄二。謝りなよ」

「お前のことだろ明久」

「アンタたち二人ともじゃない？」

「「そんなバカな!？」」

「お前もだぞ、神谷」

「どつして!？」

「なんでお前らはそこまで心外そうな顔ができるんだ!? 普通に考えたら当然の評価だろ!？」

この二人と同じ扱いだなんて、納得いかないわ。

「つまり、明久が悪いつてことでしょ？」

「まあ、明久が気に入らないというそちらの言い分はわかった」

「待って、レンに雄二。そうやって全ての罪を僕に押し付けようとするのはよくないことだと思う」

「美春もこのブタ野郎は気に入りません！」

いつの間にかこっちに来ていた清水さんが明久に蔑むような視線を送っている。明久のヤツ、嫌われてるわね……。

「おお。話せるじゃねえかその縦ロール」

「調子に乗って美春に話しかけないで下さいブタ先輩! 家畜臭いですっ!」

いつになったら二年生と三年生の溝は埋まるのかしら?

「……つめえら上等じゃねえか……！ お前らのことは前々から気に入らなかつたんだ！」

あーあ。あんなこと言っちゃったからついに坊主の先輩が怒っちゃった。

さて、私は退散しよう。

「雄二。今の内にルール作りを再開しましよ」

「そうだな……つと、明久の点数が表示されたぞ」

雄二に言われて見てみると、確かに四人の点数が表示されていた。

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平

世界史

174点 & 163点』

へえ。相手は結構やるじゃない。それでこっちはー

『Aクラス 久保利光 & 334クラス アレクサンドロス大王

世界史

357点 & 161点』

……………。

なぜか知らない人が混じっていた。

「明久ってどこまでバカなのかしら？」

「どこまでも、じゃないのか？」

納得したわ。

「それで雄二、ルールの方はこんな感じでいいわよね？」

「よし。それでいくかー」

「坂本と神谷はいるかい？」

この声は……学園長？

「ん？ なんだババア？」

「何か用事でも？」

呼ばれたので、とりあえず一步前に出た。

「この肝試し、学園側が援助してやろうじゃないか。大掛かりな設営も召喚の為の教師も応援する。せいぜい派手にやるこつたね」

「随分と気前がいいのね。どういうこと？」

「その代わり、作った物はそのままにしておくこと。盆休みあたりに一般公開でもしてやるうかと思ってるんでね」

「イメージアップ戦略か。涙ぐましいことだな」

「アンタたちがどんどん評判を下げてくれるからねえ。こつちも苦労するさ」

宣伝効果を狙つての援助ね。学園長も色々大変みたい。

「元々この召喚獣の変更はそれが目的だったからね」

学園長が念を押すように強調してくる。ま、こは言つ通りにしておいた方が無難でしょ。

「それと……折角だからね。三年もこの肝試しに参加したらどうだい？　こんなところで小競り合いをしているよりはその方が有意義さね」

「冗談じゃねえ。こんなクズどもと仲良く肩を並べて肝試しなんてやってられるか」

「だよな。胸くそ悪い」

鼻を鳴らして答えた常夏コンビを筆頭に、その後ろにいる他の先輩たちも同様の態度を示している。

「そういう態度を取られると、是が非でも参加させなくなるねえ……。よし、決めたよ。明日の夏期講習・補習の最終日は全員参加の肝試しにするよ」

「「な……っ！」「」

学園長の通達を聞いた常夏コンビが目を白黒させている。

「これはあくまでも補習と夏期講習の仕上げだからね。補習と講習の参加者は余すことなく全員参加すること。いいね」

へえ。面白いことになってきたじゃない。

「やれやれ……。ま、そういうワケだセンパイ。楽しくやるうぜ？」

「いや、どう見ても楽しくできそうにない雰囲気なんだけど？」

「神谷の言う通りだ！ 俺はお前らなんざと仲良くやるつもりはねえ！」

「だろうな。俺もアンタらは気に入わねえ。……ってことで、こういっなのはどつだ？」

「ああ？」

「驚かす側と驚かされる側に分かれて勝負をする。適当な罰ゲームでもつけて、な」

「二年と三年で分かれて、ってことか」

「ああ。それなら仲良くやる必要は全くないだろ？」

この方法なら仲良くやる必要はないけど、また更に溝が深まりかねないわね。

「悪かねえな。当然俺たち三年が驚かす側だよな？ 俺たちはお前らにお灸を据えてやる必要があるんだからな」

あら不思議。まんまとこつちの策略に乗ってる。面倒な作業がある驚かす側を引き受けてくれるなんて、大助かりだね。

「ああ。別にそれで構わない」

「私も異議はないわよ」

「決まりだな。……ルールと負けた方への罰は？」

「コレが最初私たちが予定していたルールよ。文句があるなら一応聞いわ」

明久や常夏コンビにA4サイズのルール表を渡す。

ちなみに内容はというところ――

？二人一組での行動が必須。一人だけになった場合のチェックポイント通過は認めない

一人になっても失格ではない

？二人のうちどちらかが悲鳴をあげてしまったら、両者ともに失格とする

？チェックポイントはA～Dの各クラスに一つずつ。合計四ヶ所とする

？チェックポイントでは各ポイントを守る代表者二名（クラス代表でなくとも可）と召喚獣で勝負する。撃破でチェックポイント通過扱いとなる

「一組でもチエックポイントを全て通過できれば驚かされる側、通過者を一組も出さなければ驚かす側の勝利とする
？驚かす側の一般生徒は召喚獣でのバトルは認めない。あくまでも驚かすだけとする
？召喚時に必要となる教師は各クラスに一名ずつ配置する
？通過の確認用として驚かされる側はカメラを携帯する

こんな感じ。

「へえ〜。結構凝ったルールだね。面白そうだよ」

「あとはこれに設備への手出しを禁止するって項目でもつけようかしらね」

「そうしないと学園長がうるさそうだからな」

「確か……この後一般公開するんだったかしら？」

「神谷。この悲鳴の定義はどうなっている？」

ソフトモヒカンの先輩がプリントを見ながら聞いてくる。

「そうね……。そこは声の大きさを判別しましょう。カメラを携帯させるわけだし、そこから拾う音声が一定値を超えたら失格ってこ

とでどっしょ？」

「そんなことができるのか？」

「亮とムツツリー二にかかれば大丈夫だろ」

「……………問題ない」

「（そっちはどう？）」

『（任せておけ！）』

この二人が組んだらすごいことになりそうね。

「チェックポイントの勝負科目はどう決める？」

「それについてはお互いに一つずつ科目を指定ってこととでどっしょだ？」

今度は雄二が提案を持ちかける。

「一つずつ？ 二つずつじゃないのか？」

「ああ。もう既に化学と現国の教師には話をしちまったからな。受験で選択されやすいその二つならそこまで有利不利もないし問題ないだろ？」

つまりA〜Dクラスの四つのチェックポイントのうち、化学と現代国語が決定済みとなっているから、残る二つの科目をそれぞれ選ぶことになる。

「坂本よお。それよりさっさと負けた側の罰を聞かせろよ」

「そうだな。負けた側は二学期にある体育祭の準備や片付けを相手の分まで引き受ける、ってことでどうだ？」

体育祭の準備や片付けか……。確かに大変だし、魅力的ではあるけど、

「おいおい坂本。お前にしちゃ随分又ルい提案じゃねえか。さてはテメエ、勝つ自信がねえな？」

流石の雄二でも、状況が状況だけにいきなりキツイ罰ゲームは提案しないみたい。

「アンタらと勝負するって話自体、皆に知らせてないからな。勝手に決める罰ゲームとしてはこの程度が妥当だろ？俺も、アンタも」

そう。いきなりキツイ罰ゲームなんて提案したら、間違いなく皆からひんしゆくを買うことになってしまう。

「……けっ」

「そう逸るなよセンパイ。勝負がしたいのならアンタらはチエックポイントにいてくれたらいい。そうしたら、俺と明久が個人的な勝負をしてやるからさ」

ガンバ、明久。

「チエックポイントで直接対決か……。面白れえ。その話、乗ったぜ」

「そんじゃ、勝負は明日ってことで。楽しみにしてるぜ、センパイ？」

「クズどもが。年上の怖さを思い知らせてやる」

気が付けば二年生だけでなく、三年生まで巻き込んだ肝試しが開催されることとなった。

……本当に大丈夫なのかしら？

第五十三問その一・レッツ肝試し！

以下の問いに答えなさい。

『国連環境開発会議について説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『1992年にリオデジャネイロで開催された国際連合主催の会議のこと。環境や開発について各国の首脳が集まって話し合うもので、地球環境サミットとも呼ばれる。この会議においてリオ宣言やアジエンダ21、森林原則声明が合意された』

教師のコメント

その通りです。地球環境に対する取り組みが各国で盛んに協議されている中で執り行われた重要な会議の一つです。この会議は姫路さんの挙げた二つの名称の他に、リオ・サミットという名前でも呼ばれています。覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『一言で説明するのは難しい』

教師のコメント

わかりました。あとで職員室で時間をかけてじっくりと聞かせてもらいます。

神谷亮の答え

『すごい会議』

教師のコメント

職員室で土屋君と一緒に説明して下さい。

吉井明久の答え

□

環境のことを考えて、この解答は着色料を使用しておりませ
ん」

教師のコメント

貴方は環境以上に自分の卒業の可否についてよく考えましょう。

「なんか、凄いことになってるわね」

「だな。かなり雰囲気出てるし」

翌日、文月学園新校舎の3Fは、完全にお化け屋敷と化していた。

「それで亮。アタシたちはどうすればいいんだっけ？」

「俺たちは旧校舎の3Fで、三年生は新校舎の3Fでそれぞれ準備する。開始時刻になったら一組ずつメンバーが新校舎に入っていくって寸法だ」

ちなみにカメラはムツツリーに全て渡してあるので、後はモニターを準備して映像を映せるようにするのは組み合わせを決めるだけだ。

さて、誰と組もうか……。自分のペアを決めるのに結構時間がかかりそうだ。

「ねえ亮」

隣で優子が俺の肘関節を極めてなければ。

「一応聞こうか。何だ？」

「肝試しで私とペアを組みましょ」

「まずは関節技を解いてくれ。話はそれからだ」

「組・む・わ・よ・ね？」

「わかった！ 組むから！ 組むからその手を離してくれ！」

「じゃ、決まりね」

優子は意気揚々とどこかに去っていった。

「さて。そろそろ突入順とかも決めなきゃならんし、くっちゃべってないで集合場所に急ぐぞ」

雄二が大きめの声で指示したので、俺もそれに従った。

本部は我らFクラスなのだが、人数の都合上Eクラスも待機場所として用意してある。

「亮。モニターの準備はどうなってる？」

「Aクラスの設備のディスプレイを運び込んだから大丈夫だ」

「よし。そんじゃ、夏の風物詩を気軽に楽しもうぜ」

「そうだね。今回は酷い罰もないし、楽しもうか」

「うむ。体育祭の片付け程度ならば今までに比べれば楽なもんじゃ」

「私はあまり、楽しみじゃないです……」

「う、ウチはまあ、アキを盾にできるから、ちょっと楽しみだけど」

「良い絵が描けるぞ」

「……………色々の良いショットを期待してる」

さて、肝試しの始まりだ！

《ね、ねえ……………。あの角、怪しくない？》

《そ、そうだな……………。何か出てきそうだな……………》

まず最初に向かうのは、作りの関係上Bクラスとなっている。そこは江戸時代の町並みをモチーフにしており、光量を絞った演出も手伝って結構スリリングな感じだった。

《そ、それじゃ、俺が先に行くから》

《うん……………》

カメラを構えた二人は、見るからに怪しい曲がり角へと足を進めている。

「み、美波ちゃん……。あの陰、何かいるように見えませんか？」

「きき気のせいよ瑞希。何も映ってないわ」

姫路と島田は怖がりながらもモニターを見ている。中々良い絵になりそうだ。

《行くぞ……っ！》

《うん……っ！》

カメラが曲がり角の先を映し出す。本当に何かいるのか？

しかしそんな予想を裏切り、カメラはその先の道しか映してなかった。

しかし次の瞬間。

《ぎゃああああーっ!?!?!?》

「きゃあああーっ!?!」

カメラの向こうから大きな悲鳴が響き、それを聞いた姫路と島田が同時に悲鳴を上げていた。

「……………失格」

ムツリニが指差した機材にはカメラ?と書かれた音声のデジタルメーターがあり、それは一瞬で赤い失格ラインを跳ね上がっていた。

「……………?!?!?!」

霧島さんは姫路や島田が何を怖がったのかわからないようで、しきりにモニターと姫路たちを見比べては首を傾げていた。

「どうしたの、代表?」

更に優希は霧島さんが何をしているのかすらわからず、「こちらは霧島さんを見て首を傾げている。」

「うん……。先発隊が一つの曲がり角でいきなり失格なんて……。向こうも本気だね」

「だな。流石は三年生といったところか」

カメラは全部で五台用意しており、時間をずらして順々に突入することになってる。

「しかしこれだと逆効果だな」

「最初のところに何があるかわからないね」

「あれだけではむしろ余計に身構えてしまい、恐怖が助長されるだけじゃな」

確かにその通りだ。続く二組目も失格になり、このままでは悪循環になってしまう。

「せめて向こうがどんなことをしてくるのかはつきり映ればいいんだけど」

「いや、それは難しいだろうな」

「どづいことだ雄二？」

《《ひゃああああーっ?!?!?》》

「「きゃあああーっ!?!?!」

続く三組目も失格。これはマズいぞ。

《《ち、血まみれの生首が壁から突然でてきやがった……》》

《《後ろにいきなり口裂け女がいるなんて……》》

はて？ 何か引っかけがあるような。

「のう雄二。さっきおぬしが言った難しいとはどついついどつじや?」

隣で秀吉が雄二に尋ねる。

「……カメラを使っているのは私たちだけじゃないと思う」

雄二よりも先に霧島さんが答えてくれる。それってまさか……

「三年生もこの映像を見ているってことか」

「多分ね。そうじゃなかったらカメラの使用なんて私たちに有利すぎるし」

「何も言われなかったのは、向こうは向こうでメリットがあるからよ」

優希と優子が補足を入れてくれた。

「そうなの？ 僕はてっきり自信があるからだと思ってた」

「まあそれもないわけじゃないだろうが……。こっちのカメラの映像を見ていたら、標的がどの位置でどこらへんに注意を払っているかがわかるからな」

「なるほど。それなら驚かす側としてもタイミングが取り易いし、死角から襲いかかるのも簡単だ」

それに明久以外の召喚獣は物に触れないから、こっちが提供する情報を基に壁をすり抜けて背後から驚かすこともできる。まさに召喚獣を使った肝試しならでのやり方だ。

「つつてもやられたままじゃ収まらねえぞ」

「最初は様子見と思っていたが、これはそうも言っていられないな。あまり点数の高い連中が失格になりすぎるとチェックポイントが辛い」

「向こうもチェックポイントには成績の良い人を配置しているだろうからな」

三年生側の召喚獣バトルをする人は全部で四組八名。Aクラスの人とみてまず間違いないだろう。成績の高い人がいないとチェックポイントで全滅という可能性もあり得る。

「んじゃ、こっちも手を打つか。皆！ 順番変更だ！ Fクラスの須川&福村ペアと、同じくFクラスの朝倉&有働ペアを先行させてくれ！」

雄二がその場に座ったまま声をあげる。しばらくするとカメラのモニター二つにそれぞれFクラスの見慣れた顔が映った。

《行ってくるぜー》

《カメラは俺が持つぞ》

まずは須川と福村が歩を進めていく。度胸があるのか、何も考ええないのか……。

《お、あそこだったか？ 何かが出るって場所》

《だな》

先発隊がごとごとく全滅した曲がり角を曲がり、何気なく横の壁を映すと、

「「きゃあああああーっ！」「」

そこには血みどろの生首が浮いていた。

さらにその横には口裂け女がいた。

「「きゃあああああっ！　きゃあああああーっ！」「」

姫路や島田だけでなく、他の人たちも悲鳴をあげている。けど、

《おっ。この人、少し口は大きいけど美人じゃないか？》

《いやいや。こっちの方が美人だろ。首から下がなからスタイルはわからないけど、血を洗い流したら綺麗なはずだ》

当の本人たちはどこ吹く風といった感じだった。

「な、なんでアイツらあんなに平気そうなのよ!? アキたちも！
怖くないの!? あんなにリアルなお化けなのよ!?」

そんなことを言われても……

「別に命の危険があるわけじゃないからね」

「グロいものはFクラスで散々見ているしな」

「……………あの程度、殺されかけている明久に比べれば大したこと
はない」

「優子の関節技に比べれば可愛いもんだ」

「ワシも同感じゃ」

流血程度で驚くような俺たちじゃない。

《それにしても暗いな…………。何かに躓いて転びそうだ》

《ああ。それなら丁度良い。あそこにある明かりを借りて行くこうぜ》

二人は装飾品として飾られている提灯を借りようとそれに近づいた。

ーボンッ

「「きゃああああっ！」「

突然提灯に小さな手足と鬼のような顔が現れた。あれは提灯お化けか。セットの中に召喚獣を紛れ込ませるとは、うまい演出だ。

《お？ これ掴めないぞ？》

《召喚獣ならつかめるだろ。 試獣召喚っ》

うまい演出もむなしく、福村は喚びだしたゾンビに提灯お化けを持たせて更に先に進み始めた。

……すごくシユールな光景だ。

そのまましばらく進んでいると二人が言い争いを始めた。

《あー、畜生。なんでこの俺が須川なんかと……！》

《お前がモテないから悪いんだろ》

どうやらどっちもパートナーに不満があるようだ。確かに俺も同じ立場なら不満を持つに決まってる。

《何だと須川……？　　そういえばお前、最近女子に声をかけてないな。まさか彼女でもできたのか？》

《ち、違う！　　まだそんな関係じゃない！》

《キサマ！　　女性と知り合ったことを認めな！　　後で異端審問会にかけてやる！》

あ。いまの叫び声で音声レベルが赤いラインを超えたぞ。

「……………失格」

「アイツらは何をやってるんだ……………」

さすがFクラス。他と比べて失格になる理由がバカらしい。

「けど、須川君たちのおかげで相手の仕掛けがわかったね」

「だな。朝倉たちもいることだし、チェックポイントまで行くのも時間の問題だろ」

後発の何組かは驚いて失格になったが、雄二の言うように朝倉たちはチエックポイントまでたどり着いた。

そこには三年生が二人と、化学の布施先生が待ち構えていた。

《《《——試獣召喚つ》》》》

布施先生の許可の下、それぞれの召喚獣が喚び出されて、その点数が表示された。

まずは三年生側の点数が明らかになる。

『Aクラス 近藤良文 & Aクラス 大竹貴美子

化学

326点 & 263点
『点』

やっぱりAクラスの人がきたか。向こうもこっちと同じでフルメンバーじゃないのに、きっちり成績優秀な人を揃えてくるとは流石だ。

それに対して二年生側の成績。

『Fクラス 朝倉正弘 & Fクラス 有働住吉

化学

59点 & ーーー』

《《ぎゃああああっ！》》

「あ。全部表示される前にやられた」

「まあ、こんなもんだよな」

「そうだね。チェックポイントは純粹な点数勝負だもんね」

今のFクラスの連中なら負けても仕方ない。

「だが、これでチェックポイントまでの道のりと相手の点数がわかった。二人合わせて589点か……。次のペアはーー」

『『『俺たちに任せとけっ！』』』

「お前らは対抗できる点数じゃないだろ！？」

なぜか一番最初に自信満々に立ち上がったのは、我らがFクラスのメンバー。

雄二は呆れたように頭を抱えながら、言葉を続ける。

「……………桂」

「ん？」

「いけるか？」

「もちろん」

指名された優希は、特に緊張した様子も見せていない。

「よし。なら秀吉&桂優希ペアに行ってもらおう。頼んだぞ二人とも」

「オツケー。秀吉君がいれば全然心配ないから大丈夫だよ」

「ワシが何かできるかはわからぬが……………桂よ、よろしく頼むぞい」

二人はそのまま教室を後にした。

《 〽 》

《なんだか楽しそうじゃのう》

《そうかな？》

いや優希、楽しくなければ口笛なんて吹かないだろ。

《チェックポイントが見えてきたぞい》

《そうだね》

秀吉が持っていると思われるカメラは、チェックポイントで待機している二人の三年生を映していた。

《 〽 〽 〽 試獣召喚つ 〽 〽 〽 》

四人の声が合わさり、それぞれの召喚獣が姿を現す。

三年生側は言うまでもなくさっきと点数は一緒。対する二年生側は

『Aクラス 桂優希 & Fクラス 木下秀吉

化学

574点 & 86点』

相変わらず恐ろしく高い点数だ。

「まあこの分なら大丈夫だろ」

「本当に頼もしいよね」

「いずれ倒さなきゃいけないけどな」

確かに雄二の言う通りだ。

Aクラスを奪取するには絶対避けられない相手なのだから。

そんなことを話しているうちに、モニターの向こうでは戦闘の準備が整ったようだ。

《桂、任せたぞい》

《オツケー。それじゃ、よっとー》

いきなり優希の召喚獣が細長く伸びて矢印のようになっていている羽で秀吉の召喚獣を巻き取る。

するとだんだんその姿が見えなくなってしまい、ついには消えてしまった。

「ちょっと。木下と桂さんの召喚獣が消えちゃったわよ」

「一体どういうことなんでしょうか？」

きちんと点数が表示されているから、戦闘不能というわけではなさそうだ。

《さて先輩方。せっかくの肝試しなんですから、存分に正体不明^{きょうごふ}を味わって下さいね？》

自分の召喚獣の周囲を警戒している三年生に、優希が満面の笑みを浮かべてそんなことを言っていた。

……これじゃどっちが驚かす側かわかんないや。

《これで勝負ありですね？》

いつの間にか姿を現した優希の召喚獣は蛇の尻尾を片方の召喚獣の首に噛みつかせ、虎となった手でもう片方の召喚獣の胸を貫いていた。

《これでBクラスは突破だから、次はDクラスだね》

《うむ。では行くかの》

《怖くなったらいつでも言ってね。私が守るから》

《それは普通男子が女子に言うセリフだと思うのじゃが……》

《そうだったっけ？》

のんきな会話を交わしながらどんどん進んでいく。

《……あれ？》

《どうしたのじゃ？》

《何かが肩に触れたような……》

はて？ 何があつたんだ？

《んむ？ これは……蛇かのう？》

《こっちはカエルのおもちちゃだよ》

「なるほど。向こうもバカじゃないんだけどな……」

「確かに。うまく切り替えてはいるんだが……」

「うまく切り替えるって、驚かし方を？」

「ああ。刺激する感覚を視覚から触覚に替えてきたんだ」

さっきまでは散々怖い召喚獣を見せつけられていたのに、いきなり物が触れてきたらその恐怖には普通の人ならそう簡単に対応できないだろう。

……普通の人なら、の話だけど。

《このカエル、すごくリアルだね》

《いや、そこは大して問題ではないのじゃが……》

優希はカエルのおもちゃをじつくりと眺めていた。

「……ものの見事に驚かないね」

「秀吉はともかく、桂までこんなに肝が座っているとは正直思わなかった」

「アイツは小さい頃からお化けは平気だったからなあ……」

今のところ特に問題なさそうだ。

「ってことは、向こうもそろそろ動きを見せる頃か」

「ああ。向こうにもこっちの様子は筒抜けだからな。また別の方法で落としにかかってくるだろう」

互いにカメラを通じて状況を把握できるから、相手が順調なら手を打つのは当然だ。

「そうになると、今度は何をしてくるのかな？」

「さあな。見当もつかないがーん？」

雄二が言葉の途中でモニターに体を向けた。

《あれ？ なんだか広い場所に出たよ？》

《中央の上部に照明設備が見えるのう》

天井を映したカメラの画面を見ると、スポットライトらしきものが見えた。

《気をつけてね秀吉君。ここはなんかヤバイよ》

《うむ。これまでとは違うぞい》

モニターの向こうの二人が固唾を呑む様子が伝わってきた。俺の勘が正しければ――ここは勝負の行く末を決める場面の一つだ。

「……………人の気配」

ムツリーニが小さく呟く。

画面の暗闇の向こうには、人影が一つ映っている。あれが向こうの仕掛けなのか？

《とりあえず、先に進むぞい》

《うん》

二人の動きに合わせてカメラも暗闇の奥を映す。

そして、もう少しで空間の中央というところで、バン、と荒々しく照明のスイッチが入る音が響き渡る。

暗闇から一転して光がさす画面の中央には、常夏コンビの片割れである坊主先輩、つまり夏川先輩がスポットライトを浴びて静かに佇んでいた。

ーー全身フリルだらけの、ゴシックローリータファッションで。

『『ぎゃあああああっ！』』』

画面の内外問わず、そこら中から悲鳴が聞こえてくる。勿論俺も生まれてから最大の恐怖体験に悲鳴を隠せない。

「坊主野郎めっ！ やってくれやがったな！」

『『ムツツリーニ！ ムツツリーニ！』』

『『工藤！ 工藤！』』

「だってさ。よろしくね、ムツツリーニ君」

「……………（コクリ）」

ムツツリーニも工藤も特に緊張した様子はない。これはいけるぞ！

「頼んだぞ二人とも。なんとしてもあの坊主を突破して、Dクラスをクリアしてくれ」

「うん。約束はできないけど、一応頑張るよ坂本君」

「ああ。宜しく頼む。ムツツリーニも、いけるな？」

「……………問題ない」

静かに、小さく頷くムツツリーニ。

「……………あの坊主に、真の恐怖を教えてやる」

『ちょっと替わってくねる?』

「(いいけど……どした?)」

『(ちょっと、ね)』

(ムツッリーニ)

(………何?)

(坊主先輩への復讐のために、ちょっと頼まれてくれない?)

(………わかった)

(はい。この秘密兵器を持ってって)

(………これはまさか)

(じゃ、頼んだわよ)

第五十三問その三・俺の夏休み……

（明久サイド）

「皆！ もつすぐあの衝撃映像がくるよ！ 女子は全員目を閉じるんだ！」

来るとわかっていても耐え難い恐怖。モニター越しでも叫び出したくなるほどのプレッシャーだ。

《ムツツリー二君。あの先だっけ？ さっきの面白い人が待ってるのって》

《……………準備はできている》

二人が目的地に近づいてもまだライトは入らない。また突然坊主先輩が現れるのだろうか。

ちなみにカメラを構えているのは工藤さんで、ムッツリーニは何か別のものを抱えていた。

「そろそろくるぞ」

「うん……っ！」

バンッ！（スポットライトのスイッチが入る音）

ドンッ！（ムッツリーニが大きな鏡を置く音）

ケポケポケポッ（坊主先輩が嘔吐する音）

坊主先輩が嘔吐している最中、ムッツリーニが先輩の背中をさすっていた。一体どういうことだろう？

《て、てめえ！　なんてものを見せやがる！　思わず吐いちゃったじゃねえか！》

《……吐いたことは恥じゃない。それは人として当然のこと》
《くそつ。想像を絶する》『かつこよさに』自分で驚いたぜーって
ちよつと待て！ 誰だ今の声は！？》

僕の聞き間違いでなければ坊主先輩本人の声だと思っただけど。

そう思っていると、レンが赤い蝶ネクタイを口元に当てて何かをし
ているのが見えた。

「レン。何してるの？」

レンは僕の方に振り向くと、蝶ネクタイを顔から離し、小さな声で
話しかけてきた。

（ちよつと坊主先輩の声で仕返ししてるところ）

（坊主先輩の声で仕返ししてどうやって？）

（この赤い蝶ネクタイは変声機が内蔵してあって、ムツツリーニ
さつきそのスピーカーを渡したの）

ということは、さつきムツツリーニが坊主先輩の背中をさすってい

たのはレンから渡されたスピーカーを取りつけるためだったのか。

そして、レンは再び蝶ネクタイを口元に当ててしゃべり出した。

《ムツツリー二君。この先輩、ちょっと面白いね。来世でなら知り合いになってあげてもいいかなって思っちゃうよ》

《『どうせならメアドも教えてくれ』ってだから何なんだよこの声は!》

《あ。ごめんなさい。それは無理ですゲロ野郎》

《『もつと罵ってくれ!』ー誰だか知らねえがいい加減にしやがれ! って待てやコラ! てめえナ二人のこんな格好を撮ろうとしてやがるんだ!》

《……………海外のホンモノサイトにUPする》

《『ちゃんと目には黒テープを引っ張っておいてくれよ?』》

《……………了解》

《じよ、冗談じゃねえ! 覚えてろおおっ!》

坊主先輩はダッシュでその場から立ち去っていった。

「それにしても、工藤さんって意外と厳しいこと言うんだね。坊主先輩も涙目になってたよ」

「……普段愛子はああいうことは言わない」

「となると、誰かの入れ知恵か」

「そう言えば、愛子ちゃんは突入する前に清水さんに何か聞いてたよ」

「清水さんって、Dクラスの清水美春さん？」

「それならあの罵倒も頷けるな」

そっか。あれは工藤さんなりの坊主先輩対策だったってことか。鏡を見せて気持ち悪さを自覚させたあとで清水さん直伝の罵倒。そしてレンによる声の捏造。トラウマになってもおかしくないコンビネーションだ。

《……………先に進む》

《多分チェックポイントまであとちょっとだよな》

予想通りさっきの仕掛けに場所を取りすぎたようで、チェックポイントはすぐ傍にあったみたいだ。

《《《試獣召喚つ》》》

ムツリーニの召喚獣は前にも見たとおりに吸血鬼で、工藤さんはのっぺらぼうだった。

「のっぺらぼうのどの辺が工藤さんの特徴や本質にあってるんだろ？」

「のっぺらぼうはHな発言しないしね」

「Hと言えば、ワシは前に演劇の題目の候補として怪談話をさがしておったのじゃが、その中ののっぺらぼうの尻目というものがあつての」

「尻目？」

「うむ。そののっぺらぼうはなんでも、人に出会つと全裸になつたそうじゃ」

「なんかすごい妖怪だね……」

というか、秀吉も桂さんもいつの間に復活したんだろ。それに桂さん、さっきの会話にも普通に混じつてたし。

三年生の召喚獣はミイラ男とフランケン。どちらもメジャーなお化けだから一目でそれとわかる。あの人たちの特徴はけがをしやすい

とか根は優しいとかそういった感じだろうか。

『Aクラス 市原両次郎 & Aクラス 名波健一

保健体育

303点 & 301点』

保健体育は受験科目じゃないのに、二人とも点数は300を超えている。やっぱりAクラスに入るだけあって真面目なんだろうか？

『ムツツリー二君。先輩たちの召喚獣、なんだか強そうだね。召喚獣の操作だってボクたちより一年も長くやってるし。結構危ないかな？』

『………確かに、強い』

対するムツツリー二と工藤さんの点数が表示される。

『Aクラス 工藤愛子 & Fクラス 土屋康太

保健体育

479点 & 557点』

《ーが、俺と工藤の敵じゃない》

《確かに、ね》

瞬きすら許さないような刹那の後、ミイラ男とフランケンは敵と一度も組み合うことなく地に伏した。

「ねえ雄二。今の勝負、何があつたか見えた？」

「ああ。はっきりと見えたわけじゃないが……ヴァンパイアの方は一瞬で狼に変身してフランケンを切り裂いて、また人型に戻っていた」

恐ろしい……。なんて攻撃速度だ……。

「それで、のっぺらぼうの方は？」

「ああ。はっきりと見えたわけじゃないが……一瞬で全裸になってミイラ男をボコボコにして、また服を着ていた」

わからない……。なんで服を脱ぐ必要があるんだ……。

「あと、ムツツリー二はその一瞬で出血・止血・輸血を終わらせて

いた」

さすがムッツリーニ。スケベ心は常人の比じゃない。

《じゃあ、Dクラスもクリアってことで。次はどこに行けばいいんだっけ？》

《……………Cクラス》

《はい。了解。……………ところでムッツリーニ君。どうして鼻にティッシュを詰めているのかな？》

《……………花粉症》

《へえ〜。ふうん。花粉症ねえ〜》

ムッツリーニの鼻血の原因が思い当たるのか、工藤さんはずっとニヤニヤしていた。

くそおっ！ どうして……………どうして僕の動体視力は工藤さんの召喚獣を捉えきれなかったんだ……………！

「あの、明久君。なんだかいやらしいことを考えていませんか？」

「ううん。ちっとも」

「本音は？」

「後でムツリーニ今の対決をスロー再生してもらおうと思ってる」

「確かこれが土屋君の記録用ハードディスクでしたよね」

「あああつ！ 返して姫路さん！ それは持ってっっちゃダメだよ！ その、えつと、そうだ！ 不正監視用に使うかもしれないから！」

「大丈夫です。これだけの人数が証人として見ていますから」

酷い……。僕だけじゃない。きっと亮や肝試しを終えて戻ってきたムツリーニも血の涙を流して悲しむだろう。

「そ、そっか。アキは小さくても興味あるんだ……」

近くでは美波がなぜか胸を押さえてほっとした顔をしていた。

「心配するな明久！」

亮がスケッチブックを持ってこっちに来ていた。

「亮。どついつことだ?。」

雄二も気になるようで、こっちを覗いている。

「こんなこともあるうかと、さっきの工藤の召喚獣の戦闘をパラパラ漫画形式で全て描いたからな!。」

「まさか、そのスケッチブック一冊丸々に!?。」

「もちろんだ。俺の動体視力を嘗めるなよ!。」

アレを全て見切るなんて、亮の動体視力は常人の比じゃない。

「ふむ。確かにリアルに描けているな。亮、よくやってー!。」

「……雄二。おいで。」

霧島さんに襟首を掴まれている雄二と、それを申し訳なさそうに見守る亮。

「雄二!……!。」

「……生まれ変わったら会おうぜ!。」

「ああ。待ってる」

「バカだな……。お前が生まれ変わるんだろうが……」

亮の後ろを見て一瞬フツと笑みを見せると、雄二はそのまま力無く霧島さんに連れていかれた。

なんだろう。この光景、どこかのゲームで見かけた気がする。

でも、亮が生まれ変わるって一体どういうー

「亮。覚悟は出来てるわよね？」

「ゆ、優子……?」

木下さんは怒りのオーラを出しながら、満面の笑みを浮かべていた。

「明久……」

亮の目がすごい哀愁に満ちている。

「うらやましいよ。俺の夏休みー」

亮は僕のもとに一枚の紙を飛ばし、

「ー終わっちゃった……」

木下さんに連行された。

「なんだろう？ この紙……」

折り畳まれていた紙を広げる。

「い、これはー」

さっきの工藤さんの召喚獣での戦闘のワンシーンじゃないか！

「アキ。ちよつとこつち来なさい」

「明久君。ちゃんと反省して下さいね？」

「二人とも。心は怒りだけじゃない。色んなものが詰まってるんだ。忘れちゃったの？」

「「ええ（はい）。残念ながら今だけ（ですけどね）」「

さようなら。僕の夏休み。

第五十三問その四・その人に真に似合った服装は、その服を脱がせたいと思わ

く亮サイド)

《あれ？ この口が二つある女の人ってなんのお化けだっけ？》

《……………ふたくち女》

《じゃあ、あっちの身体が伸びてる女の人？》

《……………高女》

《そっちの毛深い男の人は？》

《……………どうでもいい》

坊主先輩にすら驚かない二人は、普通のお化けには驚くこともなく先に進んでいた。

「二人とも順調だね。このままだとあの二人で全部突破できちゃうんじゃない?」

「それはないんじゃないか?」

「さっきの保健体育の点数を見て向こうもムツツリー二の正体に気がついただろうからな。そろそろ対策を打ってくるはずだ」

「え? どういうこと?」

「三年生はムツツリー二という名前は知らなくても、『保健体育が異常に得意なスケベがいる』という情報はあるだろうから、弱点がバレている可能性が高い」

「弱点っていつても、鼻血を噴き出すだけで悲鳴はあげないんじゃない?」

「いや。失格にするだけなら悲鳴じゃなくてもいい。例えば、鼻血の噴出音とか」

「りよ、亮ったら、そんなことはないんじゃない?」

「どうだかなーっつと、誰がいるぞ」

カメラには、着物を着た一人の女性がいた。

『『『眼福じゃああーっ!!!!』』』

あの人、着物を少し着崩していても色っぽく見える。

そして着物先輩のあまりの艶やかさに、教室の男子生徒が雄叫びをあげた。

《……………この程度で……………この……………俺が……………っ》

《……………ムツツリーニ君？ 足にきてるみたいだケド？》

《……………（ブンブンブン）》

ムツツリーニはかなりグロッキーになっているようだ。鼻血はまだ噴いていない。

「すごいよ！ あのムツツリーニがここまでの色気を相手に鼻血を我慢するなんて！ この勝負は勝ったも同然だよ！」

「いや待て明久！」

「まだ何かあるぞ！」

「え？」

事態を飲み込めない明久をよそに、モニターでは会話が進む。

《ようこそいらっしやいましたお二方。私、三年A組所属の小暮葵と申します》

艶っぽい声に濡れた瞳。伏し目がちに頭を下げ、挨拶しながらも、着崩した着物はそれ以上はだけさせない。この人……マジでヤバイ。

《小暮先輩ですか。こんにちは。ボクは二ーAの工藤愛子です。その着物、似合ってますね》

《ありがとうございます。こう見えてもわたくし、茶道部に所属しておりますので》

《あ、そっか。茶道って着物でやるんだもんね。その服装はユニフォームみたいなもんだよね。ちょっと着方はエッチだけど》

《はい。ユニフォームを着ているのです》

《そうですね。それじゃ、ボクたち先を急ぐので》

《そして、実はわたくしー》

《？ なんですか？ まだ何か》

《ーー新体操部にも所属しておりますの》

はだけられた着物は完全に脱ぎ捨てられ――その下からはレオタードを身に纏う小暮先輩が現れた。

『土屋康太、音声レベルおよびモニター画像全て赤。失格です！』

「畜生っ！ やり方が汚ねえ！ はだけた着物だけでも限界ギリギリだったのに、その下に露出満点のコスチュームだと！？」

「あのムツツリーニがそんなもんを直接見て耐えられるわけないじゃないか！」

「全くだよ！ なんて汚い手を使うんだ！ とにかく雄二とレンは急いで対策を練って！ 亮は小暮先輩のスケッチを任せたよ！ 僕は今から姫路さんに土下座してさっきの記録用ハードディスクを設置してもらおうから！」

「わかつている！ 抜かるなよ二人とも！」

「ハンツ。そっちこそな」

「必ず録画してみせる！」

フレームアウトする前に、なんとしてもスケッチを――ちよつと待たせて。腕が動かないし目も見えない。

「亮。余計なことしてないでアンタも作戦を考えたら？」

「……雄二。悪い物を見るいけない目はこれ？」

「ぐあああつ！ 『いけない目はこれ？』じゃねえ翔子！ 耳や口を捻りあげる調子で目を突くな！ お仕置きのレベルが全然可愛くねえぞ！？」

「お願いだ姫路さん！ 今は絶対一遇のピンスなんだ！ だからハドデイスクを！」

「明久よ。色々な言葉が混ざって次世代言語になっておるぞ」

明久はやっぱりバカだ。

「大変だ！ 土屋が危険だ！ 助けに行ってくる！」

「一人じゃ危険だ！ 俺も行く！」

「俺も行くぜ！ 仲間を見捨てるわけにはいかないからな！」

いつの間にかFクラスの奴らが独断専行を始めている。あのバカども。今のままで行ったら……！

『『うおおおおっ！ 新体操ーっ！！』』』

「……突入と同時に全員失格したようね……」

「なんでうちの学校の男どもってこうもバカだらけなのかしら……」

「どうして覗き騒ぎが起きたのがよくわかる気がします……」

畜生……。折角ここまで良い調子でここまで来ていたのに、一気に戦力が激減だ。

『（マズいわね。このままじゃあの二人しかあそこを突破できなくなるかもしれないわ）』

「（それってどういうー）」

質問をしようとしたところで、雄二に肩を叩かれた。

「レン。頼めるか？」

『（だって）』

「んじゃ、頼んだぞ」

「約束はできないけど、なんとか頑張ってくるわ」

「そうか。頼んだぞ」

そう言うと雄二は、皆の方に向き直って声高々に告げた。

「皆、よく聞け！ 次はレン・木下優子ペアでいくぞ！」

「ま、よろしくねレン」

「「っちこそ頼んだわよ」

さて、なんとしてもあの難関を突破するわ！

第五十四問その一・ひぐかりのこゝえが空々たゞかく聞こゝえる

「というわけで、ここでは僕、吉井明久と」

「この俺、坂本雄二が」

「皆から寄せられた『実際にあつた怖い話』を紹介していきます」

「うさんくさい企画だな」

「そういうことは思つても口に出さないのが礼儀だよ雄二」

「お前もその台詞で本音がバレてるけどな。そんなじゃ、明久。最初のメールを紹介してくれ」

「了解。最初はH・N『オレはシブヤ最強のAIBOY』さんから
のメールです」

「言いたいことは色々あるが、とりあえずBIBOYを名乗るか場
所を秋葉原に変えるかどちらかにしたらどうだ」

「えっと……メールの文章がなんだかヒップホップ調なんだけど、
やっぱりそれっぽく読んだ方がいいかな？」

「ヒップホップ？ よくわからんが、できるならそうした方がいい
んじゃないか？」

「わかった。それじゃあいくよー」『Yeah! オレはシブヤ最
強のAIBOY! 常に進むぜ栄光に! あまり行かないぜ予備校

に!」

「栄光に向かって進みたいのなら予備校をサボるな」

「『オレのthis聞け! そして振り向け!』」

「ほら見る。予備校をサボるからthisとdisを間違えるんだ」

「『誰の言うことも聞きやしねえ! 泣かせた女は数知れねえ!』」

「泣いた女は恐らくお前の母親だろう」

「『オレのラップ、音高く響かせ! 近所のジャップ、恐怖で叫ばせ!』」

「ん……? ラップ……? ああ、そういうことか……。おい明久。そのメールはもう読まなくていいぞ」

「『恐れるヤツぁマジー』ーえ? いいの? 怖い話がまだ出てきてないけど」

「気にするな」

「でも」

「代わりに、そのメールにラップ音とラップの違いを書いて返信してやれ」

「へ?」

「……これ以上説明させるな」

「……あ……そういつこと……」

「……そういつことだ」

「……読まなきゃ良かったね、このメール」

「……俺も……なんというか、自分が悪くもないのに妙に申し訳ない気分だ……」

「肝試し……。困ったわね。アタシ、あまりこういうの得意じゃないのに」

「優子。踏んでる。セットの唐傘お化けを踏んでるわよ」

「あ。ごめんなさい。壊れてないわよね？」

そんな会話を続けていると、着物先輩のところを辿り着いた。

「あら？ あなた方はーそうですか。女の子同士の組み合わせできましたか。それでしたら、わたくしにはできることはありませんね。どうぞお通り下さい」

「だって、レン。お言葉に甘えて行きましょ」

「そうね」

着物先輩は脇に避けて道を譲ってくれた。

おかしい。あまりに無抵抗というか、あっさりし過ぎというか……。もしかしたら、まだ何かあるのかもしれない。

「来たか、神谷。待っていたぞ」

少し道を進むと、私たちの前にモヒカン先輩が立っていた。

「私を待っていた？ どういうこと？」

「よくわからないけど、早く済ませてもらいましょ」

「何の用か知らないけど、手短かに頼むわよ」

「ああ。大丈夫だ。時間は取らせねえ。……いいか、神谷レン」

「何？」

モヒカンの先輩が一步近づいてくる。

「俺はお前のことがー」

なんだろう。嫌な予感がする。

「ー好ー」

「(走るわよ!)」

『(了解だ!)』

俺は急いでレンと替わり、優子の手を取って走り出した。

あの言葉を最後まで聞いたら、日常には戻れない気がしたから。

「はあ……はあ……」

「な……なんでいきなり……走り出すの……」

幸いにもモヒカン先輩は俺たちを追いかけてはこなかった。追いかけてきたら悲鳴をあげていたかもしれない。

「ん？ あれは……」

道の真ん中に、写真か何かが落ちていた。

「む。ここの写真は……」

そこには、限界ぎりぎりまで着物を着崩した小暮先輩が写っていた。

「畜生……！ 完全に油断した」

おかげで鼻から赤い衝動がやってきたじゃねえか！

「そうね。肝試しではもっと気を引き締めるべきだと思っわ」

神は言っている。ここで死ぬ定めではないと。

「まあ待て優子。話をしよう」

「問・答・無・用」

あまりの痛さに、俺は人生で最大級の悲鳴をあげた。

「う、うーん……ここはどこだ……？」

目が覚めると、何故か変な岩山にいた。

空は薄暗く、遠くには鬼の顔を模した山がある。しかもどこからか苦しそうな叫び声が聞こえる。

「なんだよ！ 誰もいないのかよ！ で、どこだよ？」

学校はどこだ？ まあいいや。別に死ぬわけじゃー

「お客様。あの世へようこそ」

「ところで地球上の鉱物資源はどうなるんだろうね。いくらなんでも埋蔵量に限界があるしな」

「あゝ」

「更に重要なのは環境問題だ。俺たち地球鉄道宇宙号の乗組員だからな。資源ゴミは地球の形にしてレッツリサイクル！」

「神谷亮さん。あの世の世界にようこそ」

「タンマーーッ！！」

なんで天使にそんなこと言われなくちゃいけないんだ！？

「地獄に行くのが初めての人には、もれなく鬼さんからキツイお仕置きがプレゼントされます」

というかこの天使、よく見たら姫路が天使の格好してるだけじゃん

か!!

しかも胸は布を巻いているだけだし、背中に至っては大きく開いている。

「姫路。お前いつからそんなに大胆な格好するようになったんだ？
天使ちゃんマジ天使とはこのことか？」

「あゝ、おっしゃっている意味がよくわからないんですが……」

すると、後ろの方でドンドンという、木で木を叩く音がした。

「こら、そこのお前！ 冥界係員をイジめるんじゃない！」

「閻魔様！」

見ると、頭に四角い帽子、首には大きな数珠を下げ、木槌を持つという、閻魔大王の格好をした優子がいた。

「なんだ。優子もいたのか」

「私は優子などという名ではない。閻魔だ。ここはあの世の世界。
そう、お前は死んだのだ！」

マジか!?

「そうか……。崩れゆく崖の中から幼い少女を助け出した後、力尽きてしまったんだな……」

「資料には、サブミッションと書かれています」

「その者、生前は女性のスケッチ、不埒な写真の閲覧といった悪業を行ったそうだな？」

「」

閻魔が視線を向けてきたので、口笛を吹いてなんとかやり過す。

「地獄行き!」

納得いかねええええっ!!!!!!!!!!

第五十四問その一・ひかりのこゝえが空々た々か々く聞こゝえる（後書き）

風「君の心に今すぐアクセス！」

優希「いきなりどうしたの？」

風「いや、このセリフがわかる人は、後半の展開にもデジャヴを持つと思うんだ」

優希「????」

第五十四問その二・地獄極楽メルトダウン

〔神谷美希先生の地獄講座〕

美「今日は地獄についてお話します」

優希「ところで先生、地獄ってどんなところですか？」

美「地獄とは、現世で悪いことをしたものが、その報いとして死後も苦行を受ける場所です」

優希「へえ。そうなんですか」

美「閻魔様を取り仕切っていて、全部で136の地獄があります」

優希「そんなに!？」

美「ちなみにこの136という数字は、実は麻雀の牌と同じ数だったりします」

優希「それはビックリです!　ところで、閻魔様って一体何者なんですか？」

美「いい質問ですね」

優希「どこのニュースキヤスターですか？」

美「閻魔様は別名で夜摩とも呼ばれており、人間の中で一番始めに

死んだ者です。そして以後、仏より地獄の管理を任された人と言われている「

優希「とても勉強になりました」

美「それじゃあ、今回はここまで」

優希「ありがとうございます」

美「次回は三途の川についてです」

優希「はい」

とついでに地獄

「到着です」

いよいよ地獄にやってきてしまった。

「こゝ、ここが噂に名高いいわゆる地獄か……」

「先程も申し上げました通り、地獄では、もれなく鬼さんたちからキツイお仕置きがプレゼントされます」

「いらねえよ!!! ーん?」

少し離れた所に、鬼がいた。

「あれ? 新しい獲物?」

鬼というか、頭に角を生やした明久だった。

「なんだよ。鬼ってこのバカのことかよ」

「バ、バカってどういうことだ!」

「とうとうバカの意味もわからなくなったか」

「そういうことじゃないよ！ どうして僕がバカかって聞いているんだ！」

「じゃあ三角形の面積の求め方を言ってみろ」

「（底辺）×（高さ）÷（三角形の面積）だ！」

「よくできたな。後はそれを2で割ったら三角形の面積が求められるぞ」

その場に沈黙が流れる。

「ほーらやつぱりバカじゃないか」

「なんだと！」

「あの〜……ここ地獄ですので、お客様が騒ぐのはご遠慮いただいているのですが……」

「何かの店かよここは！？」

「隙あり！」

天使にツッコんだ瞬間、後ろから鬼が羽交い締めをかけた。

「これで終わりだ！」

「なんの！ 必殺『神速着替え！』」

「え！？ 何で僕がメイド服になってるの!？」

「あの、鬼さん……すごく似合ってますよ……」

一瞬でメイド服に着替えたバカな鬼と、その姿を恥ずかしながらもじっと見ている天使。傍から見ればすごいシユールだ。

「こうなったら、いくよ皆!」

『『『おっ!』『『『

鬼の合図で周りからたくさん鬼（の角を頭に生やしたFクラスの面々）が出てきた。

「おっ、こいつらをどうしてやるのかな……」

そこまで考えてふと思いつく。

そういえば地獄は思い一つでどうとでもなる。つまり、例のアレと原理が一緒だったはず。

それならー」「いくぜ！ 甲縛式オーソウル 白こー」

「待ってください！ それはダメです！」

いいところで天使に止められてしまった。せつかく具現化できたのに。

「そうか。これはダメか。だったら甲縛式オーバースル 黒びんー」

「装備の問題じゃありません！ それ以上やるとこの世界が崩壊しちゃいます！」

そうか……。ダメなのか。

「はあ……。ん？ しー」

俺は口に指を当て、静寂の合図を出す。

「皆の衆。静かに耳を澄ませてご覧」

『え?』

「ほらほら、妖精さんの不思議なお話が聞こえてこないかな?」

『何?』

『一体何だろう?』

皆が耳を澄ませて静かになったところで、俺は一冊の本（表紙がタイトスカートを履いた美人女性のやつ）を取り出した。

「生徒から尊敬される、若くて美しく、優しい女教師。なんとこの人、こっそり夜の教室でセルフヌードを撮影するのが趣味ってワケ」

『え!?!』

「そんなある夜、一人の男子生徒が、忘れ物を取りに夜の教室へ…」

…」

『つ、続きは!?!』

『先生どうなっちゃうんだ!?!』

『鬼さんたち、すっかり虜になっちゃってます』

俺は本をそつと閉じ、鬼たちに語りかける。

「てなわけで、こんな話、天国に行けばそこら辺にゴロゴロ転がってるさー!!」

『本当か!?!』

「当たり前だ! お前ら、天国に突入だ!」

『『『『おおーっ!』』』』

「ダメです! そんなことしたら、大変なことになっちゃいます!」

『やっぱりやめるか……』

『そうだな』

「まあまあ大丈夫。秋の味覚キノコラーメンが出来たから、届けに参るだけだ」

「それなら大丈夫ですね」

「というわけで、天国に来ていただきました」

「連れてきちゃダメーッ！」

「ここが天国かーってちょっと待て！」

「なんで雄二とムツツリーニが天国の住人なんだよ!? おかしいだろ!!！」

「誰だお前？」

「……………去りたまえ」

「どうも天国のシステムは根本から間違っているようだ。」

「あゝ……………キノコラーメンを……………」

「今日からこの天国、閻魔に成り代わってこの俺が管理してやるから、覚悟しろよー！」

「キノコラーメン……」

「新天国規則！ 一つ引きこもりは一日六時間まで！ 二つファイ
ル共有は禁止！ 三つー」

「もう出てけーっ！ー！」

「みぎゃあああっー！！」

閻魔に木槌で思いつきり後頭部を殴られた。すごく痛かった。

「あれ？ ここは……」

目を開けると、見慣れた天井が目に入った。

「ここは教室じゃ。それよりお主、大丈夫かの？」

「なんとか……」

なんかリアルに死んでいた気もするけど、多分大丈夫だろう。

「で、肝試しは今どうなってる？」

「現在久保と清水らしき者がチェックポイントで戦っておるぞい」

モニターを見れば久保の姿は確認できる。ということとは、

「あの随分禍々しいのが清水だったのか？」

「うむ」

現世へと戻ってきた喜びを噛みしめる前に、恐怖とは別の感情が襲ってきた。

「ここ、本当に現世だよな？」

第五十五問・血で血を洗うこの現世こそが本当の地獄だってどこぞの包帯男が言

「それじゃあ次のメールは俺こと神谷亮と」

「この私、桂優希が担当するよ」

「というか明久と雄二はどうした？」

「その二人ならほら、そこでダウンしてるよ」

「あの様子じゃあしばらくは無理だな。んじゃ優希、メールを読んでくれ」

「了解。え〜つと、H・N・『悩める弟』さんからのメールだよ」

「ちゃんと怖い話なんだよな？」

「『初めましてお二人とも。突然ですが僕の怖い実体験をお話します』」

「初めまして」

「『実は僕には兄がいます』」

「ふむふむ」

「『真面目で勉強のできる自慢の兄です』」

「確かにそいつは立派だ」

「『ところがその兄が、学校の合宿から帰って以来、急に人が変わってしまった』」

「変わった？　もしかして憑き物とか？」

「『なぜか妙に晴れ晴れとした顔で、“学校一のバカと称される男友達”について熱く語ってくるのです』」

「……………へ？」

「『あまりに熱心に語るのので、怖くなってこっそりと部屋をチェックしてみたのですが』」

「……………どうだったんだ？」

「『同じ年くらいの男の写真が机の引き出しに入っていました』」

「……………」

「『それ以来、僕は怖くて兄の顔をまっすぐ見られません』」

「……………」

「『きっと兄は、合宿で何か恐ろしい世界へ足を踏み入れてしまったのだと思います。お二人も気をつけて下さい』だって……………」

「……………」

「以上、H・N・『久保良光』さんーじゃなくて、『悩める弟』」

さんからのメールでした……」

「面目ない……。久保の弟よ……」

久保と清水（らしき何か）が怯えていた先輩たちを僅差で撃破してCクラスもなんとかクリア。残るはAクラスだけとなった。

《いないな……。あの二人はどこにいるのだろう……。急がないとこうしている間にも二人の絆が……く……っ！》

《ドコ……？ オネエサマ ドコ……？》

「んむ？ どうやら久保と清水がチェックポイントに到着したようじゃな」

「あ、本当だ」

《おう。来たみてえだな。随分と待たされたぜ》

《お前らが俺らのお相手一組目だな。三年生の実力をじっくりと見せてやるから覚悟しやがれ》

そこにはやはり常夏コンビが待ち受けていた。画面の隅に木村先生がいることから、物理での勝負つてことか。

《失礼。先輩方、ここに吉井君と島田さんは来ませんでしたか？》

《アあ？ ここに来たのはお前らが最初だぜ》

《え？ そんなはずは……。彼らは僕たちよりも先に行っていたはずでは》

《吉井たちなら確か、途中で引き返していくのが映っていた気がするな》

《そ、そんな……！ じゃあ僕たちは、今までずっと無駄な時間を……！》

《？ よくわからねえけどよ、あいつらに会いたいのならさっさと俺たちに負けて教室に戻るんだな。――試験召喚》

《そういうことだ。さっさと始めようぜ。試験召喚》

《そうですか……。試験召喚》

《……試験召喚……》

『Aクラス 久保利光 & Dクラス 元・清水美春

物理

213点 & 71点『

どうやら二人とも文系らしく、物理はそれほどずば抜けているわけでもない。

でもまあ、常夏コンビが相手なら大丈夫だろー

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平

物理

412点 & 408点『

「「「なにいつ!?!」「「「

驚きのあまり思わずハモってしまった。

「ちよちよちよちよつと、あの点数どついついこと!?!? 常夏コンビ
つてあんなに点数が良かったの!?!?」

「あれではまるでAクラスの優等生じゃな」

「……………信じられない」

「他の科目の点数とは桁違いじゃんか」

「しくじった……………！ どうりで簡単に挑発に乗ってきたワケだ。アイツら、俺の意図を見透かしてやがったな……………！」

こっちは霧島さんや雄二がいることはわかっているのに、焦らなかつたのにはそういう理由があつたのか。

《んじゃ、せいぜい頑張ってみるよ後輩ども》

《散々待たされたんだ。ちょっとは粘ってくれよ？》

常夏コンビの召喚獣は、デカイ武器を構えた牛頭と馬頭。二人にはぴったりに思える。

さて、勝負の行方は《僕らの負けですね》早えなオイ。

「どうだ雄二？ 勝てそうか？」

「ん……………。良くて4…6つてところだな」

「そりやまた、随分と厳しいね」

「翔子はともかく、俺の物理はせいぜい150点程度だからな。召喚獣の操作も向こうの方が一年長くやっている分慣れているだろうし、そんなもんだろ」

「それなら、他の人が少しでも消耗させておいてくれたら」

「……………それは厳しい。残っている戦力は、突入済みのを入れても四組だけ」

ムツツリーニが名簿を見ながら呟く。

雄二たちを除いた三組六人の中でチェックポイントにたどり着けるペアとなると、一組いるかどうかだ。

「……………ちなみに、その四組のうちの二組は明久たち」

「え？ 僕？ あ、そっか。そういえば僕はまだ失格にはなっていないんだっけ」

もしかして明久はまだ行ってないのか？

「けど、美波はあんな状態だし、僕らはもう戦力にはならないよ」

さっきの常夏コンビたちの会話と合わせて考えると、どうやら島田と一度行った後で引き返したようだ。

島田以外となると、もしかして……。

「明久よ。ムツツリー二が言っておるのは、お主と島田のペアではないぞい」

「え？ でもさっき、ムツツリー二は僕だって」

「うむ。お主と雄二と霧島以外にもう一人おるではないか。この場において、失格になってない人材が」

「わ、私のことでしょうか……？」

やっぱり姫路か。名簿でも最後の方になってたし、島田みたいに気絶等の変化もないみたいだし。

「あ、あの……。私、ああいうのは本当に苦手で……。だから、その……。明久君に、すごく迷惑をかけちゃうと思うんですけど……」

「いや。そんなに気にしないで大丈夫だよ姫路さん。罰ゲームもたいしたことないんだしー」

「それでも良かったら……明久君と一緒に、参加したいです……」
「別に無理に参加しなくてもーってええっ!? 姫路さん、行ってくれるの!？」

「あ、はい。明久君の迷惑にならないのなら……」

「ううん！ 全然迷惑なもんか！ むしろ大歓迎だよ！」

「そうか。姫路もやつとその気になったか。ま、当然だよな。あの島田と明久の様子を見ておいて何もしないようなら、姫路に勝ち目はないもんな。ここは勇気を出して」

「さ、坂本君!? それ以上言ったら怒りますからねっ!？」

「YOU言っちゃいなYO」

「神谷君もあんまり詮索しないで下さいねっ!？」

「了解」

明久は島田と何があつたんだ？

「い、行きましよう明久君っ」

「あ、うん。そうだね。急いで行こう！」

明久・姫路ペアと雄二・霧島さんペアが出発した。さて、俺はモーターでー

クイクイツ

その時、誰かに袖を引っ張られた。

「って優子か。どうしたんだ？」

「どうしたんだ、ってアンタ……さっきのこと、少しは反省した？」

「さっきのことって、肝試しのことか？」

「ええ」

さっきの肝試しで反省すべき点は……そういうことか。

「ちゃんと反省してるわ」

「そう？　ならこれからは他の女の人をいやらしい目で見ないようにー」

「これからは、なるべく悲鳴は我慢しよう」

「ええ、わかってたわ。アンタがそういう受け答えをするってこと

「ぐらいね」

「よくわからんが、まずはその腕を放してくれないか？」

俺の関節がすごく痛い。

そんなやりとりをしていると、

《どうしてそんな酷いことを言うんですかっ！！！！！！》

モニター越しでも驚くほどの大音量で、そんな叫び声が聞こえてきた。

《んだテメエ……！ 文句でもあんのか……！？》

《確かにあなた方の言うように、明久君と坂本君の成績はあまり良くなかったのかもしれないし、色々と問題も起こしちゃったかもしれないません……！ でも、だからってどうしてそれだけでそんな酷いことを言うんですか！ 何も知らないくせに……！ 明久君たちが、本当はどれだけ優しく、どうして問題になるようなことをやっていたのかも知らないくせに！》

《っせえな！ お前こそアイツらがどこまで頭が悪いのか知らねえんじゃねえのか！？ ちょっとアイツらの点数を調べてみりゃわかるだろうが！》

《どうして成績とか、そんな数字の上でしか人を見られないんですか！ 点数に出てこない部分にだって、大事なことはいっぱいあるのに……！》

姫路の涙混じりの声には、何かしらの強い感情が込められているように聞こえた。

《ぎゃんぎゃんわめくな！ あんなカス共の事情なんて知ったことかよ！》

《明久君たちはカスなんかじゃありません！》

《いいから出て行け！ なあ常村、コイツら今の大声で失格だよな！》

《あ、ああ。そついやそつだな。こりゃラッキーかもな》

《ってことだ！ さっさと失せろ！》

《……言われるまでもない。その顔、いつまでも見ているものじゃない。行こう姫路》

《………はい》

『(ちよつといふ?)』

「（ああ）」

しばらくすると、霧島さんと目に涙を浮かべている瑞希が戻ってきた。

「霧島さん。ちょっと瑞希を借りるわね」

「……わかった」

「それじゃあ瑞希、ちょっと来てくれる？」

私は瑞希の手を取る。

「あの……レンちゃん。行くってどこにですか？」

「気分転換をしに、屋上まで」

第五十六問・そこに空があるから

次の元素記号を原子量の小さい順に並べ、その名称を書きなさい。

『Ne Ga H P O Na I O』

姫路瑞希の答え

『H：水素

O：酸素

Ne：ネオン

Na：ナトリウム

Ga：ガリウム

I：ヨウ素

Po：ポロニウム』

教師のコメント

正解です。GaやPoはなかなか出てこない元素なので難しいかと思っただのですが、流石は姫路さんですね。

土屋康太の答え

『H:H

Na:な

O:お

Ne:ね

Ga:が

I:い

Po:ポツ (* / \ *)
『

教師のコメント

こんな解答なのにナトリウム以外の並び順が合っているのが腹立たしいです。

屋上に出ると、そこは夕焼け空で紅く染まり、涼しい風が吹いていた。

「どう瑞希。少しはすつきりした？」

「あ、はい。ありがとうございます」

その割には少し表情が沈んでいるように見える。

「……明久たちのことをバカにされたのがやっぱり気に入らない？」

「……だって、何もわかってないのに、あそこまで悪く言うのはあんまりですよ！」

瑞希の目に、再び涙がたまる。

「でもね、やっぱりそんなもんなのよ」

「え？」

「誰もかれもを認めれる程、人間は単純じゃないわ」

「それでもー」

「でも、誰に何と言われ侮辱されようと自分のことを信じてくれる人がいたら、それだけで嬉しいものなんじゃないかしら？」

その言葉を聞いた瞬間、瑞希は驚いたというよりは、何かを思い出した顔をした。

「レンちゃんって、まさか昔ー」

ガチャッ

「にじにいたのか」

瑞希の言葉を遮るように、常夏コンビが屋上にやってきた。

「? どうしたんですか?」

「その……さっきはあんなこと言って、すまなかった」

「え……?」

瑞希だけでなく、私まで目をパチクリさせてしまう。一体何があったの?

「それじゃあ、俺たちはこれで!」

二人はそのままそくさと立ち去ってしまった。

「もしかして……明久君のおかげなんでしょうか？」

「……多分ね」

アイツも、やるときはやるってことかしら？

「私はそろそろ行くけど、瑞希はどうする？」

「私はもう少しここにいます」

「そう。わかったわ」

私に出来るのはここまで。

後はアンタに任せたわよ、明久。

「おい明久。海に行くと言っても、どこの海に行くんだ？」

「やっぱり遠いのか？」

「確か、僕が小さな頃に行ったことのある場所だったと思うけど……」

「海、ねえ……。ウチはできれば山の方が嬉しかったんだけどね……」

「わ、私もです……」

「ボクは海とかプール大好きだけどな」

「……私も嫌いじゃない」

現在海に行く時の計画を立てるために、明久の家に集まっている。

「近くで祭なんかがあると良いのじゃが」

「あ。それいいわね。どこかにないかしら？」

「……水着に浴衣……生きて帰って来られるか……」

ムツリ二のヤツ、生きて帰ってこれるかなあ……？

P r r r r r !

「あ、ごめん。電話だ。ちょっと外すね」

「おう。行ってこい」

明久が携帯電話を持ってリビングを出ていった。

さて、行き先が海ということもあり、今の俺の中には究極の疑問が二つ存在する。一つは、果たして姉貴が普通車を運転できるのかどうか。

もう一つは――

「（水着どうしようか？）」

『（うーん……。どうする？）』

もう一つは、海で男物の水着を着るか、女物の水着を着るかだ。

第五十七問その一・シェイプアップのための運動では、体内の脂肪と糖質がそ

「そっぴや姉貴。姉貴って車を運転できるよな？」

「うん」

「やっぱり普通免許か？」

「亮くん」

「何だ？」

「必要なのはカードじゃなくて技術だよ」

「まさか無免許運転か!？」

「冗談だよ。ちゃんと普通免許持ってるから。ほら」

「確かに本物だ」

「ところで、どんな車を借りるんだ？」

「玲さんと話して、私は四人乗りの車を借りることになったの」

「了解。ところで、普通車は普通車でもまさかミニカー（おもちゃじゃない方）しか乗れないとかないよな？ 高速使ったらしいから、ミニカーじゃ無理だぞ？」

「ミニカー以外にも乗れるから高速も大丈夫だよ。ところでなんで

そんな疑問が出てくるの?」

「いや、もしかしたら右足がブレーキに届かないんじゃないかと思
って」

「私そんなに小っちゃくないよ!」

抜けるような青空に入道雲。いよいよ夏本番って感じた。

「今日は海に行くには最高の天気だな」

Tシャツにハーフパンツというラフな格好の雄二が呟いた。

「まったくじゃ。むねーではなく心が踊るのう」

「胸は踊らないの?」

「男じゃから踊らないのじゃ」

「?????」

こっちは薄手の白のパーカーと七分丈のパンツを組み合わせている秀吉が車の到着を今か今かと待ち構えており、Tシャツに肩紐付きのスカートという格好の優希はそんな秀吉を見て首を傾げている。

「二人とも。少しは落ち着いたら?」

ノースリーブに膝上までのスカートという格好をした優子が秀吉と優希を諭す。こうしてれば普通の姉なんだが……。

「……………血液パックが傷まないか心配」

ロールアップのジーンズ姿のムッツリーニが、抱えているクーラーボックスを心配そうに見ている。このクーラーボックスの中の血液パックがコイツの命を支えているのだろう。

「ところで亮。美希さんはどんな車を借りたの?」

Tシャツにジーンズ姿の明久がこっちを向いて聞いてきた。

「四人乗りの車って言った」

「荷物も乗せるとなると、乗れるのは三人ぐらいってこと？」

「そうなるな」

「そうになると、皆車に乗りきれれるんですか？」

タイトなデニムのスカートとTシャツの上にキャミソールを重ねた
姫路が旅行鞆を両手に抱えてこっちを見ている。

「そういえばそうね。お姉さんを入れたら九人だから普通の車の免許で大丈夫なの？」

「姉さんは大丈夫って言うていたけど……」

その隣に立つ島田はロングの巻きスカートにTシャツという格好。
二人とも私服がよく似合っているなあ。

「……自動車の中型免許は十一人以上から」

「ボクも昨夜ネットで調べたけど、普通免許でも車次第で十人までは乗せても大丈夫みたいだよ」

霧島と工藤が明久の代わりに説明してくれる。

霧島はミニスカートにペールトーンのサマーセーターを合わせてい

た。

一方、工藤は、

「ん？ 吉井君に神谷君。そんなにボクの格好が気になる？」

「い、いやっ。別に」

「……あ、さては……」

「な、何かな？」

「ボクのキャミの中が気になっちゃうのかな？」

「べ、別にそういうわけじゃ……！」

「あははっ。見たいのなら、もっと堂々と見たらいいのに。ボクは全然構わないよ？」

工藤はショートパンツの上はキャミソールだけという露出の激しい格好だ。しかもさつきから水着の日焼けのあとがチラチラ見えている。

「そっだ神谷君。ちょっと何枚かボクを描いてみてくれない？」

「別にいいけど、ポーズとかは取るか？」

「じゃあ……こんな感じで」

そう言うと工藤は手を膝に置き、前かがみのポーズを取った。そのせいか、胸元の露出がさつきより若干増えている。

そしてそんな工藤を見て雄二が目を細めていた。

「そういえば工藤は水泳部に入っていたんだっただな。随分と健康的な日焼け跡がついて（ブスリービクンビクン）」

「……浮気は禁止」

冷静に目を潰す霧島と痙攣しつつ地面でのたうつ雄二。やっぱりコイツはいつまでも成長しないなあ。

「なあ優子ー」

「（ササッ）ど、どうしたの？」

「ちょっと待て。お前、今俺に関節技を極めようとしなかったか？」

最近になって、優子の殺気の消し方が上手くなった気がする。

そんな感じで皆は雑談、俺は工藤をスケッチしていると、目ざとい

ムツツリーニが最初にその気配に気が付いた。

「……………車が来た」

「んむ？　おお。そのようじゃな」

軽自動車と、その後ろにマイクロバスほどの大きな車がやってきて、ゆっくりと俺たちの前に停まった。

「お待たせ」

「どつちらお待たせしてしまったようですね」

軽自動車からは姉貴が、大きな車からは玲さんが降りてきた。

「皆さん初めまして。亮くんの姉である神谷美希です」

姉貴が皆の方を見て、会釈をする。

「こちらこそ初めまして。姫路瑞希です」

「島田美波です」

「木下秀吉じゃ」

「俺は坂本雄二だ」

「……………土屋康太」

「……………初めまして。坂本雄二の妻の翔子「ちょっと待て！何を勝手に（ブスリービクンビクン）」……………翔子です」

「こんにちは、吉井君のお姉さんに神谷君のお姉さん。ボクは工藤愛子つていいいます」

「お二方とも初めまして。秀吉の姉の優子です」

「初めまして、吉井君のお姉さん。私は桂優希です」

「初めまして、翔子さんに愛子さんに優子さんに優希さん。私は明久の姉の玲です」

初対面の人が多く、挨拶が続く。なんとも和やかだ。

「さて。こうしていても仕方ありませんので、早速向かいましょ
うか」

玲さんが車を指差す。

「そうだね。話は車の中でもできるし、時間も勿体ないからとりあえず出発しようか」

「「「はい」」」

姉貴の車には優希と優子が、それ以外は玲さんの車に荷物を抱えて（のたうち回る雄二もなんとか玲さんの車に）乗り込む。

さて、いよいよ旅行スタートだ。

「そついや明久」

「ん？ なに雄二？」

車の中で、雄二が隣に座っている明久に話しかける。

「お前はこれから行く所に行ったことがあるんだろ？ どんなどころなんだ？」

「え？ ああ、うん。えっと……」

明久の言葉が淀んでいる。

「明久。もしかして全然覚えてないな」

「まさか。そんなことあるわけないじゃないか」

「ならいつ頃行ったんだ？」

「確か、五、八年前の春か夏か秋のことだ」

「範囲広すぎだろ」

「さては全然覚えておらんな」

「っーか見栄張ったろ」

「……………（コクリ）」

どつちやら図星のようだ。

「つまりは着いてからのお楽しみ、というわけじゃないな」

「そうね。折角だから楽しみにしてましょ」

「近場の海なら限られますが、泊まりがけの遠出となるとどこに連れて行ってもらえるのかわからなくて楽しみですね」

ちなみに十人乗りの車なので、座席は前から順に二人・三人・三人となつている。最前列には運転手の玲さんと乗り物酔いをするという理由でムツツリーニ。その後ろに霧島と工藤。そして姫路、島田、秀吉が後ろに座り、最後列に俺たちと続いている。

ところでさっきから気になっているんだが、

「姫路に島田。さっきから何故俺と秀吉を交互に見てるんだ？」

「いえ。二人のウエストがばっちりくびれているので羨ましくて…」

…

「待つんじゃないよ。姫路よ。生来男のウエストにくびれは発生せんぞ」

「どうやったらそんな風になるのよ……」

「ダメだ。この二人、まったく話を聞いてねえ……」

どうしたら話を聞いてくれるんだろうか。

「お主ら、少々気にしすぎではないかの？」

「いえ、いつもはここまで気にしないんですけど、今回は……」

「水着だし、それに……」

「ええ。そうですね」

姫路と島田の視線が運転席の玲さんと、後ろをついてくる姉貴の車に向かう。

「……確かに、玲さんと美希さんは危険」

「だよね。ボンツ、キュツ、ボンツ！ って感じたもんね。あまり気にしないボクでも羨ましく鳴っちゃうよ」

更に霧島と工藤も会話に加わる。女子にも色々あるようだ。

「本当に、あの胸が羨ましくて仕方がないわ」

「私はウエストのくびれが羨ましいです……」

「……お姉さんたちの色気。ずるい」

「グラビアモデルみたいだね。二人のおっぱい、瑞希ちゃんと同じくらい卑怯だと思うよ。凄く張りがありそうだし」

「あのスタイルなら、どんな水着をでもきつと格好いいんじゃないかな……」

「美希さんは逆に可愛く見えるんじゃない？ いいなあ……」

「……羨ましい」

「Hな本に出てくるヒモみたいな水着とか、フリフリな水着とかも着こなしちゃいそうだよな」

『あら？ 康太くん、どうかしましたか？ 鼻から何か赤い物が』

『………車酔い』

車酔いじゃあ鼻血は出ねえよ。

第五十七問その二・In The Blue Sky

車に揺られて三時間。長い道のりを経て辿り着いたペンションは、緑に囲まれながらも潮の香りが届いており、抜群の立地だった。

「わぁ……」

「眺めもいいね」

「本当に凄いわね」

「ええ。風も気持ちいいし」

「潮のいい香り」

「……絶好のロケーション」

「晴れて良かったよね」

車を降りた女子勢が外の景色を見て感嘆の声を上げた。

「さて。これからどうするんだ？」

「荷物を置いてすぐにでも海に向かうか？」

「そうだね。海が見えたら泳ぎたくて仕方なくなっちゃったし」

「……………（コクコク）」

これが夏の海の方ってやつか。

「それでは荷物を部屋に運んだら海に行きましょうか」

「「「はい」」」

そんなこんなで三十分後。

「やっぱり俺たちは待たされるわけだ」

「仕方がないよ。向こうは水着の準備に時間がかかるんだから」

「……………「こつちも機材の準備に時間がかかるから助かる」

「ま、そのうち来るんじゃないか？」

「亮は亮で凄い格好してるよね」

「しょうがないだろ。こつするしかなかったんだから」

明久の言う通り、今の俺は凄い格好だ。

具体的に言うと、トランクスタイルの女物の水着を着て、その上に濡れても透けないTシャツと男物の海パンを穿いている。だから端からは体が少し膨らんでいるように見える。

ちなみにこんな格好になった理由としては、いつどっちが出てきてもいいように、というものだ。

『……む。明久たちはあそこじゃな。おーい、おぬしらー』

『あ、あなたっ！ 何をしているんですか!?!』

『んむ？ なんじゃ、監視員の方じゃな。そんなに血相を変えてどっしたのじゃ?』

『どっしたのじゃ、じゃありませんっ！ どうしてあなた、上を着ていないんですか!?!』

『???? どうしてと言われても、普通男物の水着に上は着ないものじゃと』

『女の子が男物の水着を着る時点で間違っているんです！ とにかくこっちに来なさい!』

『ま、待つのだじゃ！ ワシは男じゃからこれで良いと』

『私の目が黒いうちは、この海水浴場でそんな過激な格好は許しませんからね！ ここは子供たちも大勢いるし、怖いお兄さんとかも』

一杯いるんだから！」

『だから違うのじゃ！ とにかくワシの話をー』

『上を着ない限り、絶対に海水浴場には入らせませんからね！ 途中で脱いでも大丈夫ですよ！ きちんと遠くから双眼鏡で監視しますからね！』

『だから待つんじゃないと言ってるのにー！』

なんか今、遠くから秀吉の声が聞こえた気がしたけど、気のせいかな？

「それにしても、今回は玲さん様々だな」

突然、雄二が海を見ながらそんなことを言った。

「ん？ 車のこと？」

「それもあるが、『不純異性交遊禁止』ってヤツだ。あれのおかげで翔子がおとなしくなってくれて助かる」

「ああ、それね。それは僕以外には適用されないと思うけど」

「いや。全員に、ってことにしておいてくれ。その方が都合がいい」

「え〜？ どうしようかな〜？」

これは珍しい。一瞬でも明久が雄一よりも優位に立つとは。

「別に、言いたいなら言っても良いが、その時はお前にも相応の報いを受けてもらう」

「報い？」

「島田とのキスをバラす」

「天地神明に誓って黙っておくよ」

一瞬にして二人の立場が逆転した。

「そっぴやお前、他にも頬にもキスされてたなんてことがあったよな」

「うえっ!？」

それは初耳だ。明久の慌てようからして多分本当だろう。

「ち、違っただよ! 屋上でのあれはきつと、姫路さんなりの挨拶のつもりだったはず! あれ以来特に姫路さんの態度は変わらないし、本当のところを聞こうと思ってもなかなか切り出せないしー」

「は？ 島田の妹のチビッ子じゃなくてか？」

「姫路？」

「……………明久。屋上って？」

「……………」

ふむ。面白いことになってきた。

「明久。お前何か面白いネタを隠してないか？」

「いやいやいやいや。そんなことはないよ。ちょっとそついう夢を見たことがあるってだけで」

「んじゃ、後で姫路に聞いてみるか」

「おだへば」

「何語かわからんが、『やめて下さい』と言いたいってことだけはわかるぞ」

「それは話が早くて助かるよ……………」

まさかもうそんなところまで進んでいるとは思わなかったな。

「初恋、まだ続いているって言っていたもんなあ……」

「どした？」

「あ、いや。姫路さんの初恋の相手って誰だったのかと思ってた」

いや、お前以外に考えられないんだけど。

「姫路の初恋の相手？ 実はお前だったりするんじゃないのか？」

「あはは。そうだったら嬉しいけどね」

「……………違うの？」

「うーん……。確か小学校の頃、姫路さん本人が違うって言うていたよな……」

「でも、昔の話だろ？ 気にしても仕方ないさ」

「だよ。あはは」

「それよりも重要なのは、」

「……………さっきのキスの話」

「その通りだ」

流石は雄二とムツツリーニ。よく分かっている。

「……………っ！（ササッ）」

突然ムツツリーニの目が光り、俺もそれにあわせてスケッチブックと鉛筆を構える。

「ほらほら。皆来たみたいだよ。やっぱり海と言えば水着の女の子だよね！」

「ちっ。誤魔化されたか」

「ま、明久のことは置いていて、」

「……………とにかく、撮影を」

ムツツリーニは器用に四台のカメラ全てを同時に構えている。とにかく俺もスケッチの準備だ！

「やっほ」

「お待たせっ。準備に手間取っちゃってゴメンね」

元気な声と共に工藤と優希がやってくる。優希はビキニの水着を着ており、工藤は下の方がジーンズを短くカットしたようなパンツの水着を着ている。しかも水泳部の水着とサイズがだいぶ違うのか、肩や腰の部分に日焼けの境界線がはっきりと見えている。それに被っている麦わら帽子もよく似合っている。

「流石水泳部だな。水着も麦わら帽子も似合っているもんだ」

「そうかな？ ありがと、坂本君。……ん？」

「……………(ササツ)」

「あははっ。ムツツリーニ君ってば。ボクの水着、撮りたいのなら神谷君みたいに堂々とすればいいのに。いつも言ってるけど、別にボクは怒ったりしないから。ね？」

そこで俺を出されても困るんだけど。

「……………自惚れるな、工藤愛子」

「え？ どういうことムツツリーニ君？」

「…………… 貴様の水着に興味など微塵も（ダバダバダバ）ーこれは熱射病のせい」

「おお。頑張ったなムツツリーニ。28秒だぞ」

「凄いいじゃないかムツツリーニ。鼻血の我慢記録更新だよ」

「ムツツリーニよ。これに驕らず更に精進するのだ」

「吉井君に坂本君に神谷君。そんな悠長なことを言っていないで助けてあげようよ……………」

「このままじゃ土屋君が精進する前に昇天しちゃうよ」

止まらない鼻血を心配して、工藤がムツツリーニに駆け寄る。

「あ、工藤さん。君が今近づくとー」

「…………… 日差しがキツくなってきた…………… っ！（ブシャアアアッ）」

「え？ ちょ、ちょっとムツツリーニ君！？ ムツツリーニ君ってば！ 大丈夫なの！？ 鼻血が噴水みたいになってるけど！？」

「…………… 最近の熱射病はタチが悪い（ブシャアアアッ）」

「もうコレ熱射病とかじゃなくて新型ウイルスか何かじゃないかな!?」

「ねえ亮! どこかに止血道具ある?」

「Nice Boat」

「いや、そんなこと言ってる場合じゃないって!」

しかしこれは凄い。頸動脈を切り裂かれてもここまで勢いよく出血しないんじゃないのか。

すると、明久が倒れているムッツリーニに近づき、ゆっくりと話しかける。

「ムッツリーニ」

「……………明久……………」

「……………遺言は?」

「落ち着いて吉井君! 縁起でもないこと言っちゃダメだよ!」

「……………来世は、鳥に生まれてきますように……………」

「ムッツリーニ君もそこで乗らないの! ちゃんと助かるからっ!」

「……………そして、空から女子更衣室を思う存分覗けますように……」

「土屋君！　メスに生まれ変わったらどうするの!？」

「優希も落ち着いて！　というか生まれ変わってもやることはソレなの!？　もうちょっと現世の死因から何かを学ぼうよ!」

ムツツリーニは笑顔のまま顔を鮮血に染めて逝った。果たして悲しみの向こうへとたどり着けたのだろうか。

「すみませんお待たせしちゃいました」

「……………お待たせ」

「お待たせ」

工藤に遅れること少し。今度は霧島と姫路と優子がやってきた。霧島と姫路の水着は前にプールで見たのと同じで、優子もビキニを着ている。

「土屋君、どっしっちゃったの?」

「……………優子。あまり土屋をいじめないように」

「いや、ボクなにもしてないんだけど……」

「違いますよ翔子ちゃん。土屋君は工藤さんの水着姿があまりに可愛いから興奮しちゃったんですよ。ね、土屋君？」

「……………そんな事実は確認されていない」

虫の息ながらも必死に否定をするムツツリーニ。どつやら出血はおさまったようだ。

「……………興奮？」

「はい。土屋君も男の子ですから」

「……………そう」

姫路の言葉を聞いて一つ頷いた霧島は、ゆっくりと雄二に歩み寄った。

「……………雄二」

「んあ？　なんだ翔子？」

「……………えい（ブスリ）」

「ぶじあっ！？（ブシヤアアアッ）」

突如雄二の鼻に霧島の指が潜り込み、そこから間欠泉のごとく鼻血が吹き上がった。

「……これで、いい」

「いいわけあるかあっ！ いきなり何しやがる！（ブシャアアアッ）」

「……だって、雄二は私の水着に興奮しないとイケないから」

なるほど。それなら仕方がない。

「なるほど……」

そしてそのやり取りを見て何かを考えこむ優子。何故か嫌な予感がある。

「亮」

「優子。とりあえず俺の鼻に向けて構えているチョコキをどうにかしてくれ」

俺まで出血多量になるのは御免だ。

「みんなお待たせ」

「すみません。準備に手間取ってしまった」

玲さんと俺の姉貴がこっちに歩いてきた。

「いえ、全然大丈夫ーです……」

いつの間にか来ていた競泳用水着姿の島田が二人に振り向き……そのまま動きが固まる。

「美波さん？」

「……しくしくしく」

「あれ？ どうしちゃったの？」

「美波さん。どうして私たちを見て泣き出すのでしょうか」

「いいんです……。ウチはもう、瑞希や玲さんや美希さんには一生勝てないんです……」

「「「???」」」

何を言われているのかわからないようで、二人は小さく首を傾げていた。

「……………玲さんに美希さん」

「どうしたの？」

「はい、なんですか翔子さん？」

「……………少しだけ、失礼」

むんずっ

そんな擬音が聞こえてきそうな光景だ。

「?????」

「? どうしましたか、翔子さん」

「……………凄い……………」

霧島は、玲さんと姉貴の胸を鷲掴みにしておののいていた。

「私も失礼しますっ！」

そして今度はその後ろから、姫路が二人の腰に腕を回す。

「???? 瑞希さん。あなたも何か？」

「みんなどうしたの？」

「……いえ……なんでも……ないです……」

姫路はそう答えると、静かにその場を離れて――島田の隣に同じ体勢で座り込んだ。

「……しくしくしく……」

「あ、瑞希……。いらっしやい……」

「美波ちゃん……。海って残酷ですね……」

「違うのよ瑞希。残酷なのはきつと、神様なのよ……」

なんだこの葬式みたいな雰囲気は。

「ほらほら皆、元気出しなよ。最後の一人も来たみたいだし、ね？」

工藤が明るい声を出しながら視線を送る。そこにはゆっくりとこちらに歩いてくる秀吉の姿があった。

「すまぬ皆の衆……。ワシが一番最後のようじゃな……」

何故か秀吉の口調は淀んでいる。

「どうしたの、秀吉君。なんだか元気ないよ？」

「そうだな。着替えの前は『今度こそワシを男として認識させるのじゃ！』って張り切ってたけど」

「放っておいて欲しいのじゃ……」

俯いて呟く秀吉は、何故か水着の上に見覚えのないＴシャツを着ていた。一体何があったんだろう？

第五十七問その三・悲しみの向こうへ

ひとしきり泳いだ後、俺と姉貴はみんなの分の飲み物を買に行っ
た。

「ここは私がお金をだすよ」

「うち」

皆の分のジュースを選び、お勘定というところで、

「全部で1500円になります」

店員が俺の方を見ながらそう言った。

その帰り道。

「別に私は何も思っていないよ？」

「ならあまり力を入れて容器を持たないほうがいいぞ。壊れるから」

「あ。亮」

優希がこっちに向かって手を降っていて、その隣には見知らぬ男がいる。恐らくナンパだろう。

「この人が私の彼氏ー」

そうか。自分にはもう彼氏がいるから、という口実でナンパを追い払おうって作戦だな。よくありがちだが確実な作戦だー

「……夫です！」

俺既婚者かよ!?

いくら姉貴が子供っぽいからって、それはないだろう。

「そんな固いこと言わずに遊ぼうぜ」

それでもなお食い下がる男。タフというかなんというか。

とりあえず男に聞こえないように優希と会話をする。

(亮。どうしようか?)

(とりあえずこのカラーコンタクトをつけて、更にコレを持って相手と話せば大丈夫だ)

(??? よくわからないけど、やってみるね)

「それで、何の話でしたっけ？」

「だからーうえっ!？」

優希が男の方を振り向いた瞬間、男の顔が驚きに変わった。

「だから、の次はなんですか？」

「いや……なんでもない。それじゃ!」

男はそのまま逃げるように去っていった。

そりゃあ目に光が宿ってなくて、手にさっき俺が買ったノコギリを持っている人に話しかけられたら誰だって驚くよな。

「うん、名字も得物も一緒だし、髪型も似ているし、いい感じに某ヤンデレ風に」

「亮くん。もしかして遊んでない？」

「もちろん」

ナンパも追い払えるし一石二鳥ってことで。

「亮。つまりどういうこと？」

「待て優希！　まずはそのカラーコンタクトを外してくれ！」

こつちまで怖くなるとは、さすが俺が開発したヤンデレ風コンタクトだ。

「明久君、もっと右ですよー」

「違うわアキ。実は左よ」

「吉井君、もっと前だよー」

「残念。本当は後ろにあるよ」

現在俺たちは明久が用意したスイカでスイカ割りの真っ最中。そして今は明久が目隠しをしてスイカを目指している。

「アキくん。そこから左前方32度、直線距離4・7メートル程度の方向です」

「違つぞ明久。玲さんの示した方向から90度右だ」

「……………明久。実は逆方向」

「そこから3時の方向よ」

「違つよ。こつちだよ」

俺も含めた皆が適当なことを言っ楽しんでる。

ところで雄二と霧島さんの声が聞こえないが、どうしたんだろう？

「……………雄二。この水着、どう……………？」

「どつ、と言われてもな。前に見ているし、別になんとも」

「……………それはきつと、きちんと見てないから。もっと近くで見るべ

き

「ってオイ!? そんな格好でくつついてくるな! 色々当たってるだろうが!」

「……遠慮しなくても、いい」

うーん、のろけてるな。あ、いきなり明久が雄二の方向にダッシュした。

「くたばれええええっ!!」

「うおおっ!? 危ねえーっ!!」

そしてそのまま勢いよくバットを振り下ろした。

「ああ、ごめん雄二。スイカと間違えちゃったよ」

雄二が寸前で回避したことで、バットは雄二の手前数センチの場所にめり込んでいた。

「明久よ……。今お主、雄二の声がした途端に迷わずダッシュをしておったように見えたのじゃが……?」

「あははっ。何を言ってるのさ秀吉。酷い誤解だよ」

「……まあ、気にするな秀吉。明久はあくまでもスイカを探しているただけだからな。そうだろ明久？」

「うん。勿論だよ」

明久が雄二の言葉に即座に同意する。あくまでもスイカを探していたということにしたいようだ。

「じゃあ、次は俺の番だな。明久、バットをよこせ」

「いやいや、何を言ってるんだよ。雄二はさっきやって失敗したばかりじゃないか」

「そう言うな明久。今のお前で全員一回目が終わったから、次は二周目だろう？ それならまた俺の番からじゃないか」

「いやいやいや。二周目が始まるなら、今度は順番を逆にする方が公平だと思うよ。だから僕がもう一回挑戦するよ」

雄二と明久が笑顔のまま全力でバットを引っ張っている。お互いの息の根を止めるチャンスは、あのバットに委ねられていると言っても過言ではない。

「あ、あの、明久君に坂本君。折角のスイカを割って飛び散らせち

やうのもなんですから、スイカ割りはこの辺で……」

「スイカは絶対に割らないから大丈夫」^だ」

「お主ら、一体何を割るつもりなんじゃ……」

多分ここから先はR指定だ。

血で血を洗うようなスイカ割りも無事に終えて、お昼時。

俺は海水浴場から少し離れた草むらで鉛筆の芯を削り、皆の所に戻っていた。

『（気付けば結構遠くまで来ちゃったわね）』

「（もう少し近い場所にするべきだったな）」

そんなことを考えながら歩いていると、

「うわっ!」

「おっと……」

知らない女性にぶつかってしまった。

「すみません。ぶつかってしまって」

「いや、私も人混みはあんまり慣れてないから……。こっちこそごめんなさい」

振り返ってその人を見る。

肩まで伸びた黒髪に、背は俺より頭ひとつほど高く、姫路や玲さんに負けず劣らずのグラマラスな体つきをしている。さらに姫路に似た優しい雰囲気兼ね備えている。

「えっと……君、凄い量の鼻血が出てるけど大丈夫？」

「ええ。無問題です」

これはただの熱射病であり、決してお姉さんに見とれていたわけで

はない！

「ところでスケッチブックを持っているようだけど、やっぱり絵を描いてるの？」

「ええ。嗜む程度ー」

に、と言おうとしたが、ちょうどその時背中に誰かが当たったらしく、前方にたたらを踏んでしまった。

突然、ムニユ、という擬音が鳴りそうな感触が俺の顔と手を襲う。凄く柔らかいけど、これってもしかして……

「あら。意外と大胆なのね」

「い、いや。別にそういういやらしいつもりは毛頭ありません！」

勢いよく飛び退き、砂に尻餅をついてしまう。

ヤバい。これは下手をすれば通報されてしまうレベルだ。そうじゃなくてもお仕置きがーってあれ？ 全く怒る気配がない。

「私は大丈夫よ。それより、折角だし一枚描いてもらえるかな？」

「許して……くれるんですか？」

「勿論よ。ほら、立てる？」

お姉さんが手を差し伸べてくれたので、その手をとって立ち上がる。

「折角海水浴に来たんだもの。どうせ作るなら楽しい思い出を作った方がいいでしょ？ ーって、今度は泣きそうな顔になってるけど、どうしたの？」

「器がデカすぎる！ どこそこのサブミッショナーとは比べものにならないっ！ 俺はあなたの優しさに溺れてしまいそうです！」

「あらあら。相手の長所だけを見て褒めるのは、口説き文句としてはちよっと幼いんじゃない？」

この人は俺が今まで会った誰よりも常識を備えている。

「それじゃ、全力で描かせていただきます！」

「うん。お願いね」

「よし。出来ました」

「もう!?! 凄いね。ちょっと見せて」

お姉さんが俺の後ろからスケッチブックを覗き込む。

「この短時間、しかも鉛筆だけでここまで上手く描けるなんて、君ホントに絵の才能があるよ!」

「いや、なんかそう言われると照れますね……」

「ふふっ。可愛い」

もう少しお姉さんと話していたかったが、そろそろ戻らないとヤバい。

「じゃあ、俺はこれで」

「また会えるといいわね」

「そうですね」

そうして、俺は皆の所へと戻っていった。

そこまでが、幸せだった俺の記憶。

「亮く。知らない女性と一体何をしていたのかしら？」

「な、何のことだ？」

皆の所に戻った瞬間、俺の頸動脈が優子に優しく手を添えられた。

なるほど。全て見られていたということか。

そしてここから、地獄の尋問が始まる。

「サブミッシヨナーってどついついことかしら？」

「スペルと発音から考えて、サブミッションを行う人のことじゃないな

いか？」

「胸は柔らかかったかしら？」

「胸は知らんが、この前駄菓子屋で売ってたマシユマロは柔らかかったぞ」

「優しさに溺れてしまいそうなんだって？」

「……そんな歌詞が何かの曲になかったっけ？」

「絵の才能があるんだって？ おめでとう」

「褒め言葉として貰っておくぜ」

優子の表情に柔らかな笑みが浮かび始めた。この笑顔はヤバイ。次に表示される選択肢を間違えれば、俺の命は一瞬にして刈り取られるだろう。さあ、来いっ！！

「最期に言い残すことはある？」

あれ？ 選択肢が『死ぬ』と『殺される』の二つしかないんだが。

「あの人の胸、凄く柔らかーみぎゃあああっ！！」

それは、お仕置きと呼ぶには余りに残虐で、余りに一方的な暴力だ

った。

「あれ？ ここはどこだ？」

気が付くと、何か不思議な場所にいた。

「確か海で遊んでいたはずなんだけど……」

それに今は夏だと言うのに、目の前には何本もの桜の木が花を咲かせている。

「それに、あの桜はどういうことだ？」

そしてその中に、一本だけ他と比べて巨大な桜の木がある。

しかもそれだけが花を咲かせていない。

「誰か人がいればいいんだが……」

「あら。どこのどなたさん？」

後ろからのんびりした声が聞こえたので振り向くと、一人の女性がこつちを見ていた。

その人は水色を基調とした着物を着ており、姫路みたいな桃色の髪、そして頭には渦巻き模様が入った額烏帽子をつけている。

それだけなら一般的な美女なのだが、一般的な美女とは決定的に違う点が二つある。

一つ目は、その人が宙に浮いているということ。

そして二つ目は、その人の周りに人魂のようなものがいくつか漂っているということ。

「あの、いくつか質問があるんですが」

「あら。何かしら？」

「どうしてあの桜の花だけが咲いてないんですか？」

「ごめんなさい。私もよくわからないの」

それはそれで世界の七不思議に入りそうな気がする。

「それと、ここはどこですか？」

「どこ、って……冥界だけど？」

やっぱりまたあの世かよ！？

それに、この前は岩だらけでゴツゴツした景色だったのに、今回は全く違う場所だとは……。

どうしたっていうの？

「それじゃああなたはもしかして幽霊？」

「どちらかと言えば亡霊ね」

亡霊って足があるものなのか？

「じゃあ現世ってどっかにありますか？」

「ここからずーっとあっちに向かうとあるはずよ」

そう言ってその人（亡霊？）は、花が咲いてない桜の木とは反対の方向を指差す。

「どうも。それじゃ！」

「気をつけてね」

さて、何としてももう一度現世に戻るんだ！

〈神谷美希先生の三途の川講座〉

優希「これってシリーズなんですか？」

美「少なくとも前回はそんな感じだったしね」

優希「ということは、今回のお題って三途の川ですか？」

美「ええ」

優希「ところで、三途の川の三途ってどういう意味ですか？」

美「三途っていうのは、死後の世界の内、餓鬼道、地獄道、畜生道の三つの総称と言われています」

優希「今回も勉強になりました！」

美「次回は未定です」

優希「ネタもないですしね」

「……………ん？ あれ……………」

「おお！ 気が付いたようじゃな」

「……………大丈夫？」

秀吉とムツツリーニがいるってことは、ここは現世で間違いないだろう。

良かった……。なんとか帰ってこれた……。

「随分目を覚まさなかったが、どうしたのじゃ？」

「なんかリアルに死んでた気がする」

「……………貴重体験」

「というか、女子勢がないんだけど、どこに行ったんだ？」

「よくわからぬが、全員でまとまってどこかに行ったようじゃ」

「……………ちなみに昼食調達ではない」

ということは、何か私用でもあるのだろうか？

それはさておき、折角現世に帰ってきたことだし、

「新しく作ったメカのテストでもするか」

「生き返って、まずやるのが何故それなのじゃ……?」

「……新しいメカ?」

「うむ。例の(ヒソヒソ)を改造したんだ」

「……具体的には?」

「以前は(ピヨピヨ)だったのを(モニヨモニヨ)に変えた」

「という事は、こつこつ場所にも持ってこれそうですね」

「実際に持ってきてるぜ」

「やるじゃない、神谷」

「いや、それほどでも」

「そうですか。それは丁度良かったです」

「……あれ?」

何故か後ろから、いるはずのない人たちの声が聞こえる。

「(ブルブルブル)」

「(ガタガタガタ)」

しかも秀吉とムツツリーニが尋常じゃないくらい怯えている。

……振り向きたくないなあ。

しかしそんなわけにもいかないので、ゆっくりと振り向く。そしてそこには、並外れた殺気を放つ霧島、姫路、島田、玲さんがいた。

「お疲れのところ悪いんですが」

「ちょっとウチらに」

「協力してくれませんか？」

「……大丈夫。すぐに終わる」

「いやいやいや。断ったら俺ら死ぬんじゃない？」

しかし、ここまでこの四人を怒らせるとは……。

雄二に明久。お前らは一体何をしたんだ！？

第五十七問その四・芸術は爆発だ！ 明久も爆発だ！

（明久サイド）

「さっきのはうまくいきそうだったのに、雄二が余計なことを言うから！」

「いや、違う！ お前がバカなことばかり言うからだ！」

「そんなことないね！ 雄二がよくわからないことを言ったせいだよ！」

「自分のことを棚に上げてよく言うな、このボケが！」

「なんだとこのブサイクっ！」

ナンパしようとする女性のペアに声をかけること数組。成功例は一つもなく、失敗回数ばかりがかさんでいった。

「……つて、やめておくか。俺たちが争うのは不毛だ」

「……だね。そんなことをしても意味ないもんね」

お互い掴みかかろうとしていた腕を下げる。今問題なのはそんなことじゃない。

「なあ明久、ふと思ったんだが」

「なに？」

「もしかすると、うまくいかないのは俺たちが本気になりきれないからじゃないか？」

「と、言うこと？」

「相手が好みじゃないから、無意識のうちどこかで失敗するように自分をセーブしてるんじゃないか、ってことだ」

「え？ そうなの？」

「ああ。深層心理ってヤツだ」

深層心理、か……。そうやって難しい単語を使われると、なんだか本当にそれが原因のような気がしてくるから不思議だ。

「じゃあ、どうしたらいいのかな？」

「好みの相手を見つけれしかないだろうな」

むう……。好みの相手か……。そんなことを言われても困る。そもそも僕は、自分の好みのタイプがどんな人か、自分でもわかっていないのに……。

「なんてな。冗談だ。本気で言っていたら、今の言い訳はあまりに格好悪過ぎる」

「ま、そうだね。ここまでやっておいて今更『全力を出していない』なんてのはみっともないよね」

「だよな……。よし。こうなりや男らしく、あと一組失敗したら諦めるか」

ハイペースで動き回ってはいたものの、それでも一時間以上は経っている。つい熱くなって飛び出してきちゃったけど、折角皆と一緒に来ているのにこんなことをいつまでもやっていたら勿体ない。さっさと見切りをつけるべきだろう。

「それじゃ、皆のところに戻りながら適当に相手を見繕うか」

「うん」

皆のいる場所を目指して砂浜を歩き出す。

警察を呼ばれたり殴られたりというトラブルに見舞われたせいで、気がつけば逃げ回って随分と遠くにきてしまった。周りにひと気もないし、戻るのに時間がかかるかもしれない。

「やれやれ……。結局俺たちはモテない男だったってことが。認めたくないが」

「まあ、僕は最初から薄々勘付いていたけどね」

昔からずっと言われ続けていたことだし、再認識したという程度で別にそこまでショックってわけでもない。

「これはこれで良い経験ってことかーん？」

頭の後ろに手を組んでいた雄二が急に動きを止めて、じっと前を見ている。誰かいるのかな？

雄二の目線を追うと、そこには二人の女の子の姿があった。

「へえ〜。こりゃまた可愛い子だね〜」

どちらも女の子にしては背が高い、スレンダーな感じの美人だ。年の頃はだいたい僕らと同じくらいだろうか？

「ラストの勝負の相手はあの二人で決まりだな」

雄二が楽しげに僕に告げる。

片方は長い栗色の髪を後ろでまとめている切れ目の目をした美人で、もう片方は首の後ろくらいまで髪を伸ばしている可愛い感じの子だ。上にパーカーを羽織っていてスタイルはわかりにくいけど、少なくとも太過ぎだったり細過ぎだったりはいらない。

「ま、最後の相手としては確かに妥当だね」

あれくらいのレベルが相手なら、失敗しても仕方がない。綺麗に散るには丁度良い相手だろう。

「そんじゃ、早速。おい、その二人」

言うが早いけど、雄二が早速その子たちに駆け寄っていった。なんか随分やる気だな。さては、雄二の好みだったりしたのかな？

タイミングを逸しないように、僕も雄二に続いて小走りで近づいて行く。

「え？ 何？」

「私たちに何か用かな？」

そんな相手の声が聞こえてくる。クールな見た目の印象とは違って、二人とも明るくて可愛い声だった。なんか、ちよつと意外だ。

「あー……、実は俺たちにこの海に今日遊びに来ただけど、ちよつと道に迷ってたさ」

周囲にひと気がないからか、迷子になって助けを探していたという感じでいく作戦のようだ。なるほど。僕もそれに乗つかるとしよう。

「その、海水浴場を探しているんだけど、どこにあるか知りませんか？」

緊張して声が若干うわずってしまふ。うう……。さっきから何度かこじやってるけど、やっぱり僕にはこじいつの向いてないのかも……。

「え？ 海水浴場なんて、そこに見えてると思うけど」

「変な人々。もしかして、ナンパなんじゃない？」

くすくす、と笑う二人。あれ？ 意外と好印象。

「仕方ないなあ。じゃあ、私たちが浜辺まで連れて行ってあげるよ。手を握って、引っ張って行ってあげるからね」

そう言ってから一瞬間を置いて、栗色の髪をした女の子が雄二の腕を掴んだ。

「へ？ ああ、いやっ！ 別にそこまでしてもらわなくても！」

親しげに接触してくる相手に戸惑う雄二。予想外の展開に驚いているんだろう。

「じゃ、私も同じように腕を掴んで引っ張って行ってあげる」

もう一人の方も同じようなことを言うと、なぜか一瞬ビクッと震えてからそろそろと僕の方に手を伸ばしてきた。

「うえっ！？ ぼ、僕も別にそんなことしてもらわなくても大丈夫
なんだけど!？」

ついつさに相手から一歩距離を取ってしまう。

な、なんだこの状況？ どういうこと？ まさか、実はバックにヤ
クザが絡んでいてひと気のない場所で酷い目に遭うとかそういうコ
ース!？」

意図を見抜こうと思って相手の顔を見るけど、向こうは前髪で目が
隠れている上にこちらを向いてくれないせいで表情が読めない。声
は元気いっぱいなのに、態度は随分と内向的だ。

「遠慮しないで、ね？ さあ、腕を組むよ」

なんだか妙に説明的な台詞の後に、相手の子が再度腕を伸ばしてく
る。腕を組むって、どうしていきなりそんなことに!？」

「あれ？ 二人とも男の子を連れてどうしたの？ もしかしてナン
パでもされた？」

「うん。そんな感じ」

少し離れた場所からもう一人、茶色の髪を肩まで伸ばした女の子が駆け寄ってきた。しまった！二人組じゃなくて、三人組だったのか！？

「よし。じゃあ、私も混ぜてもらおうかな」

そう言って、パーカーの子に掴まれているとは反対の腕を掴んでくる。なんだか凄くノリのいい子みたいだ。胸元のペンダントもよく似合っている。

「ほらほら、照れなくてもいいから」

「そうだ、海にでも入る。ね、いいでしょ？」

「え？ あ、ちょっと」

「いいからいいから。どんどん海に入るよ」

断る間もなく波打ち際にまで連れ出される。目をやると、近くでは雄二がもう既に腰のあたりまで海に入っていた。

とりあえず合流しようと思って雄二のいる方向へと進んでいく。すると、僕の腕を掴んでいた子たちが急に立ち止まった。

「ん？ どうしたの？」

振り向いて様子を確認する。実は泳げないとか、そういうことかな？

「ううん、なんでもなにの。さあ沖に行くよ」

と、声はやる気いっぱいのくせに、その場で立ち止まったきり動き出さない女の子。もう一人に至っては、さっきまでのノリの良さは消え、黙り込んでしまった。なんというか、どうしたらいいかわからないという表情だ。??? なんか、様子がおかしくない？

「ねえ君たち。調子でも悪いの？ それとも何かー」

困ったことでもあるの？ と聞こうとしたところで、視界の隅に雄二と相手の女の子の様子が目に入った。

『お？ なんだ？ 髪の色が脱色されて……は？ 黒？』

髪のが海に入り、その色が変わった。その子の髪が、栗色から漆器のような綺麗な黒へと。

あれ？ 水に入るだけで色が変わるってことは、さっきまでの色は

スプレーが何かでつけていたってこと？ どうしてそんなことを？

『……私の髪は、元々黒だから』

そして突如、その子の口調が変わった。それはーいつもよく耳にする、学年主席の澄んだ声。

そう。学年主席。つまり彼女は僕らの友人の一人。霧島翔子さんってことになる。

「そっかそっか。そういうことか。なるほどね」

相手は霧島さんだったのか。道理で凄く綺麗で、雄二が妙にやる気になっていると思った。相手が霧島さんならしょうがないー

「って霧島さん！？ バカなっ！ なんでここに!？」

さてはさっき会ったときにあとをつけられたのか!？

その時、シュツという音と共に僕の手足の力が抜けた。

「ゴメンね、明久」

「その声……まさかレン」

「ええ」

その子がウィッグを外すと、確かにレンだった。

「でも、さっきまでの声が全然違ってただけど？」

「それはこの『ペンダント型変声機』を使ってたからよ」

そう言つて胸元のペンダントを指差す。そうか。以前は蝶ネクタイ型だったのを改造したのか。

だとすると、パーカーを羽織っているこの子も刺客！？ けど、この子は姫路さんや美波、姉さん、工藤さん、木下さんや桂さんにも似ていない。まさか、その辺にいる人に協力を要請したのか!？

戸惑う僕を前に、相手がゆっくりと口を開く。

「……………これ以上沖に進むと、スピーカーに海水が入る」

その声は、ごくごく身近な友人のものだった。

「……………え？」

「……………機材が壊れると、困る」

この口調。この声質。この人、まさかー

「……………もしかして……………、ムッツリー……………？」

「……………（コクン）」

小さく頷いて、ウィッグを外したその人は、紛う方なき僕のクラスメイト。

「じゃ、じゃあ、さっきまでの声は」

『すまぬ明久。ワシじゃ』

よく観察すると、その声はムッツリーニの着ているパーカーの襟元から聞こえてくる。ああそっか。だからスピーカーカーに海水が入るって嫌がっていたのか。

「じゃあ、レンが途中で黙り込んで進まなかったのはもしかして」

「ええ。メカに海水が入ると壊れるからよ」

つまりこの二人は、機材が壊れる危険を冒しながらも、そしてムツツリーニは自分が女装をして、秀吉に声を担当させて、僕と雄二を罠に陥れたってことだ。そんなことをしても、二人には何の得もないというのに。

「二人とも……。どうして、こんなことを……？」

一つも利がないはずなのに友人である僕らをはめるなんて、そんなバカな。

僕が哀しみを籠めてそう尋ねると、二人は俯いてはつきりと答えた。

「断れなかったのよ……！」

「断れなかったって……。どうして……？」

「……………断ったら、殺される……………勢いだっただ……！」

小刻みに震えているのは目の錯覚じゃなさそうだ。

「は……。はは、は……。そっか、そうなんだ……」

協力者であるはずのムツツリーニやレンですら、殺されるような勢いだったのか……。

なんとなく、雄二の方へと視線を移してみる。後ろ姿なので霧島さんの表情は見えないけど、凍りついた雄二の顔ははつきりと見て取れた。ちなみにそこには、レンが僕に嗅がせたガスと同じ容器を持った霧島さんの手が添えられている。

『……雄二』

『……はい』

『……ちゃんと吸って』

『え？ ちゃんと吸えって、そんなことをしたらガスが』

『……ちゃんと吸って』

『いや、だからだな。そのガスをちゃんと吸ったら、明久みたいに動けなくなっただな』

『……もう一度、言わせる気？』

『……ちゃんと、吸います』

シュツ、という音と同時に、さっきまでの抵抗を止めた雄二の呼吸音が聞こえる。すると雄二が頭の先までブクブクと海に沈み、霧島さんは優しい手つきでそつとその頭を上から押さえつけた。

そっか。僕らのやっていることはバレていたのか……。

「ねえムツツリーニ」

「……………なに？」

「姉さんたち、怒ってた？」

「……………右腕一本、って」

「……………そっか」

右腕一本か……。うう……。痛そうだなあ……。嫌だなあ、戻りたくないなあ……。

「……………右腕一本以外、全部へし折るって」

「……………（ダバダバダバ）」

「明久。泣いた程度で許してもらえるほど、この世界は甘くないわ

よ

ムツッリーニもレンもホールドした僕の腕を解放する気はないようだ。恐らく、この二人も僕を逃がしたら酷い罰を受けるのだろう。掴んでいる尋常じゃない力（レンは腕をプルプルさせながら頑張っている）がそれを雄弁に物語っている。

『明久君。早く戻って来て下さいね？』

『Ich freue mich darauf, Sie
sich zu treffen. Bereiten Sie
sich bitte vor zu sterben, Aki
?』

『アキくん。姉さんは哀しいです。……弟を失うということが』

『みんな！ まずは落ち着こうよ！』

『まずは深呼吸をー』

『に、逃げて吉井君っ！ この三人、本気でキミをー』

ブツン、と桂さんと工藤さんの言葉の途中でスピーカーから音声が途切れる。

「ねえムツッリーニ」

「……………なに？」

「前にエロ本が2000冊欲しいって、そう言ってたよね？」

「……………それ以上に、命が惜しい」

「またまた、冗談ばかり。ムツツリーニはエロの為なら命を賭けられる男の中の男じゃないか」

「……………今は、女装しているから」

「いやいや、そんなの見かけだけだよ。ムツツリーニの本質はそんなんじゃない」

「……………明久。今まで楽しかった」

「アンタのことは……………絶対忘れないわ……………」

「なにその別れの直前みたいな台詞！？ 楽しいよ！ 明日も、明後日も、これからもずっと！ 生きていればいつだって！」

「……………そう、だな……………っ！……………俺も……………そう、思う……………っ！」

「だから……………だから……………っ！」

「やめてよ二人とも！ どうしてそこでむせび泣きなんかするの！？ 泣くくらいなら逃がしてよ！ く、くそっ！ こんな殺人鬼だらけの海岸にいられるかっ！ こうなったら僕は一人で部屋に閉じ

こもってバリケードでもうわああああっ！ 来たあっ！？ なんか
凄い勢いで誰かが泳いできたあっ！！」

「……………さようなら、明久」

「せめて、安らかに眠りなさい……………」

海の底は、暗くて静かで——寒かった。

第五十八問その一・夏の魔力ってヤツは実在するのかな？

（亮サイド）

「おい、明久！ 雄二！ 大丈夫か！？」

「ダメじゃ！ 意識が戻らぬ！」

「……………かなり危険」

まさか、ヤツらもついにあの世に行ってしまったのか！？

「こうなったら仕方がない。超・占 略決『呪 存思』！！」

「なぜそんな術が使えるのじゃ！？」

「この前地獄に行って以来、使えるようになった」

というか、まともに使えるのはコレしかないけど。

ちなみに甲縛 オーバーソールの黒 は現世でも具現化できたが、鬼 は使えなかった。

ぶっちゃけ、具現化で精一杯だ。

「僕たち、生きてるの……?」

「ああ……。よく覚えていないが、リアルに地獄を見てきたような気がするぞ……」

「お主ら二人の顔が安らかになった時は、正直もうダメだと思ったぞい……」

後遺症もないようだし、どうやら蘇生術は成功したようだ。

「けど、意外だよな」

「ん？ 何がだ?」

「いや、僕と雄二って相当マズいことやったんじゃない?」

「ああ、まあそつだな」

「……………異性と一緒に出かけているのにナンパなんて、失礼極ま

りない」

ムツリニが咎めるように明久と雄二を見る。どうやら二人とも反省してるみたいだ。

「その割には罰が軽いと思わない？」

「確かにそうだな。この程度で済ませるとは随分甘いな」

「世間一般では臨死体験を軽い罰とは言わんと思うのじゃが……」

こいつらにとっての重い罰ってなんなんだろう？

「これって、つまり」

「ああ。まだ何かあるだろうな」

「どうする？ 逃げる？」

「いや、相手の考えが見えないうちから逃げるのもまずい。万が一、もう許されているのだとしたらまた余計な怒りを買っただけだからな」

「藪をつついてなんとやら、というやつじゃな」

「それに、今から近くの町でやってる祭に出かけるんだろ？ 何か酷い目に遭うようなこともそうそう起こらないーと、信じたい」

「あり得るとしたら、荷物持ちや何かを奢るくらいじゃないか？」

「……………どうせ、いつものこと」

「言われてみるとそうだよな」

「それにしても、随分と遅いな。着替えに何分かけてるんだ？」

雄二が時計に目をやる。もう女性陣が着替えに行ってから三十分は経過している。一体どうしたんだ？

「……………お待たせ……………」

華やかな声と同時にリビングのドアが開かれる。

「皆、随分と時間がかかっていたんだね……………おおっ！」

「お、凄いな。そんなもんを用意していたのか」

「……………時間がかかるのも納得」

「なるほど、浴衣か」

「全員よく似合っておるではないか」

ドアから姿をのぞかせた女性陣は、青や紫、ピンクに白と色とりどりの浴衣を着ていた。秀吉の言つとおり、全員がとてもよく似合っている。

「まさか私も着ることになるとは思いませんでした」

「私もだよ」

その隣では、玲さんと姉貴が戸惑ったように自分の浴衣を見下ろしている。

「……………着ていないのがあったから」

玲さんのはともかく、よく姉貴にあうサイズがあったものだ。

「……………っ!?!? (ブシャアアアッ!!)」

いきなりムツツリーニが赤い華を咲かせ、死の淵へと叩き込まれていた。

「む、ムツツリーニ!? 何事じゃ!?!」

「俺が、一体何をしたと……………?」

ムツツリーニが恨めしそうにどこかを見ながら床に沈む。

気になって俺もそっちに視線を向けてみる。ああ、なるほど。工藤の着物が少しはだけているからか。

「生きておるかムツツリーニ!？」

「畜生……。どうして……。どうしてこんなことに……!」

「……。もう、ダメかもしれない……」

「しっかりするのじゃムツツリーニ! まだ死んではならん!」

「……。だが、これはこれで……。満更でもない……」

「……。なんとというか、心配しておる自分が阿呆のように思えてくるぞい……」

「秀吉君、どうしたの?」

と、そこに浴衣を着た優希がやってきた。

「……………っ!?(ブシャアアアッ!)」

「ちよ、ちよつと土屋君!? なんだか鼻血が凄い勢いで流れ出ているんだけど!?!」

もちろん事態は急激に悪化し、ムツツリーニは再び血の海に沈んだ。

「桂よ。ムツツリーニの輸血を手伝ってくれんかの?」

「あ……うん。わかった」

秀吉と優希がムツツリーニに輸血している後ろの方では玲さんが、ぱんぱん、と手を叩いていた。

「さて。それじゃあお祭りに行きましようか。こんなことをしていると間に合わなくなってしまつかもしれませんからね」

はて? 間に合わないって、店が閉まるまでにはまだ相当時間があると思うんだけど。

「はい。そうですね玲さん」

「間に合わなくなったら困るもんね」

「急ぎましょ。ウチ、日本のお祭ってまだこれで二度目だから楽しみなのよね〜」

「私も楽しみだよ」

「……遅れたら、まずい」

「ボクもすつごく楽しみ。早く行こっ」

なんだ？ 女子勢がやけに急かしている。何かあるのか？

「雄二、皆あんなに急いで何かあるのかな？」

「さてな。やっぱり色気より食い気ってことなんじゃないか？ 俺もかなり腹が減ってるからな。気持ちはわからんでもない」

「……たこやき、やきそば、お好み焼き」

「フランクフルト、焼き鳥、ドルネケバブ……」

自分で言ってる腹が減ってきた。ソースの焦げる匂いや音がやけに恋しい。

「それじゃ、海に続いて夏の風物詩を楽しもうか」

「そうだな」

「……良いショットが撮れるはず」

「花火とかあるかなあ……」

「まさに夏、という感じじゃな」

これから聞こえるであろう祭り囃子が、今からでも容易に予想できた。

近くの学校の校庭を使った臨時駐車場から歩くこと五分。大きな公園と神社を使った夏祭り会場は大勢の人で賑わっていた。

「へえ」。色々な出店があるのね」

「確かに。規模も大きいしな」

今は優子と一緒に出店をまわっている。焼き鳥やお好み焼きといった定番のものがたくさんあった。

「ねえ亮。あれは何なの？」

優子が見ている方向には、フランクフルトに薄焼き卵を巻きつけたものを食べている人がちらほらいる。

「俺もよくわからん」

「とりあえず買ってくるから、アンタはそこで待ってて」

そう言うと優子は近くの人混みに消えてゆく。少し人が増えて混んできたからか、優子はしばらくして戻ってきた。

その手には二本のフランクフルト（with薄焼き卵）がある。コイツまさかあまりにもおいしそうだったから、つい二本も買ってきてしまったのか？

そんなことを思っていると、

「はい。アンタにも一本あげる」

「ん？」

その内の一本を俺の方に寄せてきた。

「? いらなの?」

「あ、もらっぞ」

優子から一本受け取って、一口食べてみる。

ジューシーなフランクフルトとふわふわの薄焼き卵が絶妙に組み合わせられて食欲を刺激する。気がつけば少し早いペースで食べていた。

「そんなに慌てると喉に詰まるわよ。はい、ジュース」

今度は俺の大好きなオレンジジュースを手渡してくれた。なんだろう。今の俺は、いわゆる『リア充』ってやつか? それに、今の優子は通常の三倍増して優しい気がする。

「ねえ、あっちのピッチングゲームってところに行かない? なんだかおもしろそうだし」

「確かボールを物に当てて倒すやつだっけ?」

「ほら。早く行くわよ」

「わかったからちょっと落ち着けて」

そんな、天国のような時間が三十分くらい続いた頃。

「ん？　なんか催し物があるみたいだな？」

公園の野外ステージの近くで、雄二が何かの看板を見つけていた。どれどれ……。

「『納涼、クイズ大会！　町一番のバカとインテリを見つけ出せ！』
だつてさ。今日の目玉イベントか？」

「クイズ大会か。珍しいな」

マンガやテレビではよく見かけるが、実際に見たのは初めてだ。ちよつとラッキーかもしれない。

「凄いわね。こういうの初めて見たわ」

「へえ〜。ボク、クイズ大会があるなんて、全然知らなかったよ〜」

皆が看板を見ている俺たちの方に集まってきた。皆も興味があるの

か？

「……面白そう」

雄二の隣で看板を見ていた霧島がそんなことを言った。こういうのに興味を示すとは、ちよつと意外だな。

「んじゃ、いつそのこと出場してみたらどうだ？ きつといい線までいけると思うぜ」

文月学園の二年主席の霧島、それにかなり高い学力を持つ姫路にAクラスの優子や工藤や優希、国語でなければ島田も本領を発揮できる。これだけのメンツが揃えば優勝も夢じゃない。

ただし、問題は全員出たがらないってことだけど。特に明久とかは、出ても自分のバカさを露呈するようなものだし。

そんなことを考えていると、

「あ、それはいいですね。頑張つて、皆でこれに出てみませんか？ きつと良い思い出になると思います」

姫路が驚きの返事をした。

「いいの、姫路さん！？ クイズ大会に出るんだよ？」

「はい。大丈夫です。皆と一緒に頑張れますし、良い思い出になると思いますから」

確かに、良い思い出を作るという意味では、色々とやってみるのはいいことかもしれない。

「それなら、申し込んでみようか。皆頭がいいし、きっと勝てると思うよ」

明久がそう言うと、姫路は笑顔で――何故か見ているこっちの背中に寒気を覚えるようなとびきりの笑顔で、はっきりとこう告げた。

「はいっ。出てみましょう！ ……………ここにいる、全員で」

「散開っ！！」

ガッ！

「アキ。どこへ行くこうとしているのかしら？」

「……雄二。クイズ大会に参加する。この場にいる、全員で」

とつさに逃げようとした明久と雄二は、それぞれの隣に立っていた島田と霧島に掴まっていた。そして二人とも、笑顔がさっきの状態から一切崩れていない。コレってヤバいんじゃない？

「ね、ねえ。何を言っているのかな……？ 僕には全然意味がわからないんだけど……」

「だ、だよな明久。なぜ俺たちの肘関節を極めているのか、全然理由がわからないよな」

「明久君。坂本君。まさかとは思いますがどー」

「……昼間のナンパー」

「あの程度で許されたなんて、思ってないわよね？」

底冷えのする声と笑顔が垣間見てとれる。

「で、でも僕や雄二が出たって何も面白くなさそうだよ？」

「いや。明久が出れば珍解答のオンパレードだ！ だからこの場は明久だけで勘弁してくれ！」

「キサマ雄二！ 一人だけ助かるうとこの裏切り者！」

二人で見苦しい争いをしている。素直に出ればいいのに。

「……雄二も吉井も、往生際が悪い」

「まったくよ。少しは男らしく覚悟を決めた土屋と神谷を見習いなさいよね」

何！？

「……………っ！？（シユパッ）」

「さらばだっ！」

ガッ！

「ダメじゃない、亮。自分だけ逃げちゃ」

冗談じゃない！ 何で俺まで参加しなくちゃいけないんだ！！

「待つてくれ！ 俺は無関係だろ！？」

「あら。昼間に知らないお姉さんと話してたじゃない」

それでもうダメなのか！？

ちなみに俺と同じく逃走をしようとしたムッツリーニは、あえなく工藤に掴まっていた。

そんなこんなで俺たちはクイズ大会に参加することになった。

第五十八問その二・クイズ マジック バカデミー（前書き）

今回は私と知り合い（面識はありません）の作者である夏菜さんよ
り、ヒヨリ・R・マクウエルと高坂昭人の二名のオリキャラをお借
りしたコラボ小説となっております。それではお楽しみ下さい。

P・S・ちなみにもう一名の作者名と作品名をこっそりお借りしま
した。

ホント勝手に使っちゃってスイマセン……。

第五十八問その二・クイズ マジック バカデミー

《それでは、いよいよ今年から始まりました新企画！ ” 第1回・納涼クイズ大会” を開催致します！》

スピーカーよ割れよ、と言わんばかりにノリノリのアナウンスが会場に響き渡る。快晴で海の近くという好条件だった為か、会場にはお客さんが轟めいていた。

《それでは、今大会のルールを説明します。今回出場者の皆さんには男女のペアになっていただき、二人一組で優勝を目指していただきます。ただし、解答権が与えられるのはペアのうちのどちらか一名。もう一人は解答ボタンを押すことと直接的でないアドバイスのみ可能です。優勝したペアには賞金10万円、そしてビリになったペアの解答者には罰ゲームがありますので注意して下さい》

ちなみに男女ペアだが、かなりあっさりと決まってしまった。そして解答権を持つのは俺たち男子だ。

《それでは、出場者の皆さんに入場してもらいましょう！》

そのアナウンスと同時に、観客席の歓声が一層大きくなる。

《まずは一組目。バカと天然で乗り切れ！ 吉井明久・姫路瑞希ペア！》

「ちよっ！ バカってなにさバカって！」

「あ、明久君！ 落ち着いて下さいっ！」

《次に二組目。夫婦パワーで優勝を目指せ！ 坂本雄二・霧島翔子ペア！》

「ちよっと待て！ 名字が違うから夫婦じゃ（ブスリービクンビクン）」

「……夫婦」

《続いて三組目。見た目は二人、頭脳は三人！ 神谷亮・木下優子ペア！》

「何この名探偵みたいな紹介は？」

「あながち間違っていないと思うぞ」

《どんどん行きます四組目。ショートケーキはイチゴから！ 木下秀吉・桂優希ペア！》

「え？ 秀吉君もそうなの？」

「うむ」

《ラスト五組目。エロいことなら任せろ！ 土屋康太・工藤愛子ペア》

ア!」

「……………エロなどに興味は無い」

「ムツツリー二君。ウソは人を騙せる範囲でつくものだよ?」

ちなみに島田と玲さんと姉貴は男女の人数の都合で観客席に混じっている。

《放送席からは実況及び問題作成者の私、ヒヨリ・R・マクウエルと》

《出題者である高坂昭人》

《この二名でお送りしていきます!》

放送席にいたのは小さい女の子と、黒髪を腰まで伸ばした女の子―
ーいや、あれは間違いなく男だ!

《それでは、問題です!》

《問題。青森県の特産品として有名なりんごですが、英語での発音を答えなさい》

「よしきた!」

ピンポン

《それでは神谷さん、答えをお願いします!》

「ナポー」

《違います!》

マジで!?

《さあ、他に解答者はいませんか?》

ピンポン

《吉井さん、どうぞ!》

何故か押しした本人である明久の顔が真っ青になっている。答えられる自信がないのか?

「アツポツポー」

《ハズレです! さあ、他には?》

ピンポーン

「アツポー、だろ？」

《坂本さん、正解です！》

これで雄二が一点獲得して、一步リードした。

《それでは次の問題お願いします！》

《問題。『元気がない人に元気をつける』という意味の諺で、何を入れる、と言うでしょうか？》

ピンポーン

《さあ神谷さん。先程の挽回となるか！》

ちょっと待て。俺はボタンを押してないぞ？

ふと横を見ると、いい笑顔をした優子がボタンに手を伸ばしていた。

さつき真つ青になっていた明久の顔を思い出す。

そうか。そういうことか。全てわかった。

今や俺たちの命運は女子に握られていると言っても過言ではない。

《それでは、答えをどうぞ!》

「……………焼きを入れる」

《そんなに物騒じゃないよ!》

ピンポン

《はい。木下さん!》

「活を入れる、じゃ」

《正解なので一ポイント獲得です!》

これで秀吉と雄二が一ポイントずつ獲得したことになる。そろそろ正解したいところだ。

《次は連想クイズです! 次の四つのキーワードから連想されるものを答えて下さい》

ここで一気に挽回だ！

《一つ目のキーワードはエプロンドレスだ》

エプロンドレスか。姫路や玲さんが着たら似合いそうだな。

《現時点でわかる方はー》

ピンポーン

《早い！ 坂本さん！》

「母親か？」

《ああっ！ 惜しいっ！》

「母親で惜しいのか……」

ピンポーン

《土屋さん。どうぞー！》

「…………おそろく、いや確実にエロい体をしている」

《いや、もっと具体的に答えて欲しいんですけど……。それでは二つ目のキーワードを！》

《二つ目のキーワードは、秋葉原の名物だ》

『（亮。わかったからちよつと替わって！）』

「（そんなハイテンションで言われたら心配だけど……。了解）」

ピンポン

「コスプレ！」

《吉井さん残念！　ちよつと違います！》

ピンポン

「はいっ！」

《その声は……。神谷レンさんですね。答えをどうぞ！》

ちなみに私についてはエントリーする前に受付で報告済みだから、

何の問題もないわ。

「えっと……前にRSS（ウツソ・エヴィンさん作）の方の須川の卓袱台の裏にはり付けてあったHな本の中でたぶん……」

《だから具体的に答えて下さいっ！》

「ぐ……具体的って言われても、その……私にだって羞恥心つてもがあるのよ!？」

《ちよっ!! 何を言い出す気なの!?!》

「ただ、どうしてもって言うなら、まずはベッドで……」

《言わなくていい!! 言わなくていい!!》

ピンポーン

「メイドかの?」

「はい! 木下さん大正解です!」

そんな調子でクイズは続いていったのだが、問答無用で女子がボタンを押しまくるので俺たちはほとんど正解が出ず、既にボロボロ。

それで現在のスコアはこんな感じ。

明久・姫路ペア…… 0点

雄二・霧島ペア…… 3点

俺・優子ペア…… 2点

秀吉・優希ペア…… 3点

ムッツリーニ・工藤ペア…… 2点

ビリになっていないとはいえ、まだまだ油断はできない。

《それでは最終問題です！ これに正解するとなんと、10ポイント獲得です！！》

お約束の展開だな。

《ちなみにこの問題は、某パンツアニメを参考にしてみました！》

そんなことぶっちゃけていいのか？

《それでは最終問題です！》

《問題。目の前に女子風呂があります。どうしますか？》

ピンポーン！

《吉井さん。どうぞー！》

「覗く！」

《ハズレです！》

ピンポーン

《土屋さん。どうぞー！》

「……………カメラを使って覗く……………っ！！（ブシャアアアアッ）」

《おおっと土屋さん、鼻血を勢いよく噴いて倒れてしまったーっ！》

ピンポーン

《坂本さん。いけるのか！？》

「明久がボコられている間にこっそり覗く」

《全然違いますっ!》

それなら答えはコレだ!

「いけえっ!」

ピンポーン

《神谷さん。答えをどうぞ!》

これで俺の優勝だ!

「答えは、覗かー!」

その時、ドクンッ! という自分の鼓動が聞こえた。

何だ? これは……………?

《神谷さん、どうしましたか?》

覗かない、と言えば優勝できるのに。

自分の気持ちを偽ることぐらい、何でもないはずなのに……。

それなのに……

口が……動かない。

声が出ない……。

『まさかあの神谷ってヤツ、戦ってやがるのか？ 自分の中の男と

……』

『バカな真似はやめるんだ！』

『クイズなんだぜ？ 嘘でもいいんだ。正解を言っちまえよ！』

《おおーっと、神谷さんの葛藤ぶりに、観客席にいる男性陣の目からは涙が溢れています！》

ああ……そうか。

やっとわかったよ。雄二、明久、ムッツリー二。

「……………メカを駆使して覗きます……………っ！」

山から上り始めた月の光が、まるで祝福するかのように俺を優しく包み込んでくれた。

《神谷さん残念！ ハズレです！》

ピンポーン

「覗かない、じゃろうな」

《秀吉さん。大正解です！ よって、優勝は木下秀吉・桂優希ペアです！》

アナウンスと同時にわき上がる歓声。それに紛れて骨が軋む音も鳴り響く。

《とというか、吉井さんと坂本さんと神谷さんが舞台裏に連れていかれたんですが秀吉さん、果たして彼らは大丈夫なんでしょうか？》

『無事であることを祈るしかないのじゃ……』

《はあ……。とりあえず、表彰式に移りたいと思いますっ!》

ちなみに後で姉貴から聞いた話によると、表彰式が始まる前には横にいた玲さんと島田が、いつの間にかいなくなっていたらしい。

〈明久サイド〉

「というわけで、ビリだった吉井さんには……罰ゲームを行いたいです」

舞台裏にやってきたヒヨリさんは繰り広げている惨劇に驚いた後、そんなことを言った。

「それで、内容は？」

「コレを食べてもらおうよ」

そう言って目の前に出されたのは――目玉焼き？

「ちなみに調理したのは誰？」

もし姫路さんや姉さんが作るものなら、確実に冥府送りにされてしまうので注意が必要となる。

あと亮によれば、桂さんも料理をつくる上では注意人物らしい。

「私だよ」

ヒヨリさんなら大丈夫だろう。

とりあえず、一口頬張ってみる。

頭に浮かぶのは、遠い昔の記憶。あの頃は楽しかったな……。

「おい。明久が過去の記憶を見ているぞ」

「……………冥福を祈る……………」

って、死んでたまるかつ！

「明久が意識を取り戻したようじゃ」

「とりあえずは良かったのか？」

そこは断定ほしいところだよ。

とりあえず、ヒヨリさんもキッチンに立ってはいけない人だということがあった。

第五十八問その三・美人（セレブリティ）と徹夜（アツイヨル）

「結局、恥をかいたのは僕らだけじゃないか……」

「……………心の傷を負った……………」

「女子は何も答えなかったし……………」

「色々な意味で一生忘れない夏になったな……………」

祭りの会場を後にしてペンションに戻った僕らは、その庭に設置されているコンロでバーベキューの準備をしながら黄昏れていた。

ちなみに雄二も『拍車をかける』と答えるべきところで『時をかける』という珍解答を出していた。

『今になって考えると、私たちも結構凄いことをやってましたよね』

……………」

『……………競つようにボタンを押していた』

『傍から見たらかなりシユールな光景だったでしょうね』

『ボクは楽しかったけどね』

『私もいい思い出になったよ』

少し離れたテーブルの辺りでお皿や飲み物の準備をしている女子勢がそんな会話をしている。女子にも色々思うところがあるようだ。

「ちょっと火の勢いが弱いね」

「そうだな。もう少し火力をあげるか。亮、まだ固形燃料はあるか？」

「ちょっと待っててくれ」

補充でもするのかと思いきや、固形燃料を取りに行く気配もない。それどころか、何故か右手を火に向かって伸ばしている。

「ねえ亮。一体何をー」

しているの？ と聞こうとしたら、突然火力が強くなった。

え！？ 今何をしたの！？

「おい亮。今どうやって火を強くしたんだ！？」

さすがの雄二も驚きを隠せないみたいだ。

「気合いだ」

それは人間技では不可能だと思っただけど。

「おーい、そろそろ焼けたぞー」

何事もなかったかのように、亮が女子たちを呼んだ。しかも網の上にはいつの間にか焼きおにぎりや焼トウモロコシがあり、醤油の焦げる匂いがする。なんて良い仕事をするんだ。

「おう明久。丁度良く焼けてるぞ。たっぷり食え」

「うん。ありがとう。じゃあはいこれ、雄二の分の飲み物」

紙皿の上に雄二が焦げたラードを載せてくれたので、そのお礼に僕は手に持っていたサラダ油を紙コップに注いで雄二に渡した。

「……………！！」

「ほれお主ら。睨み合っておらんで食わんか。焦げてしまっぞい」

「……………うまい」

「野菜とかもいけるな」

秀吉とムツツリー二と亮は既に焼けた肉や野菜を皿に載せて食べ始めていた。雄二なんかを相手にしている場合じゃない。僕も急いで食べないと！

「いったただつきまーす！」

網の上には肉やおにぎりの他に、つぶ貝やエリンギなんかもあった。どれもこれも美味しそうで迷ってしまう。

「へえ〜。美味しそう。坂本って、こういうことにはホント器用よね」

「……………私の自慢の夫」

「バカなこと言ってないで早く食べ。ポケットとしてるとなくなっちゃうぞ」

「……………うん」

食べ物をどんどん焼きながらも炭を足したり風を送ったりと、いくつもの作業を同時にこなす雄二。勿論その間に焼けてる食べ物を口

に入れるのも忘れない。

ちなみに亮も謎の力をこっそり使って、火力の調整を行っていた。

「食事の準備をありがとうございます雄二くん。アキくんに止められなければ私がやろうと思っていたのですが……」

「私もお手伝いしたかったんですけど、外での料理って勝手がわからなくて……」

姉さんと姫路さんが雄二にお礼を言っている。最初はこの二人が作ろうとしたんだけど、それは全力で阻止させてもらった。

そんなこんなで小一時間が過ぎて。

「うむ。良い食べっぷりじゃったな」

持ってきた食材は綺麗に空っぽになっていた。

「ん〜……。なんか、ちょっと食い足りねえな」

「俺も」

名残惜しそくに網の上を見る雄二と亮。実は、僕もまだ少し物足りなかつたりする。

「……………材料は、ご飯どころか野菜もない」

持ってきたクーラーボックスの中身は、あとはジュースと氷だけ。どちらも僕らの胃袋を満たしてくれそうにない。

「そんじゃ、現地調達といくか？」

「へ？ 現地調達って？」

「近くにあるだろ？ 海が」

確かにあるけど、それって…………

「海で何か採ってくるってこと？」

「海があるからな。魚くらいならいるだろ。火もあることだし、焼いて食ったら結構美味いぞ」

「けど、今から海まで行って採ってくるのは大変じゃないか？」

亮の言う通り、それはちょっと大変だと思っ。

「まあ、そうなんだよ……。だから、コレで決めよう」

そう言っ雄二は右の拳を突き出す。

「いいよ」

「負けるわけにはいかぬ」

「目にももの見せてやるぜ」

「……………勝っ」

「それじゃ、いくぞ。――最初はグー、じゃんけん」

「……………ほいっ」

亮がグー、その他の全員はパーを出していた。

「ちえっ……………」

亮が悔しそうに自分のグーを見ていた。

「んじゃ、ちよっくら沖まで行ってくるから、待っていてくれ」

「沖まで行くって、どっやって?」

「こっやって」

さっきペンションの中に戻って海パンに着替えた亮の近くに、突如巨大な何かが出現した。

それは、焰のように紅く、精霊と呼ぶに相応しい威厳を持った、そんな――

「ーってちよっと待って! コレって明らかにス リット・オブ・ファ アだよね!？」

「……………どこで手に入れた?」

「この前の肝試しで地獄へ行った時に発見したから、とりあえずかっぱらってきた」

「かっぱらってきちゃっていいものなのか!？」

「まあ、大丈夫だろ」

「というか、その格好でどうやって海に入るの!？」

亮はウエットスーツどころか、シュノーケルも水中メガネもない。
どう考えても海に魚を取りに行く格好じゃない。

「オーー　ウルで空気の膜を作れば大丈夫だ」

「……………作れるの?」

「ああ」

どうやってそういうことが出来るようになったんだろう。

「それじゃ、さっき火をおこしたのも……………」

「ああ。コイツの力を借りた」

色々ツツコミを入れたいけど、ここは我慢しておこう。

「明久。必ず生きて帰ってくるからな？」

そうやって僕の肩を叩く亮。そんな死亡フラグを立てられても困る
んだけど。

「このまま具現化しているのはキツイから、 縛式オ バー ウル
の 雛で魚を採ってくるぜ！」

そうして黒 の状態になった亮は、そのまま水平線へと吸い込まれ
ていった。一体どこまで行く気なんだろう。

「あの、明久君」

「ん？ なにかな姫路さん？」

「あの……一つしかありませんが、家で作ってきたマドレーヌを食
べてもらえませんか？」

その瞬間、この場が戦場が変わった。

「うん。皆で分けてー」

「いやいや明久。遠慮なんかしねえで全部食っちゃまえ」

「……………この幸せ者」

ムツツリーニたちの方が幸せじゃないか……。

そんなことを思いながら、僕は意識を手放した。

「……………君！ 明…君！」

「ん……………？ 姫路……………さん……………？」

「本当に良かったです……………」

目を開けると、心底安心した表情を浮かべていた。

「あれ……………ここは？」

「ペンションのお部屋です」

確かにここは、僕たちが借りたペンションの部屋だ。

それはわかった。問題は、

「皆はどこに行ったの？」

「それが、怖い声が聞こえたので逃げているうちに、皆さんとはぐれてしまって……」

「怖い声？」

『キシヤアアアッ!?!』

突然、獣とも虫とも思えない何かの音が聞こえてきた。

何がどうなってるっていうんだ!?!?

第五十八問その四・ゆけ！ ゆけ！ 川口浩！！（前書き）

今回でなんと、祝100部目です。

ここまで来れたのは、やはり読者の皆さんのおかげです。

これからも『俺と私と召喚獣』をよろしくお願いします。

第五十八問その四・ゆけ！ ゆけ！ 川口浩！！

『ギヤアアアッ！！』

またあの声が聞こえる。本当になんなんだ！？ しかも誰とも電話が繋がらないなんて、おかしいとしか思えない。

「とりあえず、ここで皆が戻ってくるのを待っていろよ」

「は、はいっ！」

そうして、僕たちはこの部屋でしばらく待機することにした。

1571

一時間経過。

「誰も戻ってきませんね」

「そつだね」

二時間経過。

『ギヤアアアッ』

「ひっ!!」

「大丈夫だよ姫路さん。落ち着いて」

四時間経過。

「姫路さん。なんだか僕、だんだん眠くなって……」

「お願いです明久君！ この状況で寝ないでください！」

「むにゃ……裏みよんワールドカップ……」

「起きてください明久君！」

六時間経過。

「こつなったら、皆を捜しに行こう」

「は……はいっ」

「波の音しかしませんね」

「そうだね。月明かりも綺麗だし」

六時間経っても戻ってこないなんて、どう考えても普通じゃない。

だから思い切ってペンション中を捜してみたけれど、誰一人見つかることはなかった。

そして今は休憩も兼ねて、昼間に遊んでいた砂浜にいる。

「僕たち、これからどうなっちゃうんだろうね……？」

「もっつ。ダメですよ明久君。そんな後ろめたい気持ちでいたら」

「ははっ。ゴメンね」

どうやら姫路さんも少し落ち着いてきたようで、特に怖がることなく徐々にいつもの調子を取り戻していた。

もしかしたら、前のお化け屋敷と違って周りが明るいというのもあるかもしれない。

「……でも」

「ん？ 姫路さん、どうしたの？」

「でも、何が起きたって明久君と一緒にならー明久君の隣にいれるなら、私は大丈夫です」

姫路さんがいつものような笑顔でそう言った。

僕と一緒になら大丈夫、か。それってやっぱり、僕のことを頼りにしてくれているってことかな。そう言ってもらえると、やっぱり嬉しいな……。でも、

「僕の隣の席だと夏は暑いし、冬は寒いからやめておいた方が……」

「明久君。私が言いたいの、そういうことはありません」

「え？ そうなの？」

「はい。私が言いたいのはー」

そこから先の姫路さんの言葉を、僕は聞くことができなかった。

『ギヤアアアツー！』

なぜなら突然僕たちの目の前の海から、見たこともない化け物が現れたからだ。

その化け物は全身が緑色の何かに覆われており、長い腕と触手を生やし、頭には細い角が生えている。

もしかして、さっきまで聞こえていた声の正体って、コイツだったのか！？

それに、もしかして皆は「コイツ」に……。

「……っ！ 逃げよう、姫路さんっ！」

「は……はいっ……！」

すると化け物の腕が伸び、姫路さんに向かっていった。

「危ないっ！ 姫路さんっ！」

「明久君！？」

咄嗟に姫路さんを突き飛ばしたので姫路さんは無事だったが、その代わりに僕の体が化け物の腕に直撃した。そして、僕の体が砂浜に投げ出された。

「明久君！ 明久君！ しっかりしてくださいっ！」

朦朧とする意識で必死に目を開けて視界が揺れているせいか、姫路さんの目には涙がたまっている気がした。

「姫路……さん。僕のごとは……いいから、早く、逃げて……」

「嫌ですっ！ そんなこと絶対にできませんっ！」

「僕はちょっと動けそうにない。だから、姫路さんだけでも逃げて
――」

「……そんな」

「え？」

「明久君を置いて私だけ逃げるなんて……そんな悲しいこと……言わないでください……っ！」

姫路さんの目からは、大粒の涙がボロボロと溢れていた。

ああ、そうか。

「やっぱり、僕はバカだ」

「明久……君？」

姫路さんはこんなにも僕のことを心配してくれていたのに、その僕が姫路さんの思いをふいにするところだった。

僕の武器はレンや姫路さんのような頭脳でもなければ、雄二や亮のような運動神経でもない。

誰かが僕のことを思っていてくれるなら、僕は負けない。負けるわけにはいかない！

「繋がる心が、僕の力だ！」

僕は立ち上がり、化け物と対峙する。

『ガギヤアアアッ！！』

「はあああああッ！！」

化け物が振りかざす腕をかわし、本体に拳を叩き込んだ。

『ガ……グ……ゴオオオ……』

その一撃で化け物の体が崩れ落ちる。

「おっす。ただいま」

「……………え？」

そして、その中から出てきたのは、背中にカジキを縛りつけた僕らの友人だった。

「え？ ……神谷……君……？」

「どうなってるの……?」

「いやゝ悪い。マグロの群れを見つけてうっかり南半球まで行っちゃったから、帰るのが遅くなっちゃった」

「……………それで、背中のカジキは?」

「それなんだが、俺以外にそのマグロの群れを狙っていたのがこのカジキだったってワケ」

「明久君。これ、ワカメですよ……………」

姫路さんに言われて化け物の体だったものを見ると、ワカメの他にもカキやフジツボがあった。

「それじゃ、これが亮の体にくっついていただけ?」

「ああ。藻の群生地を突っ切ったら色々とくっつかれた」

「ちなみにその細い触手のようなものは何?」

「これは新しく発明した、熱源センサー内蔵の触手型フックシヨックだ」

それじゃ、化け物の腕は亮の 雛で具現化されたやつで、細い角はカジキの口だったってことか。

「ところで神谷君。どうやって太平洋からここまで正確に帰ってこれたんですか？」

それは僕も気になった。地図もなしに日本まで帰ってこれただけでも奇跡的なのに、更にこの海水浴場を特定できるなんて、何かを使っただけとは思えない。

「出発前に明久に発信機を仕掛けたんだ。有効範囲がかなり広いやつをな。だから日本の方向さえわかれば大丈夫だった」

出発前に僕に仕掛けたって、どうやって？

ふと、亮が死亡フラグのセリフと共に僕の肩を叩いたことを思い出す。

肩に手をやると、何かの機械がくっついてた。もしかして、これが発信機？

「それで、どうやって日本の方向がわかったの？」

「海底にいた、自称もつすぐ地上を侵略しにくイカ娘に聞いた」

そんな人(？)がいたとは驚きだ。

「それじゃ、あの怖い声は何でしょうか？ それに皆さんはどこに行っただんでしょう？」

「？ よくわからんが、とにかく調べてみるか？」

「うん。お願いするよ」

亮が何かの操作をすると、フックショットがダウジングのように動き出す。それにあわせて亮がスタスタと歩き出すので、僕たちもついていく。

すると亮は壁の前で立ち止まり、

「ちえいさーっ！」

壁に向かって右ストレートを繰り出した。

そして、壁の一部がハリボテのように綺麗に倒れていくのを呆然と眺める僕と姫路さん。

そこには――普通の階段があり、皆だけでなく、クイズ大会の放送席にいたヒヨリさんと昭人さんも一緒だった。

……へ？ どういふこと？

全くわけがわからない僕らに見えるようにヒヨリさんがCDプレイヤーを取り出す。

『ギヤアアアツー!!』

そこから流れてきたのは、さっきまで僕らを脅かしていた声だった。

「いや〜、面白かったぞ明久」

「なかなか見れないものじゃったな」

「……………貴重映像」

「私もすごいドキドキしたよ〜」

「でも、神谷のアレは本当にビックリしたわ……………」

「神谷君、いい味出してたよ〜」

「なんか俺だけ仲間外れにされた気分だ……………」

「亮くんは打ち合わせの前はどこかへ行ってしまったので……………」

「……何も伝えられなかった」

「ま、自業自得ってヤツよ」

「うう……なんか悲しい……」

「まあまあ亮くん。ほら、飴あげるから」

「まさか姉貴にこんなことをされる日がくるとは……」

未だに何が何だかわからない。

するとその様子を察したのか、ヒヨリさんが僕らのところに来てきた。

「二人ともお疲れ様。これで罰ゲームは終了だよ」

へ？ ……罰ゲーム？

「罰ゲームって、何の？」

「やだな〜吉井君。クイズ大会の罰ゲームに決まってるじゃない」

「でもそれって、あの目玉焼きだったんじゃない？」

「確かにそうだけど、それはあくまでカモフラージュだったんだよ」
「解答者への罰ゲームはアレだった。そして本命である、ペアへの罰ゲームがこちらだということだ」

昭人さんが補足の説明をしてくれた。

つまり僕らは、皆に一杯食わされたってこと？

その事実を呑み込んだ途端、全身から力が抜けた。

翌日。帰りの車にて。

『すいません、瑞希さん。騙すような真似をしてしまって』

『いえ。怖かったですけど、いい思い出になりましたし』

『……今度雄二にも試してみる』

『当の本人は寝ちゃってるみたいだね』

『食べてから車に乗る前からフラフラしてたわね』

『せっかく桂さんが男子のためにスタミナがつく特別メニューを作ってくれたのに感想も言わずに寝ちゃうなんて……』

その頃僕ら四人は、何故か蓮の花の咲き誇る川辺で再会を果たしていたのだけれど……それはまた、別のお話ということだ。

第五十八問その四・ゆけ！ ゆけ！ 川口浩！！（後書き）

というわけで、今回も夏菜さんのオリキャラであるヒヨリと昭人をお借りしました。

夏菜さん、オリキャラを使わせていただき、本当にありがとうございました！

第五十九問その一・男だけじゃなくて女もツライよ

「……召喚獣の試運転?」「」

「ああ。そいつをアンタらにやってもらいたいのさ」

夏休みも終わりにさしかかったある日。Fクラス特別講習（ちなみに霧島と優希と優子は自主登校）が終わってから、一緒に海に行つたメンバーで写真を見ながら雑談をしていると、そこに学園長ことババアがやってきてそんなことを行つた。

召喚獣の試運転か……。

「どうしてウチらなんですか?」

「どうしても何も、アンタらが適任だからさ。アンタらなら点数が高すぎず、召喚獣の扱いにも慣れてるだろう? それにー」

「それに?」

「ー補習から脱走しようとしたバカどもへの罰にもなるからね」

「……（サツ）」「」

咄嗟に目を逸らす俺と明久と雄二。もしかして、この話があったか

ら鉄人に捕まったのに大したおとがめがなかったのか？」

「あの。試運転って、具体的にはどのようなことをするんですか？」

「特にこれといったテスト項目はないさね。呼び出して、適当に動き回らせるだけでいいさ。なんの動きもさせないのはテストにならないから困るけどね」

「あ、それだけでいいんですか。それなら私もできそうです」

安心したように胸の前で手を合わせる姫路をよそに、俺は（おそらく明久や雄二も）何か妙な臭さを感じていた。絶対何か裏がある。

「それでしたら、私もお手伝いいたします学園長先生」

「……私も」

「私も」

俺たちの勘ぐりをよそに、優子と霧島と優希も協力を申し出る。

「いや。アンタらはダメだね。点数が高すぎる」

確かに試運転をするのなら、危険を考えて高得点の外した方が無難だと言える。

「そういうワケで、試運転は吉井・坂本・神谷・土屋・木下秀吉・島田に頼むよ。科目は古典でね」

えっと、科目は古典で、メンバーは明久と雄二とムッツリー二と島田とーってちょっと待て！

「待って下さいババア長！ その面子に僕が入れられるのは納得できません！」（14点）

「俺が入っているのがおかしいとは思えない！」（15点）

「そうです学園長！ ウチをこんなバカたちと一緒にしないで下さい！」（6点）

「……………不本意極まりない……………っ！」（9点）

「……………アンタらのその自信はどこから湧いてくるのかねえ……………」

「三人合わせても姫路や霧島の十分の一じゃというのに……………」

「ちょっと待てババア。俺は結構点数が取れていたはずだが」

「アンタには何が起こっても構わないからね」

「それが教育者の言葉かつ！」

どうやら雄二には暴走して何が起こっても問題ないらしい。それは正しい判断だと言わざるを得ない。

「それと神谷。アンタには絶対に試運転をしてもらおうよ」

「へ？ 俺？」

「ああ。アンタは二重人格だからね。召喚した時のデータが欲しいのさ」

なるほど。と言いたいところだが、やっぱり怪しい。これまでは特に皆と変わったことはなかったはずなのに。どんな新しい機能を追加したんだ？

「（というわけでレン、あとよろしく）」

『（そこで投げ出されても困るんだけど）』

いつの間にか学園長は教室から消えており、美波たちが召喚を始めようとしていた。

「三人とも。ちょっと待っー」

「……試獣召喚っ!」

明久が止めるより早く、美波と秀吉とムツツリーニは喚び声をあげた。

そこからお馴染みの召喚獣が現れる。

「良かった。サイズは前のやつに戻っているみたいね」

「やはりこっちの方がしっくりくるのう」

「……耳と尻尾も以前と同じ」

三人の言う通り、召喚獣の見た目は特に問題ないみたい。

「……武器を持っていない」

「服装も学校の制服みたいですね」

「装備をリセットするって話だったからね」

「それでこの格好ってことかな?」

皆の言う通り、パツと見てわかる変更点と言えば、召喚獣の格好は制服姿で、手に武器を持っていないということくらい。

「一応、今のところおかしな部分は見当たらないね」

「安心するのはまだ早いわよ明久」

「さっきのババアの話だと、変更したのは操作性の部分らしいからな。動かしてからが本番だろ」

「ふむ。ならば、早速動かしてみようかの」

その時、

《では、明久に飛びついて驚かせてみるのじゃ》

「「「へ?」「」」

子供のよつな高い声が、教室に響き渡った。え? 何?

「い、今の……何かしら……?」

「小さな子の声が聞こえましたけど……」

辺りを見回しても、私たち以外に人の姿は見当たらない。

《今の声はどこから聞こえてきたんじやろつか？》

もう一度、さっきの音が聞こえてきた。あれ？ 『じやろつか？』？

「もしかして今の、秀吉君？」

「いや、ワシは何もしゃべっておらんぞ？」

でも、今の喋り方って秀吉だったような……。

《な、何……？ お化け？ うう……怖い……っ！》

《……………この声、変声期前の児童のもの》

他にも子供の声が聞こえてくる。何なのかしら？

「……………召喚獣が喋ってる」

「代表。それ本当？」

「……………（コクリ）」

《それにしても、困ったのじゃ。今朝のことはどうしたら良いじゃろうか……………》

《怖い怖い〜！ お化けとか、ウチ本当に嫌なのに〜！》

《……………この視点の低さ。悪くない》

よく見ると、召喚獣が口を動かしているのに合わせてさっきの音が聞こえてきた。

「ホントだ。召喚獣が喋ってるわ」

「これは面白いわね」

召喚獣は腕を組んだり、その場に頭を抱え込んだり、低い体勢から頭上を見上げてみたりと、それぞれ思い思いの行動を取っていた。とりあえず、心霊現象とかじゃないみたい。

「しかしまあなんつーか、操作性の向上というよりは、自動化って感じだよな。これ、お前らが指示してるわけじゃないだろ？」

「……………特に何もやらせてない」

「ワシもあのような動作をさせてはおらんの」

召喚獣はさつきから溜め息をつく仕草を試してみたり、胸に手を当てたり、仰向けに寝転がったりしている。

そして、

《お化けとかじゃなくて良かったあ……。危うく前の肝試しのときみたいに、また眠れなくなって葉月と一緒に寝なきゃいけないところだったわ……》

《まさかまた近所の男子中学生に告白されるとは……。こんな話が明久たちにバレてしまえば、ワシは更に女扱いされてしまう。なんとか秘密裏に断らねば……》

《……この視点の低さなら、いつでもスカートの中を見られる……！》

なんてことを口走っていた。

「美波……。今召喚獣が言っていた、肝試し以来お化けが怖くて葉月ちゃんと一緒に寝てるって話、本当なの……？」

「秀吉……。アンタついに学校外の男子にまで告白されちゃったの

「？」

「ムツツリーニ……は、別にいつもどおりね」

《でも冷静になると、ちよつと勿体なかったかも。意地を張らずに怖いって言って、アキに手でも握って貰えば》

「ちよ、ちよつとおーっ！？ 本当に何言ってるのよーっ！」

美波が慌てて召喚獣に飛びかかる。けど、美波の召喚獣はその手をひらりとかわし、明久の足にしがみついた。

「あれ？ 美波の召喚獣に触れる……？」

明久以外の召喚獣は物に触れないはずなんだけど……。

「あのババアのことだ。また細かい部分の調整に失敗したんだろ」

「見た感じはそうみたいね」

「そんなことどうでもいいから、とにかくその子をこっちに寄越しなさいアキ！」

《やつ。ウチはアキのところにいるっ》

「え？ 今、召喚者の意志に逆らわなかった？」

「……学園長は、無意識領域の一部を読み取ると言っていた」

「なるほど。それで体面より欲求に従った行動を取るワケか」

「無意識の行動は本能に近いものが多いから」

「だから自動化のために自己形成をさせたら、幼児に近い人格になるわけね」

「えっと、要するに？」

納得した雄二や私や優子とは反対に、明久は首を傾げている。

「……この子たちは、幼児程度の行動原理を持ち、自我があるという」と

「つまり、本音を喋っちゃう自分自身の子供の姿、といった感じですね」

「なるほど……。あのさ、秀吉」

「な、なんじゃ明久？」

警戒したのか、秀吉が一瞬口ごもる。

「秀吉は男子に告白されたことってある?」

「あるわけなかるつ」《ここところはほぼ毎日じゃ》

「」「毎日!?!」「」

「ななななんてことを言うのじゃ! 明久よ! 今のはこやつ嘘じゃからな!? 本当はワシは」《金曜日と月曜日は特に多いのじゃ》「違つのじゃ! ワシは男に告白などされておらんのだ!」

道理でたまに姿が見えないと思ったら、そういうわけか。

「んじゃ、今度はムッツリーニに何か聞いてみつか。ムッツリーニ、お前は――」

《……………話しかけるな。今、スカートについて考えるのに忙しい》

「……………すまん」

「……………っ! (ブンブンブン)」

なるほど……………。いつもそんなに集中してたのね……………。

まあ、ムッツリーニは本音を聞いてもいつもどおりみたい。

「じゃあ、最後はー」

「ー島田だな」

「な、なによ」

明久と雄二の視線を受けて一瞬たじろぐも、気を取り直すように咳払いをして告げる。

「い、言っとくけどね、ウチに隠し事かんで何も無いんだから《実は昨日、下級生の女の子に告白されて》いやああーっ！」

「」「」

まだ誰も何も聞いてないんだけど……。

「……本音を喋っちゃう、ですか……」

瑞希はそんなことを呟くと、紙とペンを取り出して、漢字を書いていた。

「あの、明久君」

「ん？ なに姫路さん」

「これ、なんて読みますか？」

「えっと、 格差問題 かな？」

「はい。 正解です」

明久の解答に、瑞希は嬉しそうににっこり微笑んだ。

ポンツ 明久の召喚獣登場

「しまったあああーっ！！」

「ごめんなさい明久君っ。でも、どうしても本音で聞きたいことがあるんですっ」

瑞希……。結構凄い方法とったわね……。

「ははっ。相変わらずバカだな明久」「……雄二。 法の精神 を書いた人は？」 「モンテスキュー」だろ。お前はいきなり何を言ってるー」

「全く、成長しないのね、明久」

「レン。猿は英語で？」「モンキーでしょ？ 一体どうしたのよー」

ポンツ 雄二と私の召喚獣登場

「しまったあああーっ！！」

「ゴメンね、レン」

「優子。組織の機密管理を行う集団は？」

「査問委員会でしょ？」

ポンツ 優子の召喚獣登場

「ちよっとおーっ！」

さて、これで条件は五分五分よ！

ここまででは良かった（？）んだけど、一つ驚きの事実が発覚した。

『《あれ？ 急に視点が低くなったぞ？》』

《あれ？ 急に視点が低くなったぞ？》
何故か私の召喚獣が二体いることだった。

『《こりゃどういづことだ？》』

「……恐らく、潜在意識も無意識として読み取られた」

『《とつことは霧島、俺は表面上の意識と無意識が一緒になって出てきた、ってことか？》』

「……（コクリ）」

要するに、亮の意識が私の無意識として読み取られ、更にその亮の無意識を読み取った召喚獣が出現したわけね。

そしてそこに、

「皆お待ちせー。って、なにににー？ なにか面白そうなことやってるねっ。ボクも混ぜてよっ」

部活を終えた愛子が合流してきた。

「ねからぶじになるのかしら……？」

第五十九問その二・世の中には強引に対処して良い問題と悪い問題がある（前書

今月はリアルで走り回るぐらい忙しかったので、なかなか投稿できませんでした。

あと、今月の中旬に例のアレが可決されてブチ切れ寸前なので、予定と一部内容を変更してお送り致します。

第五十九問その二・世の中には強引に対処して良い問題と悪い問題がある

「へえ〜。本音を喋る召喚獣か〜。面白そうだね」

「「「全然面白くないっ!」「」」

事情を聞いた愛子は、楽しげにそう言った。

「じゃあ、ホントに本音を喋るのか、確かめてみようかな〜」

「「「……………っ」」」

ターゲットにされまいと、咄嗟に全員が目を伏せる。

そんな中、愛子はゆっくりと相手を選んで声をかけた。

「ムッツリーニ君」

「……………」(ビクッ)」

「ボク、ちょっとキミに聞かせて欲しいことがあったんだよね〜」

愛子はムッツリーニを見てにやあ、と笑みを浮かべる。

「ねえムツツリーニ君。一つ聞かせて欲しいんだけど」

「……………こっちは話すことなんかー」

《……………エロの話なら大歓迎》

早速本音が建て前と逆のこと言ってるけど、大丈夫なのかしら？

「あははっ。そういう話もいいけど、今ボクが聞きたいのはちよつと違うんだよね。……………ねえ、ムツツリーニ君。いつもは『興味ない』って言ってるけどーホントはボクに、興味があったりしない？」

愛子が問いかけると、ムツツリーニはフツと小さく笑ってから答えた。

「……………何をバカなことを」

《……………スパッツの中はどうなっているんだろっ》

「……………っ！ー！（バシバシ）」

《……………痛い》

何だろう。ムッツリーニが愛子（のスカートの中）に興味を持っていたことは知ってたから、今更って感じしかしないんだけど……。

「それじゃ……ねえ、吉井君、坂本君、神谷君」

三人の名前を呼びつつ、愛子は自分のスカートの裾をつまんだ。

「スパッツだからつまらないかもしれないけどーボクのスカート……めくってみる？」

「何を言ってるのさ工藤さん。僕はそんな《めくらせて下さい》いやらしい人間じゃないよ」

「そうだぞ工藤。俺たちをからかっても《待て明久。俺が先だ》無駄だからな」

『《残念ながらそんな手は《めくった後に描かせて下さい》通じないぜ》』

「アキ。ちょっとこっち来て」

「明久君。お話があります」

「……雄二、おいで」

「亮、こっち来なさい」

頑張っ
てね三人とも。

~~~~しばらくおまちください~~~~

「まったく。少しは懲りなさいよね。そうやっていやらしいことばかり考えてると、また問題になっちゃうんだから。ね、瑞希？」

「え？　そ、それはその、えっと……いやらしいことは年頃だから仕方がないかもしれないですけど……と、とにかく、愛子ちゃんをそんな目で見るのはダメですっ！　あんまりそういうことを考えると、私も美波ちゃんと一緒にお仕置きをしちゃいますからねっ」

「……雄二。浮気は許さない」

「亮も反省しなさいよ?」

『「肝に銘じておきます」「』』

明久と雄二と亮が額を畳に擦り付けて謝っている。

「ごめんねムツツリー二君、吉井君、坂本君、神谷君。ちよつとからかつちゃった」

「……俺は工藤に興味なんかない」

「本当だよ。酷いよ工藤さん」

「ちよつとは自重してくれ」

「うん。からかって嘘なんかついちゃってゴメンね」

『《反省してるならいいけどーって嘘?》』

「そう。ボク、嘘ついてたんだ。ホントは、ボクー」

愛子はギリギリまでスカートを持ち上げて告げる。

「ー今日、スパッツ穿いてないんだ」

《……っ！！（ガタッ）》

《……っ！！（ガタッ）》

《……っ！！（ガタッ）》

《……っ！！（ガタッ）》

『《『『『これは違つんだあーっ！』『『『『

『『『『いいからこっち来なさい』『『『『

~~~~~じぼくのおませさくだを~~~~~

「やべえ……。意識が朦朧としてきた……」

「まずいね……。僕も指先が少し震えてきたよ……」

『《俺……消えるのか……？》』

畳に倒れ込んだままでの会話。三人とも起き上がれるほど体力が回復していないみたい。

「……雄二。私だってスパッツを穿いてない」

「アキってば。どうしていつつもそんなにいやらしいことばかり考えるのよ」

「明久君っ。ちゃんと反省して下さいっ」

「亮もちゃんと反省しなさいっ！」

倒れている明久たちへの女子勢のお説教。容赦ないというか、なんというか……。

「……………（ぐったり）」

ちなみに、ムッツリーニは鼻血で倒れて動かない。

そして更に愛子が追撃をかけた。

「それとね、四人とも。今朝ボクちよつと寝坊して、ブラをする時間か」

『「もう勘弁」『「ブラがどうしたっ!?!?」』』して下さ
いっ!」「』』

そんな中、まずは翔子が雄二に歩み寄った。さようなら雄二。

「……雄二」

「ち、違つぞ翔子! これは男として仕方のない反応で」

必死に弁解を試みる雄二に翔子は近づき、

「……えい」

「んおっ!?!?」

いきなりその頭を胸の中に抱きかかえた。うん、さり気大胆。

「……嬉しい？」

「ば、バカを言え！　こんなのが嬉しいわけが《イイヤツホオオー！》あるかああああーっ！」

雄二の声を聞いた翔子は嬉しそうに笑みを浮かべて、更にぎゅっと雄二の頭を抱いた。

「……じゃあ、もう少しくうしててあげる」

「何を言ってやが《キャツホオオー！！》放せええええーっ！」

腕の中から抜け出そうとする雄二。

まったく。相変わらず雄二って素直じゃないのね。

《いいなあ雄二！　羨ましいっ！　羨ましいよっ！》

《畜生、雄二のヤロウ……。なんて羨ましいんだっ！》

その二人なんてこのざまだっというのに。

「明久君っ。翔子ちゃんもそういう目で見ちゃダメですっ」

「アキ。まだ反省がたりていないみたいね？」

「亮。少し、頭冷やしなさいっ」

ちなみに本体も、このざまみたい。

「まったく……ただでさえ色々と問題を起こしているってのに、代
表とか愛子をそついう目で見ちゃダメよ」

『《はい……。ごめんなさい……》』

亮は優子のお説教を正座で聞いている。何だろう。目の前で自分が
説教されてるのを見るのって、なんか複雑な気分。

「な、なら……アンタの本音を聞かせてくれる……？」

《う、うう……》

優子の言葉に合わせるように、召喚獣が言葉を紡ぎだす。変なことを喋らないといいけど……。

《非實在犯罪ってなんだよ!?!》

「亮!?! いきなりどうしたの!?!」

「とつかまさかの社会風刺!?!」

『《漫画の中で犯罪をやったら子供がそれに影響されるからそういう漫画を発行停止にするってことはつまり、人を刺すかもしれないから包丁の販売を停止する》っていうのと同じじゃねえか!》』

何で本体の方まで一緒になって語ってるの？

《確かに包丁を使えば人を刺すことだってできる。でもそれと同時に美味しい料理を作ることだってできる!》

『《だから包丁を売らないのではなく、美味しい料理の作り方を教えるべきなんだ!》』

《もし本当に子供のためを思うのなら、漫画だって無闇に取り上げるんじゃなく、『フィクシオンだからこそ、笑って楽しめるんだ』ということを教えていくのが教育つてもんじゃないのかよ!?》

一通り思いの丈をぶつけた後、亮の本体も召喚獣も泣き崩れていた。

「アタシが聞きたいのはそういうことじゃないの。ねえ、亮。アンタの好きな人は誰なの?」

《俺の好きな人はー》

『《燃える俺の小宇宙コズモ!ー!》』

「ちよつと!?! 何自分自身にアッパーカットをくらわせてるの!?!」

《えつとね。僕が好きなのはね、》

「飛んでけボールのように!」

「ああつ。小つちやな明久君がつ」

「……雄二。雄二はどう？ 私のこと、好き？」

「ふん。くだらねえ。そんな質問に答える義務は」

《俺？ 俺は勿論ー》

「唸れ俺のハリケーンシュート！」

《みぎやあーっ》

「……雄二、酷い」

あっちもあっちで色々と苦労しているみたい。

第五十九問その二・世の中には強引に対処して良い問題と悪い問題がある（後書

今年の投稿はこれで最後です。

それでは皆さん、良いお年をお迎え下さい。

第五十九問その三・一昔前の『マジカルバナナ』っていう連想ゲーム、何人くら
あけましておめでと〜いいます。

今年も『俺と私と召喚獣』をよろしくお願いします。

第五十九問その三・一昔前の『マジカルバナナ』っていう連想ゲーム、何人くら

『《「」どおりやああーっっ!」「」《》』

《《《にぎゃああーっ》》》

明久と雄二はそれぞれの召喚獣をゴミ箱に蹴り込み、亮は召喚獣にアップercutをくらわしている。これで何回目かしら？

『《今日は、なんて、ハードなんだ……》』

「まったく、だ……。実体化した召喚獣が、ここまで厄介、だとは……」

「二人は、まだ、いいよ……。僕なんて、フィードバックまで、あるんだから……」

ちなみに三人とももうへトへトになっている。

「……そろそろ雄二は諦めて正直に本当の気持ちを聞かせるべき」

「亮も諦めて本当の気持ちを聞かせなさい」

「ボクは吉井君の色んなヒミツを聞きたいな。誰かさんたちの為にも、ね」

『《「誰が聞かせるかつ！」》』

必死になって抵抗している亮と明久と雄二……って、あれ？ そう
いえば、

「秀吉と優希ってどうしてるの？」

「そう言えば、さっきから秀吉の召喚獣と桂さんの声が全然聞こえ
てないね」

「ん？ そう言やそうだな。不公平じゃねえか」

さっきから秀吉も、秀吉の召喚獣も、優希も、全く声が聞こえてこ
ない。どうしたのかしら？

「んむ？ なんじゃ二人とも」

「もしかして、私たちを呼んだ？」

離れて静かに座っていた秀吉が目を開け、同じく横に座っていた優
希がこつちを向いた。何をしてたのかしら？

「二人とも、寝てたの？」

「やだな～愛子ちゃんったら、そんなことはないよ」

「うむ。流石にこんな中ではいくらワシでも寝られんぞ、工藤」

確かにこんな状況で寝ていられるのは余程の大物かバカぐらいね。

「妙なことを口走られては困るからの。修行僧になった気持ちで、瞑想して気分を落ち着かせておったのじゃ」

《……………》

「さっきからこんな感じだから、全然本音が聞けないんだよ…………」

秀吉の召喚獣は本人の隣で目を閉じてちょこんと座禅を組んでおり、そんな召喚獣を見て優希が若干落ち込んでいた。

「へえ～。そうするとおとなしくなるのか」

『《これは良いことを聞いたぜ》』

「そうか。意識を空っぽにしたらいってわけだな」

「しむ。びしむ。そのまじじや」

なんだか瞑想してる召喚獣ってちょっと可愛いかも。

なんて思っていると、

「……雄二と吉井の召喚獣を連れてきた」

「「え、？」」

《痛かった》

《ひどい目にあった》

「アタシは亮の召喚獣と本人を連れてきたわ」

翔子が明久と雄二の召喚獣を、優子が亮本人と召喚獣をそれぞれ両手に抱きかかえて戻ってきた。

「しよ、翔子！ そいつをそっちによこせ！」

「お願い霧島さん！ 僕の召喚獣を返して！」

「……ダメ。渡したら、二人ともまた邪魔をするから」

『《後生だ優子！ 放してくれ！》』

「アンタだって妨害するからダメよ」

優子と翔子は召喚獣を抱いたまま愛子の後ろにまわる。

「これでようやく本音が聞けるねっ。吉井君。好きな人はいないのかな？」

「亮の好きな人は？」

《《アタシの好きな人は、》》

「アンタは黙りなさいっ！」

「……雄二。本当の気持ちは？」

《《好きな人？ それはー》》

本人の意思に反して、召喚獣はその質問に答えようとする。そしてそれを見て、雄二と明久は畳の上で、亮は優子に掴まれたまま座禅を組み始める。

《《……………》》

すると、明久たちの召喚獣は口をつぐみ、黙って瞑想を始めた。

『見て下さい美波ちゃん。瞑想をしたら大丈夫みたいですよ』

『ホント!? じゃあウチらも真似しましょ!』

あゝあ、二人とも。そんなことを言っていると、

《スカートで座禅っ。見たいっ。見たいっ》

「しまったああーっ! 邪念があああーっ!」

《なんだとっ! スカートで座禅だとっ!?!》

《……………俺も見る……………っ》

《俺だっで見ろぞ》

『《「」邪念がああーっ!」「《》』

正直者の召喚獣が反応しちゃうじゃない。

「あ、明久君……………?」

「アキ……………。アンタ、またそうやっていやらしいことを

「ち、違っんだ！ 誤解だよ！ そうじゃなくて僕は《なんだ！》
二人とも座禅じゃなくて正座じゃないか！《ごめんなさい！ いや
らしいことを考えてました！》」

「……雄二。浮気は許さない」

「ち、違っぞ翔子！ 俺は別に《スカートで座禅なんて言われたら
反応するのが男の本能だよな》明久あああつ！ テメエが余計な
ことを言うから連想しちまっただろうがあああつ！」

「亮……。まだ反省してなかったの……？」

『《優子！ 違っんだ！ 俺だつて《あゝあ。正座じゃ何も見えな
いじゃんか》畜生おおおつ！》』

《んつと、今日の私の下着はピンクだったよね？》

《ウチはみずいろだよ》

《アタシはオレンジよ！》

「「「いやああああーっ！」「」」

何なのかしら、このカオスな状況は？

《《《……》》》

しばらくすると全員が落ち着きを取り戻し、再び静寂が訪れた。

「ねえねえ、吉井君」

誰も愛子の呼びかけにも答えず、瞑想状態を維持し続けている。

「ん〜。なんか、静かになっちゃったね」

「……困る。雄二の気持ち、聞きたいのに」

「私も色々と聞きたいんだけどな〜」

愛子、翔子、優希の三人が口を開くが、状況は変わらない。

「あ。そう言えばボク、さっきこの教室に入ってくる前、学園長先生に会ったんだけど」

「学園長に？」

「その時、全員の動きがなくなったら使うようになって渡されたものがあつたんだよね」

「……渡されたもの？」

「そ。この箱なんだけど。なんか、ここから一枚ずつ取り出して、それを読み上げなさいって」

愛子は小さな箱を三つ取り出した。これらは一体何なのかしら？

「……………三枚のカード？」

「もしかして、連想ゲームか何か？」

「よくわかんないけど、そういうことかなあ。まあ、とりあえずやってみよっか。えっと、まずは一枚目。はい」

「……………しましま？」

「はい、二枚目」

「ピンクだね」

「はい三枚目」

「みずいろ。何のこと？」

「……………難しい」

《《《パンツ！》》》

《《パンツとブラジャー！》》

……………最後の回答が私と一心同体の人物だと考えると、すごく恥ずかしいわね……………。

「よし、どんどんいくよ。はい一枚目」

「……あなたの」

「はい二枚目」

「本当に」

「三枚目」

「好きな人」

《《えっと、それは》》

『《《「「どおりやああーっつ」「《『

ついには瑞希や美波や秀吉や優子までもが耐えきれずに自分たちの召喚獣をゴミ箱に放り込み、しばらくこの連想ゲームは続いた。

「もうダメだ……。フィードバックで体中が痛い……」

「もう、力なんて残ってないわよ……」

『《体が小さいから、疲れも、倍増、だ……》』

「俺もこんなに疲れたのは久々だ……」

「……………キツイ……………」

「流石にワシも疲れたぞい……」

「はう……………。このままだと、いずれ変な勢いで告白する羽目になっちゃいます……………」

「ウチも、こんなことで告白するなんて、絶対に嫌なのに……」

皆の口から次々と弱音が漏れる。

『《まだまだ時間もあるし、どうすりゃいいんだよ……？》』

「というか、なんで俺たちがこんな目に遭わなきゃならねんだ？」

「まったくじゃ。理不尽にも程があるっ」

「原因となる人物がいるはずよね」

「だよ。僕らがこんな酷い目に遭うなんて、一体誰が原因なんだろっ」

「そうよ。誰が元凶なのよ」

「えっと、誰って言いますとー」

ふと、全員の頭にとある人物の姿が思い浮かぶ。

白髪で、口が悪くて、こっぴどいことになるを知っていながらも明久たちに召喚をさせた、諸悪の根元である老婆の姿が。

《《……………》》

ガラッ ザッザッザッ

それと同時に全員の召喚獣がドアを開けてドアから出て行った。

「まあ、そりゃそうだよな」

「人を実験台にしておいて、自分だけ無事でいようなんていうのが甘いよね」

「因果応報じゃな」

「……………当然の報い」

『《ちつとは懲りるべきだぜ》』

「ま、そう簡単に許せることじゃないわよね」

数分後、階下からは老婆からのしわがれた悲鳴みたいなものが聞こえてきたけどーきつとシステムの暴走でしょ。システムの暴走が原因なら、私たちは全然悪くないわよね。

第五十九問その三・一昔前の『マジカルバナナ』っていう連想ゲーム、何人くら

なんかグダグダな終わり方の気もしますが、お許し下さい……。

番外編その一・死神との出逢い（前書き）

今回はウツン・エヴィンさん作の『バカとテストと召喚獣

Ryo Sugawa Story』とのコラボ小説としてお送りしていきます。

ウツン・エヴィンさん、コラボを引き受けて下さりありがとうございます。

番外編その一・死神との出逢い

「よし！ 完成だ！」

今日は休日。俺は遂にあるメカを完成させた。

「亮。一体どうしたの？」

隣にいた優希が首を傾げている。

ちなみに今日は何故か髪紐で髪を縛り、ポニーテールにしている。

「このメカの名前は並行世界転移装置『メタ・ドライブ』！ 要するにパラレルワールドに行けるってことだ」

「よくそんなの作れたね……」

「ま、このリングのおかげかな？」

俺は装飾がついた一つのリングを出す。

「コレって……マ レリング？」

「確かそんな名前だった」

俺が開発したメタ・ドライブは、このリングがパラレルワールドへ渡れるという仕組みを何とか再現したものだ。

と言っても、このリングが動力源なんだが。

しかもこのリングに気合いを込めると、謎の炎がともるといってビックリな代物だ。

「とりあえず、百聞は……何だっけ？」

「百聞は一見にしかず、だよ」

「そう、それだ！　というわけで行ってみようぜ！」

リングに炎をとまずと、まばゆい光が俺たちを包み込んだ。

「じじは……」

目を開けた俺たちの視界に飛び込んできたのは、満点の星空。

眼下に広がるのは、明かりに満ち溢れた街。

「ーって亮！　ここ空だよ!？」

「だな」

俺と優希は、現在急速落下中。

「よし、いくぜ！　雛！」

俺の両側にはスピット・オブ・ファイアの腕が、両肩には大きなライターが出現する。

一緒に連れてきたスピリト・オブ・ファアにより、とあるキャラを参考にした俺の装備である黒い腕を出し、その腕で優希をキャッチして地上への激突を防いだ。

「亮。ありがとうね」

「ああ。とりあえず、この 雛を誰にも見られないようー」

にしないと、と続けようと思ったら、ゆっくりと地面に降下する俺たちを見上げる人物が一人。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙を保ちながら俺は真下にある大きな公園に着地して、黒をしまった。

俺たちを見上げていたのは、ポニーテールが特徴的な小さな女の子だった。

そしてその女の子が口を開き、沈黙を破る。

「もしかしてー宇宙人？」

「いや、どっちも立派な地球人。それもアンタと同じ日本人だ」

「それなら、あなたも誰かに変身できるの?」

「いや、変身はできんな」

「この世界では誰かに変身ができると、空が飛べるのだろうか?」

「私は中川さくら。あなた達は?」

「俺は神谷亮」

「私は桂優希だよ。よろしくね」

そんな感じで少し雑談をしていると、中川さんが腕時計を見た。

「ごめんね。もう遅いから帰るね」

「ああ。気をつけてな」

「じゃあね〜」

中川さんはそのままスタスタと帰っていった。

その少し後。

「それじゃ、俺たちはどうするーっておわっ!？」

「喋っちゃダメだよ」

優希は突然俺を近くの草陰に突き飛ばして自分もそこに飛び込み、俺の口を塞いだ。一体何だっというんだ？

その直後、俺たちのいた場所に一人の男が吹っ飛ばされてきた。

そして、その男が吹っ飛ばされてきた方向には、更に数人の男が倒れており、その中央には死神の格好をして大きな鎌を持った人間と、手にナイフを持っていかにも不良という格好をした男が、それぞれ

向かい合わせで立っている。

「こ、この野郎おおっ！」

不良っぽい男がナイフを構えて突っ込んだが、死神の格好をした人間は一瞬で後ろに回り込み、その大きな鎌で男を後ろから斬りつける。

すると男は倒れ、死神の鎌の刃が月光を反射して、その姿は三日月を彷彿とさせた。

「おい。そこの草むらにいる二人」

その姿を眺めていると、不意に声をかけられた。

「いるのは分かっている。出てきたらどうだ」

傍から見れば自分以外の全員が気絶したなかでの独り言にでも聞こえるだろうが、間違いなくそれは違う。

見つかったのなら仕方ないので、俺たちは大人しく草むらから出た。

そして優希が俺の前に出て、倒れた数人の男を一瞥してから死神に言った。

「容赦ないお方ですね。それとも一発も急所に当てていない所を見る限り、お優しい方なんですか？」

優希は言葉を紡ぐ。いつもの無邪気さは消え、死人のように淡々と。しかし透き通るような声で。

優希が文月学園に入ってから一度も見せなかった姿を、あの死神に對して見せた。

「……どちらで取ってくれても構わない」

変声機をつけている様子もないし、声色からしても恐らくあの死神は男だろう。

「なるほど。申し遅れましたが、私は桂優希、そこにいるのが神谷亮です。あなたは何者なんですか？」

「俺は『死神』だ」

さっき倒されたのが不良だとしたら、この死神はこの街を守ってい

る存在といつたところかな？

「そうですね。ですが死神の衣を身に纏い、自分の正体を隠すということは、いわゆる『仮面効果』というものですか？」

「（レン。仮面効果って何だっけ？）」

『（顔や体、あるいは心に何らかの仮面をつけることにより、普段よりも大胆な行動を取るようになるっていう心理学用語よ）』

優希は尚も言葉を紡ぐ。

「それとも――自分の正体を明かせない理由でもあるのでしょうか？ 例えば、大切な人に何の心配もかけないためとか、過去に正体を明かしたことが原因で何かが起こってしまった、とか？」

「――っ！」

優希の最後の言葉を聞いた途端、死神の気配が乱れた気がした。

「おい、優希。お前大丈夫なのか？」

「うん。スカートだけど、下にスパッツをはいているから」

いや、そういうことじゃないんだが。

「とりあえず、亮はちょっと下がってて」

「……わかった」

俺は渋々、優希の斜め後ろに下がった。

「さて、それではもう幾つか質問します。死神さん。もし貴方と親しい人や女子供が貴方の大切な人を狙っても、貴方は大切な人を守りきることが出来ますか？」

「たぶん、守りきるが俺からはできるだけ攻撃できないだろう……。俺も本当の意味で死神になりきれしていないのかもな……」

死神は、少し間を空けてから答えた。

優希は無表情のまま、質問を続ける。

「ではもし、女である私が貴方の大切な人を傷つけるために、別の世界からここにやって来た、と言ったとしても貴方はやはり手を出しませんか？」

前半は本当だが、後半はウソじゃねーかよ。

しかしそんなことを知らない死神は、優希のその言葉で警戒心が強まったようだった。

「お前がもし、さくらたちに危害を加えるなら……俺は戦う」

「さくら……ああ、髪をポニーテールにした、小さくて可愛い女の子のことでしょう」

「さくらを……知っているのか……？」

「ええ。先ほどお会いしました。……ということは、彼女が言っていた、『変身ができる人』も、貴方が守りたい人の一人なのでしょうか？」

「な……何故あいつのことを……？」

「直接的なことを聞いたわけではないので、ほとんどが私の推測だったんですが……その様子だとどうやら当たってるみたいですね」

相変わらず、優希の推測能力は目を見張るところか逆に恐ろしいくらいだ。

けど、優希の能力はそれだけじゃない。

……あの死神、果たして大丈夫かな？

「あなたは先ほど子供とはなるべく戦わないとおっしゃっていましたが、それならばどうやって私から大切な人を守るんですか？」

死神は少し考えてから答える。

「……やはりほとんど防御になって、安全になったら逃げるだろうけどな」

「……そうですか。なるほどよくわかりました。ですがー」

確かにその回答は正しいものだろう。俺だってそう思うと思う。

「ー私のこの魔眼から、逃れられると思って？」

優希ユウキが相手じゃなければの話だが。

「死神さん。貴方はとても優しい方ですが、どうやらそれ以上に甘い方のようです」

「俺が甘い、か……」

優希は背中から一本のハリセンを取り出し「っておい!？」

「優希!　なんでお前ハリセンなんて持つてるんだ!？」

「いや、いつも薬とか暗器を持ち歩いている亮に言われたくないんだけど……。あ、ちなみに普通のより頑丈なだけで、後はただのハリセンと変わりませんから心配しないで下さい」

優希は死神の方へハリセンを向け、はつきりと言いつつ放った。

「それでは、貴方の言っていることがどれだけ甘いのか、私が確かめさせてあげます」

番外編その二・天才(ばけもの) v s 守護者(しにがみ) (前書き)

今回は優希の秘密が明らかになります。

こつこつキャラは受け入れていただけるのやら……

番外編その二・天才（ばけもの）v.s・守護者（しにがみ）

（The other side）

優希と死神、お互いの距離は約3メートル。

優希はその距離を一気に詰め、ハリセンを死神に振りかぶる。しかし死神は鎌の柄でその一撃を防ぐ。

スパアアアン！ という、心地よい音がその場に響き渡った。

その後も優希はハリセンによる攻撃を繰り返して、死神はそれらを防いでいく。

「く……………っ！」

「そういえばさっき、親しい人には攻撃しない、とおっしゃって

ましたね？」

「ああ。だが何故今聞くんだ？」

死神は金色の刃が優希に当たるように鎌を振るう。

すると優希はさっきの死神と全く同じ動きで死神の後ろに回り込んだ。

「な……………っ！ これは……………シャドーランサー……………？」

そして、死神が動き出す前にハリセンの先を死神の背中に当てる。

「死神さん。この状況下、私が貴方と親しい間柄の人間で、このハリセンが痺れ薬の塗ってある刃物だったとします。そうすると私は痺れ薬で貴方が倒れている間に中川さんたちを傷つけたりさらったりするかもしれないね」

優希はさらりと恐ろしいことを呟いた。

「それでも貴方は親しいーいや、親しかった人には刃を向けないつもりですか？ 刃を向けなければどうにもできない程の力量を持つ相手だった場合、貴方はどうやって止める気ですか？ それとももしかして、『友達だったから闘えなかった』とでも言うつもりで

すか？」

死神は、その問いに答えることができなかった。

「この技……シャドーランサーでしたっけ？ 人間の錯覚を利用した技のようですね。この技を習得するのに貴方が費やした時間や努力は並大抵のものではなかったのでしょうか」

「お前一体……どうやってこの技を……？」

「先ほどの貴方の闘いをこの目で見させていただきました。私にはそれだけで十分です」

「な……………っ！」

「この際だから、この眼に名前をつけることにしましょうか。そうですね……『盗賊之眼』スキルハントなんてどうでしょうか？」

武術や体術等であれば一度見れば相手の技を見切り、二度見れば完璧に使いこなすことができる。これが優希の能力である。

だから優希にとっては、相手の技を見ることそのものが修行やトレーニングだと言っても過言ではない。

ちなみに、某忍者一族の瞳術とは全く関係がないので悪しからず。

どちらも特異体質ではあるが、あちらは一族であれば子孫にも受け継がれる。

しかし優希の魔眼は優希しか持っていないのだ。

「だからでしょうか。何かに努力できるということが、何事にも代え難いほど素晴らしいと思うようになりました」

「それは……俺も同感だ」

「ところでシャドーランサーについてですが、使ってみてわかりました。どうやらこの技を貴方が使うと決定的な弱点が生じるようです」

「決定的な……弱点？」

「ええ。どうやらその様子だと、自分でも気づいてないみたいです。ね。ただし、弱点に気づいた敵はいるかもしれませんが」

「何……？」

「だってそうでしょう？ さっきのシャドーランサーを見た限り、貴方が弱点を克服したとは思えませんから」

「もしかして、攻撃をする瞬間に気配を消せなくなることか？」

「まあ、それもそうなんですけど……他にもあるんですよ」

「だったら何なんだ？ その弱点っていうのは？」

「知りたかったら、」

優希は死神から距離を取り、再びハリセンを構える。

「その鎌で聞いてみたらどうですか？ 私から一本取れたら教えましょう」

「……わかった」

「それじゃ、亮。合図をお願いできる？」

「へいへい」

亮が二人とは少し離れた位置に立ち、上から見れば二等辺三角形の形になる。

「それじゃ、いくぜ。いざ、尋常コース」

優希と死神は、それぞれ武器を構える。

「――始め!!」

優希と死神が同時に動き出した。

死神が振るう鎌を、優希がシャドーランサーで避ける。

それを感じ取った死神は、攻撃を受けないように周りを見渡す。

「いない……………?」

しかしどこにも優希の姿はない。

「シャドーランサー応用技その1『オシギソウ含羞草』」

「!?!?!?!」

死神に向かって唐竹割りを繰り返した優希の声が、真上から聞こえてきた。

シャドーランサーで死神の死角に回り込んだ後、上にジャンプしたのだ。

「く……っ。それならっ！」

死神はカウンターを決めようとしたが、それすらも見切った優希の唐竹割りが決まった。

「まだ終わりじゃありませんよ」

少し離れた場所に着地して、そのまま死神に斬りかかる。

「はあっ！」

死神がそれに合わせるように鎌を振るっ。

が、

刃は空を斬り、その隙をついて今いた位置よりも後ろから突進してきた優希がハリセンを振りかぶる。

シャドーランサーで残像に相手の注意を向けている間、自分は数歩

下がっていたのだ。

「シャドーランサー応用技その2 『クチナシ山梔子』」

今度はなんとか防御に成功した。

「こんな短時間にシャドーランサーをここまで使いこなすとは……
何てヤツだ」

「あら、お褒めの言葉をありがとうございます」

「だが、これならどうだ！」

死神はシャドーランサーを発動しながら幾つもの斬撃を放つ『デス
サイズ』を使った。

そして、

「シャドーランサー応用技その3 『ホウセンカ鳳仙花』」

優希の方もシャドーランサーを発動させ、連続して刺突を繰り返した。

ハリセンと鎌が激突して、パパパパンッ！！　という何かが破裂するような音が響き、両者が押し戻される。

そして優希が体勢を立て直す前に死神がシャドーランサーを使い、優希の左に回り込んで鎌を振るう。

しかし優希はまるで斬撃の来る場所がわかるといった感じに一步左にステップをしてハリセンを小手代わりにして片手で鎌の柄を受け止め、もう片手で柄を掴む。

「なんだと!？」

「シャドーランサーへの返し技『蓮華^{レンゲ}』」

そして斬撃の勢いを利用して死神を鎌ごと投げ飛ばした。

「……………っ！　まだだ!」

死神は受け身を取って着地し、再び優希のもとへ向かって鎌を振るう。

けれども優希は死神の攻撃を全ていなし、当たることはなかった。

「ハア……ハア……」

戦闘もだいが長引き、死神の体力がそろそろ限界に近くなってきた。

おそらく次の一撃で決められなければ、優希から一本取ることは無理だろう。死神はそんな思いを抱いた。

「行くぞ……」

「ええ」

優希はそんな死神の思いを、肌で感じ取った。

死神は『デスサイズ』を、優希は『鳳仙花』を連続攻撃ではなく一撃技として放つために精神を集中させる。

そして、二人は同時に動き出し、

「『デスサイズ』！！」

「『鳳仙花』」

二つの技と技がー激突した。

「……………ん……………」

「あら、目が覚めましたか？」

死神が目を覚ますとベンチに寝かされており、額には濡れたタオルが乗せられていた。そして、右隣には優希が座っている。

「俺は……………一体……………？ ……痛っ！」

「動かないで下さい。どうやら全身全霊で撃ち込むのに意識を集中する余り、技が発動した後の姿勢制御が疎かになって脳震盪を起こしたようですから」

「にしては……………体力が少し回復しているようだが」

「ええ。亮が回復術で治療をしてくれましたから」

その亮は隣のベンチで突っ伏して熟睡してしまっていた。

「結局、一本取れなかったな……」

死神は落ち込んだ雰囲気を出している。

「あら？ 何をおっしゃっているんです。ちゃんと一本取ったじゃないですか？」

「……は？」

死神は明らかに戸惑っている。

見たところ優希に傷はない。なのに一本取ったとはどういうことだ、といった顔だった。

「ほら。これ」

「……紐？」

優希の手にあるのは、結び目とは別の場所で切れている一本の紐。

それは優希がポニーテールにするために使っていた髪紐であり、現

に今の優希はポニーテールではなくなっている。

「どんな形であれ、一本は一本です。約束は守りましょう」

優希は死神に呟く。

「約束っていうと、シャドーランサーの弱点だったか？」

「ええ。私が見つけたシャドーランサーの弱点はーそろそろ出てきたらどうです？」

優希は草陰に向かって呟く。

そこから出てきたのは、少し背が高い男だった。

「……何故気づいた？ 気配は完璧に消したはずなんだがな」

「逆にこちらが聞きたいぐらいですよ。どうして気配を消せるなどと言えるのですか？ シュレーディングの猫じゃあるまいし、その場にいるのにいないなんて矛盾しているじゃありません……か……」

優希は立ち上がったが、さっきの戦闘の影響か、一瞬ふらついてし

まっ。

「確かに……そうかもな！」

ドスッ！

その隙をついて男が飛ばしたナイフが、音を立てて優希の脇腹に突き刺さった。

「く……っ！ 貴様……！」

鎌を持つとする死神を優希が腕を横に伸ばして制止する。

「そんなに周りを警戒しなくても大丈夫だ。こっちは俺一人だけだ。とは言え、今のお前には俺一人でも全く問題ないんだが」

「……毒……ですか……？」

「ああ。だが安心しろ。死ぬような毒じゃない」

「それで……貴方の狙いは……死神さんに関わる……人です……ね……？」

「ああ。正確に言えば、悟っている女の子なんだがな」

「お前まさか、ＹＴの仲間か!？」

「さあ。それはどうだろうか?」

「なる……ほど……」

優希はベンチで手を支えて何とか立っており、その手も小刻みに震えている。

「しかしお前も大したもんだよ。もう指一本動かせなくなってもおかしくないくらいの毒なんだが。念のためもう一本くらわせたほうがいいようだな」

そう言いながら、男は再びナイフを構える。

「例えお前がどんな天才であろうと、今のお前に何を見られても構わない。これ以上抵抗しないのなら、俺も男として、女のお前をこれ以上傷つけるのは忍びなく思うからよ」

「そう……ですか!」

優希は男の懐へ潜り込もうとするが、それよりも早く男の放ったナイフが腹部に直撃し、後ろに吹き飛ばされる。

「はあ……はあ……」

優希の口から荒い息が漏れる。

「さて、嬢ちゃんはもう動けないし、死神もダメージを追っているし、回復術を使った少年も力を使い果たしたようだし、今の内に悟をーぐはっ！ー！」

男の右肩には、自分が優希に投げたはずのナイフが刺さっている。

「な……っ！ どうして……？」

「シャドーランサー、それと貴方が投げたナイフを使わせていただきました」

「ど……毒は……？」

男の質問に、優希は笑顔を見せて答える。

「ああ。あれは演技です」

「演……技……？」

「死にもしない程度の毒なんて、私にはなんともありません。まあ、
こう見えても昔はすごく病弱だったんですけどね」

優希の中には様々な病を持つ菌が――常人とは比べものにならない
くらい多くの菌や危険な病を体内に宿している。そして酸性の液体
にアルカリ性の液体を混ぜることで中性になるように、毒が薬とし
ても作用するように、毒が侵入しても様々な菌ぬより打ち消され、
効果を発揮しないのだ。

「お前……本当に人間なのか……？」

男は怯えと恐怖に満ちた目で優希を見る。

「その目……。やっぱり同じ……」

優希の脳裏に映るのは、亮と出会う前――弥生小学校に転校して
くる前の、遠い昔の記憶。

他人と比べて異端である。

そんな自分に向けられていたのは恐怖、拒絶、そして敵意の眼差し。

ある者には化物と言われ、またある者には反則者と言われた眼。

クラスメイトはもとより、診察を担当した医者さえも驚かせた、まるで呪いの様な体。

誰からも受け入れられず、歩み寄るうにも相手が近寄らず。そんな日常。

「ではそろそろ終わらせていただきます」

優希はハリセンを持って男に突っ込む。

「『鳳仙花』」

パパパパパンツ！！

「?????」

そこに女が乱入し、優希の『鳳仙花』を片腕で防いだ。

姫路に似た体格、ゴスロリの格好、長い癖っ毛が特徴的だ。

「貴女が、YTさんですか？」

「ええ。しかし恐ろしいまでに勘のいい人ですね」

「それで、何のご用でしょうか？もしかして貴女も闘うのですか？」

「いえ。今日の所は退散させてもらいます。それでは」

YTは男を抱え、夜空に消えていった。

「待て！ YT！」

「ダメです。今の状態で追っても、無事で済む保証はありません」

その後を追おうとした死神を優希は止める。

「さて、お話ししましょう。私が見つけた弱点というのを」

優希は止血の応急処置をしながらも言葉を続ける。

「それは、その鎌です」

「鎌……?」

「鎌は一見リーチが長く有利に思われますが、逆に言えば相手と一定の距離を取らないと攻撃ができません」

鎌は剣と違い、間合いをずらされると攻撃が当たらなくなる。

「だから、相手にとっては鎌の刃で貴方の位置が手に取るようにわかってしまいます」

「それはそうだが……」

「それと、」

止血のための包帯を縛り、再び言葉を続ける。

「鎌は剣とは違い、刺突を繰り返しても攻撃はできません。ですから、どうしても攻撃するために鎌を振らなければなりません。そこに隙が生じてしまい、カウンターの餌食になってしまいます」

「参考にさせてもらおう」

「そうですね。それは良かったです」

優希は立ち上がってスカートのシワを直し、亮をユサユサと揺らし

た。

「起〜き〜て〜」

「……ん？ 何だ？ もう帰るのか？」

「うん。そんな感じ」

「じゃあな。死神」

「ああ。また会おう」

「最後に、死神さん」

優希は優しく微笑む。

「全ては貴方の心次第です。守りたい人のため、本当に為すべきこととは何か。それを、自分の心で見極めて下さい」

そして、そのまま亮と優希の姿は消えた。

「元の世界にて」

「おかわり！」

「お前これで何杯目だよ？」

「ちよつと血が足りなくて……」

「というか何で怪我してるんだ？」

「そんなことよりおかわりを！ こつ、胃にガツーンとくる食べ物を！」

「ちよつとは落ち着いて食べよ……」

「みゃーっつー！」

「ダメだこりゃ……。聞いてねえや」

番外編その二・天才（ばけもの）V・S・守護者（しにがみ）（後書き）

ウツソ・エヴィンさん、キャラを使わせていただき、ありがとうございます。

本編とは食い違う箇所があったりキャラが崩れていたりするかもしれませんが、その辺はご容赦下さい

第六十問・いざ風と共に散りゆかん(前書き)

今回から原作復帰です。

第六十問・いざ風と共に散りゆかん

次の文章を読み、問に答えなさい。

19世紀の終わり、ドイツの宰相 は世界最初の社会保険制度を創設し、貧困者たちの救済を図った。また、この救済と同時に、社会主義者鎮圧法を制定した為に、この政策は『（ ）とムチの政策』と呼ばれた。

問1 内の当時のドイツ宰相の名前を答えなさい

問2 （ ）に当てはまる単語を答えなさい

姫路瑞希の答え

『問1 ビスマルク

問2 (アメ)とムチの政策』

教師のコメント

正解です。ビスマルクは政策として、社会保険制度をご褒美ーつまり アメ として民衆に与え、一方で社会主義者鎮圧法というムチ で人を叩いたというわけです。甘やかすだけでなく、叩くだけでもない。政治のみならず、様々な場面で用いられる手法ですね。

土屋康太の答え

『問1 エリザベス』

教師のコメント

ムチ 女王様 エリザベス女王

最近君の考えが理解できるようになって、先生はとても複雑な気分です。

吉井明久の答え

『問2 (ムチ)とムチの政策』

教師のコメント

叩きすぎです。

神谷亮の答え

『問2 (ロウソク)とムチの政策』

教師のコメント

やりすぎです。

「ねえ、亮

「ん？」

始業式の翌日の朝。

登校していると、明久に声をかけられた。

「どした？」

「これなんだけど、亮はどう思う？」

明久が見せてきたのは雑誌の記事の切り取りで、『誰にでも効果テキメン！ポータブルマツサージ機』というものだった。

「どつって言われてもな」

「ブラフか何かじゃないのか？」

いつの間にか横にいた雄二が口をはさむ。つーか霧島はどうしたんだ？

「よくあるだろ？ 『私たちは効果がありましたよ。あなたは知りませんが』 ってヤツ」

「確かに、老若男女で患部の位置とか症状の違いとか色々あるからな。一まとめにはできないだろ」

「やっぱりそうなのかな……?」

「というか、何でいきなりそんなことを聞くんだ？ 肩でも凝ったか？」

「いや、姉さんにプレゼントしようと思ってさ」

なるほど。玲さんは仕事をしているらしいし、肩を凝りやすいボディーだし。

……たまには俺も親孝行ならぬ姉孝行でもしてみるか。

「だったら明久。それを買うよりマッサージをしてあげた方がいいんじゃないか？」

「マッサージか……」

「雄二も親にやってあげるよ。な？」

「確かに、たまには良いかもしれんな。それにそのマッサージ機を買ってもあのおふくろは確実に誤った使い方をするだろうし……」

最後のほうはブツブツとしか言っていなかったのによく聞こえなかったが、どうやら雄二も苦労しているみたいだ。

「でも、マッサージなんてやったことないし、どうしたら気持ちよ

く感じてくれるかわからないや」

「確かにな。だったら練習してみたらどうだ？」

「でも、肩凝りに悩んでいる人じゃないと意味ないんじゃないか？」

肩凝りに悩んでいる人なんて、そうそういないんじゃないか――

「――いる」

「どうしたの？ 亮」

「俺たちの凄く身近にいるじゃないか。いつも肩凝りに悩まされていて、かつ玲さんと似た体型の人物が」

ズバンツ！ と教室のドアを開けると、目的の人物は自分の席である座布団に座っていた。

しかも他の人物は誰もいない。

「明久君に坂本君に神谷君。おはようございます」

俺たちは目的の人物――姫路と軽く挨拶を交わし、一世一代の交渉を始める。

「実は姫路。頼みごとがある」

「頼みごと、ですか？」

「ああ……」

俺は息を吸い、はっきりと告げる。

「お願いだから俺たち三人に揉ませてくれ姫路!!」

その言葉を放った瞬間、雄二は霧島にアイアンクローをくらい、俺

と明久はそれぞれ優子と島田に一瞬で関節技を極められた。

どこが間違っていた！ それに一体どっから現れたんだ！？

「なんかすごい音がしたけど一体どうしたのーって、ええ！？
何でFクラスの教室がルール無用の学園バトル空間と化してるの！
？」

騒音を聞きつけてきたであろう優希は、教室内で繰り広げられている惨劇に驚愕していた。

「『『平和のためよ』『』』」

「何で優子ちゃんと代表と美波ちゃんが平和維持組織みたいな発言をしてるの！？」

「ゆ、優希……。別に誰かが悪かったってわけじゃ……………」

「だったら何でこんなことに！？」

優子による関節技の影響で腕が震えるが、とりあえず顔から下を指差しながら優希に説明をする。

「だって、姫路だって絶対気持ちよくなるはずなのに……………優子たち

がちつとも揉ませてくれないんだ！」

その一言で姫路と優希の顔は真っ赤になり、俺たちは何故かそれぞれ追撃を受けることになってしまった。

そして、そのしばらく後。

「鉄人の野郎……。絶対人間じゃねえ……………」

雄二が一本背負いで叩き付けられた腰をさすりながら苦々しく呟く。

ちなみにどうしてこうなったかと言うと、朝のホームルームで没収された工口本を鉄人から取り戻すべく鉄人と闘ったのだが、見事に負けてしまったからだ。

「だよね……。どうして四十八人の男子高校生を相手にして、たった一人で戦えるんだろう……………」

「体力もそうだが、筋力もはんぱねえな……」

明久は召喚獣を喚び出す間もなく肩固めで悶絶させられ、俺は真つ向から鬪いを挑んだが、見事にカウンターをくらった。

「……………あの動き、人間兵器のレベル」

隣ではムツツリーニが肩を落としている。ちなみにムツツリーニはスタンガンを構えて特攻するも、一瞬で武器を奪われて自分がその電撃で沈んだ。

というか、よりによってムツツリ商会主催の『収穫報告祭（夏）』のタイミングで持ち物検査を仕掛けてくるとは。侮り難し、教師陣。

「確かに凄い不意打ちだったわね。ウチも細々としたものをたくさん没収されちゃったわ。DVDとか、雑誌とか、抱き枕とか……」

「そうですね……。私も色々と没収されちゃいました……。CDとか、小説とか、抱き枕とか……」

島田と姫路も落ち込みは隠せないようだ。

「して、明久は写真集以外は何を没収されたのじゃ？」

「えーっと、本にCDにゲームに、（姫路さんや美波や秀吉の水着）写真とか……。雄二はどうだった？ 本その他には何か没収された？」

「俺はMP3プレーヤーだ。一昨日出た新譜を入れておいたのに、それも全部ペアだ。くそっ」

忌々しげに雄二が吐き捨てる。

「ってことは、亮とムツツリーニはやっぱりスケッチブックやカメラ？」

「ああ」

「……………」（コクリ）

美術部だつて言い張れば没収は免れることは——出来ないな。

「……………データの入ったメモリーも没収されたから、再販も当分できない」

「……………えええっ！？」

「俺もデータが入ったUSBメモリーを没収されたから、再販は当分無理だ」

「「「そ、そんな……っ！」「」」

俺の場合はスケッチブックにデッサンをした後、それをスキャナーでパソコンに取り込んで処理を施すという手順であるため、どうしてもUSBにバックアップを取る必要があるのだ。

「さて。どうする雄二に亮？ ……やる？」

「そうだな……。こんな横暴を許すわけにはいかないぜ……」

「よし、やるぞ明久！ 亮！ 教師どもー特に鉄人が出払った昼休みに職員室へと忍び込み、俺たちの夢と希望を取り戻すんだ！」

「「おっっ！」「」

「……………三人だけを、戦わせはしない」

没収品を取り戻すため、雄二やムッツリーニも力強く立ち上がる。

『待ちな、お前ら！』

『俺たちを忘れてもらっちゃ困るぜ！』

『へへっ……。俺たち、仲間だろ？』

「お前ら……！」

いや、雄二やムツリーニだけじゃない。いつの間にかFクラスの男子全員が立ち上がった。いた。

俺たちは泣き寝入りなんてしない。そこに可能性がある限り、力を合わせて成し遂げてやる！

「あ、あのおつ。皆さん落ち着いて下さいっ」

そんな俺たちに制止の声を入れたのは、姫路だった。

「明久君、坂本君、神谷君、それに皆さん……。やっぱりそういうのは、良くないと思うんです」

「そういうのって……職員室に忍び込むって話か？」

「……はい」

「まあ、元々ウチらが校則違反をやっちゃってるのが原因なわけだし。その罰に納得がいかないって、また問題を起こすのもちよつとね」

島田も姫路の意見に賛成のようだ。

「（レンはどうなんだ？）」

『（私も瑞希と美波に賛成ね。あんまり気乗りしないわ。それに、なんだか狡い気もするし）』

更にレンも同意見。ここまで言われたら、俺も気が進まなくなってきた。

「雄二、どうする。こう言われたら忍び込むのはちょっと……」

「あ………。どうするもなにも、姫路や島田だけでなく、レンも反対なんだろ？」

「ああ」

「だったら流石に考え直すしかないだろう」

雄二だけでなく、クラスの皆も同意見のようで、決まりの悪そうな表情を浮かべている。

「明久君、坂本君、神谷君、それに皆さん……。わかってくれたんですね？」

「ああ。三人の言いたいことはよくわかった。つまりはこういうこ

とだろっ?」

雄二ははっきりと告げる。

「ーこそそ忍び込んだりなんかせず、鉄人を殺つて堂々と奪い取れ、と」

「全然違いますからね!？」

やっぱり男なら堂々と正面からやらないとな!

というわけで、俺たちは昼休みの職員室急襲を決行することになった。

というわけで昼休み。

「」「」
「うおおおっ!」「」「」

職員室に堂々と特攻した俺たちを待っていたのは、

『『『試獣召喚っ』』』』

召喚獣を用意して待機していた教師陣だった。

「どうするんだ雄二！ 想定外だぞ！？」

「ちっ。こうなったら亮。俺たちは召喚獣をなんとかするから、お前は鉄人を頼む！」

「了解！！」

机を足場にして、最短距離で鉄人のもとに向かう。

「勝負だ鉄人！！」

「ふん。こりない奴だ」

今度こそ、絶対に勝つ！

「食らえ！！」

一度天井を足場として経由し、そこからかかと落としを決めるべく真下にいる鉄人に突っ込んでいく。

「いくぜ！ 虚刀流七の奥義っばいアレ『落花狼ぜー』」

しかし、俺のかかと落としは鉄人に決まることはなかった。何故なら――

「亮。そんな技を使っていいと思ってるのかしら？ 主に著作権的な意味で」

「ゆ、優子……？」

なんと優子が片腕で俺の蹴りを受け止めたのだ。

何でだ！？ 何で優子が職員室にいるんだ！？

「今朝の一件といい、今といい、全然懲りてないみたいね？」

「いや、それとこれとは全く関係がないのであって、」

「西村先生」

「何だ木下？」

「このバカをちょっとお借りします」

「ああ。頼んだぞ」

「頼まないで！ お願いだから頼まないでくれ！」

しかしそんな俺の意見は聞き入れられず、俺はずるずると優子に引きずられていった。

「あの、優子さん？ 一体このわたくしめをどうするおつもりで？ というか放してくれ！ 俺には負けられない戦いがあるんだ！」

「……………亮」

「ん？」

「アンタはよく頑張ったわ。だから、もう……………休みなさい……………」

「そんなバトル漫画よろしくなセリフを言ってないで、放してくれえええつー！！」

他人から見れば違和感がないかもしれないが、こっちとしては違和感しか見当たらない。

こうなってしまったら、今回の襲撃は失敗に終わったも同然だ。

だが見てろよ鉄人。それに他の教師たち。

もうすぐ行われる『生徒・教師交流野球』で必ず聖典の仇を討ってやる！

第六十一問・交渉の上手さと国語の出来は関係ないよな!? b Y 亮

問 次の野球用語について説明しなさい。

『タッチアップ』

坂本雄二の答え

『フライがあがった時に走者がその打球の行方を見守ること。捕球後は進塁することができる』

教師のコメント

その通りです。

姫路瑞希の答え

『痴漢をする』

教師のコメント

野球のタッチアップを知らないのに英語の touch up のそんな訳まで知っているとは、流石に先生も驚きました。英語を訳す上では正解ですが、野球用語としては間違いです。

土屋康太の答え

『フライがあがった時に走者が打球とチアリーダーのスコートを確認すること。捕球後は痴漢しに行くことができる』

教師のコメント

落ち着いて下さい。正しい知識といやらしい願望が混ざっています。

桂優希の答え

『フライがこんがり揚がった時にその様子を見守ること。油補給後は揚げ物にタッチすることができ』

教師のコメント

桂さんも落ち着いて下さい。文章がおかしなことになっています。

連絡事項

文月学園体育祭 親睦競技 生徒・教師交流野球

上記の種目に対し本年は実施要項を変更し、競技に召喚獣を用いるものとする。

「ババアー！っ！」

翌日の朝。俺は雄二と明久に連れられて学園長室にやってきた。

「なんだ！クソジャリども。朝っぱらからうるさいねえ」

「そつだぜお前ら。せめて朝飯ぐらい食わせてくれ。それに徹夜明けなんだから、あと六時間くらい学校で寝ようと思ってたのに」

「……神谷はその二人に感謝した方がいいさね」

今にも掴みかからんばかりの勢いでいる俺たちに対し、学園長は顔をしかめるだけだった。

ちなみにレンはまだ、すやすやタイムの真っ最中だ。

「どうして今年から急に交流野球で召喚獣を使うなんて言い出すんですか!? これだと先生たちを痛めつけて復讐できないじゃないですか!」

「そうだよ! せっかくハリネズミ型棘射出式硬式野球ボール:通称『ロール』を徹夜で作ったっていうのに、全部ムダになっちゃったじゃないか!」

「……アンタらが今言ったセリフが、そのまま召喚獣に変更した理由の説明になると思うんだけどねえ……。それと神谷、そういう著作権に引っかけりそうなネーミングは止めた方がいいさね」

ワオ。肉食系風紀委員なんて僕知らないよ。

「この野球大会の為に、僕らがどれだけ故意に見えないラフプレーの練習をしてきたのか、僕らがどれだけ努力を重ねてきたのか、学園長は何も知らないから……だからそんな冷たいことが言えるんですよ!」

「その努力は別の方向に向けなクソガキ」

そのセリフは教育者としてあんまりだろ。

「けっ。この変更、どうせまた例のごとく召喚システムのPRが目的だろうが……その肝心のシステムの制御はできるようになったの

か？」

雄二に言われ、学園長が不機嫌そうに眉を寄せる。研究者として、そして技術者として技術についてバカにされるのは看過できないってことか。

「肝試しの時や夏休み中はともかく、今はもう完全に制御してあるさね。そうでなければ、召喚獣に野球をやらせるなんて不可能だろう？」

「つまりうまく制御できるようになったから、皆に見せびらかしたかったってことかな」

「――」

あゝあ。学園長の顔が固まった。

「明久。もうちょい気を遣え」

「そうだぞ。凶星を突かれて学園長がヒヤルコ食らったみたいになっただじゃんか」

「ち、違つさねっ！これはあくまでも一つの教育機関の長として、生徒たちと教師の間に心温まる交流をだね」

「あー、そうだなー。流石だなー」

「すごいですねー。尊敬しちゃいますねー」

「やっぱり俺たちとは格が違いますねー」

「本当に腹立たしいガキどもさね！ それに、神谷のセリフは本来アタシが言うものだよ。並行世界転移装置『メタ・ドライブ』の開発だけじゃなく二次元の世界へ実際に突入して五感で体験できる『スピリットダイバー』の立案、更に夢の低コスト人工魔力『メガポジウム』の生成成功。これらのことについては純粋な賛辞を送るさね」

「一体どこから聞いたんだ？ 俺はそんな噂を流した覚えはないんだが」

まあ全部本当のことだけど。というかまさかこの人から誉められるとは思わなかったな。

「だが、そういうことなら野球のルール変更を白紙に戻すことも可能だろ」

「なんせ、変更理由がババアの自慢っただけだからな」

「そうだよな。ルールを普通の野球に戻して下さい学園長」

「却下だね」

「」「」「どうしてー！？」

「そこまで人をバカにしておきながらどうして断れないと思えるんだい!？」

まったく。少しは人の意見を聞いて欲しいものだ。

「それに、暴言がなくても今更また変更は無理だね。この通り、プログラムも既に発注しちまったからね」

学園長が机の上にある折り置んだ厚紙のようなものを投げてよこす。すると雄二が学園長に顔を向けて問いかけた。

「確かに今からまた変更つてわけにはいかないだろうが……だからと言って、これはあまりに教師チームと生徒チームに差がありすぎないか？」

「確かに、召喚獣の強さに違いがありすぎだ」

「そうですね！　こんなに差があったら野球なんてやる気がなくなっちゃいます！　やっぱりルールを元に戻して」

「あー、待て明久。それはできないって、さっき俺も言っただろうが」

尚も言い募る明久を雄二が止める。はて？　ルールを元に戻さない

んなら、一体どうするつもりなんだ？

「けど雄二。これじゃあ」

「ああ。確かに明久の言う通り、やる気が出てこないのも事実だ。だからーどうだろう学園長。俺たちがやる気を出せるように、何か賞品を用意して貰えないだろうか」

そこで雄二が学園長に妙な提案を持ち出した。賞品？

「これはまた、くだらない提案をしてきたもんだね。そんなもの、急に言われても用意ができるわけないだろう？」

「いや。用意は必要ないし、費用もかからない」

用意も費用もいらぬ賞品って、まさか……

「俺たちが教師チームに勝てたら、持ち物検査で没収された物を返してもらおう。それが賞品ということはどうだ？」

「……なるほどね。名より実を取ろうってわけかい」

「復讐ができるのならそうしてもいいが、ルール変更が決定事項となったのなら駄々をこねても仕方がないからな。それなら実益を得られる可能性に賭けた方がいい」

そう言っただけで雄二は小さく笑みを浮かべた。

『（うん……あれ？ 何で学園長室にいるの？）』

「（やっと起きたか。実は、かくかくしかじかな感じなんだ）」

『（なるほど。召喚獣野球大会のルール変更をする代わりに、教師チームに勝ったら賞品として没収品を返却しろ、ね。雄二らしい合理的な判断じゃない）』

「（どういうことだ？）」

『（何もせず一方的に奪われるのは誰だって嫌でしょ？ だから、没収品を取り戻せる』というチャンスを提供することでその後結果として取り戻せなくても、その怒りの矛先を 教師陣 から 試合に負けた自分たち に向けさせようってワケ）』

「（でもそれって、あくまでも 勝てたら の話だろ？ その可能性がなかったら意味がないじゃんか）」

『（ええ。だからこそ雄二は妥協案として持ち出したわけだし。それに学園長もそれがわかってるから、雄二の条件に乗ったみたいだしね）』

いつの間にか、学園長と雄二は話し合いをしながら何かの文章を書いている。あれはおそらく召喚獣野球大会のルールだろう。

そして決まったルールがこんな感じ。

- ・各イニングでは、必ず授業科目の中から一つを用いて勝負すること
- ・各試合に於いて、同種の科目を別イニングで再び用いることは認めない
- ・立ち会いは試合に参加していない教師が務めること。また、試合中に立ち会いの教師が移動してはならない
- ・召喚フィールド（召喚野球仕様）の有効圏外へ打球が飛んだ場合、フェアであればホームラン、その他の場合はファールとする
- ・試合は5回の攻防までとし、同点である場合は7回まで延長。それでも決着がつかない場合は引き分けとする
- ・事前に出場メンバー表を提出すること。ここに記載されていない者への試合の介入は一切認めない。尚、これにはベンチ入りの人員及び立ち会いの教師も含む。
- ・人数構成は基本ポジション各1名とベンチ入り2名の計11名とする
- ・進行に於いては体育祭本種目を優先する。競技の時間が重なりそのような場合は事前にメンバー登録の変更を行っておくこと
- ・その他の基本ルールは公式野球規則に準ずる

「それで雄二。今度はどんな作戦を考えたのさ」

「ん？ 何の話だ？」

交渉を終えてFクラスに戻る途中、明久が雄二にそんなことを聞いていた。

「とぼけないでよ。プログラムを見ながらずっと考えごとをしていたみたいだし、それにあのルール決め。絶対に何かの意図があったことですよ」

「まあお前のことだし、勝てる見込みのない勝負をするつもりはないんだろ？」

「お前らの言う通り、ルールを利用するつもりだ」

「けど、雄二がそこまで頑張るってことは、没収されたのはMP3プレーヤーだけじゃなさそうだね。他には何を？」

「特級品の写真集を、四冊ほど持っていかれた」

「四冊って……。よくお前の環境で隠し持っていられたな」

霧島の強制捜査と、あの母親の天然の勘から逃れて、よくもまあ四冊も……。

「本棚の下や天井裏、完全防水にして熱帯魚の水槽の底に沈めたり、亮に貰った鍵付きの箱に入れたりと、色々工夫したからな」

「もうそれ見たい時に取り出せるレベルじゃないよね。それに亮もまた何か作ったの？」

「まあ、そんなところだ」

ちなみにこの鍵だが、ピッキング防止のため普通のとは違って磁力を使った小判型の鍵となっている。

「そこまでしなけりや守りきれねえし、そこまですて守る価値のある逸品だったんだ」

「そつか。そこまでの物なら、是非見てみたかったなあ」

「俺も見てみたかったな」

「……私も」

隣を歩く霧島と頷き合う。本当に一体どんなものだったんだろう。

「じゃ、俺たちはそういついごとで」

「あとは雄二と霧島さんの二人で仲良く」

「待てお前ら。この状況で俺を置いて逃げるな」

雄二に力強く腕を掴まれた。

まあ、応急処置ぐらいはしておいてやるか。

「……雄二を甘く見ていた。今後は水槽や植木鉢、怪しい箱、雄二が入浴中の浴槽の中まで詳しく探す」

「おい待て。最後の一つは確実に目的が捜査じゃないだろ」

「……私には、雄二の成長を確認する義務があるから」

「……ん？ 成長を確認だって？」

「なあ霧島」

「……なに？」

「もしかして霧島って……雄二と一緒に風呂に入ったことがあったり」

「……中学に入るまでなら」

雛も消えてしまい、俺は床に倒れ伏す。

やはり、徹夜明けと朝食抜きが原因か……っ！

「皆……。後は頼んだぞ」

『『『了解っ！』』』

「ちょ、ちょっと待て！？ お前らいつの間に現れたんだ！？ さつきまで気配すらなかっただろ！？ 風呂といっても別に何かあったわけでもぎゃああああっ！」

「……………あ……………雄二……………」

異端者である雄二は、異端審問会の皆が連行してくれた。

とりあえず自分の状況を確認する。ふむ。動けないことはないが、それでも起き上がれるまでにはいかない。

やれやれね。これでやっとぐっすり眠れー

「……………神谷」

「ー」と思ったら、突然霧島に肩を叩かれた。

「どうした？」

とりあえず顔を霧島の方に向ける。何か用事でもあるんだろうか？

「……さっき話してた『野球で勝てば没収品返却』って話……詳しく教えて欲しい」

「ああ、そのことか？ 実はなー」

第六十二問その一・自己紹介はきちんとするべし

次の問いに答えなさい。

古代ギリシヤ最大の喜劇作家を答えなさい。

姫路瑞希の答え

アリストファネス

教師のコメント

正解です。彼は風刺作家でもあり、ソクラテスへの批判を表した代表作『雲』によってソクラテスが処刑されたと言われています。

吉井明久の答え

アリストテレス

教師のコメント

惜しいですが、アリストテレスは哲学者なので不正解です。

神谷亮の答え

不思議の国のアリス

教師のコメント

それは童話です。

『ー時より、第二グラウンドにて召喚野球を行います。参加する生徒はー』』

そんなこんなで体育祭の当日。

校舎に取り付けられたスピーカーからアナウンスが響き渡る。

退屈な開会式は耳栓をつけてしのぎ、俺たちは野球大会の行われる会場へと向かっていた。

「雄二。最初の対戦相手はどこだっけ？」

「確か一回戦は同学年の隣のクラスが相手という話だったから、Eクラスのはずだ。ほら、コイツが対戦表だ」

雄二が渡してきたA4サイズの紙を覗き込む。そこには檜状の対戦表が書かれていた。

Eクラスとは隣のクラスだけど、実はほとんど交流がない。あえて

言うなら、覗き騒ぎの時だけだろう。

「Eクラスって野球で勝負しても大丈夫？ 何も危険はない？」

「Eクラスは代表が代表だから、大丈夫だろ」

「さっきちょっと代表同士で挨拶した限りだと、応対も可愛いもんだったしな」

「可愛いって、どんな感じの子だったの？」

「どんな感じって言うと、そうだな……『押忍！ 自分はEクラス代表の中林であります！ 本日は絶対に勝たせて頂くであります！』って感じで」

「ソイツきつと全身筋肉質だよね！？ 絶対可愛くないよね！？」

なかなか個性的な挨拶じゃないか。

「冗談だ。本当は『今日はヨロシクねっ。絶対に負けないんだからっ』って感じで喋る代表だった」

「そっかー。よぉーし、こっちだって負けるもんかっ」

「ただし、ラグビー部所属」

「やっぱりソイツ全身筋肉質だろ！」

「あ〜。Eクラスの代表なら、俺も色々噂を聞いたことがあるな」
「え？　どんな？」

あれは確かー

「家に帰って腹筋背筋腕立て伏せを500回ずつやる、プロテインを5リットル飲む、近所の犬に噛みつく、というトレーニングを毎日やってるって話だ」

「それ怖すぎるよ！　あと最後のヤツ、絶対トレーニングじゃないよね!？」

「そのおかげで、モソンのナガクルガ並の運動神経を誇るらしい」

「ええ!？　彼女本当に人間なの!？」

「なんてな。嘘だ。Eクラスの代表は女子テニス部のエースをやってる中林ってヤツだ。性格は島田に近いと思うぞ」

「外見は？」

「鉄人に近ーい冗談だ明久。ダッシュで逃げるな」

「二人の冗談は心臓に悪いんだよ!」

コイツほどからかい甲斐のあるヤツはそうそういないだろう。

「まったく……。明久をからかうのも大概にするのじゃ。全然話が進まん。結局Eクラスはどういった連中なのじゃ？」

一緒に歩いていった秀吉が雄二に問いかける。俺も代表しか知らないから聞いておきたい。

「すまんすまん。そうだな……。Eクラスは一言で表すと、『体育会系クラス』だな」

「体育会系クラス？」

「ああ。部活を中心に学園生活を送っているヤツが殆どだ。部活に打ち込んでいるせいで成績が悪い連中だが、その分体力や運動神経はかなりのもんだ」

「なるほど。部活バカってわけだね」

いや、お前が言って良い言葉じゃないと思うぞ。

そんなことをしていると、正面からズンズンとこっちに近づいてくる人影が一つあった。アイツは確か……。

「アンタにバカって言われたくないわよバカ！」

ヘアバンドが特徴的なその女子は、出会い頭にいきなり明久を罵倒し始めた。

「明久。コイツがEクラスの中林ってヤツだ」

クエスチヨンマークを浮かべている明久に、とりあえず助け舟を出しておく。

「なるほど。この人が例の全身筋肉質でモンのナルガルガ並の運動神経を誇るって話の」

「ええ！？ 私一体どういう紹介をされてたの！？」

中林が目を丸くしている。まあ無理もないか。

自分を観察している明久の視線を感じたのか、中林は体を抱くようにして明久から距離を取った。

「な、何よその目は。これだからFクラスのバカは嫌なのよ。人の身体をジロジロと見て、いやらしい」

「違うよっ！ 僕はただ単に、中林さんはラグビー部所属で鉄人に似ていて、腹筋背筋腕立て伏せを500回ずつやる、家に帰るとプロテインを5リットルずつ飲む、近所の犬に噛みつく、というトレーニングを毎日やってる人だトー」

「アンタ私に喧嘩売ってるんでしょ！？ そうよね！ そうに決まってるわよね！」

これじゃ火に油もいところだ。

「まあまあ落ち着けパツキン姉ちゃん。明久も悪気があつて言ったわけじゃない」

「パツキン？ 金髪ってこと？ バツカじゃないの？ 私のどこが金髪に見えるのよ。病院でも行ってきたら？」

ごく一般的な疑問を抱いた中林は、訝しげに雄二へ視線を向ける。

それにしてもコイツが言うパツキンって……そういうことか。

「違う違う。パツキンってのは『髪が金色』ってことじゃねえ。『髪筋』って書くんだ。文字通り、髪まで筋肉でできてんじゃねえのか」

雄二の説明だけでは不足しているところもあるだろうから、俺が補足を入れることにしよう。

「いや、髪もそうだけど、その胸も実は筋肉の塊なんじゃないの？」

「言ってくれるじゃないの……っ！……っ！」

「……と、明久が言っていた」

「なんですってええー！……！」

「酷い誤解でげふうっ！」

うん。良い右ストレートだ。

「ところで中林。さっきは聞き忘れたが、先攻・後攻はどつする？」

「知らないわよ！ 好きにしたらいいじゃない！」

「そうか。それならこちらは後攻にさせてもらおう」

「いいわよ。そんなことより覚えておきなさい！ 絶対アンタには負けないんだから！」

雄二の言葉に対してそう言い捨てて、中林はズンズンとEクラス側

のベンチへ戻っていった。

「なにやら揉めておったが、大丈夫じゃったのか？」

「秀吉か。全く問題はないぞ」

「むしろ上出来だと言える」

「僕にとっては最悪だけどね……。はあ……。これでまた、僕がおかしなヤツだつて誤解する人が増えた気がするよ……」

明久が溜め息をつきながらそう呟く。今更な感じがすごくするけどな。

「んじゃ、そろそろ守備位置と打順を発表するか。おい、全員聞いてくれー」

こういうことに関して雄二の手腕は折り紙つきなので、誰も文句を言うわけでもなく話を聞く姿勢になる。

「基本の守備位置と打順はだいたいこんな感じだ」

1番 ファースト

木下秀吉

2番 ショート

土屋康太

ムッリーニ

| | | |
|-----|--------|------|
| 3番 | ピッチャー | 吉井明久 |
| 4番 | キャッチャー | 坂本雄二 |
| 5番 | ライト | 姫路瑞希 |
| 6番 | センター | 神谷亮 |
| 7番 | セカンド | 島田美波 |
| 8番 | レフト | 須川亮 |
| 9番 | サード | 横溝浩二 |
| ベンチ | 君島博 | |

近藤吉宗

今回は一回戦ということもあり、野球が苦手な姫路をボールがあまり飛んで来ないライト、万が一ボールが来てもカバーが出来るように俺はその隣のセンター、観察処分者で召喚獣の操作が上手い明久はピッチャー、となった。こうやって見てみると、雄二の判断は正しいだろう。

「以上だ。何か質問は？」

雄二が周りを見回す。特に何の質問も出なかった。

そして、雄二を中心にした円陣が自然に出来上がる。それを確認した雄二は全員を鼓舞するように大きな声を上げた。

「よし。それじゃーいこそテメェら、覚悟はいいか！」

「「「おうつ！」「」」

「Eクラスなんざ、俺たちにとっちゃただの通過点だ！ こっちの負けはありえねえ！」

「「「おうつ！」「」」

「目指すは決勝、仇敵教師チーム！ ヤツらを蹴散らし、その首を散っていった戦友（エロ本）の墓前に捧げてやるのが目的だ！」

「「「おうつ！」「」」

「やるぞ teme エら！ 俺のー俺たちの、かけがえない仲間（エロ本）の甲い合戦だ！」

「「「おっしやあーっ」「」」

男子全員の目に炎が灯る。無慈悲にも俺たちの仲間を奪った敵ー鉄人率いる教師軍団め。必ず鉄槌を喰らわせてやるから待っているよ……！

「あ、あの、美波ちゃん……。こうしているとなんだか……」

「そうね……。ウチらまでそういう本を没収されたみたいよね……」

「ワシも別にエロ本などは持ち込んでおらんのが……」

『（えっと……。私はこういう時、どうしたらいいのかしら……。？）（

□

俺たちFクラスはいつも一つ。一致団結して上位のクラスを打ち倒してやる！

第六十二問その二・暗記をする際は、ラインマーカーを使わない方がいいとか

一体、どうしてこうなったんだろう……。

【Eクラス VS Fクラス
4ー1ー0】

「……やべえ。いきなり大ピンチだ……」

「いやもうピンチっていうか点数取られまくった後なんだけど……」

「さあて、これからどうするかな……?」

バッテリーの呼吸が合わず次々とホームランを打たれ、初回からまさかの4点ビハインド。

現在一回表が終わり、次は俺たちの攻撃だ。

「よし、さっきはちょっとしたハプニングがあったが、だいたい計算通りだ！ さっさと点取ってブツ倒すぞ！」

「「「おおーっ！」「」「」

雄二の言葉に全員で拳を固める。ここからが俺たちの本領発揮だ！

「トップバッターは秀吉だな。頼んだぞ」

「任せておくのじゃ」

秀吉がバッターボックスに向かう。頑張れ！

『木下。まずはアンタを打ち取って波に乗らせてもらおうよ！』

マウンド上ではピッチャーを務める中林が闘志を燃やしている。

『さあ！ 勝負よ！』

そう言う中林とは対照的に、秀吉はボールとストライクのカウントを重ねていく。おそらく、というか確実にフォアボール狙いだろう。

『思いつきり振ってきなさいよ木下！』

『すまぬが、それはできん。なにせ、0対4という状況じゃ。五回までしかない以上、ワシらは確実に点を返さねばならんからの』

現在カウントは2ストライク3ボール。この野球勝負は時間の都合上、九回まででなく、五回までとなっている。ここでの秀吉の判断は正しいだろう。

『何よ！ 私が怖いの！？ フォアボールなんか狙わないで、ちゃんとヒットで塁に出なさいよ！』

マウンド上で中林が叫ぶ。勝負の世界ではこういうことは常套手段なのだが、中林にはそれが許せないみたいだ。

『なんと挑発しても無駄じゃ。ワシはワシの仕事をきっちりこなすだけじゃからな』

『く……っ！ いいから勝負をなさいよー男らしくー！』

『……………男らしく、じゃと？』

『ーートライクッ！ バッターアウト！』

「すまんお主ら。無理じゃった」

「いや、まあ仕方ないさ」

「それより、どうして最後だけあんなに大振りだったの？」

「気にするでない。ワシにも色々譲れんものがあるのじゃ」

「ふん……？」

ドンマイ秀吉。ところで次は2番打者のムッツリーニ。今度こそいけるか。

『Eクラス 中林宏美

V S

Fクラス 土屋康太

古典

105点

V S

22点
『

「どうしようか雄二。僕にはワールド負けの光景まで見えるんだけど」

「奇遇だな明久。俺もだ」

「右に同じく」

『アウトー！』

そんなこんなでムツツリーニもゴロをピッチャー前に転がしてアウト。次は3番だからー明久か。

「よし、ここは一発、デカいのかましてくるか！」

「おう。期待してるぞ明久」

「頑張つてこいよ」

「任しとけっ」

明久は意気揚々とバッターボックスに入る。大丈夫なのか？

ゴスッ

『ーデッドボール。一塁へ』

『痛みがっ！ 顔が陥没したような痛みがあっ！』

初球から顔面にデッドボール。明久の召喚獣はフィードバックもあるから大変そうだ。

『ここから先、アンタの打席は全部デッドボールよ！』

『なんて最悪の予告なんだ!』

明久のヤツ、この先の打席は大丈夫なのか？

『さて。ここで真打ち登場というわけだな』

一塁へ進む明久と入れ替わり、4番の雄二が打者になる。

『Eクラス 中林宏美

V S

Fクラス 坂本雄二

古典

105点

V S

196点
『

両者の点数が表示される。今の雄二なら、Eクラス相手でも問題ないだろう。

『行くわよFクラス代表っ!』

中林が投球の姿勢に入る。現在2アウトランナー一塁。雄二の次は学年次席の姫路だから、ランナーを溜めるわけにはいかないだろう。

中林が投げたボールはまっすぐミットへ向かっていきー

『あらよつとおーっ！』

キーン、と甲高い音を鳴らして宙を飛んでいった。これはもう、文句なしのホームランだ。

【Eクラス VS Fクラス
4ー1ー2】

明久と雄二がホームへ帰り、2得点。これで2点差となった。

『く……っ！ 次からは坂本にもぶつけるしかないっていうの……』

『『普通に敬遠しろ！』』

なんだか、中林もどこかおかしい人のような気がしてきたぞ。

「坂本、お疲れ様」

「……………ナイバッチ」

「すごいホームランだったぜ」

「流石じゃな、雄二」

ちなみに、デッドボールを受けた明久への心配をする人は俺を含めていない。

「さて、次は姫路じゃな。ここはホームランでもう1点といきたいところじゃが」

「それは姫路には厳しいだろうな」

「瑞希はテストの点数はいいけど、あの通り運動神経はあまり良くないから」

島田が苦笑を浮かべている。確かに姫路は運動をやっているようには見えないから、打つのは厳しいだろう。

『ボール。フォアボール。一塁へ』

『あ、はい。ありがとうございます』

話している内に、姫路がフォアボールで一塁に出る。これでまた2アウト、ランナー一塁。そして次のバッターは、

「俺だな……」

「亮って、野球苦手なの？」

「いや、そんなことはないんだけど……」

「????」

バッターボックスに入り、召喚獣を出す。

『Eクラス 中林宏美

V S

Fクラス 神谷亮

古典

105点

V S

5点

『さあ守備だ！ しっかり守るぞー！』

『『おっ！』』

「そのセリフはせめて打った後にしてくれ！」

結局、ピッチャー前にボールを転がしてアウトとなり、攻守交代となった。

「神谷……。お互い古典を頑張りましょうか……」

守備に向かう途中、島田にそんなことを言われた。

「ちなみに、お前は何点だった？」

「6点よ」

「言い切ったな……」

というか、島田に負けているとは……。ちょっとショックだ。

お互いに得点をあげられないまま二、三回が終わった。

迎えた四回。科目は化学。守備では雄二がピッチャー、俺がキャッチャーを務めて三者凡退に終わらせた。

四回裏。一番バッターはこの俺だ。

「頼んだよ、亮」

「頑張つて下さいね、神谷君」

「オツケー。あ、そうだ。島田」

「どうしたの？」

相手には聞こえないように、小さな声で用件を伝える。

（なんとか頑張つてホームランを打つつもりだけど、万が一三塁に残ったらスクイズをお願いできるか？）

スクイズ、という単語を聞いたであろう姫路が、一瞬肩を強ばらせた気がするが、気のせいだと思いたい。

（それはいいけど、本当に大丈夫なの？）

（おう。任せておけ）

「あ、あの……」

「どうした姫路。すごく落ち着きがなさそうだけど」

何故か姫路はハラハラした様子で俺を見て、

「神谷君。絶対に死なないで下さいね！」

などとのたまわった。

「待て姫路。どうして俺の生き死にの話になってるんだ？」

「え？ だってスクイズって、相手の首に鋸を当てて、頸動脈を切り裂くことだったはずでしたから。もしかして、違いました？」

全然違うかどうかと言われたら、答えどころに迷うんだがな。

「この場合は違うな……。というか、それ誰に聞いた？」

「え？ 桂さんですけど」

「あのバカ……」

また変な知識を取り込みやがったな？

「とりあえず、死ぬことはないから大丈夫だ」

姫路を宥め、バターボックスへと向かう。

『（ちょっと。アンタ、本当に大丈夫なの？）』

「（ん？ 点数のことか？ 化学だし、心配すんな）」

『（化学だからこそ、よ。絶対敬遠されるわよ）』

「（ああ、そのことか。そっちも問題ない。俺に考えがある）」

『（それじゃ、アンタの考えとやらを見せて貰おうかしらね）』

俺は自分の召喚獣を出し、点数が表示される。

『Eクラス 古河あゆみ』

V S

Fクラス 神谷亮

化学

109点

V S

初球を投げる前からキャッチャーの召喚獣は本来のポジションを離れ、バッターボックスとは離れた場所に立った。やはり、敬遠でフオアボールにして勝負を避けるつもりなんだろう。

しかも、俺の召喚獣はキャッチャーから見て左側に立っているのだが、それとは反対側の場所にいる。これは大チャンスだ。

「ボール！」

ボールはゆつくりとキャッチャーミットに吸い込まれ、再びピッチャーの所に戻る。

そして、二球目も同じような速度のボールがピッチャーから放たれ、キャッチャーもその場から動くことはなくボールを待っている。

「かかった……っ！ ……増殖」

その瞬間、俺は俺の召喚獣が持つ特殊能力である『増殖』を発動させる。この能力は、自身の装備品の大きさや数を自由に変更できる。

「いつけえええーっ！」

だから俺はバットを伸ばし、本来なら絶対打てないようなボールを無理やり打つ。

「な……っ！ そんなのアリかよ……っ！？」

ボールはそのままピッチャーの後ろへ飛んでいき、フィールド中から消えた。

「ホームラン！」

【Eクラス VS Fクラス
4ー1ー3】

「「「おっしゃあーっ！」「」「」

Fクラスのベンチから歓声が沸き上がる。これで後一点差だ！

「よしっ！ このままの流れで一気に勝つぞっ！」

「「「おっっ！」「」「」

雄二がクラスメイトを鼓舞し、皆のモチベーションが上がった。

結局最終回の科目である保健体育でムツツリー二たちが大活躍をして二点ゲット、そのままサヨナラ勝ちを収めた。

ちなみに、その時明久の召喚獣がデッドボールで行動不能になり、明久は一人で補充試験を受ける羽目になったのだが、それはまた別の話。

第六十三問・もう何も恐くない

「優希ちゃん、こんにちは」

「いらっしやい、瑞希ちゃん」

《大日本高校、1点を追う状況でバッターは山根。ここまでの打率は――》

「？ 高校野球のラジオですか？」

「うん。二学期には野球大会もあるけど、私野球とかは苦手だから勉強しておこうかと思って」

「あ。わからないことと言えば。野球に関係あるかどうかはわからないんですけど……」

「どうしたの？」

「優希ちゃんはスクイズって何のことだか知りませんか？ この前、明久君と坂本君がそんな話をしてるのが気になって……」

「うん。スクイズ、か……」

スクイズとは……野球で三塁走者と打者が示し合わせて、打者がバントをすることで走者を本塁に迎える連携プレーのこと

「この前インターネットをしていたらそんな単語が出てきたんだよ。確かー」相手の首に鋸を当てて頸動脈を切り裂く』って意味だと思っよ」

「なんだか物騒な言葉ですね……」

《大日本高校、ここはきっちりスクイズを決めてきましたね》

《そうですね。7番・山根権三郎君、見事なスクイズでした》

「……………」

「優希ちゃん、高校野球って、かなり危険なんですかね？」

「彼らにとっては、命がけなんだよ……多分」

「お。戻ったか明久」

「お疲れさん」

「ご苦労じゃったな、明久」

「……………おかえり」

「あ、うん。ただいま……………」

補充試験を終えた明久が戻ってきた。けどせつかくの体育祭なのにテストを受けなきゃいけないなんて、今になって思えばどこがおかしいと思う。

『頼む……………！　なんとか最高のパートナーを……………！』

『いいから早く引けよ。後がつかえてるんだから』

『わかってるから急かすなよ！……………よし。これだー！チクシヨオオーッ！』

『『『』つしゃああーっ！　ざまあ見やがれえーっ！』』』

「えっと、あれは何をやってるのかな」

たくさんのクラスメイトがうちひしがれている光景を見て、明久がそんなことを聞いてきた。

「見ての通り、ただのくじ引きだ」

「いや、それは見たらわかるよ。そうじゃなくて僕が聞きたいのは、何のくじ引きをやってるのってこと」

「ああ。次の種目は二人三脚だから、そのペアを決める為のくじ引きだ」

「ふうん。そうなんだ」

「なんじゃ。随分と落ち着いておるではないか明久」

「確かにな。明久にしては珍しい」

二人三脚というのはパートナーが重要となる。というか、パートナーによって勝敗が決まると言っても過言ではない。

「だって、僕は別に誰がパートナーになっても気にならないから。どうせ男女別になっているだろうしー」

「今回は男女混合だぜ」

「全然問題ない試獣召喚」

「落ち着けバカ。教師の許可もないのに召喚獣が喚べるか」

雄二が明久をたしなめている。

「これが落ち着いていられるかぁーっ！ 誰！？ 女子勢のパートナーには誰がなってるの！？」

「安心せい。まだ決まっておらん」

「え？ そうなの？」

「……………決まっていたら、あんなに騒がない」

二人三脚を速く走るコツは、急ぎ過ぎずリズムを合わせることと、ちゃんと身体をくつつけることの二つ。女子勢とそんな美味しいことになる輩は、肅清されることになる。

「なるほど。だから皆あぁやっつて祈りながらくじを引いてるんだね」
「そういふこと」

箱の前では皆が懸命に祈っている。

「でも、よく姫路さんや美波が男女混合を許可したよね。雄二がうまく言いくるめでもしたの？」

他のクラスでは嫌がる女子が同性だけのくじを作って引いていた。

「バカを言うな。俺はむしろ男女別を推奨したくらいだ」

明久に尋ねられた雄二は、心外だと言わんばかりに肩をすくめた。なるほど。そういうことか。

「え？　なんで？」

「明久。察しろ」

「ああそっか。下手なことがあつたら殺されるもんね」

「わかってもらえて何よりだ」

きつと霧島なら雄二のパートナーが女子だと判明した時点で、何らかの措置を取るだろう。距離や場所を一切無視して。

「ところで、明久はくじを引かないのか？」

「そう言えば。僕も早くくじを引かないと！」

「あ、あのっ。明久君っ！」

「ちょっと待ってアキ！」

くじ箱に駆け出そうとする明久を、姫路と島田が呼び止めた。

「なに？　どうかした？」

「いえ。あの、その。なんというか、ですね……。私は7番なんですけど……」

「う、ウチは6番なんですけど……」

「絶対にその番号を引かないで（下さい）っっっ！っっ！」

なんとという絶望感溢れる言葉なんだ……。

「りよ、了解……。じゃあ、行ってくる……」

明久はトボトボと、くじ箱に歩いていった。

「お前ら、今の台詞は絶対に誤解されてると思っただけ……」

「だ、だって、相手はあの明久君ですから……。この番号を引いて下さい、なんて言ったらー」

「そ、そうよ。絶対にその真逆の方向に進むに決まってるわ。坂本の番号とか、そのあたりを引いてくるのは目に見えてるもの」

「……お主らも、色々と苦勞しておるんじゃない……」

明久の方を見ると、クラスメイトたちから関節技を食らっていた。

「どうやら、6番を引いたみたいじゃな」

「ということは、島田とペアー」

『なんだ、9番か。驚かせやがって』

『人騒がせな』

『くだらないことで体力を消費しちゃったぜ』

『所詮は吉井だな。数字すらまともに読めないなんて』

「ーでもないみたいだぞ」

「そうじゃな」

島田の顔が凄く残念そうに見えたのは、気のせいじゃないだろう。

「そう言えば、雄二たちは何番なの？」

くじ引きを終えてこっちにやってきた明久が、そんなことを聞いてきた。

「ん？ そういや、まだ引いてなかったな。アイツらが落ち着くのを待っていたらすっかり忘れてた」

「俺もだ」

「ワシもじゃな」

「……………同じく」

「んじゃ、ちよっくら引いてくるか」

「名目上は野球大会よりも体育祭のクラス種目が優先されるからな」

「……………表面上は参加しないと拙い」

「そうじゃな」

くじを引いてないのは俺と雄二とムツツリー二と秀吉の四人。そしてペアが決まってないのは明久と姫路と島田の三人。一人余る気がするが、気にしない。

誰もが固唾を飲んで見守る中、まずは秀吉がくじを引く。

「む。9ばー」

『っしやあ全員かかってこいつ！ 僕は死んでもこのくじを守りきつてみせるっ！』

『『生きて帰れると思うなよボケがあっ！』』

一瞬で膨れ上がった殺気に負けないように、明久が声を張り上げて拳を構える。

『ーではないの。6番じゃ』

「「「……………」」」

殺気が一瞬で萎み、それと同時に明久も構えを解いた。6番ってことは、秀吉と島田がペアってことか。

これで残ったくじは7番と9番と正体不明のXになる。

「え〜っど…………」

次に俺がくじを引く。さて、何番かな……？『補欠
バーカ』

バーカ

「なんか、すっごい腹立つんだけど」

「亮よ、まずはくじを握りつぶすのを止めるべきじゃ」

補欠ってことは、誰かが競技を休まない限り出番はないということか。なんだか悲しいな。

正体不明のXこと補欠は俺が引いたので、後は明久か姫路の番号しか残っていない。

『……………（がさごそ）』

ムツリーニが箱の中に手を入れる。ヤツにとってもここは勝負所だ。結果次第で文字通りの天国と地獄が待っているのだから。

ムツリーニがくじを取り出し、書かれた番号を見る。何番だ………？

「……………9ばー」

「さらばだつ！」

「逃がすな！ 坂本と神谷を捕らえて血祭りに上げる！」

「「「おおーっ！！！」」

この間、わずか一秒未満。ムツツリーと明久がパートナーになると発覚した瞬間に、残った雄二が、雄二が死体と化したら補欠の俺が姫路とペアになると判断し、クラスメイトが一斉に襲いかかってきた。

「雄二！ 何でこっちに向かって走ってくるんだよ！？」

「しょうがねえだろうが！ テメエが別ルートを辿りやがー！」

全力疾走をしながら雄二と口喧嘩をしていると、突如として雄二の姿が視界から消えた。一体何があったんだ？

『……………浮気は許さない』

『ぐああああっ！ 翔子！？ お前はどこから湧いたんだ！？』

後ろからは雄二と霧島の声が聞こえてくる。ついに捕まったか。冥福を祈る。

「って、人の心配をしてる場合じゃねえ！」

雄二が霧島に捕まっている間にも、こっちの追っ手が無くなることはない。

「待てえ！ 神谷！」

「貴様に地獄を見せてやる！」

「地獄はもう見飽きたから結構だ！ 食らえ必殺ガス攻撃！」

俺を追ってくる方向に麻痺効果のあるガスを振りまく。

「く……っ！ 卑怯な……」

「覚えてろよ……」

いや、大勢で追い回してきたお前らに卑怯と言われる筋合いはないんだが。

幸いにもこっちが風上だったから、自滅することはなかった。

残りのメンツは雄二をどこかに連れて行き、この場にはいない。助かった。とりあえずは生き残った。

「あ、危なかった……」

「神谷君。よろしくお願いします」

「おう」

姫路と軽く挨拶を交わし、明久とムツツリーニがいつ奇襲をかけてもいのように警戒する。

「美波ちゃん！ 絶対に譲りませんからね！」

「オツケー瑞希。ウチが絶対に勝つんだから！」

何やら姫路と島田が火花を散らしている。何があったんだろうか？

「ねえアキ」

「ん？」

「ウチらとーい勝負しない？」

「え？ 勝負？」

「はい。美波ちゃんと木下君、神谷君、私です。確か一回で各クラス三組ずつ出場でしたよね？」

なにやら島田と姫路が明久に勝負を申し込んでいるようだ。というか、聞いてないんですが。

「え？美波はともかく、姫路さんは大丈夫なの？」

「はい。心強いパートナーがいるので。それで……負けたペアが罰ゲームでいいでしょうか？」

「へ？」

「なによアキ。まさかアンタ、女子のペアが相手なのに勝つ自信がないの？」

「いや島田。ワシは女子ではないのじゃが」

「島田。そのセリフはレンが出てきた時だけにしてくれ」

島田の挑発的な台詞に、明久の表情が変わった。

「そ、そんなことはないさっ！ オツケー、その勝負受けた！」

こうして勝負は開催されることになった。俺と秀吉を置いてけぼりにして。

「じゃあ、ウチらから提案する罰ゲームなんだけど」

「何でもいいよ。勝ってみせるからっ」

「ウチか瑞希が勝った方とー」

「うんうん」

「ーちょっと、付き合っつて」

「へ？ つまり、姫路さんのペアが一位をとったら姫路さんに、美波のペアが勝ったら美波にちょっと付き合っつてことだよな？」

「はい」

「……週末とか？ 買い物にでも行くの？」

「う、うん。まあそんなところ」

「買い物とか、ご飯とか、映画とか、色々です」

「そ、そんなに一杯……。一日で回りきれるかな……？」

いや、一日だけじゃないと思うんだが。

「ん〜……まあでも、それくらいならいつか。乗ったよ。その代わり僕が勝つたら……」
「飯でも奢って貰おうかな」

「わかったわ。約束する」

「わかりました。……絶対にー勝ちたいです……」

最後の方は隣にいる俺にしか小さな声で囁いた。姫路のためにも、この勝負は負けられない。

『これより、第二学年の二人三脚を行います。二年生の生徒はスタート位置に集合して下さい』

集合のアナウンスが響き、俺たちは二人三脚のスタート地点に歩いていった。

『位置について！ 用意ー』

ーパアン

乾いた音が響き、前方に並んでいた走者が一斉に走り出す。俺たちの出番は次だ。

「んじゃ、いくか姫路」

「はいっ」

「やろっムツツリーニ。僕らがトツプでゴールするんだ」

「……………（コクリ）」

「お願い、木下」

「うむ。全力を尽くそう」

「わかりました。美春も頑張ります」

島田のペアだけ三人四脚になっているように見えるが、気のせいだろうか。

『次の組。位置について！ 用意ー』

パンという乾いた音と同時に、俺と姫路は動き出した。

一瞬で、全てを終わらせようと思った。でも、それは無理だと悟った。

俺は、無理だと悟らざるを得なかった。

（あーあ）

一步一步、足を踏み出す度に、一回一回、姫路の胸が体に当たる度に、自分の中で何かが堰を切られていくのを直感した。

鼻が熱くなり、そこから血が流れ出す。

血が吹き出す。

自分の身体だーよくわかる

（だよなあ……）

俺の身体がーこの状況に耐えられるはずがないのだ。わかりきっていたことだ。

不意に、鉄の味がした。どうやら口の中にも血が入り込んだらしい。

鼻の血管が破れていく。

俺はほんの一步さえも、この状況で全力疾走することを許されなかった。

けど、一回くらい――競技一回分くらいは何とかなると思ってただけだなあ……。

体勢が崩れ、視界が狂う。

たまたま前を見ると、少し前の距離でゴールテープを切る明久・ムツリーニペア、その後が続いて島田・秀吉・清水ペアがゴールしているのが見えた。

結局、賭けは明久の勝ちか。

自然に笑みがこぼれる。

そうすることにより、益々身体が崩れていく。何とかゴールはしたが、グラウンドの土がどんどん近づいてくる。

このまま倒れるのも、悪くないかな……。

「ーー亮！」

俺が眼を閉じかけたとき、俺の身体と土との間に割り込むように、秀吉の姉、優子が駆け込んだ。

「優子」

最後の力を振り絞って、小さな声で囁く。

「優子……。もーもつ」

もう何も恐くない。

そう言いつつもりだった。

恐いという感情すら湧き上がらない。

だから、異常な殺気を放つ優子にそう言おうとした。

「……もつ何もかもが怖い」

……。

あれ？ 噛んじまった、のか？

第六十四問その一・そして伝説へ…

ふっかつのじゅもんを いれるコラ！

*

『(え？ 何コレ?)』

「(何コレって、見ればわかるだろ？ 復活の呪文だよ復活の呪文。ドラ ンクエ トに出てくるやつ。前の話で死んだっばい終わり方したからな。必要なのは当然か)」

『(いやいやいや！ 今時こんな前時代のパスワードシステム無いでしょ！？ しかもこれ52文字のやつじゃない？ というか、前の話のラストで一言も呪文出てなかったわよ?)』

「(え？ お前、メモ取ってなかったの?)」

『(あるわけないでしょ!?)』

「(しゃーねえ。んじゃ、適当に入力すっか)」

『いや、適当じゃマズいんじゃないの?』

「(大丈夫大丈夫。こういうのは、

B AとかB B

セレクトセレクトスタート道具の七番目セレクトB Bみたいなパターンがあるから)」

『(……どっちも違うゲームじゃない)』

「(よし、入力完了っ)」

ふっかつのじゅもんを いれるコラ!

りょう ゆうじ あきひさ

みずき みなみ ひでよし

こうた あいこ しょうこ

ゆうこ れんぺ ぺぺぺ

ぺぺぺ ぺぺぺ ぺぺぺ

ぺぺ*

アキト「アサのじいけん

アキ「わたしが あなたの ぶかの アキヒサです
アキと よんでください」

アキ「ここがじいけんがあった ふみづきがくえんの あたりです
どういふふうに そうさを はじめますか？」

『（ちょっと！ 違うゲーム始まつてるわよ！？ いつのゲームなのコレ！？ 元ネタ今の子供たちわかんないんじゃない！？ とうか、明久何やってるの！？）』

「（まあとじあえず、自由と）」

くはく

アキ「ではまず わたしが じはく します」

アキ「ごめんなさい

わたしが やりました

はんにんは アキです」

アキ「もうしないから ゆるしてね」

アキトピアさつじんじけん

おわり

「（よし、クリア。犯人はアキ）」

『（早っ！！ っていうかそんなわけないでしょ！？ 前と全然話
違っし！ もっと真面目に始めなさいよ！）』

次の相手である三ーE対三ーFの試合は七回までに決着が付かずに
ドロー、両者敗退となり、俺たちの不戦勝が決定した。

そして、

「いよいよ準決勝なわけだが」

「確か、相手は三ーAだっけ？」

「ってことは、あの常夏コンビがいるクラスね」

なにかとあの二人とは衝突を繰り返しているけど、因縁でもあるの
かしら？

「んむ？ ということは、三ーAは負けたということじゃな？」

「そうなるな」

「負けたって、あの霧島さんがいるのに？」

Aクラスには翔子だけでなく観察力が高い優希もいるっていうのに、

常夏コンビに後れを取るとは思えない。

「もしかしたら、三年にも霧島クラスがおったのかもしれんしの」

それもそっか。それに優希も、もしかしたら体育祭の競技に参加していたのかもしれない。

「ちなみに雄二にレン」

「ん？ なんだ明久」

「どうしたの？」

「ニーAが勝ち上がってきたらどうするつもりだったの？」

グラウンドに向かう途中で明久がそんなことを聞いてきた。それについてはさっき雄二と話し合ったところなんだけど……。

「久保を懐柔して十人对八人で勝負する予定だったわ」

結局一番始めに雄二が出したこの案が採用されることとなった。

「久保君を懐柔つて、何言ってるのさ。あの久保君がそんな汚い行為に手を染めるはずがないじゃないか」

「……そうか。そう思っていていられるのなら、お前はそのままの方が幸せなのかもしれないな……」

「真実の久保はヨゴレた行為に身が染まっておるからの……」

「彼は私たちとちょっと違う世界にいるからね……」

「……知らぬが仏」

「え？ 何？ どうして久保君の話をすると思んなんな慈愛に満ちた目で僕を見るの？」

「だつて……ねえ？」

「して雄二。この試合はどんな作戦で行くのじゃ？」

「ああ。正直、三ーAが相手とは言っても、翔子や久保や桂がいる二ーAが負けるとは思っていなかったからな。殆ど作戦なんてないんだがー」

「そういえばこのことについては何も聞いてないわね。」

「ー奴らの召喚獣を殺そうと思う」

「もう既にスポーツマンシップという概念は消え失せておるようじやな……」

「もうちょっとマトモな作戦はなかったの……？」

「最低の作戦ね……」

「殺す……？ アウトにするってことですか……？」

瑞希だけは雄二の言っていることがよくわかっていないみたい。

「わかった。乱闘で相手を再起不能にするんだね？」

「……誰を狙えばいい？」

「なにゆえお主らは躊躇いもなくその作戦を受け入れられるのじゃ……」

もうちょっと躊躇いの余地はないのかしら？

「いや、別に乱闘じゃなくてもいい。奴らを殺す手段は直接攻撃以外にも色々あるからな」

「そっか。タックルをしたり、デッドボールを狙っていったりもできるよね」

「……………振り切ったバットを相手に投げつけてもいい」

「ああ。理解が早くて何よりだ」

「お主らは真の外道じゃな！」

まったくコイツらは……………。

「アンタたちねえ……………。もう少し真っ当な思考回路を持ち合わせていないの？」

すると、明久たちに美波も呆れるように言った。

「そうよ。そんなことをして、相手に『卑怯だ！』って文句言われ
ても知らないわよ？」

すると、明久と雄二とムツツリーニが肩を竦めた。

「ふふつ。わかってないなあ二人は」

「全くだ。島田やレンには俺たちのスポーツマンシップが全然伝わっていないらしい」

「……………理解不足」

「な、なによアンタら」

「一体何が言いたいの？」

「いいかい、美波にレン？」

戸惑う私たちに、三人が一斉に告げる。

「『卑怯汚いは敗者の戯言』」

「『アンタら最低過ぎるわっ！』」

もうちょっとマシなスポーツマンシップは無いの？ ってあれ？

「でも、向こうの召喚獣を行動不能にしてもこっちの勝ちってわけじゃないでしょ？ その辺はどうするの？」

一っ気になった点を雄二に聞いてみる。たとえ召喚獣が戦闘不能になったとしても、テストを受ければ別に問題ないし、乱闘の先はどうするのかしら。

「相手は三年だからな。持ち物検査が俺たち二年にしか行われなか

った以上、向こうの優勝に対するモチベーションはこっちほど高くはない」

「ま、そりゃそうだろうね」

没収品を取り戻そうというこっちのやる気と、ただ学校行事として参加している向こうのやる気とは、確かに天と地ほどに違うのだろう。

「だから、そのモチベーションの差を利用する」

「モチベーションの差を利用するって言われても……」

「ま、いいから見てる明久。どうせ他に方法はないんだからな」

「んー。一応了解」

「……………了解」

試合のあるグラウンドに向かう明久たちの背中を見ながら私たちはため息をついた。

「アンタたち二人とも、よくアイツに惚れたわね……………」

「……………たまに、あんなヤツのどごがいいのかわからなくなるわ……………」

「外道な手段を駆使して、求めるものがエロ本じゃからな……………」

「あ、あはは……」

第六十四問その二・レベルを上げて物理で殴ればいい(前書き)

ホントだ。その気になれば痛みなんて、完全に消しちゃえるんだ！

第六十四問その二・レベルを上げて物理で殴ればいい

「ぎいやああああーっっ！！ 身体が！ 身体が痛ええええっ！！」

「く……………っ！！」

俺の近くに横たわるのは、上半身が消し飛んだ対戦相手の召喚獣と、今にも痛みで意識を失いそうな本人の姿。

「なんで……………なんでこんなことに……………畜生……………！！」

俺の右肩辺りに激痛が走る。

「持って行かれた……………！！」

その少し前。

「ところでさ、秀吉。お前と優子の声って、キュ　べえによく似てるよな」

「亮、お主はいきなり何を言い出すのじゃ？」

「いや、なんでもない」

『ストライク。バッターアウト。チェンジ』

秀吉とそんなことを話していると、審判が交代を告げ、1回の表が終わる。今回は俺たちが先行なので次は俺たちの守備だ。

しかし、さすがは三年のAクラス。俺たちはこの回、三者凡退で終わってしまった。ちなみに、この勝負での打順と守備位置はこんな感じ。

1番　サード　　島田美波

2番　シヨート　　須川亮

| | | |
|----|--------|---------------------------|
| 3番 | ピッチャー | 吉井明久 |
| 4番 | キャッチャー | 坂本雄二 |
| 5番 | ライト | 近藤吉宗 |
| 6番 | セカンド | <small>ムツリーニ</small> 土屋康太 |
| 7番 | センター | 君島博 |
| 8番 | ファースト | 神谷亮 |
| 9番 | レフト | 横溝浩二 |

『プレイツ!』

審判の合図が響き、明久が第一球目を投げた。

『ットライツ!』

向こうも一球目は様子を見てきた(堀田とかいう人)。そして二球目。カキン、という音をたててボールが宙に上がる。

しかし狙いが外れたのかボールの飛距離が伸びず、セカンドにキャッチされた。

なるほど。点数の差だけが戦力の差じゃないってことが。

『よし。俺の出番だな。試獣召喚っ』

常夏コンビの片割れで、ソフトモヒカン頭の先輩がバッターボックスに立つ。どうりで聞き覚えのある声だと思った。……レンがブルブルと震えているように感じるのは、気のせいじゃないだろう。

『さてと。吉井に坂本……！溜まりに溜まった今までの屈辱、きつちり利子つけて返してやるぜ……っ！』

一球目で、雄二はバットが届かない外角にミットを構え、そこへ明久がボールを投げ込む。

『つと、手が滑った！』

これに対してモヒカン先輩はバットを振り抜き、キャッチャーをやっている雄二の召喚獣に向かって放り投げた。

『悪いな坂本。わざとじゃないんだが』

『……いや。気にすることはない。スポーツに事故はつきものだからな』

雄二はさして気にした様子もなく、明久にボールを全力で投げつけた。

「モヒカン先輩の召喚獣が目の前にいるにも関わらず。」

『すまないな先輩。俺はどうにも召喚獣の扱いに慣れていなくてな。けどまあ、仕方がないよな。スポーツに事故はつきものだもんな？』

『く……っ！　そ、そうだな。このくらい笑って許してやるよ。大したダメージでもないからな……！』

案の定モヒカン先輩の召喚獣にボールが直撃し、モヒカン先輩は今にも雄二につかみかからんとしている。一触即発とはまさにこのことだろう。

『君たち。試合に集中しなさい。小競り合いをするようなら二人とも退場にしますよ』

『……………』

審判の先生のお咎めにより、二人は黙ってそれぞれの役割に戻る。今度こそ明久にボールが戻された。

そして、投げられた二球目は――

『オーデットボール』

「二球目はモヒカン先輩の召喚獣の頭に直撃し、モヒカン先輩のバットが雄二の召喚獣に直撃した。」

「明久テメエ！ 全然減らせてねえだろうが！」

「雄二こそやられすぎだろ！ ちゃんと防御しろ！」

さて。そろそろ乱闘が始まるころか？

「っていつかテメエら、今のはわざとだろ！ 先輩に向かって良い度胸じゃねえか！」

「何を言ってるやがる！ そっちが先に仕掛けてきたんだらうが！ 肝試しに負けたのを根に持ちやがって！ 器が小せえぞ先輩！」

「んだと！？ 上等だ！ こうなりや野球なんて面倒なことやってねえで、直接——」

「望むところだ。元々三年は気に入らなかったんだ。ここらで一発——」

ベンチから次々と飛び交う怒号。これなら雄二の目論見通り、乱闘へと発展するだろう。

さて、何の暗器を使おうかなー

「おやめバカどもっ！」

そこに、しわがれた声が割って入った。この声はババア、もとい学園長か？

「やれやれ、つくづく救えないガキどもさね……。どうして召喚獣勝負にまでしてやったのに、おとなしくできないんだい」

「なんだババア。何をしに来たんだ？」

「学園長と呼びなクソガキ」

雄二の問いかけに対して学園長は、ふん、と鼻を鳴らした。

「本当に、このバカどもときたら……。召喚獣の痛みが返って来ないから、そんなに短絡的に乱闘へと雪崩れ込むのかねえ……」

呆れたように頭を振り、俺たちを見た学園長は意を決したような顔をして、こんなことを告げてきた。

「よし、決めたよ。この試合だけ、召喚獣の設定を変えてやるんじゃないか」

「「「は?」「」」

えーっと、つまりどういうことだ?

「今回だけ、全員に痛みがフィードバックするようにしてやるって言ってるんだよ。そうしたら、乱闘なんかせずにまともに試合をするだろう?」

つまり、今回限りは皆の召喚獣が明久と同じ設定ってことか。

「じゃあ、そういうことだよ。全員真面目にしっかり野球をやりな」

そう言っただけで学園長は校舎に向かって歩き去っていった。ところで、こうなった以上俺たちの作戦はどうなるんだ?

「すみません。ちょっとタイムで」

と、ここで雄二がタイムを取り、俺たち内野のメンバーは明久がいるマウンドに集まった。

「どうするんだ雄二？ このままじゃ俺たちの作戦が実行できないぞ？」

「問題ない。予定とは違うが、こうなったらこちらの秘密兵器を使うまでだ」

「秘密兵器？」

「ああ。幸いにも次のバッターは坊主野郎だ。手加減する必要もない」

そう言うと、雄二は主審のいる場所に行き、ベンチを一瞥してからポジションの交代を宣言した。

「ピッチャー吉井に代わって、姫路。吉井はキャッチャーと交代、キャッチャーの俺はサードの島田と交代」

つまり、姫路がピッチャー、明久がキャッチャー、雄二がサード、島田がベンチってことが。

姫路と雄二が何を話しているのかは遠くてわからないが、ものすごく嫌な予感がする。

そんな思いを抱きながらファーストに戻ると、姫路がやけに緊張し

ながらマウンドに上がっていた。

『えっと、このプレートに足をかけさせて、こうして……』

『待つて待つて姫路さん』

『？ なんですか明久君？』

『ほら、一塁にランナーがいるでしょ？ まずはその人に盗塁をさせられないように牽制球を投げてみようよ』

ちよつと待て。明久の野郎、俺を実験台にする気だな？

『牽制球ーあ。わかりました。ボールを一塁に投げたら良いんですね』

『そうそう。一塁にいる亮にボールを投げて貰える？』

なんかこうー頭部から食べられた魔法少女を見た時ぐらいに嫌な予感がするが、捕らないわけにはいかないのでグローブを構える。

『了解です。それじゃー』

姫路の召喚獣が腕を振り上げ、投球の構えを取った。

『やあーっ！』

ー キュボツ

「……………は？」

『Aクラス 常村勇作

V S

Fクラス 姫路瑞希

化学

D E A D

V S

437点

『Fクラス 神谷亮

V S

Fクラス 姫路瑞希
化学

36点

VS

437点』

「ぎいやああああーっっ！！ 身体が！ 身体が痛ええええっっ！！」

「く……………っ！！」

俺の近くに横たわるのは、上半身が消し飛んだ対戦相手の召喚獣と、今にも痛みで意識を失いそうな本人の姿。

「なんで……………なんでこんなことに……………畜生……………！！」

俺の右肩辺りに激痛が走る。

「持って行かれた……………！！」

ちなみに俺の召喚獣は、グローブを突き破った姫路のボールにより、右肩から先がなくなっていた。まるで肩に剣か槍を突き刺されたみたい痛い。

というか、こんな時に思うのもなんだが、

「……痛覚って、大事なものなんだな……」

「……奇遇だな、神谷。俺もそう思っていたところだ」

「え？」

隣にいたモヒカン先輩が俺の意見に同意してきた。一体どうしてだろう？

「痛覚をなくしたどこぞの魔法少女を見たら、な」

「あゝ……。確かにアレはヤバかったですからね」

こんな所でモヒカン先輩と意見が合うとは思わなかった。

そんなことを考えながらベンチに運ばれると、顔の上から声がした。

「神谷。大丈夫なの？」

あれ？ 何でマ さんの声が聞こえるんだ？

こんな所にいるはずがないのに……。

「W A T A S H I H A H O M U H O M U H A D E S U ! !」

「ちょっと！ 本当に大丈夫!？」

「ああ……島田か。なんとか……大丈夫だ」

あまりの痛みで島田の声がマ さんに聞こえてしまったらしい。

痛みを堪えて体を持ち上げ、バッテリーボックスを見る。そんな俺の視界に入ってきたのは、

「……………うわぁ……………」

頭が消し飛び、熟れて地面に落ちたザクロを彷彿とさせる坊主先輩の召喚獣だった。

『先生！ こちらはもう交代要因がありません！』

三ーAベンチからそんな声上がる。そういえばルールの中に、【登録メンバー以外の介入は一切認めない】というものがあつた。まさかアイツ、このルールがあつたからこそこんな作戦を実行したわけだな？

『交代メンバーがいないのであれば、そうですね……。一度その人の打順を飛ばし、その間に補充試験を受けて貰いましょうか』

「（なあ。これってつまり）」

『（ええ。瑞希からのデットボールを食らう為に試験を受けろってことね）』

『さて。それでは次の次ーー5番バッターは前に。点数がなくなつた者は補充試験に』

『『三ーA、ギブアップします！』』

こうして、Fクラス投手、姫路瑞希は体育祭の伝説になった。

次の言葉の意味を答えなさい。

『インキュベーター』

姫路瑞希の答え

『人工孵化器』

教師のコメント

正解です。他には起業家の支援者に対してもこの言葉が使われますので、覚えておくとよいでしょう。

土屋康太の答え

『女性に淫らな夢を見せる夢魔』

教師のコメント

それは恐らくインキュバスではないでしょうか？

吉井明久の答え

『インベーターのこと』

教師のコメント

二人とももっとよく問題を読んで下さい。

神谷亮の答え

『あのド腐れ外道があああっ！』

教師のコメント

わけがわかりません。

「雄二……。よくあんな非道な作戦を立てたよね……」

「いや……。フィードバックについては想定外だったからな……。流石にあれば俺でも同情するぞ……」

「あの、明久君……」

現在いるのは二ーF待機場所。三ーAを相手に勝利を得たにも関わらず、俺たちはどんよりとした気持ちだった。

「そもそも俺は『三年は持ち物検査を受けていないから、再試験を受けてまで試合を続けようとは思わないだろう』と考えていただけだ。あのババアが余計な介入をしなければこんなことにはならなかったんだぞ」

「まったくだ。おかげで死にかけたぞ……」

「あの、坂本君、神谷君……」

常夏コンビはともかく、他の相手の人たちがトラウマになってないことを祈ろう。

「流石に学園長もやりすぎたと思ったようじゃの。あの後すぐに元の仕様に戻すと言っておったぞ」

「……………惨劇だった」

「あの、木下君、土屋君……」

あの光景を見て何も思わないなんて言われたら、もうわけがわからない。

「さて。それじゃあ午後の勝負だがー」

「あのっ！ 五人ともっ！」

必死の思いで行った現実逃避は虚しく終わりを迎える。俺たちは今にも泣き出さんばかりの表情で、声の主に戻事をした。

「「「……………はい」」」

「実は私、お弁当を作ってきたんですけど……………」

姫路が大きな包みを差し出す。わかっていた。その箱から発せられている死のオーラを俺たちは敏感に感じ取っていたから。

「ホント、瑞希って尽くすタイプよね」

姫路の隣では島田が拗ねた顔をしていた。

「ま、まあ、とりあえず座るといい」

姫路と島田に場所を譲り、立ち上がった雄二がそのまま踵を返す。

「んじゃ、俺は飲み物を買ってくるから」

「いやいや、雄二は座ってる。俺が買ってくるから」

「二人とも大丈夫だよ。僕が買ってくるから」

「そう言わず、二人はワシに任せるのじゃ」

「……………俺が行く」

こいつらー飲み物を買ってそのままトンスラする気だな！
？ そうはさせるか！

「ははっ。無理をするなよ明久。飲み物を買ってくるには金が必要
だろ？」

「大丈夫だよ、最近結構余裕があるから。何より、使いつ走りと言
えば僕、僕と言えば使いつ走り。これ以上の適任はいないと思うん
だ」

「待つのじゃ。使い走り歴十五年。姉上にこき使われ続けるワシの
キャリアを舐めるでない。明久よりよほど洗練された使い走りをご
覧に入れよう」

「……………違う。必要なのは速さ。【闇を裂く疾風迅雷の使い走り】
と呼ばれた俺こそが、適任」

「いーや。最も重要なのは、どんな状況でも生き残る生存能力だ。
その点から見ればこの俺が適任だ」

なんとしてもこの場を脱さなければ悪魔の餌食となり、死体と化す
るのは明白だ。それだけは絶対に避けなければならぬ。

「上等じゃねえか！ この俺の本気の使いつ走りに勝てると思うな
よー」

「……………ドキドキが、止まらない……………」

俺たちが戦慄する中、姫路は持っていた包みをほどき、中身を取り出した。

「あれ？ 瑞希、なんだか今日は量が少ないんじゃない？」

島田に言われて姫路の弁当箱をしてみる。そこにあるのは普通の重箱一つと、二回りくらい小さな箱が一つ。確かにいつもと比べると少ないような気がする。

「あ、はい。実は、また失敗しちゃったんです。本当はこれの他にちゃんとおかずを作っていたんですけど……………」

そう言いながら、大きい方の包みを開ける姫路。そこにあっただのは小さく握られた、沢山の俵型おにぎりだった。おかずを失敗したってことは、もう一つはデザートか何かだろう。

「美波ちゃんもどうですか？」

「そう？ じゃあ、お言葉に甘えて」

「」「」「あっ！」「」「」

俺たちが止める間もなく、島田がおにぎりを一口に放り込んだ。くそっ。さっさと明久か雄二の口に押し込むんだっ！

「うん。普通のおにぎりだけど、美味しいわよ瑞希」

「そうですか。良かったですっ」

なんともない、のか……？ 一体どういうことだ。

「おい姫路。このおにぎり、どうやって作ったんだ？」

俺と同様の疑問を抱いたのだろう、雄二が姫路におにぎりの詳細を問いかける。

「特に何もしてないですよ？ 炊いてあったご飯にお塩を振ってから俵型に握って、海苔を巻いただけです」

なるほど。それなら大丈夫だ。

「おにぎりが普通な分、おかずを特別製にしていたんですけど、ね」

良かった……。おかずがあつたら死んでたな。

「それじゃ、俺もいただくぜ」

「はい。どうぞ」

弁当箱の中からおにぎりを一つ取って口に入れる。ふむ。塩加減といい、握り加減といい、文句のつけようがない。

「と、ところでアキ、皆……」

「どしたの美波？」

「良かったら、その……ウチのお弁当も食べてみない？」

ぎくしゃくしながら島田がバスケットの蓋を開ける。するとそこには色とりどりのサンドイッチがあった。

「美波、自分の分みただけど、本当に貰ってもいいの？」

「う、うん。ウチも瑞希のおにぎりもらっつから、それならこれも皆で、と思って……」

へえ。自分の分、ねえ。素直じゃないけど明久以外の男子にはバシてるみたいだぞ。

「それじゃあ美波、いただきますルアアーっ!？」

突如、明久の背中に分度器が突き刺さった。それに、どこからか邪悪な気配が漂っている。

「この気配、さては美春ねっ!？」

『く……っ! 気づかれましたか! こうなればー奇襲は諦めて突撃です! お姉様ああーっ!』

「ウチはアンタに構ってる暇はないのよっ!」

二人は土煙をあげて走り出し、そのままどこかへ行ってしまった。

「ところで、飲み物ってどこだ？」

「そう言えば、美波ちゃんが持っていたんですけど……」

島田はどこかに行ってしまったし、こうなったら自分らで調達するか。

「「「……………」」」

俺と明久、雄二、秀吉、ムツツリー二は即座にくるつと姫路に背を向け、無言で拳を突き出しあった。明久以外の皆はゲーで、明久はチヨキ。よしつ、勝った。

「悪いな明久。俺はコーラだ」

「俺はスポーツドリンクで」

「ワシはお茶じゃ」

「……………レモンスカッシュ」

他人の奢ってくれたジュースって、自分で買うよりも美味しいんだよな。なにせ奢りだし。

姫路にも注文を聞いた明久は、そのまま校舎に向かって駆け出した。

それからしばらくして。

姫路のおにぎりを食べた秀吉がその場に倒れ込んだ。

『犯人はにぎりめし』というダイニングメッセージを地面に残して。

「……………は？」

あまりに突然の出来事に、一瞬思考が止まる。

何故だ？ 安全じゃなかったのか？

「なあ姫路、本当にこのおにぎり、塩と米だけなのか？」

「あまり時間がなくて、ほとんど何もできなかったんですけど……………」

「ですけど…………？」

「三つくらい、特別な具を入れておいたんです。残っていた材料で」

その瞬間、自分の身体に異常が発生したことを、本能的に感じ取った。

「おい亮。顔が青いぞ」

「……………まさか、具入りのおにぎりを」

「ああ……………。どうやらそうみたいだ」

ぐらり、と視界が歪み、視線の先にいた秀吉の死体が目に入る。

「心配すんなよ、秀吉。独りぼっちは寂しいもんな……………。いいぜ。一緒にいてやるよ」

そして、俺はそのまま地面に倒れ込んだ。

第六十五問その二・Con Amore

『これより、一年生各クラスによる、応援合戦を行います。一年生の生徒はー』

グラウンドにアナウンスが響き渡る。昼休み明け一発目は、色とりどりの衣装で踊る応援合戦だ。

「次は応援合戦か。学ランなんて久しぶりだ」

「確かに。中学校以来だよ」

「亮と明久も学ランだったのか」

「……………同じく」

「ワシもじゃな」

「へえ」。秀吉はセーラー服だったんだね」

「明久よ。会話が繋がっておらんぞ」

そんな感じで和気藹々としていると、チアガールの衣装を手にした島田がこっちにやってきた。

「ねえ木下」

「嫌じゃ」

「う…………。まだ何も言ってないのに…………」

いや、雰囲気と持っている衣装で言いたいことが丸わかりなんだが。

「そんなこと言わないで。ほら、この衣装もかなり可愛いわよ?」

「可愛いから嫌なのじゃ」

秀吉は島田が広げてみせるチアの衣装から目を逸らすように、ふいっとそっぽを向いた。

「何度頼まれようと、ワシはチアガールはやらん。ワシはこちらの応援団をやるのじゃ」

「応援団は人数が余ってるじゃない。こっちは三人しかいなくて困ってるの。だから、ね?」

ん? 三人?

「なあ島田。三人つて言ったが、あと一人は誰のことだ？」
姫路と島田はわかるが、あと一人は誰に協力を要請したんだろうか。

「何言ってるのよ？ レンに決まってるじゃない」

「何ですと!？」

「ちょっと待て。そんなの初耳だぞ！」

「(マジか?)」

「(ええ。アンタが瑞希のおにぎりを食べて倒れてる間に、ね)」

「(どうしてまたいきなり)」

「(私は野球とかはあんまり得意じゃないから作戦を練ることくらいしか出来ないし、それならせめて応援合戦を頑張ろうと思ってね)」

「(なるほどな。んじゃ、精一杯やってこい)」

「(言われなくとも、よ)」

亮と替わって美波の方を見ると、未だに秀吉を説得しているようだった。

「美波。まだ説得を続けてるの?」

「そうじゃ。レンが入っておるんじやから、もうよかるう」

「いいえ。少しでも人数が多い方がウチの精神的ダメージがへるの。

大は小を兼ねるっていうことわざがあるように、胸だって、大きい方が良いのよ……」

「って美波!？ 始まる前からそんなに落ち込んでどうするのよ?」

墓穴を掘るぐらいなら、そんなことわざを使わなければいいのに。

「なんでそんなに嫌がるの? こんなに可愛いのに」

「可愛いからじゃ! ワシは男なのじやから、可愛いものは着ないのじゃ!」

「えっとね、木下。ここだけの話なんだけどー」

「なんじゃ」

「――実は、チアリーダーの衣装って……すごく男らしいのよ？」

「さてはお主、ワシを明久レベルのバカじゃと思っておるじゃろ！」

美波……。いくら何でもそれはないでしょ。

「お願い木下！ チアガールをやってくれない？」

「だから、ワシは応援団をやるのじゃ！」

秀吉のその言葉に、名案を思いついたように美波がポン、と手を叩く。

「じゃあ木下！ こうしましょう！ ウチが学ランを着るから、ア
ンタがチアを」

「それはワシにとって何の解決にもなっておらんじゃが！？」

「もう行くわよ、美波」「ちょっと待ってレン！ お願いもう少し
だけ！」

「ダメ。もうそろそろ着替えないと、流石に間に合わないわ」

チアガールの衣装に着替える為に美波を引つ張って校舎に向かう
途中、遠くの方でどこかへ走っている翔子と瑞希の姿が見えた。何
かあったのかしら？

気になって周りを見回したら、明らかに怒気を孕んだ雄二と、そ
の横で溜め息を吐いている明久が視界に映る。

「ねえレン。どうかしたの？」

「大丈夫よ。別に何もなし」

願わくばそうあって欲しいけど、そうもいきそうにないみたいね。
ちなみに、最終的に秀吉はサラシに学ラン姿でボンボンを持って

踊るといふ折衷案で妥協して、大いに観客席を沸かせていた。

第六十六問その一・Look at me・Love me do!

? ? ? の説明にあてはまる元素記号を次から選び、それぞれ正しい名称を書きなさい。

『Mn O S Na I Pb Ne』

? 体心立方構造で、水と激しく反応する。炎色反応では黄色を呈する。

? 沸点184・25、融点113・75。この溶液にデ

ンを加えると反応を起こし藍色を呈する。

? 原子量54。過酸化水素水の水と酸素への分解反応において、この酸化物が触媒として用いられる。

? 希ガス族・第二周期。空気を液化、分留して作られる。

姫路瑞希の答え

『? Na : ナトリウム ? I : ヨウ素 ? Mn : マンガン ? Ne :
ネオン』

1801

教師のコメント

正解ですそれぞれの特徴を覚えておくと、化学反応の説明などにもつながります。基礎的な特徴はしっかりと覚えておきましょう。

島田美波の答え

『書きたくありません』

教師のコメント

どうかしましたか。テストのボイコットとは感心しませんね。島田さんは真面目でよい子だと思っていたのに、先生はがっかりです。

わからないのであればまだしも、書きたくないというのは理由にもなっていない。そういった姿勢は、学力以前に人としての考え方において問題があります。今後はそのような態度を改めていかないと、いずれ社会に出たときに苦勞を

土屋康太の答え

『? N a : : ナ

? I : : イ

? M n : : ム

? N e : : ネ
』

神谷亮の答え

『? N a : : ナ

? I : : イ

? M n : : ム

? N e : : ネ
』

教師のコメント

島田さんに謝ってきます。

体育祭の種目の一つとつである野球大会の決勝戦。現在俺たちは一塁側に用意されたFクラスベンチで、それに向けてポジションや打順の確認をしているのだが……。

『雄二は8番で良かったの?』

『……………俺は英語も世界史も点数を取れているからな』

どうも雄二のご機嫌が斜めになっている。何があつたかは明久からあらかた聞いたが、果たしてこのままで大丈夫なのか?

ベンチのメンバーも含めた全員でグラウンド中央に駆け寄って整列する。三塁側からは教師陣が歩いてやってきて、俺たちと向かい合うように並んだ。

『プレイボール!』

『おねっしやーっす!』

一斉に頭を下げ、各自守備位置へ。こっちは後攻なので、まずは守備からだ。俺は自分のポジションであるショートに向かった。初の科目は化学。

『(うゝん……………。何かおかしいと思わない?)』

『(婚姻届のことか? それだったら明久や雄二の言い分も一理あると思うけど)』

『(婚姻届というより、翔子の様子よ。何だかいつもと違うというか、なんというか……………)』

『(まあ考え過ぎても仕方ないし、さっさとグラウンドに行くか)』
『……………そうね……………)』

そんな会話を交わしている内に、一番の布施先生がレフトフライでアウトになり、二番の寺井先生が一・二塁を抜くヒットを打って一塁に出た。

1アウト、ランナー1塁。そして3番バッターは――

『お手柔らかに、吉井君。――試獣召喚』

学年主任の高橋先生だ。今日はスーツではなくジャージ姿だから、いつもと違う印象をー

『学年主任 高橋洋子

V S

Fクラス 吉井明久

化学

801点

V S

57点』

『『『ぶほおっ！』』』 あまりの点数に、思わず吹き出してしまった。800点って、優希より高いぞ！？ でも、バットを持つ右手と左手の位置が逆だからもしかしたらいけるんじゃないかって敬遠かよ！？

『高橋先生。手が逆だな。それだと打ち難いはずだ』

『ああ、どつりで……。アドバイスありがとうございます西村先生』

少ししてから明久たちも気づいたようだけど、ボールを投げる前に高橋先生がベンチで待機していた鉄人に従ってバットを構え直した。明久はともかく、雄二がこんなわかりやすいことを見落とすなんて、いよいよどうかしてるぞ。

『ここで、こつ……』

高橋先生はバントの構えからバットをボールに当てにいった。あれは送りバントじゃない。ヒット狙いのプッシュバントだ！

でも、ボールの向かう先は俺が守っているショート。コレはいけ

について一切知らないらしい。

『高橋先生……。アウトなので、ベンチに戻って下さい』
『なぜですか』

『そういうものなんです……』

高橋先生は若干不安そうに自陣へと戻っていった。姫路といい、高橋先生といい、優希といい、どこか一般的な知識が欠けている気がするのはいのせいだろうか……。

『えっと……。はい。タッチアウトです』

『え？』

ついでに、呆気にとられて一・二塁間で立ち尽くしていた寺井先生からもアウトを貰った。全員が呆然としている間に、さつき俺からボールを受け取った島田がこっさり行動を起こしたファインプレイだ。ファインプレイなんだが……。なんなんだ、このやるせない気持ち。

この試合はこれからどうなるんだ？ 色んな意味で。

第六十六問その二・ヒーローは仮面の下に涙を隠す

『バッターアウト！ チェンジ！』

バッターの三人が全員三球三振に倒れ、俺たちの一回目の攻撃が終わった。どうでもいいが、俺たちの攻撃ってすごく短いな。

二回の表ということで科目は世界史となり、ピッチャーは再び明久だ。

『さあ来いっ！ 今度はさっきまでのようにはいかないはずだっ！』

お。明久のヤツ、自信満々だな。これは少しは期待できそうだー

『威勢が良いな吉井』

鉄人か。こりゃ無理じゃね？

『補習教師 西村宗一』

V S

Fクラス 吉井明久

世界史

741点

V S

121点

真っ向勝負は無理だと悟ったのだろう、明久たちは鉄人を敬遠させるつもりらしい。でも雄二は移動はしたものの、立ち上がる様子はない。もしかして何か作戦があるのか？

『ボール』

そんなことを考えている間に一球目が投げられる。その球を鉄人は不機嫌そうに見送った。

『……これは、坂本の指示か？』

『そうだが、何か？』

『そうか。お前たちは勉強が苦手でも、こういったことはわかって

いるものだと思っていたんだが……。まだまだ教育が必要だといふことか」

「？何を言ってるんだ？敬遠くらい、勝負の世界では常識だろう。この程度のことでも文句を言うとはー」

「いいや。そういうことを言っているんじゃない。……いいか、坂本。教師として一つ言っておく」

鉄人と雄二の会話の最中に明久がミットめがけてボールを投げる。……あれ？鉄人の様子がおかしい。

「ー何事も、やるならば徹底的にやれ！」

ガギン、と豪快な音が響き、ミットに向かっていたボールが消え、打たれたボールは一瞬にしてフィールドの中に存在しなくなった。

「ホ……ホームラン！」

「……………ふん」

鉄人の召喚獣が淡々と各ベースを回る。これはいよいよ、いつもの雄二とは言えない状況になっているな。

『体育の授業ではなく、召喚獣で生徒と野球をすることになるとは……………。試獣召喚』

次の相手は5番打者、保健体育の大島先生。運動神経の良さは言うまでもないから、特に注意が必要だ。

『ファール』

一球目はなんとかファール。そして二球目を投げようとしたその瞬間、明久の召喚獣が無理矢理動きを調整したように見えた。

「ーっ！」

投げられたボールはストライクゾーンに入っており、大島先生の召喚獣が振ったバットに当たる。飛距離は伸びてないものの、三塁を越えていた。

『間に合えーっ!』

横溝の召喚獣がその打球を必死に追いかけて、なんとか捕球成功。

『……………』

しかし審判がアウトの宣告をしない。恐らく明久のさっきの二段モーション気味の投球に対してボーク（反則行為の一つ）を取るかどうか考えているんだろう。

『今のはアウトで構わない』

審判に対して、打者の大島先生が自陣に戻りながら告げた。ちょっと癪に障るけどー正直な所、助かった。

「（レン。今の二段モーション、どう思う？）」

『（私が見た限りだと、なんだか明久が何かに驚いていたように見えたわ）』

「（何か、って何だ？）」

『（さあ？ 雄二から突然指示が出たか、それとも打者の先生に考えを見破られたと思ったか……。今は明久よりも、雄二をなんとかしないと、この試合には勝てそうにないわよ）』

そんな不安定な状態のまま、試合が続く。

現在の状況はツーアウト満塁。長谷川先生がフライを打ち上げてくれたが、次の打者にはなんとホームランを打たれてしまい点差は二点。他の二人の打者にはそれぞれシングルヒットとフォアボールという、凄惨な結果だ。

そして、迎える打者は一巡して再び一番の布施先生。二度目となれば、さっきのようなミスは期待できない。

この状況もあってか、遠目からでもわかるくらい明久からは緊張が漂っている。

そんな明久に対して秀吉は牽制球のサインを入れ、明久もそれに

従いボールをファーストへ山なりに投げる。

『セーフ』

ランナーはアウトになるわけもなく、悠々と塁上に立っている。こっちもこれでアウトを貰えるとは思っていないが、緊張を解すには十分だろう。

『タイムじゃ』

そう思っていると、タイムを取った秀吉は明久がいるマウンド上へと近づいた。そして明久に何かを耳打ちした後、ファーストへと戻っていった。アドバンスでもしたのか？

『タッチアウト、じゃ』

『……はい？』

すると一塁側からしてやったり、という秀吉の声が聞こえてきた。見ると、秀吉の召喚獣はグローブの中にボールを握っており、一塁から離れてリードを取っていた相手にそのグローブを当てていた。これってまさか、隠し玉か!？

『ランナーアウト、チェンジ!』

審判が攻守交代を告げる。

「木下、ナイス!」

「隠し玉なんて、味な真似しやがって!」

「よくやった秀吉!」

「……………グッジョブ」

「これでワシも役に立てたようじゃの」

さて、こつからが本番だー

「これで、気持ちよく秀吉と一緒に風呂に入れるっ！」

「……お主はいきなり何を言っておるのじゃ？」

明久がいきなり妙なことを言い出した。まさかさっきの姫路のおにぎりによる影響じゃないだろうな？

「あれ？ だって、さっき秀吉が僕のところに来た時、一緒にお風呂に入ろうって」

「何を言っておる。ワシはそんなことは一言も言っておらんとー」

と、そこまで言ってから、急に思い直したかのように意見を翻した。

「い、いやっ。そういえば言ったの！ そうじゃな！ 風呂じゃ！ 明久よ、是非ワシと共に男湯へーくふうっ」

「あらあら、ダメじゃない木下。お風呂は性別ごとに別れて入るものなのよ？」

「そうですよ木下君。お友達と一緒にと言つのなら、お風呂は後で私たちとゆっくり入りましようね？」

「し、島田に姫路！？ 落ち着くのじゃ！ お主ら、ついにワシと風呂に入るといふことにすら違和感を覚えなくなっておるのか！？」

姫路と島田が秀吉の腕を抱えてにこやかに微笑んでいる。なんだかよくわからんが、とりあえず明久がひどく落胆しているのはわかった。

「さあ皆、今度はこつちの攻撃だよ！ そろそろ流れを引き込もう

！」

「」「」おうっ！」「」 明久のかけ声で、クラスの皆に気合いが入る。

よし、いくぞー！

「さあ皆、またこっちの守備だよ。頑張ろう」

「……おー……」

早い。早すぎる。こっちの攻撃が一瞬で終わってしまったぞ。

俺を含めた打者が三人ともアウトになって3アウト、チェンジ。ヒットどころかデッドボールやフォアボールすら貰えていない。一方的にもほどがある。

現在は三回の表。1番打者の布施先生にヒットを打たれ、2番打者の寺井先生にはセーフテイバントを決められてしまい、気が付けばノーアウト、一・二塁で再びピンチを迎えてしまった。

そして次のバッターはというと、

『宜しく願います』

学年主任を務める高橋先生だ。

今度は明久たちも牽制をすることなく、アウトコースの高めに速い球を投げる。

『まあ、予想通りですね』

『……っ！』

しかしコースを読まれ、あえなくプッシュバントで打たれてしまった。そしてそのボールの向かう先は、

「亮っ！！」

またもや俺が守るショートだ。俺は召喚獣を低く構えさせ、ボールを取って地面で踏ん張れるスタンスを取る。

「大丈夫だ明久。必ず取ってやる！」

「ダメだよ亮。今回の科目は古典なんだ！」

「………は？ 古典だって？」

明久の言葉を聞いた瞬間、ボールを取ったはずの俺の召喚獣がさつきよりも遠くに吹き飛ばされた。しかもボールはセンター前へと転がっている。これはマズい……っ！

『高橋先生！ 今度はきちんと一塁から順に回ってください！』

『わかっています。同じミスは、二度と犯しません』

高橋先生の召喚獣はもの凄い速度で順番に塁を踏んでいく。まったく、なんて速さだ。

そしてその速さゆえー

『高橋先生……アウト、です……』

『なぜですか』

速すぎて、前の走者を追い越してしまった。

『』……『』

その場で見ている全員が言葉を失う。

野球のルールの中に、“前のランナーを追い抜いた場合、追い抜いたそのランナーはアウトになる”というものがある。

ま、まあ、このルールは知らなくても仕方がない……の、か？
滅多に起きることでもないし。

『とにかく高橋先生。アウトなので戻ってください……』

『納得できません』

『そういうものなので……』

なんだろう。この試合を通じて、高橋先生が急に身近な存在に感じられてきた気がする。

『えつと……、はい。タッチアウトです。ほい、島田っ（ヒュッ）』

『えっ？』

『（パシッ）オッケー。それじゃ、こっちもアウトです』

『あ』

高橋先生の行動に啞然としていたランナー二人に、須川と島田がそれぞれボールを握ったグラブを当てた。

『……………アウト、チェンジ』

審判の宣言も、どこか力が抜けている。そりゃそうだ。こんなトリプルプレイ、見たことも聞いたこともないからな。

「まあとにかく、これでピンチは凌げたわけだ」

「皆！ そろそろ一本出そう！ こっちの最初のバッターは」

「お主じゃな、明久」

あ……………明久か。

「……………期待してるぞ、坂本」

「坂本、お前だけが頼りだ」

「頼む。ホームランをかつ飛ばしてくれ」

「皆、それは僕に余計なプレッシャーをかけまいという気遣いなんだよね？」

「……………あ……………まあ、そうだな……………。一応吉井も……………」

「もういいよ！ 形だけの声援なんていらぬよ！」

皆のあまりの期待の寄せ方に、明久は顔で凹んで心で泣いているようだった。

「あの、明久君。頑張つて下さいね」

「そこへ、姫路からの暖かい声援が入る。

「ひ、姫路さん……………！ ありがとう！ 頑張ってくる！ よしっ！

この打席を、姫路さんに捧げるよ！」

明久は意気揚々と打席に向かっていった。

『デッドボール』

「ぎにやあああつ！ 手が！ 左の手首から先の感覚がああつ！」

「す、すいません吉井君……。力加減に失敗してしまつて……」
明久……。すごく情けないぞ……」

「さて。俺の番か」

明久が一塁へ進み、ネクストバッターの雄二が打席に入る。現在ノーアウトでランナーは一塁。千載一遇のチャンスと言えるだろう。「今度は失投しないように気をつけなくては……」

布施先生の召喚獣が投球姿勢を取り、ボールを投げる。さつきデッドボールを出してしまったからか、コースはど真ん中で球速も普通になっている。これは絶好球だ！

「……………」

雄二がその球を見てピクツと動きーそのま見送る。

「ストライク！」

その結果、ストライクカウントが一つ増えた。あの球を打たないなんて、何か考えでもあるのか？

次はアウトコース低めの球。ギリギリストライクゾーンに入っているが、これはどうするんだ？

「……………」

さつきと同じように雄二は一瞬体を震わせて、そこからバットを動かした。

カツツと半端な音を響かせて、ボールがピッチャー前に転がる。

さてはアイツ、判断に迷つてきちんとバットを振り切らなかつたな？

「アウト！」

明久の召喚獣が到達するよりも早くボールが二塁手のグローブに収まり、そのまま受け取ったボールを一塁へ向かつて投げた。

『アウト!』

打者の雄二もアウトになり、一気に2アウト。残念ながらチャンスをものにできなかった。

「くそおっ!」

ベンチに戻る雄二が、悔しげに吠えている。レンもさっきから柄にもなく黙ったままだし、どうしたものかな……? ?

『ストライク! バッターアウト! チェンジ!』

「はう……。すいません……」

三振を取られてアウトになった姫路さんが戻ってくる。これで攻守交代だ。

三回が終わってスコアは0対1。スコア上では1点差だけど、試合運びはこれでもかと言うほど圧倒的な差があった。

こうなったらダメで元々。一応雄二を宥めてみようか。

「雄二。気分はー」

「ああ?」

話しかけたら凄い目つきで睨まれた。やっぱり怒りは全然収まっていないらしい。

「まったく……。雄二も大人になりなよ。霧島さんだってたまには

機嫌の悪い時くらいあるだろうからさ」

「何が機嫌の悪い時だ！ そんなもんで納得できるか！」
火に油を注いだが如く、更に怒りを燃やす雄二。

「だいたい、どうして俺が、本人の同意もない紙切れ一枚没収された程度で、あそこまで怒られなきゃいけないんだ！」

そして、本日何度目かの遠吠えを始めた。すると、そんな中——
「ねえ、雄二」

この試合が始まってから初めてレンが口を開いた。
「なんだ」

「翔子が没収されたのって、本当に婚姻届なの？」

レンはいきなりそんなことを言い出した。

「レン。一体どういうこと？」

「明久。確か翔子は、没収品について『結婚式まで大事にとっておく』って言ってたんでしょ？」

「うん。そうだよ」

だからこそ、婚姻届なんじゃないのだろうか。

「それがどうしたんだ、レン」

「雄二。結婚式の最中、婚姻届を使う場面がどこにあるのかしら？」
レンの言葉について僕も考えてみる。確かにそう言われてみれば、婚姻届は結婚式よりも前に市役所に持って行くものだから、結婚式までとっておく必要はない。

ん？ ……ということは、

「没収されたのは婚姻届じゃないってこと……？」

「ええ。翔子が没収されたのは、恐らく結婚式の中で使うものだと思うわ」

じゃあ、雄二は勘違いをしていただけかもしれないってことなのかな？

「雄二、他に心当たりはないの？ アンタが翔子に手渡した物とかでもいいから」

「心当たりって言われてもな……。そういえば前に、お袋から渡さ

れた物を翔子が持ってた袋に入れた覚えがあるな」

霧島さんは袋ごと没収されたって言ってたから、霧島さんが怒った原因は雄二がその袋の中に入れた何かで間違いない。

「あの、皆さんどうしたんですか？」

するとそこに、姫路さんが小さく首を傾げてやってきた。

「あ、瑞希。アンタは翔子が没収された物について知らない？」

「えっと……。確か、如月ハイランドで坂本君から貰ったヴェールだって聞いたんですけど……」

姫路さんの口から出てきた言葉は、レンの推測を確信に変えた。

「坂本君……。もしかして、自分で翔子ちゃんに渡したのに、没収された物を知らなかったんですか……？」

「……………知らなかった」

さつき霧島さんに雄二が言った台詞を思い出す。

あんなもん

つまらない物。

俺が代わりに捨ててやる。

小さな頃からの夢を大事にし続ける彼女にとって、それはどれだけ残酷な言葉に聞こえただろう。

勘違いなんだから、どちらが悪いとまでは言わない。でも、どちらに同情するか、と言われたらこの事情だと間違いなく霧島さんだ。知らなかったとは言え、それだけのことを雄二はやってしまっている。それがわかっていいるからこそ、雄二自身もこうやって真実を知って呆けているのだろう。

「……………立って、雄二」

茫然自失として座っている雄二に、レンが声をかけた。

「なんだ？ レン。一体どうしー」

「いいから立って……！」

突然の大声に雄二は脊髄反射的に立ち上がり、近くにいた皆も驚

いた。

そこに、

ーパシンツ

乾いた平手の音が響き渡った。

霧島さんのそれと比べると随分軽いものだったけど、雄二の目を
覚まさせるには充分だった。

しかもレンはその拍子にバランスを崩してしまい、その場でたた
らを踏んだ。

そのまま雄二に向かって「一度だけよ……」と呟く。

「一度だけよ。今回ばかりは無理強いする気は全くないし、アンタ
がどんな返答をしても絶対に責めないわ。だから正直に答えて!!」

雄二を見据えたまま、レンは言葉を続ける。

「アンタ、この勝負に勝つ気はあるの!？」

「……当たり前だ!」

一瞬の沈黙が流れた後、雄二は力強く答えた。

ー今までに見たことがないほどの、真剣な顔で。

「そう……。なら明久」

レンは雄二と僕を交互に指差して、こう告げた。そして、

「ポジション交代、いける?」

レンはそんな提案をしてきた。いけるのかも何も、

「やるしかないみたいだね。この勝負、負けられないんだし」

「……そうだな」

レンの提案の意図に気が付いた僕と雄二は、小さく笑みを浮かべ
た。

「どういうことじゃ明久にレンよ。ピッチャーが雄二というのは良
いのじゃが、その球を捕れるキャッチャーがおらんではないか。ま
さか、姫路に任せるのかの?」

「ははっ。何を言ってるのさ秀吉。姫路さんにそんなきついことを

やらせるわけないじゃないか」

キャッチャーというのは色々と仕事が多い。野球がよくわからない姫路さんに任せるのは酷なポジションだろう。

「じゃが、そうなると雄二の球を捕れるのは」

「いるよ、一人。この状況でキャッチャーをできるのが」

簡単な話だ。捕り損なうと戦闘不能になるというのなら、全部完全に捕ればいい。身体の正面で、ミットの真ん中で、ダメージの無いように受けければいい。ただそれだけのことだ。それだけの操作の技量が……僕にはある。

「来い雄二。――僕が、お前の球を全部捕ってやる！」

「言つたな明久。その台詞、後悔すんなよ。受け損なったらお前の召喚獣が消し飛ぶからな！」

四回表。 1点ビハインド。 まだまだ勝負はこれからだ！

第六十七問・Little Busters! (前書き)

召喚獣野球大会編はこれにて終了です。

第六十七問・Little Busters!

問 次の() () を埋めて、『思いもよらぬ所に影響が及び、意外な結果を生じること』という意味を持つことわざを完成させなさい。

『風が吹けば() () 』

姫路瑞希の答え

『風が吹けば(桶屋が儲かる) 』

教師のコメント

正解です。順番としては、『風が吹く 土埃が目に入る 失明する 三味線の弾き語りを職業とする人が増える 三味線用の猫の皮がたくさん必要になる 猫がたくさん殺される 猫が減る 鼠が増えて桶をかじって駄目にする 桶屋が繁盛する』となります。桶屋のことを銭湯と勘違いして『風が吹く 肌寒くなる 銭湯を利用する人が増える』と考えやすいので、気をつけてください。

土屋康太の答え

『風が吹けば(スカートが捲れる) 』

教師のコメント

どうしてその発想に至るのでしょうか。

神谷亮の答え

『風が吹けば(ムッツリ商會が儲かる) 』

教師のコメント

君たち2人の思考回路が気になります。

「おっしやテメエら！ こっちの攻撃はあと二回！ きっちり点数もぎ取って、俺らのお宝を奪い返すぞ！」

「おっ！」「おっ！」

「向こうにや点数は負けてるが、運動能力じゃ決して負けてねえ！ 若さつてもんを見せてやれ！」

「おっ！」「おっ！」

「ここから先、俺は全力を出す！ だから……お前らも協力してくれ！ 没収された、大事な物を取り戻す為に！ 合い言葉は——」

「Get back ERO-BOOK!」「」

「反撃、行くぞお前ら！」

「おっしやあーっ！」「」

雄二のヤツ、やることはつきりして、やっと調子が出てきたみたい。

「近藤、横溝、秀吉！ 作戦だ。いいか？ どうせこのままともに向こうとやりあったところで勝ち目はねえ」

確かに、たとえ偶然でフォアボールやヒットが出ても、点数を取ることがほぼ不可能に近い。

「だから、その後の例の作戦に全てを賭ける。お前らは、なんとか時間を稼いでくれ」

「うむ。了解じゃ」

「エロほー参考書の為だ。時間稼ぎくらいいくらでもやってやるさ」

「その代わり、次の回はしくじんなよ」

三人は首を縦に振り、快く作戦を承諾してくれた。折角活躍できるチャンスなのに時間稼ぎを引き受けてくれるあたり、さすがFクラスは違うわね。

『エロ本、エロ本、エロ本……』

『抱き枕、水着写真、シャワーカーテン……』

……本当、さすがFクラスよね……。

『プレイッ！』

反則にならない程度に引き延ばし、バッターボックスに入る近藤。「ねえ雄二。仕込みはどう？」

「バッチリだ。クラスの連中にもきちんとして指示は出している。あとは、時機がくるのを待つだけだ」

「そう。じゃあ、この回が力ぎってわけね」

「ああ」

雄二と話しながら試合を見守る。なんとかしてうまくやって欲しいわ。

『ストライツ！ バッターアウト！』

『ぐ……!!』

気が付けば近藤がアウトになり、次のバッターである横溝も討ち取られてしまい、残るは秀吉一人となった。

チャンスはまだ来ない。

「そろそろ、来てもいいと思うんだけど……」

「あと少しよ、明久」

「あと少しで始まる。頑張ってくれ秀吉……!!」

『ファール!!』

話している間にも試合は続く。秀吉はバットをコンパクトに振り、必死で教師チームの豪速球に食らいついていた。

『ファール』

これでカウントは2 - 1。あつちはまだ余裕があるのに対して、こっちはもう一球たりともミスはできない。こうなってくると、秀吉がアウトになるのももう時間の問題ね。

『ファール』

ボールが投げ込まれる度に、背中がゾツとする。合図はまだなの？

その時、

「……………来た」

不意に、ムツツリーニが小さな声で呟いた。

『ーージジ…………ジ…………』

校舎に取り付けられたスピーカーから、ノイズ混じりの音が聞こえてくる。

「来たかつ！」

雄二の嬉しげな声に一瞬遅れ、アナウンスが響き渡った。

『ーこれより、中央グラウンドにて、借り物競争が始まります。出場選手の皆さんは、所定の場所にーー』

「……………来たあつ！……………」

クラスの皆の声が重なる。

その直後、秀吉が打ち上げた球が捕球されて、ついにアウトとなった。でも、これで目的は果たせた！

「やれやれ……………。どうやらうまくいったようじゃの……………」

「ああ！ よくやってくれた秀吉！ 近藤！ 横溝！」

戻ってきた秀吉の肩を叩いて雄二が喜ぶ。この瞬間を待ってたわ！ 吉井、坂本。何を喜んでいるのか知らんが、守備につく準備をし

る」

鉄人がはしゃいでいる明久たちのところへ来て、準備を促す。

「わかってます。けど、ちょっと待って下さい」

「？ 何を待てと？」

「今にわかりますよ。そろそろ来ますから」

状況を把握しきれていない鉄人に向かって明久が笑ってみせる。

すると、その向こうからこっちに駆けてくる人影が見えた。私たちがFクラスのクラスメイトだ。

「なんだアイツらは。あんなに急いでー」

疑問符を浮かべる鉄人をよそに、こっちに走ってきた三人のクラスメイトたちは野球場にいる立ち会いの先生に大声で叫んだ。

『遠藤先生！ 借り物競争です！ すいませんが一緒に来て下さい
っ！』

『えっ？ でも私、今からここでリーディングの立ち会いを』

『いいから来て下さい！』

『でもー』

『なんと言おうとダメですよ！ 今日は、野球よりも体育祭が優先
されるんですから！』

『『『『ーっ！？』』』』

先生たちが目を見張ったのがわかった。そう。これについては事前にルールで決めてあることなのだ。

「坂本、神谷。これは貴様らの作戦か」

「さて。どうでしょうね」

「とぼけるな。さっきからここに来ている生徒は全員Fクラスの間
間だろうが」

「ふふ。偶然じゃないですか？」

立ち会いの遠藤先生の他にもベンチにいた二人の先生がFクラスのクラスメイトに連れていかれる様子を見ながら、鉄人が私と雄二

を交互に見る。

勿論、偶然なわけがない。教師チームのオーダーが判明した時に、雄二と私がクラスメイトに頼んで、先生を借り出してもらったのだから。

「これで立ち会いの先生はいなくなつたな、鉄人」

「仕方ない。こうなつたらさっきの回の立ち会いの先生にまた頼んで」

「あら。それはルール違反ですよ。事前に決めましたでしょう？

『同じ科目は二度使わない』って」

「ならばどうしろと言つんだ。立ち会いの教師は他にいない。試合に参加している教師は立ち会いができない。こつちのチームに八人でやれとでも言うのか？」

鉄人は私たちがこれを利用して、この勝負を無効試合に持ち込もうとしている、とでも思っているのかしら。まさか。そんな面倒くさいことをするだけ無駄だというのに。

「鉄じー西村先生。まだ他にも勝負できる科目があるじゃないですか」

「だから何を言っているんだ吉井。さつきから立ち会いの教師がいないと」

「違いますよ。立ち会いの教師がいなくても、野球の勝負が可能な科目が残っていると云っているんです」

これが、雄二と私が最初に考えた作戦。体育祭のプログラムとルールを参考にして、Fクラスの勝利の為に練り上げたもの。

「五回の勝負は、体育のー実技で勝負といきましょう」

授業科目だからといって、その全てが座学というわけではない。

「さあ全員、グローブをつける！ 五回の勝負はハードだぞ！」

雄二が事前に野球部から拝借しておいたグローブを指差す。

野球大会決勝戦最終回。たった一回だけの、教師と生徒の野球大会が幕を開けた。

『バッターアウト、チェンジ!』

バッターである教師三人を明久が打ち取り、審判の攻守交代のコールが響き渡った。鉄人や大島先生が相手じゃなくて本当に助かった。

「本当は真っ先にあの二人を借り物競争で連れて行ってもらいたかったんだけどね」

「人の良い遠藤教諭とかならばともかく、鉄人たちを相手にそれは厳しいじゃろ」

「まず間違いなく借り物の中身を確認されるんだろうな」

それじゃ流石にこっちの嘘がばれてしまい、元も子もないからな。そんなことを話しながらベンチに戻る。

しばらくして外野のメンバーも全員戻ってくると、雄二が俺たちの顔を見回してから話を始めた。

「さて……。これで、残すところは俺たちの攻撃だけとなった」

現在の状況は0対2で、今は最終回。これが最後のチャンスだ。

「2点とって追いついてもダメだ。ここで逆転できなきゃ、俺たちは負ける。延長戦に入ったら勝ち目はねえ」

延長戦ともなれば、借り物競争に連れ出された先生も戻ってきているだろう。そうになったら、またテストを使った勝負になる。そうになったら俺たちの勝ちも絶望的だ。

「この一回が、俺たちの正念場だ。何が何でも3点もぎ取れ。いい

か、絶対に勝つぞ」

「「「おうつ！」「」」

気合いは充分。あとはとにかく勝つだけだ。

と、その時、

「それじゃ、ウチは土屋に交代してもらおうかな」

こちらのセカンドバッターを務めるはずの島田が、突然そんなことを言い出した。

「どしたの美波？ 自信がないの？」

「そりゃまあ、ね。いくらなんでも、ウチだって男子と同じレベルで野球なんてできないもの。体力もそうだけど、経験でも敵わないし」

確かに、授業を抜け出してまで野球をやっている俺たちとは、経験の量はどうしても違ってくる。

「そ。だから、土屋と交代。きつとウチよりウチよりうまくやってくれるだろうし、それにこういう時って、男の子が頑張るから格好良いんじゃない？」

そう言って、島田は楽しそうに笑った。

「それじゃ神谷、頑張ってるね」

「亮。頼んだよ」

『神谷。一発かましてくれ！』

『期待してるぞー！』

「おう。任せとけ」

皆の声援を受け、バットを担いでバッターボックスに向かう。

『（というわけで亮。私も後は、アンタに任せるわ）』

『（何言ってるんだ？ お前にも手伝ってもらおうぞ）』

『（……まさか、アレやる気なの？）』

『（もちろん。ここでやらなきゃ勝ち目はないぞ？）』

『（はあ……。これから明日まで大変な感じになりそうね……）』

『（ま、それはそれとしてー）』

今はこの勝負に勝つー！

『プレイツ!』

審判が五回裏の開始を宣言する。バッターは俺。対するピッチャーは、我らが体育教師、大島先生だ。ちなみにキャッチャーは鉄人が務めている。おそらくクロスプレーを警戒してのことだろう。

大島先生が一球目を投げる。ボールは勢いよくキャッチャーミットへと叩き込まれた。

『ボール!』

一球目はギリギリストライクゾーンを外れていたようだ。続いて二球目。バットを振った瞬間、ボールが横方向へ変化した。これって……スライダーかよ!?

『ストライツ!』

まったく。なんて球を投げてるんだ。

大島先生が右腕で額の汗を拭う。

俺は後ろ足に体重を乗せて、力を爆発させるように溜めを作る。

三球目。今度はストライクゾーンに入った外角のストレート。俺

は軸足に体重を移し、身体全体でバットを振り抜いた。

ーガギンッ

豪快な音が響き、ボールがセンター越しにバウンドする。その間にも俺は走り続けている。

「大島先生っ！」

一塁、二塁、とベースを蹴り、三塁に到達する頃、背後で中継に入った大島先生がグローブでボールを受け取る音がした。

三塁のコーチャーが「止まれ」の指示を出す。

確かに、このままじゃ間に合わない。でもー

「『神谷！？』」

俺は三塁ベースを蹴ってホームベースを目指した。ここまで来たからには、絶対に生還してやる！！

ホームベースまであと約五〜六メートルのところ鉄人が大島先生からボールを受け取った。

ホームベースに向かう俺に対して、向こうはブロックの体勢。これはクロスプレイになる。体当たりで鉄人がボールをこぼせば俺の勝ち。完全にブロックすれば鉄人の勝ちになる。

「ーっ！！」

姿勢を低くし、前のめりになって衝突に備える。鉄人も同じように体重を前に向け、衝突に備える。衝突まであと三メートル。

「（んじゃ、いくか）」

「（ええ。せーのっ！！）」

その瞬間、俺の身体はさらに加速して、鉄人へと激突した。

土煙が舞い、俺と鉄人の姿を隠す。

そしてー鉄人の手からボールがこぼれ、俺の手はホームベースに触れていた。

『……セーフ!』

「……いよつしゃああーっ!!!!」

Fクラスベンチ全員が立ち上がって鬨の声を上げた。

「この前の職員室では手加減していたってことか、神谷」

パンパン、と服についた土を落しながら鉄人が言う。

「いや、いつもこんなこととしていたら身体が保ちませんって。それより、そっちこそ大丈夫ですか?」

「? 何がだ?」

「ケガとかしてませんか?」

そう言った俺を見て、鉄人は楽しげに告げた。

「ふん。俺を誰だと思ってるんだ」

その言葉を聞き、俺はベンチへと戻った。

「ねえ亮。最後に加速したようにみえたけど、一体どうなったの!」

ベンチに戻るといきなり明久がそんなことを聞いてきた。

「あれは俺とレンで協力して初めてできる、力のリミッター解除み
たいなもんだ」

「リミッター解除?」

「ああ。たまに多重人格者の中に普通の人よりも飛び抜けた力を持つ人がいるんだ。んで俺とレンの場合、両方の人格が協力することで擬似的にその状態になれるってワケだ」

「……って、それよりも、

「お前ら、後は頼んだぜ」

「……………任せろ」

「うん!!」

「絶対勝つから待ってるよ!」

ムツリニ、明久、雄二と順番にハイタッチをして、次の打者であるムツリニがバッターを持ってバッターボックスへ向かった。

そして—————

『———体育祭総合優勝、———D。代表は前へ』

『はいっ』

野球大会を終えて、最終種目のクラス対抗リレーの後は閉会式。俺たちはグラウンドに整列して、優勝クラスたちの表彰を見守っていた。

ちなみに俺たち二ーFの順位は学年で四位、全体では一三位。途中までは良い線を行っていたのだが、借り物競争での無得点が響いてこの結果になった。これは傍から見ても決して良い結果ではないだろう。

でも、

『――生徒・教師交流召喚獣野球。優勝、二―F』

……これで、これで奪われていたお宝が返ってくるんだ！ 嬉しくないわけがない！

『――それでは、これにて文月学園体育祭を終了します』

各競技の優勝クラス発表と学園長のありがたいお話も終わり、これで体育祭の全プログラムは終了。他のクラスの生徒たちが帰宅の途につく中、俺たちは早速担任の鉄人のところへと集まった。

『さあ、俺たちのお宝を返して貰おうか！』

『俺のDVD！ 俺の写真集！ 俺の抱き枕！』

『俺の聖典！ 俺の宝物！ 俺の参考書！』

口々に没収品の返還を要求するクラスメイト。鉄人はそんな俺たちを見ながら溜め息を吐いて、

『……まあ、約束は約束だ。没収品は返還しよう』

と仕方なさげに呟いた。

『『『よっしゃあー！』』』

「では、この紙に没収された品と、名前を書いて提出しろ。一両日中には返還する」

『『『はい』』』

こういう時だけ返事の良いクラスの皆が、こぞって鉄人の渡した紙に没収された物の名称と、自分の名前を書いていく。きつと雄二はあの粗野な外見には全く似合わない、ウェディング用品の一つの名前を書くんだろう。霧島に渡す為に。

『工口本工口本工口本……』
『写真集写真集写真集……』
『抱き枕抱き枕抱き枕……』

……どうでもいいが、『Hなお姉さんが（ピー）して（ズキューン）してあげちゃう』とかいうタイトルを平然と書いている人が大勢いるクラスって、世間一般から見たらどう映るんだ……？

用紙を提出して和気藹々と勝利を噛み締めている俺たちに、鉄人が衝撃的な言葉を告げた。

「……さて。それではここに書かれた没収品は、後日きちんと郵送する」

「は……？ 郵……送……？」

「宛名はお前たちの保護者になる。全員、到着を楽しみにしているんだな」

郵送。保護者。つまり……

『『『はああああつ！？』『』『』』

つまり姉貴宛てに俺のスケッチブックとかが届くってことか！？

「良かったなお前ら。海外からのゲストも大満足だったようで、学園長は機嫌良く返還を快諾してくれたぞ」

全然良くねえ！ 機嫌が良いんなら普通に返せっ！

「それと、学園長からの伝言だ。『学園としては返還してやるけど、子供として持っていて良いものかどうかの判断は、アンタらの保護者に一任する』とのことだ」

『『『あ、あのババアーっ！』『』『』』

そこら中からクラスメイトの怒号が響き渡る。俺は……まあ、大丈夫かな？

『それでは、HRを終了する。各自、寄り道などせずに真っ直ぐ帰

るように』

『『『あつ』』』

言うだけ言うと、さっさと鉄人は校舎へと歩き去って行った。

「皆、やっぱりまた職員室を襲おう。僕らの生きる道は、それしかない」

「いいことを言ったな吉井。俺もそう考えていたところだ」

「実は俺もだ。気が合うな」

明久を筆頭として、クラスメイトたちが再び一致団結している。

「亮も頼むよ！」

「みぎやあああつ！！！」

明久が俺の肩を叩いた瞬間、その場所に激痛が走った。

「え！？ どうしたの！？」

「さっきの……リミッター解除の……副作用みたいなものだ……」

一時的に並外れた力が出せるのはいいんだけど、その代わりに激しい筋肉痛が翌日まで続くのだから正直たまったもんじゃない。

（帰りに新しい湿布でも買おうかな……）

頭を寄せ合う明久たちを尻目に、俺はそんなことを思っていた。

第六十八問その一・何故ラピュタの再放送を何度も見てしまつたのだろう。DVD

体育祭から数日後。僕は郵送されたことで姉さんに参考書（エロ本）が見つかった代償として姉さんの買い物に荷物持ちとして随伴させられていた。

「明久君？」

「あ、吉井君だ」

「ん？」

そしてその帰り道。荷物を載せた台車を押していると、背中から声をかけられた。誰だろう？

「あら。瑞希さんに優希さんですか。こんにちは」

「こんにちは。玲さん、明久君」

「こんにちは。玲さん、吉井君」

「こんにちは。姫路さんに桂さん」

振り返ると、そこにはグリーンのチュニックとスカートという格好をした姫路さんと、Tシャツにデニムという格好をした桂さんがいた。

「明久君たちもお買い物ですか？」

「うん。この通り」

僕が押している台車の上には、オープンや生活雑貨、それらを買った店の福引きで当たった海の幸詰め合わせセットが載っている。結構な買い物量だ。

「わあ……。凄いですね」

「吉井君。もしかして、何かご馳走でも作るの？」

「実はさつき、運良く福引きで当ててくれたんです」

言いながら姉さんが魚介類の入った発泡スチロール製の箱を示す。確かにこの荷物を見たら、何か特別な料理を作ろうとしているように見えるよね。

「ところでお二人はどちらへ？」

「私は夕飯のお買い物です」

「私は瑞希ちゃんの付き添いです」

そう言つて、手提げ袋を掲げて見せる姫路さんと桂さん。きちんと袋を持参しているあたりが二人らしい。

「そうすると、今日は二人ともが家の夕飯を作るのですか？」

「はい。家のと言つても、両親が出かけているので自分と優希ちゃんの分だけなんですけどね」

「え？ 桂さんの分も？」

「うん。今日は瑞希ちゃんのご両親が用事でいらつしやらないから、私も瑞希ちゃんの家で夕飯をご馳走になるつもりなんだよ」

そういえば、姫路さんつて一人っ子だっけ。

「お父様とお母様の帰りは遅いのですか？」

「あ、はい。友達の結婚式で、ちよつと遠くに行つていたので」

つてことは、戻ってくるまで家には姫路さんと桂さんだけか。最近何かと物騒だし、いくら二人とはいえ女の子だけだとちよつと心配だな。

なんて思つてしていると、どうやら姉さんも同じ事を考えたらしく、姫路さんと桂さんにこんなことを言つていた。

「それなら瑞希さんに優希さん。よろしければご一緒に我が家で夕飯でもいかがですか？」

「え？」

二人が目を瞬かせている。

「女の子だけであるのは物騒ですから。そんな話を聞いては放つておけません」

「いえ、でも……」

「まあまあ瑞希ちゃん。ここはお言葉に甘えようよ」

「そうだよ姫路さん。丁度福引きで良い物が当たつたし、こんな量は僕と姉さんだけじゃ食べきれないからさ」

遠慮する姫路さんに、僕と姫路さんが何度もそう言つと、

「そ、それじゃあ、お言葉に甘えて……」 姫路さんはようやく首

を縦に振ってくれた。うんうん。折角の食材だ。姫路さんや桂さんにも食べてくれるとなれば腕の振るい甲斐もあるってものだ。今日は特に頑張つて、姉さんと姫路さんと桂さんに美味しいものを作つてあげよう！

なんて、思っていたのに。

「あの、明久君……」

「ん？ なに、姫路さん？」

「お邪魔するんですから、せめて私に料理を作らせてくださいっ」

「じゃあ、私も一緒に料理を作らせてもらっていいかな？」

事態は良からぬ方向へと進み始めた。

「ななな何を言っているのかな二人とも。おおお客様にそんなことさせられるわけじゃないか」

「でも、それじゃあ私たちの気が済まなくて……」

「そっだよね」

でも、そんなことをさせたらこっちの命が無事で済まないんだ。

「ほら、慣れない調理器具だと怪我をしちゃうかもしれないし、ここは僕に任せて」

「だったら、私ที่บ้านから調理器具を持ってくれば」

「いやいや。そんな面倒なことをしなくても、慣れている僕にやらせてくれたら」

「いいえ。この前お邪魔した時も明久君に作ってもらっちゃいましたから。今日は順番ということですが」

おっとりしながらも決して意見を曲げない姫路さんと桂さん。参つた。決心は固そっだ。

どう説得したら良いのかと頭を悩ませていると、

「まあまあ三人とも。そういうことならー」

そこに姉さんが割って入ってきた。もしかしてこの状況を打破する良いアイデアでもあるのかな。

「ーそういうことなら、間を取って私と瑞希さんと優希さんでお料理をする、ということにしませんか？」

「考え得る限り最悪の事態だ！」

必殺料理人が更に一人加わった。

どうしよう！？ 既に状況は僕の手に余るぞ！？

「玲さんと一緒にお料理ですか。それなら……」

「そうですね。それが一番です」

そうしたら一番危ないという意味では、桂さんの言葉も間違っていない。というか二人ともお願いです！ もっといっぱい自己主張をしてください！

「あ、あのね二人とも。僕が言いたいのはそういうことじゃなくて「ではそういうことで。よろしくお願いしますね、瑞希さん、優希さん」

「は、はいっ。よろしくお願いしますっ」

「こちらこそよろしくお願ひします、玲さん」

ダメだ。全然聞いてない。

「それじゃあ、早速材料を買ってきますねっ」

「ああっ！ 待って姫路さん！」

そして、姫路さんは引き留めようとする僕に構わず、大急ぎで近くの薬局へと駆け出していった。えええっ！？ 食材を買いに行くのにその行き先はおかしくない！？

「それでは、私も何か材料を」

そう言っつて、姉さんが反対側にある雑貨屋へと歩いて行く。だからおかしいっつて！

「ゴメンね吉井君。すぐに戻るからそこで待っててね」

桂さんは桂さんと、少し離れた場所にあるペットショップへと走り去っていった。ちょっと待って！ どうして三人とも料理の基本ルールの『食べられるもの』を根底から覆すの！？

「……………」

三人がいなくなつた道ばたで台車の傍らに呆然と立ち尽くす僕。

姫路さんと桂さんと姉さんの組み合わせ。

はつきり言っつて止められる気がしない。

僕の脳裏に、体育祭で口に押し込まれた姫路さんのおにぎりの痛みが蘇る。

雄二とムッツリー二に裏切られて、口に押し込まれた劇薬のフラッシュバック。

どうして僕がまたそれを味わう羽目に陥っているのだろう。今度は僕じゃなくて雄二やムッツリー二が苦しむ番なんじゃないだろうか。しばし考えて、一つの結論に辿り着く。

そうか。それならせめてー

「えーつと、電話、電話……」

僕はポケットから携帯電話を取り出し、悪友の番号を呼び出す。

「あ。もしもし、雄二？ 実は福引きで良い物が当たったんだけど、僕と姉さんだけじゃ食べきれないからさー」

それならせめて、巻き添えを増やすとしよう。苦しみを分かち合っつてこそその、真の仲間というものなのだから。

「おーつす。来たぞ明久ーっ」

雄二が玄関脇に備え付けてあるインターホンを押す。この場には俺と雄二の他に秀吉・ムッツリー二といういつものメンバーが揃っていた。

「いらっしやい。よく来てくれたね」

玄関のドアを開けて、中から明久が出迎えてくれる。どうやら福引きで良い物が当たったから、俺たちにおすそ分けしてくれるらし

い。

「折角の福引きの景品をご馳走になるなんて悪いな」

「今度何かお礼でもするぜ」

「図々しいようで恐縮じゃが、ありがたく相伴に与らせて頂こうかの」

「……………楽しみ」

「結構な量だからさ。手伝いに来てくれて助かるよ」

「今回はかりは明久に感謝しなくっちゃな。」

「んじゃ、お邪魔しますつと」

「同じく、お邪魔するぞい」

「お邪魔しまゝす」

「……………お邪魔します」

「はいはい。どうぞどうぞ」

明久は後ろ手でドアを閉め、きつちりと鍵をかけている。安全のためと言えはそれまでだが、いつもはこんなに過敏だったか？

「む？ なぜ鍵をかけるのじゃ？」

「あはは。最近は何騒だからね」

明久はなんとチェーンロックまでかけていた。これは流石に怪しい。

「なあ明久。……………なんだか妙に嫌な予感がしてきたんだが」

「……………奇遇だな亮。実は俺もなんだ」

「……………流石は亮に雄二。相変わらず勘がいいね」

「明久に亮に雄二。何を言っておるのじゃ？ ただ海の幸を楽しむだけじゃろうが。別段毒があるわけでもあるまいしー」

秀吉がそう言いながらリビングへの扉を開ける。するとその先には、

「あ、坂本君に木下君に神谷君に土屋君。こんばんは」

「みんな、いらっしやい」

必殺料理人の姫路と優希がエプロン姿で立っていた。

「……っ!?!?」

「逃がすかあつ！」

「ダンッ！」

咄嗟に玄関に向かおうとする俺と雄二の行く手が、廊下の壁に叩きつけた明久の足に遮られる。

「あ、明久。テメエ……！」

「やりやがったな……？」

「雄二、亮。ここから先は地獄への一方通行だよ。おとなしく尻尾巻きつつ泣いて、無様に元の居場所へ引き返すんだ……！」

バカを言うな明久！ お前の足の向こうの世界が、俺たちの元の居場所なんだよ！

「あ、明久！ 友人に対してこれはあまりに酷な仕打ちじゃとは思わんか!？」

「……………!!!(コクコク)」

秀吉とムツツリー二も悲壮な顔をしていた。ここにいる男たちは全員姫路の料理の腕を知っている。このリアクションをするのは当然だ。

更に俺は優希の手料理も既に食べている。その二人の料理が合わさるとなると、その恐怖は計り知れない。

「大丈夫。僕にはわかってるよ。口ではそう言いながらも、本当は僕一人がピンチに陥ってるのが心苦しくて仕方がないんだよね？

仲間として苦しみを共にしたいんだよね？」

勝手に人の心を捏造したまま代弁しないで欲しい。

「死ぬなら独りで死ね！」

「見損なつたぞ明久！」

「このような真似をするヤツなぞ仲間ではない！」

「……………外道……………！」

明久め、いつか必ず殺してやる！

「明久てめえ、さては体育祭の復讐か！」

「……………陰湿な……………！」

「ワシと亮は関係ないじゃろう!？」

「そつだそつだ！」

巻き込むなら雄二とムツツリー二だけにして欲しい。

「あら？ 坂本君たちですか？ ようこそいらっしやいました」

そんな話をしていたら、キッチンから玲さんがやってきた。

「量が量だから、皆にも手伝わってもらおうと思っ呼んだんだよ」

「それは良い考えですね」

明久が言う『手伝う』とは、きつと必殺料理処理のことだろう。

「そういうことなら、前に一緒に海に行つた皆さんにも声をかけてはどうでしょうか？」

「え？ いいの？」

「はい。アキくんの行動を見て色々と考えてたのですが……どうやら姉さんはアキくんを束縛しすぎて、逆に良くない影響を与えているような気がするのです。この際、姉さんの見ているのであればある程度は容認しようかと」

前に来た時は姫路たちを勉強会で招いただけで不純異性交遊として厳しくされていたから、それに比べて今は緩和されたみたいだ。

「ですが、身体的接触や覗きなどのいやらしい行動は命に関わるので注意してください」

「うん。その辺は言われなくても予想できてる」

そんな予想ができるなんて、それはそれでどうかと思うが、俺も他人事ではないので黙っていることにした。

「じゃあ雄二に秀吉。霧島さんと木下さんに連絡してもらえる？」

「あ……。アイツは確か、今日は用事が」

「姉上は、さつきどこかに出かけておつて来れぬと」

「電話をしてみましたけど、翔子ちゃんも優子ちゃんも来られるそつです」

「「姫路は行動が早くて偉いなあ（のう）……！！」」

結局、仕事で新幹線に乗って出張に行った俺の姉貴以外のメンバーも大丈夫のようで、久しぶりに大人数で食卓を囲むことになった。

「で、どうするんだ明久」

「どうするって言われても」

「俺にはもう止められないぜ」

せめておかしな物を入れられないように、とキッチンで見張ろうとしたら、『キッチン』は女の戦場』という姫路と優希と玲さんに追いつかれてしまった。戦場というよりは、兵器生産工場の気がするが。

「あの、明久君」

「ん？ な、なに、姫路さん？」

姫路がキッチンから顔を出している。何かあったのか？

「ちよつと道具を探しているんですけどー」

「オツケー。何が必要なの？」

「えっと……瞬間接着剤を探しているんです」

……料理って、何だっけ？

「もうダメじゃ……。ワシはここで死ぬんじゃ……」

「くそ……。俺にはまだやり残したことがたくさんあるんだ……！」

「………生きたい。もっと……！」

「………死にたくない……！」

先ほどの姫路の発言を聞いて、俺たちの間に葬式ムードが漂い始める。必殺料理処理班になるって、こういうことか。

「あ、あのね、姫路さん。わかっているとは思っけど、料理に接着剤を入れるのはとても危険でー」

「？何を言っているんですか明久君。お料理に接着剤なんて入れたら大変じゃないですか」

「だ、だよねっ。大変なことになるよねっ。それくらい常識だよねっ」

「はい。ふふっ。おかしい明久君」

良かった。どうやら死亡は免れることができそうだ。

ん？ だとしたら、瞬間接着剤なんて何に使うんだ？

「それならどうして接着剤を探しているの？」

明久も俺と同じ疑問を持ったようで、姫路に尋ねていた。

「はい。えっと、ブイヤベースを作っていたら、圧力鍋が真ん中から破裂しちゃいましたー」

「「「さらばだっ！」「」」

「ああっ！こら待てえっ！全員逃げるなあっ！」

明久が追いつくよりも早く、俺たちはドアを開けて逃走ルートの確保に成功した。

そして外に飛び出そうとしているとー

「……どうして私に来たのに帰ろうとしているの」

「ぐあああ後生だ翔子！放してくれえっ！」

「亮もなに帰ろうとしているのよ」

「お願いだ優子！その手を放してくれ！」

そこへ丁度やってきた霧島と優子に雄二と俺はそれぞれ捕まってしまうた。

「？木下と土屋もどこに行こうとしているの？」

「ムッツリーニくん。ボクが来たからって照れなくてもいいんじゃない

ない？」

いつの間にか秀吉とムツツリー二の退路も断たれている。畜生！
脱出は失敗か。

「いらっしやい。美波、霧島さん、木下さん、工藤さん。さあさあ
中に入ってよ」

「……お邪魔します」「」

雄二は霧島に、俺は優子に、秀吉とムツツリー二は明久に捕まっ
てしまい、その様子はさながら脱獄に失敗した囚人のようだった。

「この人数だし、いつそお鍋にしたらいいんじゃないかな？」

明久のリビングに勢揃いしたメンバーを見て、工藤がそんなこと
を言い出した。

「え？ お鍋、ですか？」

「うん。人数も多いし、海鮮類ならお鍋も美味しいと思うよ」

なるほど。鍋なら作るのに時間もかからないし、大人数で楽しめ
る。ただ、

「お鍋ですか。わかりました。それなら、今すぐ用意を始めますね
っ」

「皆楽しみにしててね」

ただ、その製作者が必殺料理人だということが最大の問題だ。

「あー、姫路に桂。鍋なら俺が得意だから、任せてくれても」

「そうそう。姫路も優希もリビングでゆっくりしてくれれば」

「そんなのダメだよ」

「坂本君たちは座っていてくださいっ」

俺たちの主張と提案が一瞬で却下された。

「じゃが姫路。鍋は基本、出汁を入れて煮るだけなのじゃから」

「木下君まで何を言ってるんですかっ。そのお出汁が大事なんですっ」

「参った……。どうすればいいんだ……」。

「それでは、闇鍋なんてどうでしょう？」

その時、玲さんが変わった提案をしてきた。

「闇鍋、ですか？」

「はい。確か、鍋料理では最もメジャーなものだと聞いています」知識としては間違っているが、もしかしてこの場において最良の選択かもしれない。

なぜなら闇鍋とは、その場で鍋の中に食材を投入するだけの簡単な料理だから、料理の腕もへったくれもない。つまり、危険なものが出来上がることがないということだ。

他の処理班メンバーに視線を送ると、どうやら俺と同意見のようだ。

「あの、玲さん。闇鍋ってというのは普通の鍋料理とはちょっと違って」

「それは良いのう！ 闇鍋とは面白い提案じゃ！」

「そうだな！ 闇鍋は鍋の中の鍋だよな！」

「闇鍋をせずして、何を鍋というんだ！」

「……………闇鍋最高……………！」

「流石は姉さん！ 良いことを言うね！」

一斉に賛同し、島田の声を掻き消す。許せ島田。これも皆の命を救うためなんだ……！

「闇鍋ってボクもちよっと興味あるな。やったことがないよ」

「……………私も、やってみたいかも」

「そうね。面白そうだわ」

工藤や霧島や優子も乗ってくれた。ありがとう三人とも！

「あ。でも、うちにはカセットコンロがないや……」

カセットコンロがないとなれば、どこかで買ってくるしか……

「明久君。それなら私が家から持ってきますよ？ 私の家なら近いですし」

「え？ いいの？」

「はいっ。他にも色々持って来たいと思っていましたから、丁度いいです」

「それじゃ、私も付き添うよ。一人じゃ色々と危ないからね」

ここで姫路と優希から魅力的な提案が出た。今の状況でこれはありがたい。

結局、闇鍋を始めるのは姫路と優希が戻ってきてからとなった。

第六十八問その二・僕と契約して、魔法少女になってよ！

「それじゃあ、そろそろお鍋の用意を始めますね」

姫路と優希が持ってきたカセットコンロをテーブルの上に置く。

ちなみに玲さんは急用が出来たとかで、どこかへ行ってしまった。
ではここで、恒例のルール説明を。

？素材は食べられるものであること

？一度箸をつけた料理は必ず食べること

？用いる食材は各自一種類のみ（ただし、最初の出汁取りの昆布は別）

本来は自分で材料を用意するのだが、今日はそんな時間もないので、明久の家にある食材を使うことにしている。つまり、命にかかわる危険なことは――

「そう言えば私、カセットコンロと一緒に、お鍋の具材も持ってきた
ちゃいました」

「私も持ってきたよ」

命にかかわる危険なことは、俺たちのすぐ目の前に存在する。

姫路と優希がそれぞれ四角いタッパーと丸いタッパーを取り出す。

アレが姫二人の持ってきた食材（？）か。

「食材は一人ずつ、他の人に見えないように持ってくるということ
で良いのよね？」

「……うん。見たらつまらない」

「えっと、それじゃあボクから持ってくるね」

そう言っつて、一番手の工藤が台所に消えていった。続いて島田に優子、霧島、秀吉、ムッツリー二が台所に向かう。

さて、次は俺の番か。

俺は妙な緊張感を孕んだ男子陣の後ろを通り、台所へ向かう。

「さて、と……」 流し台の前に立ち、少し時間を取って考えてみる。

今から始まる闇鍋。俺がやるべき行動は、姫路と優希が投入する食材(?)を、雄二かムッツリー二か明久の胃袋に押し込む。ただそれだけ。ただそれだけで、他の皆の命を救うことができる。

二人の持ってきたタッパーをみる限り、あの中身は恐らく液体か何かだろうから、その情報を基にして食材を選ばなければならない。ただ、問題は、

「向こうも同じことを考えてるってことだな」

雄二と明久なら、このことに気付いていても何らおかしくはない。それに明久に至ってはこの台所を管理しているだろうから、俺たちがどの食材を選んだのかすぐにバレてしまうだろう。

「(となると、明久の裏をかく必要があるな)」

「(とりあえず冷蔵庫の中身を調べましょ)」

冷蔵庫を開けて食材を確認する。さて、何がある？

? 蒟蒻

? 豆腐

? ちくわお心得パック(太さと長さが通常の二倍)

「(この場合は豆腐か蒟蒻を使ってプールを作って、瑞希と優希の食材(?)を隔離するのが賢明ってところかしらね)」

「(ああ。けど席の関係で明久と雄二が手を打てるのは姫路だけだ

ろくな)」

因みに席は丸いテーブルを囲み、明久から始まって時計回りに姫路、優希、俺、ムツツリー二、島田、秀吉、工藤、優子、霧島、雄二となっている。

姫路と優希の食材を丸々隔離しようとなると、この量では確実に足りない。

それを踏まえた上で、俺がとるべき行動は――

「（やっぱこれだよな）」

『（確かにそれが良いかもしれないわね）』

俺は自分の使う食材を冷蔵庫から取り出し、包丁で切って形を整える。

そしてその後、皆の所に戻った。

グツグツと美味しそうに鍋が煮えている。

テーブルの中央に置かれたカセットコンロに、大きな土鍋。中身は出汁を取る為に入れた昆布以外は何も入っていない状態だけど、この鍋は今この瞬間が一番美味しい気がする。

「それでは、電気を消しますよ」

姫路の声と同時に、電気のスイッチが切られる。そしてカーテンが閉められ、リビングにはコンロの火だけがゆらめく。いよいよ戦いの始まりだ。

「じゃあボクから材料を入れるね」

工藤の声が聞こえて、同時にトポトポと鍋の中に何かが入る音が聞こえる。

「ウチもいくわね」

「……私も」

「それじゃあアタシも」

今度は島田、霧島、優子が食材を投入する。それよりも、さつきから鼻を突く刺激臭と、液体を投入する音しかない。まさかこの三人、全員タバスコでも入れたのか？

「それでは、ワシも入れようかの」

「……………同じく」

そして、秀吉とムツツリー二が動き出した。この二人に関しては、防衛か自滅しかしないだろうから、ノーマークでも特に問題はない。「次は俺だな」

今度は雄二が何かを取り出して、素手で丁寧に並べている気配が伝わる。

「んじゃ、俺も」

雄二が入れ終わって鍋から手を引くのを確認して、選んだ食材を入した。雄二が手を引くのを待ったのは、後から配置を変えられない為だ。

「僕も入れるね」

俺が手を引いた後に明久が食材を投入する。気配から考えるに雄二よりは慎重に食材を並べてはいない。つまり雄二が選んだのは豆腐、明久が選んだのは蒟蒻ということになりそうだ。

「私も入れるね」

できることなら今すぐに蓋を閉じて全てをなかつたことにしたい。処理班の誰もがそう思っているだろうがーそんな俺たちの思いをよそに、無情にも優希と姫路の食材は鍋の中に投入された。

トポ…………トポ…………トポ…………トポ…………

音から察するに、二人の投入物は液体もしくはゲル状の何かだろう。
「……………っつー！」

ムツツリーニが身体を強ばらせる気配が伝わってくる。アイツは
やっぱり自滅したか。

「それじゃ、もう一度火をつけて煮込むぞ」

雄二がガスコンロのスイッチを入れ、室内に小さな明かりが灯り、
静寂が訪れる。

残る敵は明久と雄二のみ。

俺は火にかけられた鍋を見ながら、レンと練った作戦を思い返した。

雄二が豆腐を選んだということは、明久と雄二の間にある豆腐に穴
が開いている可能性が高い。そしてそのことに気付かず油断して
いる明久が姫路の食材でお陀仏、という算段だろう。

だから俺は、その防壁を利用する！

まずはちくわを縦に真っ二つにして中央がくぼんだ状態にする。

そして優希は自分の手前に食材を投入するだろうから、その位置
を予測し、鍋の蓋を置くための出っ張りにくぼみを上にしたちくわ
の一端を引っ掛け、もう一方を雄二が置いた豆腐に引っ掛ける。こ
うすることで明久のもとに優希の食材は流れていくし、俺は自分の

手前に置いたもう一方の安全なちくわを取ればいい。それだけのこととは足りる。

あくまでも成功するかは一か八か賭けるしかない。でも、ここで失敗すれば命はない。絶対に成功してみせる！！

この生存競争。生き残るのは、この俺だ！

鍋が煮えるまでの、待ち時間がゆっくりと流れる。

「そろそろいい頃合いだな。火を消すか」

しばらくしてから、雄二の台詞とともにコンロのガスが絞られ、部屋の中に再び暗闇が訪れた。

「いよいよね……」

「……ドキドキする」

「楽しみね……」

「どんな味になってるのかな？」

ちよつと緊張しながらも、どこか楽しそうな島田たちの声がする。

「それじゃ、開けてみるわね」

鍋掴みを手に、優子が鍋の蓋をゆっくりと持ち上げる。すると、そこからはタバスコの臭気が漂っていた。

「……う……」

女子勢が顔を歪める気配がする。まあこれはただの自業自得だ。

「じゃあ、いよいよ闇鍋スタートだね」

「おっしゃー！ やってやるぜっ！」

「よしっ！　いくぞっ！」

自分に気合いを入れてから、具材を取り出すべく鍋の中に箸を突っ込む。さて。この具材は大丈夫だな。

「お前ら。覚悟はいいな？」

「本当にその具材でいいのか？」

「取り出してから後悔しないようにね」

同じタイミングで具材選びを終えた明久、雄二と牽制し合い、具材を落とさないようにしっかり挟み込む。

それじゃ、落とさないように取り出そう。よしっ

どろり　溶解して爛れた蒟蒻の欠片

「」「」

は？

一瞬思考が停止する。

待て待て。これはきつと何かの間違いだ。こんなおかしいことがあつてたまるかってんだ。

というわけで、鍋に沈めてもう一回取り出そう。

どろり　溶解して爛れた蒟蒻の欠片

「」「」大事な防壁があーっ！？」」

「な、何よ！？　いきなりどうしたのよアンタたち！？」

暗闇の中、いきなり叫んだ俺たちに島田が驚いていた。

なんで蒟蒻が溶けた上に爛れてるんだよ!? どういう化学反応が起きたんだ!?

「恐ろしいヤツらだ姫路に桂……! 俺たちの小細工なんか相手じゃないってワケか……!」

「まさか防壁ごと破壊してくるなんてな……」

なるほど。最初から俺たちごときが敵う相手じゃなかったってことか……!

「アキ。何かあったの?」

「いや、気にしないでいいよ美波……。所詮僕らは奪われる側の存在だったんだ……」

「亮も一体何があったの?」

「いいんだ優子。今となつては何もかもが遅い」

だから、余計なことを知る必要もないんだ……。

「ま、まあいいわ」

「とにかくウチも……」

「待て、優子に島田」

俺はそんな二人を止めて、ゆっくりと指を組んだ。

そして、厳かに言葉を紡ぎ出す。

「……天にまします我が父よ……」

「? 神谷、何冗談やってるのよ?」

「本気で祈れ島田!」

「そうだよ! 僕は友達が死ぬ姿なんて見たくない!」 秀吉とムツリーニが無心に祈りを捧げる様子が伝わる。俺たちはいつでも一緒だ。

「アーアメン」

「アーアメン」

十字を切り終え、いよいよ審判の時がくる。

「あ、明久!? ワシには湯気が紫色に見えるのじゃが!」

「ぐううっ! 目が、目があつ!」

「落ちて着け明久! 暴れて鍋をひっくり返したら大惨事だぞ!」

暴れ出した明久を雄二が取り押さえている。確かに雄二の言うように
うになつたら、大惨事は免れない。

「もう、アキつてば、何を遊んでいるのよ」

「……はしゃいでる」

「吉井君たちはいつても楽しそうだよね」

「元気が有り余っているんじゃないかしら？」

「まだ事態を把握していない女子勢。違うんだ！」

「お箸じゃ取りにくいと思いますからおたまにしましょうか」

「じゃあ、私が取ってくるね」

「お願いしますね、優希ちゃん」

各自がおたまを使って鍋の中身を掬う。

「……いただきます」

霧島が取り皿を持ち上げ、少し汁を啜る。どうだ……？

『……臭いほど、h n f p j b m u m……』

「翔子！？ お前の日本語にすらなつてない声が直接脳に響いてくるんだが、魂はきちんと身体の中に入ってるのか！？」

霧島の背中から、白いボヤツとしたものが出ているみたいなんだ

が、ひよつとしなくても危険だよな！？

「アキも遊んではかりいないで食べたなら？ いただきます」

「ボクもいただきます」

「アタシもいただきます」

「私もいつただつきまーす」

今度は島田と工藤と優子と優希が化学兵器を口にした。

「……きゃあああああああ！」「」

「いやいやいや！ 食べ物をお口にしたら普通、感想は『美味しい』

か『不味い』のどつちかだよな！？」

そして優希以外の三人ともテーブルに突っ伏して動かなくなった。
ちいつ！ 三人とも意識がない！

「み、美波ちゃん！？ 翔子ちゃん、愛子ちゃん、優子ちゃん、し
っかりして下さい！」

「あれ！？ 皆どうしたの!？」

姫路と優希が倒れた三人に呼びかける。

「う……。な、なによ、あの味……」

「一体何を入れたの……?」

「……食べ物とは思えない」

「ぼ、ボクもこれはちよつと……」

三人は頭を振りながらゆっくりと上半身を起こした。ふう。一命は取り留めたようだ。

「う……。まったく、酷い目に遭ったわ……」

「……臨死体験」

「ボク、あんな味は初めてだったよ」

「アタシだって初めてよ……」

コップに入った水を手にして、口直しをする島田たち。

そうやってある程度落ち着いたら、

「じゃあ、今度はムッツリーニ君たちが食べる番だよ」

工藤がそんなことを言い出した。

「……………っ!?(フルフルフル)」

急に話を振られて慌てるムッツリーニ。さっきの惨劇を見たら、そんな反応も無理はない。

「はい、あーん」

「……………っ!?(フルフルフル)」

工藤がムッツリーニの口元に取り皿を運ぶ気配が伝わってくる。

そして、そんなやり取りが行われているのは一ヶ所だけではなかった。

「……………雄二。あーん」

「冗談じゃねえっ! 俺は食わねえからな!」

「や、やめるんだ美波! 僕はまだ死にたくない!」

「何を言ってるのよ! 自分だけ助かるうなんて、そんなの許さな

いんだから!』

『はい、秀吉君。あーん』

『か、桂よ。今一度考え直してはくれぬか!?!』

……………これなんて修羅場?

「ねえ、亮」

ああ、ついに来たか……

「あーん」

優子が俺の口元に取り皿を寄せてくる。さて。どうしようか?

「お、落ち着け優子! 少し話し合おうか」

「何言ってるのよ? アンタもちゃんと食べなさい……!」

俺と優子で命懸けの押し合いが続く。そして、その時だった。

『ほらアキ! あーん!』

『もじもっ!?!』

『ほらムツッリーニ君、どうぞ』

『……………う……………っ!』

『……………はい、雄一』

『もじもっ!?!』

『どうぞ、秀吉君』

『むぐうっ!?!』

くそっ! 皆やられちゃったか!

「ほら、亮も!」

「むぐもっ!?!」

倒れた仲間に気がいつているうちに、口に鍋のスープを押し込まれた。

「……………あれ？」

気が付くと、俺は見知らぬ空間にいた。

きちんと並んで配置されている、学習机と椅子。最近使われた形跡がない綺麗な黒板。埃一つ見当たらない床。見たところどこかの学校の教室って感じだな。

俺はそんな教室の机の一つに腕を置き、椅子に座っていた。

そう。まるで、いつも通り変わらぬ平穩の中で教師の授業を受けているように。

確か、優子に化学兵器と化した闇鍋を食わされてここに来たわけだから、

「もしかして、あの世？ 地獄にでも来ちまったか？」

とにかく、ここから脱出する方法を探さないとー

「うーん。教室が地獄だつてことは僕も同意だけど、残念ながらここはあの世じゃないんだよ。だって人は死んだらそれでおしまいじゃないか」

「!?!? 誰だ!?!?」

背後から声があったから振り返ったら、ロッカーに腰掛けている一人の女の子がいた。

長い黒髪を後ろで纏め、セーラー服を着用しており、黒いソックスに学校指定と思われる上履きを履いている。

そしてその上履きに書かれている名前は、俺の思考回路を止める

には充分だった。

「おいおい。何でアンタがこんな所にいるんだよ……」

その身に一京ものスキルを宿し、自分を『ただの人外』と称している――

「――安心院なじみ」

第六十八問その三・Boy Meets Girl Again

「安心院あんしんいんなじみ」

「へえ。ここでは僕は『そういう風に』認識されているようだね。それと、僕のことは親しみを込めて安心院あんしんいんさんと呼びなさい」

「どうやってこの場に彼女が現れたか、なんて不躰な質問をする気はない。彼女が持つ、時間と空間を無視して、いつからでもどこにでも存在することができるといっ—京分の一のスキルを使えば造作もないことなのだから。名前は確か、『アリバイブロック腑罪証明』だったか？ 他のスキルはよくわからないけど、他人の名前がわかるスキルとかもあるんだらう。名乗ってもないのに安心院さんが俺の名前を知ってたし。」

「つて、そうだ！ 明久たちはどうなつたんだ！？」

俺がこうやって謎の空間にいるってことは、同じ食材を食べた明久たちも無事じゃない可能性が高い。

「いや、彼らに関しては大丈夫。君みたいに意識を失っているわけでもないよ。せいぜい舌と手足が少し痺れているぐらいかな。君も含めて耐性がついたみたいだから」

「いつの間にかそんな耐性が付いていたなんて、嬉しいような悲しいような。何だか複雑な気分だ。」

ん？ ということは、

「じゃあ、俺が意識を失つたのつて」

「僕が君の意識を切り離れたんだよ。すぱっ、とね。ちよつど君に用事もあることだし」

とりあえず、明久たちは無事だつてことか。

しかし、コイツが出てきたとなると、あの『生徒会長（くるかみめ か）』しか勝ち目がないじゃんか。俺は安心院さんと戦うなんてまっぴらゴメンだぜ。

「んで、俺に用があるって言つてたが、安心院さんは一体どんな用

事のためにスキル『アリバイブロック腑罪証明』で漫画から飛び出してここに現れて、更に俺を喚び寄せたんだ？」

「うーん。50点」

「は？」

安心院さんは顎に指を当ててそんなことを呟いた。50点ってどういうことだ？

「確かに僕は『アリバイブロック腑罪証明』を使ったけど、今ここにいる僕は君が言っている漫画の中の僕とは違うんだよ」

「違うって、どういう風に？」

「僕は安心院なじみであって、あの安心院なじみじゃないんだよ」

安心院さんであって、漫画本編に登場している安心院さんじゃない？ 言っている意味がさっぱりわからない。

「もしかして、変身か何かか？」

「厳密に言つと変身とは少し違うね。僕は安心院なじみと同じ外見すがたじゃなくて存在そのものを歪めて同化させているからね」

安心院さん（敢えてそう呼ぶことにする）から得られた情報を一旦整理してみる。

えっと、つまり彼女は自身の存在を歪めて他者と同一化することで、その人の能力までも使用することができるってことか。

となると、至極一般的な疑問が浮かぶ。

「じゃあ、自分の存在を歪めて安心院さんと同一の存在になるなんて大それたことができるアンタは、一体何者なんだ？」

存在を歪めるなんて、それこそ世界を守る門番とか世界を司る神様とかじゃないと使えないんじゃないのか？ その場合は途端にファンタジー要素が強くなるだろうけど。

「端的に言えば、『この世界の矯正者』ってところかな？」

途端にファンタジー要素が強くなった。

「矯正者？」

矯正って、物事のあるべき状態に戻す、あの矯正のことだろ？

そこに世界がつかなくて、一体どういうことなんだ？

「そのところについてはちゃんと説明しないとね」

安心院さんは座っているロッカーから飛び降りた。

「そのためにもまずはこの世界の成り立ちについて簡単に説明するよ」

「……………は？ 世界の成り立ち？」

「神谷君も知つての通り、この世界の他にも世界と呼ばれるものはたくさんあるんだよ。違う選択肢を辿って違う結果に行き着いた世界がね」

「俗に言うパラレルワールドってやつか？」

パラレルワールドなら、俺も一回だけ優希と一緒に行ったことがあるからな。

「そう。そして世界と世界の間には次元や時空の狭間といった強固な壁があつて、更にそれぞれの世界自体を管理してる神とかもいるんだ。その世界で起きた出来事の余波が他の世界に干渉して悪い影響を与えたり、その逆のことが起きないようにね」

逆つて言うと、他の世界からの人物や起きた出来事が、その世界に悪い影響を与えないようにするってことか。

「なんだかパソコンや会社のセキュリティシステムみたいだな」

「うん。大体そのイメージで合ってるよ」

「それにしても、その世界だけじゃなくて、他の世界にも影響を与えることってそんなにあるものなのか？」

「もちろんだよ。世界っていうのはそれぞれ独立しながらも密接に繋がっているんだから」

でもーと一旦区切り、安心院さんは話を続ける。

「この世界は、そのセキュリティシステムが弱く曖昧なんだ。だから他の世界からの影響を特に受けやすくなるーつまり世界の歪みが発生しやすくて、その結果この世界ではあり得ない現象が起るんだ。起きてても問題ない現象と、起きたら問題の二種類がね。前者はともかく後者の方を放っておくと、世界の崩壊に繋がりがねない」

大抵は世界に問題ない現象が起きるんだけどね、と安心院さんは付け加えた。

「じゃあ、世界が崩壊しかねない現象が起きた場合はどうするんだ？」

「そこで僕の定番だよ。僕の能力で世界の歪みを“矯正”するんだ。世界はとても脆いって感じの台詞を誰かが言ってたよ。ような気がするけど、あながち間違っていないみたいだな。

「それで君のスキルである黒雛ーいや、『超・占事略決』そのものが後者に当てはまるんだよ」

「つまり、この世界にあつてはならないってことか」

「そういうこと」

安心院さんいわく、この世界は他の世界とを隔てている次元やら時空の壁が非常に不安定であるから、他の世界で何かが起こる度にこの世界がその出来事の干渉を受け、如何様にも世界の在り方が変わってくるんだそう。まったく。話のスケールがデカ過ぎだ。

「そこで神谷君。君のスキル『超・占事略決』と僕の一京分の一のスキルを交換しない？」

安心院さんは、まるで友達をカラオケに誘うかのような気楽な口調で、そんな提案をしてきた。

「は？ 交換？ そんなことできるのか？」

「もちろんだよ。君の『超・占事略決』を貰い受ける代わりに、この世界で使っても問題ないスキルをあげる。普段こういうことはしないんだけど今回は事情が事情だからね。能力交換ってことで。それで、この話に乗ってくれる？」

安心院さんがそんなことを聞いてくる。

話に乗るも何も、

「乗らなきゃこの世界が危ないんだろ？」

それに、強硬策で能力を奪ってくるか、下手したら殺されかねないからな。ここは素直に乗った方が良さそう。

「僕がこう言うのもなんだけど、随分あっさりと僕の話を受け入れ

るよね。普通は眉唾ものだって疑ってくるものなんだけど」

安心院さんは、いかにも不思議そうな表情を浮かべている。

「いや、漫画の中だけの存在だと思っていた安心院さんが今こうやって目の前にいるんだ。そんな状況で疑うもへったくれもないだろ。事実は小説よりも奇なり、とはよく言ったものだ。それに本当に嘘だとしたら、そんな質問はしないだろうし。」

「なるほど。それもそっか。それじゃ、ちょっとじっとしてて」

安心院さんの指示に従って、『気をつけ』の姿勢を取る。すると「ん……」

安心院さんが俺の唇に自分の唇を押し付けてきた。ちょっと待て。一体何事だ!?

「はい。これでおしまい」

「え!?! もう!?!」

はつきり言ってキスされただけなんだが……。

「『口写し（リップサービス）』。僕の一京分の一のスキルだよ。ちなみに君にあげたスキルは『ハイドアントシーク膝子蔵』。効果は使ってみてからの楽しみ」

「いや、今教えてくれるとありがたいんだが」

「あ、そうそう。それともう一つ」

俺の言ったこと、まるで聞いてないし。

安心院さんが何かを言った気がしたけど、俺の耳に届くことはなかった。

「……………ん？」

「あ、亮。気が付いた？」

斜め上から明久の声がする。それに見慣れた天井。ってことは、ここは明久の家か。

「まったく。アンタだけ倒れたからビックリしたわよ」

俺をそんな状態にした本人である優子が、他人事のように言っていた。

「あゝ……………死ぬかと思った」

命を懸けた闇鍋も無事に（？）終了し、自宅のドアを開けて中に入るべく、ドアの近くに隠している鍵を取り出してーって、あれ？
「鍵が……………ない……………？」

いつもの場所に鍵がない。ひょっとして盗まれたか？

P r r r ! ! P r r r ! !

その時、俺のポケットから携帯電話の着信音が響いた。
「もしもし?」

『亮くん、ゴメン!!』

我が姉は開口一番に何故かそんなことを言ってきた。

「一体どうしたんだ?」

『亮くんの鍵も一緒に持ってきちゃった』

「……………は?」

余談だが、我が家では合い鍵二つを俺と姉貴がそれぞれ一つずつ管理している。

俺の分の鍵まで姉貴が持っているということはつまり、

「俺はしばらく自宅に入れないってことか?」

『……………うん。そういうこと。本当にゴメンね』

俺の鍵まで持ってきてしまったことに罪悪感があるのか、姉貴の声はいつもより若干沈んでいた。

「大丈夫大丈夫。知人の家にも泊めてもらおうさ」

『ゴメンね。今度何か奢るから』

「ん。了解」

姉貴からの電話を切り、少し考えてみる。

姉貴は現在出張に行っており、あと数日しないと帰ってこない。

姉貴にはああ言ったけど、今から誰かの家に行くには時間が遅すぎる。

「(よし、今夜は野宿だ!)」

『(野宿って、どこで?)』

「(そりゃ近くの公園で)」

『(こっとなったら仕方ないわね)』

というわけで、今夜の寝床を確保すべく、近くの公園に向かった。

よい子はマネしちゃダメだぞ？

第六十九問・ああ…それにしても金が欲しいって、帝愛の会長も言ってたなあ

問 次の言葉について説明しなさい。

『ワルプルギスの夜』

姫路瑞希の答え

『4月30日から5月1日にかけての夜に、スカンジナビア半島から中欧にかけての地域を中心にヨーロッパの広い範囲で行われている祭り』

教師のコメント

正解です。古くは春を迎えるための神聖な儀式の一つでありましたが、ヨーロッパにキリスト教が広まってからはこれらを異教の風習であるとして次第に魔女による儀式として変容していきました。ドイツでは、4月30日の夜に魔女たちがブロッケン山に集い催される酒宴として言い伝えられています。

吉井明久の答え

『現代では、夜通しでお酒を飲んだり騒いだりパレードをしたり最早ただの魔女の仮装パーティーと化していたりする。特に北欧では国を挙げた大規模な祝宴として行うことが多く、この様子は観光としても人気である』

教師のコメント

吉井君が正解したことに先生は驚きです。どうやら君は世界史や日本史が得意なようですね。これからもそれらの科目を中心に、勉強に励んで下さい。

神谷亮の答え

『ワンマンアーミーで勝てないとか、マジ無理ゲーなんだけど』

教師のコメント

先生も、あの戦闘シーンには度肝を抜かれました。

カポーン

「ふう……」 現在俺は、風呂に入っている。

無論、銭湯ではなく家屋の中にある風呂だ。

更に言うと、ここは優子さん家なのだ。つまり、ここであの優子が毎日体を洗っているというー

「うぼうぼうぼっ……」

あ……危ない。ガラにもないことを考えていたら、危うく溺れるところだった。

ちなみに野宿を決意した俺がどうしてこんな状況になっているかと言うと、少し前まで時間を遡ることになる。

「は……腹減った……」

俺は空腹に陥っていた。

野宿を決め込んだのだが、財布も無ければ食べ物もない。

明久の家では結局闇鍋しかやらなかったのではほとんど何も食べていないのだ。「しかも雨まで降ってくるとは………ついて無さ過ぎじゃないか」

そこまで激しい降水量ではないものの、肌寒くなってきたこの時期だと体に少し堪える。しかもコンビニで傘も買えないとなってはたまったもんじゃない。

「Don't forget. Always, somewhere, someone is fighting for you. As long as you remember her, you are not alone」.

聞き覚えのあるセリフを言いながらベンチに座り、眠るために目を閉じたら俺がいる場所だけ雨が止んだ。

「アンタ、何で英語で喋ってるの？ というか、こんな所で寝ると風邪引くわよ」

「優……子……?」

目を開けると、雨の中で俺の上に傘をさしている優子がいた。

「ここじゃ冷えるし、とりあえずウチ来る?」

「へ?」

「あら？ もうお風呂あがったの？ 少しは温まった？」

「お、おう。ありがとな」

「それにしても早かったわね。カラスの行水ってヤツ？」

ここは木下家のリビング。清涼祭の召喚獣大会で秀吉にペアになつてもらう為に来たことがあつたつけ。あの時は優子に関節技を決められるわ、無理やりペアを組まされるわであり良い思い出はないけど。

ちなみに優子はソファーに座りながらファッション雑誌を読んでいた。なんか明るい色をした服がたくさん載っているが、今はこういうのが流行りなのか？ ファッションについてはよくわからない。

「とりあえず夕ご飯食べてく？ その様子だとまだ食べてないんでしょ」

「ああ。それじゃありがたくご馳走になるぜ」

良かった……。なんとか今夜は空腹を凌げそうだ。

「で、何であんな所で寝ようとしていたの？」

「えっと……」

無一文で行き場がないからタダで一夜を明かそうとしていたんだーなんて言えるか！！

「もしかして家に帰れないとか？」

「うっ……！」

さ……流石はAクラス所属。いきなり核心をついてくるとは、なんて洞察力の高さだ……。

「その顔、まさか本当なの？」

「ああ。数日ほど帰るに帰れなくてな……」

まさか家の鍵がなくなつたとは言えまい。

「だったら、それまで家に泊まつていきなさいな。こっちは全然問題ないから。ね？ それで決まり」

「ちょ、ちよつとお母さん！？ いきなり何言つてるのよ！？」

優子の奥からいきなり現れた女性から木下家への宿泊を勧められた。なるほど。母親というだけあって見た目は優子をそのまま大きくした感じだ。ただし眼はくりつとしていて性格も優子とは大分違つて柔和みたいだが。

「それにしても、あなたがあの神谷君ね」

「はあ……。確かに俺の名字は神谷ですが、『あの』っていうのは一体どういうことなんですか？」

「そんなの決まつてるじゃない。あなたが優子の彼ー」

「お母さんちよつとこつち来て！」

優子がいきなり俺たちの間に割つて入つたかと思うとそのまま母親の手を引つ張つて俺から離れ、俺に背を向けて何か言い合ひをしていった。

『お母さん！ なにを口走ろうとしてるの！？』

『あら。神谷君つて優子ちゃんのお氏さんじゃないの？ あの子なら頼りがいもありそうだし、交際に関して母さんはオッケーよ』

『ち、違つわよ！！ 別にアイツとはそんな関係じゃないわ』

『じゃあ、どういう関係なの？』

『アイツは……ただのサンドバッグよ！』

『あらあら。そんなこと言つたら神谷君がかわいそうじゃない。意地を張らないで素直になつたら？』

『意地なんか張つてないつてば！！』

今サンドバッグがどうか聞こえた気がするが、俺の本能が『気にするな』と囁いているから気にしないでおう。

「どうしたのじゃ姉上に母上ーって亮。お主一体どうしたのじゃ？」

優子たち親子の言い合いが聞こえてきたのか、私服姿の秀吉がドアを開けてリビングに入ってきた。

「実は数日ほど家に帰れなくてな。そのまま成り行きでその間に宿泊させてもらうことになった」

「ふむ。母上なら十分あり得る話じゃな」

秀吉は自分の額に手を当てて半ば呆れ顔で呟いた。

俺も人のことを言えたものではないが、自分の母親に対してそういう認識はどうかと思う。そしてそんな認識をされている母親って一体どういう私生活を送っているんだろう。

「まあそんなわけで数日だけだがよろしく頼む」

「うむ。委細承知した」

俺の突然の頼みをのんでくれるとは。やっぱり秀吉は優しいなあ。

『ところで、もうキスとかしちゃったの？』

『だからなんでそうなるのよ!?!』

ちなみに優子と彼女の母親は、まだ何かを言い合っていた。

会ってまだ間もないんだけど優子と秀吉のお母さんって、とことんマイペースというか自由奔放というか、そんな印象を受けた。

「ねえ、神谷君」

「はい？」

優子のお母さんは、すごくニコニコした顔をしながら俺のところに来て来た。

「優子とはどこまで進んでー」

「亮！ 寝室に使えるそうな空き部屋があるから案内するわね！」
「おわっ!?!」

突然優子に手を引かれ、そのままリビングを後にした。

「悪いけどしばらく使っていないからホコリとかあるかもしれないわよ」

「いやいや、全然問題ないって」

優子に案内されたのは、十六畳ぐらいの和室だった。部屋の隅には置かれた布団と、その上に枕が一つ置いてある。普段掃除をしてないって言っている割には結構片付いていて、目立ったホコリも見当たらない。これなら掃除をする必要はなさそうだ。

「それじゃ、布団でも敷くか」

「あ。アタシも手伝うわ」

二人で布団を敷いている時に、優子がこんなことを聞いてきた。

「それにしてもゴメンね。うちのお母さんが年がいもなくはしゃいじゃって」

「ん？ 元気があるし明るくていいと思うぞ」

俺がそう言くと、優子は顔を紅くして少し俯いた。もしかして気分でも悪くなっただか？

「亮」

「ん？」

「亮は——明るい女の子って好き？」

「明るい女の子か。そうだな……」

何で俺にそんなことを聞くのかは知らないが、聞かれたからには答えないとな。

「ああ。好きだぞ」

おとなしい女の子が嫌いだというわけではないけど、自分の明るさで周りを明るくできるっていうのはやっぱりすごいことだと思うしな。

「そっか」

今度は胸を撫で下ろして安心した表情を浮かべている。一体何なんだ？

そうこうしている間に俺たちは布団を敷き終え、寝るにはちょうど良い時間となった。

「優子。ありがとな」

「別にこれぐらいいいわよ。それじゃ、お休み」

「おう。お休み」

優子が部屋を出て行った後に電気を消して、そのまま俺も眠ることにした。

ところで話は変わるが、『朝起きたら だった』というのを聞いたことはないだろうか。

例えば、朝起きたら知らない美人の異性が隣で寝ていた。例えば、朝起きたら幼なじみの異性が自分の上に跨っていた。

例えば、朝起きたら口バの耳が生えていた、なんてのもあるだろう。

先に挙げた状況はあくまでも漫画や小説の中だけの話であり、特に一番目と二番目が現実に起ころうものなら『リア充爆発しろ!』と言いたくなる。忌々しい、あゝ忌々しい、忌々しい。

閑話休題。あ、ちなみに閑話休題はレンによると『話が本筋から脱線すること』じゃなくて『脱線した話題を本筋に戻すこと』って意味らしい。受験生の皆、ここ、テストに出るからな。

さて、一言マメ知識も済んだところで今度こそ話を戻そう。

そもそもどうしてこんな話をしたのかと言うと、俺がその状況に陥っているからだ。

朝起きたらー

「……ん？」

「あれ？」

朝起きたらー俺とレンが二人に分裂していた。レンの方は特に変わりないのだが、俺の方は召喚獣よりも頭一つ高いぐらいの身長になっている。だから今の俺は葉月ちゃんや姉貴よりも身長が低い。そして、いつの間にか俺の胸には不思議なおしゃぶりがついていた。紫色に輝く不思議なおしゃぶりが。

ほほうーこれはまた、わけがわからないよ。

「一体これは何なんだ？」

「そんなことを私に聞かないでよ」

さて、何か着れそうな服は――押し入れに着せかえ人形があったから、今はそれを借りるか。

「亮。もう起きて――る……?」

「おう。優子か?」

「あら優子。おはよう」

「う、うん。おはよう」

優子はまるで有り得ないことを見るような目をしている。そりゃそうだ。目の前には一人のはずだった知人が二人になっており、更にその一方は子供用の着せかえ人形の服が着れるほどの大きさしかない。俺だって――いや、レンでもこの状況を理解出来ないだろう。

「二人とも、朝ご飯出来たわよ」

「ええ。わかったわ」

「ありがとな、優子」

あ。そうだ。これはレンに言わなきゃな。

「レン。朝飯が済んだら出かけるから、ちょっと付き合ってくれ」

「別にいいけど、どこ行くの?」

「どこってそりゃ――俺の工房さ」

第七十問その一・有給取ってエロゲ三昧！（前書き）

50問以上の課題レポートに加え他にも課題が山盛りとか、軽く燃え尽きるレベルです……。

第七十問その一・有給取ってエロゲ三昧！

問 四大悲劇と呼ばれるシェイクスピアの戯曲を全て挙げなさい

姫路瑞希の答え

『ハムレット ？リア王 ？オセロ ？マクベス』

教師のコメント

正解です。シェイクスピアの作品は他にも『ロミオとジュリエット』 『ヴェニスの商人』 などがありますが、四大悲劇と呼ばれるものはその四つになります。知名度で『ロミオとジュリエット』を加えてしまいがちですが、間違いないで覚えましょう。

吉井明久の答え

『ハムレット ？リア王 ？ロミオとジュリエット ？父の結婚生活』

教師のコメント

貴方のお父さんは家庭でどんな扱いを受けているのでしょうか。

土屋康太の答え

『？財布の紛失 ？撮影失敗 ？決定的瞬間に目にゴミ ？ハードディスク大破』

教師のコメント

？は先生も泣くかもしれません。

神谷亮の答え

『？ハードディスク大破　？ハードディスクの中身をクラスの異性に見られる　？ハードディスクの中身がネットに流出　？ハードディスクを誤ってフォーマットしてしまった』

教師のコメント

どれも取り返しのつかないことなので注意が必要ですね。

「おつす、ババア」

「……これは一体どういうことだい？」

「それはこっちが聞きたいぐらいですよ」

俺たちの目の前にいる学園長は、額に手をつけて深いため息をついている。

今日は月曜日。俺とレンは朝一番に学園長室にやってきた。ちなみにレンは女子用の制服のスペアを優子から借り、俺は制服のサイズが合うわけがなかったから昨日一日かけて自分の工房で仕立てた。「んで、こんな朝早くからわざわざ何をしにここまで来たのかを説明してもらおうか」

「実は学園長に一つ頼みごとがあるんです」

「頼みごとだって？」

今回の学園長との交渉については、レンが全面的に引き受けてくれることになっている。こういうことは俺よりもレンの方がずっと得意だからな。

「はい。私たちが召喚獣をそれぞれで喚び出せるようにして欲しいんです」「それはまた、随分な頼みごとさね」

「試召戦争が解禁される明後日までになんとかやってもらえませんか？」

俺とレンのそれぞれが召喚獣を喚び出して操れるようにする。これこそが俺たちの要求だ。俺とレンが身体まで別々になった以上、「一方が召喚獣を喚び出している間にもう一方が召喚獣を喚び出せない」なんてことになったら、試召戦争をやるにあたって厄介事以外の何でもない。

だから不具合の調整（表向きにはメンテナンスと言い張っているようだけど）が終わって試召戦争が解禁される前に、あらかじめ学園長に直談判をしに来たってわけだ。

「ここで断って話が大きくなるのも面倒だしね。いいだろう。その要求を呑もうじゃないか」

「ありがとうございます。学園長」

良かった。とりあえずこれで一安心ってところだな。

「それより小さい方の神谷。アンタそんなに小さくて補充試験を受けられるのかい？」

「まあ、鉛筆は持てるから大丈夫だと思う」

卓袱台の上に乗ればなんとか試験は受けることができるだろう。マナーについては目を瞑って欲しい。

「それと大きい方の神谷。アンタの召喚獣の方は新たに調整が必要だから、明後日までは召喚獣を喚び出せないからね。それは覚えておきな」

「わかりました。それでは失礼します」

レンがそう言い、俺たちは学園長室を後にした。

午前中の授業が終わって昼休み。亮とレンが二人に分かれていたことにやっとな慣れてきた僕たちは、卓袱台に自分の昼食を広げて食べていた。

ちなみに現在ムツツリー二はジャンケンに負けて、皆の分のジュースを買いに行っている。

そんな中、姫路さんの弁当を覗き込んだ美波とレンがこんなことを呟いた。

「へえ〜。瑞希、今日は珍しいおかずね」

「これは鮪のーしょうが焼きかしら？」

「んあ？ 鮪のしょうが焼きだと？」

「そういえば明久の弁当にも鮪のしょうが焼きがあるな」

「ゴふっ！」

雄二と亮の驚きの発言に思わず盛大にむせる。

「やいやヤバいっ！ そう言えば今は姫路さんと一緒に住んでいて彼女のお弁当も僕が作ったんだから、中身は同じだったんだ！ 早く誤魔化さない！」

「ぐ、偶然だね姫路さんっ！ さては姫路さんのお母さんも昨日の簡単レシピを見てたのかな！」

咄嗟に同じTVを見ていたという言い訳を口にする。姫路さん、うまく乗ってこの話題を流すんだ……！

「え？ 忘れちゃったんですか明久君。今日のお弁当は明久君が作ってーモゴモゴ」

「姫路さあーん！？ ちょっと向こうで僕とお話しようねーっ!？」
天然すぎるよっ!？」

慌てて姫路さんの口を塞いだまま教育の隅まで移動する。今まで
も薄々思っていたけれど、姫路さんって相当鈍いような気がする！

「なんだ明久。姫路の弁当を作ってやったのか」

姫路と明久が戻ってくると、雄二が開口一番にそんな質問をした。
まあ俺も気になっていたことなんだけど。

ちなみに俺の弁当は、おかがが入ったおにぎりが一つだけ。とは
言ってもコンビ二のおにぎりと同じぐらいの大きさなので、小さく
なった今の俺にとっては十分な量だ。

「ああ、いや。それは、その……」

「? 明久。どうかしたの?」

何故かいきなり明久が慌てだし、それを見たレンが首を傾げた。

明久のヤツ、別に焦ることもないのに。

「何を焦ってたんだよ。この前福引きで当たった 海の幸セットの
処分を手伝ってもらったっただけだろ?」

「あれは相当な量じゃったからな」

「確かに二人で食べきるには厳しい量だったし」

きつと明久と玲さんの二人では全て食べきるのは不可能と感じた
から姫路にも手伝ってもらった、ということだろう。

それにしても、

(なかなか頭が回るじゃんか明久)

(材料が余っているのならお礼に何か作ります、とか姫路が言い出す前に手を打ったんだろ?)

(見直したぞい)

俺と同じ意見を持っていたのか、俺だけでなく雄二と秀吉も明久にしか聞こえないようにこっそり耳打ちした。

「そうなんだよね。この前鍋をやった時はほとんど減らなかったし」「結局、あの時は闇鍋ぐらいしかやらなかったからな」

姫路には悪いが、彼女に料理を作らせるわけにはいかない。何故なら彼女の料理で文字通り死者が量産されてしまうからだ。

「……………ただいま」

そうやって皆で会話しながら昼食を楽しんでいると、ムツツリー二がジューズの缶を両手に抱えて戻ってきた。

「随分時間がかかったみたいだけど、購買が混んだの?」

確かにレンが聞くように、結構遅かった。何事にも素早いムツツリー二にしては珍しいな。

「……………途中で相談を受けていた」

「相談ってー」

「いいわ土屋君。私から直接話すから」

明久の言葉を遮るように、珍しいお客さんが俺たちの所にやってきた。

肩にかからない程度で切りそろえられた髪と、クールな表情。腕を組んで、畳に座っている俺たちを見下ろしているのはー

「……………っ!!! (ボタボタボタ)」

「ちよつと? いきなり鼻血を出すなんて、一体どうしたのよ神谷君? というかその小さい姿はどういうことなの?」

「みず……………いる……………」

「っ!?!」

珍しいお客さんーCクラス代表の小山は俺の言葉を聞くと、顔を真っ赤にしてもものすごい勢いでスカートを押さえた。もちろんム

ツツリー二はギリりと鋭い眼光を放っている。へえ。小山って、意外と明るい色が好きなんだな。おかげで失血死しそうだ。

辺りが微妙な空気に包まれている中、レンが一つ咳払いをして口を開いた。

「それじゃあ、ムツツリー二が相談を受けていた相手っていうのはー」

「ええ。私よ。相談って言うよりは、購買で見かけたから質問をさせてもらっていただけなだけどね」

対して小山は、顔を赤らめながらもそう答えた。

「……………Fクラスの試召戦争の予定を聞きたいらしい」

「僕らのクラスの予定？」

「メンテナンスも終わったみたいだし、明後日の朝にはついに試召戦争が解禁されるでしょう？ そのときにFクラスはどう動くのかを教えてもらいたいだよ」

しかし、最下層のクラスである俺たちの動きを調べてくるとは、「随分と慎重なのね」　レンが意外そうに言う。それには俺も同感だ。

「それはそうでしょう？　だってFクラスは一学期にあそこまで学年全体を引つ掻き回した、言わば台風の目なんだもの。警戒して然るべきだと思わない？」

「それはそれは光栄な評価だけど……………いいの？　折角二学期になって元のCクラス設備に戻ったのに、いきなり試召戦争なんか考えても」

レンが値踏みするように問いかける。

試召戦争のルールの一つに、戦争に負けてランクを落とされた設備は学期が変わる毎にリセットされる　というものがある。下位クラスが上位クラスに負けて設備のランクが落とされた場合のみ、学期が変わると元に戻してもらえってことだ。

「そう言えばCクラスは以前の試召戦争でAクラスに負けてDクラスの設備に落とされておったの」

「それが二学期になって元のCクラス設備に戻っているってことですよね」

このルールは試召戦争を積極的にやらせるためのもので、学期末に試召戦争を行えば、下位クラスは設備に関してほぼノーリスクで上位クラスに挑戦できることとなる。

「試召戦争を考えても何も、別に私は自分たちから戦争を始める、とは言っていないわよ？　ただ、また中心になるであろうFクラスの動きが知りたいだけで」

「回りくどい言い方だな。要するに、こっちが情報を提供しないのなら、そっちも何も教えるつもりはないってことだろ？」

「まあ、そういう言い方もできるかもね」

小山は不敵な笑みを浮かべながら言う。

これはお互いが衝突するのを防ぐための同盟――というよりは取引だな。

「そういうことなら、最初から雄二のところに聞きにきたらいいのに」

「全くだ。何でムツツリー二に聞いたんだ？」

「あら。だって、坂本君が相手だところやって取引になっちゃうでしょう？　こっちが情報を提供しないで済むのなら、それに越したことはないじゃない」

こっちの疑問に対し、小山は悪びれもせずそう答えた。見事なまでの合理的な回答をありがとう。

「んで、どうすんだよ雄二？」

「いいだろう。その取引、乗ってやる」

「そう。それは助かるわ」

元から断られてると思っただけなのか、小山は形だけのお礼を言った。

「言うのは俺たちが目標としているクラスだけでいいの？」

「それだけじゃダメ。攻め込む時期も教えてもらわないとね」

確かに、俺たちFクラスの目標がAクラスだということは周知の

事実だから、それだけだったら取引にはならないだろう。

攻め込む時期も、と言われて雄二は一瞬迷ったような顔をした後、レンと数回アイコンタクトを交わしていた。もしかして、時期についてはまだ決まってるのか？

「Aクラスには、試召戦争解禁から一週間ー遅くとも二週間以内には攻め込む予定だ」

「……ふうん……？なるほどね……」

なんだ？随分間を置くんだな。雄二らしくないから、これはレンの考えなのか？

その疑問をレンに訪ねようとしたら、レンが視線で『余計なことは言わないように』と俺に釘を刺してきた。

「そっちはどうなんだ。Aクラスを目指すというのなら、俺たちとの戦いになるが」

「私たちはそこまで高望みしてないわ。ただ、Bクラスには挑んでみたいけどね。あなたたちと同じように、解禁から一、二週間くらいで」

「……」

Cクラスの目標はBクラス。小山の言うことは確かに順当な考えだろう。

「でも、いいの小山さん？ Bクラス代表の根本君って、確か小山さんの彼氏だったとー」

「それ以上言ったら殺すわよ」

どうやら明久は彼女の忘れたい過去に触れてしまったようだ。

「私はね、頭の良い男が好きなの。お勉強ができる人って意味じゃなくてね」

「よく言うぜ。根本なんか、卑怯なだけの小物だったろうが」

「卑怯な手段って、勝つためには合理的で、有効だと思わない？

私はそういうの、結構好きなんだけど。……あの男は、もう御免だけどね」

小山が笑う。卑怯な人が好き、か……。

『俺ってさ、じゃんけんは後出し以外したことないんだぜ』

『何を言ってるんだ、それでもいつも負けていただろ？ お前は卑怯者なんかじゃないさ。それに引き替え俺なんて、掃除当番の時はいつも腹痛のフリをしていたんだぜ？』

『いやいや。俺の方が卑怯者さ』

『そんなことはない。俺の方が卑怯者さ』

『……………実は俺、同じ年の従兄弟がいてさ。彼女が欲しいってそいつに相談したら、この前クラスメイトを紹介してくれたんだ』

『『この卑怯者っ！ 殺してやる！』』

『……………そいつ、男子校に通っているはずなのにな……………』

『……………俺のジューズ、やるよ』

『……………今日の帰り、たこやき奢ってやるよ』

『……………ありがとう……………』

近くの席で始まる卑怯アピール。なんてわかりやすいクラスメイトたちなんだ。

「そうなんですか。小山さんって、頭の良い人が好きだったんですね」

「ええ、そうよ姫路さん」

小山がフフッと意味ありげな笑みを浮かべる。

「そう言えば……………坂本君って頭良かったわよね？」

『…………………………（ドストドストドスト）』

「おいお前ら。無言でカッターを畳に突き立てるな。異様な光景だ

ぞ」

カッターを握り込んで、足元の畳に抜き差しするクラスメイトたち。どうして皆が皆カッターを持っているんだ？

「それじゃ、教えてくれてどうもありがとう。お互い目標の相手も違みたいだし、うまくやりましょ」

最後にそれだけ言って、小山は教室から出ていった。

どうやら他のクラスも試召戦争に向けて動き出したようだ。これが俺たちにとって吉と出るか凶と出るか……。

「あ。試召戦争と言えば、召喚獣の装備ってどうなったんだ？」

「確か、召喚獣の装備が変わるんだったよね」

試召戦争を控えているとなると、装備の変更を確認する必要がある。

「……………システムのメンテナンスはもう終わったらしい」

「ってことは、もう召喚できるんだよね」

「そうなるわね。ちよつと試してみましょ」

「んだな。えつと、誰か教師はー」

雄二の言葉を聞きながら辺りを見回して召喚の立ち会いをやってくれそうな先生を捜す。すると、運が良いのか悪いのか、鉄人が廊下を歩いているのが見えた。ちつ。もつと話しやすい相手がいいんだけど。

「まあ、仕方がないかな……………」

「だな。そろそろ昼休みも終わっちゃうし」

「背に腹はかえられないからな」

「じゃあ、西村先生！」

「ん？ ……吉井に坂本か。何か用か？」

「えつと、すみませんが召喚許可を「ダメだ」お願いできま「不許可だ」せんか？「却下だ」試召戦争「断る」も解禁されるし、「諦める」新しい召喚獣を「無理を言うな」ーって断りすぎじゃないですか！？ 一つのお願いを言い切る前に六回もダメだしされたのは初めてですよ畜生っ！」

「貴様がこちらの話を聞かないからだろうが」
それはどっちもどっちな気がするんだけど。

「前から言っているだろう。お前の召喚獣は簡単に喚び出してはいけないものだ」と

「それは、まあ……………」

観察処分者である明久の召喚獣は、他の人とは違って物に触れる特別仕様となっている。召喚獣は人より遙かに力の強いから、鉄人がそうやって心配するのも無理はない。

そんな俺たちを尻目に、姫路とレンと島田が鉄人の前に立つ。

「西村先生ダメですか？　ウチらは別に悪いことに使おうと思っ
ているわけじゃありません」

「そうです。ただ装備を確認したいだけなんです」

「美波ちゃんとレンちゃんの言う通りです。悪戯なんてしませんか
ら」

「……………まあ……………、装備を確認したいという気持ちも、わからんでも
ないが……………」

「……………お願いします、西村先生」

「……………わかった……………。俺も忙しいのだから、早く召喚しろ」

模範的な生徒三名を前に、鉄人の態度が軟化した。この頼みが俺
や明久や雄二だったら、絶対に許可してはくれないだろうけど。

「良かったよ。召喚許可が下りて」

「結果オーライじゃな」

「……………（コクコク）」

「どんな風が変わってるんだろうな」

「ちよつと楽しみですね」

「ウチは前みたいにぬりかべなんかが出てこないことを祈るわ……………」

「いや、それは出てこないと思うけど……………」

「んじゃ、喚んでみつか。せーのー」

「……………試獣召喚っ！……………」

さて、どんな召喚獣が出てくるかな。

「わあ……綺麗な鎧……なんだか凛々しくなった気がします」
「ランスに鎧ってことは、ウチは騎士ってことかしら。良かった……。盾代わりにまな板とかじゃなくて、本当に良かった……！」
「ほら、見てよ雄二。学ランの裏地に龍が描いてあるよ」
「見ろよ明久。俺は虎だぜ」
「甘いな二人とも。俺なんて紫色のビームソードにだぞ」
「刀に羽織り……。新撰組、といった体じゃな。強そうじゃ」
「……………上忍にレベルアップというところ」
「ふむふむ。皆だいが良い物に変更されてるな。」
「……ってちよつと待てええーい！」
「なんだ吉井、坂本、神谷。うるさいぞ」
「うるさくもなりますよ！ 明らかに不公平じゃないですかこんなの！」
「あまりの現状に、明久がついに声を上げた。」
「そうか？」
「そうですね！ だって、姫路さんはどう変わったか見てくださいよ！」
「えっと、私は前より鎧がしっかりして、武器も長くて大きくなりましたね」
「美波は？」
「ウチは軍服から騎士鎧に、サーベルからランスに変わったわね」
「秀吉は？」
「薙刀使いから新撰組になったようじゃな」
「ムッツリーニ」
「……………下忍から上忍に出世した」
「僕と雄二」
「学ランの裏地に刺繍が入ったな」
「亮」
「ビームソードが青色から紫色になった」

「……おかしいだろ！」

思わず俺と明久と雄二の声が揃う。他の皆との差が大きすぎるだろ！

「あれ？ レンちゃんは召喚しないんですか？」

「私は召喚獣の調整が終わらないから、明後日までは召喚できないのよ」

「そっか。レンと神谷の二人に分かれちゃったからね」

「となると、ぶつつけ本番ってことか」

「そういうことよ」

俺は改めて自分の召喚獣を眺めてみる。やっぱり特に変わったところはない……ん？ いや、ちよつと待った。これは――

「いや。待て明久。俺のはお前と違って武器も変わっている」

「お？ 雄二もか？ 実は俺もだ」

「え？ そうなの？ 雄二の方は？」

「メリケンサックが棒になった」

「亮は？」

「左手に装備していたビームソードがビーム手錠になった」

「どっちも些細な変化だ！」

失礼な。片方の輪の内側にはトゲが付いてるから、ダメージ倍増なのに。

「いや、雄二と亮のはともかく明久。アンタの武器は変わってなくても仕方ないわよ」

「レン。それってどういうこと？」

「アンタは観察処分者だから召喚獣が物に触ることができるとしてよ？ そんな召喚獣に木刀じゃなくて金属製の武器を持ったらどうなると思う？」

「……確実に負傷者が出るね」

「学園側としても、そういう事態は避けなきゃいけないのよ」

レンの言う通り、この学校の目玉の召喚獣で刃傷沙汰になったら大変なことになるだろう。下手をすればこの学園の存在が危ぶまれる。

「さあ、もう満足しただろう。許可はここまでだ」

そう言って鉄人がフィールドを消すと、同時に俺たちの召喚獣も消えていった。

「もうすぐ昼休みも終わる。遊んでいないで次の授業の用意をしておくことだ」

そんな小言と共に、鉄人は教室から出て行った。

「アキも坂本も神谷も、成長してないってことよね」

「島田。このバカたちと一緒にするな」

「全く以て失礼な」

「そうだよ美波。雄二や亮の頭とか美波の胸と違って、僕は成長して（ポキユツ）」

「何か、言ったかしら？」

「なんでもありません」

「確かに、明久は成長しておらんのかな……」

バカなことを言った明久は、島田に肘間接を握り潰されていた。

第七十問その二・エキセントリック少年亮

時間は流れて現在は放課後。

「なんか、こうやって平和に帰れる日って久しぶりな感じがするな」
軽そうな鞆を手にした雄二が呟いた。

「言われてみればそうだな」

「ここのはずっと補習だらけだったからね」

この学園では試召戦争があるため、他の学校よりどうしても放課後の補習授業が増えてしまうのだ。

「アンタたちは脱走しようとするから、他の人よりも更に補習時間が多いんですよ」

わけがわからないな。

「……………のんびりした放課後はありがたい」

「一日が長くなって得した気分ですよね」

「自由に過ごせる時間が増えるし」

ムツリーニや姫路だけでなく、レンもどこか嬉しそうだ。ちな

みに秀吉は演劇部だから、いつもは帰りが別になっている。

「折角だし、どっか寄って帰るか？」

雄二がそんなことを言った。いつもなら俺もその誘いに乗るんだけど……………

「今日はやめておく。新しい暗器も作りたいし」

実は大人気アーケードクイズゲーム『クイズマジカルアカデミー（通称QMA）』の最新版が昨日からアップデートされたから近くのゲームセンターに行きたいんだけど、残念ながら今は優先事項が多いからお預けだ。

「ところで亮。お前どこで暗器を作ってるんだ？ お前んちに暗器を作れそうな場所があるとは考えにくいんだが」

ふと、雄二がそんな質問をしてきた。

「ふっふっふ。実はな、この俺専用の工房があるんだ」

「『工房!?』」

「いやいや、アレって本当に工房と呼べるの?」 皆が驚く中、レ
ンだけが冷静にツツゴミを入れてきた。

工房と呼べるかだって? 呼べるに決まってるじゃないか!
…多分。

「レン。どういこと?」

「明久。臯月山にある『お化け洞窟』って知ってる?」

「うん。この近くの臯月山にある、大きな洞窟のことだよな?」

「お化け洞窟と言えば、最近ゴミの不法投棄が問題になっていま
るはずですが」

この近くには臯月山というそれほど高くない山があり、観光客や
ら登山家やら多くの人で賑わっている。

そして姫路の言う通り、少し前から臯月山のお化け洞窟には粗大
ゴミや埋め立てゴミを中心にゴミの不法投棄が相次いでいる。最近
では町内会の皆もお手上げ状態なのではとの噂もある。

「で、亮がそのお化け洞窟を改造して雨風をしのげるようにして、
更に工具一式やら何やら持ち込んだのよ。許可もなくね」

え? 許可? 何それ食えんの?

「つてことは亮の暗器ってまさか」

「ええ。捨てられたゴミの中から使えそうなものを選んで作ってるの
よ」

捨てた本人はどう思っているかは知らんが、俺にとっては宝の山
みたいなもんだ。なにせ材料費が浮くんだから。

「まあそんなわけで、俺は今日はパスってことで」

「僕もやめとくよ。ちよつとスーパーに寄って夕食の買い物をして
いきたいからね」

すると、明久も俺の意見に賛同してきた。

「買い物? あの海の幸セットがまだ余ってるんじゃないのか?」

「まだ少しあるにはあるけど、今日はお肉にしようと思って。確か、
月曜日は卵とお肉が安かったはずだし」

「そうか。じゃあ俺も今夜は肉にすつかな」

雄二も今夜も食事当番なのか、そんなことを呟いた。

「ちなみに明久。お前は何を作る気なんだ？」

「ん〜、そうだなあ……」

明久は唸るようにして考えている。確かに毎日食事を作っていると、献立に困るよな。

「姫路さん、今日は何が食べたい？」

「え？ 私ですか？」

すると、何故か姫路に話を振っていた。

「私は特に好き嫌いが無いので何でも……。それより、明久君は何が食べたいですか？」

「いやいやいや！ ご飯を作るのは僕の仕事だからね！ そんなこと気にしないで大丈夫だから！」

「……」

明久たちのやり取りに、俺たちはジトツとした目を向けた。

「なあ、明久」

「？ なにかな亮？」

「お前、何で姫路と夕食の相談をしているんだ？」

「え？」

明久と姫路は一瞬顔を見合わせ、突然慌てだした。

「そそそそれはホラ、ねえ姫路さん！」

「は、はいっ！ これはその、えっと、明久君は私の好みを参考に、自分のお家の夕飯を作るうとしただけで、別に私に作ってくれるわけじゃありませんっ」

「……」

う〜ん。やっぱり怪しい……。

「えっとーじゃあ、僕はスーパーに寄って帰るからこの辺でっ！」

「わ、私もちよっと用事があるので失礼しますっ！」

俺たちの追及を逃れるように明久と姫路は走り出した。

「ただいま戻りました」

「おかえり。もうレンちゃんたら、堅くなっちゃって。ただいまでいいわよ」

木下家の玄関を開けて挨拶をすると、奥から優子と秀吉のお母さんが駆け足気味で出てきた。

ちなみに私も亮も、昨日あたりから下の名前で呼ばれるようになった。

「ねえレンちゃん。今日の下着、サイズはどうだった？」

「大丈夫でしたよ。というより、ピッタリだったんですけど」

実は昨日、『この機会にレンちゃんも女物の服とか着てみたら？』と言われ、近くのデパートで買ってきたであろう服やら下着やらを突然渡されていた。……服やスカートだけでなく、何故かブラのサイズもピッタリのもが。

「あら。それは良かったわ」

「いつの間に私のスリーサイズを測ったんですか？」

「うふふ。ヒ・ミ・ツ」

「それと、衣類のお代を支払うのはしばらく先になりそうなんです
がー」

「いいのよお代なんて。優子も秀吉も構わないって言ってるんだし
この親にしてあの子あり、ってところかしら？」

「あと優子は今亮君と一緒にいるから、もうしばらくしたら帰ってくるって」

亮と一緒にすることは、今は工房（？）にいるってことね。
そんなことを話しながらリビングに入ると、ちょうどテレビで二
ユー番組が放送されていた。

『一昨日海外で起きた、国際空港の大規模なストについて、現地の
中西記者がお送りします。中西さん。ストの様子はどうですか？』
『はい。こちら現地の中西です。一昨日勃発したスト騒ぎは、労働
者側と経営者側の労働条件の見解に依然として大きな隔たりがあり、
鎮静化の兆しは見られません。利用客の多くは周辺のホテルに滞在
して空港の機能の回復を待つようですが、一部では満室で宿を取る
ことができず、空港で夜を明かしている人の姿も見られるなどー』

なんか、初耳のニュースなんだけど。

「空港のストライキですかね？」

「うん。それで飛行機も飛ばせる状況じゃないんだって。まあ治安
の良い観光の国だからそこまで大問題に発展することもないんじや
ないかしら」

ストライキに発展する時点で大問題な気もするんだけど……。

「ところで、何か手伝うことはありますか？」

「手伝うこと？」

折角泊めてもらっているのに、手伝いもしないっていうのはやっ
ぱり気が引けるし。

「それじゃあ悪いんだけど、お買い物を頼んでいいかしら？ 今か
らメモに書くから」

「はい。わかりました」

メモと買い物袋と財布を受け取った私は、近くのスーパーへと足
を向けた。

『優子がはいてくれないこのフリフリのスカートとか、レンちゃんなら似合いそう』

早く買い物に行こう。また着せ替え人形にされてしまう前に。

『今日ハナント、トイレ用洗剤が大安売り！ヨク熟しテ甘いトイレ用洗剤がお買い得だヨ！今日のデザートはトイレ用洗剤で決まり！』

スーパーで買い物していると外人らしき呼び込みの店員が、ナスを片手にそんなことを叫んでいた。買い物メモにはナスを一つ買ってくるよう書いてあるけど、あの店員からは買いたくないなあ。なんか熟し過ぎたナスとか売られそうだし。他にナスを売っている場所ってないのかしら。

そんなことを考えながら歩いていると、目の前に聞き慣れた声で会話をしている三人の人物がいた。

『ゆ、雄二！？キサマ、なぜここにいる！？』

『さ、坂本君っ!?! いつの間に来たんですか!?!』
『いや。俺も普通に夕飯の買い物に来たんだが……』

どこからどう見ても、私のクラスメイトにしか見えない。

「アンタたち、何やってるのよ……?」

「更にレンまで!?!」

「アンタたちも夕ご飯の買い物?」

「おう。レンもか」

普通に返事をかえす雄二をよそに、明久と瑞希が慌てふためいていた。

「それで、これはどういう状況なの?」

「な、なにが? 僕と姫路さんはいさつき店の前で偶然会っただけで」

「そうですよレンちゃんっ。私たちは偶然一緒に買い物をしているだけなんです」

「ふ〜ん。あらそう。示し合わせて夕ご飯の買い物ね。それはまた、随分と仲の良いことじゃない」

途端に二人が更に慌て出す。語るに落ちるとはまさにこのことかしら。

「いや。だから違っって」

「それにしても、一緒に買い物って話の割には随分と挙動不審だな。隠しているのはそれだけじゃないってことか?」

雄二のその台詞で明久と瑞希がビクツと反応する。これはもう何か隠していると思えない。

「そ、そう言えば、最近の世の中は色々起きてるよねっ」

「そ、そうですよねっ。ニュースも盛りだくさんですよねっ」

「うんうんっ。ホント、空港でストが起きたりとかね!」

「アレは大変ですよ。空港が使えなくなっちゃって、日本に帰ってこられない人がたくさんいるそうですよっ」

空港のストが起きたのは確か一昨日だったはずだから、その晩に瑞希が明久の家に残ってーもしかして……！

「……空港のスト……一昨日の晩明久の家に残った姫路……まさか……！」

雄二も私と同じ結論に至ったようで、カツと目を見開いた。

「おい明久！ 正直に答えろ！ お前、まさかー！」

「な、なになかな？」

「ー姫路と、一緒に暮らしていたりしないだろうな……！」

「というか絶対同棲してるわよね？」

「いいいいイヤイヤ、そんなわけあるわけないわけないじゃないか」

「そそそそですよ。そんなことありえないこともないことでもないような気がしなくもないじゃないですか」

「アンタたち。その態度だと自分からバラしているようなものよ」

「て、テメエら……！ よりによって、このタイミングでなんてことを……！」

ここで出血沙汰なんてことはやめてよね。

でも、

「……なんてこった……！ 最悪、最悪だぞ畜生……！」

雄二は頭を抱えているだけで、特に何もしなかった。

「雄二、どうしたのさ？」

「どうもこうもあるか！ くそお……っ！ 俺は、俺はなんてバカな話をしちまったんだ……！ あの時の自分と明久を殴り飛ばしてやりてえ……！」

何で明久まで殴り飛ばす必要があるのかってツツコんだら負けかしら？

「って、愚痴っついても仕方ねえ。おい明久。この話はまだ誰にもバレていないよな？」

「う、うん。一応、雄二とレン以外には誰にも」

「それは不幸中の幸いだ。バレそうになったら俺に言え。隠蔽に協力してやる」

「あら。雄二にしては珍しいわね」

「まあ、こつちにも色々あるんだ」

てつきり明久に雄二が殴りかかったりするものだと思っていたけど、どうやら杞憂に終わるみたい。

「その代わり、絶対にバレるな。細心の注意を払って行動しろ。いいいな？」

「そりゃ、できる限り頑張るけど」

「何又ルいこと言っつてやがる！ できる限りなんかじゃダメなんだ

！ いいか明久。絶対に、絶対に誰にもバレるなよ……！」

「う、うん」

「レンも絶対に誰にもバラすなよ……！」

「え、ええ。わかったわ」

雄二の目には凄い迫力が満ちていた。

「何か大変なことにでも巻き込まれてるの？」

「ああ。バレたが最後、俺は明久を地獄に叩き落とさなくちゃ気が済まなくなる……！」

雄二。アンター一体何をしたのよ……？

「ま、この話は秘密にしておくわ」

「あ、ありがとうレン！」

「レンちゃん。どうかよろしくお願いします」

「すまないな。何とか頑張ってくれ」

別にバラしたところで私に何か得があるわけでもないし、私や亮だつて木下家にお世話になつてるし。

「僕だつて何が何でも秘密を守りきるよ」

「俺だつて報復攻撃なんて真似は極力したくないからな。誰にも見つかからないうちにさっさと帰れ」

「バレないためにも、二人で別々に帰った方がいいわよ」

「了解。じゃあこれ、プレゼント」

明久は手に持っていたナスを私に渡すと、瑞希と一緒に帰っていた。

「レン！ お前も誰にもバレないように隠蔽に協力してくれ！」

「わ、わかつたから、その手を放して。肩が……痛いから……」

雄二をここまでさせるなんて、何があつたのよ。

「それと雄二。後ろ」

雄二に肩を掴まれながらも、なんとか雄二の後ろを指差す。そこには――

「……雄二」

「……は？」

「……約束、覚えてる？」

「は……。はは、は……。翔子お前……いつからそこに……？」

「……最初から、ずっと。一緒に帰ってくれなかつた雄二にお仕置きをするために、追いかけてきた。それと、浮気は許さない」

「いや、大丈夫よ翔子。これは別にそういうのじゃないから」

「……そう」

「それにしても、色々とすまなかつたな……」

「……ううん。もういい」

「だよな。それじゃー」

「……うん」

「さらばだっ！」

「……逃がさない。絶対に」

「ちくしょおおおおーっ！！ 明久あああっ！ テメエのせいだからなあーっ！」

その台詞と共に、雄二による翔子からの逃亡劇が開始された。それにしても翔子との約束ねえ。内容はわからないけど、道理で雄二があんなに必死になるわけだわ。

P r r r r ! P r r r r !

突然、ポケットに入れている携帯電話の着信音が響いた。

「もしもし」

『もしもし。レンか？』

「亮？ もう帰ってるの？」

『ああ。それでもうすぐ大雨が降りそうだってテレビでやってたし、早めに帰った方がいいぞ』

「わかったわ。買い物が終わったらすぐ帰るから」

亮からの電話を切って買い物メモを確認する。ナスは明久から渡されたものがあるし、早いところ他のものを探して買い物を済ませてしましましょう。濡れ鼠になるのはゴメンだし。

第七十一問その一・文月戦線異常なし? side Len

問 次の英単語を日本語に訳しなさい。

『something else』

姫路瑞希の答え

『他の何か』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『他のエロス』

教師のコメント

頭の中が思春期で溢れているのがよくわかります。

神谷亮の答え

『走れエロス』

教師のコメント

教科も違いますし、作品名も間違っています。

『よし。それじゃ学園に向かうとするーあれ?』

『おなか……すいた……。おかしちょうだい』

『お菓子? え〜と……クッキーでいいか?』

『うん。ありがとう!』

『でもこんなところにいるなんて、やっぱり迷子にでもなったのか?』

『ん?』

『お嬢ちゃん、名前は? どの家の子供かな?』

『マナカ! かめどマナカ!』

『そっか、マナカちゃんか。でも、【かめど】なんて名字、この辺にあつたかな……?』

『パパ!』

『いやあのね、俺を勢いよく指差してパパはないだろ。ご近所さんに誤解されちゃうだろ?』

『パパ! パパなの!』

『ほほう……。ならば君のパパの名前を言ってみな!』

『え〜と……りょう!』

『……はい?』

バケツをひっくり返したような雨が降った翌日。教室に向かう廊下を歩いていると、顔が痣と隈だらけになっている雄二を見つけた。ちなみに亮は昨日完成した発明品を工房に取りに行き、そこから学園へ来ることになっている。……はずだったんだけど、さっき電話で『今日は学校に行けない!』と、割と切羽詰まった声で言っていた。何か変なトラブルに巻き込まれてないといいけど。

「ところで雄二。その顔つてもしかして」

「ああ。……翔子の家で一晩中サバイバルをやっている……」

「あ……。事情は大体わかったわ」

昨日はよくわからなかったけど、今となってはある程度予想がつく。

昨日言っていた翔子との約束の内容というはおそらく、『文月学園の生徒が同棲していたら自分たちも同棲する』とかそういう感じだと思う。

「こうなったら、明久に報復攻撃をするしかないな」

雄二が瞳に焰を灯し、怨めしげに呟いた。

「このバカ。少しは落ち着きなさい。秘密にするんじゃないの?」

「残念ながらアレは俺にとっての利があればこそその協定だ。利がなくなつて俺に害を及ぼし始めた以上、アイツには恨みしか残らねえ」
「明日から試召戦争が始まるっていうのに、そんなことやってる場合じゃないでしょ?」

「アイツを殺つたところでもう取り返しはつかねえが、そうしねえと俺の気が晴れねえんだよ……!」

雄二は私の言葉に耳を傾けることはなく、ひたすら明久への恨みつらみを口にしていった。こうなったらもう何の話も聞きはしないで

しようね。

仕方ない。こうなったらクラスの平和のため、私も合理的な方法を取ることにするわ。アンタを犠牲にして。

「雄二」

「んあ？ 何だ？」

「……………えいつ！」

私は雄二の右手を取ると、そのまま自分の胸に押し付けた。

「な……………何やってんだお前は!？」

「……………あ、アンタ……………」

な、なんかこういうのって、自分でやると尚更恥ずかしい…………。

なんとか恥ずかしさを我慢して言葉を続ける。

「翔子がないからって、朝からこんな場所ですご触ってるのよ!？」

「ちよつと待て!？ 今のはお前がわざとー」

「……………雄二。覚悟出来る？」

「翔子!？ お前いつからいたんだ!？」

雄二の後ろには、いつの間にか満面の怒りを浮かべた翔子がいた。

「翔子。そのバカを今日一日かけてお仕置きしてやってくれないかしら?？」

「……………わかった」

「おおい!! お前ら何勝手に決めてるんだ!？」

そのまま翔子にズルズルと引きずられてどこかに連れていかれる雄二。アンタのことは忘れないわ。五秒くらい。

あ、そうだ。これだけは言っておかないと。

「ゴメンね雄二。今例の話をされると、すごく厄介なことになりそうだから」

「は？ 一体どういうー」

「それと、Cクラスの動きには気をつけて。何かを仕掛けてきそうだから」

最後は声を小さくして雄二に呟く。そして翔子に連れられていく

雄二を背に、私は教室へと向かった。

これで雄二も少しは警戒してくれるでしょう。でも、何かこう、大事なことが抜け落ちているようなーそんな嫌な予感がする。

『どうしましょう。神谷さんが私たちの計画に気づきかけているようです』

『バレルのは時間の問題ということでしょう』

『それじゃあ、どうすれば良いでしょうか？ 計画を実行する放課後に、あちらが何らかのアクションを取ってくる可能性もありますよ？』

『そうですね……。でしたら、その時はこちらも本命とは別のアクションを起こしましょう。そのための策は、もう練っております』
『わかりました。お願いします』

特に何か起きることもなく、時間は放課後になった。

雄二は私が色々とやったから来なかったのはわかるけど、何故か亮も教室に来なかった。もしかして何かあったのかしら？

「それではHRを終わる。余計な寄り道などせず帰るように」
そんなことを考えているうちに鉄人はその言葉で帰りのHRを締めると、そのまま教室から出て行った。

「さて。ではワシはいつものように部活に行くとするかの」
その後を追うように、秀吉が鞆を担いで体育館の方へと歩いて行く。

「すみません。私も職員室に呼ばれているので、皆さんで先に帰って下さい」

続いて瑞希もそう言つと、荷物を持って教室を後にした。待つていても気を遣わせるだろうし、ここは言われた通り先に帰った方が良さそう。

(レン。ちよつといい？)

(あら。どうしたの明久？)

明久が私にしか聞こえないような小さな声でこつそりと呟いた。

(レン。例のことは、誰にも話していいよね？)

例のことってというのは、おそらく明久と瑞希と一緒に生活していることに違いない。

(勿論誰にも話してないわよ。当然でしょう？)

(ありがとう。助かるよ)

極秘懸案事項の確認が済んだのか、今度は普通の声量で話し始めた。

「ところで、雄二はどうしたんだろう？ 今日是一回も見かけなかったけど」

「あー……多分、風邪でも引いたんじゃない？」

まさか私が死地に追い込んだ、なんて言えないし。

その時、

「あ、神谷さん。学園長が呼びます。至急学園長室へ向かってください」

近くを通った先生が私にそんなことを伝えた。私に用事って、一体何かしら？

「レン。もしかして何かやらかしちゃったの？」

「何もやるわけないでしょ？ アンタじゃないんだから」

「だったらどうしてなんだろう？」

「わからないけど、とりあえず行ってくるわ。皆と先に帰ってて、明久を残し、私は職員室に向かった。」

「それじゃ、帰るか」

レンも姫路さんも職員室に行っちゃったし、美波もムツツリーもどこかに行っちゃったし、雄二と亮に至っては欠席しているし、僕は一人で帰ることにした。思えば一人で帰るのって結構稀な気がする。

「吉井。今帰り？」

「ん？」

廊下を歩いていると、後ろから声をかけられた。

「あれ？ Cクラス代表の、小山さん？」

「ええそうよ」

つまらなそうにこたえる小山さん。なんというか、僕に声をかけること自体が嫌だっただけだ。どうしてそんな人が僕を呼び止めたりしたんだろう。

「それにしても、貴方が一人なんて珍しいわね」

「うん。皆用事があるみたいだね」

「ふうん……なるほどね」

小山さんの目が一瞬キラリと光った気がした。

(それはこつちにとつて好都合だわ……)

そして、小山さんが何かを呟く。なんて言っただらう？

「それはそうと、ちよつと頼みごとをしてもいい？」

「ん？ 別に良いよ」

「ちよつとこの資料を旧校舎の空き教室まで運んでくれないかしら？ 先生に頼まれたんだけど、私も用事があるから」

小山さんは資料が入った少し大きめの箱を僕に渡してきた。

「これ、結構重いね」

「そりゃそうよ。元々男子が頼まれたんだから」

「え？」

「あ、いや。なんでもないわ。気にしないで」

小山さんがパタパタと手を振る。よくわからないけど、

「確か旧校舎の空き教室だったよね」

「ええ。ありがとう、吉井君」

「どういたしまして」

小山さんから渡された箱を持って、僕は空き教室へと向かう。

「それじゃあ、頑張つてね。色々と」

背中に小山さんの含みのある声が届いてきた。

「でも、先生は何でこんな重いものの運搬を小山さんに頼んだんだらう？」

旧校舎への渡り廊下を歩きながらひとりごちる。さっき何か言っ

てた気がするんだけど……まあいいや。

「よいしょつと……。ここで良いのかな？」

空き教室の適当な床のスペースに箱を置く。それじゃ、今度こそ帰ろうかな。

そう思つて立ち上がったところで、

「あ、アキちゃー吉井君っ！」

「えっ？」

教室の出入り口を見ると、そこには――

「特に異常はありませんね」

「そうかい。これで終わりだよ。お疲れさん」

「それでは、失礼します」

学園長室の外に出てドアを閉める。ふう。案外早く終わったわ。

ちなみに学園長からの呼び出しの内容は『私の召喚獣のテスト運転』だった。なんでも私の召喚獣の調整が予定より早く終わったから、一度テスト運転をして欲しいとのことだった。

「カバンは――教室だったっけ」

急に呼び出されたから、私のカバンはまだ教室の卓袱台に置いたままだ。

教室に戻ると、そこには誰もいなかった。皆もう帰ったのかしら？
カバンを持って教室を出ようとすると、

『ええええっ！？ どういうこと！？ どうして僕なんかに、玉野さんが！？』

『なんかなんて言わないで！ 吉井君にはわからないかもしれなくて、アキちゃんも凄く魅力的なんだから！』

隣の空き教室から、男女のそんなやり取りが聞こえてきた。

アキちゃんも明久のことだし、玉野さんはDクラスの人だったはずだからーこれって告白!? まさか明久が瑞希や美波以外の女子から告白をされるなんて驚きだわ。

「他人の告白現場を盗み聞きするなんて無粋な真似はやめた方がいいわよ」

教室の出入口からそんな声が聞こえた。Cクラス代表の、小山さんの声が。

今朝から感じていた嫌な予感が、頭の中で音を立てて繋がっていく。

なるほど。そういうことか。

「あなたこそ、女の子の恋心を利用するなんて、それこそ無粋なんじゃないかしら?」

「……やっぱり気づいていたのね。坂本君だけだったら、気づかれることはないと思っていたんだけど」

「あら。あんなことをわざわざ言いに来たんだから、そりや疑いもするわよ」

「それにしても、あなたが学園長先生に呼ばれて吉井が一人になったのは幸いだっただわ。こっちとしてももう一つ用意した計画を使わずに楽に本命の計画を実行することができたし」

小山さんが何らかの方法でFクラスを混乱させて試召戦争どころじゃなくさせるのは分かっていたから、彼女が雄二に何かを仕掛けてくる前に雄二を翔子に預けたんだけど、まさか明久の方に仕掛けてくるとは思わなかった。

小山さんーいや、Cクラスの狙いは『恨みや妬みによるFクラスどうしの同士討ち』をさせること。そしてFクラスが最も団結して行動するのが、同じFクラスの男子が異性と交遊していることが発覚したとき。

だから誰かが告白を受ければ小山さんの思惑通り、Fクラスは試

召戦争どころじゃなくなってしまう。

「残念だったわね神谷さん。詰めが甘かったわよ」

こうなった以上、私が何をしようとするは広まり、あっという間にFクラスの皆の耳に入ってしまう。

そしてその隙を突かれたら――Fクラスは未曾有の危機を迎えることになる。

『『『吉井を殺せえええっ！！』』』』

階下から聞こえてきたその叫び声は、Fクラスの皆のものだ。

そしてそれは、私が小山さんの策を止められず、Fクラスを窮地から救い出せなかったことを意味する。

「それじゃ、さようなら神谷さん。また明日ね」

その言葉と共に、小山さんは教室から去っていった。

「お願いします！ 私と付き合ってください！」

「……………ほえ？」

僕は旧校舎の空き教室でDクラスの玉野美紀さんにそんなことを言われ、一瞬頭が真っ白になってしまった。

付き合ってください？ 何それ？ どういうこと？

「えっと、付き合っちゃって……………誰が、誰と？」

「わ、私が……………アキちゃん……………アキちゃんと……………」

アキちゃんっていうのは、僕のこと……………だよな？ 僕が、玉野さんとー付き合う！？ これってまさか、俗に言う愛の告白ってやつじゃないの！？

「ええええっ！？ どういうこと！？ どうして僕なんかに、玉野さんが！？」

「なんかなんて言わないで！ 吉井君にはわからないかもしれないけど、アキちゃんは凄く魅力的なんだから！」

力強く断言されてしまった。こうして女の子から告白をされるなんて、生まれて初めてのことだ。えっと……………なんて言ったらいいんだろう……………？

「アキちゃんはすっごく可愛いんだから！ 透き通るような肌も、大きな瞳も、女の子の格好をさせられて真っ赤になって俯くあの態度も、全部！ 吉井君もあの子の魅力に気付くべきだと思う！」

興奮して、凄いい勢いで僕に詰め寄ってくる玉野さん。

「あ……………ご、ごめんなさい」

そんな自分の姿に気が付いたのか、ハツとしたように僕から一歩離れると、彼女は少し俯いた。

「だから、そのー」

そして、仕切り直すように再び言葉を紡ぐ。

「お願いします。私の……………私だけの、アキちゃんになって下さい……………」

…
「おかしい。異性からの告白って、もつと嬉しいものだと思っただのに。いざ告白されてみると、こんなにも返答に困るものだったなんて。」

なんてことも言ってもらえない。彼女は真剣に言っているんだ。僕も真剣に返事を考えよう。

頭の中で、彼女と付き合っただけ遊びに行ったらどうなるのかを真剣に考えてみる。

『やあ、待った？』

『ううん、今来たところーって、なんて格好してるのっ！』

『へ？普通にジーンズとＴシャツだけど？』

『ウィッグもスカートもして来てくれないなんて酷いじゃないっ。』

折角今日はアキちゃんに似合うアクセサリーのお店に行こうと思っていたのに！』

『いやいや玉野さん。僕はそういうのに興味はなくてーハッ！』

殺気！？』

『吉井明久……！彼女を作るとは、貴様、異端審問会の掟を忘れたのか……！』

『待つて待つて！この関係って彼氏彼女と言えるかどうか疑問がぎにやあああっ！』

『埋めておけ』

『ハッハッハッ』

驚くほど僕に優しくない関係だ。

玉野さんのことが好きとか嫌いとかそういう問題じゃない。これ

はもう前提条件して無理がある。付き合うことなんて不可能だ。

僕は心を決めると、玉野さんを合わせた。

「ごめん玉野さん。悪いんだけどー付き合えないよ」

その方向の道は、一緒に歩いていくことができそうにない。

僕がそう言つと、玉野さんは一瞬黙り込んで、その後こんな質問をしてきた。

「付き合えないって、もしかして……誰か、好きな人でもいるの……?」

恐らく他に好きな人がいてもいなくても、僕の返事が変わることはないだろう。

とは言つても、こんなに真剣な表情をされたらこっちも応えざるを得ない。うう……。なんて言えばいいんだろう……。こついつの、全然慣れていないのに……。

「えつと……いるにはいるんだけど……」

どうにも答えにくい。いや。答えにくいと言つよりは、答えられない。だって、僕自身もこついつことを深く考えたことがないのだから。

「その、吉井君の好きな人っていうのはー」

「そ、それは……」

喉で言葉がつかえる。どうしたら良いのかわからない。

僕の人生でもう二度とないかもしれない、記念すべき女の子からの告白。しかし告白されているのは、なぜか僕ではなく僕の女装姿限定。こんな告白をされたのは僕以外にいるのだろうか。

そこに、廊下を一人でふらふらと歩いている悪友の姿が目に入った。その上まるで一日中暴行を受けたかのように全身が傷だらけになっている。

「雄二!? 一体何があつたの!？」

「え……えええっ!？」

別にアイツが傷だらけになること事態は珍しくないが、今日のはいつもに増して酷かった。何をやらかせばあんな目に遭うんだ?

「アキちゃー吉井君っ！ その……お幸せにっ！」

気が付くと玉野さんは何かを呟きながらどこかへ走り去ってしまい、空き教室には僕一人となってしまう。走りながらだったから内容までは聞き取れなかったけど、まあ気にしなくても大丈夫だろう。

「ごめんね、玉野さん」

僕の命のためにも、君と付き合うわけにはいかない。
すると、

『『『吉井を殺せええええっ！！』』』

まるで地響きのような怒号が下の階の方から聞こえてきた。狙いは僕みただけけど、もしかしてさっきの告白！？

「こ、こうしちゃいられない！ ひとまず逃げないと！」

雄二やレンの指揮がなかったからか、なんとか校舎を脱出することに成功した。

外は雨降りでも傘もないけど、今はそんなことを気にしてはいられない！

「皆が来る前に早く逃げよう！」

雨の中をダッシュで走り、急いで家に帰ることにした。

でも、さっきのやり取りで翌日あんなことが起きるなんて、帰宅途中の僕には知る由もなかった。

『…………た、大変なことを聞いてしまったのじゃ……………!』

まさか小道具を取りに行った空き教室であのようなことが起こっておるとは…………。予想だにせん事態で面食らってしまったのじゃ…………。

「……………??? 秀吉。何があった?」

「む、むう…………。ムツツリーニか…………。実はじゃな、その…………演劇用の小物を取りに空き教室に行ったら、大変なことを聞いてしまつて」

「……………大変なこと?」

「あまり人に話す類のものではないのじゃが、どうにも落ち着かん…………。ムツツリーニよ。話を聞いてもらえんじやろうか」

「……………わかった。ムツツリ商会は秘密厳守」

「助かるのじゃ。実は、じゃな…………」

「……………うん」

あの女子生徒はー確か、Dクラスの玉野じゃったか?

その玉野という女子生徒が、

「好きなのじゃ!」

「……………誰のことを?」

「明久のことを！」

「……………」
まさかあやつが、姫路や島田ではなく、他の生徒から告白を受けておるとは……。なんとも驚きなんじゃない……。

「……………み、美春は、大変なことを聞いてしまいました……………」

第七十一問その三・文月戦線異常なし？ side Ryo

「パパ、あそぼ〜よ」

「だから俺はパパじゃないってば」

一体このやり取りを何度繰り返しただろうか。

俺の工房から木下家までの道中。俺はため息をつきながら、目の前にいる亀戸マナカちゃんを見た。

肩までかかるピンクのセミロングを赤いリボンでまとめたツインテールで小柄な体躯の女の子だ。見た目からして――小学校低学年ぐらいだろうか。

「やっぱりこのままじゃ学校には行けないよな」

マナカちゃんの身寄りを探すべく、学校はレンに任せよう。

「あらあら。まさか隠し子がいたなんて。もしかしてできちゃった婚？」

「いや、名字からして既に違うじゃないですか」

あれからレンに『学校へは行けない』という連絡を入れ、現在は木下家のパソコンを借りてインターネットに検索依頼等をだしている亀戸さんがいるのか調査中だ。

ちなみに優子たちのお母さんには分厚い電話帳で亀戸さんの住所と電話番号を調べてもらっている。

「亀戸……亀戸……この辺りにはいないわね」

亀田や亀井といった名字はいくつか見つかったけど、亀戸はないわ、と続ける。

「亮君は何か見つかった？」

「いえ。何もありません」

さて、捜査は行き詰まりか……。困ったな。

『それでは、お昼のニュースを終わります。時刻はもうすぐ午後12時となります』

テレビの時計を見ると、時刻は正午を表示していた。「それじゃちょっと休憩してお昼にしましょうか。今からご飯を作るから、亮君はマナカちゃんを見ていてあげてね」

「ええ。了解です」

マナカちゃんはぐっすり寝ているから、近くにあった毛布をかけてあげた。

「さて、どうしたものかな？」

「どうやらお困りのようだね」

「今のところ全く打つ手なしってところだな」

「ふくん。そっか」

何か他に今できることはーって、ちょっと待て！

「突然現れるなよ！ びっくりするから！」

「何を言ってるんだい？ 僕はさっきからここにいたんだぜ」

俺の後ろには安心院さんこと安心院なじみーいや、彼女の姿をした世界の矯正者がいた。

この辺の学校指定ではないセーラー服を着て、ロングの黒髪を後ろで束ねて白いヘッドバンドをつけている。

あ。そういえば。

「安心院さん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「何だい？」

「この前会った時『この世界では自分はこういう風に認識される』とか言ってたんだけど、あれってどういうことなんだ？」

「ああ、あれね」

謎の教室で初めて安心院さんに会った時、確かに彼女はそんなことを俺に言っていた。

「うーん。何て言えば良いんだろう……」

安心院さんは少し考え込む仕草をした後、俺にこんなことを聞いてきた。

「神谷君。君は、神様とはどういう存在だと思う？」

「は？ 神様……？」

質問の意図はよくわからんが、きっと何かがあるんだろう。

「えっと、人々の上に立って勝利やら幸福やら色々なものを司ってるんじゃないのか？」

幸福の女神とか冥界の神とかはそんな感じだと思うんだが。

「一般的にはその認識が広まっているんだけど、実はちょっと違うんだよ」

「違うって、何が？」

「僕たちは別にそうだった概念を司るわけじゃない。むしろ、それらの概念から生み出された存在なんだ」

「ということは、神が幸せを生み出したんじゃないで、幸せ自体が神を生み出したってことか？」

「そうだね。そして幸福や不幸といった概念を生み出したのは、紛れもない君たち生き物の思いなんだよ」

「え？ 俺たちの思い？」

「ということは、俺たちが幸せと思うから幸せという概念が生まれ、幸せではないと感じるから不幸という概念が生まれるってことか。」

待てよ。神は概念から生まれて、概念は人から生まれるんだろ？
ということば、

「神は生き物ーいや、俺たち人間が生み出したってことか……？」

「察しがいいね。そういうことだよ」

意外というよりは、何故か納得してしまった。

確かに神話はあくまでも話、遙か昔に神が存在していた確たる証

扱ではない。でもそれだけで全てを否定するには早計なんじゃないのカー

「大丈夫かい神谷君。頭から煙が出てるよ」

はっ。俺は一体何を!?

「それで、それが安心院さんの正体と何の関係があるんだ?」

「神谷君。同じ概念でも人や文化によって変わるってことはわかるかい?」

概念が変わる? 一体どういうこと?

俺の顔を見た安心院さんは、こんなことを言い出した。

「君は、『不浄の左手』という言葉を知ってるかい?」

「知らんっ!」

「そこは即答なんだね……」

知らないものは仕方ない。

「国によつては左手は不浄なものであり、右手は神聖なものだといふ考えを持った人たちもいるんだよ」

「神聖な右手か。聞いたことないな」

自分とはこんなにも違う考えを持った人たちがいるなんて、世界って広いんだな。

「で、それがどうしたんだ?」

「まあ焦りなさんな。人や環境で概念が変わるように、世界が変わると概念も変わるんだよ。魔法を使えることが常識だったり、地上には住まずに地下に住むことが当たり前だったりね」

「世界って色々あるんだな」

特に魔法が使える世界。行けるのなら一度行ってみたいな。

「そして神カー少なくとも僕はその世界の概念に合った人物になるんだ」

「なら、他の世界に行ったらまた違う姿になるってことか?」

「そういうこと」

どっかにこんな感じの仙人がいた気がするが、多分気のせいだ。

「おなかすいた……」

ついさっき目が覚めたのか、寝ぼけ眼のマナカちゃんが俺の上着の裾を引っ張っていた。

「じゃあご飯でも食べるか」

「うんっ！」

「そうだ。安心院もどうだ？」

あの人なら神ということさえ隠せば、受け入れてくれるかもしれないし。

「やめておくよ。ま、頑張ってるね神谷君」

「おう」

俺とマナカちゃんは昼食を食べるためにリビングへと向かった。

『あの子は……。なるほど。そういつことが。はあ。また忙しくなりそうだな』

第七十二問その一・『お前なんだか』『トランプとか武器にして戦いそうな顔だ』

問 次の空欄に当てはまる英単語を記入しなさい

B r e a d i s m a d e f r o m () .

霧島翔子の答え

『 f l o u r 』

教師のコメント

正解です。これは『パンは()で出来ている』という文章になります。

b e m a d e f r o m () は m a k e A f r o m B の受動態となり、「AをBという材料から作る」という意味合いになります。なので、『パン焼き器』などでは、材料ではなく使用する道具となるので、不正解となります。注意しましょう。

1931

吉井明久の答え

『 h a p p y w h i t e p o w d e r 』

教師のコメント

幸せの白い粉。ダメ、絶対。

神谷亮の答え

『 t e r r a 』

教師のコメント

ラテン語ではなく英語で答えて下さい。それに答えは『大地』ではありません。

姫路瑞希の答え

『Potassium carbonate』

教師のコメント

炭酸カリウムとは随分と難しい単語を知っていますね。こちらはガラスなどの原材料であり、パンの材料には適しません。BreadとBead（ビーズ・数珠玉）を読み間違えてしまったのですね？ 白い粉状の物質という点では合っていますが、それでパンを作ると大変なことになってしまいますよ。

もつとも、そんなものでパンを焼く人なんているわけありませんが（笑）。

「さて。お前たちも知っているとは思いますが、今日から試召戦争が可能になる。一学期の学習の成果を試す良い機会になるので、積極的に参加するといいだろう」

ギリギリギリ……

「また、旧校舎の一・二階の踊り場にある水道だが、本日配管工事を行うためー」

イライライラ……

「それと、交換留学制度のお知らせがー」

『『吉井、殺す……』』

結局マナカちゃんに関する情報は何も得られず、木下家にマナカちゃんを預けてやってきた今朝のHR。鉄人が教壇でいつものように連絡事項を告げている中、理由は知らんが明久はクラスメイトの殺意と怨みの声に晒され続けた。

明久だけでなく、クラスのほぼ全員が中腰でいつでも飛び出せるように準備をしている。恐らく鉄人がいなくなった瞬間、この教室は危険な処刑場と化すだろう。

「連絡事項は以上だ。今日もしっかり勉学に励むように」

毎度お馴染み締めめの定例句。これで鉄人はいなくなり、血で血を洗う死闘が幕を開けるー

コンコン

「失礼します」

「ー」というところで、教室のドアがノックされ、誰かが入ってきた。

「Cクラスの小山か。どうしたんだ？」

「すいません西村先生。少しFクラスに連絡事項がありました」

鉄人にそう告げて、Fクラスの皆の前に立つ小山さん。

そして、彼女は小さく息を吸うと、

「我々Cクラスは、本日9：30より、Fクラスに対して試召戦争を申し込めます！」

「……なにいつ!?」「」「」

はつきりと言い放った。いきなりどういうことだ!?

「良いのか小山。下位クラスに対して戦争を行っても、得られるものは何もないが」

「いえ、西村先生。そんなことはありません。得るものはきちんとあります。かけがえのない経験とかー三ヶ月間の平和、とか」

試召戦争のルールの一つに、負けたクラスは三ヶ月の間宣戦布告の権利を失う というものがある。Cクラスの狙いは俺たちFクラスから戦争への参加権を奪うことだったのか。

「やっぱり昨日止められなかったのが効いたわね……」

悔しげにレンが呟く。

「どういうことなんだレン」

「簡単な話よ。態勢さえ整っていたら、今日にもFクラスはCクラスへ宣戦布告する予定だったのよ」

こんな状況だから先送りにしてたけどね、と続けるレン。

確かにこの状況は最悪だ。試召戦争なんてやったら、まともに戦えるわけがない。

これが果たして偶然なのか?

「異性を使ってくる作戦……。それに、こっちの動きを読んでの宣戦布告……。小山がここまでやるヤツだって話は聞いたことがねえ……。さては、バツクに誰かいやがるな?」

うめくような雄二の言葉が聞こえたのか、小山は雄二の方を見て不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「あら、知らなかった？ 私、こう見えてもねー茶道部に入っているのよ」

「茶道部ー小暮さんの差し金ね！」

小暮さんって確か……肝試しの時に着物姿とレオタード姿を披露してくれた三年生か！ Aクラス所属だったから頭も良いんだろうし、腹黒そうだし、いかにも異性を絡めた作戦とかを考えそうだ。

「それでは、失礼します」

軽やかに一礼して、Fクラスから出て行く小山。

そして、その間に、

「坂本君。この前の話、嘘なんかついてないからね。それと神谷君私にあんなことをしたんだから、ちゃんと責任を取りなさいよ？」

と一言残していった。この前の話って、何のことだ？ それに、俺がやったことって一体……。

『おい。今の聞いたか？』

『今のって、小山が坂本に思いを寄せてるってことだよな？ しかも噂では霧島と同棲してる上に神谷にセクハラを犯したらしいぞ』

『ちっこい神谷に至っては、小山とよろしくしたってことだな』

『許さねえ……！ 試召戦争もあることだし、羨ましすぎる吉井だけ処刑したら事を終わらせてやるうかと思っていたが……』

『もはや同情の余地はないな』

クラスの殺気が一際強くなる。明久の処刑はどうでもいいとして、どうやら俺も処刑される運命のようだ。そしてレン。お前は一体何をやったんだ？

「良かったなお前たち。早速試召戦争のようだ。しっかり用意をして臨むように」

小山に続いて、鉄人も教室から出て行く。
そして同時に教室中から発せられる怒号の数々。

『『『これより、異端者の審問を行う！』』』
『『『ヒヤッハアアアーツツツ！』』』

それは、試召戦争ではなくー俺と明久と雄二に向けての、憎しみが込められた雄叫びだった。

CクラスからFクラスへの宣戦布告

そんな大変な出来事があったにも関わらず。

『死ねえええ！ 吉井いいいいっ！』

『くたばれ坂本おおっ！』

『大人しく殺られる神谷あああっ！』

仲間であるはずのクラスメイトたちは全員敵意をむき出しにして襲いかかってきた。

「テメエら全員落ち着きやがれ！ Cクラスが攻めてくるんだぞ！
？」

廊下を走りながら雄二が追っ手に向かって怒鳴る。

『抜かせ！ こんな状態で試召戦争なんかやってられっか！』

『お前らを生かしておいたら殺意が湧いて戦争どころじゃねえんだよ！』

が、それも虚しく、奴らは追撃の手を緩めることは無かった。

「ええいバカどもが！ 一旦隠れるぞ！」

「了解っ！」

階段を駆け下りる明久にしがみつき、追っ手を撒くことにする。

幸いにも雄二やレンといった司令塔が不在の為、そんなに苦労せずに撒くことができた。

「とりあえずここに隠れるか」

「そうだね。時間も潰せそうだし」

プールの男子更衣室で息を潜める。今は使っている人もいないし、ここなら当分見つからないだろう。

でも、

「時間を潰すって言っても、十分程度が限界だけだな」

「十分？ どうして？ こんな時間にプールを使う人なんていないはずだけど」

「そうじゃねえ。試召戦争のルールの一つだ」

「？ 何それ？」

わかってない、と言った風に明久が首を傾げる。

「試召戦争が行われている間は、クラス代表は居場所を公開する義務があるってヤツだ。うまく隠れられたら勝負の方向性が変わっちゃうからな」

そう。雄二の言う通り、代表の居場所がわからなかったら決着がつくまでの時間が変わり、それによって勝負の行方が左右されることだってある。代表の居場所を公開して明確にするのは必須条件だろう。

でも、

「今はそのルールは完全に足枷だよ……」

「まったくだ。最悪のタイミングで試召戦争になっちまったもんだぜ……」

「それも含めて小山の狙い通りってわけだな
やれやれ……。どうしたものか。」

「ところで亮。さつき小山さんが責任を取れって言っていたけど、何をやったのさ?」

「あれか。そうだなあ……」

自分の記憶から、最近の出来事を掘り出す。ふむ。なるほど。

「多分、一昨日にパンツを見たことだろうな」

「あの時の亮は鼻血まで出していたからね」

ちなみにフリルがついていたのは内緒だ。

「それで、雄二の方はどうなんだ?」

この前の話は嘘じゃない、って言ってたっけ?

「こつちも一昨日に話していた。目標はBクラス。って話のことだろ?」

「目標って……ああ、そう言えばそんな話もしてたな」

「小山さんはBクラスを相手にするとか言っていたくせに、嘘までついて……」

「いや。嘘じゃないだろ」

「へ? でも、実際に攻め込んでいるのは僕たちFクラスだよな?」

もし一昨日の取り引きが『真つ先にBクラスへ攻め込む』とかだったら明久の言う通り小山が嘘をついていることになるけど、今回はそういうわけではない。

「あくまでも最終的にはBクラスに勝ちたいって、それだけの話だ。その過程にFクラスがいたとしても、別に嘘ってわけでもないじゃんか」

「けど亮」

「それに、雄二もそういう言い方をしていただろ?」

「ああ。お前の言う通りだ」

レンから聞いたところによると、俺たちも最終目標はAクラスだ

けど、Cクラスも落とす気だったってことだ。

「だからこそ、Aクラスに攻め込むのは解禁から一、二週間後って言うってたのか……」

「ああ。もつとも、その一言で小山一じゃなくて、恐らく小暮セインパイとやらに、ある程度こっちの考えを見抜かれたんだろうけだな」

「あ、そうだ雄二」

「何だ？ 明久」

「レンと一体何があったの？」

明久が雄二にそんなことを聞いていた。確かに、今朝の会話の中にもでていた気がする。

「昨日レンがいきなり俺の手を取って自分の胸に当ててきたんだ」

「雄二……。どうしてそんなことになったのさ……？」

呆れる明久を横目に、少し考えてみる。

レンが無意味にそんなことをするとは思えない。となると、

「Fクラスを、守りたかったんだろうな」

ボソツと雄二が呟いた。恐らくアイツはCクラスがFクラスに何かを仕掛けてくるのがわかっていた。だから少なくとも代表である雄二だけでも騒動に巻き込まないようにして、クラスをなんとかまとめられる程度に抑えたかったのだろう。「でも、失敗しちゃったみたいだね……」

「まあそうなるな」

俺のその言葉に、明久の表情が少し暗くなった。

「別にお前が気にするなよ明久。それに、作戦が失敗するなんてレンにとっては日常茶飯事だぜ？」

「え？」

「失敗して、また失敗して、それでも諦めずに新しい作戦を練って他人をサポートする。それがアイツだからな」

「だからきつと、今回もまた立ち直ってくれると一俺は信じてる。」「なんか亮とレンって、凄く信頼関係が厚いんだね」

「当たり前だろ？ 俺はアイツで、アイツは俺だからな」

たとえ身体がわかれていても、それだけは変わらない。

「それじゃ、行くか明久」

「そうだね」

代表である雄二には頑張ってもらって、俺たちは身を隠すつもりか。

「おい明久。ここから先は、裏切りは無しでいくべきだと思わないか？」

という時に、明久が雄二に呼び止められた。チイツ！ 良さげな話で煙に巻こうと思ったのに！

「はあ？ 何を言っているのさ。キミはどこの誰？ さっさと僕から離れて逃げ回る準備でもー」

カチャッ

「へ？」

明久の手元から妙な金属音がした。手元を見ると、明久の左手首に頑丈そうな手錠の輪っかが嵌められていた。

「さあ明久！ 今や俺たちは一蓮托生！ 運命共同体なら手錠で繋がれていたって何の不都合もないはずだ！ 一緒に頑張ってこの危機を切り抜けようぜっ」

「キサマなんてことを！？ 外せ！ 僕とキサマをつないでいるこの手錠を今すぐ外せええっ！！」

「明久ガンバ」

「亮も一人で逃げようとしないでよ！！」

「逃がさねえぞこの野郎！！」

この二人と一緒にいると厄介なことにはかならないから逃げようとしたけど、あえなく捕まってしまった。

「雄二！ 鍵はどこ！？ 怒らないから試召戦争が始まる前に早く出すんだこのゲス野郎！」

「鍵？ なんだそれ。食えるのか？」

「く……っ！ それならこのワイヤーをなんとかして切るしかない。

頼むよ亮！」

「オツケー！」

「おいおい。ちょっとは頭を使えよお前ら。翔子がそんな簡単に切断できるようなヤワな手錠を用意するわけがないだろう？」

「「これ霧島さん（霧島）が持っていた手錠だったの（か）！？」「

「この前挙動不審だったから持ち物をチェックしたら、隠し持っていてな……没収したんだ」

霧島が持っていた手錠なら、そう簡単に外れることはないだろう。どうにかして霧島から鍵を貰わないと助かりそうにない。

そこへ、

『おい！ 今更衣室の方から声が聞こえたぞ！』

『ヤツらだ！ こんなところに隠れてやがったのか！』

聞き慣れた連中の声が響いてきた。急いで逃げるしかない！

「さあテメエら！ 全力で逃げるぞ！ 協力しないと死ぬからな！」

「この野郎！ 無事にこの危機を切り抜けたら覚えてろ！」

「つーかいいい加減俺を放せ！」

俺の意見は虚しくスルーされる。後で覚えてろよ。

第七十二問その二・そして少女は再び立ち上がった

Fクラス対Cクラスの試召戦争。

明久と雄二と亮の逃亡劇。

この二つが同時進行で行われている中、

「はあ……」

レンは女子トイレの手洗い場にある鏡の前にて、深いため息を一つついていた。

「噂ってどういう風に流れているんだっけ？」

レンは手を額に当てて考え込む。

レンが聞いた限りでは、明久はDクラスの玉野美紀を皮切りに、秀吉、清水美春、美波に瑞希、久保利光やムツツリー二、Bクラス代表の根本にまで好かれていっていることになっている。

そして雄二は同棲していた翔子とCクラス代表の小山を振ってレンにセクハラを働いて決別した挙げ句、明久の告白を受け入れた、ということになっているようだ。

「ホント、なんて誤解が流れちゃってるのかしら」

「……レン？」

「翔子？ 一体どうしたの？」

更に落ち込むレンの前に翔子がやってきた。

「……カメラ持ってない？」

「カメラ？ 何か撮るの？」

「……トランクス姿の雄二を撮りたい」

「ちょっと待って。どういう状況なのよそれは？」

ちなみにこの状況に陥った原因としては、明久と雄二が互いを生贄にするべく相手のズボンのベルトを抜いて下半身がトランクス一丁なのだが、そのことをレンは知る由もなかった。

「ねえ、翔子」

「……何？」

「その……昨日はゴメンね」
「……………??？」

レンのいきなりの謝罪に、翔子は首を傾げている。

「翔子を利用するような真似しちやっただし、それに……結果的に逆効果になっちゃっただし……」

Fクラスを守ろうとしたためとはいえ、大切な友人を巻き込んでしまったことにレンは罪悪感を感じていた。しかも結果は実ることではなく、かえって事態をより悪化させる一因となってしまう。レンはそんな自分が許せなかった。この状況で何も出来ないでいる、そんな自分が。

「やっぱり、怒ってるよね……ゴメンね……」

言葉を言い切る前に、レンは自分の拳を強く握りしめる。

翔子はそんなレンの頭を優しく撫でた。

「……怒っていないし、謝ることもない」

「え…………？」

「……雄二を守ろうとしてくれただけでも、私は嬉しい」

「ん…………まあ雄二というよりはFクラスの皆なんだけど」

「…………それでも、嬉しい」

翔子のその言葉で吹っ切ったのか、レンは水道の水で自分の顔を勢いよく洗った。さっきまでの自分の後ろ向きな考えを洗い流すかのように。

「ありがとね、翔子…………」

「…………こっちこそありがとう。レン」

別に何の結果も残していないのにお礼の言葉を言ってくれる。レンはそれだけで救われた気がした。

「…………それと、これを雄二に」

そう言いながら、翔子はレンに何かを渡す。

「これって…………何かの鍵、よね？」

レンの手には、翔子から渡された鍵が一つ乗っている。

ちなみにこの鍵は雄二と明久とをつないでいる手錠の合鍵でもあ

る。

「……雄二が必要としているから、持って行ってあげて」

「わかったわ」

「……ありがとう」

「うっん。こっちこそありがとう、翔子」

そしてレンは、女子トイレを後にして走り出した。

キーンコーン……

合図代わりのチャイムが鳴り響き、ついに試召戦争が始まる。

「さて。行くぞ明久、亮。やられたくなけりや全力を出すんだな」

「言われるまでもねえよ！」

「なんとかコレを切り抜けて、後で絶対に復讐してやるから覚えてるっ！」

「んじゃ、作戦開始だっ！」

「おうっ！！！」

更衣室を出て空き教室に隠れていた俺と明久と雄二は、その教室から勢いよく飛び出す。そして俺は手錠で繋がれている明久と雄二と逆の方向へと走り出した。

「いたぞ！ 神谷だ！」

「Cクラス西野美香、英語勝負を申し込みます！ 試獣召喚っ！」

「つたく……試獣召喚っ！」

召喚フィールドが展開され、お互いの召喚獣が姿を現す。

「覚悟しなさい！」

「させるか！」

相手の剣を右手のビームソードで受け止める。そして左手に手錠を出して片方の輪を相手の首に嵌めた。

ちなみに相手の首に嵌めた輪の内側にはトゲが付いており、それが首に刺さって相手の召喚獣は行動不能になった。うくん、グロい。そしてCクラスの西野は鉄人により補習室へと連行された。

「ーって、待ちやがれ神谷！」

勝負が終わりフィールドが消えたのを見計らって、他の相手が勝負を申し込んでくる前にダッシュでその場から逃げた。敵前逃亡と思われるかもしれないが、一旦勝負が終了した後の逃亡だから何の問題もない。

『くっ……。神谷のヤツ、どこ行きやがった？』

『まだその辺にいるはずだ。捜すぞ！』

『。。。おうつー！』

少し離れた場所からFクラスのメンバーの声が聞こえてくる。物陰に隠れたは良いものの状況は依然厳しい。身体の大きさの違いもあり、迂闊に逃げ回るとすぐに追いつかれてしまう。動くに動けない状態だ。

ここは……

「どこまで効果があるか期待出来ないが、使うしかないか」

俺は安心院さんに貰ったスキル『ハイフアンドシーク膝子蔵』を使うことにした。頼む！ うまくいってくれ！

「さて……あの二人はどこにいるのかしら……？」

女子トイレから飛び出したはいいものの、現在雄二たちがいる場所の検討がつきにくい。よしんば見つけたとしても周りにはクラスの人たちがいるだろうから、それこそ無謀以外のなんでもない。となると、

「どこかで先回りして待つしかなさそうね」

その場で立ち止まり、雄二と明久が目指しそうな場所を考えてみる。

この状況を一発でひっくり返すには、皆の誤解を解くしかない。雄二のことだからそれくらいのことには気づいて既に行動しているはず。

とは言ってもクラスの皆と敵対さえしなければ、別に真実を信じさせる必要はない。それよりは、よりクラスの皆が信じやすい嘘で上書きしても構わない。

そしてそれを行うのに絶好の場所は――機材が置いてあり、大人数を相手に一方的に話をするができる放送室。

無論明久や雄二がそのまま放送したって意味がない。だから声真似が得意な秀吉を味方につけて放送を行う。

「問題は、放送機材が屋上にもあるってことなのよね……」

屋上の放送機材は前に花火で一度壊したけれど、体育祭で使っていたから直っているはず。

もし間違えた方へ向かってニアミスなんてことになったら正直目も当てられない。

すると、階下からかすかに声が聞こえてきた。

「野郎っ！ 外に逃げるとは汚ねえ真似を！」

「二階からならすぐに追いつく！ 階段まで走れ！」

「ひ、酷いです明久君っ！ やつと追いついたのにつ！」

「今の声……新校舎の二階からね」

なんか『外に逃げた』とか言ってたけど、まさか二階から飛び降りたの？ ホントに無茶するわね。

それにさつき瑞希の声も聞こえてきた。ということは、クラスの皆のほぼ全員が新校舎側にいることになる。

こんなことをしたのは、おそらく秀吉を説得する時間を稼ぐためだから少なくとも二人は秀吉と一緒に行動していかないはず。

「それなら今からFクラスの教室に向かうだろうし、そうなるを送できそうな場所は……」

二人が時間を稼いでいるならば、秀吉の説得には亮が向かっているはず。外に出て一階から校舎に入り、三階まで行って亮たちと合流してから二階の放送室に向かうのはあまりにも無茶過ぎる。そうなるに残る場所は――屋上だけになる。

「それじゃ、行きますか！」

目的地もわかったところで、私はその場から再び走り出した。

「見えたぞい！ 屋上じゃ！」

廊下を走る秀吉と、秀吉の肩の上に乗る俺の目の前に屋上へと続く階段がだんだん近づいてきた。

俺たちの作戦はこうだ。まず手錠で繋がれた明久と雄二がC・F

クラスの気を引き、その間に俺がFクラスの教室に残っている秀吉の説得を行う。そしてその足で屋上へと向かって放送機材の準備を整える。そして雄二の指揮の下、秀吉の声真似による放送で現在の誤解を解く。そしてFクラスの連中を落ち着かせて試召戦争に集中させる。

「なにはともあれ、ありがとな、秀吉」

「いやなに。この話が広まった責任はワシにもあるようじゃからな。当然のことじゃ」

流石は秀吉。優しいなあ。出来ることなら姉も少しは見習って欲しいものだ。

「ところで、明久と雄二はやっぱりまだなの？」

「お前、いつの間に!？」

横を振り向くと、俺たちと同じように走っているレンの姿があった。

「屋上だろうと目星をつけて走ってきたけど、どうやらその通りだったみたいね」

レンがそんな言葉を言うのと同時に屋上の扉を開く。そこには俺たちの思惑通り、既に修理された放送機材が設置してあった。

「よし、それじゃ早速始めるか」

「この緊急放送ってボタンを押せばいいのかしら？」

「それを押してはダメじゃ。そんなことをしたら校内全体にくわえ、外のスピーカーもついてしまうからの。どれ、ワシがやろう」

秀吉が機材の前に立って、操作を始める。緊急放送ボタンって、文字通り火災とかの緊急時の放送用ってことか。迂闊に押せるものじゃないな。

するとそこへ、

「お、お待たせっ!」

「すまんが早速放送を頼めるか？」

追いかけてくるメンツを振り切ってきた明久と雄二が屋上に到着した。

「よし、準備が終わったぞい。して、ワシは何を言えばいいのじや?。」

「噂の元となった連中のフリをして、俺たちに好意を抱いてないと
言ってくれ。むしろ嫌いだと言うくらいに」

「ふむ……。つまり、皆の想い人について、更に嘘をつくというわけ
じゃな?。」

「そういうことだ」

勿論、後から『あの放送は秀吉の演技だった』というフォローも
する、と雄二は続けた。要は、一瞬でも冷静にさせて話を聞くよう
に仕向ければいいとのことだ。

「そういうことなら、了解じゃ」

秀吉は納得顔で頷くと、マイクのスイッチをオンにした。

『Dクラスの玉野美紀です。ちょっと私の話を聞いてくれるかな?』

そして、声音を変えて話し出す。まずは玉野か。

『私は吉井君に興味なんて全然ないのっ! 私が好きなのはアキ
ちゃん! 女の子の格好をしていない吉井君なんて味のしなくなった
ガムより価値がないんだから!』

「ごふあっ」

明久が精神的に大ダメージを受けている。耐える明久!

(次はDクラスの清水)

『美春もあの豚野郎は大嫌いですっ! 家畜ごときに恋心を抱くな
んで冗談じゃありませんっ! あれならドブネズミの方がまだかわ
いげがありますっ! アレに手を触れるくらいならグロテスクな肉
塊に抱きつく方がマシですっ!』

秀吉。最後のヤツはやめてくれ。マジで冷蔵庫が開けられなくな
る上に、しばらく肉が食えなくなる。

(久保ーは、むしろ熱烈に告白させるべきだな)

(どうしてそこは逆方向!?)

『二人とも、そんなことを言っではいけないよ。僕は吉井君のこ
とが大好きだ。彼の頭の悪いところも、不器用なところも、全てを受

け入れよう。好きだ吉井君。大好きだ。キミが受け入れてくれるのなら、僕は政界へと赴き、この国の法律すら変えてみせよう』

(おい明久。飛び降りなんかやめろ)

(事故があつたら屋上の出入りが禁止になるでしょ)

(放して雄二にレン！ こんな放送が許されるくらいなら屋上への立ち入りなんて禁止されるべきなんだ！)

秀吉の放送の傍で、明久を雄二とレンが羽交い締めにしていた。

(いいからおとなしくしてなさい)

(さて次はムツツリーニーは置いといて、姫路と島田か……。アイツらには悪いが、ここは嘘をつかせてもらおう。頼むぞ秀吉)

(了解じゃ)

『べ、別にウチだってアキのことなんかなんとも思っていないんだから！ ウチが好きなのはーチンパンジーとかオランウータンとか、そういう野性味たつぷりのタイプで、アキなんて眼中にないのよっ』

そつえば、そんな噂もあつたっけか？

(さて。最後は姫路じゃがー)

そこで一旦、秀吉が言葉に詰まる。おそらく姫路に関してはどう表現したら良いか迷っているのだろう。

(秀吉。姫路さんについてはこう言っただけ)

(んむ？ なんじゃ明久)

一旦マイクのスイッチを切り、秀吉は明久の話に耳に傾ける。この間にFクラスの連中が雪崩れ込んでこないか心配だったが、放送を聞いて動きを止めているようだった。

(ふむ……。お主がそう言うのであれば構わんが……)

(……………)

明久の説明を聞いた秀吉は一応、といった感じで頷き、隣にいる雄二とレンは黙ってジツと明久を見ていた。

再び秀吉がマイクのスイッチを入れて、姫路の声を出す。

『二年生、Fクラスの姫路瑞希です。私には、好きな人がいます。』

付けられて声を奪われていた。

『畏……………そういうことだったのか……………。そうだよな。そうでもなければ、アイツらがモテるわけなんかないもんな！』

『卑怯なりCクラス！ モテない坂本や吉井や神谷を弄ぶとは！』
『散々追い回され、どつき回されたアイツらの恨みを思い知れ！』

「いやいや。追い回したりどつき回したりしたのは、お前らだろうが……………」

声を聞く限りではFクラスの連中が落ち着きを取り戻し、試召戦争に集中し始めたようだ。

『不味いわね……………。乱戦になると、あの連中は何をしてくるかかわらない……………。Cクラス、一旦撤収して態勢を立て直すわよ！』

作戦がバレて自軍に動揺が動揺が走ったのか、小山の一言でCクラスが自分たちの教室へと戻っていく。

結局、この日はその後お互いにならみ合いを続けつつ補充試験を行って、そのままタイムアップとなった。

第七十三問・時すでに始まりを刻む

問 次の文章を読み、問いに答えなさい。

生真面目な性格をしている彼のことだから思い悩んでいるに違いない。

幸子はそう考えるといってもたつてもいられず、彼の部屋の扉を叩いていた。

「平助さん。入りますよ」

返事も待たずに中に入る。すると、部屋の中では赤身せきしんで思い悩む平助の姿があった。

「（なんとという格好をしているのですか）」

幸子の存在に気が付くことはなく、平助は考え事を続けていた。

（ ）内の時の幸子の様子を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『平助が服も着ないで考え事に没頭している姿を見て驚いている。』

教師のコメント

そうですね。赤身 と書くと あかみ と読むことが多いですが、せきしん と読むこともあり、その場合の意味は 衣服をつけていないさま。裸 というものになります。なので、幸子は『平助の服を着ていない姿』に驚いたということになります。

玉野美紀の答え

『折角スカートを穿いているのにフリルが少ないことに憤っている。』

』

教師のコメント

先生は今予想だにしない解答に驚いています。

吉井明久の答え

『ネクタイが曲がっていたので呆れている。』

教師のコメント

裸にネクタイで気にするのはそこですか。

神谷亮の答え

『女体盛りだというのに赤身ばかり使っていて意気消沈している』

教師のコメント

どうやら せきしん を あかみ と読んでしまったようですね。
あと平助は女性ではなく男性ですよ。

「おかえり。亮」

「た……ただいま……」

木下家に戻ると、玄関で優子が出迎えてくれた。

その顔に、微笑みを浮かべて。

その背後に、鬼のような怒気を漂わせて。

……………えーっつと……………、

「優子？」

「何かしら」

「学校で流れていた俺の噂についてはー」

「聞いてるわよ。小山さんとよろしくやってたんだってね？」

「その噂が誤解だつてことはー」

「聞いてるわよ。アンタ自分で言つてたじゃない」

ならば、どうしてそんなに怒っているのだろう。

「ねえ亮、『火のないところに煙は立たぬ』つてことわざ知ってる

？」

「知ってるけど、それがどうしたんだ？」

確か、『何事もなければ噂なんて立たない』つて意味だったっけ？

「噂が立つぐらいなんだから、小山さんと何もなかったってワケじ

やないでしょ？」

何かあつたつて言われても、不可抗力でパンツを見たぐらいだぞ。

まあ、小山のデマで嫌な尾ひれが付きまくつたみたいだけ。

「大丈夫よ。怒らないから。……………内容次第では」

最後の言葉だけやけに迫力があつたけど、まあ大丈夫かな。不可

抗力だし。

「実はな優子、不可抗力で小山のパンツを見ちゃつたー痛い痛い

痛い！ さりげなくヘッドロックをかけるな！」

「アンタこそさりげなく何てことしてるのよこのバカ！」

「説教するなら関節技をやめてからにしてくれええっー！！」

俺の願いは聞き入れられることはなく、ヘッドロックが解かれる

ことはなかった。

するとその時、一筋の光が差し込んだ。

「パパをいじめちゃダメ！」

俺の声を聞きつけたのか、家の奥からマナカちゃんが駆けつけてきてくれた。

「亮。この子は拾ったって言ってたわよね？」

「ああ。拾ったぞ」

「ならどうしてアンタがパパって呼ばれてるのかしら？」

「それは俺が聞きたいぐらいなんだみぎやあああつ！！」

「パパ。今日こそはいつもみたいにおやすみのチュウをしてね？」

だからおやすみのチュウをしてくれるまでわたしはパパといっしょにいる！」

「マナカちゃん！？　俺はお休みのチュウなんてしたことないんだけどー！？」

そして今そんなことを言わないで欲しい。

「……お休みのチュウ？」

優子の声が重くドスが効いたものになる。

ほら。また変な誤解が生まれちゃったよ。

「どういうことか説明して貰おうかしら？」

「何でそこで強くするんだよ！？　痛くて説明できないからその手を緩めてくれええつ！！」

その後ヘッドロックを数分間かけられ、無論お説教もそれと同じ時間続くことになった。

「し、死ぬかと思った……」

優子による数分間のヘッドロックから解放され、俺は割れそうな頭を抱えて突っ伏していた。

「そついえば、何か忘れてしているような？」

ああ、そうだ。思い出した。

「困った時の安心院さ〜ん」

「やれやれ。僕は青い猫型ロボットじゃないんだけどね」

やっぱり気づいたら安心院さんが近くにいた。いつも思うがけどスキルとは言え、どういう仕組みで登場しているんだろう。

「それにしても、随分ポロポロだね。何かあったのかい？」

「色々あった結果ヘッドロックを食らっちゃってな」

「それは大変だったね……………」

「ところで安心院さんに聞きたいことがあるんだけど」

「わかってるよ。『ハイドアンドシーク膝子蔵』のことだろう？ そろそろ聞かれる頃

合いだと思っていたよ」

話の内容がわかっているのなら、説明を省けるからありがたい。

「それで、コレって結局どんな能力なんだ？」

使えたには使えたものの、半分以上が勘のようなものだった。こ

こらできちんとした説明を受けた方が良さだろう。

「その前に神谷君。能力を使ってみて、君としてはどんな感じだった？」

どんな感じだったかって言われてもなあ。

「なんとなくか、皆が俺に気づいていないって感じだったな」

そう、『ハイドアンドシーク膝子蔵』を使ってからというもの、能力を解除するまで

の間は誰にも気づかれることがなかった。たとえ目の前にいようと

足音を立てようと、袖を引っ張ろうと、誰も気にも止めなかった。

それどころか、違和感を抱いた様子すら見られなかった。

「まあそんなところだろうね。なにせ『ハイドアンドシーク膝子蔵』は自分の気配を隠

す能力だからね」

「気配を隠す？ 消すんじゃないか？」

「うん。気配はどうやっても少しは残るからね。完全には消せない

よ

そう言えば以前、優希は『そこにいるのに気配を消せるなんておかしい』とか言ってたような気がする。「このスキルは、相手の認識そのものをいじるスキルなんだよ」

「認識そのもの？」

「つまり能力使用者——この場合は神谷君の姿は他人から見えなくなり、君から感じ取る感覚を相手に『自分によるもの』だと錯覚させるんだよ」

「えーっと……どういうこと？」

「君が音を立てれば相手はその音を自分が出していると思いついて、君が相手に触れれば相手は自分が起こした衣擦れか何かだと思いついて、君に矛先が向くことはないってワケさ」

ということは何が相手に何をしても気づかないってことか。

それに今話を聞く限りだと、例えば俺が明久と雄二のズボンを引き張ったとしても、二人共それぞれが『自分が起こした衣擦れか何か』だと思いついてことになる。

なるほど。だからあんなに自然な振る舞いを見せていたわけか。

「でも、自分のことだろ？ やっぱ違和感を持つと思うんだけど」「人間は自分に関しては無頓着なところが多いからね。意外と気づかないものなんだよ」

良い意味でも悪い意味でもね、と安心院さんは続ける。

「だから、相手の感覚に自分の感覚を 隠す、それがこのスキルハイトアンドシーク『膝子蔵』なんだよ」

消せないなら隠すとは、うまいことを言ったものだ。

「でもこれだけの能力なら、何かしらのリスクがあるんじゃないのか？」

これでノーリスクなんて言われたら、正直たまったものじゃない。薬に副作用があるように、物事には全て反動が存在する。その法則を無視するようなスキルを貰って、果たしてこの世界に影響はないのかと心配になってしまう。

「リスクならあるよ。それは、『その人に見られた状態だと能力を発動しても効果がない』というものだよ」

「それなら、誰にも見られていない状態で能力を発動しろと？」

「というよりは能力を発動させたい相手に見られていない状態で能力を発動しろってところだね」

つまり明久に対して気づかれないようにするとしたら、明久に見られていない状態で能力を発動しなければいけないってことか。

「それと、自分の気配を隠せる範囲を広げれば広げるほど、その精度は低くなるから注意してね」

「まるでリーダーだな」

「リーダーとは逆の存在ってところかな？ あっちが『探す』のに対してこっちは『隠す』能力だからね」

まさに隠れんぼ（ハイドアンドシーク）ってことか。座布団一枚っ！

「ところで神谷君」

「ん？」

「ピンクの髪をしたあの小さな女の子と一緒にいて、楽しいかい？」

「それって、マナカちゃんのことか？」

「そうだね」

楽しいかどうか。

「俺はあの子のパパじゃないけど、一緒にいるとやっぱり楽しいかな」

「パパ？」

「マナカちゃんがそう言ってたんだ。俺がマナカちゃんのパパだって。いつも『パパといっしょにいる！』って抱きついてくるんだけどな」

それによって誤解が生まれたりしたけどな。

「パパ、ね……。君は、マナカちゃんと一緒にいたいかい？」

「そうだな。親を見つかるまでの間だけでも、アイツのそばにいてあげたい」

「そっか」

安心院さんは何かを考える仕草をした後、不意に立ち上がった。

「それじゃ、そろそろ僕はお暇させて貰うよ」

「ああ。ありがとな」

俺の言葉に彼女は背を向けたまま手を振り上げ、そのまま部屋の襖を開けてどこかへ行ってしまった。

『神谷君。残念だけどこの世界の矯正者である僕としては、君やマナカちゃんの思いを遂げさせるわけにはいかない。最悪の場合は手段を選べないと思うから、その時は僕を恨んでくれて一向に構わないよ』

第七十四問その一・おばあちゃんの昔話は最強

問 次の記号で表すインダクタンスの単位を答えなさい。

『H』

姫路瑞希の答え

『ヘンリー』

教師のコメント

正解です。ヘンリーは電気回路においてコイルの値を求める場合の単位として利用されます。他にも抵抗では（オーム）、コンデンサーではFファラデーが単位として用いられます。

土屋康太の答え

『変態』

神谷亮の答え

『オトナの遊び』

教師のコメント

君たち二人の思考回路は一体どうなっているんですか？

吉井明久の答え

『ヒコドドラ』

教師のコメント

それは神話上のキャラクターです。

「雄二にレンに亮。おはようじゃ」

レンと雄二と三人で旧校舎の廊下を歩いていると、聞き慣れた声
が後ろから聞こえてきた。

「うっす」

「おう、秀吉か。おはよう」

「おはよう、秀吉」

振り返ると、クラスメイトの一人である秀吉の姿があった。女性
みたいな見た目や仕草が目立つが、これでも歴とした男なんだから
驚きた。というか、最近たまに秀吉が本当に男なのかどうか疑わし
く思うことがあったりする。

「……今一瞬、最後の砦が一気に壊されたような気がしたのじゃが
……」

「……それは気のせい」「」

「むう……。そうじゃろうか」

なんだ。皆思ってたことなのか。

「それにしても雄二に亮よ。昨日は災難じゃったな」

そう言っつて秀吉が苦笑を浮かべる。昨日の災難つて言つと、妙な
告白もどきが原因でFクラスの連中に追い回されたあれか。ちなみ
にレンは追い回されることがなかったらしい。

「まあ、災難と言えば災難だけど、追い回されるのは慣れてるから」

「それもどうかと思うのじゃが……」
慣れたものは仕方ない。

「むしろ俺たちが追い回されたことなんかより、今日の試召戦争が心配だ。なにせ同士討ちだったから随分と戦力が削られちゃった」
「おかげでただでさえ少ない戦力が更に減っちゃったから、言うまでもなくかなり不利な状況よ」

しかも相手は上位のCクラス。雄二やレンの言う通り、今日の試召戦争はかなり苦しくなりそうだ。

「今日の俺たちの勝負は我慢の状況が続くことになる」

「我慢の状況っていうと？」

「前半はずっと守りを固める予定だ。補充と勝負を繰り返すキツい展開になるな」

「補充と勝負の繰り返し……。それは気合を入れねばならんな」
補充とは言っても、とどのつまりはテストだ。休憩というわけじゃないから体力も精神力もかなり消耗する。そんな補充と勝負を繰り返すわけだから、今回の試召戦争はいつも以上にきついものとなるだろう。

「ところでレン、お前の召喚獣って結局どんな装備になったんだ？」

「さあ？ わからないわ」

雄二の問いに対してレンはそんな返答をした。

「レンよ。お主確か、召喚獣の試運転をしたのではないか？」

「あの時は召喚獣の装備が制服だったから、武器も何もわからないのよ」

やっぱり装備の御披露目はぶっつけ本番ってわけか。

「んむ？ あれはムツツリー二じゃな」

「お。そうだな」

雑談をしながら階段を上り、Fクラスの教室が見えたところでムツツリー二を見つけた。

「おす、ムツツリーニ」

「……………」

雄二が挨拶して肩を叩いたにも関わらず、ムツツリーニに反応はない。一点をずっと見つめている。

俺もムツツリーニの所に駆け寄り、ヤツと同じ場所に視線を向けるトー

『あ、あの、美波ちゃんっ。そろそろ手を』

『（むにむにむに）ホント、おつきいわよね。何を食べたところなるのかしら』

『普通のご飯ですっ』

姫路の胸を揉みしだく島田の姿があった。

「……………」（ブシャアアアッ）「……………」

無論俺もムツツリーニも盛大に鼻血を噴いて倒れる。その直後雄二に踏まれそうになったが、俺は体を転がしてなんとか避け、ムツツリーニだけが踏まれることになった。

そんなやりとりから二十分ほどが経過して、朝のHRが始まる十分前。

「そっいや、明久がまだ来てないな」

雄二がそんなことをつぶやいた。

「明久？ 確かにまだ来てないわね」

風邪なら風邪で連絡がありそうなんだけど。一体どうしたのかし

ら？

(ねえ、瑞希。明久はどうしたの？ もしかして寝坊？)

(いえ。寝坊ではないんですけど)

誰にも聞こえないような声で瑞希に聞いてみる。瑞希と明久が一緒に暮らしていることはバレてないから、皆に聞かれるわけにはいかない。

(えっと……明久君は風邪を引いちゃったみたいで……。今日はお休みなんです)

(え？ 明久が風邪？ ホントに？)

(はい)

風邪で試召戦争を欠席？ あの明久が？

風邪だったら風邪だったで雄二に連絡の一つでもあるはず。それが無いってことは、意識不明の重体ってことかしら。でも一緒に暮らしている瑞希が普通に登校してきたってことは、そんな大事には至ってないはず。

となると、考えられる原因は一つだけ。瑞希の手料理しかない。

風邪なんかよりもよっぽど説得力がある。

「まあ遅刻にしろ欠席にしろ、明久の強みは『いなくなっても戦力が減らない』という点だ。問題ない」

「それは『いても戦力にならない』という言葉と同義じゃと思うが……」

雄二はああ言っているけど、明久は召喚獣の操作や回避においてトップクラスの技術を持っている。だからそこに期待したかったんだけど。まあ、こんなことを言っても仕方ないけれど。

「よしお前ら、作戦会議ブリーフィングを始めろぞ！」

雄二の声が聞こえたから周りを見ると、明久以外のメンバーはだいたい揃っていた。

試召戦争の再開時刻は午前九時。もうあんまり時間はない。

「今日の作戦の肝は補充試験だ。可及的速やかに昨日の騒ぎで失った点数を補充するぞ」

ただでさえ私たちFクラスはCクラスに比べて点数が圧倒的に低いのに、昨日の同士討ちで点数も人数も減っている。現在の戦力差は何倍か想像すらできない。

「でも、補充をすればするほど、ウチらとCクラスの差は広がるんじゃないの？」

「それはない。なにせ、向こうは既に補充試験を終わらせているだろうからな」

美波の疑問に対して、雄二はそう答えた。確かに同士討ちをやっていたこっちと、一丸となって攻めてきた向こうでは、こちらの消耗の方が激しい。だからほぼ同じ補充試験の時間では確実に向こうの点数が早く頭打ちになる。だから差が縮むことはあっても広がることはないってことね。

「して、具体的にはどういった作戦になるのかの？」

問いかけた秀吉だけでなく、周りの皆も具体的な作戦を早く知りたがっていた。

「おそらく敵は開幕と同時にこっちへと押し寄せてくる。そこに消耗しているこっちが対抗したところで勝ち目はない。そこで、こちららはひとまずFクラスに籠城する。戦闘区域を狭い教室出入り口の二箇所絞ることで消耗を抑えつつ、教室内で補充を済ませるってワケだ」

点数補充を終えたCクラスはこっちが何かを仕掛けることが出来ないように教室に押し込めることは容易に想像がつく。

「こっちは点数もそうだが、人数も減っている。向こうと同じように『消耗したから下がって補充』なんてやっていたら勝ち目はない。だから、こっちは持っている点数をギリギリまで使い切る」

「使い切るって、戦闘不能になる寸前まで戦うってことか？」

「それもある。が、それだけじゃ足りない。だから戦闘不能寸前になってもすぐに補充にうつったりはせず、勝負の科目を切り替えるようにする。そうしたら同じ人間がまた戦うことができるからな」

「科目の切り替えて、どうやって？ 戦闘中に科目は変えられない

いわよ」

美波の言う通り、科目を変えるには一度その場の戦闘に決着がつく必要がある。

「そこで、姫路とレンの攻撃力の出番だ。二人とも全科目において満遍なく高い点数を保持しているから、その高い点数でフィールド内の敵を一掃して即座に教師に科目の変更を要請するつもりだ。二人とも、やれるか？」

「オッケー。わかったわ」

「はいっ！ 任せて下さい！」

今回は人数がいつもより少ないから、私も戦闘に参加することになっっている。

それに一体何があつたかはわからないけど、今日の瑞希は気負つた様子もなくやる気に満ちている。気負いがなく緊張感のある状態勝負事においてのベストコンディションと言える。私も負けていけないわ。

「切り替えの時に姫路が出るということは、防衛の主体は別の者がやるというわけじゃな？」

「ああ、そうなる。開幕直後はムツツリー二と島田を中心に組み立てる予定だ。前方出入り口を保健体育でムツツリー二に、後方出入り口を数学で島田に防衛してもらう。亮はその後化学で防衛の主体を担ってもらう」

「相手次第だけど、ウチは保つて二、三十分くらいね」

「……………俺も長期戦には自信がない」

「一体多の持久戦だと腕輪も使いにくいから、そんなに長くは保たないぞ」

それぞれ保健体育と化学では一見無敵に見えるムツツリー二や亮でも、持久戦となれば話は全然違つ。腕輪を使えばそれだけ点数を消耗するし、多人数を相手にすれば被弾もする。

「私、明久君の分まで頑張ります」

瑞希の目には強い意志の光が見える。この分なら、今日一日戦闘

に参加しても大丈夫そうね。

「よし。それじゃ、それぞれ持ち場についてくれ」

雄二のその言葉で作戦説明が終わった。さて、頑張りますか！

第七十四問その二・光の速さで明日へダッシュさ！

「一気に押し込め！ 所詮相手はFクラスだ！」

「補充を終えた連中が来たぞ！ 前線で消耗したヤツは入れ替われ！」

「了解！ あとはよろしく！」

現在時刻は十時過ぎ。場所は旧校舎Fクラス前。そこでは凄い勢いで雪崩れ込んでいくCクラス陣の攻勢と、それを教室の出入り口で必死に食い止めるFクラスの戦いが繰り広げられていた。

予想通り開幕直後にCクラスがFクラスの教室に向かって一目散に突撃を開始して、このような状況に至っている。

今は前方出入り口にて亮が数学で頑張っているけど、それもそろそろ限界が近い。

ちなみに瑞希は後方出入り口の敵の一掃を行っている。

「ここからは数学から日本史に科目を切り替える。レン、準備はいいか？」

「オツケーよ」

雄二の声に合わせ、戦闘準備をとる。そして、日本史の教師がやってきたところで召喚を開始した。

「先生、この勝負が終わったら日本史での勝負の許可をお願いします！ 試獣召喚っ！」

喚び声に合わせて魔法陣の中から私の召喚獣が姿を現す。

亮の召喚獣とは対照的に全身真っ白なロングコートに日本刀並のリーチを持つ両端が鋭い真っ白なビームソード。そして――

――背中からは、大きな翼が生えていた。悪魔のそれとよく似た形をしている、真っ黒な翼が。

……………え〜っと。何でこんな装備になったかはわからないけど、今はそんなことを考えている場合じゃない。腕輪の能力は亮と同じ『増殖』だって学園長が言ってたから、もう不確定要素は残っていない。さあ、いくわよ！

今フィールド内には喚び出したばかりの私の召喚獣と、今まで防衛に回っていてギリギリまで消耗した亮の召喚獣、そして敵の召喚獣が三体の、計五体がいる。

そして背中の中翼で床スレスレを飛んで一気に相手の召喚獣へと肉薄し、動揺した相手二体の召喚獣の首を切り裂いた。

そしてその間に亮がもう一体の召喚獣を倒し、エリアの中に敵がいなくなった。これで亮も補充試験に戻ることができる。

「では、ここからは日本史勝負となります。どうぞ」

「……試験召喚っ！」「」

使用科目が日本史に変わったので、未だ戦死していない敵味方双方のメンバーが召喚獣を喚び直す。

「サンキュー。レン」

「ふう、うまくいったみたいね」

「ところでお前の召喚獣に翼が生えていたみたいだけど、空を飛べるのか？」

「ええ。高さは床上数センチぐらいだけど」

亮とそんなことを話しながら教室に向かう。

敵を倒した後で軽い操作を行ってみただけど、どんなに操作しても空中高くまで飛び上がることはできなかった。ま、相手からしてもそんなことをされたら冗談じゃないだろうけど。学園長がプログラム操作で飛べる高さを調整でもしたのかしら。

さて、それじゃあ点数が減っている亮を連れて戻りましょうかね。
「亮。戻って点数補充をした方がー亮？」

何故か教室とは反対側の方向に亮の姿があった。

亮と私の間にはCクラスの人たちが立ちふさがっている。そして

その近くには先程の勝負が終わってフリーになっている数学の先生の姿があった。しかも亮は数学の点数をギリギリまで使い切っている。まさか、ここで亮を戦死させる気!?

亮の所へ行こうにも、Cクラスに邪魔されて行けそうもない。だったら――

「先生。Cクラス河野智香がFクラス神谷亮君に数学勝負を申し込めます! 試獣召喚っ」

「Fクラス神谷レンが神谷亮に代わって数学勝負を受けます! 試獣召喚っ!」

私はなんとかフィールドの範囲内に駆け込み、再び自分の召喚獣を喚び出した。これで亮が勝負を受ける必要はない。

「亮! 一旦離れたら後で上手く合流して!」
「わかった!」

今の亮は召喚フィールドの中心から見て教室とは反対の場所にいる。フィールドを突っ切って教室に戻ろうとしても、その間にもう一度勝負を挑まれるだろう。だったらそれよりは距離が短い反対側に一旦逃げてその後で合流した方が生き残る可能性が高い。

そして亮は再び召喚獣勝負を宣言される前にフィールドの外に脱出していた。まったくヒヤヒヤさせるんだから、あのバカは。戦死しなきゃいいんだけど……。

「ふう。危ない危ない」

俺はFクラスの教室とは反対の新校舎側にある保健室前へやってきた。追っ手もないし、とりあえず一安心つてとこか。

「Fクラスに合流できればいいんだけどな……」

Cクラスの連中に見つからないように物陰に隠れながら、俺がこれから取るべき行動について考えてみる。

正面からFクラスに合流しようとなると、Cクラスの包囲網を突破しなければならぬ。点数を消費した今だとはっきり言って潰される気しかしない。

それなら窓から教室に入るのはー厳しいな。すぐにバレそうだが、さて、どうしたものか」

こういうことはレンの方が得意なんだけど……そんなことを言っても仕方ないか。

こうなったら、最後の手段を使うしかないか。

「そうだ。屋上へ行こう」

「どうして電車で旅行するようなノリで屋上にいくのかな？」

「!?!?!?!?!」

突然声をかけられたから勢いよくそっちに振り向いた。誰だ!?!

「????」

小首を傾げて疑問に溢れた表情を浮かべているのは、

「なんだ。優希か」

「そうだけど」

俺の幼なじみの優希だった。

「てつきりCクラスの人かと思っただぜ」

「Cクラスって言うと今、Fクラスが試召戦争をしている相手だよね?」

「ああ」

「ということは、もしかして坂本君から密命なんかを受けているの?」

「いや、そういうわけじゃないんだけど」

ただ戦死寸前なだけで。

「ふ〜ん……？ それじゃあ、点数でも減って戦死しそうとか？」
「返す言葉もございません」

コイツの前では隠し事もへったくれもないな。

「そうだ。試召戦争と言えば、これは吉井君が言ってたんだけど」
「明久が？」

優希の言葉に思わず聞き返してしまう。明久のヤツ、学校に来てたのか？ レンが言うには風邪で休みらしいけど。

「で、明久は何て？」
「それがー」

「Fクラスへの策としてBクラスが科目を制限してAクラスに戦争を仕掛ける、か」

Cクラスの連中に見つからないように、俺と優希は保健室の中にいた。

「うん」

「それでこっちが変更する科目に制限もかけられるし、手を組むBクラスもAクラスと通常より楽に戦争を行える。あっちにとっては一石二鳥ってわけか」

「そういうことだね」

Aクラスと俺たちFクラスは大損だけど。

「それで、亮はこれからどうするの？」

「そうだなあ……。とりあえず減った点数を補充するのが先決だな」

Fクラスの方は雄二とレンがなんとかするだろう。となると俺は別行動を取った方が良さそうだ。

できれば化学と数学の点数を補充したいんだが……。ん？ こっちに向かってくる人って……。

「布施先生。化学の補充試験をお願いします」

「補充試験ですね？ わかりました。それでは問題用紙を持って来るので少し待っていてください」

そう言っって布施先生は職員室へと向かっていった。良かった。偶然布施先生が通りかかって。これで俺の一番の得意科目である化学の点数を補充することができる。

「私は吉井君の手伝いで今からCクラスの様子を調べるけど、亮は補充が終わったらどうする？ Aクラスに来る？」

「いや、俺はいい。ちよつと別行動を取ることにする」

Aクラスの皆が協力してくれるなら、BクラスとCクラスの妨害はうまくいくはずだ。それにその作戦、なんだか嫌な予感がする。

「そっか。それじゃ、気をつけてね」

「おう」

優希はそのまま保健室を出て行った。さて、俺はひとまず化学の補充試験を頑張るといたしますか。

第七十五問その一・徹夜明けって妙なテンションになるよね

問 次の問いに答えなさい

硫酸銅五水和物と塩化バリウム水溶液にくわえて加熱すると、何が生成されるのか答えなさい。但し、硫酸銅五水和物と塩化バリウム水溶液は全て反応したものとする。

霧島翔子の答え

『硫酸バリウム・塩化銅・水』

神谷亮の答え

『硫酸バリウム・塩化銅・水』

教師のコメント

正解です。こちらの反応は化学式で表わすと



となります。ですが、その前に硫酸銅五水和物を水溶液に加えることにより、



という反応が起こっています。その為、生成されるものの中には水も含まれているということになります。

吉井明久の答え

『食塩』

教師のコメント

なぜそんなものが生成されると考えたのでしょうか。先生はたまに吉井君の思考回路についていけなくなることがあります。

姫路瑞希の答え

『デミグラスソース』

桂優希の答え

『だし汁』

教師のコメント

.....え？

『先輩。戦死にこそは出来なかったものの、神谷亮君と神谷レンさんを引き離すことに成功しました』

『それは重畳。二人になった原因はわかりませんが、引き離すことが出来れば絶妙なコンビネーションを発揮できなくなりますからね』
『それで、神谷さんの方はどうすればよろしいでしょうか。彼女も姫路さんと同じく二年の中でもトップクラスの成績を誇りますから、何か対策を打たなければ思うように勝負が出来ません』

『彼女も疲弊させる、というわけにはいかないのでしょうか？』

『神谷さんはあまり体力がないとはいえ、姫路さんと比べるとタフなんです。それに姫路さんのやる気にあてられたのか、彼女も手をつけられない勢いになっています』

『では姫路さんの対策は先程お伝えした策を実行すればよいとして、神谷さんの方はまた後ほどお伝えいたします。まずはFクラスに妙な動きをされないようにするのが先決です』

『はい。わかっています』

「調べた限りだと、Cクラスがかなり優勢ね。Fクラスは教室に押し込まれている感じだったわ」

Aクラスの教室に戻ってきた木下さんがCクラスとFクラスの戦況について教えてくれる。どうやら僕が登校直後に見た戦況から何か動きがあったわけではなさそうだ。

僕が今いるのはAクラスの教室。遅刻してFクラスに合流できない上に戦死寸前になっていたところをAクラスの皆に匿ってもらっている状況だ。点数はかなり減ったけど、おかげでBクラスとCクラスが手を組もうとしているという、今回の試召戦争に関する重要な情報を得ることができた。

ちなみに木下さんと桂さんと工藤さんはFクラスとCクラスの試召戦争の状況確認を、久保君は小山さんの動きについての情報収集を、霧島さんは僕がCクラスの人に見つからないよう見張りをしてくれた。本当、今度何かお礼をしないとなあ。

「ボクが調べたのもそんな感じだったよ。Fクラスは試験科目の変更を繰り返してなんとか昨日の戦力の損耗を補充しているみたいだったけど、Cクラスの方も対策を取り始めているみたいだし、苦しそうだね」

と、報告してくれたのは工藤さん。

防衛と補充の繰り返し。今のところは雄二らしくもない消極的な行動だ。

「あの坂本君が何もせずにこのまま終わるとは考えがたいな……」

「多分、何か考えがあるんだろうね」

久保君と桂さんが言う。それについては僕も同感だ。アイツが何の動きも見せずに、ただ押し込まれて負けるようなタマじゃないことはよく知っている。

「次に私が調べたCクラスーというよりは代表の小山さんの行動なんだけど」

今度は桂さんが調べてきた、Cクラスの情報を見せてくれる。

「吉井君を捜してしばらく下の階をうろろしていたみたいだけど、Fクラスの動きを気にしてCクラスの本陣に戻ったみたいだよ」

情報を盗み聞きした僕を捕らえたいところだけど、それ以上にFクラスのメンバーによる奇襲を警戒したんだろう。

「でも、どうしてその足でBクラスの根本君のところに行かなかったのかな」

「何言ってるの吉井君。今Bクラスは授業中よ？」

「あ、そっか」

そういえばAクラスだけは授業の進度や試召戦争による教員不足で自習時間だったんだ。

「それで、根本君と小山さんについてなんだが……清水さーいや。協力者の情報によると、Cクラス側では代表である小山さんが何か書面のような物をしたためていた姿が確認されたい。タイミン
グから考えると、十中八九例の件に関わる物だろうね」

「書面ってことは、
『 に来て欲しい』とかのメッセージ程度の

内容じゃないってことになるのか？」

「書いている姿が目撃されるということは、ある程度の時間をかけていることになる。もしかしたら事情を全て手紙で説明しているということも考えられる」

「……そう決めつけるのはまだ早いと思う」

「そうね。向こうは吉井君が逃げ延びたことも把握しているんですよ？」

「そうだね。小山さんは何らかの妨害があることも想定しているかもしれない」

「だったら、手紙に全部書いているって可能性以外も充分考えられるね」

「だね。例えば……」

「……複数の手紙を用意している、とか」

「それぞれを別ルートで動かして、現実性を上げているってことだね」

「古い時代の密書なんかでよく使われた手段だわ」

「……まだこの状況ではどの可能性も潰しきれない」

「なんだか僕だけ置いてきぼりにされている気がする。」

「そんな僕の様子に気が付いて、木下さんがこちらを向いた。」

「？ どうしたの吉井君？」

「いや……。皆頭良いんだな、って思っ」

「すると木下さんは、右手を額に当てて溜め息混じりに聞いてきた。」

「あのね……。アンタはアタシたちのことを何だと思っ」

「たのよ」

「秀吉のそっくりさん」

「グラウンドでサッカーのPKをしましょう吉井君。アタシがキッ」

「カーをやるから貴方はボールをやって頂戴」

「ダメだよ木下さん！ それだとグラウンド用スパイクを履くから危ないじゃないか！」

「待つんだ吉井君。それだと芝用スパイクならボールになって蹴られても構わないと言っているように聞こえる」

「言い換えるわ。皆で吉井君をグラウンド用スパイクで蹴りまじょう」

「く……っ！ 皆で一斉になんて、そんなの反則じゃないか……！」
「そして君が気にするのはサッカーのルールの部分なのかい？」

「……私、2番？」

「じゃあボクは3番かな」

「4番は私だね？ 任せて。黄金の左足と呼ばれたシュートを見せてあげるよ」

「霧島に工藤さんに桂さんまで……。いや、本人が納得しているのなら何も言つまい。それより、具体的な行動指針について話し合おう」

「……うん。冗談はお終い」

「そうだね。どうしよっか」

「手紙を用意しているってことは、あんまり時間はなさそうだね」

「皆が頭を切り替えて今後の話を始める。木下さんが一人「えっ？」って顔をしていた。亮のヤツ、よく今まで生きてたよね……。」

「それじゃあ、手紙をすり替える、とかは？」

「それが良いと思うよ」

「……順当な考えだと思う」

「ただ吉井君。注意してもらいたいことがあるんだ」

「ん？ なに桂さん？」

「私たちは協力はできるけど、実際に相手に接触するのは難しいんだよ。なんととっても、今のCクラスとFクラスは試召戦争の真っ最中だからね」

「あ、そっか」

試召戦争のルールにおいて、今みたいに他のクラスと連携を取って戦争を有利に進めていくのは構わないけど、Cクラスの生徒をAクラスが戦闘不能にする、といった他クラスへの直接的な干渉は禁止されている。つまり桂さんたちはCクラスの生徒に対して手を出すことが難しい状況にあるということになる。向こうから絡まれた

りしたのならともかく、こっちからつかかかっていったら何らかの罰を受けるのは確実だろう。

「何心配そうな顔してるのよ吉井君。要するに、直接接触するようなことになるなければ良いわけでしょ？」

「……元々気付かれないように手紙をすり替える作戦なんだから、問題ない」

「だね。まあ、いざという状況になっちゃった時、ボクたちは何もできないってコトだけ覚えておいて欲しいってところかな？」

「うん。了解」

「それで、具体的な行動だけどーどうしようか？」

「そうだね……」

久保君が顎に手を当てて考える。

「今回僕たちが取れる手段は大きく分けて二つ。一つは手紙を届けさせないという方法。もう一つは手紙をすり替えるというものだ」「というと？」

首を傾げる僕に、桂さんが説明してくれた。

「前者は手紙を持った相手を行動不能にして補習室にする。これは、吉井君にしかできないことだけど、ルールに反することにはないやり方だね」

「要するに、吉井君が手紙を持っているCクラスの人を召喚獣勝負で勝つっていう方法ね」

「……伝令係になってるのなら、きつと点数が消費しているはず」「消耗している人が相手なら今の僕でも倒せるかもしれない。」

「そして、もう一つが手紙のすり替え。こっちは私たちでも協力できよ」

「ただしこの方法は、すり替えることのできる手紙だった場合に限るね」

後者の方法は、前者と違って見つからないように相手に接触して手紙を入手し、用意した偽物の手紙と入れ替えなければならぬ。皆の協力を仰げる代わりに、色々と条件が出てくる。

「取れる方法はこの二つだろうね。試召戦争中とはいえ、二丁三人ぐらいで来る可能性が高い。こうなると全員を同時に相手にするのは難しいだろう」

「確かに……」

勝負をするとなれば、相手が一人であることが前提だ。いくら相手が点数を消費しているといっても、それはこつちも同じことだ。複数人を相手にしたら僕が戦死してしまうおそれがある。

「つまり、基本は吉井君が勝負を挑む形で、アタシたちはできるようなら気付かれないように手紙をすり替え、それが無理なら時間を稼ぐ、つてところかしらね」

「うん……。それはいいケド、CクラスとBクラスってスグ近くだよね？ そんな短い距離で声をかけたりするのは難しくないかな？」

工藤さんが顎に手を当てている。

「向こうが一人ででてくるのならまだしも、恐らく吉井君を警戒して複数人で来るだろうからね」

「その全員を連れ出そうとなると骨が折れそうね」

久保君と木下さんが思案顔になった。霧島さんと桂さんも同じように考え込んでいる。う……。こういうのはあまり自信がないんだけど……この際だし仕方がないか。

「ちよつといいかな？」

「はい、吉井君」

「えつとー」

「さて。やっと終わった」

化学の補充試験を終えた俺は保健室に備え付けてあった椅子に座り、大きく背伸びをした。

「しかし、保健室に机と椅子があつて助かつたな」

ルール上では補充試験を受ける際、机と椅子がある部屋ならば自分の教室でなくとも構わないことになっている。だから机と椅子がある保健室でも今みたいに補充試験を受けることができる。

「明久はAクラスの皆と一緒にBクラスとCクラスが手を結ぶのを防いでいるんだよな」

優希から聞いた話を纏めると、大体そんな感じになる。こういう場合におれが取るべき行動は大きくわけて二つ。一つはAクラスにいる明久と合流して作業を手伝う。もう一つはFクラスに合流して戦線に参加すること。普通はこのどちらかの方法を取るべきなんだけど……。

「Fクラスに合流するのは難しいだろうな」

今の状況でFクラスに合流しようとなると、どうやってもCクラス
の包囲網を突破しなければならない。化学以外の教科はギリギリ
まで減っているのに補充は終わっていない。化学限定ならば戦える
けど、それ以外の教科だったら間違いなく戦死する。
となると、

「Aクラスに合流するか。なんかそっちの方が良さげだろうし」
保健室のドアを開けて廊下に出る。それじゃあ、Aクラスに行く
とするとするか。

「今の君はそんなことをするべきじゃないと思うんだけど？」
また後ろから突然声をかけられた。しかも今回は優希じゃない。
恐る恐る後ろを向くとそこには――

第七十五問その二・きゅうきよくキマイラはトラウマもの

「君はそんなことをやっている場合じゃないと思うんだけどね」

突然背中から声をかけられ、俺は後ろを振り向く。そこには、

「……安心院さん？」

「やあ神谷君」

やっぱりというかなんというか、安心院さんがいた。違和感があり過ぎなのによく入ってこれたな。『アリバイブロッケ腑罪証明』でも使って校門を通らず直接来たのだろうか。

「神谷君。『安心院さんは校門を通らず学校に来たんじゃないか』って顔してるよ？」

あ。バレたか。

「それじゃあどうやって来たんだよ。普通は校門で止められると思うんだけど」

「僕の一京分の一のスキルを使えばここまで来ることなんて造作もないことさ」

「さいですか……」

「僕の一京分の一のスキルを使えばここまで来ることなんて造作もないことさ」

「さいですか……」

もう何でもありだな。安心院さんのスキルって。

「それで、安心院さんは一体ここまで何をしに来たんだ？ 悪いけど俺は今きゅうきよくキマイラを倒すのに忙しいんだけど」

「いやいや。それっていつのネタだい？ 今の子供たちにはわからないと思うんだけど」

「大丈夫。某オールスターアクションゲームに出ていたから、姿形だけならわかるはずだぜ」

ちなみにアイツはスイッチを切っても、頭の上に乗っているヒョコみたいなヤツを始末しないと意味がないからな。気をつけないと

トイレでバツタリ会うなんて俺はゴメンだぜ。

まあそれは置いて。

「今は本当に忙しいから、用がないならもう行くぜ」

安心院さんには悪いけど、今は彼女に構っている場合じゃない。

一刻も早くAクラスにいる明久に合流しなければ。

そう思っただけ保健室を後にしようと歩き出す。

「試召戦争、だったっけ。今Cクラスと戦っているんだよね？」

しかしその言葉を聞いて、何故か俺の足が止まった。何で安心院さんがそのことを知っているんだ？

「何やらあちらさんが大変な作戦を画策しているみたいだけど、聞いていくかい？」 安心院さんには悪いけど、今は彼女に構っている場合じゃない。そう思っただけ保健室を後にしようと歩き出す。

「試召戦争、だったっけ。君たちFクラスは今、Cクラスと戦っている真つ最中なんだよね？」

その言葉を聞いて、何故か俺の足が止まった。

「何やらあちらさんが大変な作戦を画策しているみたいだけど、聞いていくかい？」

今Cクラスと戦っているんだよね？」

その言葉を聞いて、何故か俺の足が止まった。

「何やらあちらさんが大変な作戦を画策しているみたいだけど、聞いていくかい？」

「……こつちが使う科目を制限するっていう話ならもう聞いている」

「画策している、って言ったはずだぜ？ それはもう実行に移されようとしている。僕が知っているのはまた別の作戦さ」

そう言っただけ、安心院さんは顔に笑みを浮かべた。

「その前に、一つわからないことがあるから聞かせてくれないかな。情報を聞いた方がいいけどさっぱりわからないんだよ」

安心院さんがそんなことを言ってきた。というか、

「やっぱり神様でもわからないことってあるんだな」

「おいおい。僕は神というより概念寄りだぜ？ それに全知全能の

存在なんているはずないじゃないか」

俺の言葉に対して安心院さんは両手を顔の横まで上げて『やれやれ』といったポーズを取った。

……つと。こんなことを言ってる場合じゃない。安心院さんが聞き出してくれた情報を聞かないと。

「それで、わからないところってのは何なんだ？」

「試召戦争中のクラスに他のクラスが自分から勝負を挑んだらどうなるんだい？」

「……………へ？」

安心院さんの質問に対して、一瞬思考が停止してしまった。

「神谷君？」

「へ！？ ああ……。試召戦争中の他のクラスの生徒に勝負を挑んだら、ペナルティを食らっちゃうな」

通常時ならともかく、戦争中の他のクラスに勝負を挑むとなれば、それは紛れもなく他クラスへの干渉とみなされる。しかも自分から申し込んだ勝負なら、言い訳のしようがない。

「ふうん。なるほど。そういうことか……」

安心院さんは何かが理解できたような顔をしていた。

「それで、それがどうしたんだ？」

「どうしたも何も、それがFクラスを敗北に追い込む切り札なんだよ」

「ちょっと待ってくれ。話がさっぱりわからないんだけど？」

何でそれがFクラスを敗北に追い込む切り札になるんだ？

「AクラスとBクラスが試召戦争を始めようとしているっていうことは知っているよね？」

「ああ。それなら聞いた」

そういえば優希にそのことを聞いてから結構時間が経っている。明久やAクラスの皆が妨害をやっているみたいだけど、成功したにしろ失敗したにしろ今はもう終わっているだろう。

「それで、AクラスとBクラスが試召戦争を開始したみたいだぜ」

「つてことは、明久たちの妨害は失敗したつてわけか」

となると相手の作戦である科目縛りが実行されるわけか。補充ばつかりしていた俺が言うのもなんだが、厄介な状況になったな。

「それで、ここからが本題だ。このままだとFクラスの主力舞台がことごとく自滅しちゃうぜ」

「……………は？ どういうことだ？」

安心院さんの言葉に思わず聞き返す。

「順を追って説明するね。Fクラスは不利になってきたから、いよいよ勝負に出たみたいだね。さつきFクラスの教室から姫路ちゃんを中心とした別働隊出たらしいよ」

確かに周りを敵に閉鎖された教室から飛び出すとなると、相当の突破力が必要になる。

「別働隊の狙いは職員室」

職員室つてことは、立ち会いの先生を連れてくるのか。

「ーと見せて、実はもうーつ」

「もうーつ？」

「四階の空き教室を狙っているね」

四階の空き教室？ 何でそんな所を？

「で、ここからが重要だよ。Cクラスが屋上に移動して守りを固めれば、きつとFクラスは勝負を仕掛けるために主力で空き教室周辺を取りに来るだろうから、その主力をまとめて退場させるつてさ」

安心院さんの言いたいことがいまいちわからない。

「退場させるつて、いつたいどうするんだ？」

「さつき僕が君に聞いた試召戦争のルールを使うみたいだぜ？」

さつき俺が聞かれたルールつていうと、他クラスへの干渉に関するルールか。そんなことをどうやって利用するんー待てよ。

「その主力部隊を退場させるつて、まさか……………」

「ああ。Bクラスの人を連れてきて、主力であるFクラスの人からその人に勝負を申し込ませるんだつてさ」

……………は？ それつてつまり、勝負を申し込んだFクラス側の

人間がペナルティを受けてしまっただことだよな？

「それで、狙うのは人を疑わなくて、なおかつ潰すと効果的な相手だね」

安心院さんは尚も言葉を続ける。

「名前はーそうだ。姫路ちゃん、だったな」

……………つてアレ？

「ちょっと待て。レンのヤツは一体何をしているんだ？」

アイツがいるのなら、たとえ姫路を退場させられたとしても作戦は実行できると思うんだが。それに、姫路と連絡も取れるかもしれないし。

「レンちゃんなら四階の空き教室からは離れた場所にいるCクラスの親衛隊を引きつけているところだ。だから姫路ちゃんとは連絡が取れない。ちなみにあちらさんは彼女も退場させるみたいだよ」

「レンもか？」

フリーの状態ならいざ知らず、戦闘中の生徒をどうやって退場させるんだ？

「ああ。戦闘が一旦終了するタイミングを見計らって、彼女の刺客の位置にもBクラスの生徒をこっそり配置するんだ。召喚フィールドに入った状態で」

「それだけだったら退場にはならないんじゃない？」

ただ召喚フィールドに立っているだけだったら、勝負を申し込むわけでもないし、ペナルティは受けられないはずだ。

「いやいや。Cクラスの親衛隊は結構人数がいるからね。レンちゃんがこう宣言することは目に見えてるよ」

「安心院さん。それってまさか……………」

「『この場にいる全員に試験召喚勝負を申し込みます』ってね」

それを背中であきながら、俺は保健室からダッシュで駆け出した。でも、姫路とレンのどっちを助けに行けば良いんだ？

「姫路ちゃんの所には吉井君が向かうはずだから、君はレンちゃんを助けに行った方がいいよ」

背中からそんな声が聞こえてくる。よし。これで目的地は定まった！

……ところで何で安心院さんがそんなことを知っているんだ？

「ヒメジなら、キュウコウシヤのヨンカイにいるらしいヨ！」

ダッシュで校舎の玄関へと向かう明久の背に向かって校門から一人の少年がそう叫んでいた。

「にひー。ヒメジはテキにかこまれているはずだし、アキヒサはどうやってトツパするのか、楽しみだネ」

金色の髪と小柄な体躯をもつ少年、リンネ・クラインはその顔には笑みを浮かべている。

そこへ近づくと人影が一つ。

「その様子だと、そっちもうまくいったみたいだね」

後ろで纏めた長い黒髪、この学園の指定ではないセーラー服。

「にひー。そっちもってことは、アンシンインさんの方もうまくいったみたいだね」

リンネはなじみが出てきても全く驚かない。以前からの知り合いでいるような振る舞いをしていた。知り合いというよりは、まるで自分自身に話しかけるように。

「それはそうと悪平等、吉井君はどうだった？」

「オモシロかった！」

「そうかい。それは良かったね」

なじみの問いかけに対し、リンネは笑顔でそう答えた。

「ところで、どうしてアンシンインさんはキョウリヨクしたの？」

「おや。悪平等あくなおかしのことを聞くなあ。君はおんとして協力しようと思ったんだい？」

リンネは満面の笑みを浮かべる。

「アキヒサたちがオモシロそうだったから！」

第七十六問・あの日受けたテストの点数を僕たちはまだ知らない

問 ” 清廉潔白 ” の類義語を挙げ、それを用いて文章を作りなさい

姫路瑞希の答え

『類義語：品行方正』

例 文：彼は品行方正な人物なので、不正をするはずがない。』

教師のコメント

そうですね。清廉潔白とは”後ろめたいところがなく、心や行いが清く正しいこと”を意味します。品行方正も”心や行動がきちんとして正しいこと”を意味します。他に類義語としては”清廉恪勤”や”青天白日”などもあります。

小山友香の答え

『類義語：青天白日』

教師のコメント

一瞬正解かと思いましたが、間違いです。慌てていたのでしょうか。”白日”ではなく”白目”になっていますよ。これではまるで、身の潔白を訴えているのに白い目で見られてしまう”といったような意味に思えてしまいます。テストは時間との勝負という部分もあります。慌てず落ち着いて、ケアレスミスの無いように注意するのも大事ですよ。

根本恭二の答え

『類義語：品行方正』

例 文：学校の誰もが「根本恭二は品行方正な人物です」と言っています。』

教師のコメント

” 青天白日” を使って例文を作ることができそうですね。

「レンちゃんなら四階の渡り廊下の階段付近にいるみたいだよ！」

背後から安心院さんの声が聞こえる。ありがたい情報をくれた彼女にお礼を言うことも忘れ、俺は全力で廊下を走り抜けていた。

「Cクラスめ……。やってくれるじゃねえか……！」

別に相手はルール違反になるようなことをしたわけではないし、俺たちだって普段から卑怯卑劣な手段を用いていから、相手の策が卑怯だなんていうわけじゃない。むしろ、正々堂々とした策略なんて存在しないと俺は思っている。

そう。だからこそー

「おもしれえ。その策略、全力で打ち破ってやる！」
ハイトアンドシーク 『膝小僧』！

俺は走りながらCクラスの人がいなことを確認して、安心院さんからもらったスキルを発動する。頼む！ 間に合ってくれ！

『まったく。いくら親衛隊だからって、数が多過ぎじゃない？』

『そりゃそうだよ。万が一の可能性も起こしちゃいけないんだから
少し離れた場所から聞き慣れた声が入ってくる。戦闘の音が
聞こえないってことは、一旦戦闘が終了したのだろう。』

『さて。続きを始めようか』

『そうね。先生。ここにいる全員に試験召喚勝負をー』

「その勝負、待ったああーっつっ!」

「りよ、亮!？」

「っっっ!？」

突如乱入してきた俺を、皆が驚くように見ている。その場にいたのは俺を除いて合計七人。レンやCクラスの人たちに混じり、一人だけCクラスのふりをしたBクラスの人がいた。アイツは確かー矢野だったな。

「ちよつとアンタ、一体どうし」

「レン。別にお前から勝負を挑む必要はないだろ？ Cクラスの人とだけ勝負すればいいんだからな」

始めは疑問顔をしていたレンだが、俺の言葉を聞いて数秒後、言葉の真意を理解した表情を浮かべていた。

「そうね。先生。Fクラス神谷レンがここにいるCクラス全員に勝負を申し込めます。試験召喚っ!」

ここにいる全員ではなく、ここにいるCクラス全員に勝負を申し込む。これこそ俺がここまでの道中で考え、レンに伝えた作戦だ。

こうなつた以上ここにいるCクラスの人は召喚獣を喚ぶしかない。しかしその方法が取れるのはCクラスの人のみ。なぜならレンはCクラスの人にのみ勝負を挑んだわけだから、勝負を申し込まれていないBクラスの人は召喚獣を喚び出すことができない。

「くっくっ……………。試獣召喚」

敵前逃亡とみなされななく、召喚フィールドの中にいる人たちが次々と召喚獣を喚び出した。Fクラスである俺と、Bクラスである矢野の二人を除いて。

「……………くっ……………そおっ！」

憎々しげに吐き捨て、矢野は階段へと走り去っていった。作戦の失敗をBクラスの代表である根本に伝えに行くのだろう。

「先生。Fクラス神谷亮も、ここにいるCクラス全員に試験召喚勝負を申し込みます。試獣召喚っ！」

レンをサポートすべく、俺も召喚獣を喚び出す。背中合わせになっている俺たちを倒すために、Cクラスの皆は俺たちを円状に囲む。ちなみに科目は日本史。俺にとってお世辞にも得意とは言えない科目だ。

「ねえ亮。この人数、相手にできそう？」

「さあ。あと一人増えたら苦しいかもな」

「その時は、私が一人多く倒すわ」

「おっ。そりゃ頼もしい限りだな」

「それじゃあ軽口はこの辺にして、そろそろいくわよ！」

「おっっ！」

俺とレンは敵に向かって一直線に突っ込んでいった。

「例の姫路やレンを陥れる作戦がどう転がるかだな……」
「こればかりはもう、明久や亮を信じるしかないのじゃ」
「だな」

所変わってFクラスの教室。Cクラスに勝つための作戦を実行するためにその場で立ち上がった。

「全員、補充試験完了！ 行くぞ野郎ども！ 総攻撃だ！」

『『『『おおー！』』』』

『『『『つっつ！?!?!?!』』』』

雄二の指示で立ち上がったFクラス勢を見て、様子を窺っていたCクラスの集団が目丸くしていた。なぜなら現在の時刻は14:05。Fクラスが補充試験を開始したのが14:00。つまりFクラスはたった五分で補充試験を切り上げて出陣したのである。

『コイツら、何を言ってる！』

「どきやがれ！ 試験召喚っ！」

相手が驚いているうちに雄二が召喚獣を喚び出して、Fクラスが飛び出す道を作る。油断していた相手は一瞬で沈められてしまった。
『ヤツら、もう補充試験を終えたってのか?!』

『先生、召喚許可を！』

廊下で待機していたCクラスの部隊が召喚を開始しようとする。

しかし、

「待たせたわね土屋！ 派手にやりなさい！」

「……………その言葉を待っていた……………！」

その前に保健体育を連れた美波がやって、保健体育のフィールドが展開される。

「この場は任せたぞムッツリーニ！」

「……………引き受けた」

雄二たちが保健体育のフィールドを駆け抜けたところで、待機し

ていた他のCクラスの人たちが召喚を開始した。

『野郎っ！ ここは通さねえぞ！』

『覚悟しろよ！』

『やってやる！ 試獣召喚っ！』

「須川、柴崎、英！」

『『了解っ！ 試獣召喚！』』』

それに対して、雄二も同じ人数をぶつける。

『Cクラス 河瀬雅人

V S

Fクラス 須川亮

日本史

88点

V S

6点

『Cクラス 寺崎孝

V S

Fクラス 柴崎功

日本史

91点

V S

5点

『Cクラス 泉小太郎

V S

Fクラス 英慎

日本史

1 1 2点

V S

3点

この圧倒的な点数差では、数秒で勝負がつくだろう。

しかしその数秒の間に、雄二たちはフィールドを走り抜けていた。
『しまっー！？』

須川たちが時間を稼いでいる間に廊下から階段前へ到達。そして、再び敵に同人数をぶつける。

「頼むぞ瀬戸、高橋、中村、布田！」

『『『おうよっ！ 試獣召喚っ！』』』

勝負をしている間に脇を抜けて踊り場に出る雄二。そこでも敵に對して同人数をぶつけて走り抜けた。

一見簡単な作戦に見えるが、これはCクラスの大半がFクラスに釣られて補充試験を受けている今だから可能な作戦である。

そして何より常日頃からバカと言われ続け、補習を受けているFクラスからしてみれば、一桁の点数で飛び出すことなど造作もないのだ！

『もう来るの！？ 試獣召喚っ！』

『試獣召喚っ！』

「羽沢！ 平田！」

『『OK！ 試獣召喚！』』

踊り場を抜けて四階へ向かう。

「ここまでがいい。問題はこの先だ」

雄二がふと呟いた。屋上へと向かう階段には、小山の親衛隊が徹底的な防御の布陣を引いている。突破する隙間がなければ、今まで手段は使えない。

だからこそこの別働隊。瑞希とレンの役割がうまくいっているなら小山がいる屋上へと抜けられる。うまくいってなければ、全てが終わる。

姫路やレンを陥れる敵の作戦を知った雄二は、その始めに別の作戦を実行しようとした。

しかし、相次いで飛び込んできた明久と亮の目撃情報を耳にして、この作戦を決行した。二人を信じて。

勝負の分水嶺である空き教室方面へと向かう雄二。すると、そんな雄二の目に、

「ふう………」

「はあ………」

張り詰めた気を吐き出すように、息をついている二人の姿が映る。姫路を救った明久とその肩に乗っている、レンを救った亮だ。

その光景に、自然と雄二の口元が緩む。そして雄二が両手を挙げるのを見た二人もそれぞれ手を挙げて、

「よくやったテムエらあつ！」

「しくじるなよ雄二っ！」

雄二はすれ違いざまに明久と亮の手を叩き、屋上へと向かう。

「来たわ！ 坂本よ！」

「絶対に通すな！」

「先生、召喚許可をお願いします！ 試獣召喚っ！」

屋上へ続く階段には、Cクラスの防衛部隊が五人。始めはこの二倍近くいたのだが、別働隊であるレンや、後半にレンをサポートし

た亮の活躍によってここまで人数が減っていた。そして――

『え！？ どうして出てこないのよ！？』

『まさか、干渉か！？』

これが瑞希の役割。レンが親衛隊の戦力を削っている間に、瑞希が階段に最も近い空き教室を確保する。そしてそこに配置した教師にフィールドを張らせる。この空き教室と階段は位置が近く、なおかつお互いの様子を窺うことができない。だから、教師に気づかれることなく干渉を容易に起こすことができる！ そして、そこを駆け抜けても敵前逃亡にはならない！

フィールドが張られていない階段を、レンや亮が生み出した隙間を縫って雄二たちは屋上へと向かう。

バン、と大きな音を立てて屋上への扉が開かれる。その向こうには、驚きで目を見張るCクラス代表の小山の姿があった。

「よう小山。散々面白いことやってくれたじゃねえか」

「坂本……！」

屋上には小山以外に護衛としてCクラスの生徒が二人いた。

対するFクラス側にも、まだ戦力が残っている。

「試獣召喚じゃ」

まずは秀吉。秀吉は敵の増援を屋上の出入り口で食い止める役割を担っている。

そして残るは――

「お待たせしましたっ！ Fクラス姫路瑞希、召喚します！」

「Fクラス神谷レンも召喚します！」

それぞれの任務を終えた瑞希とレン。彼女たちと雄二が小山を討ち取る戦力である。

これで人数は三対三。小山が何もしなければ護衛二人は難なく倒されてしまい、代表一人が残される状況となる。そうならないためにも、小山は召喚獣を出さざるを得なくなる。たとえその勝負に勝

ち目がなくなっていたとしても。

「どうして……どうしてよ！ 下位のクラスを相手に、ここまでやっただっていうのに！」

小山が憎々しげに雄二たちを睨み付ける。

「残念だったわね小山さん。詰めが甘かったわよ」

レンはいつか小山に言われたセリフを彼女に言い返した。

第七十七問その一・もう一つの試召戦争 〈Aクラスの戦い〉

問 次のことわざの空欄に正しい語句を入れて、 小さな力でも根気よく続ければ成功する という意味のことわざを完成させなさい
『雨垂れ（ ）』

姫路瑞希の答え

『雨垂れ（ 石を穿つ ）』

教師のコメント

そうですね。これは 軒下などから落ちるわずかな雨垂れでも、長い時間をかけて同じ場所に当たること下にある石にも穴を穿つことができる という出来事から生まれたことわざになります。継続は力なり、という言葉に通じるものがありますね。

坂本雄二の答え

『雨垂れ（ 岩を砕く ）』

教師のコメント

ニユアンスは合っていますが、勢いが強すぎです。なかなか見ない間違いなのですが、今回は坂本君と全く同じ解答をした生徒がもう二人いました。

吉井明久の答え

『雨垂れ（ 岩を砕く ）』

神谷亮の答え

『雨垂れ（岩を砕く）。』

教師のコメント

本当に、たまにあなた方はどこで示し合わせているのかと不思議に思うことがあります。

「話を聞く限り、CクラスとFクラスの間で使われる科目は日本史ばかりになったみたいね」

他のクラスメイトから聞いた情報を優子が明久に教えている。

時を遡ること数時間前。明久はAクラスで日本史の補充試験を受けていた。

明久たちはCクラスの策略の一つであるAクラスとBクラスの試験戦争を阻止するために動いていた。その方法というのが、Bクラスの授業を長引かせてその隙にCクラスの使者が持っている手紙をあらかじめ用意した偽の手紙とすり替える、というものだ。

しかしその努力も実らず、AクラスはBクラスに宣戦布告をされてしまった。

「これで少しは吉井君もやりやすくなるかな」

「日本史って、試験召喚大会以来の吉井君の得意科目だもんね」

「ありがとう。霧島さん、桂さん、木下さん、久保君、工藤さん」

そこで、Aクラスの翔子たちがBクラスとの開戦予定時刻までの間に日本史の補充試験を受けて、それをBクラスに見せつける。Bクラスとしては、『Aクラスが補充を終えたばかりの科目ではやりたくない』と考えるだろうから、手を組んでいるCクラスに連絡してCFクラス間での勝負は日本史を中心にしてくる。明久の得意な日本史に。

「……気にしないで」

「代表の言う通りだよ吉井君。気にする必要なんてないってば」

「でも、別に皆は点数が減ってたわけじゃないのに、補充試験だなんて……」

補充試験は、受け始めた時点でその科目の持ち点が一度0点にリセットされる。その為、下手に途中で切り上げてしまつと最初よりも点数が低くなつてしまう場合がある。

だから、一度補充試験を受け始めたら全力で取り組む必要があり、それは成績が良いAクラスの人でも変わらない。

「この程度、大した苦労でもないさ」

「そうよ。だいたい、自習で問題集を解いているのと変わらないもの」

「優子ちゃん。素直じゃないね」

「そうだよ。そんなんだから、神谷君に気づいてもらえないんだよ？」

「そ、それは今関係ないでしょ!？」

顔を真っ赤にして詰め寄る優子を、優希と工藤はサラリとかわしていた。

最初は日本史の補充試験を翔子が一人で受けると言っていたが、人数が多い方がBクラスも乗ってくるだろうということで、優子たちも一緒に補充試験を受けていた。

「それで吉井君。ここからはどうするんだい？」

「ひとまず校門で待ち合わせの約束をしているリンネ君の話を知ったら、それを雄二に伝えに行くよ。日本史なら、うまく隙をついて

合流できるかもしれないからね」

「……頑張つて」

「ありがとう霧島さん。皆も、Bクラスに負けられないようにね」

「大丈夫。負けやしないさ」

「この後はFクラスとの勝負も控えてるからね。チャチャッとや
っつけちゃうよ」

「吉井君たちも頑張つてね」

「人の心配はいいから、しっかりやりなさいよ」

「うん。じゃあ行ってくる！ 本当ありがとう！」

明久はお礼を言つてAクラスを後にした。

「皆、準備はいい？」

優子の言葉に、Aクラスの皆が首を縦に振る。

明久が去つた後、Aクラスの教室では試召戦争の準備も終え、試
召戦争開始に向けて待機していた。

そして、時計の針が13:00を差した。

キーンコーン……

開始の合図代わりであるチャイムが鳴り響く。

「それじゃあ、行くわよ！」

「「「おおっ！」「」」

A Bクラス間の試召戦争がー！始まった。

「試獣召喚っ！」

複数の場所で召喚獣を喚び出す声と、召喚獣の武器どうしがぶつかり合うが響いてくる。

AクラスとBクラスの教室間の廊下では召喚獣同士による戦いが繰り広げられていた。

「はあああああっ！」

ランスを持った優子の召喚獣へ、相手の召喚獣が大剣を振りかぶって襲いかかる。

「なんのっ！」

優子は盾を突き出してその斬撃を弾き飛ばし、一瞬無防備になった相手目掛けてランスを突き刺す。

「くっ……！」

そのまま相手の召喚獣は沈み、戦闘不能となった。

(これじゃあやっぱり押し切れないわね)

現在優子が指揮を取っている部隊の数は、Bクラスはクラスメイトを総動員した部隊を前線に投入しているが、Aクラスの前線メンバーは全体の約三分の一。点数では勝っているものの、人数が少ない分いまいち押し切れていなかった。

試召戦争が開始されてから既に約四十分が経過している。開始早々から休息も補充もなしにずっと戦い続けているせいか、Aクラスの皆にも少しずつ疲労感が見え隠れしている。

と言うのもAクラスの大半が現在数学や化学といった理系科目の補充試験を受けており、前線に投入できる戦力に限界があるのだ。

どうしてAクラスが試召戦争開始後も補充試験を続けていたのかというと、教師の数が足りないためであった。

ただでさえCFクラスで試召戦争が行われているというのに、その上ABクラスでも試召戦争が始まってしまつとなれば、当然確保できる教師の数も限られてくる。無論Bクラスは予想済みであるため、Aクラスより先にあらかじめ教師を複数人確保していた。

Aクラス側は明久のために日本史教師はなんとか確保できたものの、一部の科目の教師を確保できなかったのだ。

BクラスはAクラスの戦力が減少している間に試召戦争を終わらせるべく、一気にAクラスに攻め込んできた。

そして今になり、Bクラスが少しずつ巻き返しを始めている。

(さすがにそろそろキツくなってくる頃合いね。幸いにもこつち側の戦死者があつちよりも少ないけど、ここで崩されたらかなりヤバいかも……って、ダメダメ。そんなこと考えちゃ)

優子は首を振り、後ろ向きな考えを吹き飛ばす。

「皆、まだまだこれからよ！ なんとしてもこの前線を死守しましよー！」

「……おうつー！！」「」

優子の声に合わせて、再びAクラスの皆は突撃を開始した。
しかし、

「きゃあああつー！！！」

突撃を繰り返すうちに、とうとうAクラスの生徒が一人戦闘不能になってしまった。

「ちっ……！！」

「こつちも戦闘不能だ！」

更に相次いで戦闘不能になるメンバーが続出する。

点数的にもう限界が訪れていた。いつ前線が崩れてもおかしくない。

(くっ……！ まだなの……？)

優子が歯噛みしながら待ちわびたその時。

「お待たせ！ 優子ちゃん！」

Bクラスの前線部隊を挟んだ向こう側から、優希の声が響いてきた。

そしてそれを聞いた優子の口元がフツと緩む。

「遅いわよ！」

「ゴメンゴメン。思ったより補充に時間がかかったちゃって」

そう言いながらも、優希たちはBクラスの部隊を囲むように動く。それと同時に優子たちの後ろからも補充を終えたAクラスのメンバーが続々とやってきた。

「点数を消耗した人は補充を終えた人と交代して後ろに下がって！」
優子の指示によって素早く前線が立て直される。

「なっ……！！？」

「囲まれた！？」

相手が気が付いたときには、AクラスによるBクラスのパウチ網が完成していた。

これがAクラスの作戦である。

補充試験を受けていたのも、前線においてわずかな戦力で戦いを繰り返していたのも、全て作戦だったのだ。

試召戦争が始まると教師の数が不足して補充試験を受けるのに時間がかかることはAクラスももちろんわかっていて。しかしAクラスは補充を受けずに出陣するわけでもなく、敢えて時間をかけて補充試験を受けた。

そしてBクラスを十分に引きつけたところで挟み撃ちにしてBクラスの戦力をまるごと押さえ込むことにした。

そして、作戦はまだ終わらない。

「優希。あとは頼んだよ！」

愛子が化学教師を連れてやってきた。

「ありがとう。愛子ちゃん」

優希はお礼を言っていると前線から離れる。そして、化学教師を連れてBクラスの教室へと向かった。

「ここは通さない！ 試獣召喚っ！」

「試獣召喚っ！」

優希が教室にまでやってきた姿を確認して、相手が召喚獣を喚び出す。

「試獣召喚っ！」

それに合わせて優希も自分の召喚獣を喚び出し、優希の召喚獣が姿を現す。

その姿は紫と白を基調としたセーラー服を身に纏い、両手には一つずつ武器を所持している。

右手には自動式連発拳銃。

左手には回転式連発拳銃。

そう。いわゆる二丁拳銃だった。

第七十七問その二・もう一つの試召戦争 〈異才のチカラ〉

□ Aクラス 桂優希

V S

Bクラス 一ノ瀬美香 & 小野寺哲也

化学

5 4 6 点

V S

3 5 4 点 & 3 7 1 点

召喚獣が現れるやいなや、一ノ瀬と小野寺は優希の方へと突っ込んでいった。

小野寺の召喚獣と一ノ瀬の召喚獣は武器がそれぞれ剣と斧を持っている。

拳銃という武器の特性上、距離を取られて間合いの外に出られたら、一方的に攻撃を受けることになる。そうならないためにも、相手側としては常に懐に潜り続けるしかない。

しかし、それは優希も承知済みだ。

突っ込んでくる相手に向かって真っ正面から拳銃をそれぞれ一発ずつ発砲した。

突然の優希の行動に驚いた相手はそれを避けることができず、それぞれ脇腹と足に弾丸が突き刺さる。

□ Aクラス 桂優希

V S

Bクラス 一ノ瀬美香 & 小野寺哲也

化学

542点

V S

337点 & 355点『

優希は今の戦闘から得られた情報を基に、分析を開始した。

（銃弾の速さは時速約100〜120キロメートルつてところかな。一発あたり2点を消費するみたいだね。それに、今の攻撃で15点ぐらいしかダメージを与えられなかった。やっぱり頭や心臓を狙わないと致命傷は狙えないみたい。だったら！）

今度は優希が相手の懐に潜り込み、斧を銃で押さえ込む。

その直後にもう一つの拳銃を相手の眉間に押し当てて引き金を引いた。

相手の召喚獣が音を立てて倒れる。それと同時にもう一体の召喚獣が向かってきた。

「はあああっ！」

剣を構えて突進してくる相手に対して、優希は再び左手の回転式連発拳銃を相手に向ける。

「これを待ってたのよ！」

その瞬間に相手は剣を振り抜いて、拳銃を弾き飛ばした。更に、その衝撃で左手も顔の上上がり、一瞬無防備になってしまう。

「もらったあっ！」

その隙について優希の召喚獣を貫こうと剣を突き出してきたその時。

「え……？ 何……で……？」

相手は後頭部を打ち抜かれていた。

そして、相手の後方には優希の召喚獣の姿があった。先程身体を貫かれそうになっていた姿は、いつの間にか消えていた。

かつて死神―並行世界の須川―と戦った際に身につけた『シャド―ランサー』を召喚獣で発動させたのだ。

「初めてにしては上出来かな。まあここまで正確に動かせるのは化学だけだと思っけど」

「いたぞ！ 桂だ！」

「ここは通さねえ！」

「」「試獣召喚っ！」「」「」

教室の近くで待機していたBクラスの部隊が駆けつけ、召喚フィールドが展開される。

「試獣召喚っ！」

優希もそれに応じて自分の召喚獣を喚び出した。

「状況はどうなってる？」

「AクラスとBクラスの主力部隊同士が現在も戦闘を繰り広げているようだ」

一方Bクラスの教室では代表である根本恭二と彼を護衛している数名の親衛隊、そして諜報係がいた。

「ただ、補充を終えたAクラス側の人間が段々と増えてきた。このままだとこっちが押し負けるのも時間の問題だ」

それを聞いた根本は腕を組んで、何かを考える仕草をする。

「そうだな。そろそろこの作戦も限界だ。次の作戦だがー」

「ヤッホー。根本君。君も随分と面白いことをしてくれたよね」

根本の声を遮り、女子の明るい声が響き渡っている。

しかし現在Bクラスの教室にいる人間は代表である根本を含め、

男子しかいない。しかも廊下では総力戦が繰り広げられているはずだ。だから本来女子のー！それもAクラスの人の声が聞こえるわけがないのだ。そう、本来は。

「桂……。何でお前がここにいる？ 主力部隊とは別に表で待機していた部隊はどうしたんだ！？」

「全員戦死して補習室に連れていかれたよ」

思わぬ事態が発生して取り乱す根本に対して優希はいつも通りで暖簾に腕押しといった感じだった。

「それじゃ、そろそろ戦争を終わらせよっか。先生、Aクラス桂優希がBクラス根本恭二君に召喚獣勝負をー！」

「Aクラス桂優希に勝負を申し込みます。試獣召喚っ！」

「……試獣召喚っ！」「……」

Bクラスにいた親衛隊や諜報係が、根本への宣戦布告をされる前に、逆に優希に宣戦布告をした。代表である根本が負ければ、この戦争に負けてしまう。それを防ぐ為の苦肉の策を彼らは実行した。いや、実行せざるを得なかった。

「試獣召喚っ！」

優希もその勝負に応じて三度召喚獣を喚び出した。

「は、ははっ……。残念だったな桂。俺と勝負することが出来なくて」

「そんなことはないよ根本君」

苦肉の策を実行せざるを得ない状況を作り出した張本人である優希は、特に問題が発生したような顔をしていなかった。むしろ想定内といった様子だ。

「だってー！もう一度君に勝負を申し込めばいいだけだから」

その言葉を言い終わるやいなや、発砲音が響き、一匹の召喚獣が倒れて戦闘不能になった。

もちろん優希の召喚獣ではない。敵であるBクラスの方だ。

「なっ……。！ 一体どういう……。？」

Bクラスの皆に驚きと戸惑いが生まれる。それもそのはず。味方

の召喚獣がやられた時、優希の召喚獣は武器である二丁拳銃を構えず敵の懐に潜り込んでいる最中だったからだ。なのに別の方向にいた敵が倒されている。

少なくとも根本たちにはそう見えていた。

優希はここでもシャドーランサーを使用していた。シャドーランサーで相手に幻影を見せて、その隙に相手からは見えていない本物の召喚獣で別の動作を行っていた。言うなれば、シャドーランサーの応用である。

「それじゃ、いくよ！」

再び優希は敵の一体に召喚獣を突っ込ませる。

「ふん。これもまた幻だろ？ 皆、どこからくるかわからないから気を付けー」

そう言い終わる前に、敵の懐に突っ込んだ優希の召喚獣がそのまま獣を喉元に突き刺した。

「ふん。吉井君の木刀と同じで、別に刃物じゃなくても喉元への攻撃は一撃で戦闘不能になるみたいだね」

「幻じゃ……ない……？」

「見えるものが全て幻影だなんて、私は別にそんなことを言った覚えはないよ」

優希の召喚獣は拳銃を構え、相手の頭目掛けて発砲したり相手目掛けて突っ込んでいたりしている。

「こ、この召喚獣は本物なのか！？ それとも偽物なのか！？」

「そんなの、俺にわかるか！」

表があるから裏が生き、裏があるから表が生きる。

優希は実体とシャドーランサーによる幻影で攻撃を入り混ぜていた。

「さて根本君。後は君だけだよ」

親衛隊や他の人たちを全員倒した優希は、根本へと歩み寄る。この教室には現在根本と優希と化学の教師しかいない。

根本に出来ることは、もう何も残されていなかった。

「先生、Aクラス桂優希がBクラス根本恭二に試験召喚獣勝負を申し込みます」

「畜……生……っ！」

『Aクラス 桂優希

VS

Bクラス 根本恭二

化学

514点 VS 376点
『

AクラスとBクラスの戦争は、これによって終結した。

第七十七問その三・キミの思い、僕のココロ

「そういえば明久。お前今日休みじゃなかったのか？」

「試召戦争も終わり、時間は放課後。俺たちが教室にいと、明久が教室に入ってきた。」

「昨日は風邪をひいていたんだけどね。今日は大したことなかったから、遅刻してきたんだよ」

「本当なのアキ？」

「明久についての話題ということもあり、島田が俺たちの会話に混ぜてきた。」

「そんなこと言って、実はまだ熱があったりするんじゃないの？」

「いや、そんなことは……」

「どれどれ……」

島田が明久の頭に手を添え、自分の額とくっつけて熱を測ろうとしている。

「み、美波。僕は大丈夫だから。それよりも、姫路さんはどこにいったのかな？」

顔を真っ赤にした明久が苦し紛れに話題を逸らしてきた。言われれば、確かに教室の中に姫路の姿がない。一体どこに行ったんだろう。

「ん？ 姫路ならレンと一緒にさっき妙なガキにつきまとわれてどこかに行ったぞ」

教室にやってきた雄二がそんなことを言っている。なるほど。レンは姫路と一緒にいるのか。道理で姿が見えないと思った。

「妙なガキ？」

「ああ。金髪碧眼の、いかにも北欧系の子供だ」

「北欧系の子供？ そんな人この学校の生徒にいたっけか？」

「子供と一緒にということは、姫路とレンは職員室にでも行ったのではないかの？」

「だね。二人の性格だと、迷子とかだったら放っておかないだろうし」

「瑞希はもちろんとして、レンもなんだかんだ言いながら迷子とかに付き合いそうよね」

「だな」

もつとも、俺としては余程のことがない限り職員室には近づきたくはない場所だな。

「それよりアキ。さっきから顔が赤いしおでこも熱いし、早く帰って寝た方がいいんじゃない？」

「そうじゃな。Aクラスを目標そうといても本意ではなからう」

「そうだぞ明久。カゼ薬も飲んだ方がいいんじゃないのか？」

ことわざにもあるように、風邪は万病の……万病の……なんだっけ？ 忘れた。

「まあ、もう大丈夫だとは思うけど、一応そうさせてもらおうよ」

そう言い残して、明久は一足先に家へと帰っていった。

「さて、それじゃ俺も家に帰るか」

道すがらに頼まれた買い物も済ませた方がいいかもしれないし。

「亮。お主ももう帰るのかの？ だったらワシも一緒に帰るとしよう。場所も一緒じゃしー」

俺に合わせて一緒に立ち上がるうとした秀吉の口を塞ぎ、周りには聞こえない音量で会話をする。

（ストップだ秀吉。そんなことをしたら周りの皆に同棲を疑われてしまうかもしれないだろ。帰りは別々にしようぜ）

（うむ。ではワシが買い物に行くとしよう。お主は先に帰っていて欲しいのじゃ）

（わかった）

危なかった。もう少しで大変なことになるところだった。

「どうしたの？ 神谷に木下」

「なんでもないのじゃ島田よ」

「そつだぞ。んじゃ、俺はもう帰るぜ」
周りの皆から疑いの目を向けられる前に、俺は足早に学校を後にした。

「さて、どうするかな……？」

学校からの帰り道を一人で歩きながら呟く。

試召戦争は無事俺たちの勝利で終了した。となると、残る問題はあと一つ。

「マナカちゃんだよなあ……」

マナカちゃんと一緒にいるととても楽しいし、あの娘の持ち前の明るい性格はこっちも明るくなってしまっただけで、レンもマナカちゃんと一緒にいる時はとても楽しそうだ。だからマナカちゃんと一緒に生活すること自体は別に何の問題もない。

ただし、それは俺たちにとってはの話。マナカちゃんの家族は彼女が突然いなくなつて、更に何日も家に帰ってきていないのだ。きっと心配しているだろう。もしかしたら親がもう警察に捜索願いを出しているのかもしれない。

だから一度警察にマナカちゃんの捜索願いが出されているかどうかを問い合わせしてみたのだが、答えはノーだった。自分の子供がいなくなつたつていうのに警察に届け出ないということは、もしかして親が独自に捜しているのか？

「親と言えば、どうしてマナカちゃんは俺のことをパパと呼んでい

るんだ？」

歩みを止めて、ふと考えてみる。始めはただの勘違いだろうと思っ
ていたけど、マナカちゃんの言い方や仕草を見ていたけど、本当
にただの勘違いなのか？

「パパ。今日こそはいつもみたいにおやすみのチュウをしてね？
だからおやすみのチュウをしてくれるまでわたしはパパといっしょ
にいる！」

ふと頭の中で、かつてマナカちゃんが言っていた台詞を思い出す。
あの時は優子にヘッドロックをかけられていたからあんまり深く考
えていなかったが、今になってみるとおかしな所が幾つかある。

勘違いだけで『いつものように』なんてことは余程のことがない
限り言わないはず。ということは、あれはもしかしたら勘違い以外
の何かなんじゃー

「ーって、それはさすがに考え過ぎか」

いくら何でもあの娘が俺の実の娘なんて、そんなことはないよな。
「それじゃ、帰ったら引き続きマナカちゃんの身元を捜すといたし
ますか」

止めていた足を一步踏み出そうとしたその時。

『悪いけど、彼女の身元を捜す時間も必要もないんだ』

頭の中に聞き覚えのある声が響いたと思ったら、いつの間にか違う場所にいた。

綺麗に並べられた机。どこともわからない教室。この場所を俺は一度見たことがある。

「やあ、神谷君。どうやらその様子だと、Cクラスとの試召戦争は無事に勝利を収めたみたいだね。おめでとうと言っておくよ」

そう、安心院さんと初めて会った場所だ。でも、あの時とは彼女の雰囲気^{雰囲気}が全く違う。

「ところで安心院さんは何をしに来たんだ？ それに、マナカちゃん^{マナカちゃん}の身元を捜す時間も必要もないっていうのは一体どういうことだ？」

俺は静かに問いかけて、安心院の言葉を待つ。

すると安心院さんはゆっくりと口を開き、俺の問いに答えた。

「僕かい？ 僕は亀戸マナカちゃん^{マナカちゃん}を消去^{消去}しに来たんだ」

第七十八問・銀河にねがいを（前書き）

コミケ疲れた……。

第七十八問・銀河にねがいを

問 以下の空欄に当てはまる語句を答えなさい
ミケランジェロはダビデ像を制作した 彫刻家 や、システイーナ礼拝堂の天井画を描いた 画家 としても有名だが、他にも（ ）という顔も持つ、多才な人物であった。

姫路瑞希の答え

『建築家』

教師のコメント

正解です。ミケランジェロの代表的な建築物としては、サンピエトロ大聖堂やサンロレンツォ教会図書館などが挙げられます。あわせて覚えておくと良いでしょう。

神谷亮の答え

『露出狂』

教師のコメント

そんな顔は持っていません。

土屋康太の答え

『家では家庭的なお父さん』

教師のコメント

子供たちにお菓子やおもちを作ったあげていた、ということだ

しょうか。彫刻家や画家として有名でありながら、子供に優しいお父さん。なんとも素晴らしい人物ですね。

吉井明久の答え

『ジョン・F・ケネディの暗殺犯』

教師のコメント

家庭的なお父さんを返して下さい。

「ただいま」

「おかえり、レンちゃんに優子ーあれ？ 亮君は？」

所変わって木下家の玄関。Cクラスとの試召戦争は終了したものの家の鍵を持っている美希が未だに出張から帰ってきてないので、レンはまだ木下家にお世話になっていた。

「アタシたちより先に帰ったはずなんだけど。まだ帰ってきてないの？」

「秀吉はもう帰ってきているんだけど……何か用事でもあるのかしら？」

その時、レンのポケットに入れている携帯電話の着信音が鳴った。

「もしもし？」

『あ、レンちゃん？』

「姉さん、一体どうしたの？」

『あと三時間程でそっちに戻れると思うから、家に帰る準備をしておいてね。亮君にも伝えてね。』

「わかったわ。気を付けて帰ってきてよ」

『うん。わかつてるよ』

電話を切ってポケットに入れると、優子に電話の内容を説明した。

「そう。わかったわ。それじゃあ、準備を手伝うわ」

「ありがとう優子」

「おかえりなさい。あれ？ パパは？」

優子たちの声を聞きつけたのか、奥からマナカちゃんが早歩きでやってきた。

「毎度のことながら、こんな小さな女の子に亮がパパって呼ばれるのってなんか複雑な気分だわ……」

優子はひとり溜め息をつき、額に手を当てていた。

「ゴメンねマナカちゃん。亮は用事があるみたいでまだ帰ってきていないの。だから帰ってくるまで私と遊びましょう？ 私もちよつと忙しいけど、遊ぶくらいならできると思うから」

「うん！！」

レンの提案に対して、マナカちゃんは顔いっぱい喜びを表現していた。

「ありがとう。レンちゃん」

「いえ。これくらいどうってことないですよ」

「それと私のことは、お義母さんって呼んでも全然構わないわよ？」

「えっと、話が全然見えないんですけど……」

優子の母が言う『お母さん』の発音が世間一般の言い方とは違う気がしたが、レンは気にしないことにした。

(それにしても亮ったら、一体どこで何をしているのかしら?)

「マナカちゃんを殺しにきた……だと……?」

どこにあるのかわからない教室。そんな場所に亮となじみはいた。綺麗に並んでいた机や椅子は乱雑になぎ倒され、床や壁のあちこちにはまるで大砲を打ち込まれたような窪んだ跡がある。

そんな惨状を残す床に、亮は傷だらけのまま仰向けで倒れていた。しかもその姿は胸におしゃぶりを付けた赤ん坊ではなく、以前の高校生らしい体格そのものである。

「神谷君。僕のスキル」手の平解し（ハンドレット・ガントレット）
『で一時的とはいえ元に戻った君の肉体とスキル』超・占事略決』、
それに以前僕があげた『^{ハイドアンドシーク}膝子蔵』。これらが揃っていれば戦いにおいてかなり有利になる。だからー」

なじみは一息ついて、続きをしゃべった。

「だから7932兆1354億4152万3222個の異常と49
25兆9165億2611万0643個の過負荷、^{マイナス}合わせて1京2
858兆0519億6763万3865個のスキルを持つ僕にだつ

て、ひよつとしたら勝てるかもしれないぜ。……おつと。神谷君に
ハイドアンドシーク
『膝子蔵』をあげたから、今は1京2858兆0519億6763
万3864個か。チャンスだぜ神谷君。今の君なら僕を食い止めら
れるかもね」

亮は傷ついた体に鞭打って立ち上がり、なじみを見据える。

「それよりも、いい加減聞かせてくれ。なんで……なんでマナカ
ちゃんを殺そうとするんだ!？」

「まず結論から言うね。マナカちゃんは、この世界にはならな
い人間なんだ」

対するなじみは教室の後ろにあるロッカーに腰掛けており、亮と
は対称的に無傷だった。「いてはいけないって……一体どうい
うことなんだ!？」

なじみの言葉に対して、亮は驚きを隠せなかった。対してなじみ
の方は、まるで何でもないかのように話す。「彼女ーマナカちゃ
んはただの人間じゃない。いや、この世界の人間ではないんだよ」
「……それがどうした。いいじゃねえか別に。世界が違ってても、
いちやいけない理由にはー」

「普通に別世界の人間ってだけなら、そうなるんだけどね」

亮の言葉を遮って、なじみは言葉を続ける。

「マナカちゃんはこの世界の歪みが生み出した存在なんだよ」

「歪み? 前に話してた世界の歪みってやつか?」

「そう。神谷君、君はパラレルワールドという言葉を知っているか
い?」

「そりゃあ、知ってるさ。というかそれって前も聞かなかったか?」

そう。亮は一度自分の発明品でパラレルワールドへと渡ったこと
があるのだ。

「パラレルワールドは基準とした世界から見てイフーつまりあり
得ない要素で出来ているわけだ。そしてマナカちゃんはこの世界の
歪みから生まれ、その存在自体がイフなんだ」

「……………」

存在がイフということは、その世界において自分はもともといないということになる。なじみは言わなかったが、亮はそんなことをなじみの説明から感じ取っていた。

「彼女が生まれるにあたって構成されたイフの要素は恐らく『神谷亮に娘がいたら』ってところかな」

そのイフを元にして彼女の人格が作られ、そして、記憶が作られた。なじみはそう付け加えた。それはマナカの中にある、亮と出会う前の一緒に過ごした記憶は全て存在せず、元々なかったものだということを意味していた。

(じゃあ、マナカちゃんが『いつもみたいに』とか言ってたのも、全部偽物の記憶だっていうのか……?)

「そして僕が行う矯正はその名の通り世界を『元に戻す』んだ。だから世界を矯正すれば、この世界にとって異分子であるマナカちゃんは、始めからいなかったことになる。つまり、存在そのものが――消滅する」

その言葉を聞いた亮はしばらく押し黙った後、ゆっくりと口を開いた。

「……………ぞ…るなよ……………」

「ん？」

「ふざけるなよ！ そんなの……………そんなのってねえだろ……………」

自分の存在を否定された拳げ句、消去されてしまうという結末に、亮は理不尽さを感じていた。

「それじゃあ、こっちはあらかた答えたわけだし、今度はこっちが質問させてもらおうかな」

「質問？ 俺に？」

「ああ。身体も言葉もボロボロになったことだし、君の本音で答えてくれ」

なじみは足を組み直すと、亮に対して質問を始めた。

「神谷君。君はなんとしてもマナカちゃんを僕の手から守りきりたいと考えているようだけど、自分の命を犠牲にしてまでそんなこ

とをやる必要がないとは思わないのかい？」

なじみの質問に対して亮は一瞬考え込み、その後口を開いた。

「思うな。たとえマナカちゃんを守れても俺が死んだら、彼女は絶対に笑わない。それに、自分のせいで俺を死なせたと思って彼女は自分を責めるかもしれない。それじゃあなんにもならないだろうが！」

「……………」

なじみは何も言わず、亮の本音こたえ聞いている。

「だから、俺は何があっても死なないし、マナカちゃんも守りきる！」

「……………そつか。ならー」

安心院さんは小さく呟くと、いきなり亮を床に組み伏せた。

「かは……………っ!!」

背中から床に打ちつけられて思わず息を吐き出した亮の喉元に自分の爪を突きつけた。それもただの爪ではない。一本一本が30？近くまで伸びていた。なじみはその気になれば、あっという間に亮の喉を切り裂けるだろう。

「なら、これでも同じことが言えるかい？」

「……………何が言いたいんだ？」

亮は表情を変えず、なじみを睨み付ける。

「とぼけても無駄だよ神谷君。君なら僕が何を言いたいのかもわかっているはずだよ」

「……………」

亮は何も言わず、ただ睨み続ける。内にある感情を出さないために。

そしてなじみが口に出さずとも、亮には彼女の言いたいことが充分伝わっていた。

「ここでもまだ同じことを言うようならば、君をこのまま殺す、と。だから亮は、

「……………当たり前だ。偽りだろうがなんだろうが、マナカちゃん

は俺の家族だ。だから彼女を死なずに守る！」

なじみは亮の言葉を聞いて眼を見た後、フツと笑みを浮かべる。そして亮の喉元から爪を離し、元の長さまで引っ込めた。

「わかったよ」

「へ？ わかったって、何が？」

「マナカちゃんは殺さないってことだよ」

「えっと……あれ？ さっきマナカちゃんを殺しにきたとか言わなかったか？」

亮は未だに疑問符を浮かべている。

「いざという時はそうするつもりだった。でも君の反応で、その必要はなくなった」

「俺の反応？」

「ああ。君は死に対する恐怖を抱きながらも、自分の思いを貫いていた」

「そりゃ、どうやってもやりたいことがあったって、誰だって死ぬのは怖いさ」

さも当たり前のように言った亮に、なじみは再び笑みを浮かべた。「もし君が死すら恐れず、自分の考えだけは絶対に信じる人物だったら、僕はマナカちゃんだけでなく、君をも殺すしか打つ手がなかった。けれど安心したよ。どうやら君はそうじゃなさそうだ」

なじみが亮を圧倒して、その上で殺そうと見せかけたのも、マナカを殺すと亮に宣言したのも全部、亮がどのような思いで自分に向かってくるのかを見るためだったのだ。

「好死は悪生に如かず。死を美徳化したり軽んじて考えたりするところが、生に対する最大の冒涇だと僕は考えている」

「まあ生きてりゃなんとかなるのに、死んじまったらそれまでだからな」

「その通り。だから神谷君。君が死んでしまったら、君を思っているお嬢さんが確実に不幸になる。それだけは忘れないで欲しい」

（俺を思っているお嬢さん？ それってもしかしてマナカちゃんの

ことか？ それともまさか、ついに俺にも春が！？ あゝ……でも
そうだったらFFF団が黙っちゃいないだろうな……」

「えっと……続けていいかい？」

一喜一憂した表情を浮かべて考えごとをしている亮を見て、なじみは呆れを含めて笑っていた。

「それで、結局マナカちゃんをどうする気なんだ？」

「彼女を僕のスキルで悪平等はくにする。世界の歪みの集合体でなければ、彼女を消去する必要もないしね。それで、彼女は僕が引き取ることにするよ」

今の君だと育てるのは色々大変だろう、となじみは付け加えた。

「そうなるにあんまり会えなくなるのか。寂しいけど、仕方ないか。お願いするぜ、安心院さん」

「わかった」

「とりあえず、その辺をマナカちゃんに聞いてみるとするか。ちょっと行ってくる」

「それじゃあ、僕は表で待ってるからね」

亮は教室のドアを開け、マナカがいる木下家へと向かった。

「ただいま」

「あ、おかえり亮。随分と遅かったのね」

木下家の玄関に入ると、奥から優子が出迎えてくれた。ちなみに、俺の身体はまた赤ん坊に戻っていた。

「いや、色々と寄るところがあったから。それより、マナカちゃん
っているか？」

「リビングにいるわよ」

優子に連れられてリビングに向かうと、レンと遊んでいるマナカ
ちゃんが見えた。

「あ。パパ、おかえり〜」

こっちにトテトテと歩いてくるマナカちゃんをリビングの外に連
れ出し、俺はマナカちゃんの眼を見つめた。

「マナカちゃん。今からすごく大事な話がある。聞いてくれ」

安心院さんやマナカちゃんの本当の正体を隠し、後は本当のこと
を話した。

マナカちゃんが遠くへ行ってしまうこと。そして、今みたいにい
つでも会えるわけではなくってしまうこと。それを聞いたマナ
カちゃんは、何かを考えるような仕草をとった。やっぱり、急にこ
んな話をされても困るよな。

そんなことを考えていると、マナカちゃんはいつも通りの笑顔を
浮かべた。

「パパともうあえなくなるわけじゃないなら、それでいいよ」

マナカちゃんの答えに、俺は思わず目を丸くしてしまう。

「本当に、本当にいいのか？」

「うん。だって、パパのことをしんじてるもん。わたしはだいじょ
うぶだよ」

なんか、ある意味達観してるな。とても小さな子供の答えとは思
えない。

俺とマナカちゃんは玄関の外に出ると、そこには安心院さんがい
た。

「いいんだね、マナカちゃん」

「うん。そのかわり、またパパと遊ばせてね」

「わかったよ。それじゃあ、眼を閉じて」

安心院さんは眼を閉じたマナカちゃんの胸に手を当てる。何も起

きないまま数秒後、安心院さんは手を離した。

「神谷君。これで、マナカちゃんは消えずにすむよ」

「……本当なんだな？」

安心院さんの言葉に、俺は念を押しして尋ねる。ここで実は殺さなくちゃいけないとかなったらたまったもんじゃない。それに、マナカちゃんの思いをふいにさせるようなことは、俺が絶対にさせない。

「大丈夫だよ神谷君。マナカちゃんは、僕が責任を持って預かるよ」
「パパ。またあそぼうね」

マナカちゃんは俺の方を向いて、ニツコリと微笑んでいる。

今マナカちゃんがどんな気持ちを胸にしているのか。それは俺にはわからない。

もしかして、やっぱり少し怖いのかも知れない。でも、笑顔でいてくれる。それだけで俺は嬉しかった。

だから俺も、マナカちゃんに笑顔で返した。

「ああ。また、たくさん遊ぼうな」

第七十九問・亮とかアブラゼミとかツクツクボウシとかなく頃に

「よし。準備できた」

とある真夏の日の夜。亮は家でこっそり荷物をまとめていた。

『（本当に、もう思い残すことはないのね？）』

「（ああ。これでいいんだ）」

『（……そう。アンタがそう言うなら、私もそうするまでよ）』

「（……ありがとう。レン）」

亮は決意を固め、立ち上がった。

「それじゃあ行くか」

荷物を持って玄関に向かい、外へ出ようとドアに手をかける。

「亮君。やっぱり行くんだね？」

「姉貴……」

荷造りの時の物音に気づいたのが、亮の姉である美希が玄関にやつてきた。

「姉貴。行ってくる」

「亮君。気をつけてね」

「ああ！」

亮はそのまま玄関のドアを開け、外に飛び出した。

そして夜の道を歩いていると、

「あれ？ 亮？」

後ろから優子に声をかけられた。ちなみにここは木下家の真ん前だから、優子が亮を見つけるのも難しいことではなかった。

「優子。悪いな。俺にはもう思い残すことはない」

「そう。アンタのことだから、じっとしていることはないとは思ってから別に止めはしないけどさ」

優子は溜め息混じりに話す。

「悪いな。それじゃあ、行ってくる」

このまま見送ったら、亮は自分の手が届かない場所に行ってしまう

うのではないか。もしかしたら壮絶な何かに巻き込まれているのかもしれない。何故か優子の中にそんな思いが溢れてきた。

「けど、今度はアタシも一緒だから」

だから、優子は亮の手をとった。亮を一人で危険な場所へ向かわせないために。

（もしも命に関わるような危険な闘いだったら誰にも相談もせず一人で行くなんて、そんなのアタシが許さない）

「優子……。本当にいいのか？ 過酷な闘いになるぞ」

「当たり前でしょ。アタシを誰だと思ってるのよ」

亮の問いかけに対して、優子は自信満々の笑顔を見せた。

「そっか。んじゃ、行くか」

優子に準備を整えさせ、亮は向かった。

「……へ？ 亮？ 何でこんなところに？」

「――最寄りの駅前にあるバスターミナルへと。」

「レッツゴー！」

「え！？ ちょっと！」

戸惑う優子を連れて、亮はバスへ乗り込む。

深夜発のバスに乗り、都心で始発に乗り換え、向かった先は――

「何で東京ビックリサイトなのよ!？」

多くの人だかりが出来ている公共施設だった。

「いや、やっぱりここに来ないと夏と冬って感じがしないな」

「……で、何で私たちはこんな所にいるのかしら？」

「……その意味を知るため？」

「何で疑問系なのよ……。というか、そんな哲学的な答えを求めてないわよ」

「亮と説明を代わるわ。ここはコミックフェスティバル、通称コミフェ。同人誌即売会よ」

「同人誌即売会？」

コミフェには、のべ数十万人の人たちが訪れる。同人誌の他にも同人グッズを売買する人たちもいる、世界最大の同人誌即売会である。

「亮がサークル参加することになったんだけど、サークルのメンバーが直前に体調を崩しちゃってね。亮一人で参加しようとしてたのよ」

「それじゃあ、思い残すことはないっていうのは、」

「亮が『島田を連れていって売り子をやってもらいたい』って駄々をこねちゃってね。昨晚やっと吹っ切れたって感じだったのよ」

「へ、へえ……。何で島田さんを？」

「アイツの声がアニメの『魔法少女マジカル マギカ』に出てくる友野マイに凄く似てるからさ。コスプレ姿で『貴方の心にアルテマ・シヨット』っていう風に売り子をやって欲しかったんだけど……。コミフェは凄く過酷だから、無理だったんだ」

亮は心底悲しみにくれており、今にも泣きそうだった。

ちなみに魔法少女マジカル マギカとは、現在放送中の人気オ리지ナルアニメである。原作となる漫画や小説がない故に内容をあらかじめ知っているということがなく、それでいて斬新な展開が多いので、毎週の放送が衝撃の連続なのである。

「で、アタシならいいってわけ？」

「いや、お前がついてくるって言うからだろ？」

「今回は別にいいけど、そういうことは事前に言いなさいよ……」

呆れた様子の優子の前へ、亮が一枚チケットを差し出した。

「何これ？」

「サークルチケットだ。これがないと入場するために炎天下で何時間も待たなきゃいけないからな。俺たちはさっさと行こうぜ。はぐれんなよ優子」

亮は優子の手を引いて入り口へと向かう。

(りよ、亮ったら、いきなり手を握るなんて、は、反則でしょ！)

入場口へ向かう優子の顔は、日光に当てられたわけでもないのに真っ赤になっていた。

「これ、本当に亮が描いたり作ったりしたの？」

「ええ。これ全部亮の自作よ」

優子の目の前には『魔法少女マジカル マギカ』の同人誌やポスター、キャラクターがプリントされたトートバッグが置いてあった。

「そっいえば亮って、手先が凄く器用だったわね。それで、この格好は一体何なの？」

「亮が言うには優子のコスプレが友野マヤで私のが池田京子……だったかしら？」

優子は黄色と白をベースとしたコスチュームを、レンは紫と青でカラーリングされたコスチュームを着ていた。二人は更衣室でコスプレを着たあと、コミフェの準備を終えて椅子に座っていた。

ちなみに亮は準備を終えると早々にレンと替わった。亮曰わく、午後には別のコスプレを着て、レンと交代することになっている。

「まさか、この衣装も亮の自作？」
「そうよ。アイツは無駄にハイスペックだからね」
「何でそれを、もっとマシなことに使えないのかしらね……?」
「優子。せっかくのコミフェなんだし、見たいところを色々と回ってきたら? 私が売り子をやってるから」
「……え?」

(へえ)。こういうところに来たのは初めてだけど、意外と女性の人たちも多いのね)

レンの言葉に甘え、優子はコミフェの会場内を回っていた。

そんな中、優子の目にとある同人誌が止まった。(こ、これって

…… 『伝説の木の下で貴様を待つ』 だわ! しかも、シンジとユウイチのカップリングだなんて…… って、こっちにも!)

普段はネットでこういった物を購入している優子は、直接コミフェのようなイベントに来るのは初めてである。それ故にやたらとテンションが高くなる優子であった。

「ところで優子。本当に午後から見ても回らなくていいのか？」

「うえっ!?! さ、さっきこの格好で回ってたら注目を浴びて恥ずかしかったのよ! そうよ、そうなのよ! それ以外に理由はないわ!」

「そ、そうか……」

お昼も過ぎて午後になったので俺はレンと交代して売り子をやっている。

ちなみに今の俺は黄緑色の球体から丸っこい手足が生え、黒いサングラスをかけたコスプレを着ている。これは『魔法少女マジカルマギカ』に出てくる主人公『池田京子』の宿敵でありライバルの『友野マヤ』と一緒にいる『ザンボー』というマスコットキャラクターである。

「それにしても、やっぱり恥ずかしいのか? すっげー似合ってる可愛いのかな?」

「ええっ!?!」

サイズもピッタリだし、良い感じに決まっているのにーっっておい!?!

「大丈夫か優子?」

「え、ええ……。大丈夫よ……」 優子は椅子ごと後ろに倒れそうになっていた。どうやら驚きのあまりそうなったみたいだが、そんなに意外だったのか?

「あ、あの〜」

ふと前を見ると、中学生ぐらいの女の子が立っていた。もしかしてお客さんか?

「新刊一部とグッズセットください」

「はい。合わせて1500円になります」

ポスターと同人誌をトートバッグに入れて女の子に渡し、500

円玉を3枚受け取った。

「あ、あの……もしかしてキーマ鳳凰堂ですか？」

「キーマ鳳凰堂？」

その言葉に優子は首を傾げていた。そういえば言っていなかったわけ。

「ええ。キーマ鳳凰堂は俺ですよ」

その言葉を聞いた女の子の目の輝きが増した。

「私、京極ナム子っていいいます。キーマさんの本を見たら、『私もこんな物語を描きたい』っていう思いが溢れて、それで同人活動を始めました！」

「うわ〜嬉しいな。ありがとう！」

興奮気味のナム子さんから名刺を受け取ると、ナム子さんがそのまま俺の手を握ってきた。なんていうか、こういうことを言っているって、描き手冥利に尽きるな。

「この間の、京子とマヤがザンボーでPK対決をする話は大いに笑わせていただきました！マジカル マギカ27話の舞台裏で、本当にあの話が展開されていたみたいに自然な内容でしたし、何よりも絵が凄くうまかったです！」

「ありがとう。いや〜、あれは27話を見た後すぐに描いたんだ。なんていうかこう、ズバーンと稲妻が落ちてきたみたいに俺の中でアイデアが溢れて〜」

ナム子さんとひとしきり熱い言葉を交わした後で椅子に座ると、横から優子がジト目でこっちを見ていた。

「……それで、キーマ鳳凰堂っていうのはもしかして、アンタのペンネームか何かなの？」

「おう。そうだよ」

「というか、初参加じゃないみたいね」

「サークル参加はこれで3回目だな」

「ふ〜ん……」

何故か優子はご機嫌ナナメのようだった。あの、優子さん。俺が

何をしたと？

「ん〜、優子もレンもお疲れ様」

日も沈みかけの時間。コミフェは無事終了し、俺たちは帰宅の準備を進めていた。

ちなみに同人誌、グッズ共に完売。いや〜本当にありがたい。これも優子やレンが手伝ってくれたおかげだな。

あ、そうだ。これだけは忘れないうちにやっとかかないとな。

「優子。ほいこれ」

「え？ これって……アンタの同人誌は完売したんじゃないの？」

そう。優子に渡したのは、俺が描いた同人誌だった。

「今日のお礼にと思って、一冊とっておいたんだ。会心の出来だから、是非家で読んでくれよな」

「う、うん。ありがとう」

俺から同人誌を受け取った優子は顔も真っ赤で声もボソボソとしか出ておらず、いつもと比べて様子がおかしかった。

やっぱり、言うしかないか。

「優子。俺、お前に伝えたいことがあるんだ！」

「ええ！？ 今！？」

「ああ。前々から思っていたことを、俺から言わせてくれ！」

「そ、そんな急に言われても」

ますます優子の顔が朱くなる。やっぱりか。俺の考えは外れていなかった。

「優子。もしかしてお前――」

「そんな、急に言われても――」

「――お前、暑さに弱いんじゃないのか？」

「……………へ？」

始めは呆然としていた優子だが、段々ワナワナと身体を震わせてきた。やっぱり具合が悪いみたいだ。

「ほら。今も顔が真っ赤で様子がおかしいし、そもそも入場する前も顔を朱くしてただろ？だから暑さに弱いと腕の関節があああ――」

「っ――」

「いちいち紛らわしいことを言うんじゃないのよこのバカアアアアッ――」

結論。優子はいつも通りだった。

第八十問・コケシが舞ったり赤ベコが飛んだりシヤケが落ちてきたりしない方の

「あ……。疲れた」

木下家にお世話になることとなった翌日。突如レンと謎の分離を遂げて赤ん坊みたいな身体になった俺は、次の日の学校に備えてサイズが合った制服を自分で仕立てていた。

現在は制服を仕立て終えて、木下家へと戻っている最中だ。

「しかし、思ったよりも早く終わったな」

本当は日が沈むぐらいまでかかるものだと思っていたが、予定よりも早く作業が終わってしまった。その証拠に、高くはないものの太陽がまだ地上を照らしている。

「ただいま」

「あら亮。おかえり」

玄関からリビングに入ると、優子が一人でテレビゲームをしており、他には誰もいなかった。しかし、優子もゲームとかするんだな。

「あれ？ 他の皆は？」

「秀吉は部活で学校に、母さんとレンは買い物でショッピングモールに行ってるわ」

なるほどな。どうりで優子しかないはずだ。

「ところで、何のゲームをやってるんだ？」

「カスタマイズロボットX2よ」

「へえ。お前も持ってるんだ」

カスタマイズロボットとは対戦格闘ゲームの一つである。自分が操作するロボット、そしてそのロボットに装備するガンやボムやビュットを数十種類ある中から一つずつ選んでカスタマイズして、相手と対戦する、というゲームなのだ。

「あら。亮もコレ持ってるの？」

「ああ。そうだよ」

かく言う俺も始めは持っていなかったけれど明久の熱心な勧めも

あつて、気が付けばゲーム機ごと買っていた。

「へえ。そうなんだ」

俺の言葉を聞いた優子が自信のありそうな表情に変わった。

「じゃあ、対戦してみない？」

「いいけど、やるからには負けるつもりはないぜ」

ゲーム機本体にコントローラーをもう一つ差し込み、対戦モードを選択する。

「お前の装備はもしや、改造パーツ満載のXバトラーとか？」

「そんなわけではないですよ」

俺の問いかけに対して、優子はさも当然のように返した。

補足をすると、このカスタマイズロボットには大きく分けて通常の装備の他にもう一つ装備が存在する。それが通常の装備の性能を格段に上げた改造パーツであり、火力、使いやすさ共に通常パーツを軽く上回る。

そしてXバトラーというのは装備と同じく改造が施された唯一のロボットのことで、攻撃力・防御力・機動力全てが他のロボットの比にならないほど強い。「じゃあ、改造パーツは無しでいいか？」

「いいも何も、こつちもそのつもりよ」

優子も同意見ということ、どちらも改造パーツ無しの通常機体で勝負することになった。

ステージを選択し、対戦画面にカウントダウンが表示される。

そして、対戦が始まった。

ジャンプや空中ダッシュからのサブウェポンであるボムやビットを主な攻撃とする俺に対し、優子はメインウェポンであるガンをひたすら撃ちまくっている。

「ちよつと！ 何で当たらないのよ！？」

「お前のそれ、隙デカ過ぎなんだよ」

優子のガンは遠距離射撃に長けているのだが、その分隙が大きい。だからボムやビットで相手の動きを止めてから使うものなのだが、優子はそれらをほとんど使っていなかったのだ。

「あれ！？ 動けないんだけど」
「そういうボムなんだよコレは」
優子が操るロボットの動きを止め、その隙にガンを打ち込み、体力が0になる。
画面には1-0の数字が表示された。
「亮。もう一回よ」
「おう。かかって来い！」

「あゝ。優子さん？」
「何？」

「……そろそろ休憩しないか？」
「まだまだよ！」

優子とゲームを始めてから早三時間。戦績が表示されている画面には72-0の数字があった。ちなみに俺の全戦全勝である。

「亮！ もう一回よ！」
「はいはい」

優子が負けず嫌いなのは知ってるけど、まさかここまでのものとは思わなかったな。

「次こそは体力を三分の一以上減らしてやるわ！」
「それ、目的違ってないか？」
そして再び対戦が開始される。

優子の方を見ると、表情が真剣そのもの——ってちょっと待て！

優子のヤツ、対戦に夢中になって胸元とかが無防備になってるじやねえか！

……あと少しで、見えるんじゃーってそうじゃない！ 自分の中に潜みし邪念を追い払え！

臨兵闘者皆陣前列在。カラリンチヨワカカラリンチヨワカ。落ちて着け落ち着けー

「きゃああああっ！ やった、勝ったあああっ！！」

「むぐおっ！？」

突然優子が俺を抱きしめていた。な、何事！？

「やっと一勝をもぎ取ったわよ！」

テレビ画面を見ると俺のロボットがダウンしており、戦績が72-1となっていた。というか、さっきから呼吸が……。

「ゆ、優子。そろそろ放してくれ。マジ、で、苦しいから……」

「え？ あ、うん。ゴメン」

優子に解放され、俺はやっと呼吸ができるようになった。

とりあえず優子が一勝したということで、ゲーム機の電源を切る。ゲームは一旦お開きとすることにした。またやるかどうかはわからないけど。

それにしても、制服を仕立てたり長時間ぶっ続けてゲームをプレイしたりしてたから、なんか凄く疲れてきた。

「ちょっと亮。アンタ大丈夫？ 凄く眠そうだけど」

「実は結構眠いかも」

「それならソファァーで寝たら？ タオルケット持ってきてあげるから」

「おう。ありがとな」

優子のお言葉に甘え、俺はソファァーで仮眠をとることにした。

「さてと」

一旦リビングを出た優子は、亮にかけるタオルケットを持ってきた。

「これでよし」

そしてそのタオルケットをぐっすり寝ている亮の身体にかけた。

「また暇になっちゃったわね」

予習復習も課題も全て終わらせてあり、更にまだ誰も帰ってきていないので、今の優子は手持ち無沙汰になっていた。

「あ。そうだ」

何かを思いついた優子は、再びリビングから出ていった。

「ん……？」

目を覚まして時計を見ると、寝てからまだ二十分ぐらいしか経っていないかった。

「このタオル……優子がかけてくれたのか？」

寝る直前は寝ぼけていて何を話していたかよくわからんが、おそらく優子はそんなことを言っていたんだろう。

「……………」
ふと顔に手の甲を当てると、ほんの少しその場所が湿っていた。
どうやら寝汗をかいてしまったようだ。

「……………シャワー、浴びるか」
「どうやら優子がかけてくれたのはバスタオルだったようなので、俺はそれを手にして浴室に向かう。」

ちなみに赤ん坊みたいな身体なのにどうしてドアを開けられるのかというと、制服と一緒にさっき完成させたお手製のマジックハンドを使ってドアを開けているからである。

そしてそのマジックハンドを使って浴室のドアを開けると、

「……………は？」

「……………え？」

女子のーというか、優子の裸があつた。身体が濡れているのを見ると、どうやら入浴は既に済ませたようだ。

あまりの事態に俺も優子も固まって動けずにいた。

「な、何で亮はここにいるの……………？」

「いや、俺は、寝汗をかいたからシャワーでも浴びようかと思って優子は？」

「ア、アタシはまだ誰も帰ってきてないから、先にお風呂に入っちゃおうと思っただけ」

そう言う優子は濡れた頭を両手で拭いており、その上こつちを向いているためか、本来なら隠すべき場所が全く隠せていなかった。更に、俺が優子を見上げている形になっているから、ガチで見えてはいけない部分もくつきりはつきりと俺の眼に映っているのだ。

水を弾く十代特有の瑞々しい肌。

本人にしてみれば不満があるであろう、ささやかな胸の膨らみ。

さらに、同世代の女子から見れば充分スレンダーなウエスト。

そしてー

「……………ゴフッ！」

「ちよっと亮！ 何で鼻血と一緒に吐血までしてるのよ!？」

ああ。コレが、夢見心地というものののだろうか。
そんなことを思いながら、俺は意識を手放した。

「……………ん……………」

ピチャ……………ピチャ……………という、布を水に浸ける音と共に、俺は目を覚ました。

「あれ？ ここは？」

「ここはリビングよ。アンタが倒れちゃったから、ここまで連れてきたのよ」

さっきの出来事もあってか、そこには顔どころか全身を真っ赤にした優子がいた。

「あとねえ……………アンタ、せめてノックくらいしたらどうなのよ？」

はい。全くもってその通りです。それに関しては、言い返す余地もございません。

「ゆ、優子？」

「フン！」

ダメだ。取り付く島もない。

あゝあ。ヤケで一気に飲みまで始めやがった。優子が手に持っている缶には、オレンジの文字があった。

この状況を打破するには、これしかない。

「優子。こうなったら俺が責任を取って身体でー」

「えっ!?!」

「ーじゃなかった、腕に寄りをかけて夕飯を作らせてくれ！」

「……………え？」

危ねえ。もう少しで『身体で夕飯を作らせてくれ』っていうところだった。

せつかく優子に国語を教わったというのに、本人を目の前にして間違えたらたまったもんじゃない。

冷蔵庫には何があったかな？ 優子のリクエスト次第だと、買い物に行く必要があるそうだ。でも、これで優子も機嫌を直してくれるはずだ。

「コミフェの時といい、今回といい、どうしてこうアンタはいつもいつも……………」

だというのに、優子の機嫌が直る気配が全くない。それどころか、余計悪化している気がする。

ヤバい。昔婆ちゃんが言っていた『女の子は物と飯で釣るな』っていうのは、もしかしてこのことだったのか？

「こうなったら、土下座でも何でもするから！」

「……………本当？」

「ん？」

「何でもするって、本当？」

うん。これはもう、完全に墓穴を掘ったな。人間、迂闊なことを言うものじゃない。

「それじゃ、さ」

「お、おう」

審判の時を待つ間の沈黙が、この上なく長く感じる。

そして優子はオレンジジュースの缶をテーブルに置き、ついに口を開いた。

「……………キス、しよつか」

「ほほう？ そう来るか。よききたーっておあい！？」

何でそうなる！？ 一体どういうことなんだ！？ 説明できる人がいたら、レポート用紙三枚以内でまとめてくれ。早急に。じゃな

いと嫌な予感がする。

「いや、さすがにそれは」

「アンタさつき、何でもするって言ったじゃない」

「それはそうだけどさ」

「つべこべ言わない」

気が付くと、優子に組み伏せられていた。コイツ、なんかいつも以上に動きが俊敏じゃないか？

ふと優子を見ると、顔だけでなく首筋まで真っ赤になっていた。

優子がテーブルに置いた缶のラベルをよく見てみる。……やっぱりか。

「優子。お前、何飲んだんだ？」

「へ？ オレンジジュースだけど？」

「バカ野郎！ オレンジはオレンジでもお前が飲んだのはカシスオレンジだ！」

「え〜？ どっちも変わらないでしょ？」

もうダメだ。優子のヤツ、完全に酔っ払ってやがる。

「くっ……！ 何とかして抜け出さないと」

「何言ってるのよ。ほら、キスしなさい」

「ちよ、待て、優子ー」

「……………アンタたち、一体何やってるのよ」

突如ドアが開き、その向こうからレンが呆れた様子でこっちを見ていた。

「どうしたのじゃレンよーって亮に姉上！？ 一体何があったのじゃー！？」

「秀吉も帰ってきたか。ちょうど良かった。優子を引き剥がすのを手伝ってー」

「二人とも。そんな所に立ってどうしたのーあら？」

更には優子たちのお母さんも帰ってきた。三人増えれば、優子を何とかできるはずだ。

そう思っていると、笑顔のままの優子たちのお母さんが口を開い

た。

「神谷君に優子」

「はい？」

「何？」

「いけそうならここでいっちゃってもオツケーよ」

いきなりなんてことを言い出すんだこの人は！？」

「は〜い」

「優子も了承すんなよ！？ それよりも……ってどこ行くんですか！？」

「二人の邪魔しちゃ悪いし、レンちゃんに秀吉。私たちは外で食べよっか」

「そうですね」

「そうじゃな」

「二人とも、何が食べたい？」

「そうじゃのう……レンは決まったかの？」

「それじゃあ、たまには洋食でも」

「異存はないぞい」

「じゃあ決まりね」

「ちよつと！？ この状況で俺を放置しないで下さい！ 俺も連れてって！ って誰か、助けー」

俺の眼が届くうちは、二度と優子に酒は飲ませないでおこう。

絶体絶命の状況にありながら、俺はそう心に固く誓った。

第八十一問・良い子はお店にたくあんやぶ漬けやはり漬けを持ち込んだ

文月学園サーバルーム。

普段は学園長といった特別な役割の人物しか入れない場所に、一人の人物がいた。

「……………」

その人物は一本のUSBを取り出すと、それをコンピューターの差し込み口に差し込む。そして画面に表示されるプログラムに従ってキーボードを叩きながら、次々にウィンドウを開いていく。

その中のパスワードの入力画面にパスワードを入力してエンターキーを押した瞬間、けたたましい警報が鳴り響いた。

「……………っ！」

その音を聞いた謎の人はUSBを抜き取り、コードにつまづきながらも急いでその場を後にした。

「ねえ雄二」

「どうした、明久」

「こんなの、もう無理だよ。怖いよ」

「大丈夫だ。俺がついてる。もっと力を抜け」

「雄二……………」

「それじゃあ、もう一回いくぞ」

「まったく。相変わらずベッドの上でも強引なんだから……」

「ダメダメダメですっ！ 不健全過ぎますっ！」

「そうよっ！ もしアキと坂本が本当にそんな関係になったらどうするのよ！」

「絶対じゃない！！」

Cクラスとの試召戦争から数日。放課後のFクラスの教室で明久たちは亮の同人誌のネームを見ていた。

「亮よ、次のコミフェは本当にそのネームでいくのなの？」

「……… 確実に売れ残る」

「いや、さすがに登場人物は替えるぞ？ 次もマジカル マギカの同人誌を描く予定だから。今回出来上がったのはあくまで話の骨組みだし」

「というか次も参加するのね……」

「そんな雑談を交わしていると、」

「アンタたち、ちよっといいかい？」

「学園長？」

「ババアか。一体何の用だ？」

いつもと違い真剣な面持ちの学園長が立っていた。

「話があるさね。ちよいとー」

学園長の言葉を遮るように突如召喚フィールドが展開された。そしてそれに続いて次々と召喚獣が出現した。

「何だかよくわからんが、試獣召喚ーってアレ？」

亮が召喚獣を呼び出そうとしたが、召喚獣が出てくることはなかった。

「学園長！？ コレはどういうことなんですか！？」

「詳しい話は後だよ。ひとまずアタシの部屋に避難するよ！」

召喚獣が出現している間に、明久たちは学園長室へと向かった。

「それで学園長、これは一体どういうことなの？」

学園長室に無事避難した後、レンが話を切り出した。

「昨日、文月学園のサーバールームに侵入者が確認された」

「侵入者、ですか？」

「ああ。プログラムのレベルの高さから見るとはおそらく個人のイタズラじゃなくて何かの集団レベルの仕業だろう。例えば、文月学園を敵視している企業とか、ね」

文月学園は他と比べて召喚獣を始めとした特異な点が多い教育機関である。それ故にスポンサーがついたりするのだが、その分敵視する人たちも大勢いる。実際に清涼祭では後者の立場で教頭であった竹原が暗躍していたのであった。

「それで、どういう異常が発生しているんです？」

「端的に言えば、召喚獣のシステムがハッキングを受けていて教師は召喚獣自体が出現しない。アンタたち生徒は召喚獣の制御が利かないっていう状態さね。ただしー」

学園長は明久を指差しながら言った。

「吉井だけは別さね」

「へ？ 僕ですか？」

ただし当の本人は状況が飲み込めずにいた。

「ああ。アンタは観察処分者だから教師とも他の生徒とも召喚獣の仕様が違うのさ」

「だがババア。さっき召喚獣のシステムがハッキングされてるって言わなかったか？」

「確かに教師や他の生徒の召喚獣のシステムはハッキングを受けているが、観察処分者の召喚獣に関するシステムはそれらと別の場所にあったのさ。それでそこだけは何故かハッキングを受けていなかった。おそらくその領域に侵入する前に、セキュリティに引っかかったんだろうね」

「つまり、今召喚獣を使えるのはこの中でアキだけってことですね」「ああ。そういうことさ」

美波の質問に学園長は首を縦に振った。

「サーバルームに行けばハッキングの問題は解決できるだろうけど、どこかの配線が抜けたのか扉がロックされたまま応答しなくて外から入ることはできないんだ」

「それじゃあ、どうやってサーバルームに行くんですか？」

「扉の横にある通風口を使うさね」

サーバルームの扉の横に、換気を兼ねた通風口がある。人間では通ることはできそうにないが、召喚獣となれば通れる程の大きさだね。

学園長はそう付け加えた。

「それで吉井、やってくれるかい？」

「はい。わかりました」

「……………明久。これを持って行け」

ムッツリーニが明久に小さな機会を渡した。

「ムッツリーニ。コレって？」

「……………小型カメラ」

ムツツリー二が明久に渡したのは、サーバールームに入る際に召喚獣の頭部に装着できそうな小型カメラだった。

「ムツツリー二よ。どうしてお主はそんなものを学校に持ってきておるのじゃ？」

秀吉の発した言葉を皮切りにその場に沈黙が生じる。

「……………ムツツリー二は何も悪くないんだよ！」

そして明久の弁護がむなしく響いた。彼もまた、ムツツリ商会の常連なのである。

「よし。試獣召喚っ！」

明久が召喚獣を喚び出すと、改造学ランに木刀を装備したいつも通りの召喚獣が出現した。

「それで明久。操作はどうじゃ？ 制御できとるかの？」

「大丈夫だよ秀吉。いつもみたいに動かせるよ」

本人の言うように明久の召喚獣は特に怪しい動きを見せる様子もなく、きちんと制御することが可能であった。

「それじゃあ、いざ、サーバールームへ！」

明久が勢いよく学園長室の扉を開ける。するとそこには――

「……………へ？」

明久に対して臨戦態勢をとっている数多くの召喚獣がいた。

「よし！ 行くぞおおおおっ！！！」

明久は自らを奮い立たたせるために雄叫びを上げて召喚獣を敵の大群へと突っ込ませた。

第八十二問・神谷君は無口

問 次の問いに答えなさい。

『日本で採用されている気象庁風力階級（ボート風力階級）において、風力0とは風速何メートル以下を指すか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『風速0・2メートル以下』

教師のコメント

正解です。風力は航海などでよく使われる速さの単位『ノット』で表すと0ノットとなります。ちなみに風力0は陸上の様子は『煙がまつすぐ昇る』、海上の様子は『水面は鏡のように穏やか』となっています。他にもボート風力階級の中には暴風や強風といったお馴染みの単語から疾風しゅうふうや颯風さつふうといった珍しい単語もあるので、興味があれば一度目を通してみるとよいでしょう。

吉井明久の答え

『風速0メートル』

教師のコメント

風力は0であっても風速が0メートルというわけではありません。引っかけやすいので気をつけましょう。

神谷亮の答え

『人が吹き飛ばさない』

教師のコメント

風力1でも台風レベルになってしまいますよ。

土屋康太の答え

『スカートが捲り上がらない』

教師のコメント

スカートで判断しないで下さい。

「ああ。やっぱり、今回もダメだったよ。アイツは話を聞かないからな」

「いやいや亮！ 何変なこと言ってるのさー！」

「やっぱりこうなったかい」

「学園長。やっぱりって何ですかやっぱりって！？ これじゃあ僕はただの殴られ損じゃないですか！？」

学園長室から飛び出した明久は即効で返り討ちに遭い、再び学園長室に運び込まれていた。

ちなみに現在の学園長室はプログラムで守られているのでまだ召喚フィールドは展開されていないが、そのプログラムがハッキング

されてしまうのは時間の問題である。

「しかしババア、あんなに召喚獣がいるとなると、どうやってサーバルームまで突入するんだ？」

「……………突破は困難」

「仕方ない。これを使うさね」

学園長が机の引き出しから取り出したのは、人間の手首にちょうどはまりそうな真つ黒の腕輪だった。

「ババア、これは何だ？」

「黒金の腕輪。坂本の白金の腕輪と対をなす腕輪さね」

「黒金の腕輪……………ですか？」

「ああ。来年の清涼祭に行われる召喚獣トーナメントの商品にと考えているものさ」

「それで、どういう代物なんだ？」

早く説明してくれ、と亮が口を開いた。

「これは召喚ワールドの科目の種類に関わらず、所有者の任意の科目の点数で召喚が可能ってことさ。更に、腕輪の能力による点数の消費を無くすことができる」

「へえ。そいつは便利そうだな」

「また面白いもんを作ったなあババア」

雄二や亮が感心を寄せる中、

「えっと……………後半はわかるけど、前半はどういうこと？」

明久は首を傾げていた。

「いい、アキ？　つまりこの腕輪は、召喚ワールドさえあれば自分の得意な科目の点数で戦えるってことなのよ」

「ああ！　そっか」

明久は美波の説明を聞いてようやく納得したようだ。

つまりこの腕輪の能力があれば、自分の苦手な科目の召喚ワールドしかなかったとしても充分戦えるということだ。

古典が苦手な亮や美波の場合は亮なら化学を、美波なら数学の点数で戦えるということだ。

そしてムツツリー二に至っては、どんな科目の召喚フィールドであつても常に保健体育の点数を用いて戦うことができるのである。「ところで学園長先生。この腕輪だと本当に召喚獣を喚び出せるんですか？」

ふと、瑞希が手を挙げてそんなことを呟いた。

「ああ。この腕輪は召喚フィールドさえあれば、その影響を受けずに召喚獣を喚び出すことが可能なのさ」

元々この腕輪はこういう非常事態を想定して開発されている腕輪なのである。

もつとも、まだ開発段階の途中なのだが。

「それで、誰がやるんだ？ 話を聞く限り一人だけしかできないようだが、そうなるとはつきり言つてかなり厳しいぞ」

雄二が言うように、この腕輪は所有者一人しか使用できないのが問題である。

だから明久を一人でサーバールームまで送り届けた後、場合によつてはその場で他の召喚獣たちを足止めしたり、サーバールーム内の敵と戦わなければならぬ、それだけの点数と操作技術が要求されるのである。

「ちなみに俺とレンはババアのプログラムのサポートをするから、パスな」

「亮とレンは無理か……ムツツリー二はいけるか？」

「……………あれだけの数を相手にするのは厳しい」

「雄二や姫路さんは？」

「俺も姫路も、途中でやられるのがオチだろうな」

「すいません。明久君……………」

瑞希は己の不甲斐なさに表情を暗くした。

雄二は点数が、瑞希は操作技術の面においてこの緊急事態を乗り切るのが困難だった。

そしてそれは、美波や秀吉に対しても言えることだった。

その時、秀吉が何かに気づき、静かに口を開いた。

「……おるではないか」

「どうしたの、秀吉？」

「高い点数を持ちながら操作技術も高いであろう人物が、一人おるのじゃ」

「秀吉。それって一体ー」

「学園長先生！ これって一体どういうことなんですか？」

明久の言葉を遮るように、優希が勢いよく学園長室に入ってきた。桂か。ちようど呼ぼうとしていたところじゃ」

「呼ぼうとしてたって、それじゃあ秀吉が言う人ってー」

「うむ。桂じゃ」

「「えええつ！？」」

秀吉や亮、レン以外は驚きを隠せずにいた。

そんな中、亮は秀吉にこっさり耳打ちしている。

「秀吉。お前もしかして優希の眼のことー」

「うむ。眼のことだけでなく、身体のことも知っておるぞい。桂が話してくれたのじゃ。それにもし眼のことを知ってもここにおる皆なら、桂を嫌ったりはしないじゃろう。少なくともワシはそう信じてる」

「……そうだな。俺もだ」

秀吉の返答に亮は胸をなでおろしていた。

「それで学園長先生。外にいる召喚獣とか召喚獣を喚び出せないこととか、今どういう状況なのかを説明してもらえますか？」

「わかったよ。でもその前に、コレを使ってくれないかい？」

「これって……」

学園長から黒金の腕輪を受け取った優希は、自分の腕に腕輪を装着する。

しかし、この状況に疑問を抱く人物がいた。

「おい待て桂」

「どうしたの、坂本君？」

「お前、もしかして黒金の腕輪のことについて何か知ってるんじゃ

ないのか？」

「何で？」

優希は首を傾げる。

「ババアから腕輪を受け取った時、お前はすぐに腕輪を装着した。何の疑問も躊躇いもなく、な」

雄二の見解を聞いた優希は、フツと口元を緩めた。

「流石は坂本君。伊達にFクラスの指揮官をしているわけじゃないってことだね」

「それじゃあ、桂さんは知ってたの？ 黒金の腕輪について」

「知ってるも何も、私はー」

その時、ついに学園長室内に召喚フィールドが展開され、数体の召喚獣が出てきた。

「時間がないね。いくよ、吉井君」

「う、うん！」

「「試獣召喚っ！！」」

明久と優希の喚び声に合わせて、それぞれの足下から召喚獣が出現する。

明久の召喚獣は改造学ランで木刀を持ち、優希の召喚獣は紫と白を基調としたセーラー服で両手に拳銃を構えている。

右手には自動式連発拳銃。

左手には回転式連発拳銃。

いわゆる二丁拳銃である。

しかし優希の召喚獣の目にはゴーストのようなものが取り付けられている。

明久と優希が表れた敵の召喚獣を倒すと、学園長室から召喚フィールドが消えた。

「何で召喚フィールドが？」

「俺がハッキングされたプログラムを修復したけど、ここからじゃこの部屋だけが限界だ。早いとこサーバーームのロックを外してくれ！」

「うん！」

「わかったよ」

「よし、それじゃあ俺たちはここから明久と桂のナビゲーションをするぞ。ババア、桂の召喚獣にマーキングか何かを施せないか？」

「心配ないよ。黒金の腕輪で喚び出した召喚獣の位置は、常にモニターで把握出来るようになってるからね」

「それよりババア。桂の召喚獣がつけているゴーグルは何だ？」

「さっき言ったように元々この腕輪は非常事態に備えて作られたからね。人の入れない場所に行けるようにするためのカメラさ。ほら桂、コレをつけな」

優希は学園長からゴーグルを受け取り、顔に装着してゴーグルの横にあるスイッチを入れた。

「どうだい桂。召喚獣の視界で見えるかい？」

「ええ。バツチリですよ学園長先生」「通風口に入るときにはそのゴーグルを使いな。それじゃあ、二人とも頼んだよ！」

「っはいつ！」

明久と優希は勢いよく返事をして、そのまま学園長室を後にした。

第八十三問・人生つとは、しょっぱいもの

問 次の問いに答えなさい。

『「国土の守護者」という意味のアケメネス朝ペルシャで王が任命する州の総督をなんといいうか』

姫路瑞希の答え

『サトラップ』

教師のコメント

正解です。実は現在でも、しばしば超大国・覇権国の動向に極めて強い影響を受ける指導者・行政長官のことを「サトラップ」という言葉で用いられることがあります。

神谷亮の答え

『サトラップ』

教師のコメント

非常に惜しいですが、間違いは間違いです。

土屋康太の答え

『サトラップ』

教師のコメント

何故総督が脱衣をするのですか。

学園長室から飛び出した明久と優希はまっすぐサーバルーム前を目指していた。

そんな二人の前に、数体の召喚獣が立ちふさがる。

「よし……って桂さん？」

戦闘の為に木刀を構えた明久を、優希が腕を伸ばして制した。

「えっと……」

「敵の召喚獣は私が倒すから、吉井君はサーバルームまで極力戦闘は避けてね」

「うん。ありがとう」

明久たちに襲いかかってくる敵の召喚獣の首や心臓といった急所に向かい、優希は拳銃の銃弾を放って一撃で戦闘不能にしていた。

「吉井君。私が前につくから、サーバルームまで一直線にいくよ！」

「オッケー！」

優希は明久の前について一列縦隊のフォーメーションをとりながら、襲いかかってくる召喚獣を片っ端からなぎ払いながら走っていた。

「やっと着いた……」

「ここがサーバルームだね」

明久と優希は大きな扉の前にたどり着いた。

「通風口は……あれだね」

優希が目をやると、扉の横の壁に金網がかかった四角い穴があっ

た。

「よっ……と」

明久は金網を外し、自分の召喚獣を中に入れる。

「さあ、桂さんもこっちにー」

『優希。聞こえるか?』

優希が持つている無線から、いきなり亮の声が聞こえてきた。

「どうしたの?」

『Aクラスの教室内にデカイ反応が出た。今すぐ向かってくれ』

「わかった。それじゃあ吉井君。後から絶対追いつくから、それまでそっちは任せたよ!」

「うん。桂さんも気をつけて」

優希は踵を返してAクラスの教室に向かい、明久はそのまま通風口を通ってサーバルームへと向かった。

「亮。来たけど何もいないよ?」

Aクラスに来た優希だが、中には優希以外に姿はなかった。

『おっかしいな。確かにーってあれ?』

無線の向こうの亮はどこかしら戸惑っている様子だった。

「どうしたの?」

『さっきよりもデカイエネルギーが収束してる。場所は……プラスマディスプレイの前だ!』

優希からは見えないが、亮が見ているレーダーには二度エネルギー

「反応があつた。そして二度目のエネルギーの大きさは一度目とは比べものにならないほど大きなものだった。まるで一度目は何か大きなことを成し得るための準備といわんばかりに。」

そして、Aクラス最大の設備であるプラズマディスプレイの前の床に半径2メートルほどの巨大な魔法陣が浮かんできた。

「確かに何かがかかるみたいだね」

そして魔法陣からまばゆい光が放たれ、

「……………あれ？」

優希の召喚獣の姿はAクラスの教室のどこにもなかった。

『優希。反応が消えたんだが、何があつた？』

「反応がない？」

反応がないということは、姿を消されたり魔法陣から出てきた何かに飲み込まれたという可能性は低い。

(むしろどこかに飛ばされた、って考えるのが妥当かな)

そう思った優希は教室の外を軽く見回したが、召喚獣はどこにもいなかった。

「そうだ。これをかければ……………」

優希が学園長から渡されたゴーグルをはめると、見たことのない光景が広がっていた。

優希の召喚獣の他には誰もいない。そして背後にはビル群がそびえ立っており、まるで大都会のような場所である。更に通常の青い召喚フィールドとは違う赤い召喚フィールドが展開されていた。

「これってもしかして……………」

試しに近くのビルに一発弾を撃つてみると、すり抜けることはなくビルに当たった。物理干渉を持たないにも関わらず、だ。

(ということは、ここにあるものは現実のものじゃないってこと?)

その時、突然優希の無線に連絡が入った。

『桂。アンタの召喚獣は今どこにいる？』

「恐らく私の召喚獣はバーチャルの世界にいるみたいです」

物理干渉をすることができない優希の召喚獣の攻撃が当たったと

いうことは、立ち並ぶビルも優希の召喚獣と同じようにバーチャルなのではないか、という推測を優希は立てていた。

『召喚獣の様子はどうだい？』

「召喚獣の視界、動作共に問題ありません」

その時、空間の一部が歪んで巨大な何かが出現した。

それは宙に浮き、上半身には人形に着せるようなドレスを纏っているが、その内側には大小様々な大きさや形をした歯車を取り付けられている。下半身には足の代わりに何本もの支柱が伸びており、その支柱を軸としてここにも様々な大きさの歯車が噛み合っていて回転している。

そして人形のようにデフォルメされた口元にはうつつすらとした笑みを浮かべていた。

そしてそれに応えるように優希の顔にも挑戦的な笑みが浮かぶ。

「学園長先生。もしかしてこれがこの騒動の親玉ですか？」

『そいつはわからない。もしかしたら防衛プログラムの一つかもしれないよ。でも、倒した方が良さそうさね。頼めるかい？』

「了解しました。ところで、視覚以外の感覚を繋げたりってできませんか？」

『やってみるけど、良くて1から2割が限界だよ。それ以上は危険だから不可能さね』

「お願いします」

優希は無線越しでの学園長との会話を一旦切り、出現した相手に立ちふさがる。

すると、優希の手に微かながら拳銃を握っている感覚が伝わってきた。

「それじゃあ吉井君の所にも行かなきゃいけないしー」

自分の召喚獣の武器である二丁拳銃を構えさせた優希は、その銃口を相手へと向けた。

「ー早いところ始めよっか！」

第八十四問・魔女と戦闘と万華鏡と

問・次の問いに答えなさい。

『世界で初めてグライダーによる飛行を成功させた兄弟を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『リリエントール兄弟』

教師のコメント

正解です。リリエントール兄弟は1895年に試験的ではあるものの、グライダーによる飛行をなしとげたドイツの初期航空工学（応用空気力学）発展に貢献した航空パイオニアです。

吉井明久の答え

『ライト兄弟』

教師のコメント

ライト兄弟はグライダーではなく人力飛行機です。間違えやすいので気をつけてください。

神谷亮の答え

『土管をくぐるヒゲ兄弟』

教師のコメント

リリエントール兄弟は火の玉を出せません。

「それじゃ、いくよ！」

開幕と同時に優希は両手の拳銃を連射して、相手に弾幕の如き攻撃を仕掛けた。

『フフフフ……アハハハッ！！』

弾は全弾命中して相手は空中でバランスを崩しながらも、何枚も大きな歯車を優希に向けて飛ばしてその反動でバランスを立て直していた。

「おっ……と」

優希が交わした歯車は後ろにあるビル群を切り刻み、いくつものビルが倒壊を始める。

「そお……れっ！！」

優希は倒壊したビルの一つを持ち上げ、相手に向けて投げ飛ばした。

ビルは相手に直撃したが、大したダメージを与えることはできない。

再び相手は歯車を何枚も飛ばすが、優希だって負けていない。これらの歯車を拳銃の弾丸で全て撃ち落とす。

そして相手が飛ばし続ける歯車を撃ち落としながら優希は突進していく。

「やああああつ！！」

そのまま相手の懐に潜り込もうとしたら、相手の懐から黒い腕が伸びて優希に襲いかかった。

『アーツハッハッハッハッ。フフフフ、アハハハハッ』

「くっ……！」

優希は拳銃を重ねて攻撃をガードしたが相手の腕が伸びる勢いは止まらず、ビル群を巻き込んで吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされながらも優希は小さく微笑むと、空中に浮いている相手を見据えた。

「……ドカン！」

優希の眩きが聞こえるやいなや、相手を中心にして大爆発が起き、真っ黒な炎に包まれた。

『アハハ、アハハハ、アハハハハハッ！』

しかし黒い炎が相手を飲み込み燃やし尽くす前に、ドレスの中から闇々とした色をした球状の物体が現れた。楽しそうな笑い声をあげながら。

（さっきの腕と見た目が同じ。ということは、あれがあちらさんの本体ってことでもいいのかな）

優希が相手に向かって銃弾を浴びせようとしたその時、再び目の前がまばゆい光で包まれる。相手がいきなり発光したのだ。

「え！？ またなの？」

優希は思わず目を瞑るが、光は一瞬で収まった。

目を開けて召喚獣の視界で周りを見渡すと、Aクラスの教室が目に入る。

『優希。大丈夫か？ バーチャル空間はどうなった？』

「相手にダメージを与えてこっちに引きずり出したから、もう大丈夫だよ」

そう言い終わらないうちに優希の召喚獣の弾丸が相手を襲つた。

『アハハハッ！』

しかし相手は反撃を仕掛けることなく教室の外へと一目散に逃げていった。

「……ってちよつと！？ どこ行くの？」

優希も教室を飛び出し、相手の後を追いかけていった。

「おい、ババア」

「なんだいクソガキ」

亮や瑞希たちがナビをしているモニターとは少し離れた場所。そこに雄二と学園長が並んで立っていた。

「そろそろ教えてもらおうか」

「教えるって、何をだい？」

「もちろん、桂のことについてだ」

優希の名前が出た途端、学園長の眉がわずかに動いた。

「少なくともアイツは今回の黒金の腕輪について何かしら知っているみたいだし、またババアが何か隠しているのかと思っとな」

学園長は諦めたようにため息を吐いた後、ゆっくりと口を開いた。「わかったよ。それじゃあ、桂のことについて少し話そうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486j/>

俺と私と召喚獣

2011年9月21日13時17分発行